

東宮遺跡 (3)

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第51集

2017

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

東宮遺跡 (3)

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第51集

二〇一七

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



東宮遺跡 (3)

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第51集

2017

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



東宮遺跡全景(南東から)

発掘部分の北側(写真右側)が東宮遺跡、南側(写真左側)が西宮遺跡。遺跡の東側手前に旧JR吾妻線(現在は路線変更で廃線)と吾妻川。北側(写真右隅中央部)の町並はダム建設に伴う川原畑の代替地である。江戸時代の川原畑村は、吾妻川左岸に位置する。川原畑村は代替地の造られている上面と、東宮遺跡・西宮遺跡として発掘された下面である。下面の集落や畑の大部分は天明三年の泥流により埋没している。



東宮遺跡全景(北西から)

平成25年度発掘調査した範囲。東側(写真左側)に旧JR吾妻線、発掘範囲東端からブルーシート南に村落中央部の道(発掘では6号道)がある。ブルーシート下は、平成20年に発掘調査した1・2号屋敷。6号道に沿って3～11号屋敷があり、溝や畑が作られている。中央の道東側には、さらに多くの屋敷や畑等が埋まっていることが、絵図等の資料から考えられる。

口絵 2



東宮遺跡全景(空撮)

東側(写真上端)に旧JR吾妻線、ブルーシート南(写真右側)から調査区東側(写真上側)の道が村中の幹線道である。ブルーシート南部分を発掘調査し6号道とした。道に面して多くの屋敷が作られ、道から屋敷につながる道が作られている。中央部北側(写真中央左側)には集落中央を流れる10・12号溝がある。南側端(写真右端)の水路は西宮と東宮の間に流れる境川である。多くの土石流が流れ出している痕跡が認められる。



北側の調査区(南東から)

中央の溝が10号溝・12号溝の北側(写真右)に5～7号屋敷、写真右側に6号道と1号屋敷に伴う薪場と井戸。10号溝の写真左側に4号屋敷の3号井戸と6号溝。その西側(写真左上)に8号屋敷がある。屋敷の周辺は畑である。



集落中央部分(南東から)

中央に8号屋敷がある。屋敷は斜面を切り盛り造成し、屋敷周辺を石垣で囲んでいる。屋敷前庭は、ロームを貼り平らにしている。屋敷から6号道まで繋がる道が作られ、道の両側は、畑となっている。屋敷南東部分には水場があり井戸2基等がある。水場から南に道が続き、9～11号屋敷の水もこの水場を利用していたものと思われる。屋敷西側の山寄りに、屋敷は無く全面畑となっているが、泥流の堆積が薄く、標高542mより高い部分では途中で畑面が確認できなくなっている。



8号屋敷(空撮)

16号建物北側(写真右)に土間があり、竈と馬小屋がある。南側は板間となっており、囲炉裏が2基作られていた。板間には板は残っていなかったが、床下面の痕跡として板の痕跡や大引痕・根太痕が残っていた。西側(写真上)には土壁が、雨落溝や石垣に倒れていた。小さな付属建物が北側(写真右)に2棟建てられていた。東側の1棟には、2個の桶が埋まっていた痕跡を残しており厠と思われる。

口絵 4



集落中央の10・12号溝(東から)

発掘前から集落の中央部分に常時水の流れている溝があった。溝の下には天明泥流で埋まった溝があり、その溝が写真中央から北側(写真右側)に曲がって伸びている10号溝である。江戸時代から使われていた溝である。写真上端には10号溝に接して、7号屋敷に伴うと思われる水場があり、2号井戸がある。10号溝に繋がっている溝として、写真左側の6号溝があり、3号井戸からの溝が流れている。写真中央左側の溝は、天明泥流以前に大部分が埋まっていた12号溝であり、埋没後は浅い溝となっていた。写真手前の大きな石垣は、10号建物(酒蔵)の石垣である。建物内には礎石と酒を搾る槽場があり、男柱が埋まっている。



6号道(南東から)

集落の中央部分に村の幹線道路である6号道がある。幅2mで平らに整地されており、道路面には浅間A軽石が堆積し、天明泥流埋没前まで道路として使われていた。道は西に長野原町、東に吾妻郡原町につながる主要道路であったと思われる。



7号屋敷水場(南東から)

7号屋敷南西部に位置し、集落内を流れる10号溝に接している。2号井戸、平石敷(平らで巨大な石2個)、底部に穴を持つ石製臼、西側に接して常に水の流れる10号溝等の遺構はおそらく一連の遺構であり、7号屋敷に伴う水場と思われる。平石敷は、井戸から水を汲み出すときの台石とともに、汲み出した水を使用して行う台所作業場。石製臼は6個の台石の上に地面から15cmほど浮いた状態で据えられており、野菜の洗浄や皮むき等の作業で汚れた水は、底部の栓を抜くとそこから10号溝に流れ出るような構造になっている。



道路下に大量に積まれていた薪

燃料として保管されていた。北側の一部が使用され少なくなっていた。薪が崩れ落ちないように周辺に杭が打たれ、薪の上に長い竹が数本置かれていた。おそらく雨水等を防ぐために竹の上には、残っていなかったが杉皮等が葺かれていたと思われる。

口絵 6



6号屋敷11号建物土壁(東から)

東から押し寄せてきた天明泥流により、壁面の土壁5枚が西側の石垣と畑面に倒れた状態で出土した。南側の1枚はさらに西の石垣下まで飛ばされている。手前の土壁は、4枚に分かれており、境の部分に土壁は無い。その部分の手前には、11号建物の礎石があり、そこに柱が建っていたことを示している。残っている土壁の大きさを測ると、幅1.7m前後、長さ2.4m前後、厚さ3~6cmである。



16号建物1号囲炉裏(1) 全体が良好に残る。



16号建物1号囲炉裏(2) 中央部に多くの灰が残る。



16号建物1号囲炉裏(3) 灰の下は全面厚い軽石。



16号建物1号囲炉裏(4) 軽石の下は、ロームで箱状に成形。



9号建物北側水場出土遺物



10号溝出土物差し(鯨尺)



24号石垣下出土釘箱と大量の釘



11号建物西側から錢緡の状態で寛永通寶が大量に出土



元禄上野国絵図(元禄十五年：1702)群馬県立文書館所蔵文書P8710

吾妻川左岸の長野原町から東に向かって、林村・川原畑村・横谷村(現東吾妻町松屋)まで道が太い赤線で描かれている。江戸時代の主要街道であることがわかる。黄色く塗られた楕円形の中に「川原畑村 百五十九石余」と書かれ、楕円形の外に「馬次」と書かれている。運輸等も担っていた村である。天保国絵図(天保九年：1838)にも同じように描かれており、石高も同じである。天明三年の泥流被害を受けているが、道路等は同じように復旧していることが分かる。

口絵 8



8号溝から出土した竹製ほうき



1号建物薪場南側下面から出土した箕



発掘前の東宮遺跡 I・IV区(北東から)平成7年12月撮影

写真左上から左下の道が町道 I-5号線、写真中央から右側の山に延びている道が町道 I-11号線。町道 I-11号線から上の山寄り部分が調査区IV区、下が調査区 I区である。1号屋敷部分は水田、2号屋敷部分は平屋の家と物置、4号屋敷部分には2階建ての建物と道路に面して小屋が立っている。5号屋敷(酒蔵)部分には、平屋の家、6号屋敷部分は畑、7号屋敷14・28号建物部分は、道に面した部分に2階建ての建物、7号屋敷13号建物付近には平屋の建物が建っている。平屋の脇には水路(10号溝)があり、現在でも水が流れている。8～11号屋敷部分は、畑となっている。写真最上部の道脇が堺沢、その上が西宮遺跡部分となっている。江戸時代の道は、写真左上の町道 I-5号線から、写真中央で町道 I-11号線に繋がり、三ツ堂に延びている。町道 I-11号線下が発掘された6号道である。写真左端が廃線となったJR吾妻線。

序

八ッ場ダムは、治水・利水・発電を行う多目的ダムとして計画され、吾妻郡長野原町を中心に工事が進められてきました。八ッ場ダムの建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、本年で23年目を迎えました。

東宮遺跡は、平成19～21年度に発掘調査を行い、天明三年(1783)の浅間山大噴火に伴う泥流で被災した村が、これまでに例のないほど極めて良好な遺存状態で出土しました。床面まで残る建物群や木製品や漆器、また陶磁器や金属製品等は、18世紀後半の生活様相を豊かに伝える内容でした。それらの調査成果はすでに刊行された2冊の調査報告書により明らかになっています。3冊目となる本書は、平成26年度に調査された南西部分の発掘調査成果から、村を構成する屋敷・井戸・水路・道・畑遺構や、多くの木製品・陶磁器・鉄製品・石製品等の出土遺物を報告しました。これらの調査成果は多くの村の様子を明らかにし、八ッ場地域ひいては群馬における近世村落史を考える上でも重要な資料となるものと考えております。

発掘調査から報告書の刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者の皆様には、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

1. 本書は、ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成26年度に実施された「東宮遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 当遺跡は、平成19・20・21年度に発掘調査し、発掘調査報告書『東宮遺跡(1)』2011、『東宮遺跡(2)』2012が刊行されている。本報告書は平成26年度に発掘調査された報告書で『東宮遺跡(3)』である。
3. 平成26年度に発掘調査した地点は、平成19・20・21年度に発掘調査した遺構の継続調査部分を多く含む。その部分の報告は以前の報告書と重複しないようにしたが、遺構を理解するために必要な図面や写真は一部使用した。報告書の中で「前回報告」として掲載した図面は、以前調査し刊行されている調査報告書中の図面である。
4. 遺跡の呼称および所在地
東宮遺跡(ひがしみやいせき)は、群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑地内に所在する。
地番は、365、357、358、359、甲360、乙360、361、362、363、364、365、366-1、366-2、甲367、甲368、乙368、369、370、371、372である。
5. 事業主体 国土交通省関東地方整備局
6. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改定)である。
7. 発掘調査及び整理事業の期間

(1) 発掘事業

調査委託契約履行期間 平成26年7月1日～平成26年12月31日(平成26年度)

調査期間・発掘調査担当 平成26年7月1日～平成26年12月31日(平成26年度)

岩崎泰一(調査課長)、中沢 悟(専門調査役)

調査面積 7,600㎡

遺跡掘削工事 スナガ環境測設株式会社

(2) 整理事業 整理委託契約履行期間 平成28年4月1日～平成29年3月31日(平成28年度)

整理期間 平成28年4月1日～平成29年3月31日(平成28年度)

整理担当 中沢 悟(専門調査役)

8. 本書作成の担当者は以下の通りである。

編集 中沢 悟(専門調査役)

本文執筆 第1章～第4章(遺物説明以外) 中沢 悟(専門調査役)

第3章遺物説明 大西雅広(上席専門員・資料総括)

第4章第2節 岩崎泰一(調査部長)

デジタル編集 齋田智彦(主任調査研究員)

遺構写真 発掘調査担当者 岩崎泰一(調査課長)、中沢 悟(専門調査役)

遺物写真 石坂 茂(専門調査役)、大西雅広(上席専門員・資料総括)、関 邦一(補佐(総括))、津島秀章(資料2課長(総括))

遺物観察・観察表執筆 弥生土器 石坂 茂(専門調査役)、大木伸一郎(専門調査役)

陶磁器・木製品 大西雅広(上席専門員・資料総括)

金属製品・保存処理 関 邦一(補佐(総括))

石製品 津島秀章(資料2課長(総括))

9. 発掘調査および整理事業での委託

遺構測量 株式会社 測研

自然科学分析 (株)火山灰考古学研究所

大型建築材・大型石製品の実測・トレース・写真撮影 株式会社 測研

10. 石材の同定は、飯島静男氏(地質学者・群馬地質研究会)に依頼した。また、木製品の樹種同定は、関邦一が行った。

11. 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、長野原町教育委員会事務局、県立文書館のご指導とご助言を得た。

長野原町教育委員会事務局および県立文書館から古文書の提供を得た。

12. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡 例

1. 本書で使用した座標値および方位は、日本測地系、平面直角座標系第IX系を用い、座標北で示した。

調査区は、X=61400～61650、Y=-100850～-101250の範囲に収まる。

2. 等高線・遺構断面図等に記した数値は、海拔標高を示す。

3. 付図を含む遺構図の縮尺は、原則として以下の通りである。

遺構全体図(付図1) 1/700 遺構全体図(付図2) 1/200 建物・畑1/150 1/120 1/80 1/40 土坑1/40

竈・囲炉裏1/30 道1/100 1/40 石垣1/80 円形平坦面 1/60 これ以外の場合は、各図下部に明記。

4. 遺物実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。

陶磁器4/5 1/3 建築材1/6 1/10 木製品類1/2 1/3 1/4 1/6 1/10 属製品類4/5 1/2 1/3

古銭1/1 石器・石製品1/2 1/3 これ以外の場合は、各図下部か、各個別図に明記。

5. 遺物の掲載は、種別に限らず遺構毎に通し番号とした。

6. 遺構図に使用したスクリーンパターンは、以下の事を示す。

遺構平面図 灰  炭化物  焼土  攪乱  炭・灰  ローム 

7. 遺構平面図中の遺物記号は、次のことを示す。

● 土器・陶磁器 ▲ 石器・石製品 ■ 鉄・金属製品 □ 木製品・炭化材

8. 畑の計測では、畝間から隣の畝間までの間を畝サク間隔として計測した。

9. 本遺跡で検出された畑の畝間を埋めている浅間A軽石は、天明三年(1783)の浅間山噴出軽石の略である。また、「天明三年泥流」あるいは「天明泥流」は、天明三年新暦8月5日の浅間山噴火に伴う泥流堆積物の略称である。

10. 遺物観察表での表現および記載法は、以下の通りである。

- ・遺物観察表は遺構毎とし、第4章の後ろにまとめて掲載した。
- ・遺構図の中で、遺物出土地点の明らかでない遺物は、天明泥流中または覆土中からの出土である。
- ・計測値の単位はcmとし、重量はgで表記している。
- ・欠損した遺物の計測値には、()で現存値を記した。
- ・建築材を含めた木製品類の樹種同定は、掲載遺物全体には及んでいない。

11. 本書で使用した地形図は下記の通りである。

国土地理院：地形図 1：50,000 「草津」(平成11年発行)

目 次

口絵

序

例言

凡例

目次

図版目次

表目次

写真目次

第1章 調査の方法と経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方針・方法・経過	2
第3節 調査区の概要	2
第2章 遺跡の環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	10
第3章 発見された遺構と遺物	17
第1節 I区の調査概要と発見された遺構と遺物	18
(1) 1号屋敷跡	18
① 1号屋敷跡調査経過と調査概要 ② 8号井戸 ③ 9号井戸 ④ 8号溝 ⑤ 薪場(ア)薪場南側(イ)薪場北側	
⑥ 天明三年以前の遺構(西側水場北端下面) ⑦ 2号石垣 ⑧ 12号道 ⑨ 出土遺物	
(2) 2号屋敷跡	46
① 2号屋敷跡の調査経過と調査概要 ② 8号道 ③ 7号石垣 ④ 出土遺物	
第2節 IV区の調査概要と発見された遺構と遺物	48
(1) 4号屋敷跡	49
① 4号屋敷跡の調査経過と調査概要 ② 屋敷跡の地形と水場 ③ 3号井戸と井戸北側の石敷き場 ④ 6号溝	
⑤ 土壁 ⑥ 南西部の遺構 ⑦ 10号石垣 ⑧ 石柵 ⑨ 出土遺物	
(2) 5号屋敷跡	62
① 5号屋敷跡の調査経過と調査概要(ア)10号建物槽場(イ)10号建物礎石 ② 2号施設 ③ 12号建物	
④ 11号石垣 ⑤ 12号石垣部分の土層 ⑥ 出土遺物	

(3) 6号屋敷跡	77
① 6号屋敷跡の調査経過と調査概要	
② 11号建物(ア)竈(イ)土坑(唐臼と思われる掘り込み)(ウ)土壁	
③ 27号建物	
④ 18号石垣	
⑤ 19号石垣	
⑥ 出土遺物	
(4) 7号屋敷跡	89
① 7号屋敷跡の調査経過と調査概要	
② 13号建物(ア)竈(イ)唐臼(ウ)馬屋と1号桶	
③ 7号屋敷跡下面の遺構(ア)ピット群(イ)囲炉裏(旧1号焼土)(ウ)焼土遺構(エ)1号炭出土方形遺構	
(オ)石埋設1・2号土坑(カ)弥生土器出土焼土遺構	
④ 14号建物	
⑤ 28号建物	
⑥ 方形集石遺構(旧17号建物)	
⑦ 8号石垣	
⑧ 水場(ア)2号井戸(イ)平石敷(ウ)石製臼	
⑨ 出土遺物	
(5) 8号屋敷跡	112
① 8号屋敷跡の調査概要	
② 水場の問題	
③ 敷地内での浅間A軽石	
④ 天明三年以降に作られた井戸と石垣	
⑤ 16号建物(ア)建物の概要(イ)馬屋(ウ)土間(エ)竈(オ)炭出土方形遺構(カ)床面炭出土遺構(キ)唐臼(推定)	
(ク)床面(ケ)1号囲炉裏(コ)2号囲炉裏(サ)土壁	
⑥ 前庭及び庭先ローム堆積場	
⑦ 7号道	
⑧ 20号建物	
⑨ 26号建物	
⑩ 水場(ア)6号井戸(イ)7号井戸(ウ)石橋(エ)1号石組(オ)13号溝	
⑪ 石垣(ア)22号石垣(イ)23号石垣(ウ)26号石垣(エ)25号石垣	
⑫ 4号井戸	
⑬ 17号土坑	
⑭ 出土遺物	
(6) 9号屋敷跡	136
① 9号屋敷跡の調査概要	
② 敷地内での浅間A軽石	
③ 18号建物(ア)馬屋(イ)土間(ウ)竈(エ)炭堆積遺構	
(オ)唐臼(推定)(カ)1号囲炉裏(キ)2号囲炉裏	
④ 19号建物(ア)7号土坑	
⑤ 21号建物	
⑥ 水場と水場から18号建物への水の搬入路	
⑦ 石垣(ア)28号石垣(イ)29号石垣(ウ)30号石垣	
⑧ 出土遺物	
(7) 10号屋敷跡	156
① 10号屋敷跡の調査概要(ア)屋敷跡の立地と遺構配置(イ)遺構概要と遺構の重複関係	
② 23号建物(ア)馬屋(推定)(イ)竈(ウ)唐臼(推定)(エ)囲炉裏(オ)屋敷跡東中央部にL字状に並ぶ3石の切石	
③ 30号建物	
④ 9号道	
⑤ 10号道	
⑥ 11号道	
⑦ 出土遺物	
(8) 11号屋敷跡	164
① 11号屋敷跡の調査概要(ア)屋敷跡の立地と遺構構成(イ)遺構概要と遺構の重複関係	
② 31号建物(ア)馬屋(推定)(イ)1号竈(旧4号囲炉裏)(ウ)2号竈	
(エ)囲炉裏・1号囲炉裏・1号囲炉裏下炭出土遺構・2号囲炉裏・3号囲炉裏・5号囲炉裏(オ)土間のローム	
(カ)床面の焼土化(炭・焼土範囲)	
③ 石垣(ア)27号石垣(イ)32号石垣(ウ)33号石垣	
④ 5号井戸	
⑤ 出土遺物	
(9) 24号建物	175
① 24号建物の調査概要(ア)竈(イ)囲炉裏	
② 出土遺物	
(10) 25号建物	178
① 25号建物の調査概要	
② 出土遺物	
(11) 畑	180
① 畑の概要(ア)畑の造られている位置(イ)畝サク幅の違いによる区分	
② 明治6年の壬申地引絵図との比較	
③ 調査された畑・5号畑・12号畑・27号畑・28号畑・29a・29b・29c号畑・30号畑・31号畑・32号畑	
・33号畑・34号畑・35号畑・36号畑・37号畑・38号畑・39号畑・40号畑・41号畑・円形平坦面(1～6号)	
④ 天明泥流下の畑以前の畑	
⑤ 出土遺物	
(12) その他の遺構	195
① 6号道	
② 10・11・12号溝の概要(ア)10号溝(イ)12号溝	
③ 24号石垣	
④ 石捨て場(ヤックラ)	
⑤ 34号石垣	
⑥ 炭窯	
⑦ 32号畑内ローム堆積遺構	
⑧ 調査区西端中段の道と石列群	
⑨ 出土遺物	
(13) 遺構外出土遺物	211

第4章 調査の成果とまとめ	273
第1節 遺構について	273
1. 囲炉裏について	273
2. 馬屋と馬数	279
3. 東宮遺跡」周辺における貞年三年(天明三年・川原畑村)と明治6年における屋敷坪数の変化	285
4. 東宮遺跡における天明泥流下と明治6年段階の土地利用について	291
5. 畑における栽培作物について	294
第2節 自然科学分析	297
テフラ分析について	297

遺物観察表

写真図版

抄録

挿図目次

第1図	東宮遺跡調査区全体図(平成7・9・19・20・21・26年度分)・・・5	第57図	IV区7号屋敷跡断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第2図	東宮遺跡基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7	第58図	IV区7号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込
第3図	遺跡位置図(国土地理院1/200000地形図「長野」平成18年11月1日発行・1/50000地形図「草津」平成11年1月1日発行を使用)・・・9	第59図	IV区7号屋敷跡13号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込
第4図	吾妻郡河原畑村(川原畑村)周辺の道と村(天保国絵図「上野国」より作成、『町遺跡』第593集・第76図修正引用)・・・・・・・・・・ 11	第60図	前回報告IV区7号屋敷跡13号建物 竈・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
第5図	天明泥流下の遺跡分布図(国土地理院5万分の1地形図「草津」使用)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14	第61図	IV区7号屋敷跡13号建物竈(1～3面)・・・・・・・・・・・・・・ 94
第6図	前回報告I区1号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18	第62図	IV区7号屋敷跡13号建物下面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
第7図	I区1号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込	第63図	IV区7号屋敷跡13号建物下面断面(1)・・・・・・・・・・・・・・ 97
第8図	I区1号屋敷跡西側水場・北端下面・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込	第64図	IV区7号屋敷跡13号建物下面断面(2)・・・・・・・・・・・・・・ 98
第9図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場断面(A～E)No.1・・・・・・・・ 23	第65図	IV区7号屋敷跡13号建物下面囲炉裏(1～3面)、1号焼土遺構・・・・・・・・・・・・・・ 99
第10図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場断面(F～L)No.2・・・・・・・・ 24	第66図	IV区7号屋敷跡13号建物下面2・3号焼土遺構、弥生焼土範囲・・・・・・・・・・・・・・ 100
第11図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場断面(M・N)No.3・・・・・・・・ 26	第67図	IV区7号屋敷跡13号建物下面1号炭出土方形遺構・・・・・・・・ 101
第12図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場断面(O～Q)No.4、下面断面(R・S)・・・・・・・・・・・・・・ 27	第68図	前回報告IV区7号屋敷跡14号建物・・・・・・・・・・・・・・ 103
第13図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場8号井戸平・立面・・・・・・・・ 28	第69図	IV区7号屋敷跡14号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
第14図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場9号井戸平・立面・・・・・・・・ 29	第70図	IV区7号屋敷跡14号建物1・2号桶断面・・・・・・・・・・・・・・ 104
第15図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場8号溝平・断面・・・・・・・・ 30	第71図	IV区7号屋敷跡28号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105
第16図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場8号溝遺物出土状況・・・・・・ 31	第72図	IV区7号屋敷跡方形集石遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
第17図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場薪場南側・・・・・・・・・・・・ 折込	第73図	IV区7号屋敷跡13号建物8号石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
第18図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場薪場南側下面遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・ 折込	第74図	IV区7号屋敷跡2号井戸(1・2面)・・・・・・・・・・・・・・ 110
第19図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場薪場北側遺物出土状況・・ 折込	第75図	IV区7号屋敷跡2号井戸断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
第20図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場薪場南側遺物出土状況(最上面)・・・・・・・・・・・・・・ 39	第76図	IV区8号屋敷跡断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113
第21図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場天明三年以前遺物群(中面) 40	第77図	IV区8号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込
第22図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場天明三年以前遺物群(上面) 41	第78図	IV区8号屋敷跡16・20・26号建物・・・・・・・・・・・・・・ 折込
第23図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場天明三年以前遺物群(下面) 42	第79図	IV区8号屋敷跡16号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
第24図	I区1号屋敷跡1号建物西側水場2号石垣・・・・・・・・・・・・・・ 折込	第80図	IV区8号屋敷跡16号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120
第25図	前回報告I区2号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47	第81図	IV区8号屋敷跡16号建物馬屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
第26図	I区2号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47	第82図	IV区8号屋敷跡16号建物竈・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
第27図	IV区4号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50	第83図	IV区8号屋敷跡16号建物炭出土方形遺構・・・・・・・・・・・・・・ 123
第28図	前回報告IV区4号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51	第84図	IV区8号屋敷跡16号建物唐白抜き取り穴、1・2号囲炉裏・・ 125
第29図	IV区4号屋敷跡断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51	第85図	IV区8号屋敷跡16号建物土壁出土状況・・・・・・・・・・・・・・ 127
第30図	IV区4号屋敷跡3号井戸・石敷き場・6号溝・石棚・・・・・・ 折込	第86図	IV区8号屋敷跡16号建物土壁断面、土壁内木舞・・・・・・・・ 128
第31図	IV区4号屋敷跡南西部凹状木製品出土状況・・・・・・・・・・・・ 55	第87図	IV区8号屋敷跡前庭及び庭先ローム堆積場・・・・・・・・・・・・ 129
第32図	IV区4号屋敷跡3号井戸断・立面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56	第88図	IV区8号屋敷跡7号道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
第33図	IV区4号屋敷跡南西部土壁出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57	第89図	IV区8号屋敷跡20・26号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
第34図	IV区4号屋敷跡上面遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58	第90図	IV区8号屋敷跡6・7号井戸、1号石組、石橋・・・・・・・・・・・・ 133
第35図	IV区4号屋敷跡下面遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59	第91図	IV区8号屋敷跡1号石組、石橋断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
第36図	IV区4号屋敷跡10号石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60	第92図	IV区8号屋敷跡4号井戸、17号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
第37図	前回報告IV区5号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込	第93図	IV区9・10号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込
第38図	IV区5号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込	第94図	IV区9号屋敷跡18号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
第39図	IV区5号屋敷跡10号建物12号石垣12号建物・埋設桶・・・・ 折込	第95図	IV区9・10・11号屋敷跡(A～E)、18号建物(A～D)断面・・・・ 折込
第40図	IV区5号屋敷跡10号建物槽場(1・2面)・・・・・・・・・・・・・・ 68	第96図	IV区9号屋敷跡18号建物(E～K)断面・・・・・・・・・・・・・・ 折込
第41図	IV区5号屋敷跡10号建物槽場(3面)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69	第97図	IV区9号屋敷跡18号建物馬屋・埋設桶・・・・・・・・・・・・・・ 145
第42図	IV区5号屋敷跡10号建物槽場(4・5面)・・・・・・・・・・・・・・ 70	第98図	IV区9号屋敷跡18号建物竈・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
第43図	IV区5号屋敷跡10号建物槽場(6・7面)・・・・・・・・・・・・・・ 71	第99図	IV区9号屋敷跡18号建物炭堆積遺構、唐白抜き取り穴・唐白支脚穴・・・・・・・・・・・・ 147
第44図	IV区5号屋敷跡10号建物槽場断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72	第100図	IV区9号屋敷跡18号建物1・2号囲炉裏・・・・・・・・・・・・・・ 148
第45図	IV区5号屋敷跡10号建物2号施設・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73	第101図	IV区9号屋敷跡19号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
第46図	前回報告IV区6号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込	第102図	IV区9号屋敷跡19号建物埋設桶断面、7号土坑・・・・・・・・・・・・ 150
第47図	IV区6号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込	第103図	IV区9号屋敷跡21号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 152
第48図	IV区6号屋敷跡11号建物竈(1・2面)・・・・・・・・・・・・・・ 78	第104図	IV区9号屋敷跡21号建物断面囲炉裏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
第49図	IV区6号屋敷跡11号建物竈(3～5面)、唐白抜き取り穴・唐白支脚穴・・・・・・・・・・・・ 79	第105図	IV区9号屋敷跡西側11号道、水場、28・29・30号石垣・・・・ 154
第50図	IV区6号屋敷跡11号建物西側1～5号土壁出土状況・・・・・・・・ 80	第106図	IV区9号屋敷跡31号建物、28号石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 155
第51図	IV区6号屋敷跡11号建物西側土壁断面(A～D)・・・・・・・・・・・・ 81	第107図	IV区10号屋敷跡23号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 折込
第52図	IV区6号屋敷跡11号建物西側遺物出土状況・・・・・・・・・・・・ 82	第108図	IV区10号屋敷跡23号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159
第53図	IV区6号屋敷跡27号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83	第109図	IV区10号屋敷跡23号建物埋設桶、竈1・2面、囲炉裏・・・・ 161
第54図	IV区6号屋敷跡18号石垣断・立面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85	第110図	IV区10号屋敷跡30号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 163
第55図	IV区6号屋敷跡19号石垣立面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86	第111図	IV区11号屋敷跡31号建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第56図	前回報告IV区7号屋敷跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87	第112図	IV区11号屋敷跡31号建物断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
		第113図	IV区11号屋敷跡31号建物1・2号竈、3号囲炉裏・・・・・・ 168
		第114図	IV区11号屋敷跡31号建物1号竈上面、1号竈、3号囲炉裏・・ 169
		第115図	IV区11号屋敷跡31号建物1号囲炉裏、1号囲炉裏下炭出土遺構・・・・・・・・・・・・ 170

第116図	IV区11号屋敷跡31号建物 2号囲炉裏(1・2面)	171
第117図	IV区11号屋敷跡31号建物 5号囲炉裏	172
第118図	IV区 9・10号屋敷跡27・32・33号石垣	174
第119図	IV区11号屋敷跡 5号井戸	175
第120図	IV区24号建物竈	176
第121図	IV区24号建物囲炉裏(1～4面)	177
第122図	IV区24号建物囲炉裏断面	178
第123図	IV区25号建物	179
第124図	I区 5・12号畑平面、12号畑断面	181
第125図	IV区28・29 a・b・c号畑	183
第126図	IV区28・29 c号畑断面	184
第127図	IV区27・30・31・32・39・40・41号畑全体	折込
第128図	IV区30・31・32号畑 断面・31号畑遺物出土状況	折込
第129図	IV区33・38号畑	190
第130図	IV区34・35・36・37号畑	191
第131図	IV区36号畑断面	192
第132図	IV区30号畑内 1・2号円形平坦面	192
第133図	IV区32号畑内 3・4・5・号円形平坦面、 36号畑内 6号円形平坦面	193
第134図	IV区天明泥流下畑以前の畑	194
第135図	IV区天明泥流下畑以前の畑断面	195
第136図	IV区10号溝(3)	196
第137図	I・IV区 6号道	折込
第138図	IV区10・11・12号溝・遺構外出土遺物	折込
第139図	IV区10号溝(1)	201
第140図	IV区10号溝(2)	202
第141図	IV区12号溝(4)	203
第142図	IV区10号溝 1面遺物出土状況(1)	204
第143図	IV区10号溝 1面遺物出土状況(2)	205
第144図	IV区10号溝 1・2面遺物出土状況	206
第145図	IV区24号石垣	208
第146図	IV区石捨て場(ヤックラ)、34号石垣、炭窯、 32号畑内ローム堆積遺構	209
第147図	IV区石捨て場(ヤックラ)、34号石垣、炭窯、 32号畑内ローム堆積遺構断面	210
第148図	I区 1号屋敷跡 8号井戸、8号溝出土遺物(1)	212
第149図	I区 1号屋敷跡 8号溝出土遺物(2)	213
第150図	I区 1号屋敷跡 8号溝出土遺物(3)	214
第151図	I区 1号屋敷跡薪場出土遺物(1)	215
第152図	I区 1号屋敷跡薪場出土遺物(2)	216
第153図	I区 1号屋敷跡薪場出土遺物(3)	217
第154図	I区 1号屋敷跡薪場出土遺物(4)	218
第155図	I区 1号屋敷跡薪場出土遺物(5)	219
第156図	I区 1号屋敷跡天明三年以前の出土遺物(1)	220
第157図	I区 1号屋敷跡天明三年以前の出土遺物(2)	221
第158図	I区 1号屋敷跡天明三年以前の出土遺物(3)	222
第159図	IV区 4号屋敷跡 3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(1)	223
第160図	IV区 4号屋敷跡 3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(2)	224
第161図	IV区 4号屋敷跡 3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(3)	225
第162図	IV区 4号屋敷跡 3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(4)	226
第163図	IV区 4号屋敷跡 3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(5)	227
第164図	IV区 4号屋敷跡 3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(6)	228
第165図	IV区 4号屋敷跡 3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(7)	229
第166図	IV区 4号屋敷跡 6号溝出土遺物(1)	230
第167図	IV区 4号屋敷跡 6号溝出土遺物(2)、6号溝南西部、 10号石垣出土遺物	231
第168図	IV区 5号屋敷跡10号建物出土遺物(1)	232
第169図	IV区 5号屋敷跡10号建物出土遺物(2)	233
第170図	IV区 5号屋敷跡10号建物出土遺物(3)	234
第171図	IV区 5号屋敷跡12号建物出土遺物	235
第172図	IV区 6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(1)	236
第173図	IV区 6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(2)	237

第174図	IV区 6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(3)	238
第175図	IV区 6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(4)	239
第176図	IV区 6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(5)、 18号石垣出土遺物	240
第177図	IV区 7号屋敷跡13号建物・13号建物下面 出土遺物	241
第178図	IV区 7号屋敷跡水場10号溝出土遺物	242
第179図	IV区 7号屋敷跡水場 2号井戸出土遺物、 8号屋敷跡16号建物出土遺物(1)	243
第180図	IV区 8号屋敷跡16号建物 出土遺物(2)	244
第181図	IV区 8号屋敷跡16号建物 出土遺物(3)	245
第182図	IV区 8号屋敷跡20・26号建物、6号井戸、1号石組、 22・23号石垣、17号土坑出土遺物	246
第183図	IV区 9号屋敷跡18号建物出土遺物(1)	247
第184図	IV区 9号屋敷跡18号建物出土遺物(2)	248
第185図	IV区 9号屋敷跡18号建物出土遺物(3)	249
第186図	IV区 9号屋敷跡18号建物出土遺物(4)	250
第187図	IV区 9号屋敷跡18号建物出土遺物(5)、 19・21号建物出土遺物	251
第188図	IV区10号屋敷跡23号建物出土遺物(1)	252
第189図	IV区10号屋敷跡23号建物出土遺物(2)	253
第190図	IV区10号屋敷跡23号建物出土遺物(3)	254
第191図	IV区10号屋敷跡23・30号建物出土遺物(4)、 11号屋敷跡31号建物出土遺物(1)	255
第192図	IV区10号屋敷跡31号建物 出土遺物(2)	256
第193図	IV区10号屋敷跡31号建物 出土遺物(3)	257
第194図	IV区11号屋敷跡31号建物 出土遺物(4)、5号井戸、 24号建物出土遺物(1)	258
第195図	IV区24号建物出土遺物(2)、25号建物、28・ 29a・b・c・31・32号畑出土遺物	259
第196図	IV区10号溝出土遺物(1)	260
第197図	IV区10号溝出土遺物(2)	261
第198図	IV区10号溝出土遺物(3)	262
第199図	IV区10号溝出土遺物(4)	263
第200図	IV区11・12号溝、石捨て場(ヤックラ)、 炭窯出土遺物(1)	264
第201図	IV区炭窯出土遺物(2)	265
第202図	IV区炭窯出土遺物(3)、北側石列出土遺物	266
第203図	遺構外出土遺物(1)	267
第204図	遺構外出土遺物(2)	268
第205図	遺構外出土遺物(3)	269
第206図	遺構外出土遺物(4)	270
第207図	遺構外出土遺物(5)	271
第208図	遺構外出土遺物(6)	272
第209図	東宮遺跡で確認された囲炉裏	274
第210図	天明三年泥流下で調査報告された東宮遺跡屋敷内における 囲炉裏(1)	275
第211図	天明三年泥流下で調査報告された東宮遺跡屋敷内における 囲炉裏(2)(天明三年泥流以前の31号建物含む)	276
第212図	天明三年泥流下で調査報告された屋敷内における囲炉裏	277
第213図	東宮遺跡で確認された馬屋	280
第214図	天明三年(1783)泥流下の村(黒)と明治6年(1873) 壬申地引絵図(赤)(壬申地引絵図は任意に拡大し位置は 推定して合成)	293

自然科学分析

図 1	2号トレンチの土層柱状図	301
図 2	4号トレンチ(斜面部)の土層柱状図	301
図 3	10号建物裏トレンチの土層柱状図	302
図 4	15号建物下と天地の土層柱状図	302
図 5	12号溝断面の土層柱状図	302
図 6	テフラ分析試料採取場所	303

表 目 次

第1表	東宮遺跡調査経過	3	第11表	川原畑村における天明三年と明治6年における屋敷坪数	288
第2表	川原畑村周辺における元禄16年(1703)の石高一覧	11	第12表	川原湯村における貞享三年と明治6年における屋敷坪数	288
第3表	川原畑石高表	12	第13表	横壁村における貞享三年と明治6年における屋敷坪数	289
第4表	川原畑人口推移表	12	第14表	林村における貞享三年と明治6年における屋敷坪数	289
第5表	天明泥流下の周辺遺跡 元禄郷張から村名を推定	15	第15表	東宮遺跡周辺 4村貞享三年(1686)天明三年・川原畑村(1783)明治6年(1873)屋敷坪数の変化	290
第6表	東宮遺跡1区遺構一覧表	18	第16表	東宮遺跡発掘範囲畑・田坪数と等級	292
第7表	東宮遺跡IV区遺構一覧表	49	第17表	天明三年8月吾妻郡大柏木村方畑作秋作小前書上張	295
第8表	長野原町百姓別所持石高概要、家族人数別軒数、馬数と馬所有状況 石高別軒数	283	第18表	治10年上野国勢多郡普通物産表	
第9表	長野原町における馬を所有する家と所有しない家の所有石高と軒数	284		第三大区二小区龍蔵寺村	296
第10表	東宮遺跡周辺4村における貞享三年(天明三年・川原畑村)と明治6年における屋敷坪数の変化	287			

写真目次

PL. 1	1 1号屋敷跡 写真左の道と土手部分を発掘 平成19年5月撮影(南から)	3	3号井戸全景(南東から)
	2 6号道段下に8・9号井戸と8号溝(南から)	4	3号井戸、井戸北側に平石敷(南東から)
PL. 2	1 手前8号井戸、奥9号井戸、井戸東8号溝(南東から)	5	6号溝全景、東に角材(北から)
	2 8・9号井戸と8号溝(南から)	PL. 10	1 9号建物南西部出土凹状の木製品(南から)
	3 8号井戸(南)、9号井戸(北)(東から)		2 9号建物南西部出土凹状の木製品(東から)
	4 8号井戸埋没状況(東から)		3 9号建物南西部出土凹状の木製品、上の屋根材?(東から)
	5 8号井戸全景(東から)		4 9号建物南西部出土凹状の木製品(東から)
	6 8号井戸(東から)		5 9号建物南西部出土凹状の木製品断面(南東から)
	7 8号井戸石積状況(北から)		6 9号建物南西部の壁材(南東から)
	8 8号井戸、湧水により水が溜まる(東から)		7 9号建物南西部の壁材(1)(東から)
PL. 3	1 9号井戸全景(西から)	PL. 11	8 9号建物南西部の壁材(2)(東から)
	2 9号井戸石積状況(西から)		1 10号石垣、3号井戸付近(東から)
	3 8号溝出土遺物ホウキ(東から)		2 10号石垣南側(東から)
	4 8号溝出土遺物ホウキ(南西から)		3 4号屋敷跡6号溝上面調査状況(北東から)
	5 8号溝出土遺物ホウキ(南東から)		4 4号屋敷跡3号井戸北側水場からの出土遺物(東から)
	6 8号溝出土遺物下駄(北東から)	PL. 12	5 4号屋敷跡3号井戸北側水場からの出土遺物No.28
PL. 4	1 6号道下の薪場南側(南から)		1 4号屋敷跡3号井戸北側水場からの出土遺物No.6(陶器)・9(漆椀)(東から)
	2 薪場全景、8・9号井戸と8号溝(北から)		2 4号屋敷跡3号井戸北側水場からの出土遺物No.16(柄杓)(東から)
PL. 5	1 薪場南側全景、2列に大量の薪(東から)		3 4号屋敷跡3号井戸北側水場からの出土遺物No.6(陶器)(東から)
	2 薪場南側(北から)		4 4号屋敷跡3号井戸北側水場からの出土遺物No.3・2(北から)
	3 薪場南側、薪の上に長い竹と木材(北から)		5 4号屋敷跡3号井戸北側水場からの出土遺物No.4とNo.34(ヤカン)(東から)
	4 薪場南側(東から)		6 4号屋敷跡3号井戸北側水場からの出土遺物No.7(東から)
	5 解体中の薪場南側、角材の上に薪(西から)		7 4号屋敷跡南西部出土遺物No.3(曲物)(南東から)
PL. 6	1 薪取り上げ後の角材(南から)		8 4号屋敷跡3号井戸北側水場からの出土遺物(くるみ)(北から)
	2 薪場南側杭A-A'(東から)	PL. 13	1 5号屋敷跡全景(空撮)
	3 薪場南側杭B-B'(東から)		2 10号建物槽場、平成20年度段階(南から)
	4 薪場南側杭C-C'(南から)		3 槽場1面、平成20年度段階(北東から)
	5 薪場南側、薪撤去後(東から)		4 槽場男柱、平成20年度段階(北東から)
	6 薪場南側杭E-E'(南から)		5 槽場男柱、平成26年度発掘着手段階(西から)
	7 薪場南側杭E-E'(東から)	PL. 14	1 槽場2面、男柱掘り下げ中(西から)
	8 薪場南側杭F-F'(東から)		2 槽場3面、貫の上竹1本と木材2本(東から)
	9 薪場南側杭H-H'(東から)		3 槽場引き抜いた男柱、貫が柱内に残る
PL. 7	1 薪場北側、角材の上に薪(南東から)		4 槽場男柱、底部近くの貫の様子
	2 天明以前の遺構、角材下付近(南から)		5 槽場男柱撤去後(南から)
PL. 8	1 天明以前の遺構出土遺物(北東から)		6 槽場男柱撤去後(南西から)
	2 天明以前の遺構出土竹製品(南から)		7 槽場4面、貫の上の木材5本(西から)
	3 天明以前の遺構、木製品取り上げ後(東から)		8 槽場5面、貫の上の木材8本(西から)
	4 2号石垣、6号道段下部分(南東から)		
	5 4号屋敷跡、母屋の9号建物周辺を調査		
PL. 9	1 左から3号井戸と6号溝、12号溝(左上)・10号溝右上(南から)		
	2 3号井戸確認段階、高く石が積まれている(東から)		

PL.15	1 槽場6面(東から)	3 7号屋敷跡下面炭出土方形遺構炭出土状況(南西から)
	2 槽場中央の水溜まりが男柱痕(西から)	4 7号屋敷跡下面炭出土方形遺構炭出土状況(北西から)
	3 槽場7面(西から)	5 7号屋敷跡下面炭出土方形遺構炭撤去後(北西から)
	4 10号建物礎石撤去状況A1・A2(東から)	6 7号屋敷跡下面1号焼土遺構(南東から)
	5 10号建物礎石撤去状況A3・A4(東から)	7 7号屋敷跡下面石埋設1・2号土坑(南西から)
	6 10号建物2号施設全景(東から)	8 7号屋敷跡下面弥生土器出土焼土遺構(北東から)
	7 2号施設(北から)	PL.25
	8 2号施設、底部に平石敷(西から)	1 7号屋敷跡14号建物全景(北東から)
PL.16	1 12号建物全景(南から)	2 14号建物1・2号埋設桶(北東から)
	2 12号建物埋設桶(西から)	3 14号建物1号埋設桶(北東から)
	3 12号建物埋設桶屋号?(西から)	4 14号建物2号埋設桶(北東から)
	4 12号建物埋設桶解体(西から)	5 14号建物1・2号埋設桶(北東から)
	5 12号建物埋設桶撤去後(西から)	6 14号建物2号埋設桶断面(東から)
	6 12号石垣解体状況(南東から)	7 28号建物全景、発掘段階で規模推定(南西から)
	7 12号石垣裏部分の土層(東から)	8 28号建物1・2号桶(南から)
	PL.26	1 28号建物1号桶(南から)
PL.17	1 6号屋敷跡全景(空撮)	2 28号建物2号桶(南から)
	2 6号屋敷跡全景(平成21年度段階)(東から)	3 28号建物全景、盛土の上に建てられる(南から)
	3 11号建物竈(東から)	4 方形集石遺構(北東から)
	4 11号建物竈(北から)	5 方形集石遺構(南東から)
	5 11号建物竈燃焼部(南から)	6 方形集石遺構断面(南西から)
PL.18	1 11号建物竈解体(南から)	7 方形集石遺構中央部分(東から)
	2 11号建物竈解体(北から)	8 方形集石遺構東側部分断面(南東から)
	3 11号建物唐臼と思われる掘り込み(西から)	PL.27
	4 11号建物西側の礎石と土壁(北から)	1 7号屋敷跡水場、10号溝・石製臼、平石・2号井戸(南東から)
	5 11号建物西側に倒れていた土壁(東から)	2 7号屋敷跡水場石製臼・平石・発掘途中の2号井戸(東から)
	6 西側5号土壁(南東から)	3 7号屋敷跡水場、2号井戸(北西から)
	7 11号建物土壁解体状況(東から)	4 7号屋敷跡水場、2号井戸(東から)
PL.19	1 11号建物土壁断面、土壁下に浅間A軽石	5 7号屋敷跡水場、2号井戸・平石・石製臼・10号溝(南西から)
	2 11号建物土壁内芯材(北から)	PL.28
	3 27号建物全景(南西から)	1 水場石製臼と平石(南東から)
	4 27号建物1号埋設桶埋没状況(南西より)	2 10号溝・7号屋敷跡水場石製臼・平石・2号井戸(南東から)
	5 27号建物埋設桶(南西から)	3 7号屋敷跡水場石製臼、地表面から浮いている(北西から)
	6 27号建物1号埋設桶痕跡断面(南西から)	4 石製臼撤去後、臼は多くの小石の上に設置(南東から)
	7 39号畑内出土11号建物遺物(南から)	5 石製臼底部穴に近くから出土した栓挿入(北東から)
	8 39号畑内出土11号建物遺物(東から)	6 水場石製臼内浅間A軽石堆積状況
PL.20	1 39号畑内出土11号建物遺物(南から)	7 水場平石脇出土手桶(南東から)
	2 39号畑内出土11号建物遺物No.25・7(南東から)	PL.29
	3 39号畑内土壁より上出土遺物No.3(南から)	1 8号屋敷跡全景(南東から)
	4 39号畑内出土11号建物遺物No.19(南東から)	2 8号屋敷跡16号建物全景(空撮)
	5 47号畑内出土11号建物遺物No.13(南東から)	PL.30
	6 39号畑内出土11号建物遺物(南から)	1 8号屋敷跡全景(北東から)
	7 39号畑内出土11号建物遺物No.11(南東から)	2 16号建物馬屋全景(東から)
	8 39号畑内出土11号建物遺物(南から)	3 16号建物馬屋(東から)
PL.21	1 7号屋敷跡全景(空撮)	4 16号建物馬屋埋設桶抜き取り穴断面(東から)
	2 13号建物竈、平成20年調査状況(北東から)	5 16号建物竈確認段階(南から)
	3 13号建物竈、平成26年調査再開段階(北東から)	6 16号建物竈(南から)
	4 13号建物竈解体(1)(北東から)	7 16号建物竈(東から)
	5 13号建物竈解体(2)(北東から)	8 16号建物竈燃焼部中の左袖石(東から)
PL.22	1 13号建物竈解体(3)(北から)	PL.31
	2 13号建物竈解体(4)(北から)	1 16号建物竈袖石撤去後(東から)
	3 13号建物竈解体(5)(北東から)	2 16号建物竈燃焼部(東から)
	4 13号建物唐臼断面(南東から)	3 16号建物竈全景(東から)
	5 唐臼と唐臼支脚穴と思われる掘り込み(北東から)	4 16号建物竈全景(北から)
	6 13号建物唐臼断面(南東から)	5 16号建物竈解体(1)(東から)
	7 7号屋敷跡下面ピット群(南西から)	6 16号建物竈解体(2)(東から)
	8 7号屋敷跡下面ピット群P1(南東から)	7 16号建物竈解体(3)(東から)
PL.23	1 7号屋敷跡ピット群P2(南東から)	8 16号建物竈解体(4)(東から)
	2 7号屋敷跡ピット群P3(南東から)	PL.32
	3 7号屋敷跡ピット群P4(南東から)	1 16号建物炭出土方形遺構断面(東から)
	4 7号屋敷跡ピット群P11(南東から)	2 16号建物炭出土方形遺構断面(南から)
	5 7号屋敷跡下面囲炉裏(南東から)	3 16号建物炭出土方形遺構上面(東から)
	6 7号屋敷跡下面囲炉裏(南東から)	4 16号建物炭出土方形遺構下面(東から)
	7 7号屋敷跡下面2号焼土(南東から)	5 16号建物炭出土方形遺構出土遺物(東から)
	8 7号屋敷跡下面3号焼土断面(南西から)	6 16号建物唐臼抜き取り穴(推定)確認段階(南東から)
PL.24	1 7号屋敷跡下面炭出土方形遺構(北西から)	7 16号建物唐臼抜き取り穴(推定)(南東から)
	2 7号屋敷跡下面炭出土方形遺構断面(南西から)	8 16号建物唐臼抜き取り穴(推定)断面(南東から)
		PL.33
		1 16号建物床下大引・根太痕(北から)
		2 16号建物大引・根太痕(南西から)
		3 16号建物大引・根太痕(東から)
		4 16号建物1号囲炉裏(南から)
		5 16号建物1号囲炉裏解体(1)(南から)

	6	16号建物1号囲炉裏解体(2)(東から)		2	18号建物全景、28号石垣、11号道(北東から)
	7	16号建物1号囲炉裏解体(3)(東から)		3	18号建物馬屋(1)(東から)
	8	16号建物1号囲炉裏解体(4)(東から)		4	18号建物馬屋(2)(東から)
PL.34	1	16号建物1号囲炉裏解体(5)(東から)		5	18号建物馬屋埋設桶埋没状況(南東から)
	2	16号建物1号囲炉裏解体(6)(東から)		6	18号建物馬屋埋設桶(南東から)
	3	16号建物1号囲炉裏解体(7)(東から)		7	18号建物馬屋桶(南東から)
	4	16号建物2号囲炉裏全景(東から)		8	18号建物竈確認状況(南東から)
	5	16号建物2号囲炉裏(東から)	PL.45	1	18号建物竈(東から)
	6	16号建物2号囲炉裏解体(南から)		2	18号建物竈(南から)
	7	16号建物土壁(南東から)		3	18号建物竈断面(東から)
	8	16号建物土壁北側部分(東から)		4	18号建物1号囲炉裏下炭堆積遺構(北から)
PL.35	1	16号建物土壁(北から)		5	18号建物西側唐白抜き取り穴(推定)(南から)
	2	16号建物土壁(1)(南東から)		6	18号建物唐白(推定)確認状況(東から)
	3	16号建物土壁(2)(南東から)		7	18号建物唐白抜き取り穴(推定)埋没断面(東から)
	4	16号建物土壁(3)(南東から)	PL.46	1	18号建物唐白抜き取り穴(推定)(東から)
	5	16号建物土壁(4)(南東から)		2	18号建物唐白抜き取り穴と支脚穴(推定)(南から)
	6	16号建物土壁(5)(南東から)		3	18号建物1号囲炉裏(南東から)
	7	16号建物土壁(6)(南東から)		4	18号建物1号囲炉裏燃焼部断面(南から)
	8	16号建物土壁(7)(南東から)		5	18号建物1号囲炉裏燃焼部除去後(南から)
PL.36	1	16号建物土壁貫部分(南から)		6	18号建物1号囲炉裏中央石群除去後(南東から)
	2	16号建物土壁芯材(南から)		7	18号建物2号囲炉裏(北東から)
	3	16号建物土壁断面(南東から)		8	18号建物2号囲炉裏(東から)
	4	16号建物土壁と土壁下の浅間A軽石(南東から)	PL.47	1	28号石垣(北から)
	5	16号建物前庭ローム断面(南から)		2	28号石垣(北東から)
	6	16号建物前庭ローム断面(南から)		3	18号建物出土遺物No.10(東から)
	7	16号建物庭先ローム堆積場全景(東から)		4	18号建物出土遺物No.44(東から)
	8	16号建物庭先ローム堆積場断面(東から)		5	18号建物出土遺物No.28(西から)
PL.37	1	20号建物全景(東から)		6	18号建物出土遺物No.3
	2	20号建物全景(北から)		7	18号建物出土遺物No.45(東から)
	3	20号建物P1(東から)		8	18号建物出土遺物No.42
	4	20号建物P2(東から)	PL.48	1	19号建物全景(北西から)
	5	20号建物P3(東から)		2	19号建物埋設桶(北西から)
	6	20号建物P4(東から)		3	19号建物埋設桶断面(北西から)
	7	20号建物P5(東から)		4	7号土坑全景(南西から)
	8	20号建物P6(東から)		5	21号建物全景(東から)
	9	20号建物P8(東から)		6	21号建物(北から)
PL.38	1	26号建物全景(東から)		7	21号建物囲炉裏(東から)
	2	26号建物(北から)		8	21号建物出土ひき白(東から)
	3	26号建物埋設桶抜き取り穴断面(東から)	PL.49	1	23号建物全景(空撮)
	4	26号建物1・2号埋設桶抜き取り穴(東から)		2	23号建物南側全景(南東から)
	5	26号建物2号埋設桶抜き取り穴(東から)		3	23号建物想定全景(南西から)
PL.39	1	8号屋敷跡水場(北東から)		4	23号建物礎石下に31号建物の礎石と囲炉裏(北東から)
	2	6・7号井戸全景(北西から)		5	23号建物床下に31号建物(南東から)
	3	6号井戸埋没断面(南東から)	PL.50	1	23号建物馬屋(推定)埋設桶(旧8号土坑)(北から)
	4	6号井戸全景(南東から)		2	23号建物馬屋(推定)埋設桶内出土遺物(東から)
	5	6号井戸石積状況(南東から)		3	23号建物竈断面(南東から)
PL.40	1	7号井戸(南東から)		4	23号建物竈全景(南東から)
	2	7号井戸埋没断面		5	23号建物唐白(推定)抜き取り穴断面(東から)
	3	8号屋敷跡水場石橋(南東から)		6	23号建物唐白(推定)抜き取り穴と支脚穴(東から)
	4	1号石組遺構(南東から)		7	23号建物囲炉裏(北東から)
	5	1号石組遺構埋没断面(南東から)		8	23号建物出土No.7・9(東から)
	6	1号石組遺構石積状況(西から)	PL.51	1	30号建物全景(東から)
	7	13号溝全景(東から)		2	30号建物全景(北から)
	8	8号屋敷跡水場と13号溝(西から)		3	30号建物出土銭
PL.41	1	4号井戸(天明泥流後)埋没断面(東から)		4	30号建物出土寛永通寶(東から)
	2	4号井戸全景(天明泥流後)(東から)		5	11号道出土すり鉢、11号道上に浅間A軽石(東から)
	3	17号土坑埋没断面(天明泥流後)(東から)	PL.52	1	31号建物全景(北から)
	4	17号土坑(天明泥流後)(東から)		2	31号建物馬屋(推定)と土間(北から)
	5	16号建物出土遺物No.29・30・31		3	31号建物の雨落溝が32号石垣の下に延びている(北東から)
	6	16号建物出土遺物No.9		4	31号建物の雨落溝が32号石垣の下に延びている(南東から)
	7	16号建物出土遺物No.2		5	31号建物1号竈断面(南から)
	8	16号建物出土遺物No.6	PL.53	1	31号建物2号竈(南から)
PL.42	1	9・10号屋敷跡(空撮)		2	31号建物1・2号囲炉裏全景(南から)
PL.43	1	9号屋敷跡(空撮)		3	31号建物1号囲炉裏(東から)
	2	9号屋敷跡18号建物(南東から)		4	31号建物1号囲炉裏燃焼部解体(東から)
PL.44	1	18号建物全景(東から)		5	31号建物1号囲炉裏燃焼部撤去後(東から)

	6	31号建物1号囲炉裏下炭出土遺構(東から)		8	天明泥流下の畑以前の畑(南から)
	7	1号囲炉裏下炭出土遺構1号囲炉裏撤去後(東から)	PL.64	1	集落中央にある6号道(南東から)
	8	31号建物2号囲炉裏(東から)		2	集落中央にある6号道(北東から)
PL.54	1	31号建物2号囲炉裏燃焼部解体(1)(東から)	PL.65	1	6号道全景(南から)
	2	31号建物2号囲炉裏燃焼部解体(2)(東から)		2	6号道、山の傾面に登っていく(南東から)
	3	31号建物3号囲炉裏、大量の石は1号竈(東から)		3	浅間A軽石が残っていた6号道(北から)
	4	31号建物3号囲炉裏(東から)		4	6号溝(左手前)12号溝(左中央)10号溝(中央右)(東から)
	5	31号建物3号囲炉裏、上面に炭その下に灰(東から)	PL.66	1	6号溝(右下)12号溝(中央)10号溝(中央上)(南西から)
	6	31号建物3号囲炉裏と1号竈(右側)(東から)		2	写真左端石垣下が10号溝、その下に11号溝(東から)
	7	31号建物3号囲炉裏焼土面(東から)		3	10・12号溝合流部分、12号溝は天明泥流以前に埋設(南東から)
	8	31号建物3号囲炉裏・1号竈、手前が5号囲炉裏(東から)		4	10号溝中央付近(東から)
PL.55	1	31号建物床面下の5号囲炉裏(東から)		5	10号溝石積立面F-F'(西から)
	2	31号建物5号囲炉裏(東から)		1	10号溝石積立面E-E'(西から)
	3	31号建物床面の焼土状況(南東から)	PL.67	2	10号溝(右)12号溝合流地点(東から)
	4	11号屋敷跡32号石垣(手前)33号石垣(奥)(東から)		3	10号溝土層断面A-A'(南東から)
	5	5号井戸全景(天明泥流以降)(南東から)		4	10号溝土層断面B-B'(南東から)
	6	31号建物出土遺物No.9		5	天明泥流下の12号溝、大部分埋まっていた(南西から)
	7	31号建物出土遺物No.18		6	12号溝断面、天明泥流段階大部分埋没(南東から)
	8	31号建物出土遺物No.13・14		7	12号溝断面、天明泥流段階大部分埋没(南東から)
PL.56	1	24号建物(南東から)		8	12号溝土層断面(東から)
	2	23号建物(左側)24号建物(南東から)		1	12号溝土層断面A-A'(南東から)
	3	24号建物(南西から)	PL.68	2	12号溝土層断面A-A'(東から)
	4	24号建物P1(南東から)		3	12号溝土層断面B-B'(東から)
	5	24号建物P2(南東から)		4	12号溝土層断面C-C'(南から)
PL.57	1	24号建物P3(南東から)		5	炭窯土層断面A-A'(南から)
	2	24号建物P4(南東から)		6	炭窯全景(東から)
	3	24号建物竈土層断面(南から)		7	調査区西端中段の石列群(東から)
	4	24号建物竈全景(東から)		8	調査区西端中段の道と石列群(北から)
	5	24号建物囲炉裏埋没状況(南東から)		1	10号溝、7号屋敷跡水場付近遺物出土状況(北東から)
	6	24号建物囲炉裏全景(南東から)	PL.69	2	10号溝、7号屋敷跡水場出土木製品(南東から)
	7	24号建物囲炉裏燃焼部上面(南東から)		1	10号溝、7号屋敷跡水場出土盆No.6(南東から)
	8	24号建物囲炉裏燃焼部断面(南東から)	PL.70	2	10号溝、7号屋敷跡水場石製白付近出土木製品(南東から)
PL.58	1	24号建物囲炉裏燃焼部下面(南東から)		3	10号溝遺物出土状況(北西から)
	2	24号建物囲炉裏燃焼部最下面(南東から)		4	10号溝、7号屋敷跡水場出土木製品(南から)
	3	24号建物出土遺物(南東から)		5	10号溝出土遺物No.4(お盆)(南から)
	4	24号建物出土遺物No.1・3(南東から)		1	10号溝、7号屋敷跡水場出土階段(南西から)
	5	24号建物出土遺物No.2(東から)	PL.71	2	10号溝出土遺物No.16・17・18(階段)(南東から)
	6	25号建物全景(北東から)		3	10号溝、7号屋敷跡水場出土木製品(北東から)
	7	25号建物造成面(北東から)		4	10号溝遺物出土状況(北東から)
	8	25号建物炉と思われる部分(北東から)		5	10号溝出土遺物No.11(栓)(東から)
PL.59	1	28・29a・29b・29c・30・31・32・33・38・40号畑全景(空撮)		6	10号溝出土遺物No.9・10(栓)(北から)
PL.60	1	5・12・27・31・39号畑全景(空撮)		7	10号溝出土遺物No.9・10(栓)(西から)
	2	34・35・36・37号畑全景(空撮)		8	10号溝出土物差し(鯨尺)(南東から)
PL.61	1	左から6号道・7号石垣・5号畑・12号畑(手前)(南から)		1	10号溝出土物差し(鯨尺)(東から)
	2	28号畑(南東から)	PL.72	2	10号溝出土遺物No.3(火鉢)(南東から)
	3	28号畑南東部分(東から)		3	10号溝出土遺物No.3(火鉢)(北東から)
	4	29a畑(南東から)		4	10号溝出土遺物(竹)(東から)
	5	29c畑(東から)		5	炭窯出土遺物No.18
	6	30号畑、写真中央(東から)		6	炭窯出土遺物No.6
	7	30号畑断面(南から)		7	炭窯出土遺物
	8	30号畑断面(南東から)		8	炭窯出土遺物
PL.62	1	31号畑出土木製品(南から)		I区1号屋敷跡8号井戸、8号溝出土遺物(1)	
	2	31号畑(北東から)	PL.73	I区1号屋敷跡8号溝出土遺物(2)	
	3	31号畑(東から)	PL.74	I区1号屋敷跡8号溝出土遺物(3)	
	4	32号畑断面(北東から)	PL.75	I区1号屋敷跡薪場出土遺物(1)	
	5	4号円形平坦面(32号畑内)(東から)	PL.76	I区1号屋敷跡薪場出土遺物(2)	
	6	6・7号井戸西に位置する33号畑(南東から)	PL.77	I区1号屋敷跡薪場出土遺物(3)	
	7	34・35・36号畑(北東から)	PL.78	I区1号屋敷跡薪場出土遺物(4)	
	8	35号畑(南東から)	PL.79	I区1号屋敷跡薪場出土遺物(5)	
PL.63	1	36号畑(左端)34・35号畑(右側)37号畑(奥)南東から	PL.80	I区1号屋敷跡天明三年以前の出土遺物(1)	
	2	6号円形平坦面(36号畑内)(東から)	PL.81	I区1号屋敷跡天明三年以前の出土遺物(2)	
	3	37号畑(北東から)	PL.82	I区1号屋敷跡天明三年以前の出土遺物(3)、IV区4号屋敷跡3号井戸・井戸北側からの出土遺物(1)	
	4	38号畑、6・7号井戸南西に位置する(空撮)	PL.83	IV区4号屋敷跡3号井戸・井戸北側からの出土遺物(2)	
	5	39号畑(東から)		IV区4号屋敷跡3号井戸・井戸北側からの出土遺物(3)	
	6	40号畑(2号井戸北)(南東から)	PL.84		
	7	30号畑下の天明泥流下の畑以前の畑(東から)	PL.85		

PL.86	IV区4号屋敷跡3号井戸・井戸北側からの出土遺物(4)	PL.105	IV区9号屋敷跡18号建物出土遺物(3)
PL.87	IV区4号屋敷跡3号井戸・井戸北側からの出土遺物(5)	PL.106	IV区9号屋敷跡18号建物出土遺物(4)、19・21号建物出土遺物
PL.88	IV区4号屋敷跡3号井戸・井戸北側からの出土遺物(6)	PL.107	IV区10号屋敷跡23号建物出土遺物(1)
PL.89	IV区4号屋敷跡6号溝出土遺物(1)	PL.108	IV区10号屋敷跡23号建物出土遺物(2)
PL.90	IV区4号屋敷跡6号溝出土遺物(2)、6号溝南西部、10号石垣出土遺物	PL.109	IV区10号屋敷跡23号建物出土遺物(3)
PL.91	IV区5号屋敷跡10号建物出土遺物(1)	PL.110	IV区10号屋敷跡30号建物出土遺物、11号屋敷跡 31号建物出土遺物(1)
PL.92	IV区5号屋敷跡10号建物出土遺物(2)	PL.111	IV区11号屋敷跡31号建物出土遺物(2)
PL.93	IV区5号屋敷跡12号建物出土遺物(1)	PL.112	IV区11号屋敷跡31号建物出土遺物(3)、5号井戸、24号建物出土遺物
PL.94	IV区5号屋敷跡12号建物出土遺物(墨書)(2)	PL.113	IV区25号建物、28・29・31・32号畑、10号溝出土遺物(1)
PL.95	IV区6号屋敷跡11号建物、11号建物西側出土遺物(1)	PL.114	IV区10号溝出土遺物(2)
PL.96	IV区6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(2)	PL.115	IV区10号溝出土遺物接写(3)
PL.97	IV区6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(3)	PL.116	IV区10号溝出土遺物(4)
PL.98	IV区6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(4)	PL.117	IV区10号溝出土遺物(5)
PL.99	IV区6号屋敷跡18号石垣、7号屋敷跡13号建物・13号建物下面出土遺物	PL.118	IV区10号溝出土遺物(6)、11・12号溝、石捨て場・炭窯出土遺物(1)
PL.100	IV区7号屋敷跡水場、水場2号井戸、8号屋敷跡16号建物出土遺物(1)	PL.119	IV区炭窯出土遺物(2)、北側石列出土遺物
PL.101	IV区8号屋敷跡16号建物出土遺物(2)	PL.120	遺構外出土遺物(1)
PL.102	IV区8号屋敷跡16号建物出土遺物(3)、20・26号建物、6号井戸、1号石組出土遺物	PL.121	遺構外出土遺物(2)
PL.103	IV区8号屋敷跡22・23号石垣、17号土坑、9号屋敷跡18号建物出土遺物(1)	PL.122	遺構外出土遺物(3)
PL.104	IV区9号屋敷跡18号建物出土遺物(2)	PL.123	遺構外出土遺物(4)
		PL.124	遺構外出土遺物(5)

第1章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経過

吾妻川は、その源を群馬・長野県境の鳥居峠に発し、浅間山・草津白根山の間を東流して万座川・熊川・白砂川等の支流を合わせ、途中、吾妻峡と称される美観をつくりながら、さらに温川・四万川・名久田川等の支流を合わせ、渋川市付近で利根川と合流する全長76.2kmの一級河川である。

八ッ場ダムは、その吾妻川の中流に建設され、①洪水調節、②流水の正常な機能維持、③水道及び工業用水の新たな確保並びに発電を目的とする多目的ダムで、天端標高586m、堤高116m、湛水面積約3.0km²、総貯水容量1.075億m³の規模を測る重力式コンクリートダムである。ダム位置は、左岸が群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字八ッ場、右岸が大字川原湯字金花山にあり、名勝「吾妻峡」の入口部付近にあたる。

八ッ場ダム建設計画は、「昭和24年利根川改修改定計画」の一環として、昭和27年5月に調査着手後、平成4年7月、「八ッ場ダム建設事業に係る基本協定書」及び「用地補償調査に関する協定書」が締結されることによって本格着工となった。

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関しては、平成6年3月18日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結され、埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定した。これにより、委託者である建設省関東地方建設局長と受託者である群馬県教育委員会教育長とが年度区分ごとに発掘調査受委託契約を締結のうえ、以後発掘調査が実施されることが決定したのである。

この協定を踏まえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、八ッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とする八ッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

平成11年4月1日には、建設省関東地方建設局長と群

馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の間で、「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書(第1回変更)」が締結され、発掘調査受委託契約についての変更が行われた。これにより、受託者が群馬県教育委員会教育長から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長へ変更となり、現在の調査体制に至っている。

また、平成17年4月1日、同協定書(第2回変更)の締結により、発掘調査の業務完了期日が、「平成18年3月31日」から「平成23年3月31日」まで延長され、さらに、平成20年3月31日、同協定書(第3回変更)の締結により、発掘調査の業務完了期日が「平成28年3月31日」まで延長された。

東宮遺跡は長野原町大字川原畑字東宮地内に所在する。平成7年度(平成7年12月4日～12月22日、平成8年2月22日～3月7日)及び平成9年度(平成9年8月18日～8月29日)の2カ年度にわたって、工事用進入路(川原畑進入路)建設及び町道付け替えに伴い、発掘調査が実施されてきた。調査の結果、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物(以下、「天明泥流」と略す)に埋没した畑跡が3地点において検出され、新発見の遺跡となった。『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』2002群埋文303集により、既に報告済みである。

その後、八ッ場ダム建設工事の進展に伴い、これまで実施されてこなかったダム水没予定地域の埋蔵文化財調査が着手されることになり、東宮遺跡は、その先がけとして、発掘調査対象遺跡に選定された。

まず、平成18年5月12日、群馬県教育委員会文化財保護課により、東宮遺跡東部分について試掘・確認調査が実施され、結果、事業地内の一部で、天明泥流に埋没した畑跡の分布が確認された。次に、平成18年9月21・22日、同課により、遺跡西部分についても、試掘・確認調査が実施され、天明泥流に埋没した屋敷跡及び畑跡の分布が各2地点で確認された。どちらの試掘・確認調査の結果からも、本格的な発掘調査の必要があるとの判断に至った。

第2節 調査の方針・方法・経過

1 調査の方針

東宮遺跡では、平成18年9月に実施された群馬県教育委員会文化財保護課の試掘・確認調査の結果から、天明泥流に埋没した屋敷跡の存在が2地点において確認されていた。その1地点は発掘調査が実施された「1号屋敷跡」であり、もう1地点は4号屋敷跡の西側に隣接する地点で、「8号屋敷跡」である。

確認された各屋敷跡は、平面距離で約50mの範囲内で検出されていることから、八ッ場ダム建設に関わる長野原町大字5地区においては、これまでに発掘調査例のない、近世集落主体部(当時の「川原畑村」)に関わる調査となることが予想された。

また調査原因が、ダム水没予定地域の発掘調査であることから、以後、調査範囲が、遺跡全体或いは新発見の遺跡をも含めて、川原畑地区全体へ広範囲に拡大していくことも予想できた。

そこで、以上の経緯を踏まえた上で、調査方針は、「集落の構成要素である遺構(屋敷・畑・水田・道など)を精査し、記録保存を実施するとともに、集落の全体像(景観)を明らかにすること」とした。

2 調査の方法

東宮遺跡は、主に吾妻川中位河岸段丘面上に立地し、厚さ50cm～1.5mの天明泥流に被覆されている。

調査は、まずバックホーを使用することにより、天明泥流の除去作業から始めた。その後、発掘作業員を導入し、ジョレンや移植ゴテ等による遺構の検出作業、並びにトレンチ掘削や截ち割り作業等により、遺構調査を実施した。

遺物取り上げについては、地点別取り上げを基本とし、分布範囲の地点的な集約を想定した4mグリッド一括取り上げを適宜行った。

遺構平面測量にあたっては、測量業者委託によるデジタル測量を基本として、縮率1/10・1/20・1/40を基準に、縮率を適宜選択して実施した。

遺構断面測量も平面測量に準じた。

遺構写真については、委託業者による航空写真撮影

(ラジコンヘリ使用)、現場担当者による地上写真、並びに高所作業車使用による高所写真撮影を行った。現場担当者による撮影には、デジタルカメラ(Canon EOS Kiss Digital N)と6×7版モノクロネガフィルムを使用した。

3 調査の経過

東宮遺跡の調査は、平成19年11月1日に開始され、第一次調査(平成19年11月1日～12月26日)、第二次調査(平成20年4月1日～12月26日)、第三次調査(平成21年7月1日～12月26日※8月と11月は発掘調査中断)が実施されてきた。その後調査は一時中断され、第一次調査から第三次調査までの調査成果は、『東宮遺跡(1)』(2011)、『東宮遺跡(2)』(2012)として調査報告書が刊行されている。調査は再開され、第4次調査(平成25年7月1日～12月26日)が実施された。第四次調査における発掘調査期間内の個別遺構調査進行状況については、「第1表 東宮遺跡調査経過」の通りである。

第四次調査では、調査未了となっていたブルーシートにより覆われていた5・6・7号屋敷跡の継続調査や、1・4・5・6・7号屋敷跡の未調査部分の調査を行った。さらに集落内中央部を流れる10・12号溝、その溝の南側に広がる8～11号屋敷跡、24・25号建物、屋敷跡を囲むように造られていた多くの石垣、集落の幹線道路である幅2m前後の6号道、屋敷に入るための道および井戸や井戸に伴う溝等、さらに屋敷内や屋敷跡の近くに造られていた畑や集落の西斜面に展開する畑等を調査した。

第3節 調査区の概要

1 調査区の設定

平成6年度から始まった八ッ場ダム建設に伴う発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて、「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。以下、本報告書でもそれに準拠し、必要部分について掲載する。

調査における遺跡番号は、八ッ場ダム建設に関わる長野原町の大字5地区(1:川原畑、2:川原湯、3:横壁、4:林、5:長野原)、東吾妻町の大字3地区(6:三島、7:大柏木、8:松谷)に番号を付し、八ッ場ダムの略号(YD)に続ける。ハイフン以下は各地区内に所在する遺跡に対

第1表 東宮遺跡調査経過

		7月		8月		9月		10月		11月		12月		備考	
		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後				
I区	表土・泥流除去						■								
	1号屋敷	8号井戸・9号井戸・8号溝					■								
		薪場					■								
		天明以前の遺構									■				
	2号屋敷	2号石垣・12号道							■						
		8号道路					■								
7号石垣								■							
IV区	表土・泥流除去				■										
	4号屋敷	3号井戸・6号溝			■				■						
		土壁・南西部の遺構					■								
		10号石垣・石棚							■		■				
	表土・泥流除去								■						
	5号屋敷	10号建物	槽場跡・礎石						■						
			2号施設								■				
		12号建物							■						
		11号石垣									■				
	表土・泥流除去				■										
	6号屋敷	11号建物	竈・土坑・土壁			■				■					
		27号建物							■						
		18号石垣							■						
		19号石垣													
	表土・泥流除去				■										
	7号屋敷	13号建物	竈・唐白			■				■					
			馬屋と1号桶								■				
		7号屋敷下面の遺構	ピット群・囲炉裏											■	
			1・2・3号焼土遺構									■			
			1号炭出土方形遺構									■			
			石埋設1・2号土坑										■		
			弥生土器出土焼土遺構								■				
		14号建物				■									
	方形集石遺構				■										
8号石垣															
水場	2号井戸・平石敷				■										
	石製臼				■										
表土・泥流除去		■													
8号屋敷	16号建物	馬屋・土間・竈					■				■				
		炭出土方形遺構							■		■				
		床面炭出土遺構							■						
		唐白・床面							■						
		1号囲炉裏							■		■				
		2号囲炉裏									■				
		土壁				■					■				
	前庭及び庭先ローム堆積場		■								■				
	7号道路		■												
	20号建物								■						
	26号建物								■						
水場	6号井戸・7号井戸							■							
	石橋							■							
	1号石組														
	13号溝														
石垣	22・23・25・26号石垣							■							
屋敷以外	4号井戸							■							
	17号土坑														

平成19・20・21年度調査、平成26年度継続調査

平成26年度調査

第1章 調査の方法と経過

			7月		8月		9月		10月		11月		12月		備考		
			前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後			
IV区	表土・泥流除去																
	9号屋敷	18号建物	馬屋・土間・竈														
			炭堆積遺構														
			唐白														
			1号囲炉裏・2号囲炉裏														
	19号建物																
	21号建物																
	水場と水場から18号建物への水の搬入路																
	石垣	28・29・30号石垣															
	表土・泥流除去																
	10号屋敷	23号建物	馬屋・竈・唐白・囲炉裏														
			屋敷東中央部にL字状に並ぶ3石の切石														
		30号建物															
	9・10・11号道																
	表土・泥流除去																
	11号屋敷	31号建物	馬屋・1号竈・2号竈														
			囲炉裏・土間のローム														
			床面の焼土化														
	石垣	27・32・33号石垣															
	屋敷以外	5号井戸															
		24号建物	竈・囲炉裏														
		25号建物															
		畑	5・12・27号畑														
			28・29a・29b・29c号畑														
			30・31・32・33号畑														
			34・35・36・37号畑														
		38・39・40・41号畑															
		円形平坦面	1・2・3・4・5・6号														
		天明泥流下畑以前の畑															
		6号道															
10号溝・12号溝																	
24号石垣																	
石捨て場・炭窯																	
34号石垣・32号畑内ローム堆積遺構																	
調査区西端中段の道と石列群																	

平成26年度調査

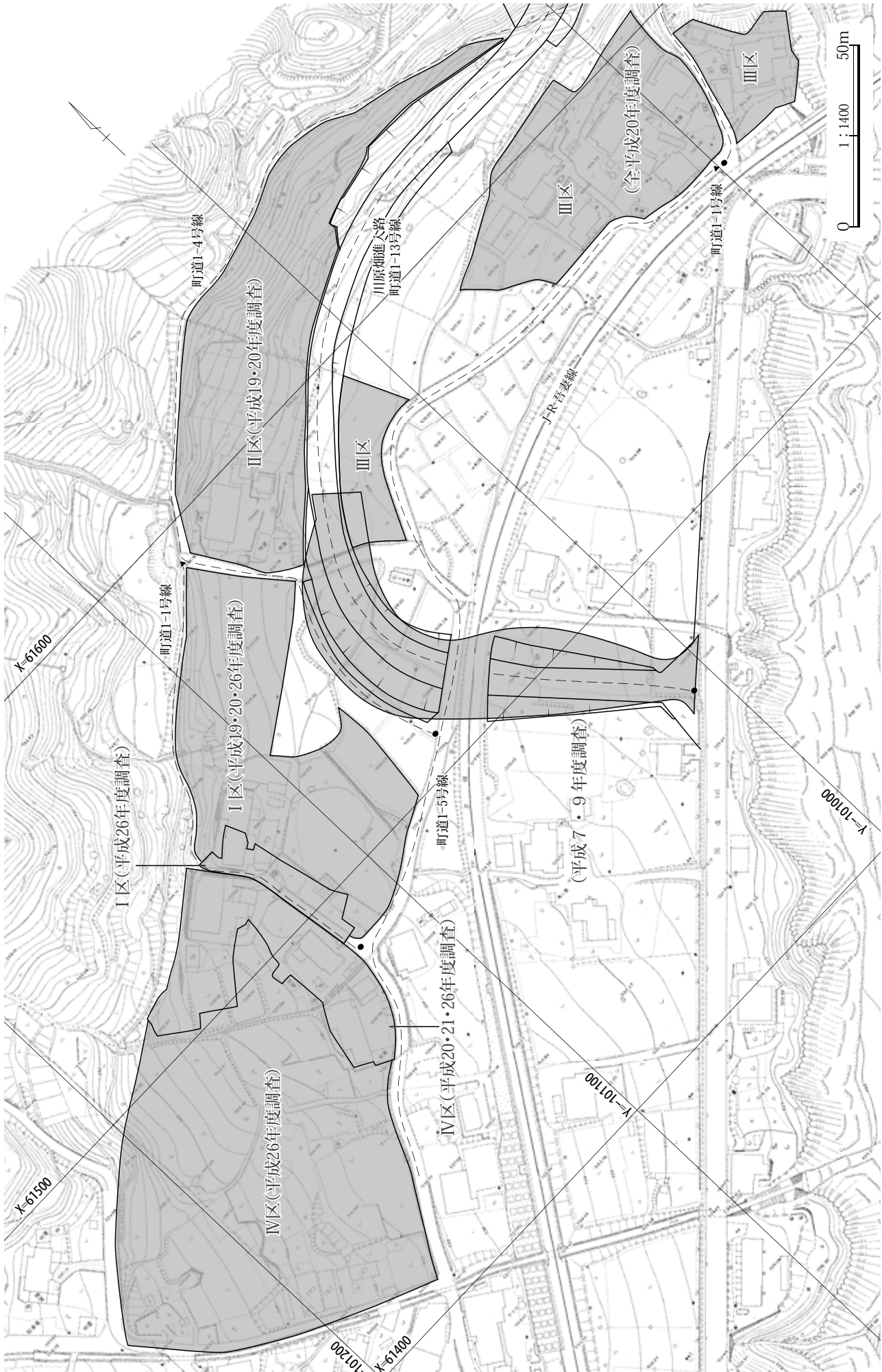
して調査順に通し番号を付し、遺跡番号とする。東宮遺跡は「YD 1-02」である。

基準座標は、国家座標(2002年4月改正以前の日本測地系)に基づく平面直角座標第IX系(日本測地系)を使用し、東吾妻町大柏木付近を原点(座標値X=+58000.0、Y=-97000.0)とした1km方眼を基点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。本遺跡はこのNo.42に所在する。さらに、1km方眼を南東隅から100m方眼の1～100に区画し、この中グリッドを「区」とする。南東隅を1とし、東から西へ連続する10単

位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。

「区」の100m方眼は、さらに4m方眼で625区画に分割され、その4m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA～Yまでのアルファベットを、南北には1～25までの算用数字を用いながら、南東隅を基点としグリッドを呼称する。

また、遺構図や本文中の記載において、特に混乱が予想されない場合は地区番号を略して用いている。



第1図 東宮遺跡調査区全体図(平成7・9・19・20・21・26年度分)

2 調査前の状況

I区は、南側の町道1-5号線、西側から北側にかけての町道1-11号線(旧道)、東側の町道1-4号線により区画された調査区を呼称する。

I区には、10年ほど前まで1軒の住宅が存在した。出土した2号屋敷跡の直上の現地表面である。居住するとともに土地の所有者であった篠原家は、時期は確定できないながらも、以前は野口姓を名乗っており、ある時点で同地区内の篠原家と姓を交換し現在に至るといふ。この篠原家(江戸時代当時は野口家)は、郷土の偉人である野口円心(1726~1806)の生家とも伝わる家系である。

また、1号屋敷跡の直上の現地表面は、土地を所有していた野口家では「ヤシキアト」或いは「ヤシキタンボ」と呼ばれる湿地(昭和以降、比較的水はけの良い南部分は水田に造成したという)となっていた。一方、水はけの悪い北部分は常に沼地状となっており、防火用水池として利用された時期もあったという。

天明泥流の堆積状況について、1号屋敷跡は厚さ100~110cm、2号屋敷跡は80~130cmの表土及び天明泥流堆積物により被覆されていた。ただし、1号石垣については、その上端部約30cmが、4号石垣については、その上半部約130~140cmが泥流に埋没していない状況で現地表面に露出していた。

II区は、西側と北側は町道1-4号線(北側は旧道に相当する)と南側の1-13号線(工事用進入路)に区画された調査区を呼称する。10年ほど前まで1軒の住宅が存在した。出土した3号屋敷跡の直上の現地表面である。居住するとともに土地所有者であった野口家は、当該地域では「東の家(ヒガシンチ)」と呼ばれる東宮地区を代表する旧家のひとつで、天明泥流被災に関わるいくつかの伝承も残る家系である。

II区の北側の境界は、町道1-4号線(旧道)を挟んで三ッ堂跡(平成21年3月移転)と隣接する。この旧三ッ堂には、「浅間押しのはきはは馬馬溪に水がつかえて三ッ堂の石段(19段)の下から3段目のところまで水がのった」という伝承がある(群埋文319集)。

III区は、西側と北側は町道1-13号線(工事用進入路)、東側は松葉沢、南側はJR吾妻線に区画された調査区を呼称する。東宮地区の東部の現況集落部(「東沢地区」と

地元では俗称する)に相当するため、近年まで8~9軒の住宅が存在していた。既に全ての住宅の移転は終了している。

IV区は、西側に境沢(東宮地区と西宮地区との境界)、南側は町道1-5号線(旧道)、東側は1-11号線(旧道)に区画された調査区を呼称する。東宮地区の西部の現況集落部に相当するため、近年まで5~6軒の住宅が存在していた。うち5号屋敷跡直上の住宅は平成20年夏まで存在しており、移転解体直後、秋から発掘調査対象地となった。

天明泥流の堆積状況については、全体的に厚さ約1m前後の表土及び天明泥流堆積物に被覆されていた。ただし、段丘崖へ向かって天明泥流の堆積厚が漸次薄くなる傾向が認められる。それとともに、7号屋敷跡については、現況住宅造成のための削平の影響も考えられ、堆積厚は50~70cm程度である。8号屋敷跡は、平成18年に文化財保護課の試掘調査により、屋敷跡の存在が確認された。IV区8・9・10・11号屋敷跡や建物および畑・水路・道等が発掘される前は畑や水路として利用されていた。

3 基本土層

東宮遺跡は、吾妻川中位河岸段丘面上に立地し、最上位段丘面との境界を形成する段丘崖により、北側の遺跡範囲は区画されている。本遺跡は全域が天明泥流に被覆されており、その堆積の厚さは平均約1m(50cm~1.5m)である。

天明泥流は、比高差約50mに及ぶ段丘崖の中腹まで一時的に水位が達していると考えられ、漸次堆積厚は小さくなる傾向にはあるが、IV区32号畑において標高543.0m付近まで、泥流下の畑が確認されている。後世の耕作により、天明泥流下の畑の確認が出来なくなっていることを考えれば、他の場所においてもその付近まで泥流が達していると思われる。天明泥流の発生日時は、天明三年(1783年)7月8日(新暦8月5日)である。

天明泥流の直下には、浅間A軽石が約1cmの厚さで堆積している。浅間A軽石降下日時は、新暦7月27~29日と推測されている(関俊明2003)。本遺跡に堆積する浅間A軽石の降下日時を新暦7月27~29日頃とすると、泥流発生日時との間には1週間ほどの時間差が存在したことになる。本遺跡で確認された浅間A軽石堆積層は、純層

に限られることはなく、畑の耕作状況(培土=サクキリ等)や屋敷内(庭など)の清掃・除去状況等の理由により、二次的に堆積したと思われる堆積層も確認されている。

天明三年の遺構面の下層には、黒色土層(部分的に浅間粕川テフラ=As-Kk混入)、さらに、黄色ローム主体の礫層(土砂崩落層)等が堆積しているが、調査区内には湧水(伏流水)が広範囲に多数存在するため、深層までの明確な基本土層の確認には至らなかった。

以下、第2図として東宮遺跡における基本土層模式図を掲載しておく。

参考文献
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『長野原一本松遺跡(1)』第287集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』第303集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』第319集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005『川原湯勝沼遺跡(2)』第356集
 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』第401集

I	I層：暗褐色土(10YR3/3)。現在の耕作土及び表土。
II	II層：暗褐色土(10YR3/4)。天明三年(1783年)浅間山噴火に伴う泥流堆積物(天明泥流)。径5～10cm礫15～30%混入する。
III	III層：浅間A軽石(As-A:1783年)。発泡のよい白色軽石。径2～4mm大の軽石が主体。少量ではあるが、径10mm大の同質の軽石を含む。
IV	IV層：黒褐色土(10YR2/2)。粒子細かく、締まり・粘性ともに弱い。部分的に、浅間粕川テフラ(As-Kk:1128年)がブロック状に混入する。
V	V層：黒褐色土(10YR3/2)。粒子細かく、締まり・粘性とも、IV層より強い。白色或いは黄色軽石粒3～5%混入する。
VI	VI層：黄褐色土(10YR5/6)。段丘崖方向からの土砂崩落に伴うと考えられるロームの二次堆積層。径20～30cmの角礫20～30%混入する。

第2図 東宮遺跡基本土層

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

長野原町は群馬県北西部、吾妻郡の南西隅に位置する。町域の北部を吾妻川が東流し、川を挟んで北西には草津白根山、南西には浅間山が位置する。また東部には、吾妻川より北側に高間山(1342m)や王城山(1123m)、南側に丸岩(1124m)や菅峰(1474m)、浅間隠山(1757m)、鼻曲山などが南北に連なる。長野原町は、その地形の特徴から、高間及び白根の両山系と菅峰に挟まれた吾妻川流域地帯の北部と浅間高原地帯の南部とに大別される。

吾妻川は、長野県境の鳥居峠(1362m)付近に水源を發して東流し、町域のほぼ中央では川幅をやや広くするものの、東端では第3紀層を刻んで吾妻溪谷を形成している。その支流は、兩岸の山地から發する河川や溪流が多く、左岸には草津白根山麓から發する万座川や赤川、遅沢川、上信越国境の白砂山麓から發する白砂川などが南流する。また右岸には、浅間山麓から發する小宿川や、鼻曲山麓から發する熊川などが北流する。流長76.2kmの吾妻川は、渋川市街地付近で、全長322kmの利根川に合流する。

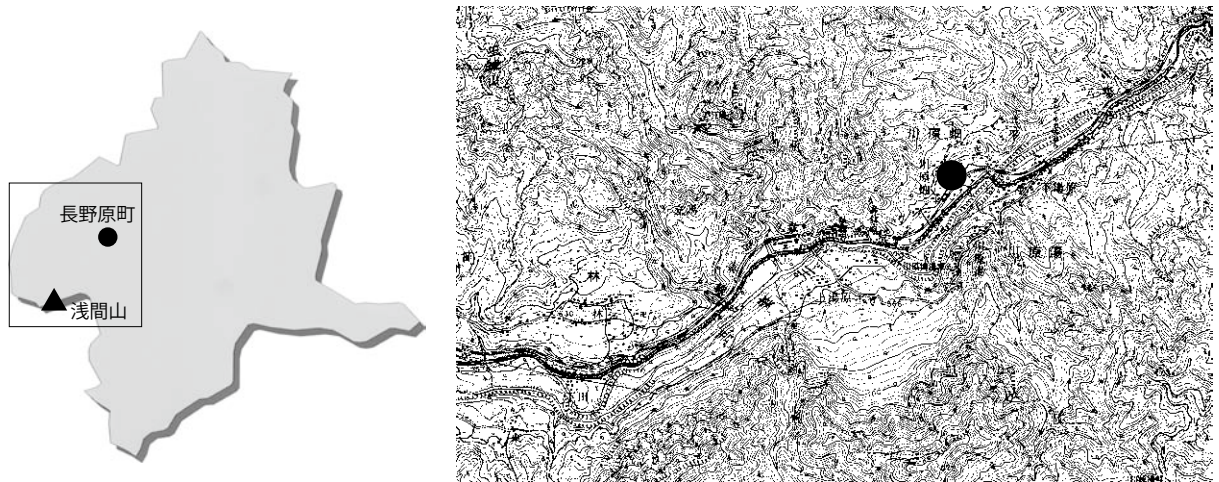
長野原町は、地質構造上では那須火山帯と富士火山帯が接する付近にあるため、周囲の山地は火山活動により形成された火山性山地が多く、浅間山や白根山は現在も活動を続ける。高間山や王城山、菅峰も約100～90万年前頃活動していた火山であるが、現在は浸食が進みほとんど原形を止めていない。菅峰火山から流出した溶岩が断層によって独立したものが「丸岩」である。丸岩は南側を除いた三方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、吾妻川方面から望むと巨大な円柱状に見える特徴的な岩峰である。それは、長野原・横壁・林・川原湯・川原畑のハツ場ダム関連の5地区どこからでも望むことができるランドマークとなっている。

吾妻川兩岸には、吾妻川からの比高差を基準に、最上位・上位・中位・下位の4段階の河岸段丘面が形成されている。現在の吾妻川からの平均的な比高差は、最上位段丘で約80～90m、上位段丘で約60～65m、中位段丘で

約30～50m、下位段丘で約10～15mを測る。

長野原町の地質形成に大きな影響を与えた火山が浅間山である。町域の南西部、長野県境に位置し、古い方から黒斑山・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2568mの成層火山である。約2.1万年前の黒斑火山の噴火では、山体崩壊によって「応桑泥流」が発生した。この泥流堆積物は、当時の河床を数十mの厚さで埋めており、その後の浸食によって吾妻川兩岸に最上位と上位の河岸段丘面が形成されたといわれる。浅間山はその後も多くの火山噴出物を堆積させているが、特に町域では浅間草津黄色軽石(As-Ypk：1.3～1.4万年前)の堆積が顕著である。また、浅間Bテフラ(As-B：1108年)や浅間粕川テフラ(As-Kk：1128年)も平安時代の黒色土中に数cmの厚さで確認できる。さらに天明三年(1783年)の噴火により発生した泥流は、下位段丘面や中位段丘面を平均約1mの厚さで覆っている。

東宮遺跡は、標高約530～540mの吾妻川左岸中位河岸段丘面上の大字川原畑字東宮に所在し、高間山の南東麓に位置する。高間山頂から吾妻川左岸に露出する川原湯岩脈(国指定天然記念物)の方向へは、南に延びる細長い尾根が張り出しており、尾根の東、川原畑地区内を流れる戸倉沢(とくらざわ)・ミョウガ沢・境沢(さかいさわ)・松葉沢(まつばざわ)・ハツ場沢(やんばざわ)・穴山沢(あなやまざわ)、その支流の鈴沢(すずざわ)と温井沢(ぬくいざわ)等の溪流は、すべて高間山及びこの尾根に源を發している。従って、川原畑地区内の溪流は、源流付近では東流し、中・下流から吾妻川へ流れ込む付近にかけて、次第に南流する傾向がある。本遺跡は、西側の境沢、東側の松葉沢に区画された中位河岸段丘上の平坦地に主として立地している。



第3図 遺跡位置図(国土地理院1/200000地形図「長野」平成18年11月1日発行・1/50000地形図「草津」平成11年1月1日発行を使用

第2節 歴史的環境

東宮遺跡では、大部分が江戸時代天明三年泥流下の遺構である。そこで旧石器時代から近世までの遺構や遺物について概略を説明し、江戸時代を中心とした周辺の遺跡について説明する。

旧石器時代

長野原町においては旧石器時代の遺物は現在のところ出土していない。

縄文時代

吾妻川およびその支流沿岸の段丘面、特に中・上・最上流河岸段丘、丘陵部に遺跡が多く分布し、集落が展開する。草創期後半の撚糸文土器や早期の押型文土器などが楡木Ⅱ遺跡^{文(1)}・立馬Ⅱ遺跡^{文(2)}等で出土している。前期の遺構数は少なく、上原Ⅰ遺跡^{文(3)}で住居が確認されている。中期になると遺跡数・遺構量とも大幅に増加する。大きな遺跡として林中原Ⅱ遺跡^{文(4)}長野原一本松遺跡^{文(5)}、上ノ平Ⅰ遺跡^{文(6)}、横壁中村遺跡^{文(7)}、がある。後期になると集落はやや減少する。代表的な遺跡として長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、林中原Ⅱ遺跡がある。晩期になるとさらに遺跡数は減少する。川原湯勝沼遺跡^{文(8)}では、氷Ⅱ式土器による再葬墓と思われる土坑が検出されている。

弥生時代

長野原町では、この時期の遺跡は非常に少ない。尾坂遺跡^{文(9)}では、前期の再葬墓や土坑、立馬Ⅰ遺跡^{文(10)}は中期の住居と甕棺墓が調査されている。

古墳時代

長野原町に古墳は確認されていない。調査された住居も極めて少ない。上原Ⅰ遺跡^{文(3)}では前期と考えられる住居が検出されている。5～6世紀後半の住居は下原遺跡^{文(11)}・上原Ⅳ遺跡^{文(3)}で調査されている。

奈良・平安時代

奈良時代の集落は現在まで確認されていない。平安時代9世紀中頃になると長野原町の多くの地域で大きな集落が造られるようになる。上ノ平Ⅰ遺跡^{文(6)}では皇朝十二銭中の「貞観永宝」や多くの灰釉陶器等が出土している。多くの遺跡で県内外との交流を伺うことが出来る。遺跡の時期は9～10世紀を中心としている。大きな遺跡

として横壁中村遺跡^{文(7)}、楡木Ⅱ遺跡^{文(12)}がある。

中世

長野原町では、1500年代後半を中心に真田氏が吾妻地域に進出してくる。その頃の城として、羽根尾城・長野原城・林城・丸岩城・柳沢城等がある。長野原城を中心とした「長野原合戦」(永禄五年・1563)を経て、同じ年に東吾妻町岩櫃城が真田氏の支配下に置かれるようになる。

近世

東宮遺跡では、近世の集落が中心であるので、長野原町や東吾妻町で発掘調査された遺跡について、以下概要を記す。

これまで発掘調査されてきた、江戸時代天明三年泥流下から発掘された遺跡について、地図と一覧表を用いて説明する。天明泥流で埋まった遺跡は、吾妻川流域の兩岸の低い段丘面である。大部分の遺跡から畑が確認されており、吾妻川流域で多くの畑が造られていたことが分かる。集落は東宮遺跡で11軒の屋敷跡をはじめ、小林家住宅や尾坂遺跡・町遺跡・下田遺跡・西宮遺跡・横壁中村遺跡・石河原遺跡・上郷岡原遺跡等で母屋を伴うと思われる建物が確認されている。それらの集落には、道・井戸・水路・石垣等が確認されている遺跡もあり、天明三年段階での集落の様子が次第に明らかになってきている。

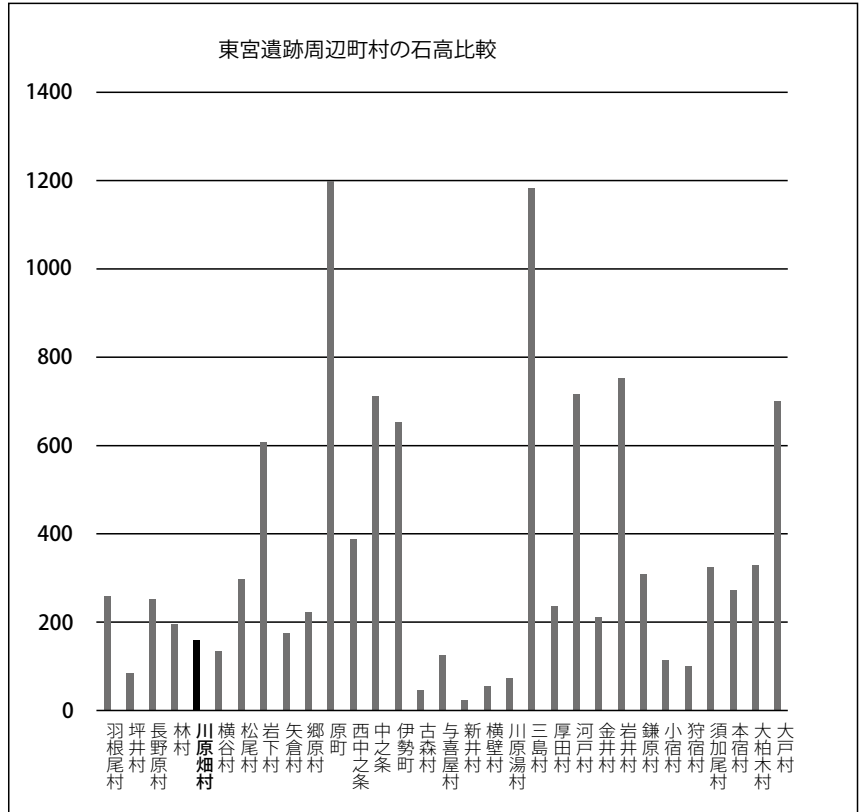
東宮遺跡のある長野原町大字川原畑村は、江戸時代の川原畑村の一部である。東宮名所等と呼ばれている地区と思われる。1号屋敷跡は県内の天明泥流下から確認された屋敷の中では最大であり、馬は少なくとも3疋はいたようである。多くの陶磁器等の出土から、この村は豊かな村と思われる。そこで県内の村の石高と比較してみる。県内全体の平均石高は天明段階以前元禄15年(1702)の段階で404石、天保5年(1834)の段階で524石であった。元禄16年(1703)段階での川原畑村の石高は159.913石となっている。(第2表参照)県内の平均石高と比較すると半分以下の村であることがわかる。東宮遺跡のある川原畑村は近接する林村や長野原町より石高が少なく、対岸の横壁村や川原湯村より高くなっている。

注：文は参考文献(P16)

第2表 川原畑村周辺における元禄16年(1703)の石高一覧

区域	町村名	石高
吾妻川左岸	羽根尾村	258.278
	坪井村	84.315
	長野原町	252.479
	林村	195.415
	川原畑村	159.913
	横谷村	134.357
	松尾村	296.733
	岩下村	607.95
	矢倉村	175.513
	郷原村	223.082
	原町	1198.732
	西中之条	387.862
	中之条	711.508
	伊勢町	652.227
吾妻川右岸	古森村	46.304
	与喜屋村	126.321
	新井村	24.049
	横壁村	55.272
	川原湯村	73.705
	三島村	1181.89
	厚田村	235.466
	河戸村	717.732
	金井村	210.377
	岩井村	752.884
	信州街道	鎌原村
小宿村		113.294
狩宿村		99.919
須加尾村		325.782
本宿村		271.243
大柏木村		327.401
大戸村		699.55

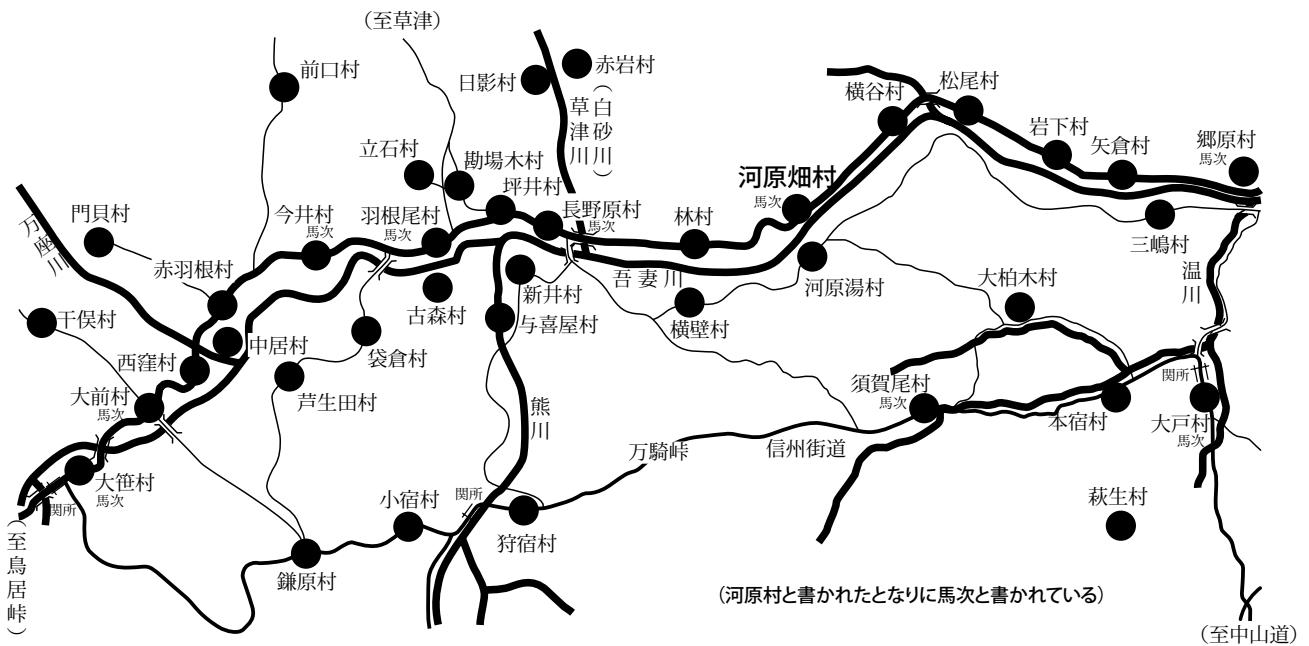
上記村平均石高 352 石



『群馬県史』資料編11付録郷村変遷の元禄16年の資料により作成

県内平均石高 404石

(上野国絵図(元禄十五年)目録部分 群馬県立文書館所蔵文書P8710より計算)



第4図 吾妻郡河原畑村(川原畑)周辺の道と村(天保国絵図「上野国」より作成、『町遺跡』第593集・第76図修正引用)

1 川原畑村の概要・変遷

長野原町大字川原畑は、群馬県北西部の高間山南東麓に位置し、その大部分は山林である。集落は吾妻川左岸の河岸段丘面上(中位及び最上位河岸段丘)に存在し、中位段丘面上の集落部を川原畑村下村、最上位段丘面上の集落部を上村と一般に称する。

「河原畑村」の地名は、天正十二年(1584年)と推定される十二月二十五日付の真田昌幸朱印状に見える(『群馬県史・資料編7・中世3』1986所収「渡文書」)。その後、天正十八年(1590年)より真田氏の領地となり、天和元年(1681年)真田氏改易後、幕府領となった。江戸時代における川原畑村の石高の推移は「第3表 川原畑村石高表」の通りである。

第3表 川原畑石高表

年号	石高
万治二年(1659)	75石9斗1升6合
寛文三年(1663)	341石7斗2升1合
貞享二年(1685)	159石9斗1升3合
元禄十五年(1702)	159石9斗1升3合5

なお、寛文三年(1663年)の石高については、当時の沼田藩5代藩主真田伊賀守信利が、真田松代本家の10万石に対抗するため、表石3万石に対して14万4000石を強引に打ち出し幕府に報告した検地(古検)によるもので、農民の難渋は並大抵のものではなかったとされている。

ここで、寛文検地帳に見える川原畑村の記述を挙げておく。

(表書)

寛文三年
川原畑村 御検地帳
卯ノ九月廿三日

田畑 合三拾六町五反三畝拾五歩
内
上田 七反五畝貳拾歩
白米拾壹石三斗五升

中田 九畝拾四歩
白米壹石貳斗三升壹合
下田 三畝七歩
白米三斗五升六合
下々田 貳畝貳拾六歩
白米貳斗五升八合
上畠 拾貳町六反三畝貳拾七歩
白米百五拾壹石六斗六升八合
中畠 五町五反八畝貳拾九歩
白米五拾五石八斗九升七合
下畠 五町五反九畝八歩
白米四拾四石七斗四升壹合
屋敷 九反六歩
白米拾石八斗貳升四合
高合 三百四拾壹石七斗貳升壹合
内 拾三石壹斗九升五合 田方
三百貳拾八石五斗貳升六合 畠方
右の外落地
中畠 壹畝七歩 貳筆
寛文三年
卯九月廿三日 検地役人 小幡四郎兵衛
外三人

一方、貞享二年(1685年)の石高については、前橋藩主酒井忠挙の家老高須隼人が、天和元年(1681年)真田信利の領地没収後、再検地(新検)を実施したことによるもので、寛文検地(古検)と比較すると、石高はおおよそ半減されている。村々では、以前の真田信利の苛政が厳しかったため、これを「貞享の御助け縄」と呼んだという。

明治時代に入ると、明治5年(1872年)の大小区制期には第20大区第10小区に属し、明治11年(1878年)の郡区町村制に移行すると、林村、横壁村、川原畑村、川原湯村が組み合わされて林村に戸長役場が置かれた。その後、明治17年(1884年)には、戸長配置区域の改正があり、川原畑村外3カ村戸長役場として、川原畑村に連合戸長役場が置かれることとなった。さらに、明治22年(1889年)の市町村制の施行により、10カ村が合併して長野原町になると、旧来の町村は大字となり、長野原町大字川原畑村と称したが、大正6年(1917年)からは村の呼称がとれ、長野原町大字川原畑となった。

人口・戸数(世帯数)について、明治時代の大字別の明細が分かるものとしては、明治11年と明治22年の二つの記録しかない。それ以後は、5年毎の国勢調査の結果をもとにして、集約すると「第4表 川原畑人口推移表」の通りである。

第4表 川原畑人口推移表

年号	世帯数	人口	備考
明治11年(1878)	37	172	
明治22年(1889)	35	206	長野原町成立
昭和19年(1944)	64	287	うち疎開戸数4
昭和26年(1951)	75	359	
昭和30年(1955)	69	315	
昭和35年(1960)	66	296	
昭和45年(1970)	75	316	
昭和50年(1975)	78	299	
昭和55年(1980)	79	290	
昭和60年(1985)	80	261	
平成2年(1990)	82	242	
平成7年(1995)	83	239	
平成12年(2000)	80	211	
平成17年(2005)	30	83	

2 川原畑村と交通

鎌倉時代の建久四年(1193年)、源頼朝三原野狩の往路は、碓氷峠を越え、軽井沢、中軽井沢を経て六里ヶ原を通り、帰路は、狩宿村から万騎峠を越え、関屋(本宿村)に向かったと伝承されている。

また戦国時代になり、永禄六年(1563年)、長野原合戦の際の、岩櫃軍の長野原城への侵攻路をみても、天険を越え大城山(王城山)へ駆け上った道や暮坂峠を越え湯窪(湯久保)へ、または火打花を経て長野原へと入る道があったとされている。

さらに、この時代からは、霊湯草津温泉への浴客の往来も始まり、江戸時代初期には川原湯温泉に浴するものも数多くなったことから、長野原町を通過する中山道裏街道は、相当の交通量があったものと想像できる。

川原畑村の旧道は、天保十四年(1843年)の絵図によれば、川原畑上村・下村を分ける段丘崖の中腹から麓に当たる部分を東西に走行し、東は旧三ッ堂の石段下を通っ

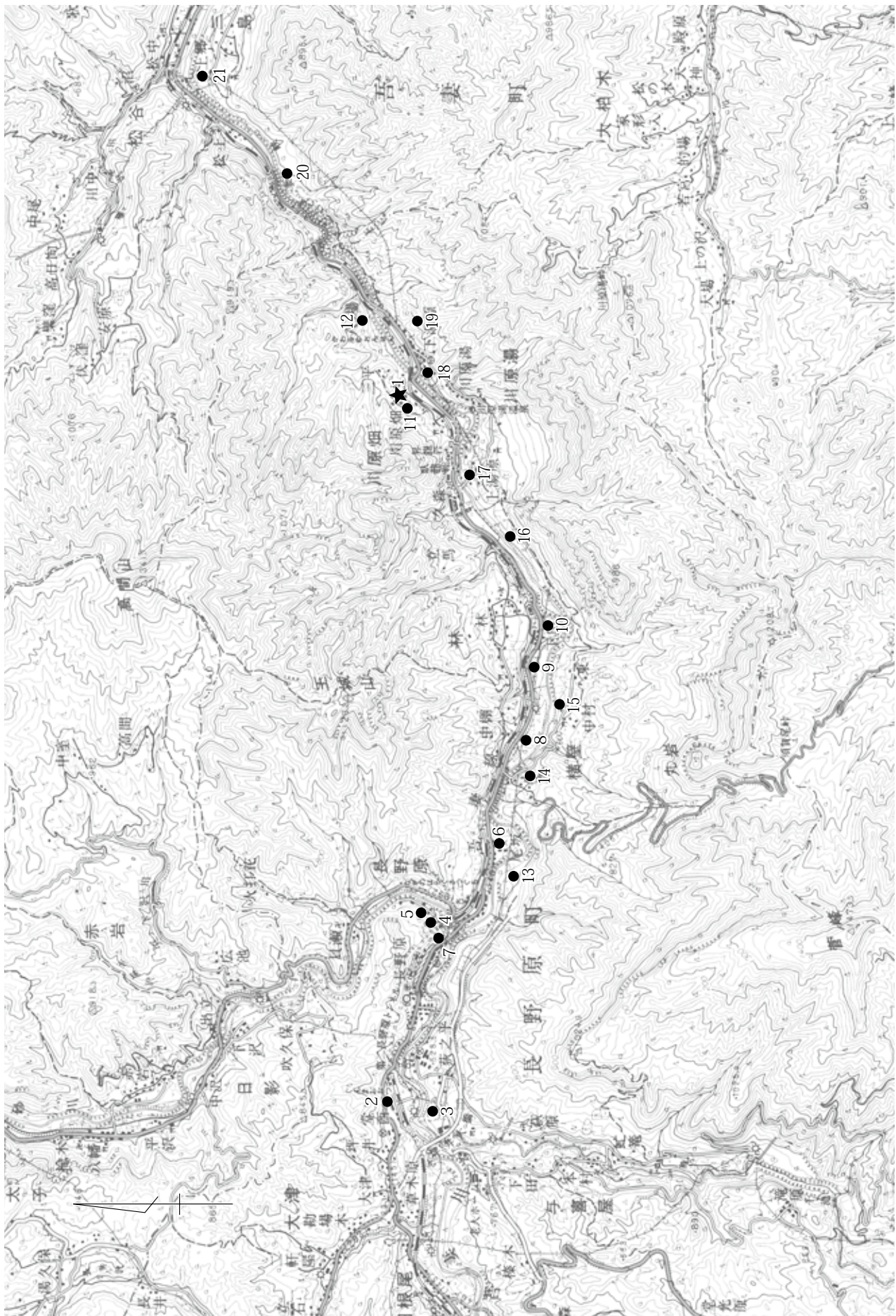
て吾妻溪谷(道陸神峠)へ、西は旧諏訪神社の石段下を通過して久森峠へと抜けている(『川原畑村絵図』282頁参照)。当時の川原畑村の集落はこの旧道に沿って東西に細長く形成され、その南側になだらかに広がる日当たりの良い河岸段丘平坦面は畑を中心とした耕作地として利用されていたことが推測できる。

東宮遺跡のある地域は『信州と国境を接し、しかも草津温泉が控えていたため、古くから人々の往来が盛んであった。とりわけ戦国時代末から江戸時代初頭にかけては、信州上田の真田氏が吾妻の岩櫃城を中継して沼田城を結ぶため、吾妻川北岸沿いの通称「真田道」を軍事輸送路として利用したとされ、慶長十二年(1607)の沼田城主真田信幸の傳馬規定によれば、平川戸(現、東吾妻町)と長野原(現長野原町)が傳馬宿に指定されている。元禄上野国絵図には、川原畑村も長野原町同様に馬継と書かれており、伝馬宿になっていた可能性がある。長野原町と川原畑村との荷継に関する取り決めが書かれている証文がある。元禄二年(1689)の「吾妻郡長野原町と川原畑村荷物馬継ぎ連判証文」である。(281頁に掲載)証文によれば、信州から酒などの商人荷物をこの真田道を利用して吾妻郡原町まで運送する際の長野原町と川原畑村との荷継に関する取り決めである。酒やかかり荷物など荷物の種類によって川原畑村と長野原町で分担することになったことが分かる。』(群馬県立文書館ホームページ演習群馬の古文書37引用一部加除筆)川原畑村は馬継としての役割も果たしていたことが分かる。

3 川原畑村に残る口伝、伝承

天明三年(1783年)7月8日(新暦8月5日)、浅間山の大噴火に伴い発生した泥流(天明泥流)は、吾妻川を流下し、沿岸の村々を呑み込みながら甚大な被害をもたらした。当時の川原畑村(現吾妻郡長野原町大字川原畑)は、地形上、上村と下村の別があったが、天明泥流の流下により下村のほとんどが壊滅した。当時の原町名主富沢久兵衛『浅間記』の記述によれば、村の被害は、「二十一軒流、四人死」とある。

同地に残された口伝や伝承の中には、天明泥流に関わるものもみられた。1号屋敷跡に関連すると思われる口伝や伝承をここで紹介する。



第5図 天明泥流下の遺跡分布図(国土地理院5万分の1地形図「草津」使用)

- 「この屋敷では酒造を行っていた。(天明泥流被災時に)大切な酒は馬五頭に付けて逃げた。」
- 「この屋敷のお婆さんは、一度は(天明泥流から)逃げたが、位牌を取りに家に戻った。しかし、何度か往復するうちに最後は流されて死んでしまった。『ゴスケよさらば』と言い残し・・・。」
- 「この屋敷は、(天明泥流被災後)同じ場所に規模は小さいながらも屋敷を復興した。その後、屋敷は別の場所へと移転したが、マシキアト、マシキタンボの呼び名は残った。」

- 「この屋敷の主は野口喜左衛門という。屋号はマ(カネ)口(クチ)。川を頭に付しマカワカネクチともいう。」

参考文献

群馬県史編さん委員会編 1986 『群馬県史』資料編7 中世3
 萩原 進 1963 「富豪加部安盛衰記」『あがつま史帖』西毛新聞社
 萩原 進 1986 「浅間山天明噴火史料集成」Ⅱ群馬県文化事業振興会
 長野原町誌編纂委員会編 1976 『長野原町誌』上巻
 上毛民俗学会編 1987 『長野原町の民俗』
 関 俊明 2006 「天明泥流はどう流下したか」『ぐんま史料研究』第24号
 群馬県立文書館
 篠原正洋 2008 「天明泥流に呑まれた屋敷の謎」『埋文群馬』47号(財)
 群馬県埋蔵文化財調査事業団

第5表 天明泥流下の周辺遺跡 元禄郷張から村名を推定

No.	遺跡名	所在地	旧村名	天明泥流下の遺構	文献
1	東宮遺跡	長野原町大字川原畑	川原畑	屋敷11棟・畑・溝・石垣・井戸等。多くの陶磁器や銭・大量の建築材や木製品出土。	14
2	小林家住宅	// 大字長野原	坪井村	吾妻の分限者小林助左衛門屋敷の一部を検出、土蔵跡1棟、礎石建物2棟、屋敷の背後の石垣、石製の搗臼、固定臼、石臼、鉄銅製品、陶磁器等出土	15
3	旧新井村跡	// 大字与喜屋	新井村	石臼(餅つき用)・粉碾用石臼・五輪塔、鉦、秤	16 17
4	長野原城	// 大字長野原	長野原町	畑2面	18
5	嶋木1遺跡	// 大字長野原	長野原町	畑	19
6	尾坂遺跡	// 大字長野原	長野原町	母屋+厩、小屋2軒、畑(約4万㎡)・道・石垣・溝等。鉦鼓・銭(寛永通宝)・陶磁器・木製品(土台・曲げ物等)	20 9
7	町遺跡	// 大字長野原	長野原町	母屋と思われる建物から大量の建築部材や、多くの下駄等の木製品出土、遺跡北側は畑。	21
8	中棚Ⅱ遺跡	// 大字林	林村	畑・道・石垣、畑内より里芋の石膏型を採取	22 23
9	下原遺跡	// 大字林	林村	畑・石垣・井戸・溝・道	22
10	下田遺跡	// 大字林	林村	母屋と思われる建物(土間・囲炉裏2基・竈)と畑掘建柱建物の上から礎石建物、他に2軒の建物	23 24
11	西宮遺跡	// 大字川原畑	川原畑村	畑・屋敷3棟・井戸・道、建物内に板間の痕跡が残る	24
12	石畑遺跡	// 大字川原畑	川原畑村	畑	25
13	久々戸遺跡	// 大字長野原	長野原町	畑・石垣・井戸・溝・道・慶長一分判金出土	22 23
14	西久保Ⅳ遺跡	// 大字横壁	横壁村	畑・道	26
15	横壁中村遺跡	// 大字横壁	横壁村	吾妻川寄りの極限られた部分から畑と石列	22
16	川原湯勝沼遺跡	// 大字川原湯	川原湯村	畑、花粉分析から蕎麦栽培を推定。	28
17	石川原遺跡	// 大字川原湯	川原湯村	お堂・寺院・道・用水・畑・寺院から出土した密教用具等、寺院は天台宗不動院と考えられる。	29
18	西の上遺跡	// 大字川原湯	川原湯村	道・畑(アワカヒエの植物痕跡残る。)	27 29
19	下湯原遺跡	// 大字川原湯	川原湯村	畑・道・お堂のある墓地・礎石建物1等	29 30
20	上郷西遺跡	東吾妻町三島	三島村	畑2面	31
21	上郷岡原遺跡	// 三島	三島村	畑・母屋建物2・掘立柱建物6・便槽6・道6・畑36・水田7・井戸1・建物壁2・墓1等。麻がまとまって出土している。	32

第2章 遺跡の環境

参考文献

- 1 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『榎木Ⅱ遺跡(2)』 第458集
- 2 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『立馬Ⅰ遺跡』 第388集
- 3 長野原町教育委員会 2015 『林地区遺跡群』「上原Ⅰ・Ⅳ遺跡Ⅱ」長野原町埋蔵文化財調査報告 第30集
- 4 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015 『林中原Ⅱ遺跡(1)』 第617集
- 5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 『長野原一本松遺跡(1)』 第278集
同 2007 『長野原一本松遺跡(2)』 第408集
同 2008 『長野原一本松遺跡(3)』 第433集
同 2008 『長野原一本松遺跡(4)』 第441集
同 2009 『長野原一本松遺跡(5)』 第461集
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013 『長野原一本松遺跡(6)』 第554集
同 2014 『長野原一本松遺跡(7)』 第578集
- 6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『上ノ平Ⅰ遺跡(1)』 第440集
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『遺跡は今(15)』
- 7 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 『横壁中村遺跡(2)』 第355集
同 2006 『横壁中村遺跡(3)』 第368集
同 2006 『横壁中村遺跡(4)』 第381集
同 2007 『横壁中村遺跡(5)』 第406集
同 2008 『横壁中村遺跡(6)』 第436集
同 2007 『横壁中村遺跡(7)』 第439集
同 2009 『横壁中村遺跡(8)』 第462集
同 2009 『横壁中村遺跡(9)』 第466集
同 2010 『横壁中村遺跡(11)』 第492集
同 2012 『横壁中村遺跡(12)』 第526集
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013 『横壁中村遺跡(13)』 第559集
同 2014 『横壁中村遺跡(14)』 第587集
- 8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『川原湯勝沼遺跡(2)』第356集
- 9 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2016 『尾坂遺跡(2)』 第618集
- 10 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『立馬Ⅰ遺跡』 第388集
- 11 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『下原遺跡Ⅱ』 第389集
- 12 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『榎木Ⅱ遺跡(1)』 第432集
- 13 群馬県 1980 『群馬県史』 資料編11 近世3 郷村変遷
- 14 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011 『東宮遺跡(1)』 第514集
同 2012 『東宮遺跡(2)』 第536集
- 15 長野原町教育委員会 2005 『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告 第12集
- 16 長野原町教育委員会 1990 『長野原町の遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告 第1集
- 17 あさを社 1982 『緑よみがえった鎌原』上州路文庫⑥
- 18 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2014 『長野原城 林中原Ⅰ遺跡』第586集
- 19 長野原町教育委員会 2005 「第2章1. 嶋木Ⅰ遺跡』『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告 第15集
- 20 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 「第10章 尾坂遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』第303集
- 21 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015 『町遺跡』第593集
- 22 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』第319集
- 23 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 「第7章 下田遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』第303集
- 24 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2015 『遺跡は今(23)』
- 25 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 「第2章 石畑遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』第303集
- 26 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『榎木Ⅰ・上原Ⅳ遺跡(2)・西久保Ⅳ遺跡』第549集
- 27 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004 『久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西の上遺跡・上郷A遺跡』第349集
- 28 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 「第4章 川原湯勝沼遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(1)』第303集
- 29 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2016 『遺跡は今(24)』
- 30 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2016 『埋文群馬(61)』
- 31 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『上郷西遺跡』第448集
- 32 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『上郷岡原遺跡(1)』第410集
同 2008 『上郷岡原遺跡(2)』第438集

第3章 発見された遺構と遺物



平成20年度に発掘調査した1号屋敷全景。写真左側(西側)の草で覆われた土手部分と町道部分を今回平成25年度で発掘調査した。(平成20年9月 南西方向から撮影)



平成20年度に発掘調査できなかった1号屋敷西側部分。シートで覆われた下は1号屋敷1号建物。発掘により1号屋敷水場が確認され、8号井戸(方形)9号井戸(円形)8号溝(井戸右側)、薪場と薪(薪は大部分撤去し道上に移動)左側の道は集落の幹線道路である6号道(西に長野原、東に原町に繋がっている。)6号道の西側に5・6号屋敷が造られていた。(平成26年11月 南東方向から撮影)

第1節 I区の調査概要と発見された遺構と遺物

I区では、平成19・20年度に調査した1・2号屋敷跡調査で調査できなかった西側の現道付近(町道1-11号線)の発掘調査を実施した。発掘の範囲は狭く発掘結果は、以下の通りである。

第6表 東宮遺跡I区遺構一覧表

帰属時期	遺構名
天明三年以前	8号建物、51区1号集石、2・7・8・9号溝、1号比熱岩、1号焼土、1・2・3・4号床下土坑
	1号屋敷西側水場北端下面
天明三年(泥流下)	1号屋敷跡(1・2・3・4号建物、2・4号石垣、4号溝、1号道、1号橋、8号溝、8・9号井戸、薪場、12号道)
	2号屋敷跡(5・6号建物、6・7号石垣、3号溝、8号道)
	3号石垣
天明泥流被災後	1号石垣、1号溜め池、1号井戸、1号溝

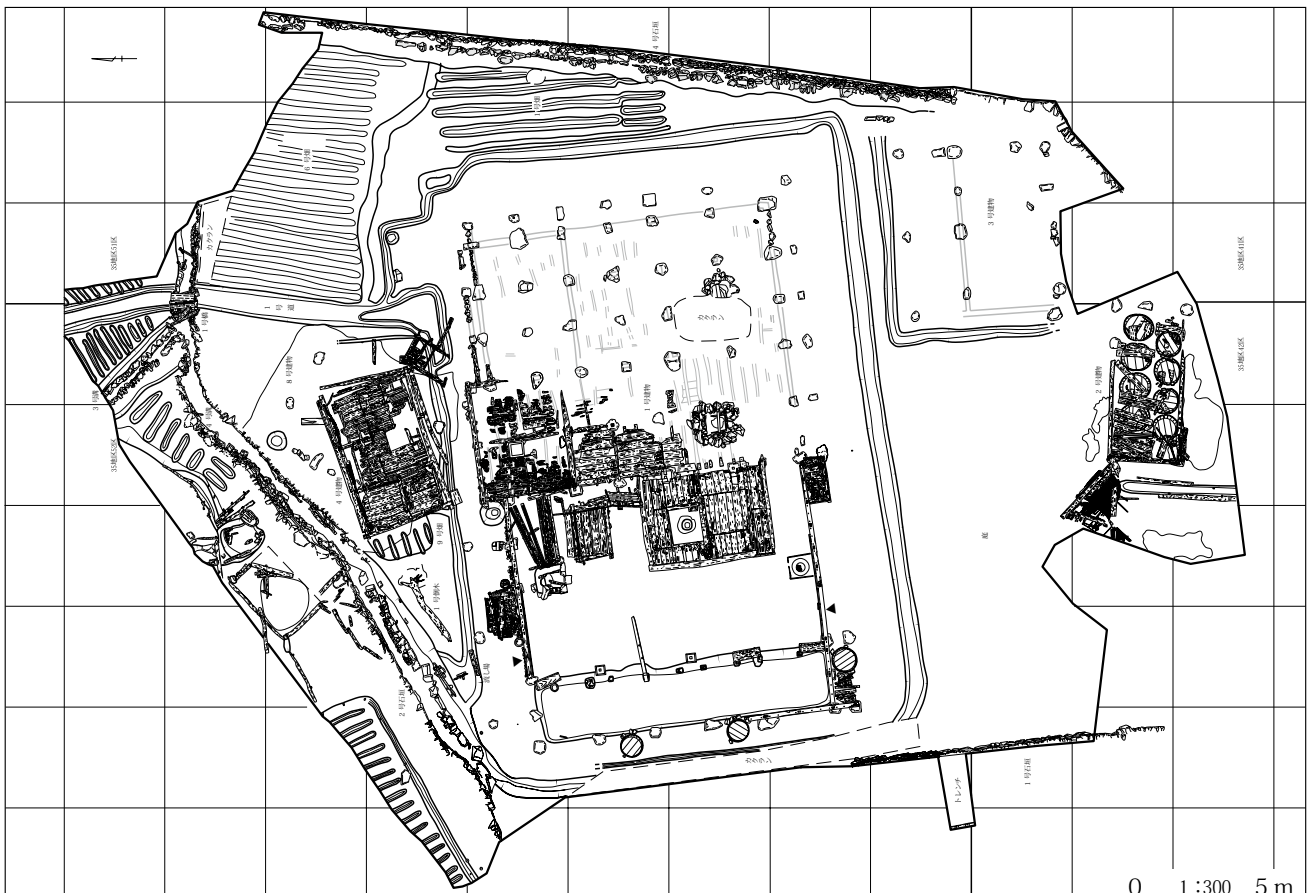
※ 建物に付属する遺構(囲炉裏、竈、馬屋、唐臼、便槽など)および畑は、上記遺構一覧から省略した。

※ 明朝体は、前回報告された遺構、ゴシック体は追加調査および今回新たに発掘調査された遺構。

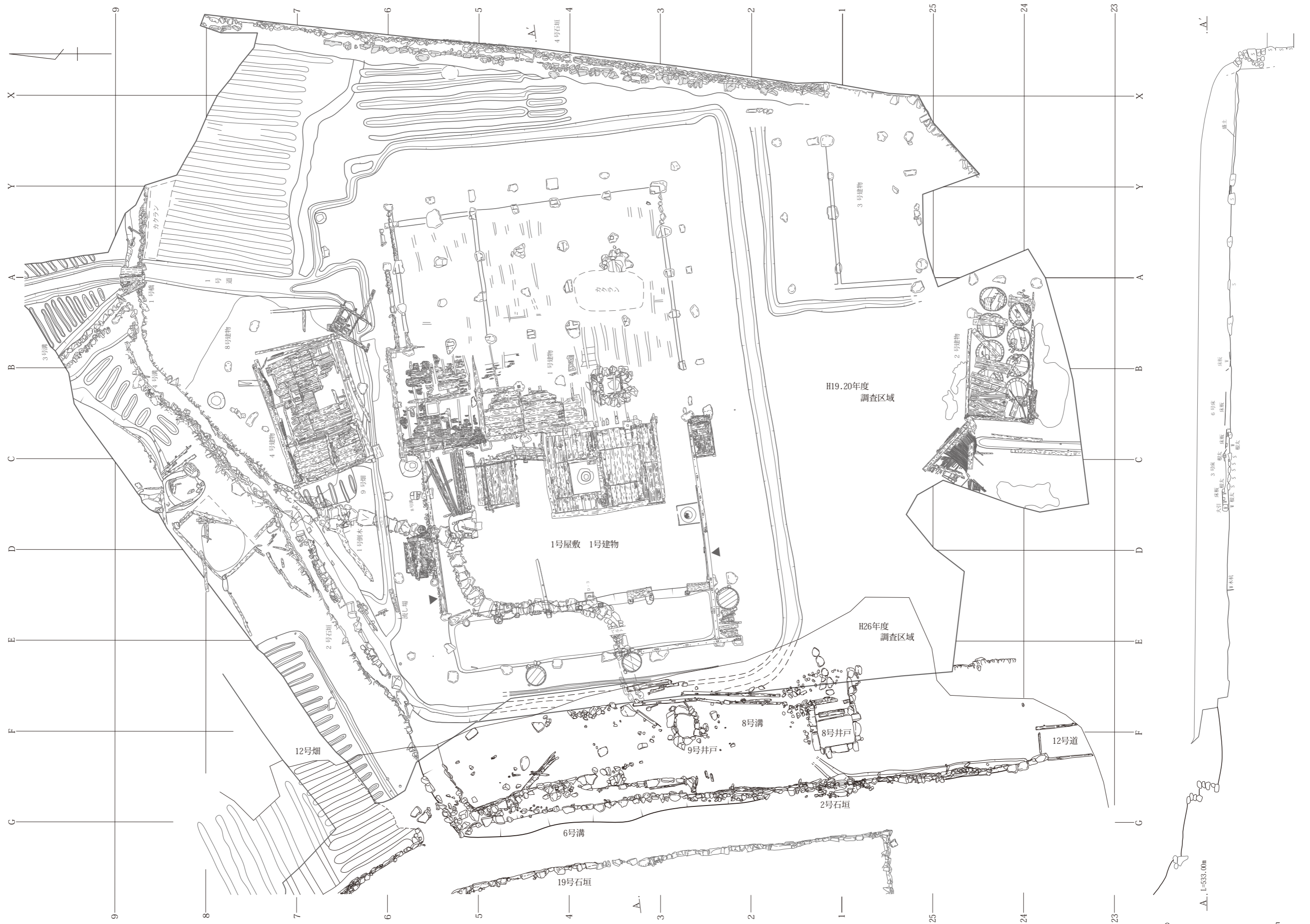
(1) 1号屋敷跡(第7図)

① 1号屋敷跡調査経過と調査概要

1号屋敷跡は、平成19年11月から冬季期間を除き平成20年11月まで調査を実施した江戸時代天明三年泥流下の屋敷跡である。その成果は、すでに『東宮遺跡(1)』(2011)『東宮遺跡(2)』(2012)として調査報告書が刊行されている。1号屋敷跡はこれまで東宮遺跡で発掘調査された11棟の屋敷跡の中で敷地面積が最も大きく、母屋の規模は最大である。今後の発掘調査でこれ以上の屋敷跡が発掘される可能性もあるが、おそらく江戸時代天明三年段階の川原畑村の中心となっていた屋敷跡と思われる。以前の発掘では、屋敷跡の大部分を発掘したが、屋敷跡の南側にある電柱部分と現道(町道1-5号線)を含む周辺、さらに西側の現道付近(町道1-11号線)が、発掘調査できなかった。南側は、現在でも道路として使われ、電柱の移動もできていない。西側の現道は使われていないので、その部分を発掘調査した。



第6図 前回報告I区1号屋敷跡

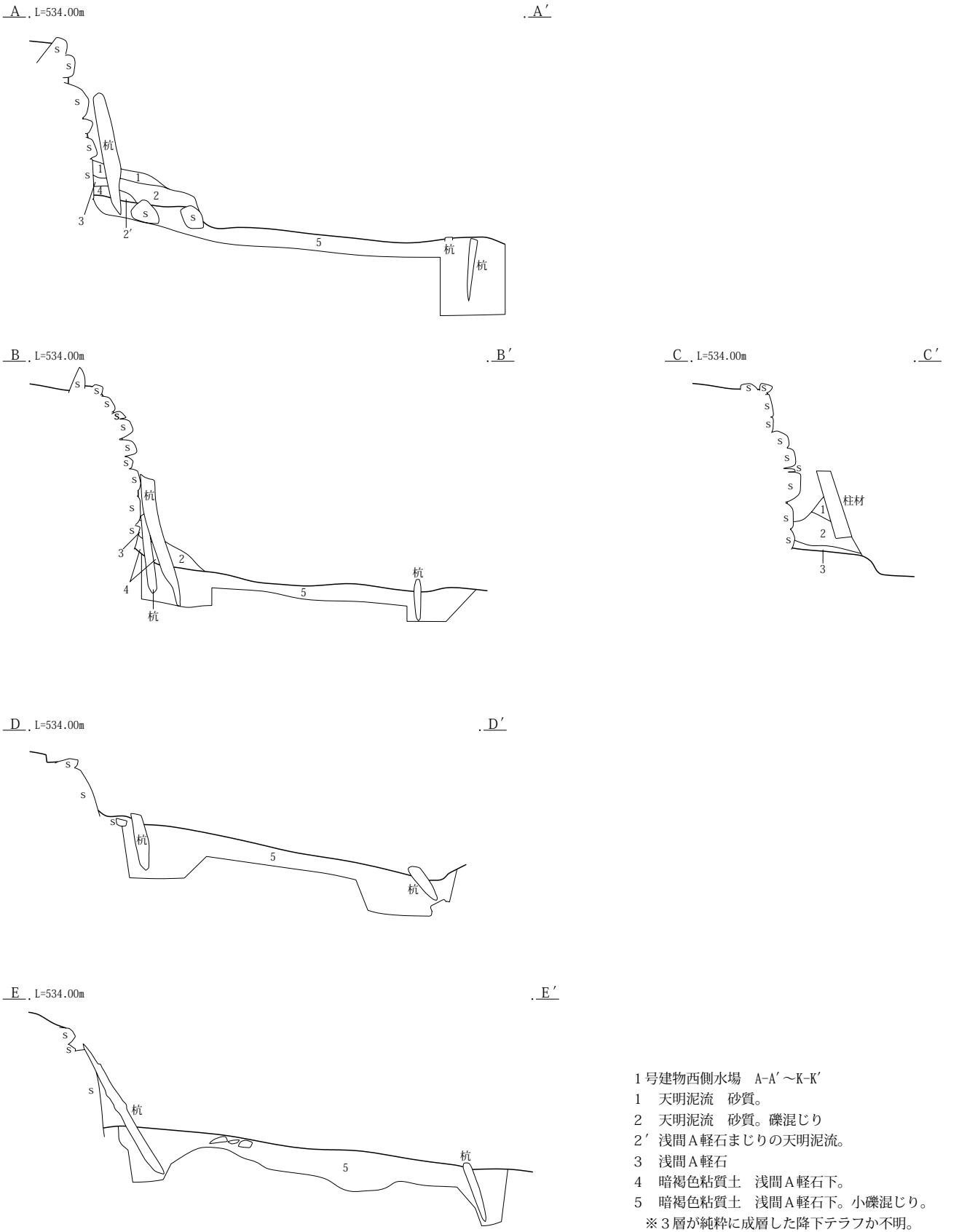


第7図 I区1号屋敷跡



第 8 図 I 区 1 号屋敷跡 西側水場・北端下面

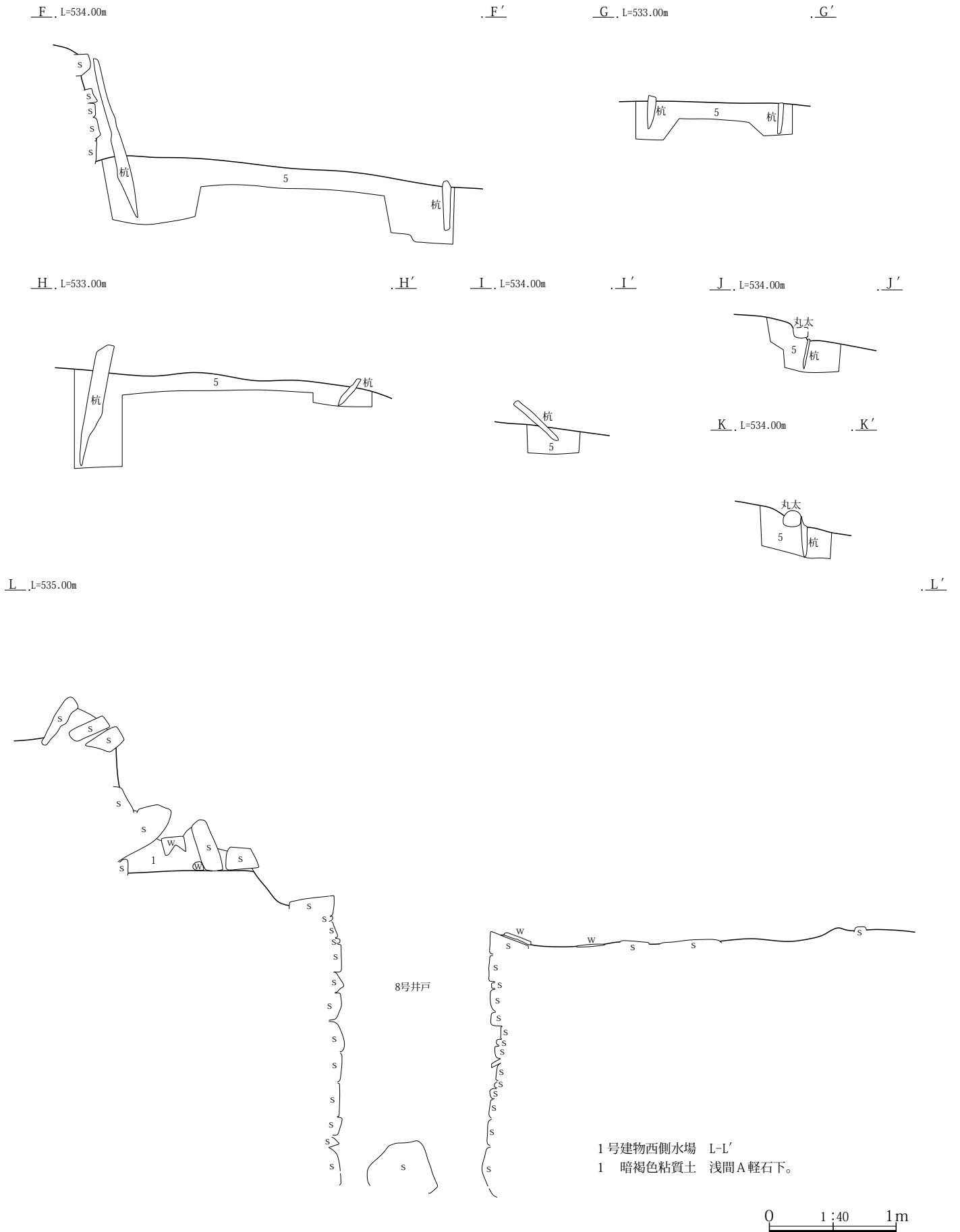
第1節 I区の調査概要と発見された遺構と遺物



0 1:40 1m

第9図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場断面(A~E)No.1

第3章 発見された遺構と遺物



第10図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場断面(F~L)No.2

以下の報告では、前回発掘調査し報告書で報告されている内容について基本的に重複して報告しない。新たに発掘調査した遺構や遺物を中心に報告し、継続調査や関連の深い遺構等について、必要に応じて報告する。

1号屋敷跡の西側は以前の調査では、1号石垣までの調査であった。1号石垣は、発掘当初天明三年段階で被災した石垣と考えていた。しかし、石垣の精査および石垣を断ち割りトレンチ調査の結果、天明以降に積まれた石垣であることが明らかとなっていた。1号石垣を撤去して西側の2号石垣まで調査を進めた。屋敷跡は6号道東側の2号石垣まで広がっていた。2号石垣の手前には井戸2基(8・9号)や8号溝があり、1号屋敷跡の水場となっていた。2基の井戸西側には2号石垣に接して薪場(南側・北側)があり、そこには約1000本の薪が積まれていた。その周辺からは多くの木製品が出土している。8号溝周辺から出土したホウキ、薪場から出土した箕、下駄、曲げ物等大量の木製品、北側には天明三年以前に埋もれていた多くの木製品等が出土した。

2号石垣西側は、集落の主要道路である6号道があり屋敷跡は、6号道より1.50m前後低い位置にある。道路に出るためには出入り口が必要であり、道との落差が少なくなっている南西部分に12号道が造られていた。

② 8号井戸(第10・11・148図、PL. 1～4・73)52区F-1グリッドに位置する。

【位置・確認状況】1号建物南西部分に位置する。2号石垣の下で、薪場の北に接している。調査段階でも井戸表面の石下20cmまで、水が溜まるほど水位が高い。井戸は泥流により完全に埋没していた。

【形状・規模・構造】東宮遺跡では屋敷跡に伴う井戸が7基調査されているが、いずれも円形であり、直径はほぼ90cmである。しかし、8号井戸は四角形であり規模は東西1.20m南北1.55mと大きい。深さは2.00mである。井戸の東西南北4壁面は、ほぼ垂直に石垣が積まれていた。積み方は、井戸の底から細長い幅50cm前後の自然石を横方向に積むことを基本とし、大きな石の間に小さな石を詰めている。天明泥流に埋もれている多くの石垣の積み方に共通する。井戸の上端は、加工された切石を2～3段積んでいる。切石は幅70～120cm、厚さは20cm前後である。井戸の水は、切石下部付近まで水が溜まる。井戸を使用している段階で表面に出て見える井戸の石垣

は、すべて切石である。井戸西側に2号石垣、北東側に1号建物があり、井戸の出入り口は東側になる。出入り口と思われる井戸の東側に、幅40～50cmの平石が1号屋敷跡に向かって5枚飛び石状に並べられている。井戸枠の石と飛び石の間約70cmの間には2枚の板が置かれていた。1枚は幅20cm長さ1.15m、もう一枚は幅22cm、長さ1.02mである。この板は、少し移動しているが、井戸枠と飛び石の間を埋めるために置かれていたのではないだろうか。その付近から水は8号溝と繋がっており、不要となった井戸水はこの8号溝によって排水されていたものと思われる。

【所見】井戸の上屋を確認するために注意して調査した、井戸の周辺に柱穴等を確認することは出来なかった。井戸の周りに井戸枠を回し、その上に上屋があったのだろうか。大きくて四角い8号井戸は、飛び石の方向から1号建物付近で使われていたことが考えられる。しかし1号建物は増築されており、井戸の手前にある飛び石が、増築前の建物に繋がっているのか、増築後の建物に繋がっているのか不明である。

③ 9号井戸(第11・14図、PL. 1・3・4)52区F-3グリッドに位置する。

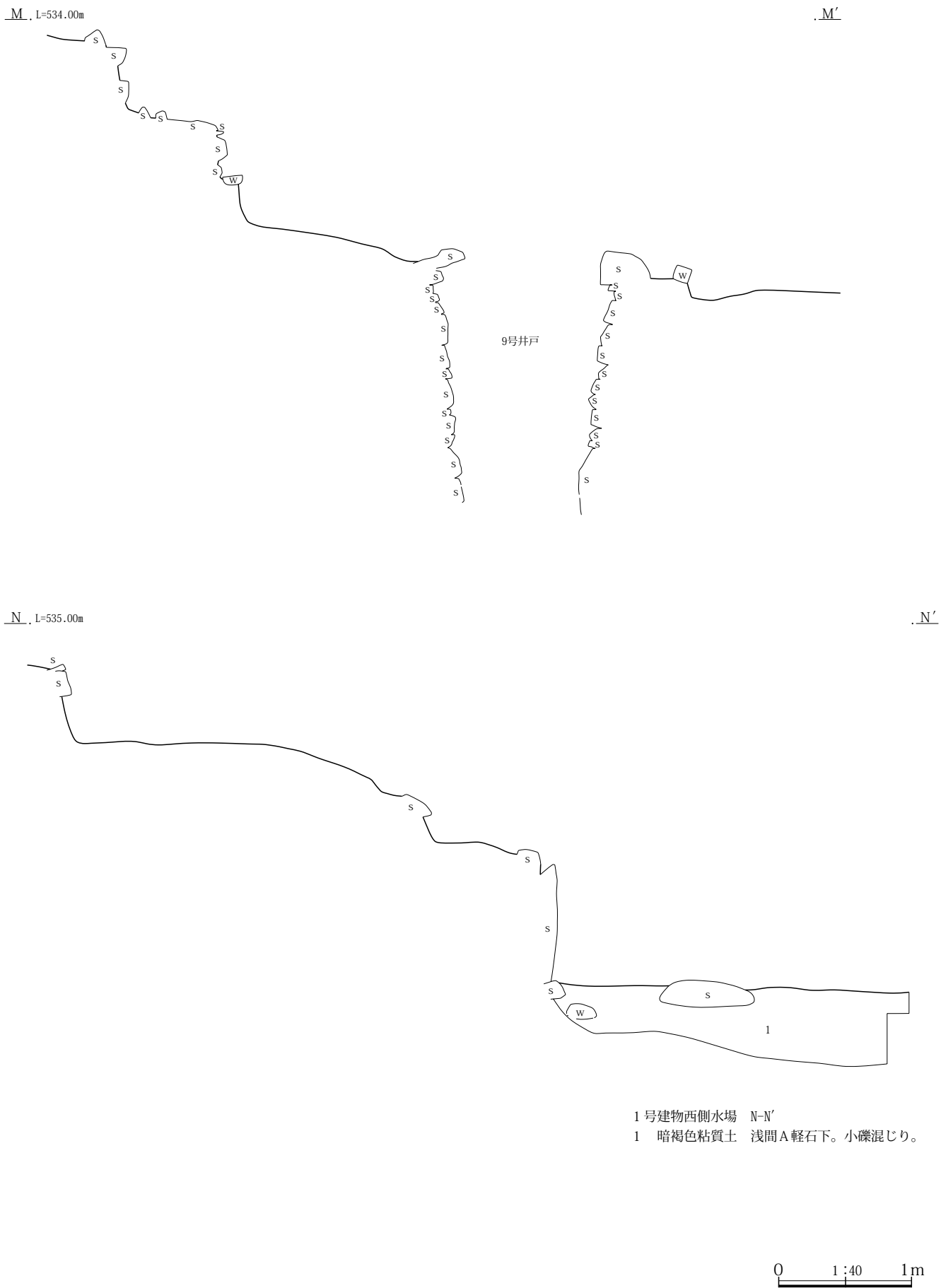
【位置・確認状況】9号井戸は、8号井戸の北5.00mの所にある。井戸は泥流により完全に埋没していた。

【形状・規模・構造】この井戸は円形で直径90cm前後である。他の屋敷跡に伴う井戸に共通する。規模は東西1.00m南北80cm深さ1.70mである。平面形が少し歪んでいる。東西方向の断面で見ると底部幅1.00m口縁部付近の幅1.20mで底部より口縁部付近が広がっている。井戸の石組みは、横幅15～30cmの石を多く使い、細長い石は横方向に積んでいる。井戸の西側に接して8号溝があり、不要となった井戸水は8号溝によって排水されていたものと思われる。

【所見】井戸の上屋を確認するために注意して調査したが、井戸の周辺に柱穴等を確認することは出来なかった。9号井戸はどの建物で使用されたのであろうか。

天明三年段階での1号建物の台所は建物北西部にあり、裏口を出ると湧水のある水場がある。前回の調査担当は、その部分を流し場と表現して図示した。9号井戸までは、建物の北東コーナー部分の湧水の多い場所を通り大きく回り込まなくてはならない。

第3章 発見された遺構と遺物



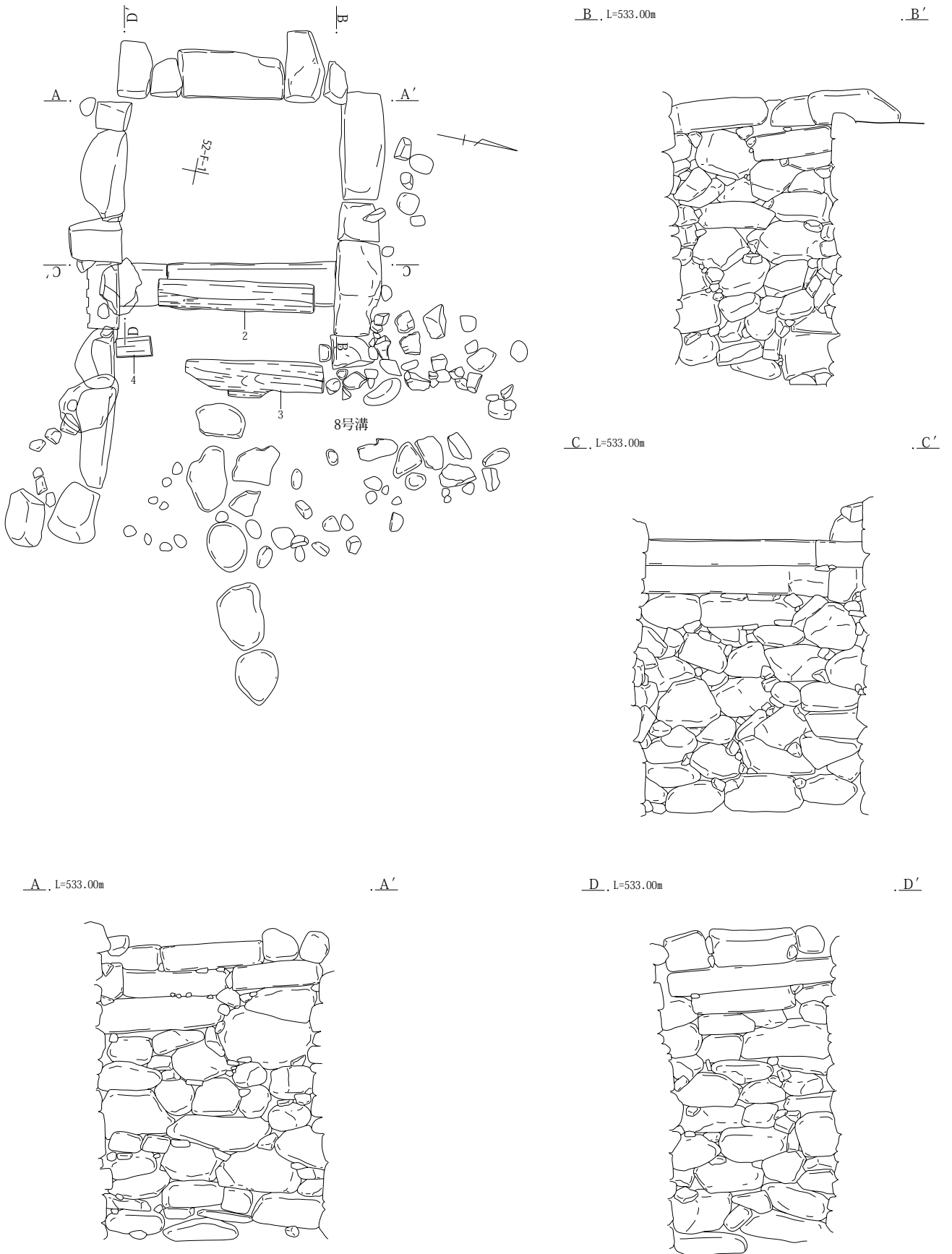
第11図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場断面(M・N)No.3

第1節 I区の調査概要と発見された遺構と遺物



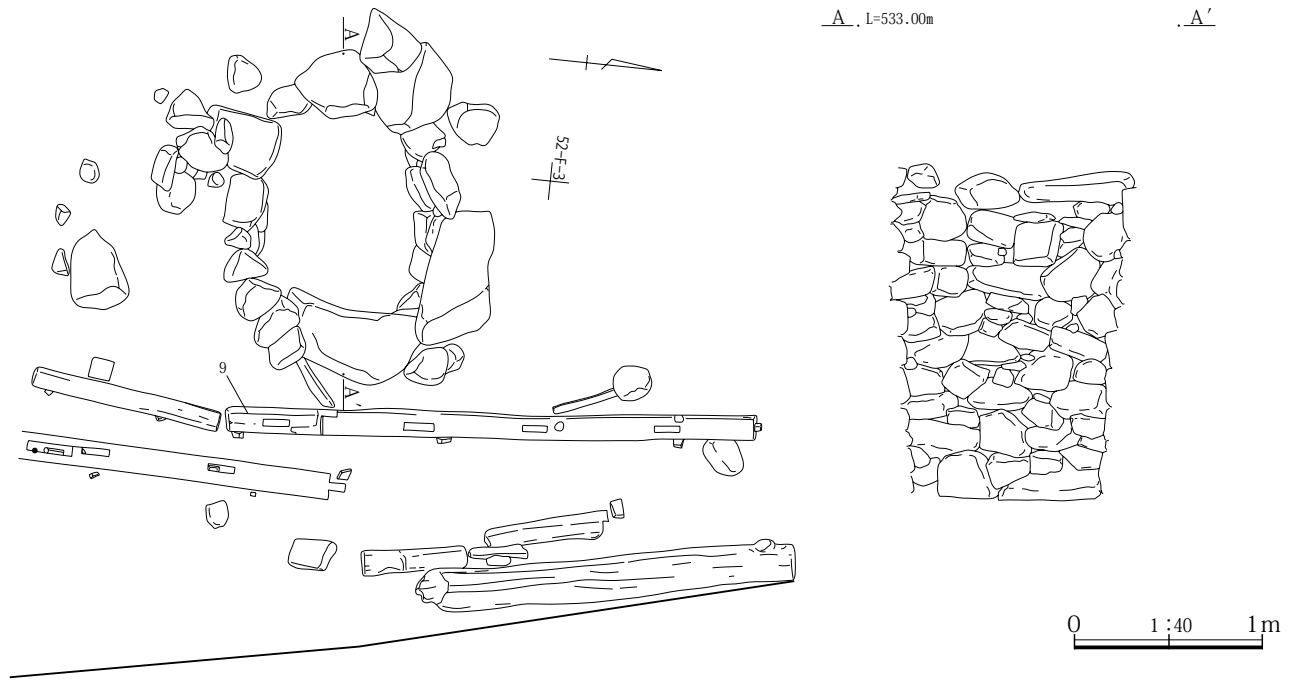
第12図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場断面(O~Q)No.4、下面断面(R・S)

8号井戸



第13図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場8号井戸平・立面

9号井戸



第14図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場9号井戸平・立面

1号建物にとって、9号井戸は必要であったのだろうか。井戸の西に接する11号建物に井戸は無い。6号道を降りて、9号井戸の水を使用していたことは考えられないだろうか。

④8号溝(第8・148～150図、PL. 3・4・73～75)52区E・F-2・3グリッドに位置する。

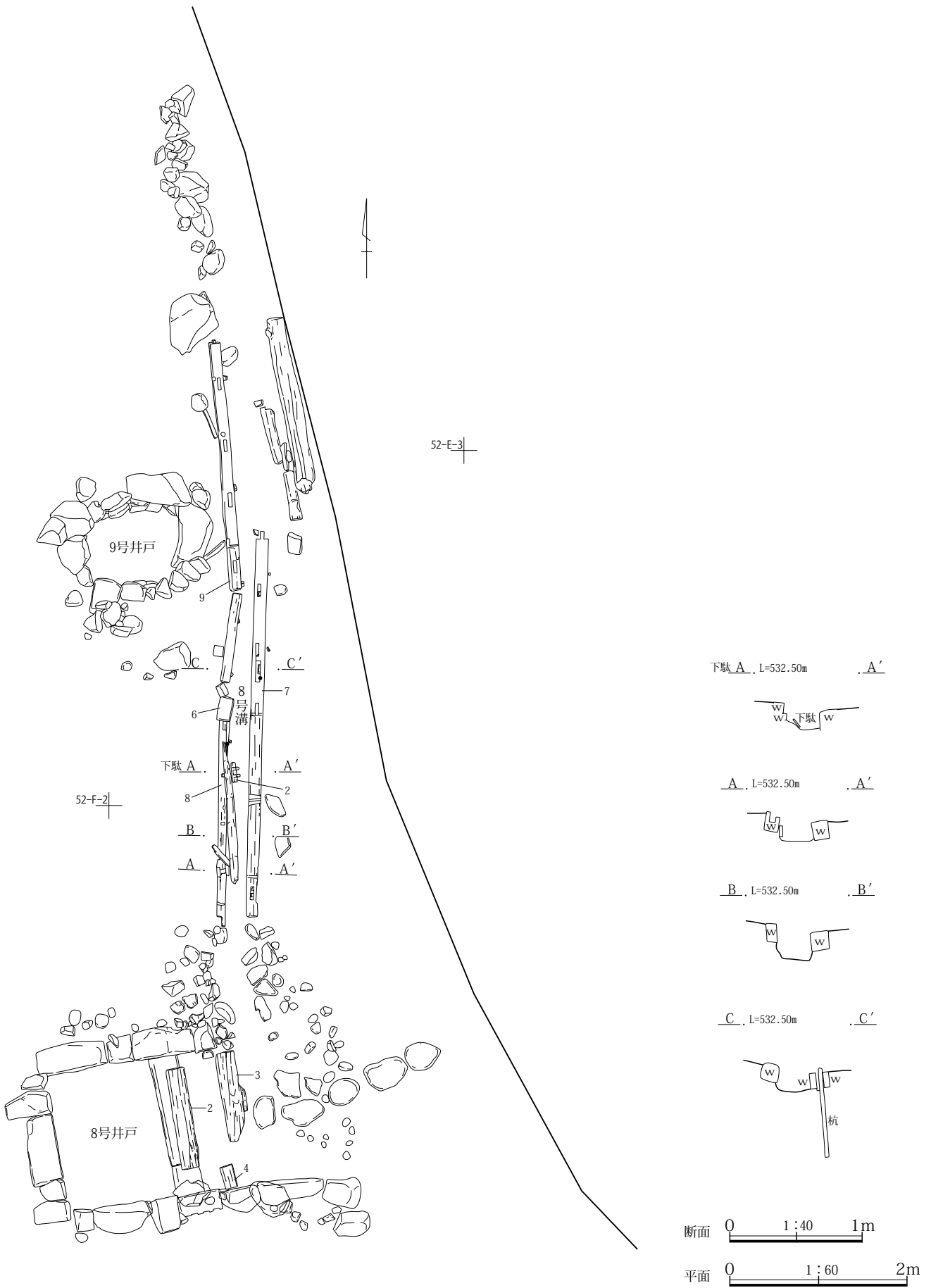
【位置・確認状況】8号溝は、平成20年度の発掘で番号が付けられている。場所は「1号建物西側外部から馬屋北部分を通り、さらに土間から建物北側外部を抜け4号溝と合流する。(中略)4号溝との合流部分は、4号溝の南壁が8号溝の流路出口部を完全に塞いだ状態で出土しており、総合的に新旧関係を判断し、天明三年段階では8号溝はその機能をほぼ失っていたものと考えた。」と報告書の中で説明している。今回の調査で、前回発掘調査できなかった8号溝の西側を発掘した。その結果8号井戸北から始まり9号井戸東を通り北に延びている溝を確認した。新たに発掘したこの溝は、前回確認した8号溝と重なる部分からさらに北側に延びている。そのため天明三年段階においては、前回調査した8号溝と別な溝で、屋敷跡の北側にある4号溝と合流するものと思われる。

しかし、以前確認した8号溝の西端は、今回調査した溝で止まっており、さらに西には延びていない。2つの溝は一連である可能性が高い。そこでこの溝は、天明よ

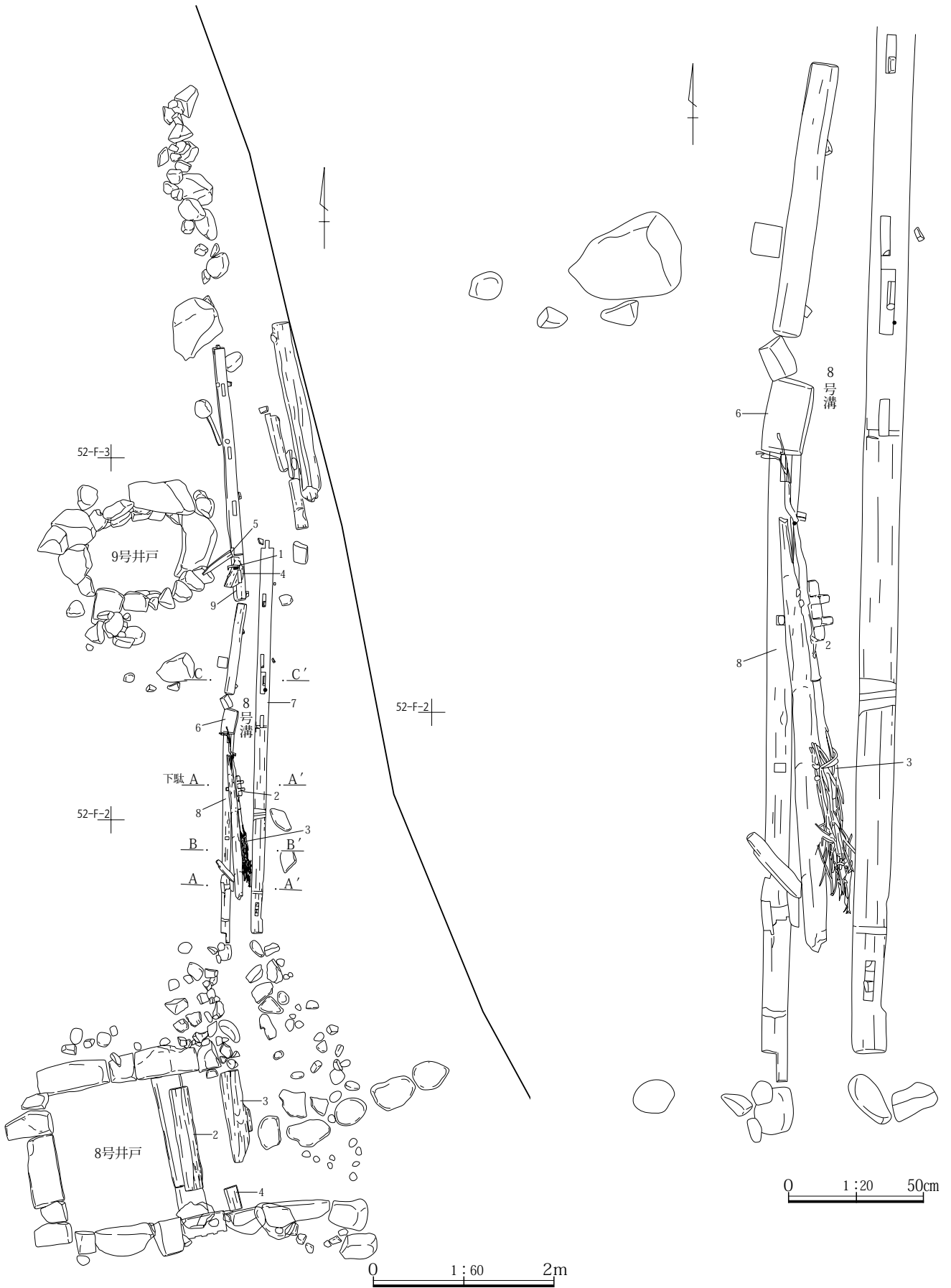
り古い段階で使われていた8号溝と同一の溝で、8号溝が廃棄され、1号建物が建てられた段階で、1号建物の西側を流れ、1号建物北にある4号溝と合流していた溝と考えた。そこで今回の発掘で確認された南北方向に造られた溝を8号溝の延長と考え8号溝とした。前回調査した8号溝は1号建物が改修された後、流路を変更して使われ続けた溝と考えた。水の流れに関して確認してみると、今回確認した8号溝と前回調査した8号溝の交差点付近の溝底部の標高は約531.90mで、前回調査した8号溝と4号溝が合流する付近の溝底部の標高は約531.3mであり、約60cm4号溝との合流付近で低くなっている。8・9号井戸から流れ出る水が8号溝を流れて4号溝に流れて行くことがわかる。

【形状・規模・構造】溝の長さは、南端を8号井戸から始まり、北は溝の石が確認できた範囲までとし、全長10.7mである。溝の中央では、両岸を建物の土台等で使用された15cm角の木材を埋め込んでいる。角材の置かれた部分で溝の幅を計測すると幅25cm、溝の深さは地面が高い西側で25cm低い東側で15cmであった。溝の南北部分に角材はなく、石で両岸を造っていた。以前発掘した8号溝と今回発掘した8号溝は、9号井戸北で角材を埋めて両岸を造っていた部分の北端で合流している。

【所見】8号溝は、8号井戸や9号井戸及び周辺の湧水を



第15図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場8号溝平・断面



第16図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場8号溝遺物出土状況

集めて流れる溝として天明三年段階以前から存在した。

4号溝とは元々1本の溝であったと思われる。1号建物の改築にともない8号建物北西部付近から9号井戸、北東付近までの範囲は、1号建物の土間や馬屋の下に埋められ、流路は1号建物の外周を回るように変更し、8号建物北西部付近で改築以前から流れていた4号溝に合流したと考えられる。

⑤薪場

集落内で燃料となる薪が積まれていた場所は、これまで確認されていなかった。1号屋敷跡南西部、屋敷跡に入るための12号道北側に、大量の薪が2列で高く積み重ねられた状態で出土した。また北に接し8号井戸の西側、2号石垣の手前に石垣に沿って一部であるが、多くの薪が積み重ねられていた。2カ所に薪を保管している場所があったようである。南側で大量な薪が残っていた薪場を薪場南側と称し、石垣に沿って少し残っていた北側の薪場を薪場北側と称する。

(ア)薪場南側(第17・151～155図、PL.4～6・76～80)

42区F-23、52区F-1グリッドに位置する。

【位置・確認状況】12号道北側、2号石垣東側、8号井戸南までの範囲にある。大量の薪が2号石垣に沿って2列、南北方向に整然と並べられた状態で確認された。薪場の西側の石垣に沿って、薪場の屋根を掛けるためと思われる細い柱が3本残っていた。それと対になる東側に3本の細い柱が残っていた。東西各3本の柱で屋根を支え、その屋根材を支えるために竹が使われていたものと思われる。竹の長さは4～4.50mであり、南北方向に4本以上確認されている。屋根に葺かれたであろう、屋根材は残っていなかった。

【規模・構造】薪場南側の範囲は、南北方向約7.00m、東西方向約2.00m、そこに長さ90cm前後の薪が南北方向に2列に積み重ねられていた。薪は7～8本ほど縦方向に重ねて積み重ねられ、厚さ40cm前後となっていた。薪を撤去すると薪を直接地面に置かないように、南北方向に大小の建築廃材を地面に4列前後並べていた。南側の大きな材は長さ3.20m厚さ10.5cm、北側の材は長さ3.70m厚さ8.5cmである。ほかにも多くの材が南北方向に並べられ、その上に薪が置かれていた。薪場の屋根を掛けるためと思われる3本の細い柱が埋められていた。柱の北端の1本の長さは、1.30m、直径は7.5cmの丸材であった。他の2本

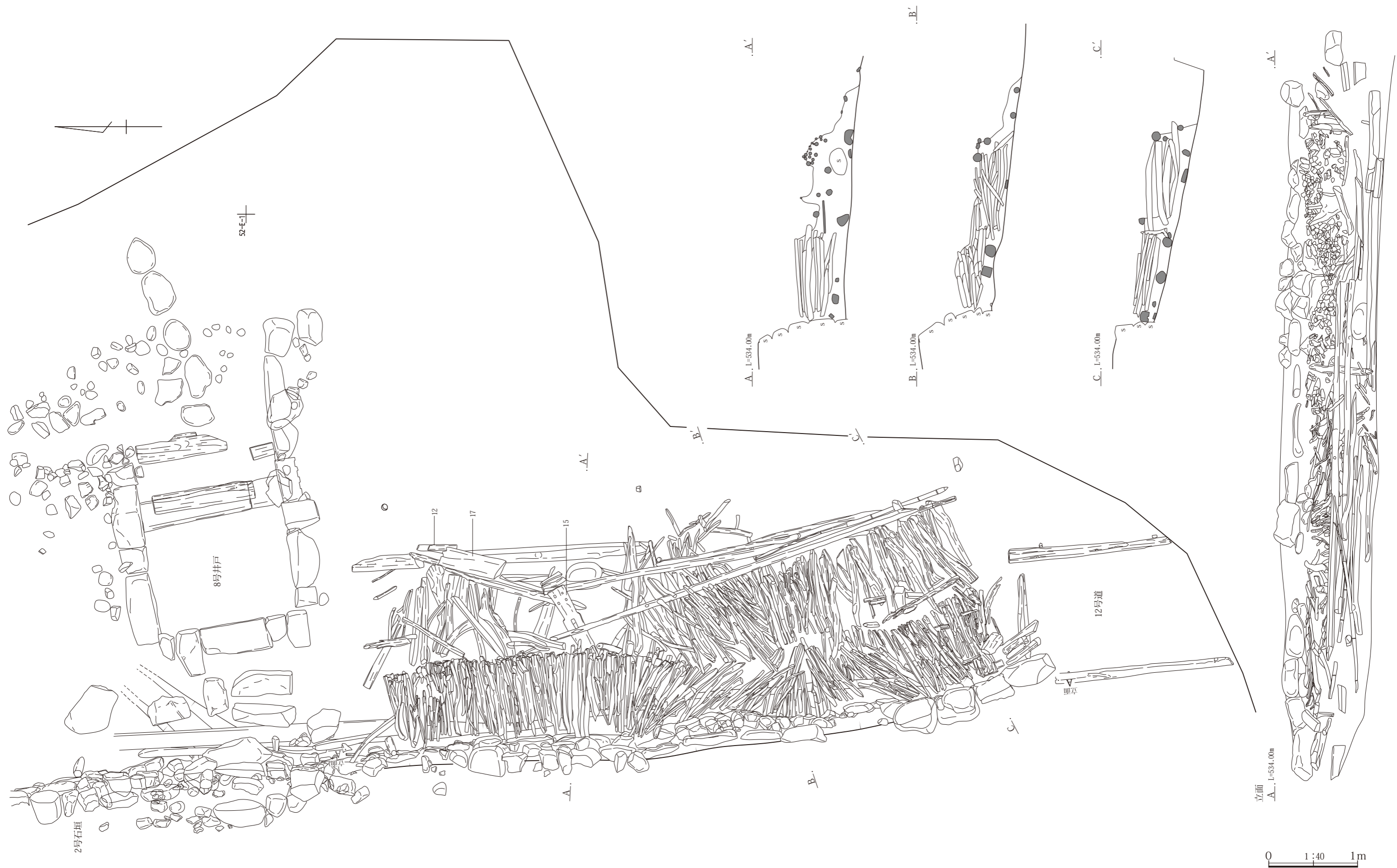
は中央の柱が長さ1.12m太さ7.3cm、最も南の柱は、長さ46.6cm太さ8.7cmで、杭状に4方向から削られている部分が残っていた。南端の柱が最も太い柱で打ち込まれていたことがわかる。おそらく掘立柱を立て、簡単な屋根を作っていたのではないだろうか。薪場北東部分約1/4に薪がほとんど残っていなかった。燃料として使用されてなくなったものと思われる。

【所見】燃料として必要な大量の薪が、集められていた。薪を風雨から守るために屋根を作り、年間を通して蓄えられており、天明泥流の8月段階で一部が使用され約1/4が無くなっていた。この薪は燃料として1号屋敷跡で使用されたものと考えられる。

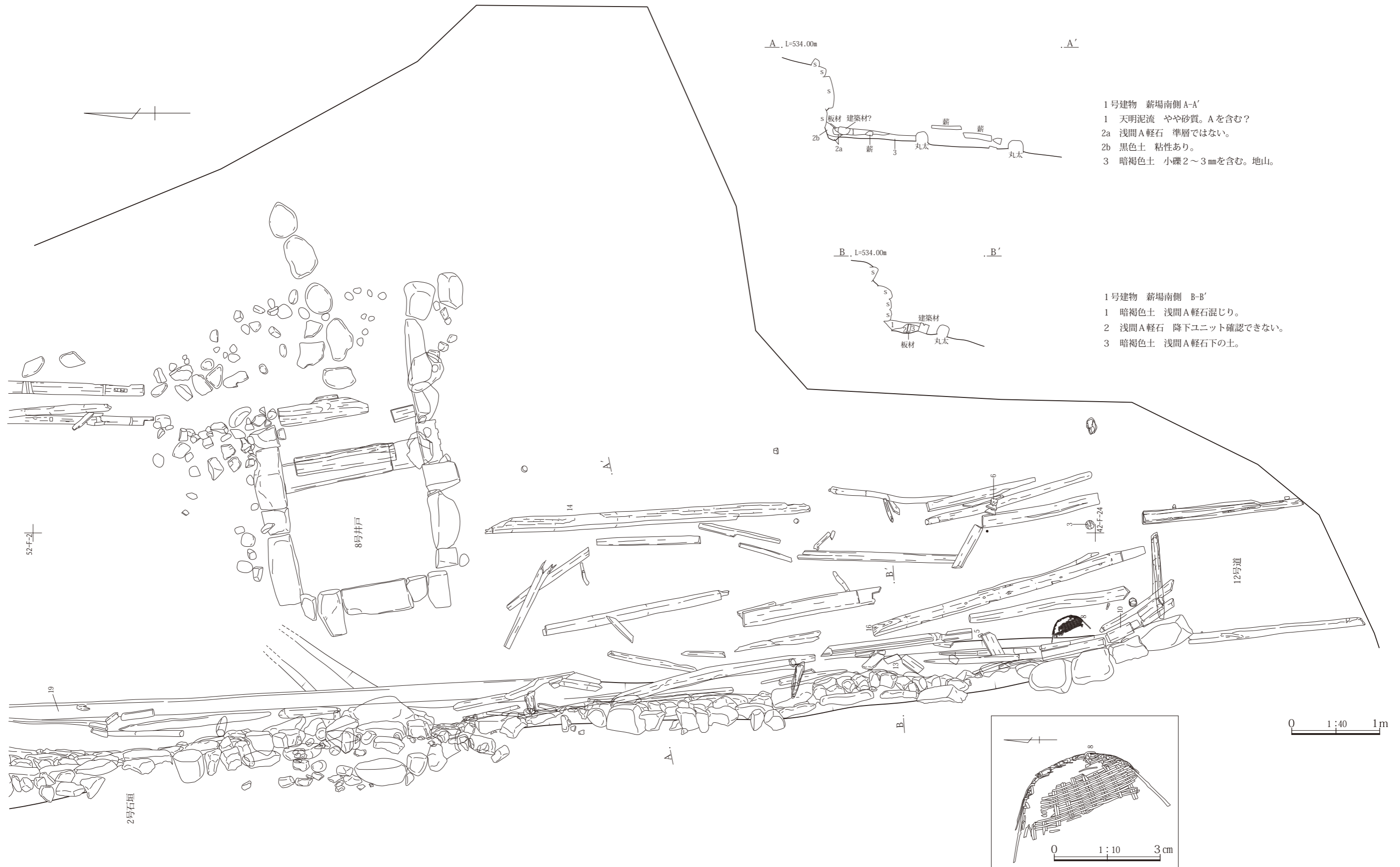
(イ)薪場北側(第19図、PL.7)52区F-4・5グリッドに位置する。

【位置・確認状況】薪場南側に接して北側に伸びている。薪は、北端の一部に残っただけで、大部分は残っていなかった。残っていた薪は、長大な建築部材を台座としてその上に乗せられており、その台座が、薪場南側まで繋がっているため、ここまで薪が積み重ねられていたであろうと考え、薪場北側とした。薪場南側は、2列の薪場であるが、薪場北側は、2号石垣東側に接して狭い範囲に1列に積み重ねられた薪場である。狭いために斜めに積んでいた。8号井戸西側から9号井戸西側までの範囲である。薪場西側の石垣に沿って、薪場の屋根を掛けるための細い柱が3本残っていた。1本は薪場南側の柱を兼ねる。それと対になる東側に柱は残っていなかった。1列で狭い屋根のために薪場南側と異なる構造の屋根であろうか。屋根材は残っていなかった。

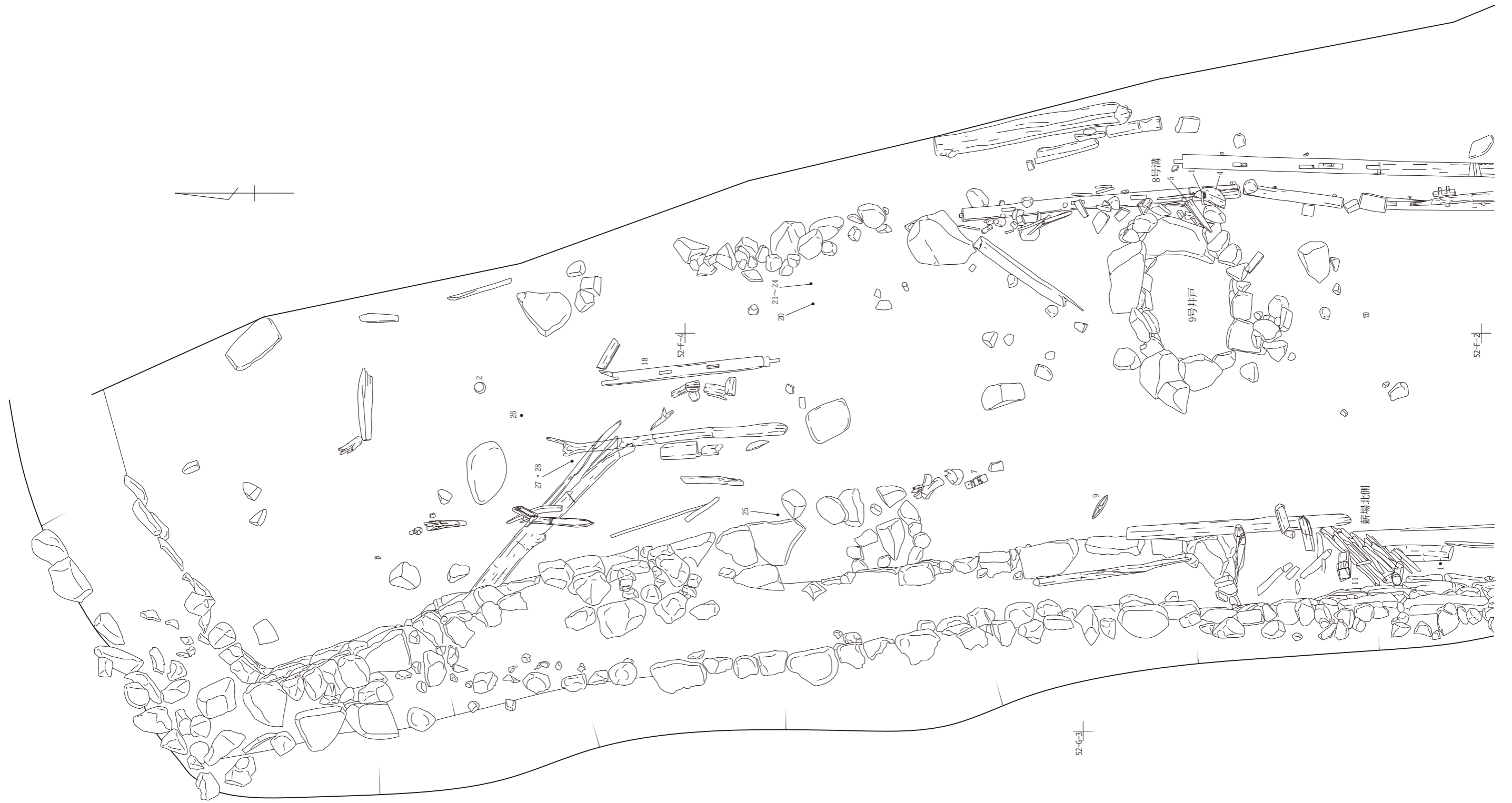
【規模・構造】薪場北側の範囲は、南北方向約7.40m、横幅である東西方向は、薪を少し斜めに積んでいるので薪場南側より狭く70cmであった。薪の下には薪を直接地面に置かないように、地面から22cmほど高い位置に来るように1本の建築部材の角材が置かれていた。材の長さ7.70mと長大で、厚さは17cm、材の中央部には、雨樋のようにV字状に溝が抉られていた。薪場の屋根を掛けるためと思われる3本の細い柱の南端の1本は、薪場南側の柱を兼ねる。他の2本は中央の柱が長さ82.4cm太さ8.5cm、最も北の柱は、長さ96cm太さ10.2cmで、下端部を杭状に削られている。おそらく掘立柱として打ち込まれて、簡単な屋根を作っていたのではないだろうか。



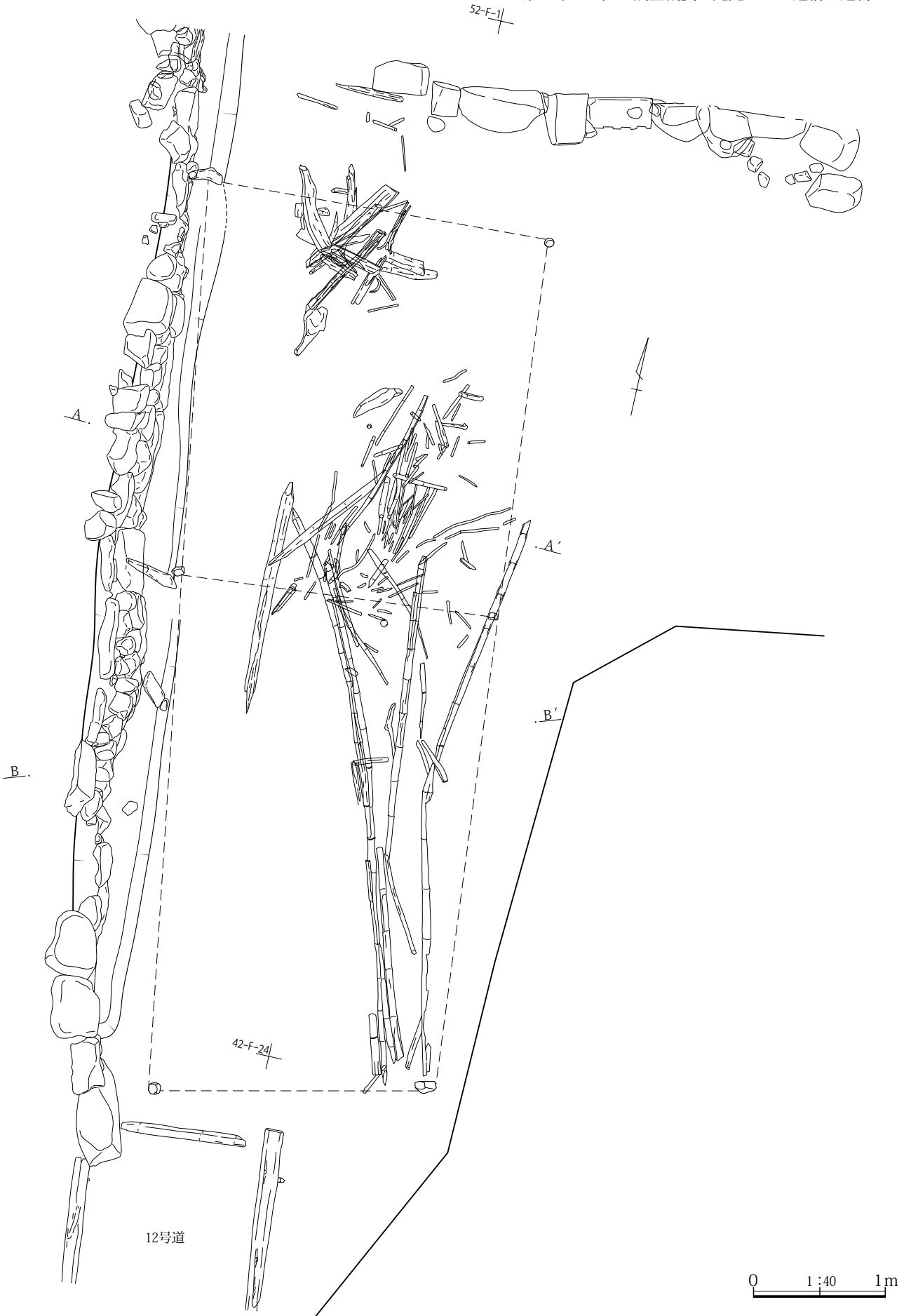
第17图 I区1号屋敷跡 西側水場 薪場南侧



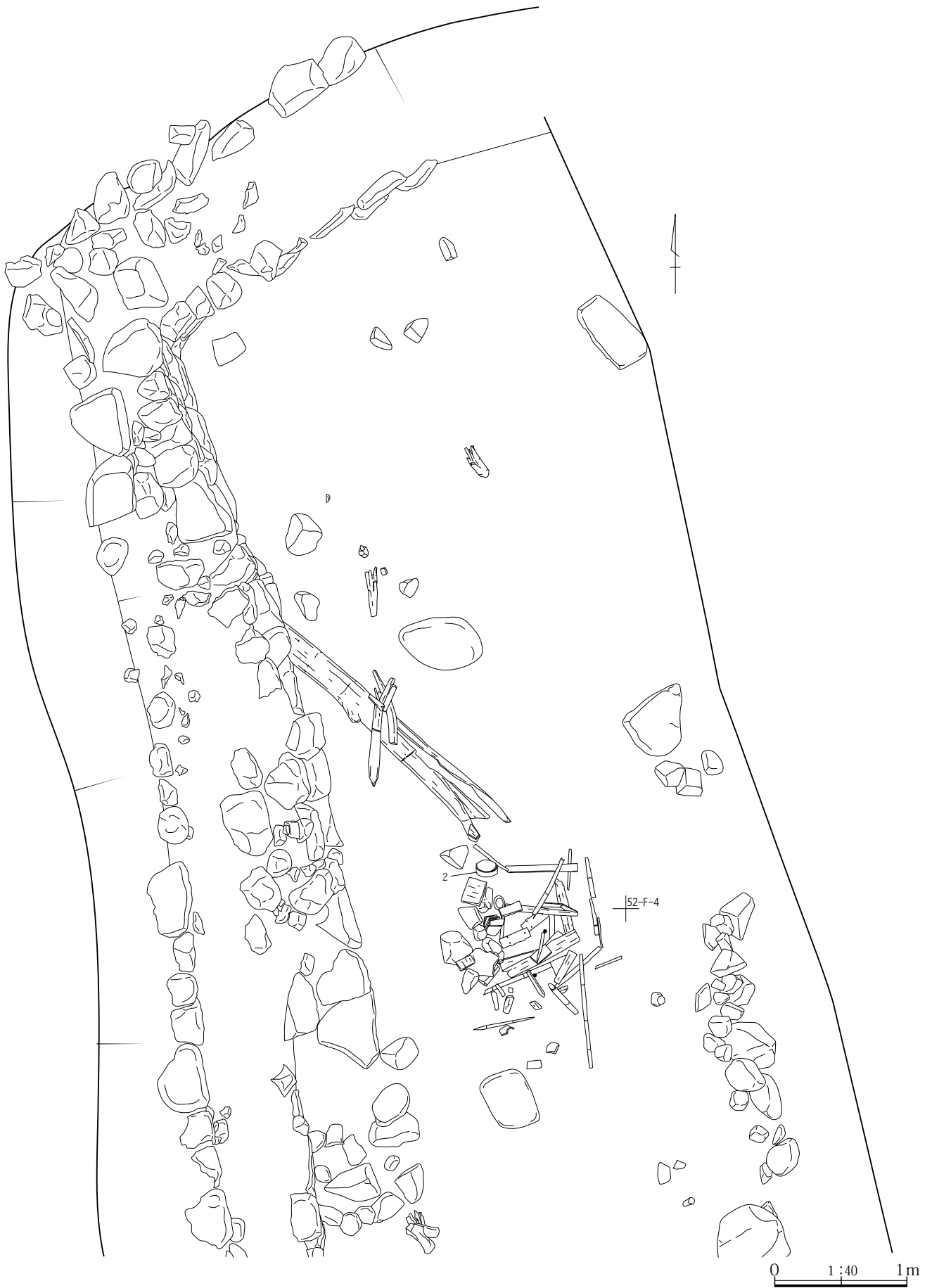
第18図 I区1号屋敷跡1号建物 西側水場 薪場南側下面 遺物出土状況



第19図 I区1号屋敷跡1号建物 西側水場新堀北側 遺物出土状況



第20図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場薪場南側遺物出土状況(最上面)



第21図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場天明三年以前遺物群(中面)

【所見】薪の残りが少なく、薪場としては疑問も残る。しかし残っていた薪と薪の台座としての長大な雨樋用の角材の存在から、薪場とした。この場所は水場としての機能のほかに、薪場としての機能も兼ね備えた場所であろうか。

⑥天明三年以前の遺物群(西側水場北端下面)(第23・156～158図、PL. 7・8・81～83) 52区F-4・5グリッドに位置する。

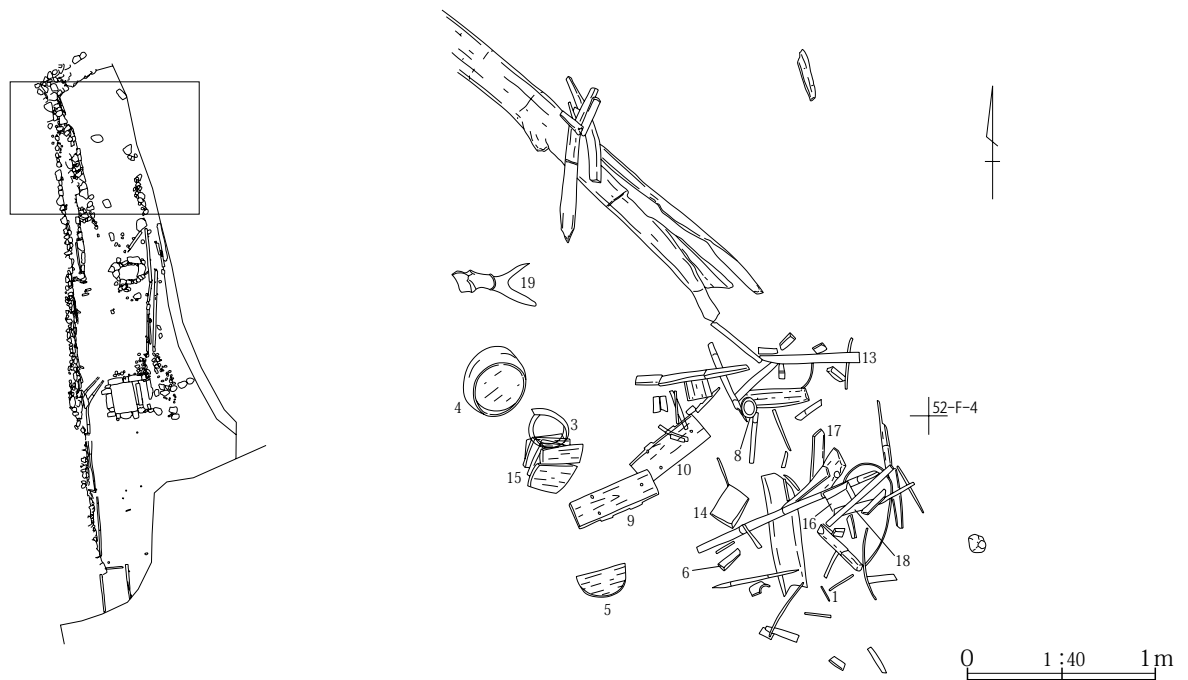
9号井戸から北側4.00m、2号石垣東側の場所は湧水が多くて一段低くなっていた。そこに2本の木材が南北方向に並んで出土した。東側の1本は建築部材で柄穴が2カ所刻まれていた。西側の1本は、大きな丸太であるが加工痕はない。2本の木材を撤去後、確認のために掘り進むと、東西南北1.20mほどの範囲から下駄や竹製のかご大量の板材等の木製品が折り重なるように出土した遺物密集地があった。土坑状になっていたのかもしれないが、土坑は確認できなかった。天明三年段階の地表面では、確認できなかったので、泥流により押し流されたものではなく、それ以前におそらくまとめて埋められたものである。遺物密集地の北西部に接して横たわっていた丸太材西端部分は、西側の石垣の下に埋まっており、この木材は石垣より古いことを示している。さらに北側を掘り下げると、石垣より下の部分から杭列が現れた。打ち込まれている杭は10～30cm間隔で不揃いである。こ

れも石垣を築く前段階の遺構であろう。用途は不明である。

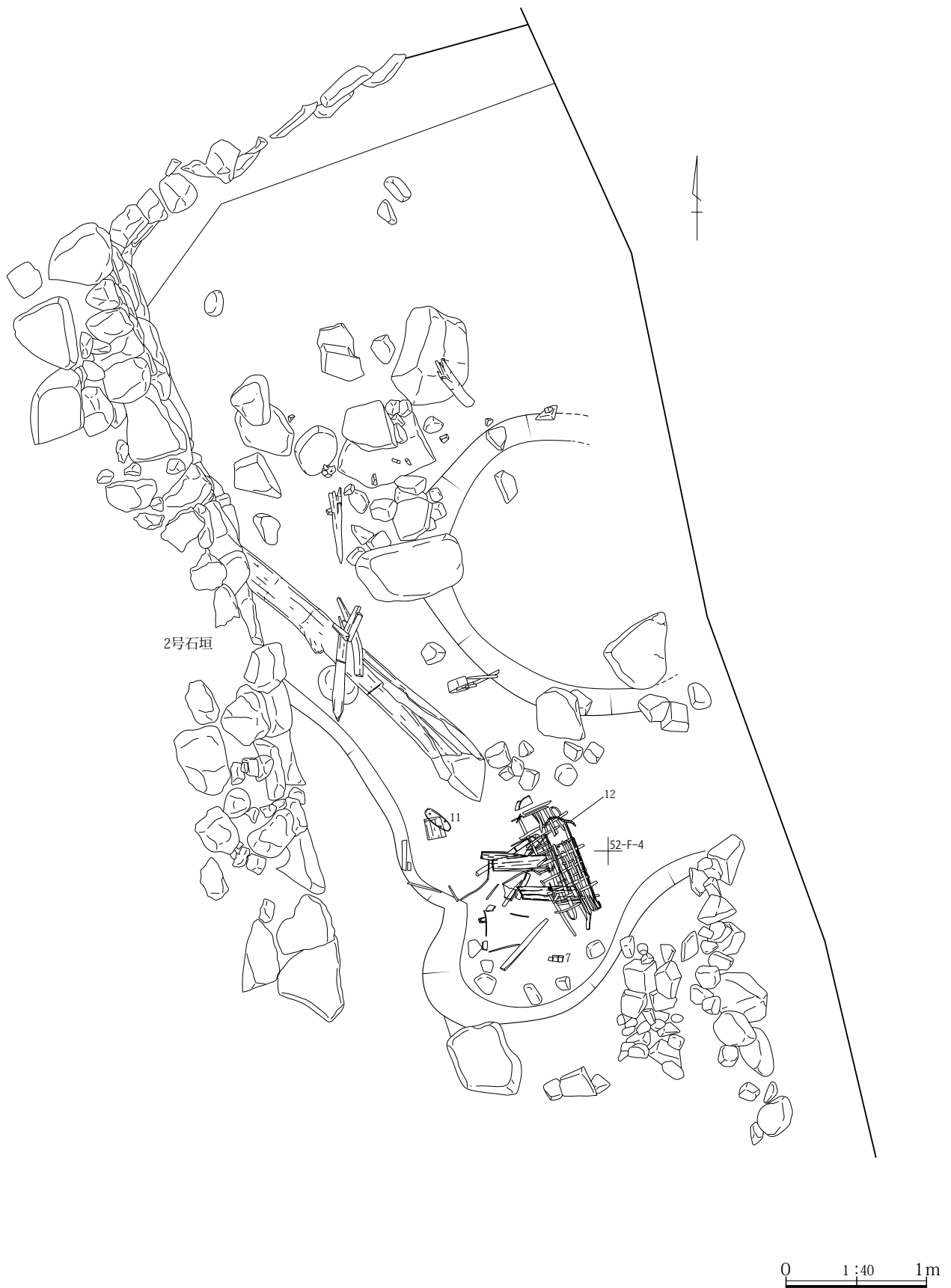
⑦2号石垣(第24図、PL. 8)42区F・G-24・25、52区F・G-1～4グリッドに位置する。

【位置・確認状況】2号石垣は、1号建物の北側に積まれた石垣として前回の報告書の中で報告済みである。この石垣の延長が今回確認された。石垣は、屋敷跡の北西コーナー部分から南側に方向を変えて、屋敷跡の西側で大きな石垣として積まれていた。前回報告済みの部分は省いて、以下新たに発掘した部分を図示し、説明もその部分だけに限定した。新たに発掘された2号石垣の南は東西方向の12号道、北側は東西方向の8号道となっていた。南側の12号道との境に石垣は積まれてないが、北側の8号道の南側には石垣が積まれており、東側で前回発掘した2号石垣とつながっている。2号石垣の西側は集落内の幹線道路である6号道となっている。

【形状・規模】大きな石垣であり、南側が低く北側が高くなっている。また石垣の南側は1列であるが、高さが高くなっている北側は、東側手前に1段組まれその奥の西側にさらに1・2段で組まれている。石垣は、下部に幅50cm厚さ30cmの大きくて厚い石を用い、中絶には幅60～70cm厚さ10～20cmの細長い石を水平方向に積み、上端部には、幅60cm厚さ20cm前後の大きな石を水平方向に並べている。下部には、幅60～100cm、厚さ40～100cmの大き



第22図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場天明三年以前遺物群(上面)



第23図 I区1号屋敷跡 1号建物 西側水場天明三年以前遺物群(下面)



第24图 I区1号屋敷跡1号建物 西側水場2号石垣

な石を据えている場所もあった。石垣は、低い南側が3段前後で高さ60cm前後、中間が6段前後で高さ1.30m、北側が8段前後で高さ2.40mであった。石垣の長さは24.7mである。

【所見】北側の石垣は、2段となっており西側の奥の石垣と東側の手前の石垣との間に幅60cm前後の中段面を持ち、さらに北側には石垣を東側に広げており中段の幅は1.00m前後と広がっている。南側の中段面は水平であるが、北側の幅の広い中段面は南側が低く、南端は石垣がなくなり9号井戸につながる道のようになっている。石垣も北側が高く南側が低い傾斜となっており、6号道から9号井戸に降りてくる道路のようである。

⑧12号道(第24図) 42区F-23・24グリッドに位置する。

(6号道に隣接の為、断面図は6号道で掲載)

2号石垣の最も南端に石垣の積まれていない部分があり、そこから南にかけての部分に1号屋敷跡に入るための12号道が作られている。この部分は2号石垣で説明したように、石垣が最も低くなっている場所である。ここに幅約2.00m長さ推定3.00mの出入り口が作られている。道路は6号道との境に長さ2.00m太さ10cm前後の丸太を置き、一段低くなる東側へ1.40mほど離れた中段にも長さ2.00m太さ10cm前後の丸太を置き階段状にしている。道路の長さは、未発掘のため明らかでないが、この出入り口は7号屋敷跡に入るための5号道とよく似ており、5号道では道路中段の所で計測すると3.00mの距離で約80cm低くなっている。出入り口道路の東端には、丸太あるいは石が並べられていたものと思われる。

⑨出土遺物

1号屋敷跡西の2号石垣との間の狭い範囲であったが、水場を発掘しており多くの木製品が出土している。特に薪場では1000本を超える大量の薪が積まれた状態で残っており、当時の煮炊きや暖房等の必需品である燃料をどのように確保・保管・使用していたのかを知る良好な情報を得ることができた。また薪の下からも曲げ物や原型をとどめた箕等の木製品が出土している。8号溝の中から出土したホウキは、今日使用されているものとはほとんど同じであった。また下駄等も出土している。8号井戸北側では、天明泥流下の地表面には、湧水があり木製品の出土は少なかったが、一部を掘り下げると狭い範囲から多くの木製品が出土した。天明泥流以前に埋めら

れたものと思われる。陶磁器は8号井戸から出土しているが、極めて少ない。

整理時に薪場出土遺物の一部を「天明三年以前の出土遺物」として分離したが、非掲載遺物の分離は行わず「薪場」として扱っている。陶磁器類は少なく、江戸時代の国産磁器が2点4g、国産陶器片が10点121g、近現代陶磁器片が2点79g出土したが、細片のため図示していない。薪場からは265点の植物遺存体と1点の鹿角が出土し、現場で計測・写真撮影を行った後に74点を取り上げた。取り上げた74点のうち19点を「薪場」出土、19点を「天明三年以前」として図示した。

薪場出土の木製品には漆椀(1、2)や曲物(3、4)、下駄(6、7)などの生活用具や農具の竹箕(8)や踏鞴(15)、構築部材(10、11～13、18)などが出土している。金属製品は寛永通寶1文銭9枚を図示した。いずれも銅銭で古寛永が1点(27)、いわゆる文銭が4点(21、22、24、28)、背「元」が2点(25、26)、背無文の新寛永2点(20、23)である。

天明三年以前の出土遺物で図示可能な遺物は木製品18点と鹿角(19)1点である。木製品では曲物の2点が柄杓(2、3)である。また、曲物製作に関わる可能性があるものとして(7)の樹皮がある。下駄は3点(9～11)出土している。

8号井戸東側の一段低い位置に設置された切石上と踏み石との間に2・3の柱目板がほぼ水平の状態出土している。井戸内からは90cm前後の棒状木器2点と磁器碗1点(1)が出土したのみである。

9号井戸の出土遺物は皆無であった。

8号溝には木製品類38点が遺存していたが、形状の判明する櫛(1)や連歯下駄(2)、竹ホウキ(3)、桶か樽の底板(4)、不明製品(5・6)、構築部材の転用品(7～9)の9点を図示した。溝内から出土した3の竹ホウキは整理作業時に原形をとどめていなかったため、スケール入りの出土状態写真から作成した略図を掲載した。

2号石垣からは江戸時代の磁器6点63g、9点129g、近現代陶磁器4点58gが出土したが図示可能な遺物はなかった。

12号道から遺物は出土していない。

(2) 2号屋敷跡(第26図)

① 2号屋敷跡の調査経過と調査概要

2号屋敷跡は、1号屋敷跡同様に平成19・20年度に発掘調査され、その成果は、すでに『東宮遺跡(1)』(2011)『東宮遺跡(2)』(2012)として調査報告書が刊行されている。2号屋敷跡は、1号屋敷跡北側に位置し、2号屋敷跡北側は高い段丘面となっている。西側に6号道があり、道路との間には、5・12号畑がある。屋敷跡の母屋としては、最も規模の小さな建物であり、発掘された屋敷跡の中で他の屋敷跡の母屋はすべて礎石を用いているのに対し、この母屋は、部分的には礎石が据えられてはいるが、基本的には掘立柱建物である。今回発掘調査された場所は、前回発掘調査できなかった2号屋敷跡の西側部分である。発掘範囲からは、2号屋敷跡北側から伸びていた7号石垣が、北西コーナー部分で南に伸びていた。2号屋敷跡の西側にある前回調査した5・7号畑および6号道から屋敷跡に降りてくる8号道の西側部分の発掘調査を実施し、その部分を報告する。出土遺物はなかった。なお前回調査され報告されている部分の報告は基本的に行わない。

② 8号道(第26図)52区F・G-5・6グリッドに位置する。

8号道は、前回の発掘成果と今回の調査成果から村の幹線道路である6号道から、東側に位置する12号畑の南側を通り6号建物手前で北側に曲がり、2号屋敷跡に入るようになっていたことがわかる。2号屋敷跡は6号道より低い位置にあり、6号道中央道路面と8号道・2号屋敷跡6号建物手前部分道路面との標高差は、約1.20mある。8号道はなだらかな傾斜をもって、屋敷跡から6号道まで登って行ったことがわかる。8号道は6号道と接する部分では、両側に1列に石が並べられており、傾斜が急になっている。同北の12号畑との境は、12号畑南側の道路に沿って掘られた溝で区画され、8号道南側は、2号石垣により区画されている。道路の規模は残りの良好な6号道と接している部分で幅1.00m前後である。道路の長さは、6号道から2号屋敷跡6号建物手前部分までで14.0mである。

③ 7号石垣(第26図、PL.61)52区G～I-5～9グリッドに位置する。

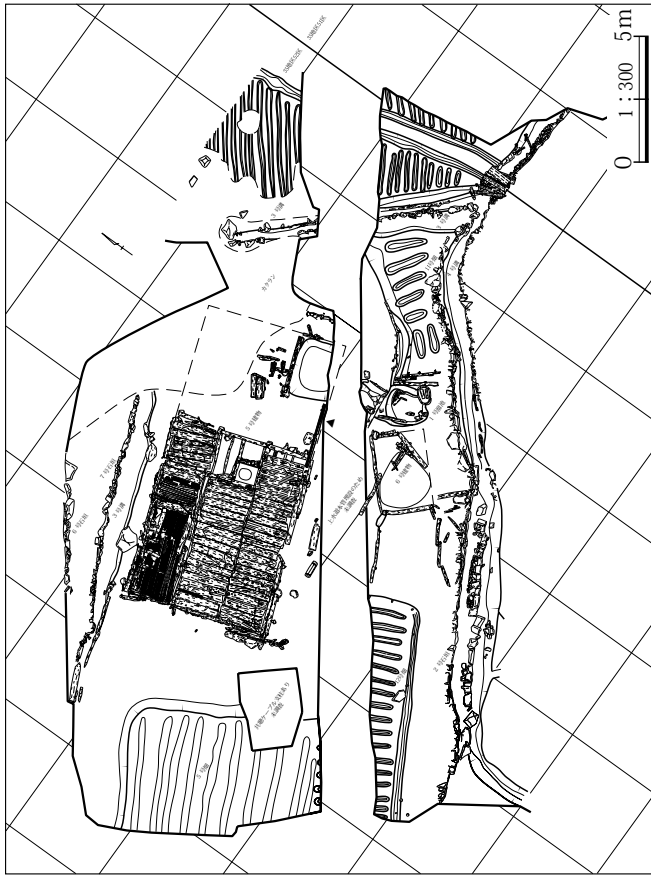
【位置・確認状況】7号石垣は、2号建物の北側に積まれた石垣として前回の報告書の中で報告済みである。この石垣の延長部分が今回確認された。石垣は、屋敷跡の北西コーナー部分から2号屋敷跡を回り込むように南方向に向かって積まれていたものと思われる。前回報告済みの屋敷跡北側の東西方向に積まれた石垣部分は省いて、以下新たに発掘した部分を図示し、説明もその部分だけに限定した。新たに発掘された南北方向に積まれていた7号石垣は、南は8号道北側から始まり、北側は6号道に沿って調査できた部分までとなっている。

【形状・規模】石垣は南側が低く、6号道が急傾斜で、北側で高くなっている。8号道に接する部分の石垣は1段で中央部は細かな石が5～6個積まれている。北端部分は、攪乱を受けており、調査区北端の表土から積まれている大きな石は、新しい時期に積まれたものである。天明三年段階の石垣に使われている石は、大きな石を少量使い大部分は河原石ではなく、耕作等により出土したと思われる小さな石を細かく積んでいた。石垣の高さは南側で20cm前後北側は不明である。南北方向に積まれた13.0mである。

【所見】2号屋敷跡北西部分は、今回全体を発掘できなかった。その部分は山の急斜面が迫っており、石垣も積まれているものと思われるが不明である。

④ 出土遺物

8号道と7号石垣からの出土遺物は皆無であった。



第25図 前回報告 I区 2号屋敷跡



第26図 I区 2号屋敷跡

IV区の調査概要と発見された遺構と遺物



東京建設全景 写真下が町道、町道の右端で屈曲して山に向かっているのが発掘された6号道、6号道下(右)に1号屋敷水堀、6号道に面して4～11号屋敷が造られている。集落の中央やや右側に10号溝、写真上部分(北西)の標高542～548m付近から上は、沓流の雑草が薄く、畑は残っていない。10棟の屋敷(1・2・4～11)・井戸・水路・水堀・如等を発掘調査し、天明3年の沓流に埋まった、江戸時代川原町村の一部跡姿を現した。
 (3号屋敷は平成20年度調査済) (平成26年10月 航空写真)

第2節 IV区の調査概要と発見された遺構と遺物

IV区の調査は、平成19・20年度に調査した4～7号屋敷跡の継続調査と新たに発掘調査した8～11号屋敷跡および24・25号建物、畑、6号道、6・10・11・12号溝、

4号石垣、石捨て場(ヤックラ)、炭窯、調査区西端中段の道、石列群の調査を実施した。各屋敷跡の報告の中には、屋敷跡内の竈や囲炉裏・馬屋等の各施設の説明のほか、屋敷跡に含まれると考えた埋設桶・付属建物である小屋・井戸・道等の説明を行っている。発掘結果は以下の通りである。

(1) 4号屋敷跡(第27図、PL. 8)

① 4号屋敷跡の調査経過と調査概要

4号屋敷跡9号建物は、平成20年9・10月に調査を実施した。調査により9号建物全体と6号溝の一部を確認した。しかし、9号建物の西側と南側は調査対象外となっており、屋敷跡全体を発掘することはできなかった。発掘が終了している部分は『東宮遺跡(1)』(2011)『東宮遺跡(2)』(2012)として調査報告書が刊行されている。平成20年度の調査では、「川原畑村 酒蔵用 野口蔵」「天明二年 酒蔵用 四月吉(日)」と両面に墨書された刷毛が10号石垣に押し付けられるように出土した。また6号溝から出土した桶の中から麻の種実が大量に入っていた。平成20年度に発掘調査された9号建物、6号溝の一部および遺物については報告済なのでここでは報告しない。

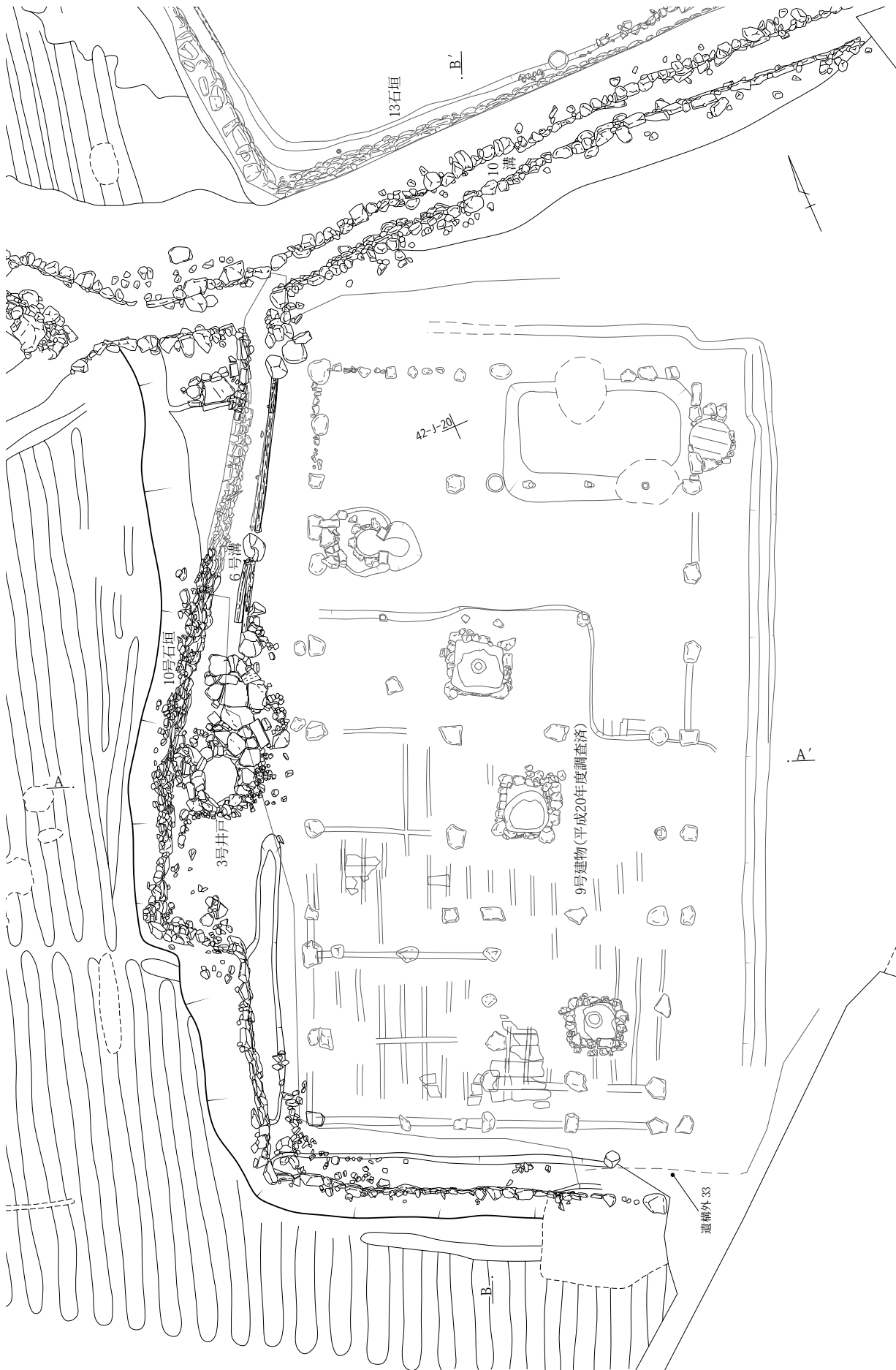
平成26年8月から11月まで4号屋敷跡西側と南側の調査を行い、4号屋敷跡全体を発掘することができた。屋敷跡西側に6号溝、その南に接して3号井戸、屋敷跡南西部分の石垣の下から凹状に中央が削り取られている大きな木製品等を確認することができた。また屋敷跡西側から南側に積み重ねられていた10号石垣等を調査することができた。6号溝を中心に陶磁器類・漆椀・曲物・建築部材等多くの木製品が出土した。4号屋敷跡の東側は6号道に面している。母屋である9号建物があるが、付属建物の存在が確認できない。敷地内で付属建物を建てられる場所は、北東コーナー部分であるが、前回の調査で確認できず、今回も調べてみたが、やはり確認できなかった。その場所は6号道に近く、泥流の堆積も浅いので、後世の攪乱等により残っていない可能性がある。屋敷跡の出入り口は、東側に6号道があるので東側になるが、どこになるかは不明である。いずれの遺構とも天明泥流により埋もれていた。

第7表 東宮遺跡IV区遺構一覧表

帰属時期	遺構名
天明三年以前	1号焼土(13号建物下) 1号石組遺構(9号建物下)
	31号建物(23号建物下) 7号屋敷跡下面(ピット群、囲炉裏、1・2・3号焼土遺構、1号炭出土方形遺構、石埋設1・2号土坑、弥生土器出土焼土遺構)
天明三年(泥流下)	4号屋敷跡(3号井戸、6号溝、10号石垣) 5号屋敷跡(10・12号建物、1号炉、11・12・13号石垣、1・2号施設)
	6号屋敷跡(11号建物、27号建物、15・18・19号石垣)
	7号屋敷跡(13・14・15・28号建物、8・14・16・17号石垣、5号道)
	8号屋敷跡(16・20・26号建物、7号道、22・23・26号石垣、6・7号井戸、石橋、1号石組、13号溝)
	9号建物跡(18・19・21号建物、28・29・30号石垣)
	10号屋敷跡(23・30号建物、9・10・11号道)
	11号屋敷跡(31号建物、27・32・33号石垣)
	25号建物
	10・12号溝
	6号道
24号石垣	
天明泥流被災後	24号建物(23号建物と重複)
	7号土坑(19号建物と重複)
	17号土坑
	4号井戸(16号建物北西コーナー)
	5号井戸(23号建物南西コーナー)
	25号石垣(16号建物西側) 34号石垣

※ 建物に付属する遺構(囲炉裏、竈、馬屋、唐臼、便槽など)および畑は、上記遺構一覧から省略した。

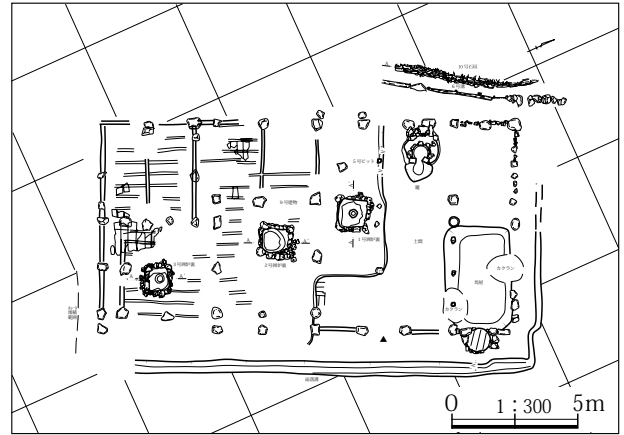
※ 明朝体は、前回報告された遺構、ゴシック体は追加調査および今回新たに発掘調査された遺構。



第27図 IV区4号屋敷跡

②屋敷跡の地形と水場(PL.11・12)

10号石垣屋敷跡は西から東に向かって低くなる傾斜面で西側および南側をL字状に1.20~1.70mほど掘り込んで東側の6号道の高さに近い屋敷地を造成している。屋敷跡の北側は8号溝、東側は6号道となっている。屋敷跡の西と南側は深く掘り込んでおり、10号石垣が築かれている。西側および南側の石垣底部付近から年間を通して湧水がある。特に掘り込みの深い西側中央部分の掘り込み面からの湧水が多い。その湧水を生活水として確保するために3号井戸を掘り、その水を活用し排水を流すために井戸に接して北側に6号溝が掘られていた。6号溝は、屋敷跡北東コーナー部分で10号溝と合流している。



第28図 前回報告IV区4号屋敷跡



第29図 IV区4号屋敷跡断面

③ 3号井戸と井戸北側の石敷き場(第30・159～165図、PL. 9・83～88)42区K・L-18・19グリッドに位置する。【位置・確認状況】井戸は9号建物の西側に位置し、10号石垣の下に接して掘られている。確認段階では、井戸周辺に大きな石はなく、井戸が掘られていた部分だけに石が高く積まれたような状況であった。その石は、全体が円形であり、円形の外側に大きな石を意図的に並べてある。しかし内側の石は、一回り小さな石が乱雑に入っており、外側と中側の石の埋没状態が異なっている。外側の石列は、井戸枠として積まれた石であり、中の小さな石は泥流とともに井戸を埋めた石類と思われる。井戸枠として、高さ1～2石が井戸掘り込み面より高い位置に積まれていた可能性がある。その部分の写真は記録されているが、残念ながら図面は作成していないので詳しいことはわからない。写真では、1～2石の大きな石を隙間なく小口積で、井戸枠として並べているようである。石の高さは、推定で20cm前後と思われる。積まれた井戸枠と思われる石垣の外側を、安定させるために何らかの土を詰めて固めていることも考えられるが確認はできなかった。【形状・規模・構造】井戸はほぼ円形を呈し、規模は東西80cm南北1.00m。深さは1.50mである。平面形が少し歪んでいる。積まれている石は15～30cmの石を多く使い、長さ40cm近い細長い石は平積に積まれていた。井戸の西側に接して6号溝があり、不要となった井戸水は8号溝によって排水されていたものと思われる。3号井戸と6号溝との間が約2.00m離れている。その間には、幅30～70cmの大きくて平らな石が、隙間なく敷き詰められていた。石敷きの幅は約1.80mである。この石敷きの隙間から流れ出した水が6号溝に流れるようになっていた。この石敷き場は、井戸の水を汲み、そこで簡単な調理や洗濯等を行う作業場であったと考えたい。このような場所は、7号屋敷跡に伴う2号井戸南側にも作られていた。この石敷きの上に集中して木製品や陶磁器が出土した。それは9号建物内から泥流により押し流されたとも考えられるが、ここに簡単な台所用品を収納するための施設があったとは考えられないだろうか。【所見】井戸の上屋を確認するために注意して調査したが、上屋に伴う施設を確認することは出来なかった。10号石垣の最も高い位置から井戸上面までの高さ1.20m、

井戸上面から井戸底部までの石垣の高さ1.50mで、石垣と井戸に積まれている石垣を合わせると高さは2.70mになる。さらに石垣の上にある畑面と井戸底部との高低差は3.00mある。大きな高低差があり豊かな湧水の井戸であったと思われる。井戸掘り込み面より高い位置に切石でない石を1～2段並べて井戸を囲んでいたことが考えられる。

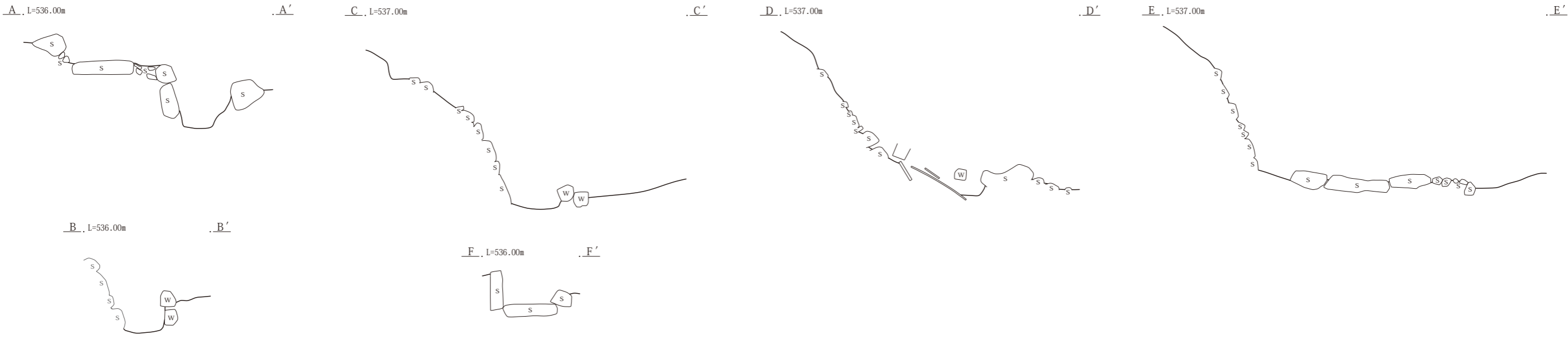
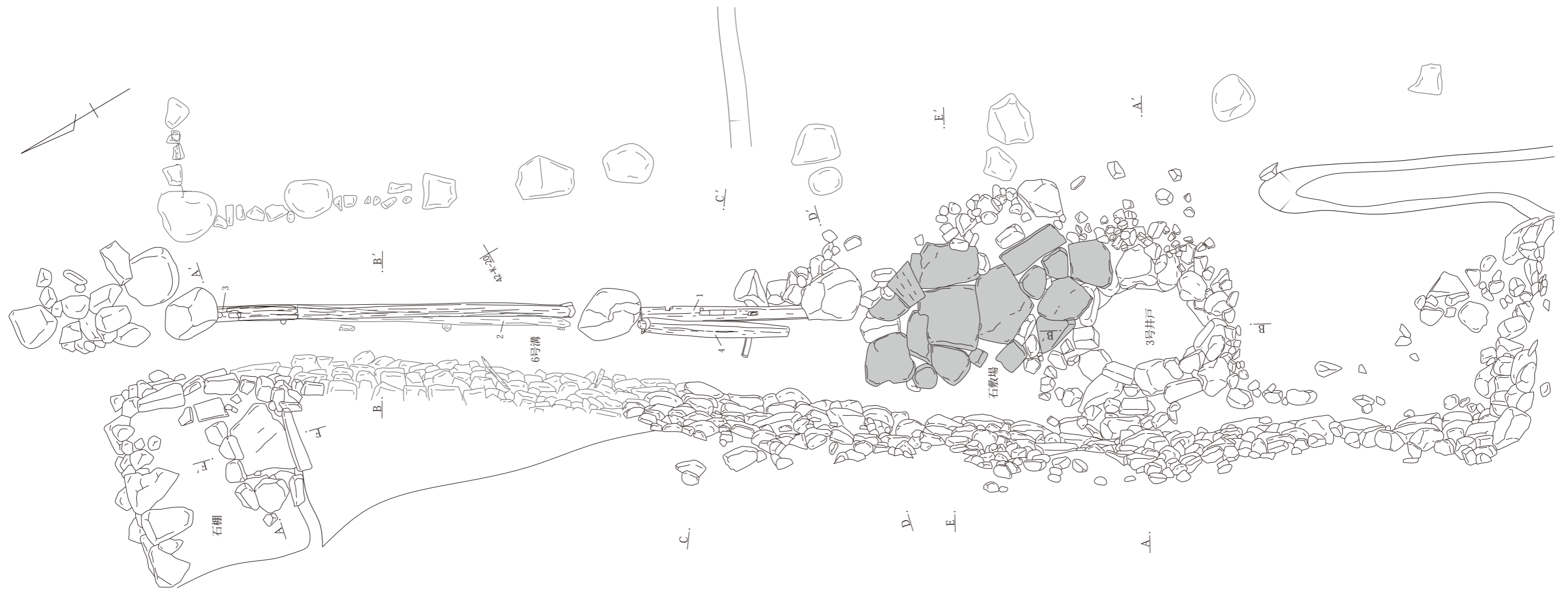
④ 6号溝(第30・166・167図、PL. 9・11・65・66・88～90)42区J～L-18～21グリッドに位置する。

【位置・確認状況】6号溝は、平成20年度で一部発掘している。平成26年度の発掘は、平成20年度に発掘した南北部分である。溝の南側は井戸北側の石敷きを経て3号井戸、北側は10号溝につながっている。溝の西側は10号石垣で区画され東側は、中間に大きな石を置きその両側に上下2本ずつ計4本の建築廃材を並べて岸としていた。

1号屋敷跡8号溝では、溝の両側に建築廃材を利用してしていた。湧水地における溝の造り方として石を組むのではなく、廃材を利用して簡単に溝を作るという方法を用いており共通している。東側の建築廃材が溝の中に移動しないように、南北および中間に大きな石を置き、建築廃材を抑え、さらに4本の杭を溝内側に打ち込んでいる。溝西側の石垣部分にも石垣に接して2本の杭が撃ち込まれていた。目的は不明である。

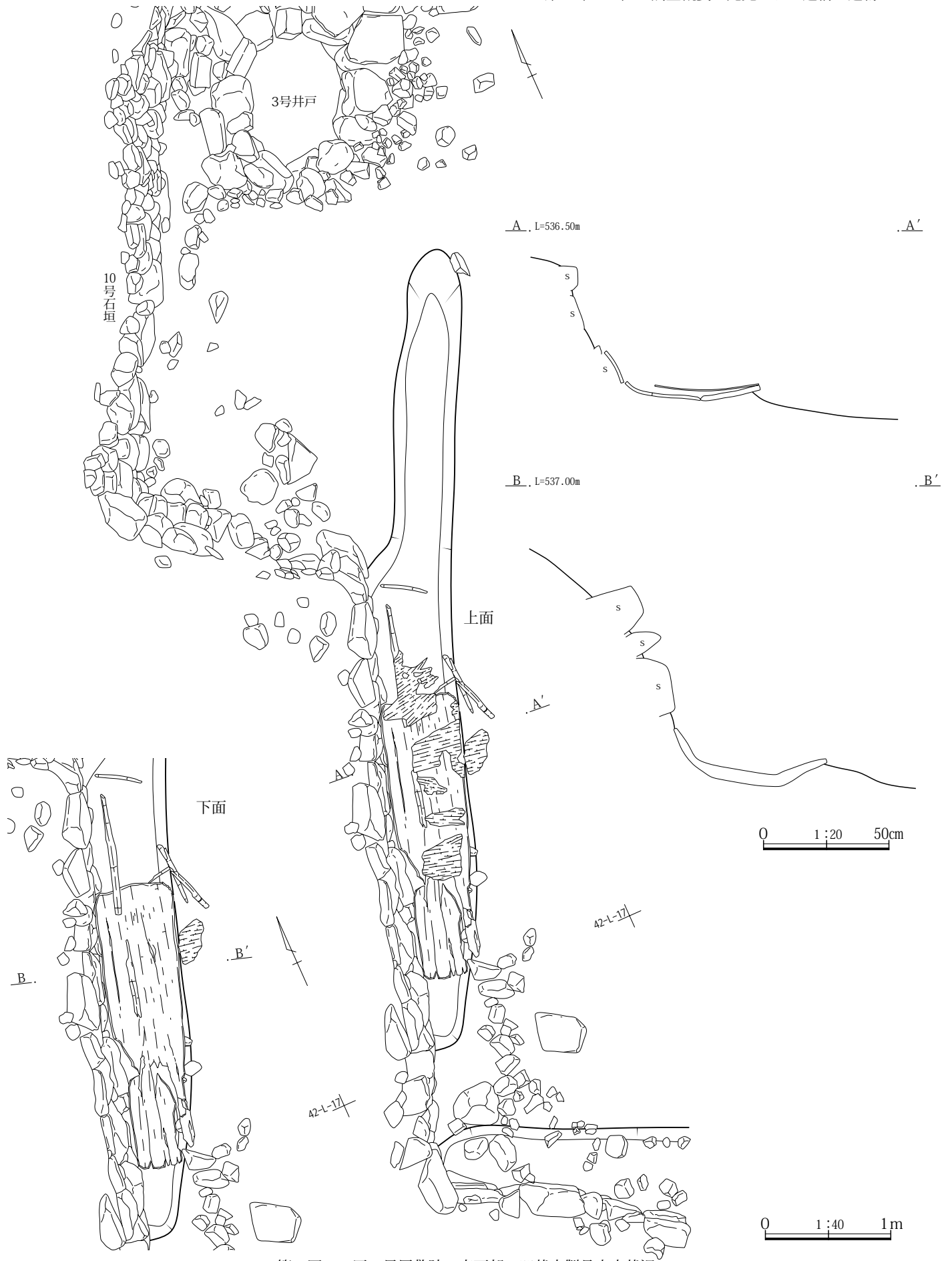
【形状・規模・構造】溝の長さは、井戸北側の石敷きからはじまり、北を10号溝までとし、全長8.10m、幅40cm前後、深さ20～30cmである。溝の西側は10号石垣となっている。東側に並べられた建築廃材4本は、いずれも柄穴が掘られた角材であり、土台あるいは柱等に使われた廃材を利用している。南側2本の廃材で、上は長さ1.40m幅13cm、下は長さ1.62m幅14～15cm、北側2本の廃材、上は長さ3.29m幅14cm、下は長さ3.40m幅12～14cmであった。

【所見】6号溝は、3号井戸の排水や9号建物西側の湧水を10号溝に流すための水路である。6号溝から3号井戸北側の範囲に建築部材は少なかったが、木製品や陶磁器が多く出土した。その部分には、9号建物の台所として簡単な構造の施設があったものと思われる。



0 1:40 1m

第30図 IV区4号屋敷跡 3号井戸・石敷き場・6号溝・石棚

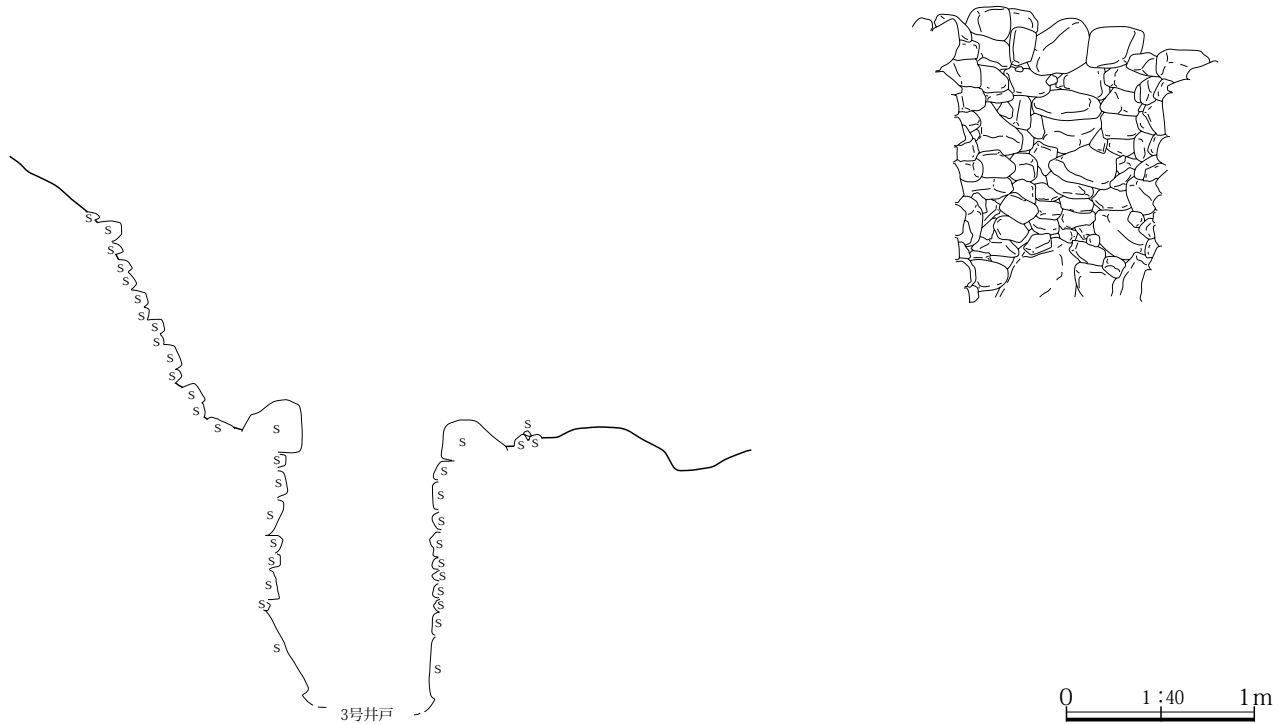


第31図 IV区4号屋敷跡 南西部 凹状木製品出土状況

A, L=538.00m

A' B, L=536.00m

B'



第32図 IV区4号屋敷跡 3号井戸断・立面

⑤土壁(第33図、PL.10)

9号建物南西部、10号石垣との間に東西40cm南北50cmと狭い範囲であるが土壁が倒れて残っていた。土壁の中には短い柱材と木舞が残っていた。柱材は、東側に凹状の掘り込みがある。木舞は、柱と直行する横方向の1本は丸竹で柱材と並行する縦方向の木舞9本は半裁された竹を7cm前後の間隔で並べている。16号建物の木舞幅が5cm前後の間隔であり16号建物より荒い間隔である。木舞縄は確認できなかった。柱材の大きさは長さ73.6cm太さ11.5cmである。高さ70cm前後短い土壁である。

⑥南西部の遺構(第31図、PL.10・12・90~92)

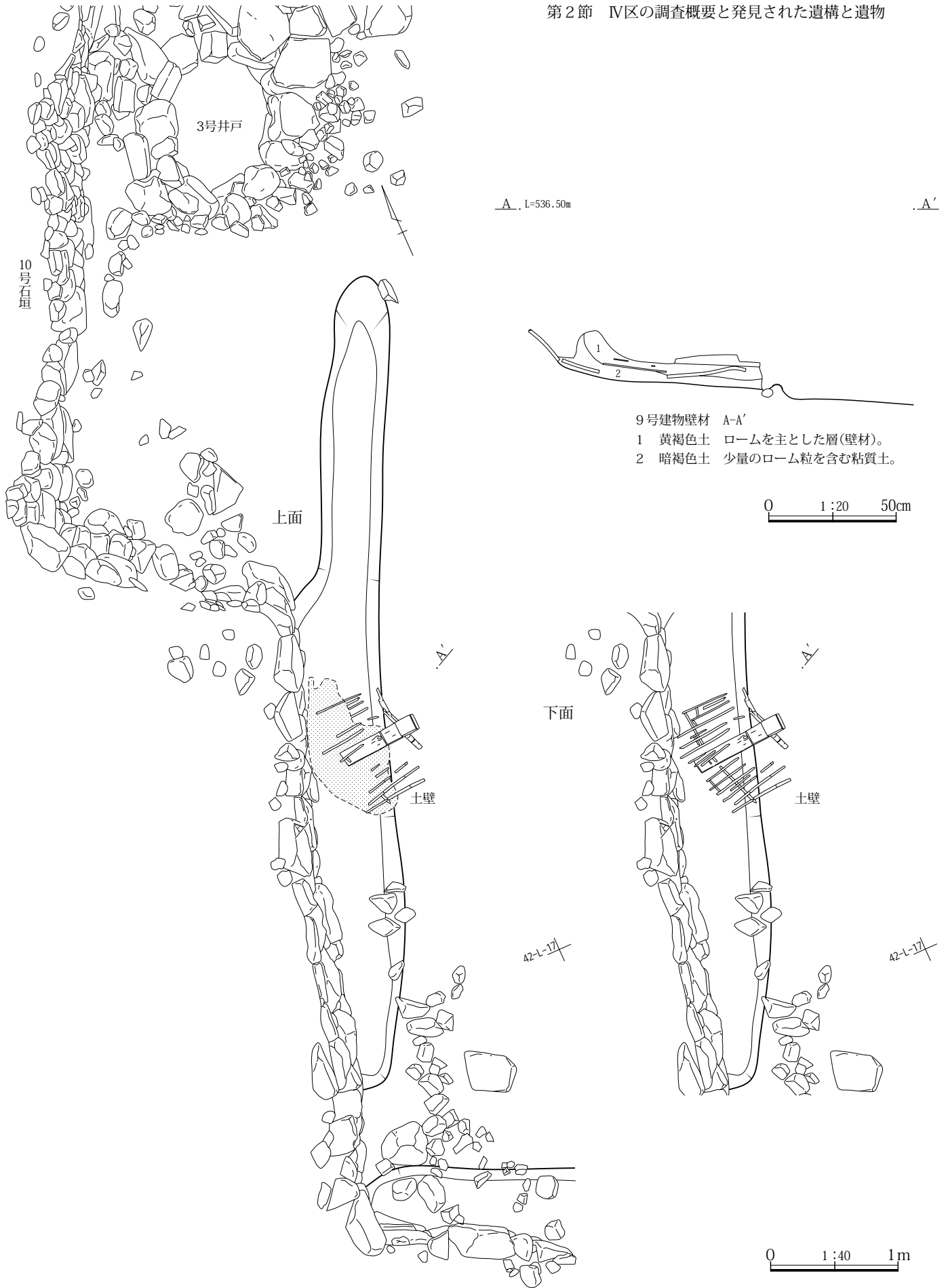
9号建物南西端部、10号石垣との間で残っていた土壁の下から南側にかけて大きな凹状の木製品が出土した。全体が湿地帯のため、木製品の残りがよかった。凹状の木製品の上には、石垣に並行して1本の細長い竹が木製品の上に置かれ、その上に杉の皮を剥いて作ったと思われる屋根材が並べられていた。屋根材の上に少し、屋根材のない範囲には、多くの浅間A軽石が堆積していた。浅間A軽石が降下した段階で、この屋根は架かっていたものと思われる。直接木製品の上に竹を置きその上に屋

根材として木の皮を葺いていたのかもしれない。屋根材を撤去すると、長さ2.25m幅6cm厚さ4cmの凹状の木製品が出土した。名称や用途は不明である。木製品を撤去すると下から、完形の曲物が出土した。中には短く切った篠竹が16本入っていた。(PL.12-7)

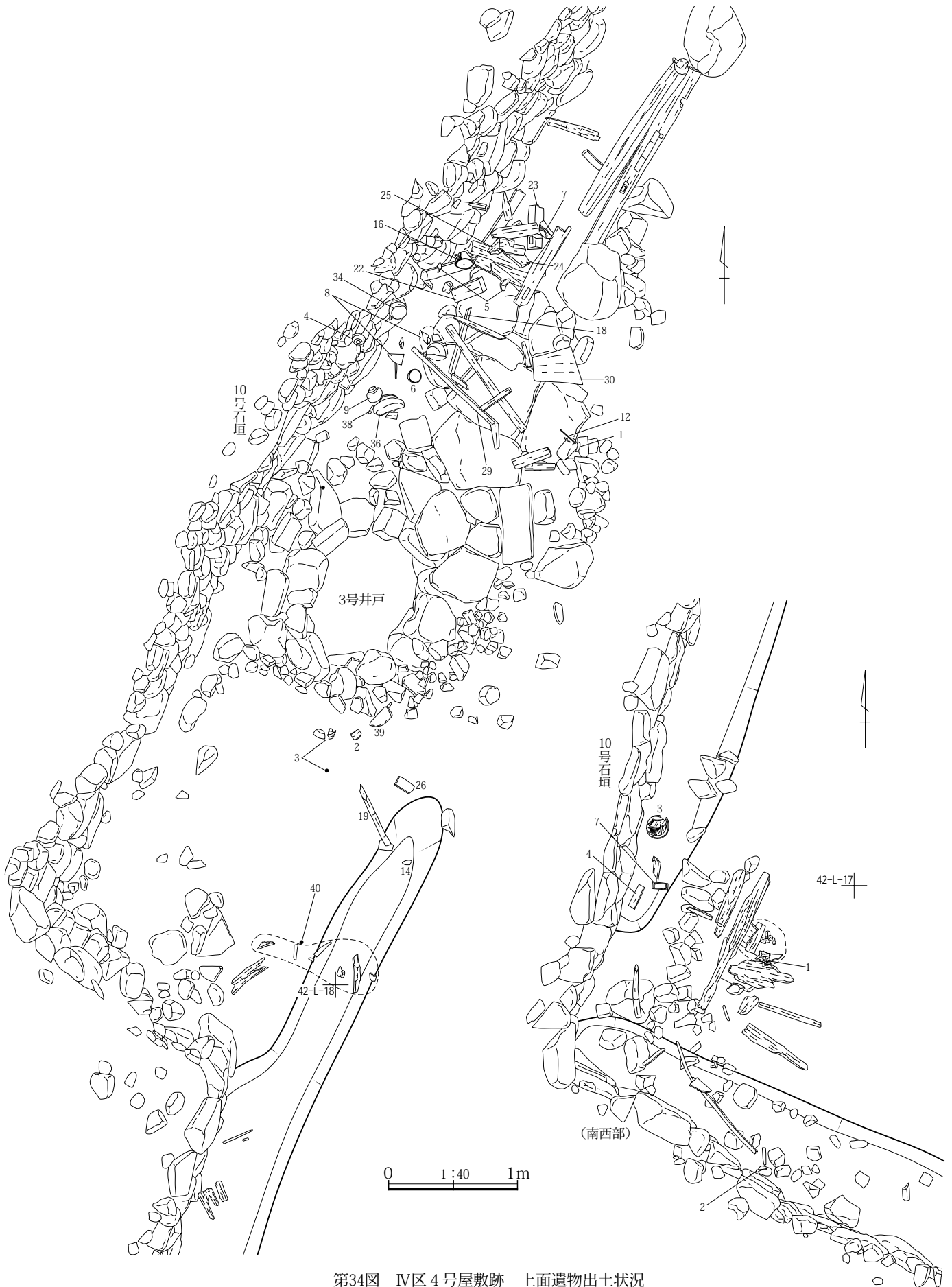
⑦10号石垣(第36・167図、PL.11・90)42区K~M-16~21グリッドに位置する。

【位置・確認状況】屋敷跡の西側と南側は、深く掘り込んでおり、10号石垣が築かれている。石垣は底部から1.00m前後まで残っていたが、その上は残っていなかった。石垣下部分からは全体に湧水があった。特に3号井戸が作られていた付近からの湧水が多い。

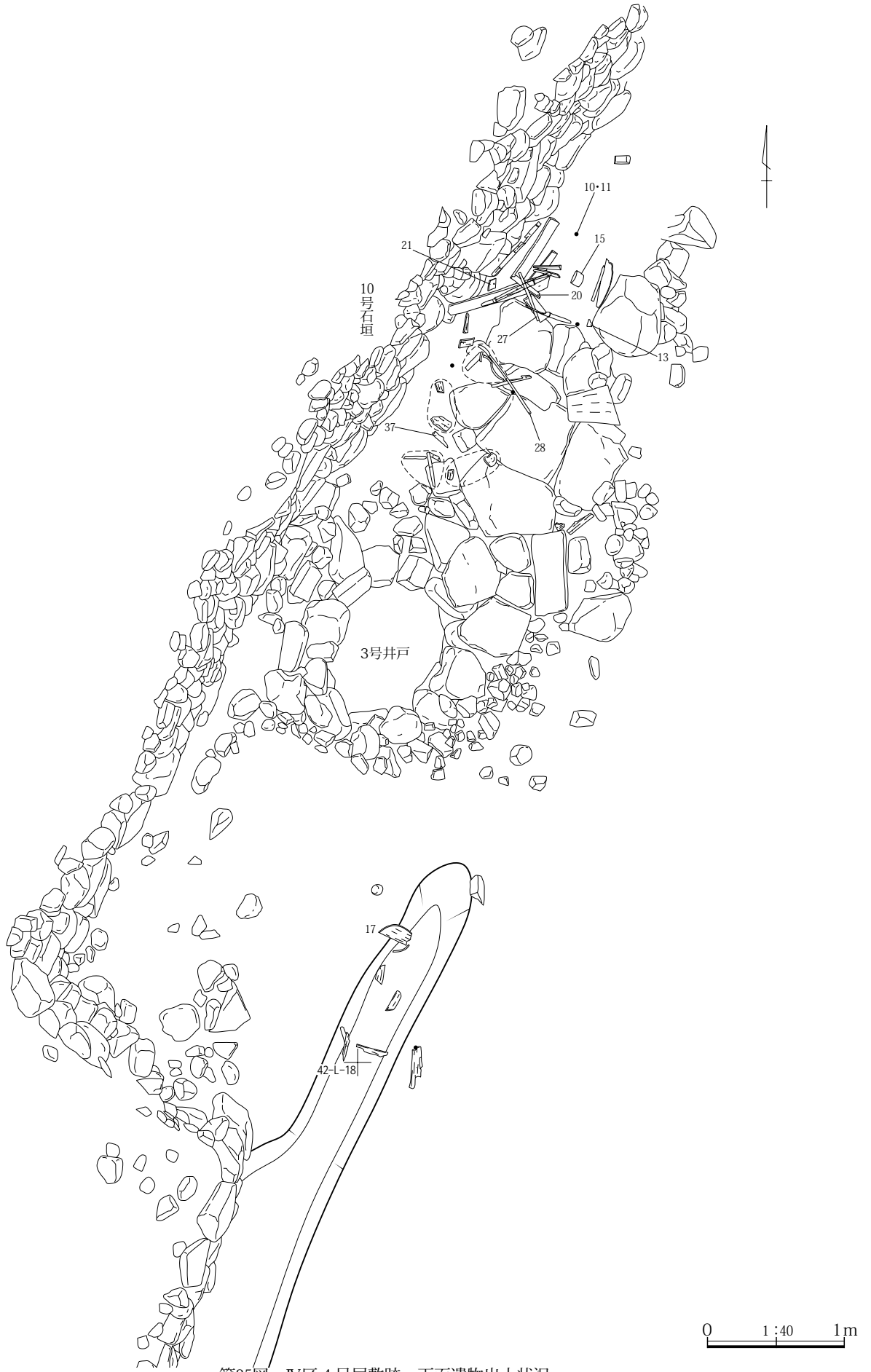
【形状・規模】屋敷跡西側の10号石垣は、9号建物北西部の10号溝から少し離れるように南に延びている。3号井戸南で大きく東側に90°近い角度で西側に曲がり1.80mほど東側の地点でまた90°近い角度で南側に曲がっている。南西端部で90°近い角度で東側に曲がり6号道付近まで伸びている。石垣の積み方は、次のようにA・B・C類の3種類観察できる。A類=10号溝から3号井戸北側までの場所に積まれている。幅30cm以下、厚さ15cm以



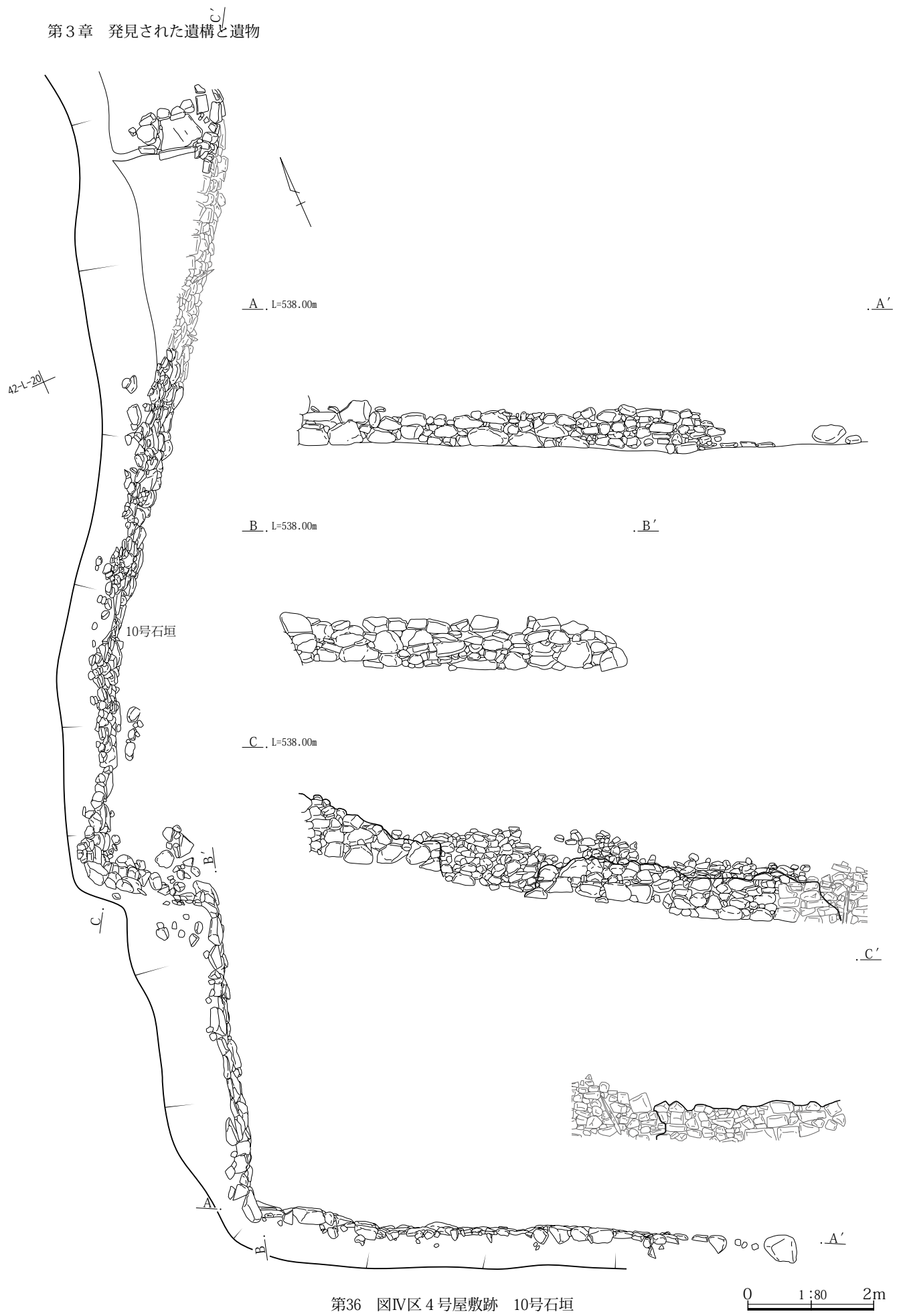
第33図 IV区4号屋敷跡 南西部 土壁出土状況



第34図 IV区4号屋敷跡 上面遺物出土状況



第35図 IV区4号屋敷跡 下面遺物出土状況



第36 図IV区4号屋敷跡 10号石垣

下の小さな石を積んでいる。4.00m幅の中で数えると横方向に約20個の石を並べている。B類=A類の下に積まれている。幅45～50cm、厚さ20cm前後。4.00m幅の中で数えると横方向に約10個の石を並べている。C類=3号井戸北側から南に積まれている石垣すべて。幅50～60cm、厚さ50～60cm。4.00m幅の中で数えると横方向に約8個の石を並べている。

A類の石垣は、B・C類の上に新たに積まれた石垣であり、積み方が雑でA類の石垣の上に少し残るが、大部分はその後崩れたものと思われる。

石垣の長さは、3号井戸部分で曲がっているが、南北方向26.5m東西方向8.90mで合計35.4m、石垣の高さは、70～100cmである。

【所見】10号石垣は、おそらく3時期に分かれる。9号建物西側のB類の石垣は9号建物と並行でない。おそらく作られた時期が違う。3号井戸から南の石垣は、おそらく東西方向に積み、C類の石垣は9号建物を新たに建てるために南側に敷地を拡張した段階で積まれたものであると考えられる。B・C類の石垣の上に小さな石を用いて積んだ石垣は、山崩れ等により畑面が高くなった段階で、少しずつ積み足した石垣と考えたい。雑に積んだA類の石垣は、もろく大部分がその後崩落したために、発掘段階では残っていなかったものと思われる。同じ石垣でも北に接する。12号石垣や10号溝の石垣が良好に残っているのと対照的である。

⑧石棚(第30図)42区K・L-20・21グリッドに位置する。

【位置】6・10号溝が接する付近で、10号石垣の一部を掘り込んで平らな石を組んで作られた棚と思われる遺構が確認された。

【形状・規模】6号溝底部から50cmほど高い位置に東西幅58cm南北幅52cm厚さ11cmの平石を底石として置き、南側には幅62cm厚さ12cmの平石が側壁のように立てかけてあった。底石西・北面に平石は無いが石垣が築かれていた。6号溝に面する東側は出入り口のためか石垣は無い。このように平石の3面を石で囲まれている。

【所見】10号石垣の上部分は崩れて残りが悪かった。その上部分の一部を掘り込んで造られており、天明三年段階までさかのぼるか疑問も残るが、多くの木製品を出土した6号溝の使用段階で棚として使用した可能性があるため報告する。用途不明の遺構である。

⑨出土遺物

遺物は、建物西側にある屋敷地と畑を区切る石垣付近、3号井戸の北に集中し、泥流で押しつけられたかのような状態であった。調査時に9号建物として取り上げられた遺物は、この石垣付近からの出土である。陶磁器類は植物遺存体に混じって出土しており、原位置をとどめていた遺物はない。陶磁器類で図示しなかった遺物は江戸時代の磁器3点13g、陶器2点19g、近現代の陶磁器4点77g、土器類1点50g、コンクリとスレート6点36gである。木製品を含む植物遺存体は111点出土し、遺跡全体の約1/6を占める。これらのうち22点を3号井戸北側出土、5点を南西部出土として掲載した。

金属製品では薬缶(34)、鉄鍋(35・36)や鍋蔓(37・38)、包丁(39)などが出土している。特に36は木製蓋をした状態で出土している。石製品としては、南西部の石垣付近から硯(7)が出土している。

3号井戸

陶磁器類の出土はなく、木製品は「○」内に「泉」の焼印のある曲物底板(31)と杓文字(32)が出土したのみである。

6号溝

図示しない陶磁器類は、江戸時代磁器2点25g、陶器2点23g、近現代陶磁器5点119g、土器類1点22gが出土している。

木製品は建築材と考えられる構築部材4点(1～4)と長さ30cm弱の木製品片と竹片が出土したが、後者は調査時の記録のみとした。石製品としては、自然面を多く残すチャート礫(5)を図示した。

10号石垣

図示しない陶器磁器類は、江戸時代磁器1点154g、陶器2点69g、近現代陶磁器1点9gが出土している。また、「10号石垣A下層」の注記がある物は江戸時代の磁器1点8g、陶器6点64gがある。また、長さ20cmから25cmほどの木片と木製品片4点が出土したが、調査時の記録のみとした。

(2) 5号屋敷跡(第38図、PL.13)

① 5号屋敷跡の調査経過と調査概要

5号屋敷跡は、屋敷跡として前回報告し、今回の調査でもそれを引き継いでいる。しかし他の屋敷跡が生活するための建物であるのに対し、この5号屋敷跡の母屋である10号建物は、酒を造る酒蔵と考えられているので、他の屋敷跡とは異なっている。発掘調査は、平成20年9・10～12月に実施し、その後平成21年9月に礎石列等の調査を行っている。12号建物、11・12号石垣の一部と10号建物南西部にある槽場の男柱や建物の礎石等の調査を残して、平成21年9月をもって調査は中断した。発掘が終了している部分は『東宮遺跡(1)』(2011)、『東宮遺跡(2)』(2012)として調査報告書が刊行されている。平成26年7月から発掘調査が再開され、12月まで前回調査できなかった部分の調査を実施し5号屋敷跡全体を発掘することができた。今回の報告では、前回調査できなかった部分、および追加調査した遺構の報告を主としており、前回報告されている部分の報告は基本的に行っていない。

5号屋敷跡は、10号建物(酒蔵)と12号建物(付属建物)、室の可能性が考えられる1・2号施設、1号炉によって構成されている。これらの建物は、出入り口である東側に石垣、その先に6号道、北に11号石垣、西に12号石垣、南に13号石垣があり、4方向すべて石垣で区画されている。調査前には屋敷跡の南側に11号溝があり、調査段階でも常時水が流れていた。11号溝の南側にあった天明以降おそらく近代以降に造られた一部コンクリートが敷設されている石垣を撤去すると、その下から、天明泥流で埋まっていた新たな10号溝が確認された。この溝が天明三年段階で5号屋敷跡と同時存在していた溝である。

(ア) 10号建物槽場(第40～44・168図、PL.13～15・91・92)42区I・J-22・23グリッドに位置する。

【確認状況】前回の調査で槽場跡の調査は、酒槽を据えた6基の礎石と垂壺に相当すると考えられる平面円形の石組の凹部(底面に石敷)と支柱(男柱)の平面と一部断面の調査である。平成26年度の調査では、上部は切られていて、地表面から下が現地に残っていた支柱(男柱・長さ1.65m)の地下構造の調査を実施した。

【構造と規模】調査の結果以下の構造が明らかになった。最下層の掘り方を7面とし、泥流に埋もれた面を1面とする。

7面：酒蔵南西コーナー部分の礎石内側に男柱と男柱底部付近に組み込まれている貫(丸材)を埋めるために、底部付近で深さ1.70m前後、南北1.40m前後、東西2.50m前後のやや細長い土坑を掘る。男柱を埋める西側部分は、貫を埋める東側部分より少し深く掘る。男柱を据えた後に、周りに長さ20～30cmの石8個を放射状に寝巻石のように並べて男柱を固定している。

6面：土坑に埋め込む男柱は、底部から35cmのところ12cmの方形の穴が彫られており、そこに東西方向に長さ2.27m太さ10～11cmの貫が差し込まれている。差し込まれている貫の長さは2.27m、男柱西側に出ている長さ32.5cm、男柱内の残った長さ36cm、男柱東側に出ている長さ1.58mとなっている。東側の貫が西側より5倍近く長く出ていることになっている。長い東側の貫は、酒槽の下まで延びている。1本の貫の周りに数本の木材も埋まっていた。

5面：貫と直行するように、貫の上に南北方向に8本の材木を並べる。8本の内5本は自然木で1本には木の皮がついていた。3本は角材であり建築部材の転用であろう。長さは89～126cm、太さは5～12.6cmであった。自然木は細く角材は太い。男柱西側に大きな角材を1本、男柱東側に7本置かれており、両側と中央部に角材を置いてその間に丸材を置いていた。

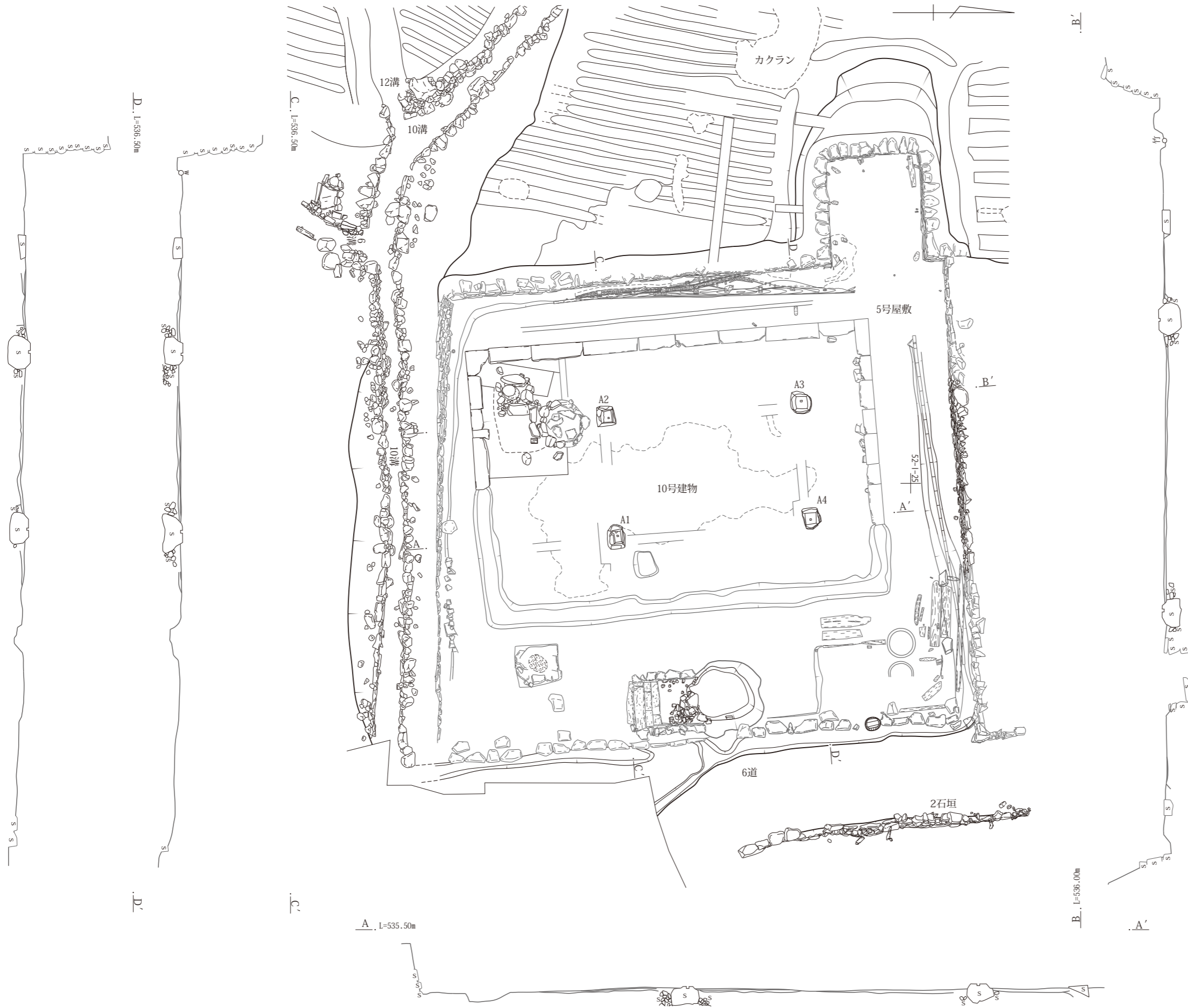
4面：5面で並べられていた8本の材木を上から抑えるように8本の材木は、4面の5本の材木と直行するように東西方向に並べられていた。北側に2本の丸材、中央に1本の角材、南側に2本の丸材であった。大きさは長さ1.35～1.77m、太さは6～14.3cmである。

3面：4面で置かれていた木材5本の内3本は木材の上に、70×75cm、厚さ50cmの大きな石を載せている。その石の周辺や男柱の周辺全体に多くの石を載せて土で埋めている。

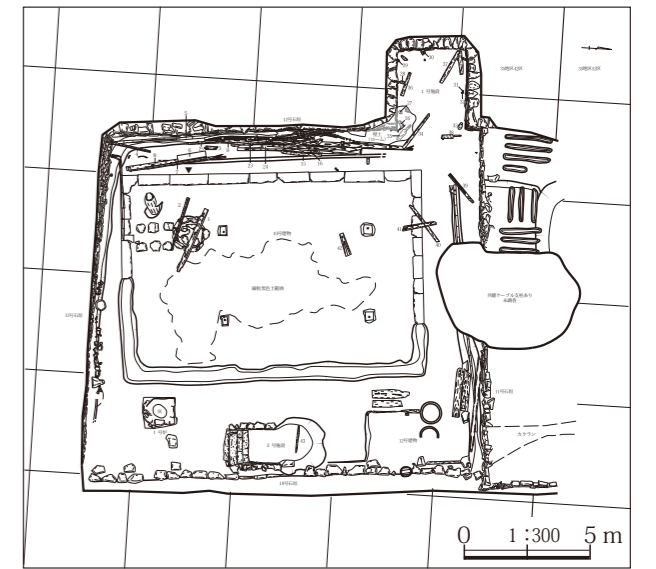
2面：3面の上にさらに多くの石を並べて、男柱を安定させ、男柱の東に置かれる酒槽を置くための面を造る。

1面：天明三年の泥流で埋まった面。男柱は泥流の営力と考えられる力により16°西側へ傾斜している。

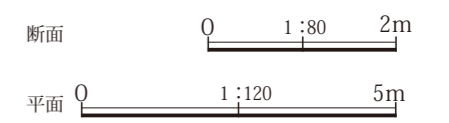
【所見】前報告書の中で槽場について以下のように説明し

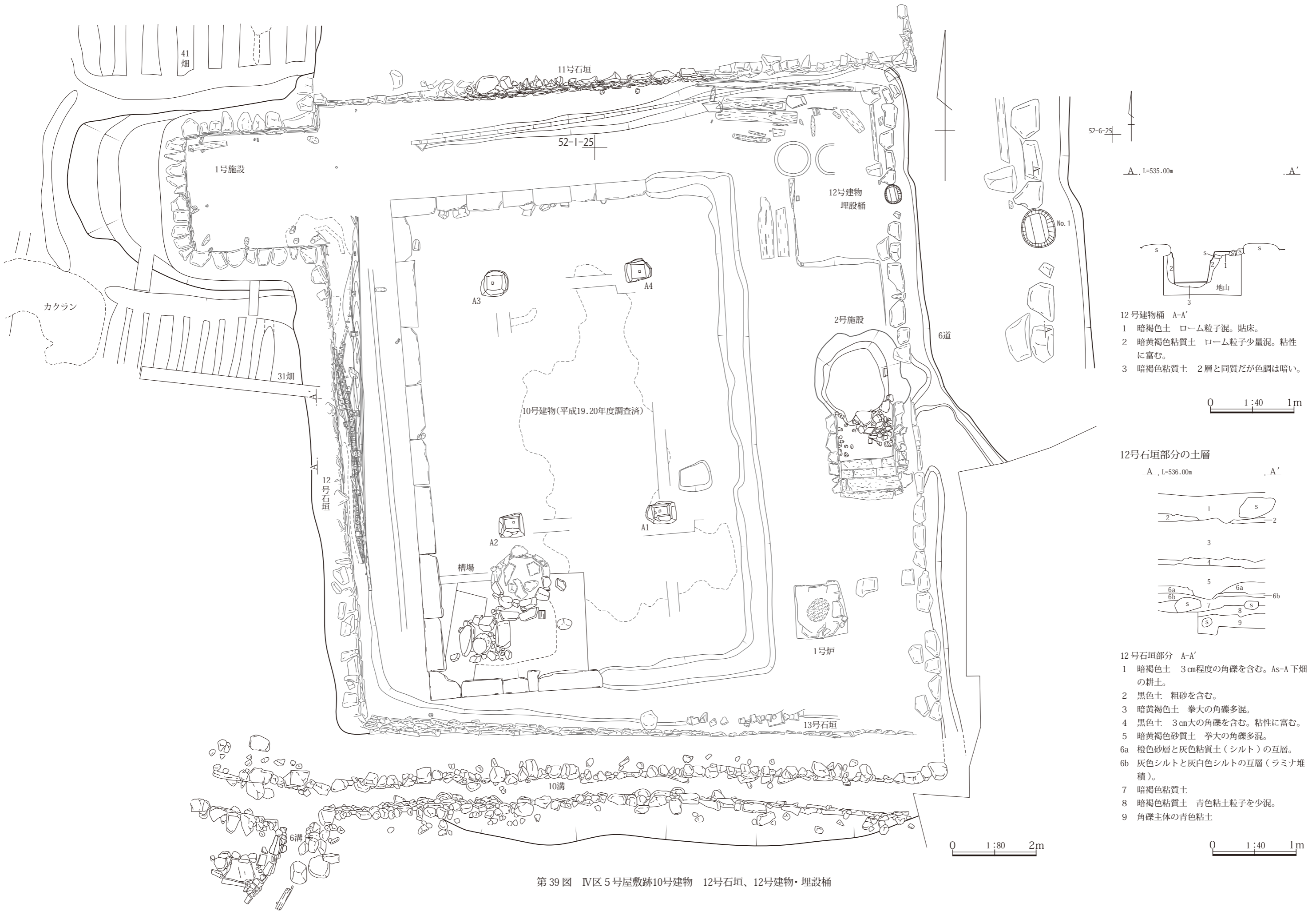


第38図 IV区5号屋敷跡



第37図 前回報告IV区5号屋敷跡





第39図 IV区5号屋敷跡10号建物 12号石垣、12号建物・埋設桶

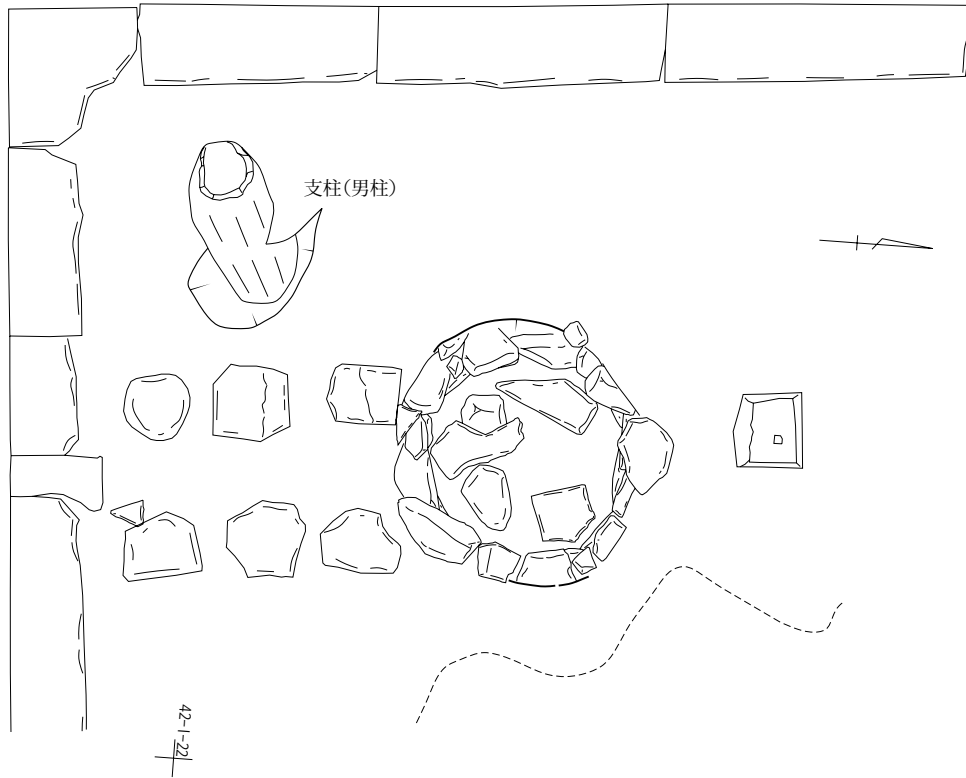
ている。『槽場とは、酒の「搾り」(もろみを絞る)の行程で使用される施設である。もろみは酒袋に入れられて酒槽の内部に積み上げられ、酒槽内部の袋の上には、棧木→番台→枕の順で木材が積み上げられる。これらの木材の上に撥棒と呼ばれる太い梁状の水平材が渡され、その重量が酒槽内に圧力を加え、酒が搾られる。撥棒は男柱と呼ばれる支柱の柄穴に一端が差し込まれて固定され、他方の端には縄で石を多数くりつける。男柱には上方へ大きな力が加わるので、地中深く埋設されているのが一般的である。槽場は「てこ」の原理が利用されており、男柱が支柱(支点)、撥棒が作用点、撥棒の先端に縄でくりつけられた石の重みが力点として作用し、酒が搾られる仕組みである。酒槽で搾られた酒は、槽口(ふなぐち)と呼ばれる下部の注口から流れ出し、垂壺(大甕を地面に埋設したものが一般)に蓄えられる。』説明のように『男柱には上方へ大きな力が加わるので、地中深く埋設されているのが一般的である。』男柱は、地中長さ1.65m埋まっていた。前回の調査で地上に出ていた部分は切断しており、発掘段階で残っていた男柱の長さは2.55mである。先端は腐敗しており柄穴部分を含めて残っていなかった。使用段階ではさらに長かったと思われる。1面から7面にかけて説明したように、男柱は太く長く重量があり、地下深くまで埋まっていた。さらに上方へ大きな力が加わるので抜けないように、男柱下部に長さ2.27m太さ10~11cmの貫が差し込まれている。貫の大部分は、酒槽の下まで伸びており、貫の上には3面の材木とその上に乗せられた大きな石により浮かないように固定されている。その上にはさらに石や泥で埋めて、酒槽を置く面を造成し礎石6個の上に酒槽を設置する。酒槽で酒を搾ることにより男柱が上方へ大きな力が加わると同時に酒槽の下に埋まった貫が男柱を下方に押し戻す働きをすることになる。10建物南西コーナー部分に切石で作られた土台が回っている。それに近接して男柱を埋めるために深さ1.7m前後、南北1.4m前後、東西2.5m前後のやや細長い土坑が掘られている。土台と男柱を埋める土坑の新旧関係については、土層断面から10号建物建設に伴う整地を行った後で、建物の切石土台を配置した。その後整地面を掘り込んで男柱が埋められたことを示している。

(イ)10号建物礎石(第39・169・170図、PL.15)

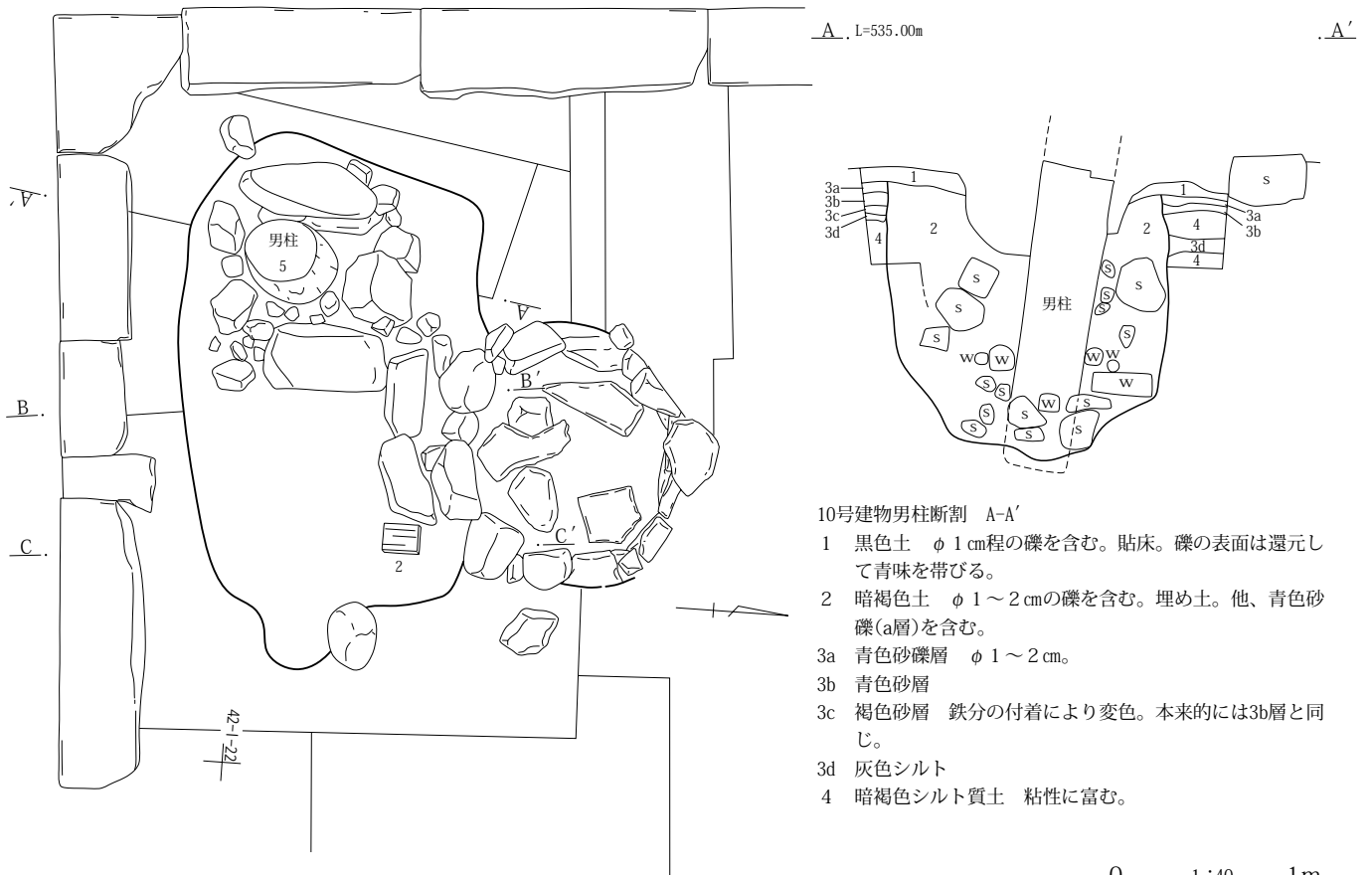
10号建物には、2種類の礎石がある。10号建物壁面の下に置かれている平らな切石(断面三角形および台形)は、建物4面全面に隙間なく置かれていたものと思われる。泥流の堆積が浅い東側は後世の攪乱のためか残っていなかったが、西側で20基据えられた状態で残っていた。建物内側には、柄穴が施された平面方形の切石の礎石が4基(A-1~4礎石)敷設されている。前回の調査では、それらの礎石を撤去することなく、断面図を作成報告した。今回の調査では、撤去して礎石下部を追加調査し断面図を提示した。礎石の大きさはA-1が東西78cm、南北53cm、厚さ40cm、A-2が東西56cm、南北58cm、厚さ38cm、A-2が東西66cm、南北66cm、厚さ44cm、A-4が東西64cm、南北54cm、厚さ34cmと大きい。A-4の礎石底部中央には、石を割るため開けられたと思われる穴が5カ所残っていた。4個の礎石とも、上面は平らに成形されていた。平らに成形されていた面は、石によって異なるが、最も狭い幅はA-1の20cmであった。中央に彫られていた4個の柄穴は、幅が4.8cm前後で正方形を呈し、深さは3~4cmである。礎石は40cm前後の厚さがあるが、大部分は埋められており、表面に出ているのは10cm前後である。礎石の下には栗石等はなく、地山を掘り込み、そこに据えられていた。この礎石の上に柄を持つ柱幅20cmに近い柱が立っていたものと思われる。取り上げた礎石A-1とA-4は、実測図と写真を掲載した。

礎石間の規模等は前回の報告書の中で以下のように報告されている。「礎石間の規模は柄穴の芯々において桁行(南北)5.75m×梁行(東西)3.53mの規模を図る。」

1面



2面



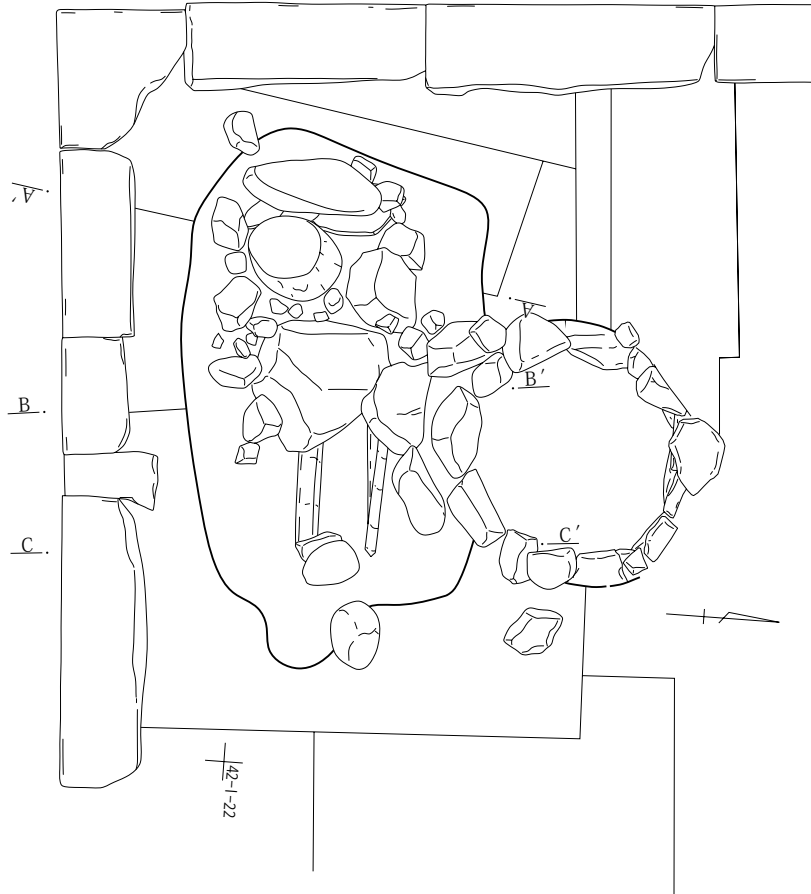
10号建物男柱断割 A-A'

- 1 黒色土 φ 1 cm程の礫を含む。貼床。礫の表面は還元して青味を帯びる。
- 2 暗褐色土 φ 1~2 cmの礫を含む。埋め土。他、青色砂礫(a層)を含む。
- 3a 青色砂礫層 φ 1~2 cm。
- 3b 青色砂層
- 3c 褐色砂層 鉄分の付着により変色。本来的には3b層と同じ。
- 3d 灰色シルト
- 4 暗褐色シルト質土 粘性に富む。

0 1:40 1m

第40図 IV区5号屋敷跡 10号建物 槽場(1・2面)

3面

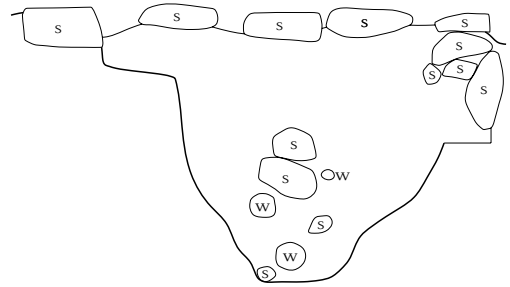
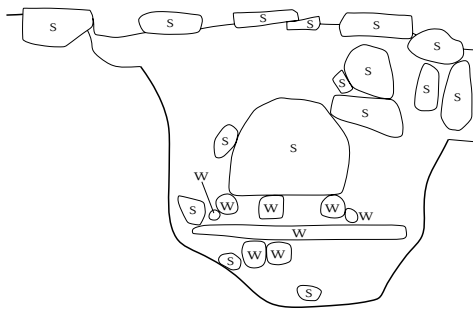


B, L=535.00m

B'

C, L=535.00m

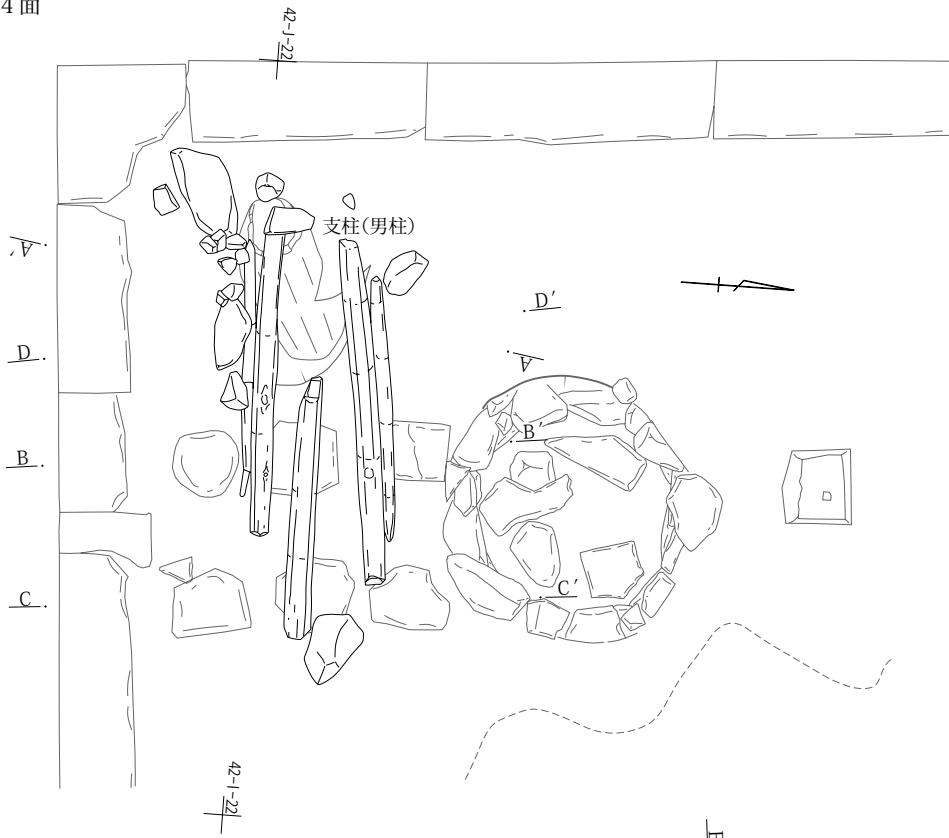
C'



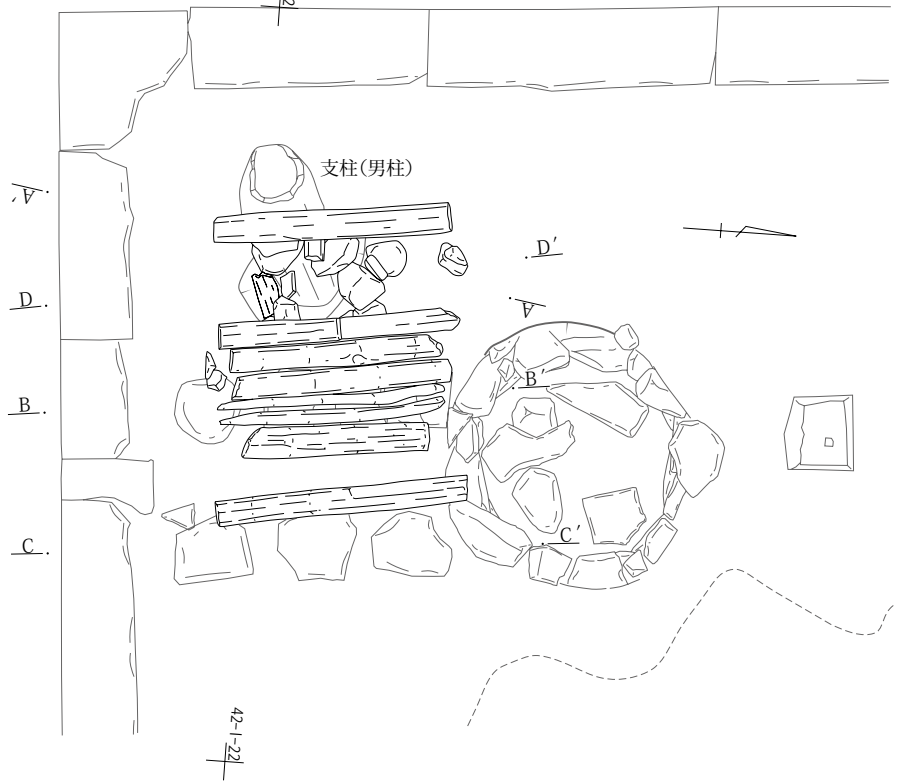
0 1:40 1m

第41図 IV区5号屋敷跡 10号建物 槽場(3面)

4面



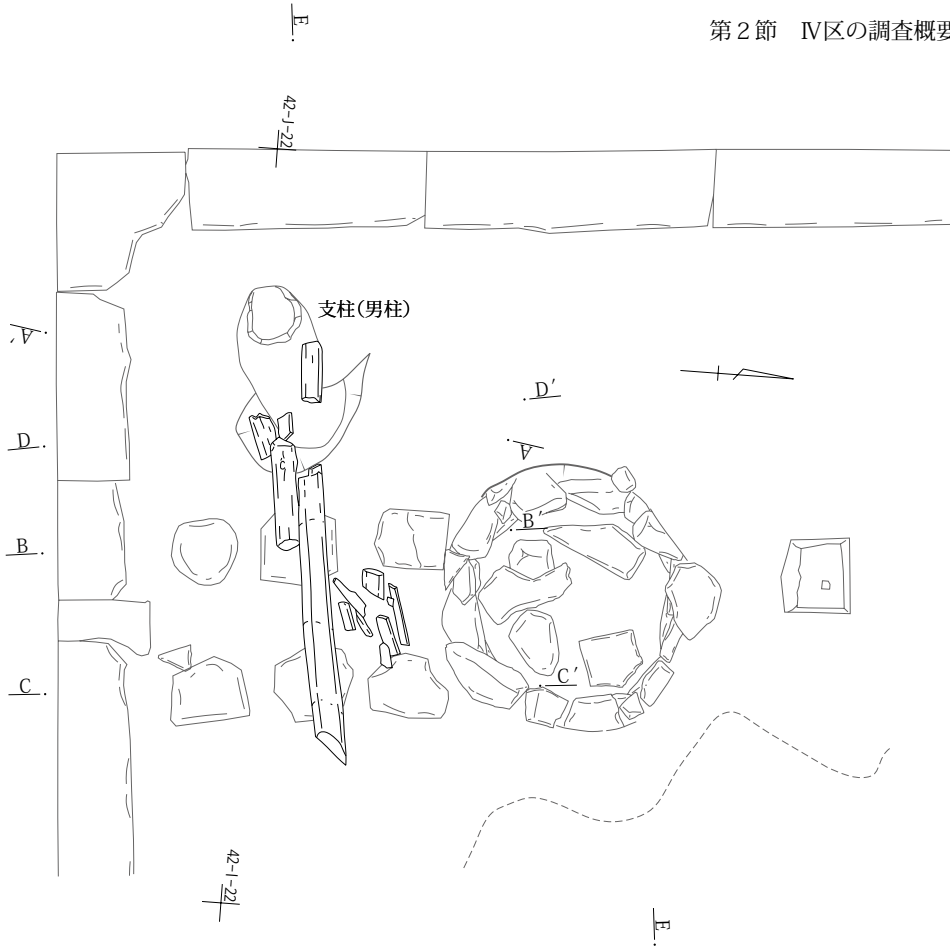
5面



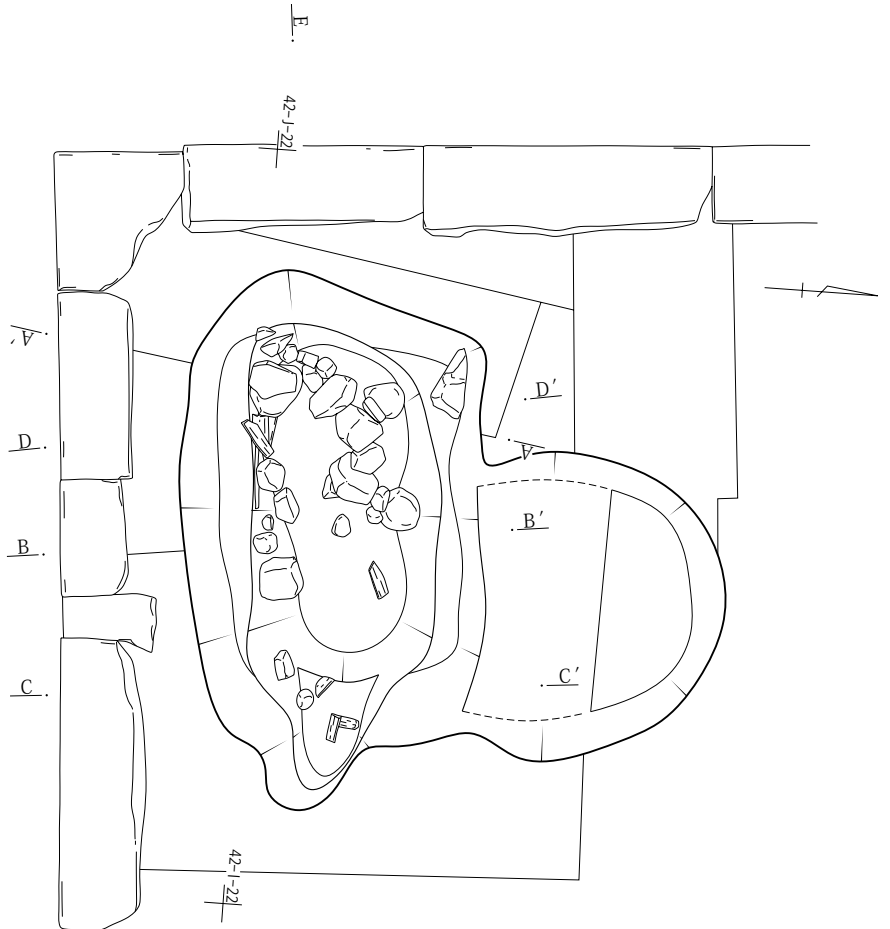
0 1:40 1m

第42図 IV区5号屋敷跡 10号建物 槽場(4・5面)

6面



7面

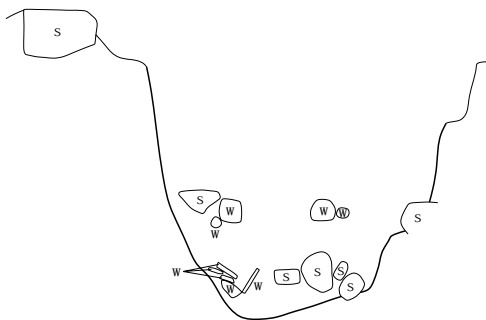


0 1:40 1m

第43図 IV区5号屋敷跡 10号建物 槽場(6・7面)

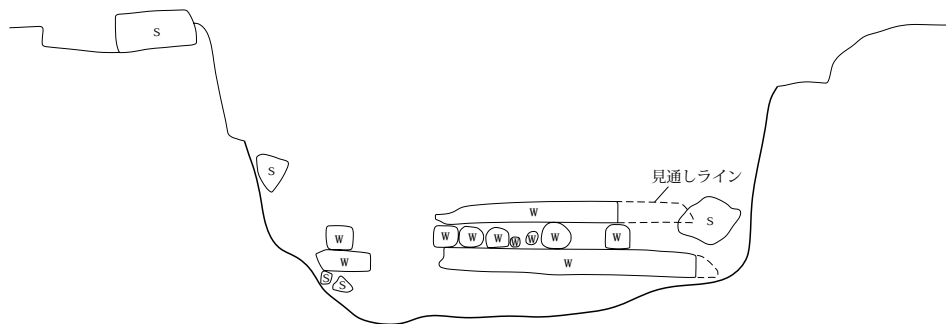
D, L=535.00m

D'



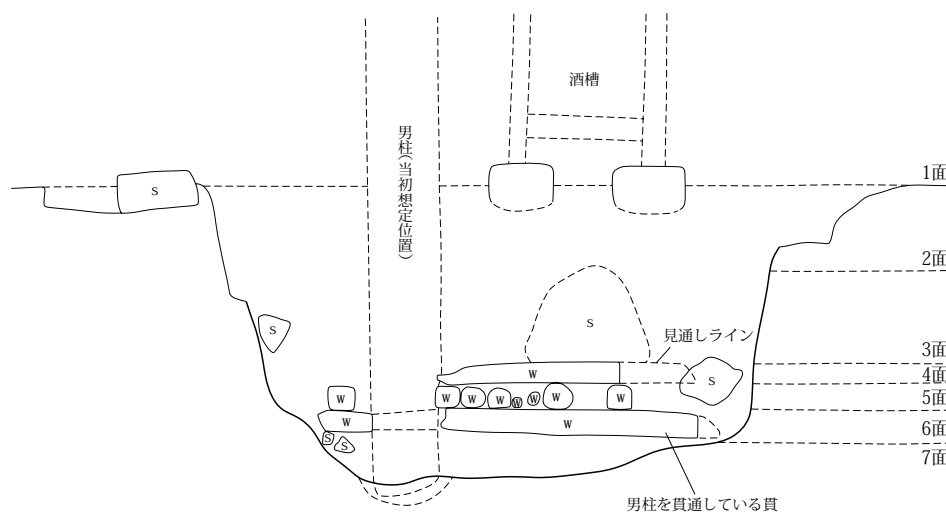
E, L=535.00m

E'



E, L=535.50m

E'



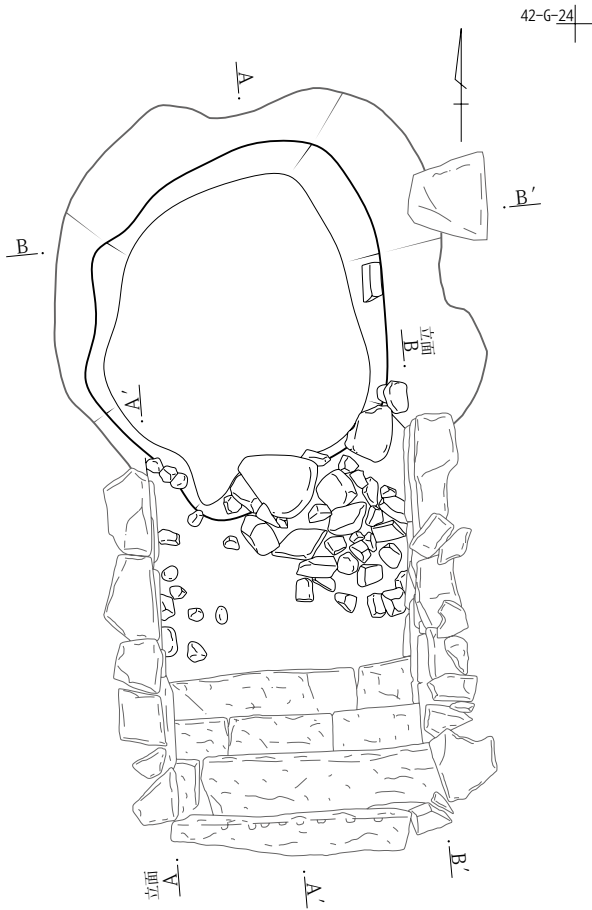
(槽場想定断面)

0 1:40 1m

第44図 IV区5号屋敷跡 10号建物 槽場断面

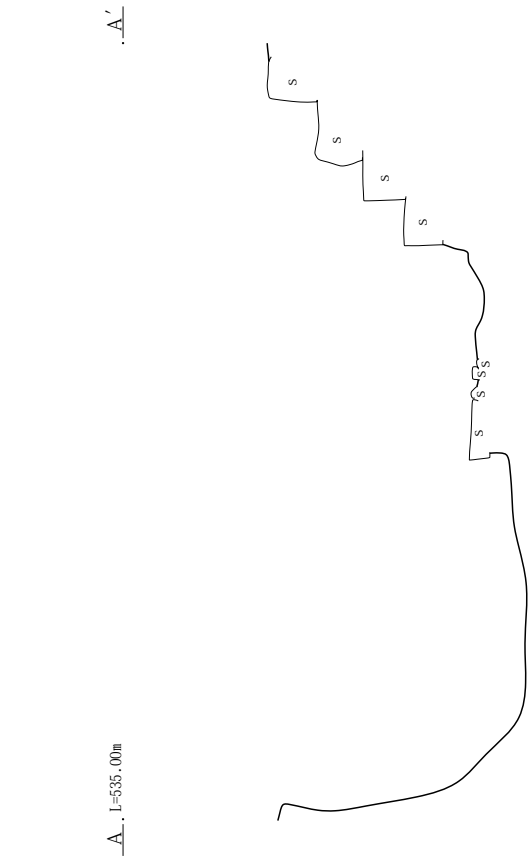
②2号施設(第45図、PL.15)42区G・H-23・24グリッドに位置する。

前回の調査で大部分は発掘調査し、報告されている。今回の調査では、石垣状の石組の最下部と、底面に一部石が敷かれていたような状態で残っていた。その部分の追加調査を実施した。遺構の内容については、報告済みなのでここでは省略する。



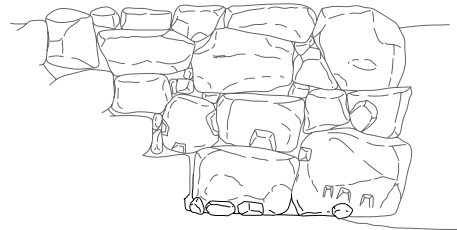
B, L=535.00m

B'



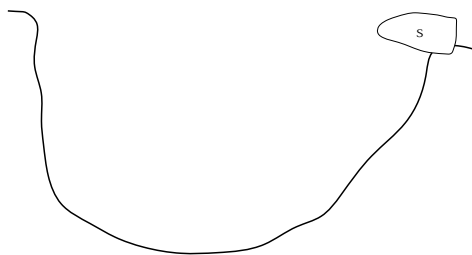
立面
A, L=535.00m

A'



立面
B, L=535.00m

B'



0 1:40 1m

第45図 IV区5号屋敷跡 10号建物 2号施設

③12号建物(第39・171図、PL.16・93・94)42区G・H-24・25グリッドに位置する。

前回の調査で大部分は発掘調査し、報告されている。今回の調査では、東側の6号道との境界部の19号石垣の中に埋設されていた埋設桶の調査を実施した。遺構の内容については、報告済みなのでここでは省略する。桶は、12号建物を区画する19号石垣の中に組み込まれているが、6号道に一部出ている状態である。おそらく12号建物および道路から使用できた埋設桶であったものと思われる。桶は胴中央部から底部が残っていたが、口縁部付近は残っていなかった。馬屋等で見られた円形の桶と異なり、小判のような楕円形を呈していた。桶の大きさは残っていた底部板の大きさが、長径40cm短径30cm、側面に並べられてあった細長い板(側板)は23枚で大きさは幅が3～8cm、長さは30cm前後であった。竹で組まれたタガは、2カ所残っており、底板付近に2本で1組、その上の部分で1本、それより上の石垣部分では確認できなかった。石垣付近にタガがあると思われ、その上まで口縁部はあったと思われる。側板の外側2カ所に墨で文字と記号が書かれていた。道に面した東側には2枚の側板に文字、反対側の12号建物側には、2枚の側板に△印の記号が墨により書かれていた。

④11号石垣(第39図)42区H～J-25、52区H～J-1グリッドに位置する。

前回の調査で、共聴ケーブルの支柱があり、11号石垣中央部分の調査ができなかった。その部分の調査を行い、石垣と石垣下の溝の調査を行った。石垣は前回同様に、横幅50～60cm高さ10～20cmの細長い石を横方向に、石の周りに20～40cmの石を丁寧に積んでいる。

⑤12号石垣部分の土層(第39図、PL.16)42区J・K-21～24グリッドに位置する。

12号石垣の一部を除去し、石垣が築かれる以前の地山の土層の調査を行う。その結果9層確認した。最も上層は天明泥流下の畑耕作土であり、石は除去されて少ない。畑耕作面下30cmより下の3層以下では、土の色の違いや含まれている角礫の大きさや数が少し異なるが、大量の角礫が含まれていた。北側から流れ出た土砂が堆積しているものと思われる。3層以下に大量の角礫があることにより、この付近では3層以下は畑として利用されていなかったものと思われる。

⑥出土遺物

10号建物からは木製品や木片が39点出土し、明瞭な加工痕を有するものや形状が判明するもの5点を図示した。1と3は建築材の端材であろう。2は角材の端材、4は栓と考えられる。5は男柱の地中部分である。下部には地中梁状の角材が通されている。なお、槽場の地中施設に使用された木材は調査時の記録のみとしている。

陶磁器類や金属製品は出土していない。石製品は出土していないが、柄穴を有する礎石2点(6・7)を図示した。礎石7の底面には石を割ろうとした際の矢穴が残る。他に、屋敷には伴わないが重さ28gの黒曜石が1点出土している。

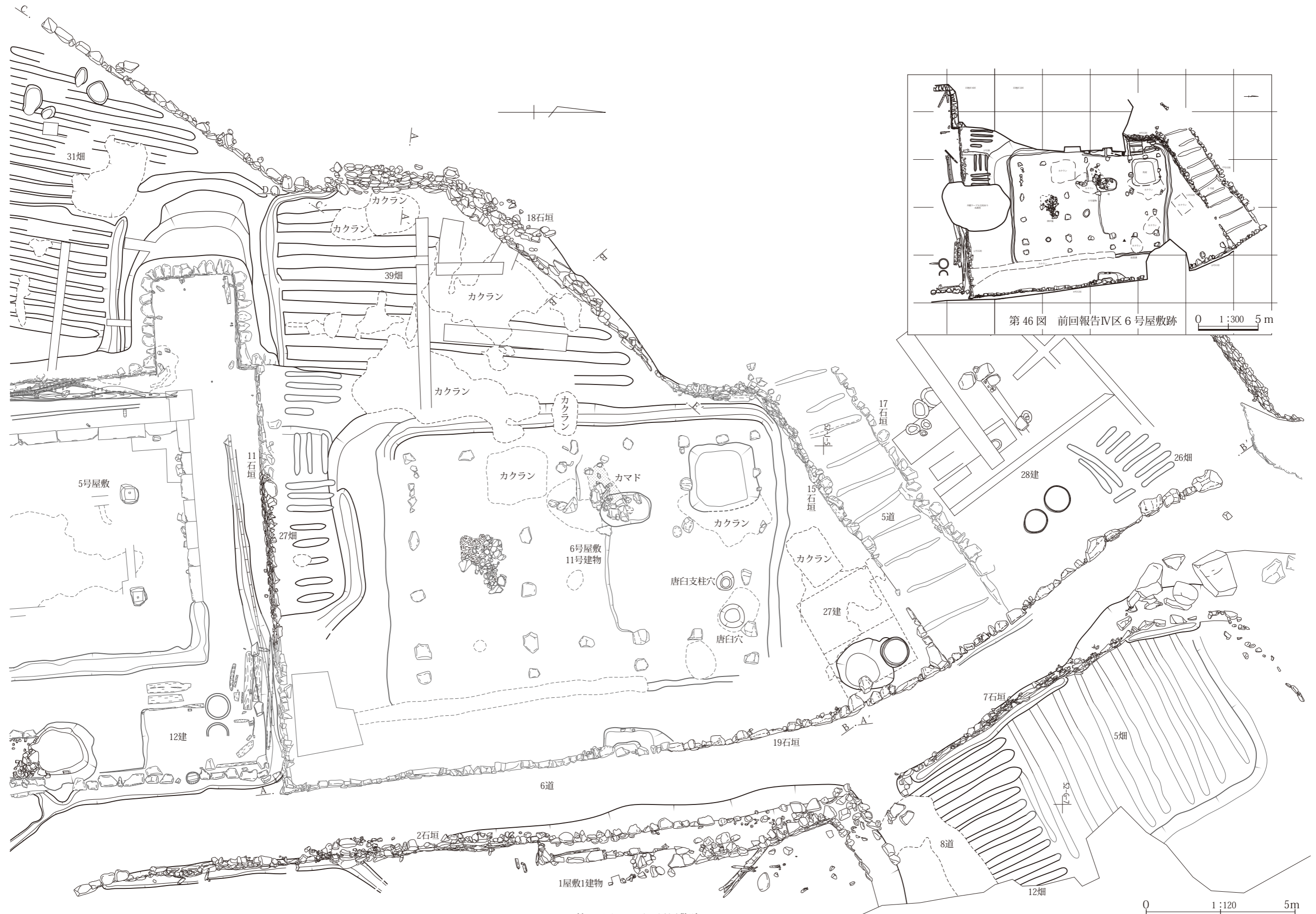
12号建物出土からは、江戸時代の磁器1点4gと近現代陶磁器2点17g、木製品は図示した桶1点(1)のみと出土遺物は非常に少ない。桶は埋設されていたが、タガの残りが悪く、展開した状態で測図した。側板には「-△」の記号と文字が墨書されるが、文字は一部残り他は欠損している。反対側には「中湊」、「長沼」と2文字ずつ2行の墨書が残る。墨書はいずれも側板2枚にわたり、埋設時には見えない状態である。

11号石垣からの出土遺物はなく、12号石垣からは江戸時代の磁器1点3gが出土しているが、図示し得ない細片であった。

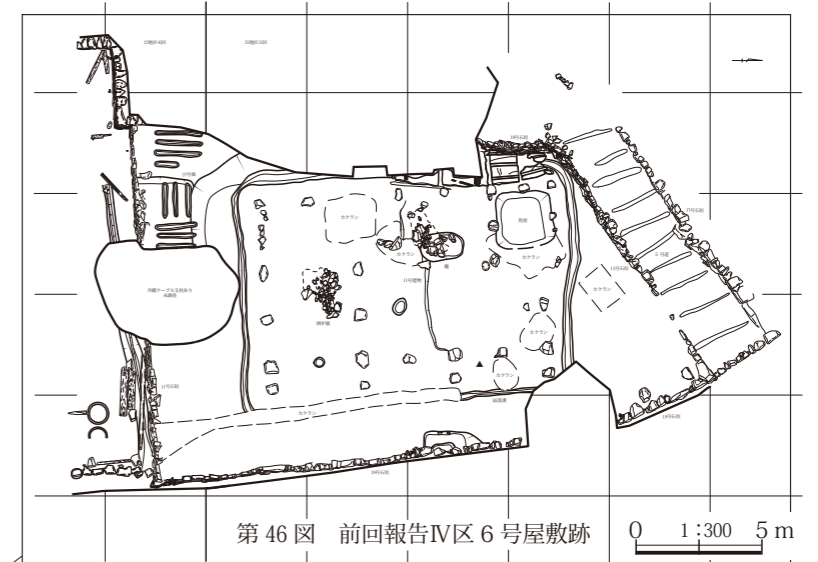
(3)6号屋敷跡(第47図、PL.17～20・95～99)

①6号屋敷跡の調査経過と調査概要

6号屋敷跡は、平成20年9・11・12月および平成21年10月に調査を実施した。調査により11号建物全体は、西側壁面中央付近以外はほぼ調査を行ったが、竈と攪乱を受けていた北東部分および11号建物北西部に残されていた土壁部分は調査途中となっていた。また屋敷跡南中央部分の共聴ケーブルの支柱部分および屋敷跡西側は調査対象外となっており、屋敷跡全体を発掘することはできなかった。発掘が終了している部分は『東宮遺跡(1)』(2011)、『東宮遺跡(2)』(2012)として調査報告書が刊行されている。平成26年度8～10月まで調査が行われ、調査途中であった竈等の調査を実施した。新たに共聴ケーブルの支柱部分や、18号石垣、39号畑部分や前回確認できなかった11号建物北東部の三角形状の平坦地の調査を実施し、そこで新たに確認された27号建物を調査し



第47図 IV区6号屋敷跡



第46図 前回報告IV区6号屋敷跡 0 1:300 5m

た。18号石垣南ではなだらかな傾斜面の39号畑が確認された。11号屋敷跡と東側39号畑の畑との境に段差は無い。

このように建物裏に石垣の築かれていない建物は、東宮では例がなかった。天明泥流が押し寄せた段階で、建物や建物内生活用具の多くのが西側の39号畑部分に押し倒され、あるいは押し流されていた。11号建物北西コーナー部分に近い18号石垣付近では、4枚の土壁が石垣および39号畑に倒れて残っていた。土壁の一部は壁全体の状態を良好に残していた。1枚の土壁が西側に5.00m以上離れた18号石垣手前の39号畑まで飛ばされていた。飛ばされていた土壁(1～5号)の上からも多くの陶磁器が出土しており、土壁と一緒に飛ばされたことを示している。11号建物に近接した39号畑面から寛永通寶が紐で束ねられた緞銭の状態でもとまって出土している。また陶磁器や鉄器・木製品等多くの遺物が出土しており、それらの多くは11号建物で使用されていたものと思われる。

新たに調査した遺構や遺物について報告し、平成20・21年度に調査し、既に報告されている11号建物の礎石・建物の規模・囲炉裏・馬屋・15号石垣・27号畑についての報告は行わない。

②11号建物(第47・172～176図、PL.95)52区F～J-3～5グリッドに位置する。

(ア)竈(第48・49図、PL.17・18)52区J・K-3・4グリッドに位置する。

【調査概要】平成20年度の調査内容は報告書の中で報告している。竈を構築している多くの石が竈内に残されていたので、それらの石を撤去して調査を続行した。竈は、泥流により西側に押され、竈を構築している石やロームが南西方向に流れていたが、それらを取り除いて調査した。竈の残りは泥流により壊されて良好ではなかったが、残された遺構から多くのことが明らかとなった。竈は焚口が北側であり、焚口で使用された両袖部分に2つの切石が、西側に傾きながら残っていた。焚口部分の幅は20cm前後である。ほかに右袖部分の切石の側壁1石がほぼ元の位置にあり、また切石の左袖1石が燃焼部に倒れ込んだ状態で残っていた。奥壁部分では、切石が残っていなかったため不明である。しかし他の切石を据えた掘り込みと同じような掘り込みが2カ所残っていたので、おそらく同じような切石が使われていたと思われる。焚口・側壁・奥壁で各2石の切石を組んで竈の基礎部分を

組み、その上部に、石やロームを用いて竈上部を組んで作られていたものと思われる。

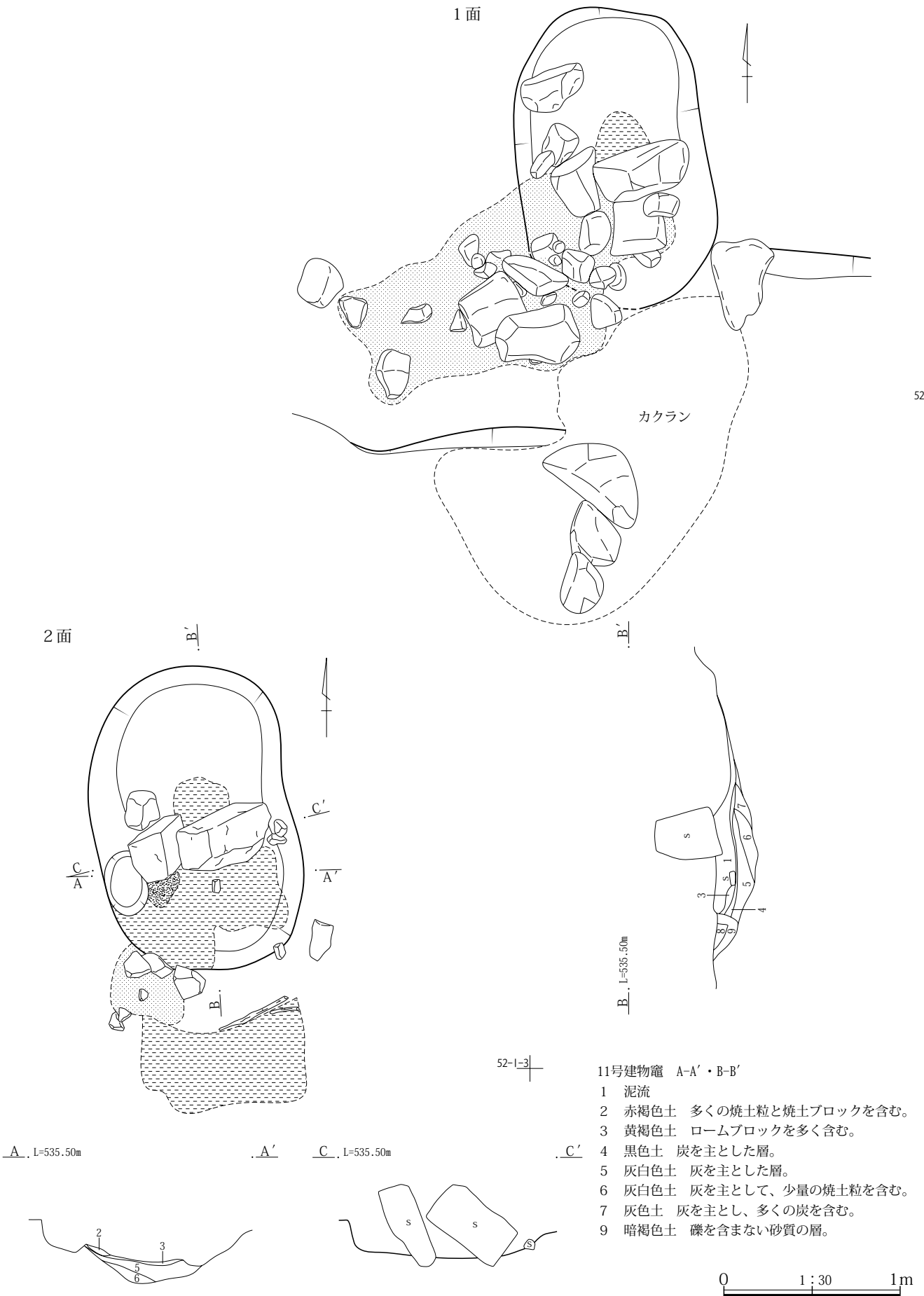
【規模】規模は推定であるが、石組外側で東西南北とも1.00m前後、内側(竈内)で東西南北とも40cm前後である。焚口部分左側の切石の大きさは幅25cm長さ50cm厚さ20cm前後であった。竈内は、ほぼ全面に炭面その下に燃焼部付近を中心に灰面、その下に燃焼部中心部分を主に狭い範囲で焼土面となっていた。

竈は床面を長楕円形に掘り込んだ中に造られていた。掘り込み面の規模は南北1.70m、東西1.00m深さ20cm前後である。そのように南北方向に長い掘り込み面を持つ例は東宮遺跡では他にない。

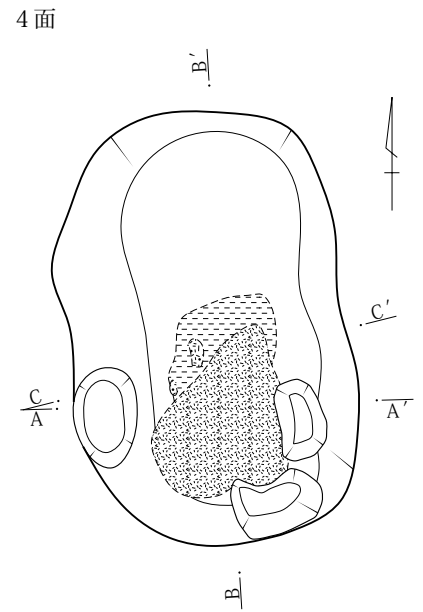
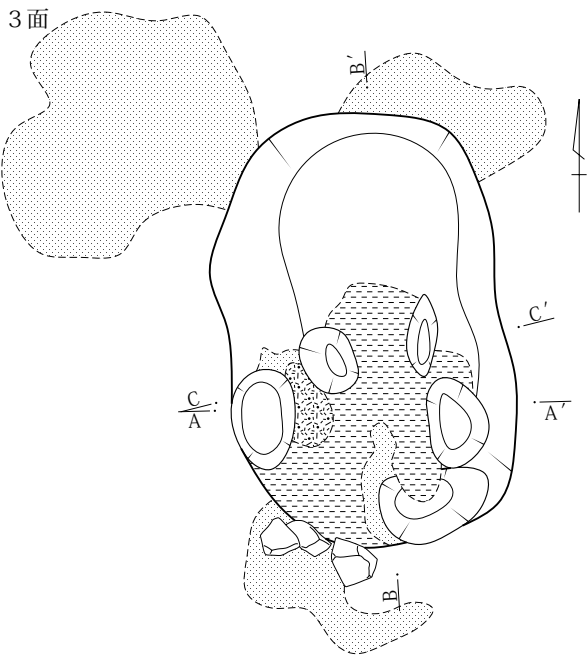
【所見】焚口部分を11号建物出入り口部分でなく、馬屋方向に持ち、しかも竈は、床面を土坑状に掘り下げた中に造られていた。残りが悪く明確でない部分が多いが、以上のような特色を持つ竈と思われる。

(イ)土坑(唐臼と思われる掘り込み)(第49図、PL.18)52区H・I-4・5グリッドに位置する。

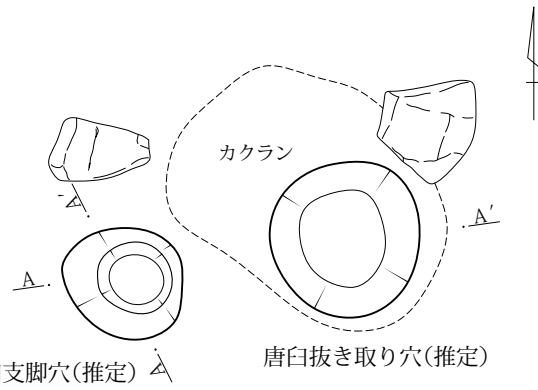
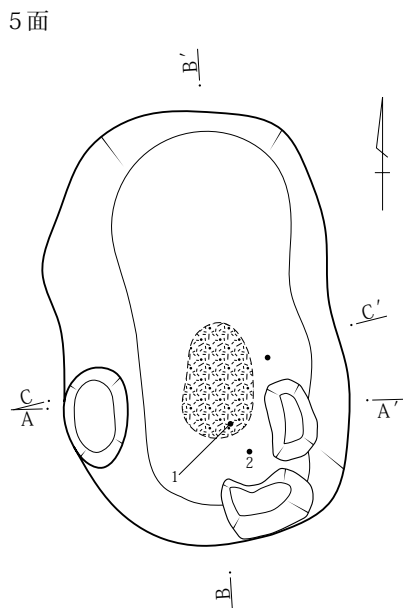
北東コーナー部分で、土間出入り口北側、馬屋手前の東側の土間部分に大小2基の土坑が確認された。大きな土坑は幅70cm深さ40cm前後、小さな土坑は幅40cm深さ60cm前後、土坑の距離は中心で1.20mであった。このような2個1組の土坑は、18号建物にもあり推定であるが大きな掘り込みは石製の唐臼が埋まったものが抜き取られた穴であり北側の小さな掘り込みは、杵を支える支脚が埋められていたものと考えたい。可能性の一つとして報告する。



第48図 IV区6号屋敷跡 11号建物 竈(1・2面)



52-1-3



唐白支脚穴(推定)

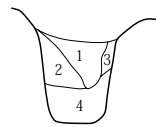
52-1-4

A, L=535.50m

A'

11号建物唐白支脚穴 A-A'

- 1 暗褐色土 φ 1cmの礫を含む。締まりは弱い。
- 2 暗褐色土 φ 2~3cmの礫を含む。締まりは強い。
- 3 黒褐色土 φ 2~3cmの礫を含む。締まりは強い。
- 4 暗褐色土 φ 2~3cmの礫を含む。1、2層よりやや暗い。粘性に富み、締まりは強い。



A, L=535.50m

A'

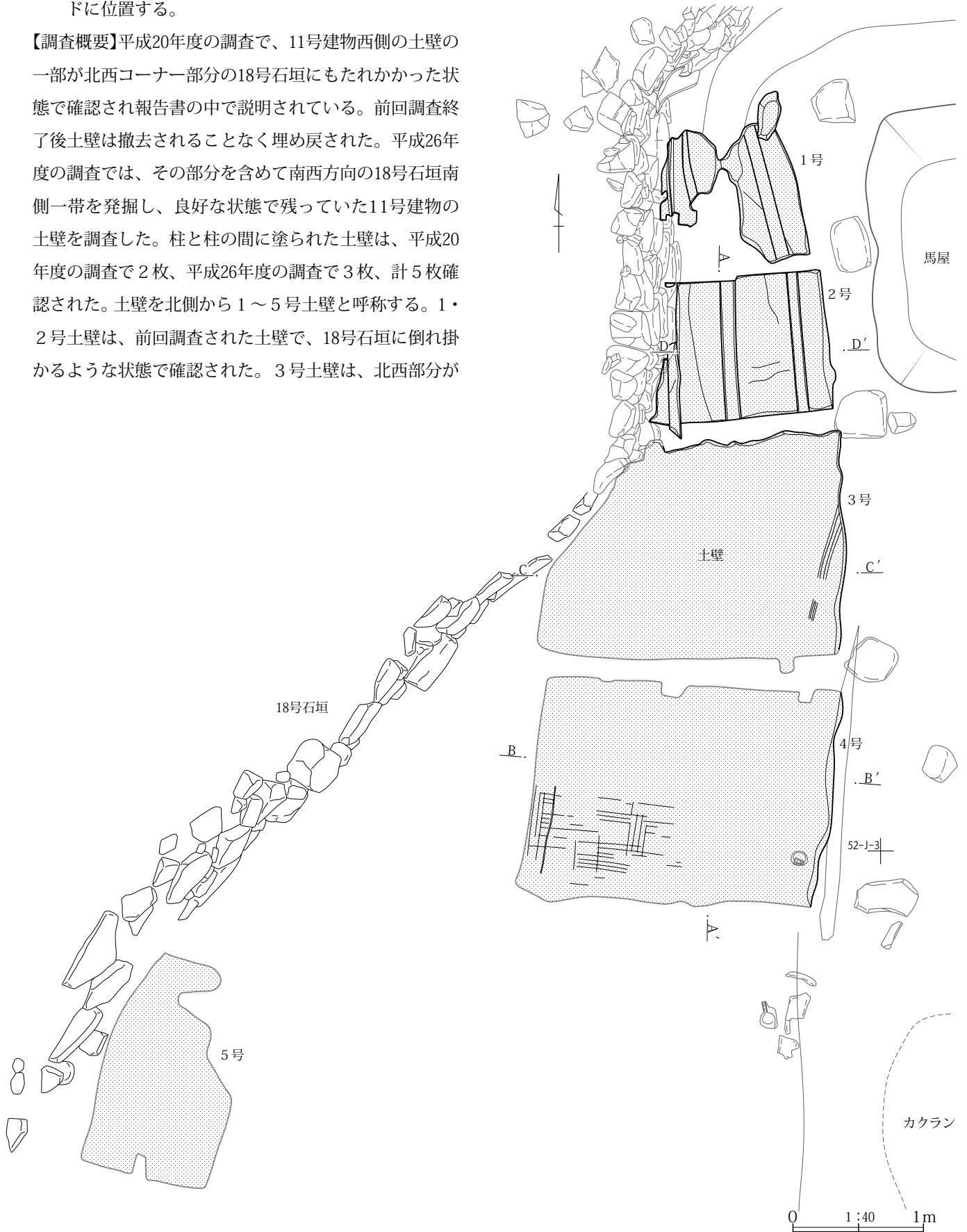
0 1:30 1m

0 1:40 1m

第49図 IV区6号屋敷跡 11号建物 竈(3~5面)、唐白抜き取り穴・唐白支脚穴

(ウ)土壁(第50図、PL.18・19)52区J～L-3・4グリッドに位置する。

【調査概要】平成20年度の調査で、11号建物西側の土壁の一部が北西コーナー部分の18号石垣にもたれかかった状態で確認され報告書の中で説明されている。前回調査終了後土壁は撤去されることなく埋め戻された。平成26年度の調査では、その部分を含めて南西方向の18号石垣南側一帯を発掘し、良好な状態で残っていた11号建物の土壁を調査した。柱と柱の間に塗られた土壁は、平成20年度の調査で2枚、平成26年度の調査で3枚、計5枚確認された。土壁を北側から1～5号土壁と呼称する。1・2号土壁は、前回調査された土壁で、18号石垣に倒れ掛かるような状態で確認された。3号土壁は、北西部分が



第50図 IV区6号屋敷跡 11号建物 西側1～5号土壁出土状況

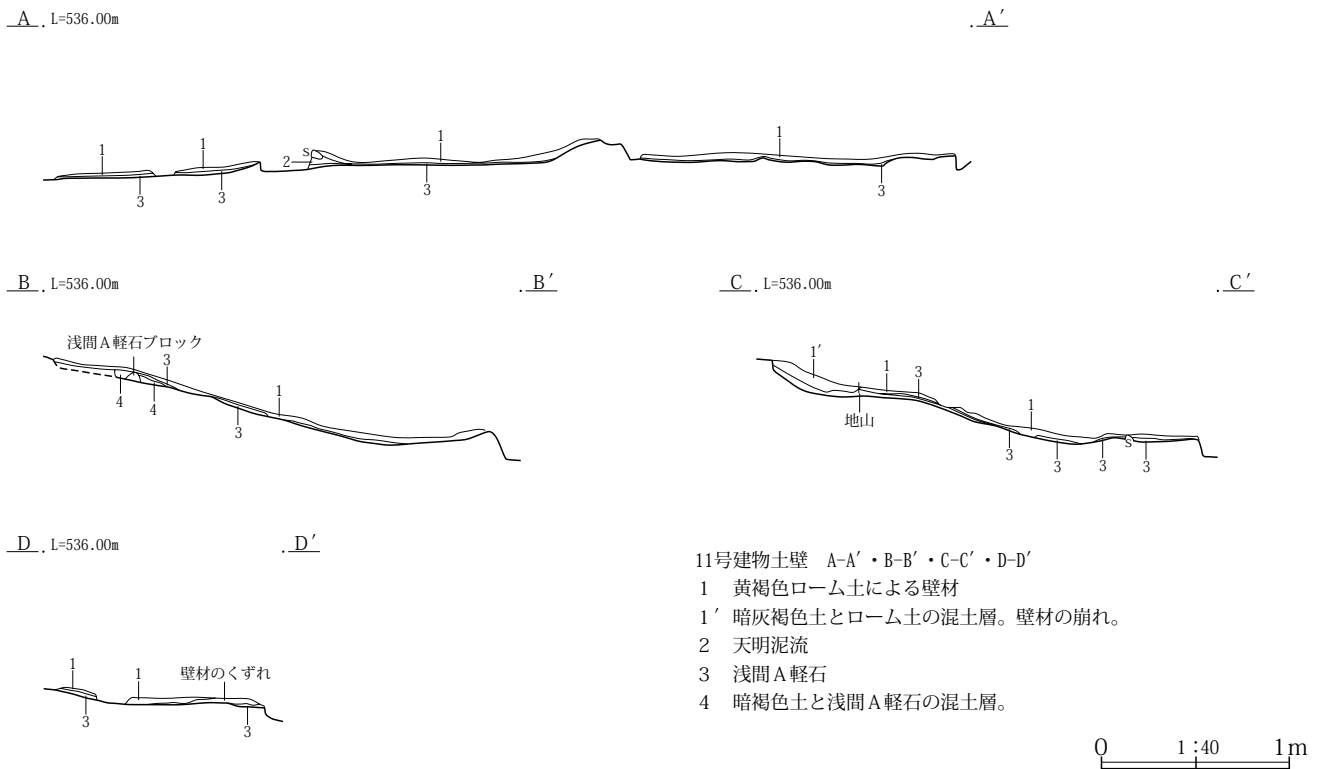
18号石垣にもたれ掛かっていたが、大部分は39号畑に倒れていた。4号土壁はすべて39号畑に倒れていた。1～4号土壁とも東側の礎石から西側に倒れており、柱部分以外は土壁が残っていた。柱と9号建物の礎石位置は一致しており、土壁の幅と建物礎石間の幅もほぼ一致している。天明泥流によりその場に倒された状態であった。5号土壁は礎石部分から5.00m近く西側に飛ばされ、38号石垣手前部分で確認された。泥流により段差のある18号石垣手前まで運ばれたものと思われる。1・2号土壁には上下3カ所の水平部材(貫)の痕跡が残っていた。3・4号土壁では明確でないが1・2号土壁で3本残っていた中の中央部分の位置に当たる延長上に、幅10cm前後の水平部材(貫)の痕跡が1本残っていた。また4号土壁を解体すると芯材が部分的に残っていた。柱と平行する垂直方向では約2cmの間隔があり、土台と平行する水平方向では約3cmの間隔が入っていた。細長い植物で材質は竹ではなく、葛等の植物と思われる。(写真参考)土壁を撤去すると、その下から浅間A軽石が良好な状態で残っていた。

【規模】土壁の幅は1・2面が1.23m前後、3・4・5号土壁が1.70m前後であり、長さは良好に残っていた3・4号土壁で2.40m前後、厚さは3～6cmであった。

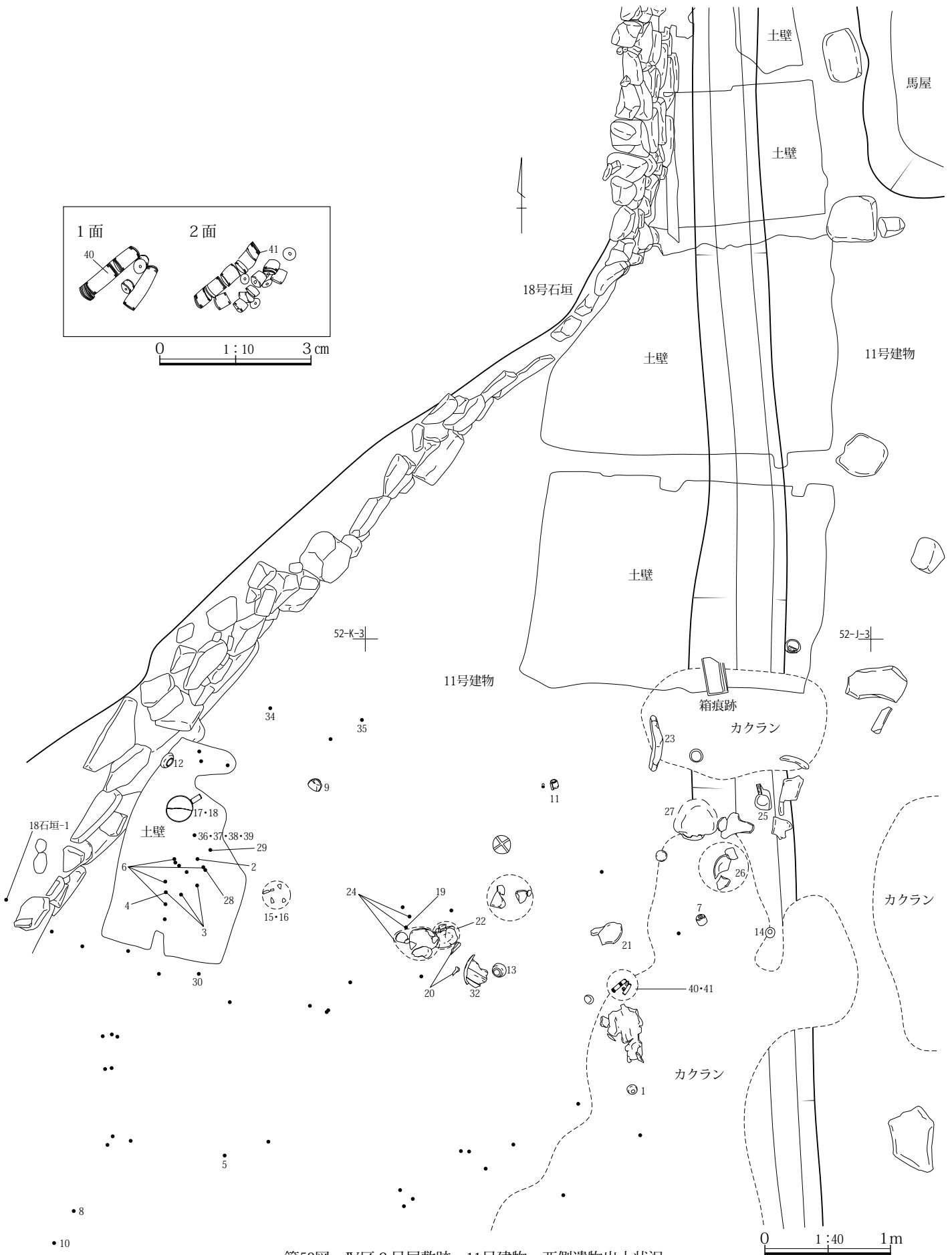
【所見】天明三年段階当時建物の土壁の大きさがわかる貴重な例である。この数値と残された土台の位置等(基本的に芯寸法で土台の距離は1.84m前後と考えている。)から考えて、柱の大きさは12cm前後、壁の高さは2.30m以上であったことが推定できる。土壁の芯材は1号屋敷跡1号建物と異なり、竹でない植物の茎等を使用して組んでいることも明らかとなった。

③27号建物(第53図、PL.19)52区H・I-5・6グリッドに位置する。

【位置・調査概要】石垣で区画されている6号屋敷跡北東部に位置する。6号屋敷跡は、11号建物の他に建物は確認されていなかった。屋敷跡内で埋設桶や小屋等の付属建物を造ることのできる空間はこの部分である。攪乱を受けている上層部分を撤去し調査を進めた。その結果埋設桶1基が確認され、南側には埋設桶が掘り返されたと考えられる掘り込みが確認された。このように2個の埋設桶が並ぶ建物は、西宮遺跡1・2号厩や東宮遺跡14・26号建物で確認されている。これらの建物は、埋設桶2個が置かれた空間と、埋設桶のない空間に仕切られている例が多い。規模は全体で約2.70m(1間半)×4.50m(2間半)、埋設桶のある空間は、約1.80m(1間)×2.70m(1間半)、埋設桶のない空間は、約2.70m(1間半)×2.70m



第51図 IV区6号屋敷跡 11号建物 西側土壁断面(A～D)



第52図 IV区6号屋敷跡 11号建物 西側遺物出土状況

(1間半)である例が多い。桶の大きさは90cm前後、桶の深さは不明である。このような例からみると、2つの桶が確認された建物は、同じような規模を持つ建物の可能性が考えられ、27号建物として調査した。建物の礎石や柱穴等の存在を確認するために周辺を調査したが建物の痕跡は、残っていなかった。建物は他の建物から推定して点線で示した。2号桶を抜き取った時期は明らかではないが、天明三年8月段階に天明泥流で埋まった畑の起こし返しが、麦を播く天明三年10月頃までには実施されているので、早い段階で抜き取られていたことも考えられる。

【1号桶の概要と規模と設置方法】推定線の建物が敷地内にかろうじて入る。桶は2個確認され残りの良い北側の桶を1号桶、掘り返されていると考えられる南側の桶を2号桶とする。1号桶は底面の直径80cm、残っていた上部付近で90cm、深さは現状で55cmであった。底面の縁辺部には、桶の側板の底部は3cmの深さが残っていた。タガの痕跡は2カ所残っており、底面からの位置は下のタガが8cm、上のタガが33cm高い位置であった。

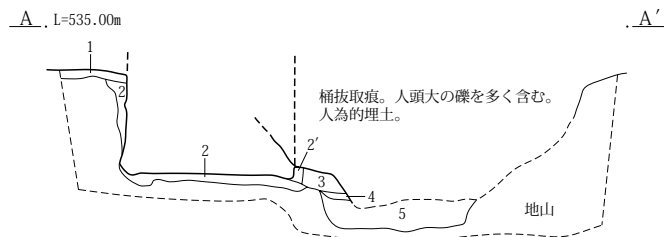
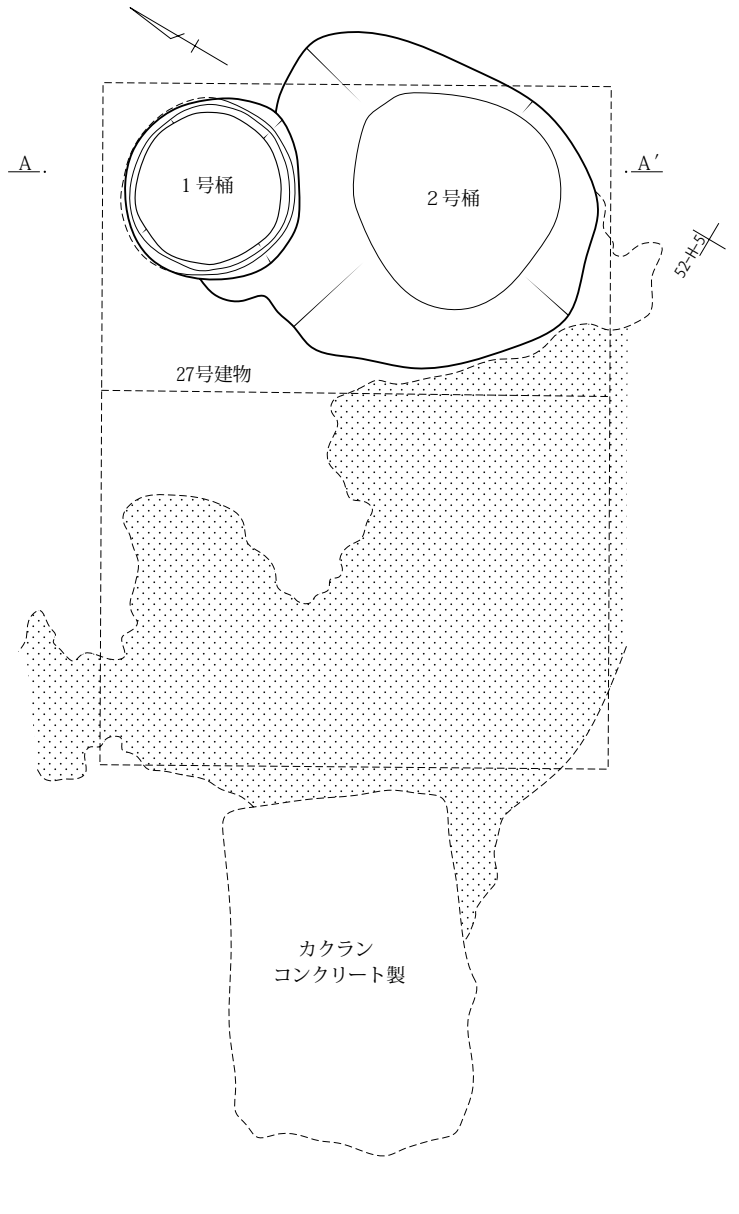
桶は、地山を掘り込み、底部にロームを厚さ6～8cmほど水平に貼り、その上に据えられる。桶の外側には厚さ1～10cmほどのロームを巻くように詰める。桶の口縁部周辺にはロームを敷き詰め床面としている。そのロームは、桶の北と東側に幅35cmほど残っていた。

【2号桶の概要と規模】1号桶を掘り進めると南側壁面部分に、タガの痕跡がなく、壁面の残りも悪かった。1号桶南側に掘り込みがあることが分かり掘り進む。その結果1号桶の掘り込みより、ひと回り大きな掘り込みが南に接してあることが分かった。この掘り込みは1号桶のようなタガの跡やロームを桶のまわりに埋めたような痕跡もないが、大きさや深さは1号桶に近いので、埋設桶を掘り返して抜き取った抜き取り穴と考えた。2号桶を抜き取った後、1号桶は抜き取られることはなかったようである。

規模は東西1.70m南北1.80m深さ70cmである。

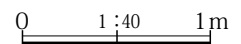
④18号石垣(第47・54・176図、PL.99)42区L・M-23～25、52区J～M-1～4グリッドに位置する。

【位置と概要と規模】15号石垣南西部から11号建物西



27号建物理設桶 A-A'

- 1 少量のローム粒子を含む暗褐色土 貼床。
- 2 ローム土主体の埋土 桶の固定剤。
- 2' 2層と同質だがややロームブロックが少ない。
- 3 暗褐色土 ローム粒子を多量混入。
- 4 暗褐色土とローム土の混土層。
- 5 暗褐色土 ロームブロック・小礫を含む。



第53図 IV区6号屋敷跡 27号建物

側を一部囲い、7号屋敷跡17号建物南西部で10号溝まで繋がっている長い石垣である。石垣の全長は全部で13.6mである。11号建物の西部を一部囲う石垣であるが、全体としては7号屋敷跡の宅地造成に伴う南西盛土部分に積まれた石垣である。そのため石垣は盛土が高い7号屋敷跡13号建物南東部分が最も高く積まれていた。調査部分A-A'部分での石垣の高さは1.70mあり、7段の石が積まれていた。断面で観察すると最も下に積まれた石は、幅65cm高さ30cm奥行は50cmと大きな石を使用していた。盛土が少ない17号建物南東部分の石垣は1段で高さは20cm前後と低い。石垣は底部から3段前後までは、長さ40~50cm高さ25cm前後の細長い石を横方向に積み、その上には長さ40cm前後、高さ20cm前後の少し小さな細長い石を用い、同じく横方向に積んでいる。石垣は、表土および天明泥流で埋没しており、石垣の積み方の特徴から見ても、天明以前に積まれたものである。

⑤19号石垣(第47・55図)52区G・H-4・5グリッドに位置する。

【位置と概要と規模】19号石垣は、平成20年度の調査で多くの部分が確認されているが、全体として調査されていないので、ここで報告する。19号石垣は、6号道西側に積まれているものであり、7号屋敷跡東側から6号屋敷跡東側まで連続して積まれている。6号道東側は低くなっているため、そこには2・7号石垣が積まれている。この石垣は6号道のための石垣であるとともに、6・7号屋敷跡東側を区画する石垣となっている。5号屋敷跡東側は、6・7号屋敷跡同様に6号道に面しているが19号石垣は、6号屋敷跡の南東コーナー部分で終了している。5号屋敷跡敷地の高さが、6号道に近い高さであるために、石垣は不要であったのだろうか。19号石垣の全長は33.9mである。石垣の石は、大きさが幅1.00m前後の大きなものから幅30cm前後のものまで様々に統一されていない。全体的には幅50~100cm前後の大きな石を意識的に多く使っているようである。石垣は大きな石では1段、小さな石の場合では3段前後積んでいる。石垣の高さは、60~80cmである。6号道は6号屋敷跡に面している部分までは、ほぼ平らであるが、7号屋敷跡出入口である5号道付近から北側の山中に道が続くので急激に登り坂になっている。そこに積まれている石垣も大きな石を使用している。石の積み方は、様々であるが、細

長い石は横方向に積まれており、天明泥流下の石垣の積み方の特徴を示している。

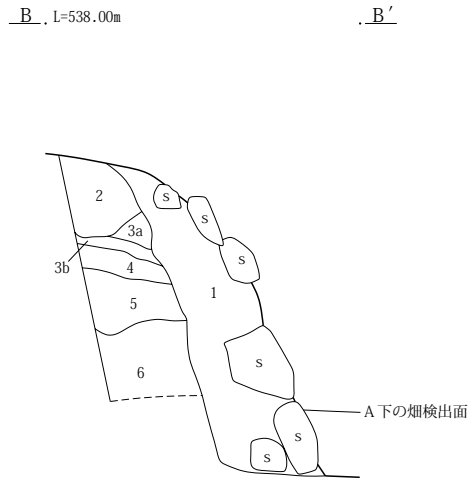
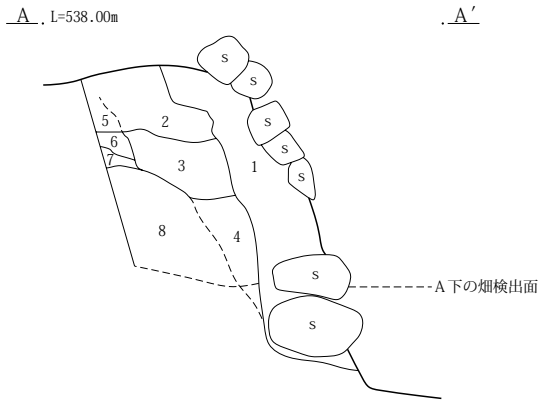
⑥出土遺物

6号屋敷出土遺物は、11号建物西側から石垣の間にまとまっていた。11号建物西側出土の遺物は、「調査区」として取り上げられており、掲載遺物については整理作業時に出土位置を確認して「11号建物西側」に変更したが、非掲載遺物については変更していない。調査区出土植物遺存体は11点、11号建物出土は2点であり、これらのうち11号建物西側出土として銅製飾り金具か隅金具を施していた15・16と曲物底板(18)を図示した。15・16は、出土時には脆弱な木質部でつながっているように見え、同一製品と考えられる。18は17の柄鏡直下から出土しており、鏡箱と考えられる。なお、箱の蓋は遺存していない。非掲載品中には、漆製品木質部が腐朽した漆塗膜が2点認められた。11号建物からは2点出土しており、1点は漆塗膜、1点は壁芯材として使用した蔓である(PL.19)。

陶磁器類の中には、出土位置で押しつぶされたように割れた個体や、完形に近い個体、破片が混在している。1は明らかな混入品である。調査区出土の非掲載陶磁器類は江戸時代の磁器が27点241g、陶器が40点846g、近現代陶磁器が10点342g、時期不詳土器類が1点48gである。11号建物からは江戸時代磁器が1点8g、陶器が3点26g、近現代陶磁器が1点151gであった。

金属製品は11号建物から寛永通寶2枚(2、3)が出土している。11号建物西側からは鋤先(23)、柄鏡(17)、鍋(25、26、27)、茶釜(24)など種類が豊富である。銭貨は銅4文銭が縞状態で出土し、状態が良好な2本は4文銭96枚の縞(40、41)であった。33は一分判金形銅製品で、文字や桐文などを意図的に変えている。4文銭縞付近からは、錆着したり錆で劣化した銅1文銭と鉄1文銭が230枚前後出土している。また、錆着した銅4文銭が24枚前後出土している。一部の1文銭方孔には紐痕が認められる。

18号石垣からは斧(1)など鉄製品が出土している。江戸時代の磁器2点13g、陶器6点42g、近現代の陶磁器1点13g出土しているが、細片のため掲載していない。19号石垣からは遺物が出土していない。

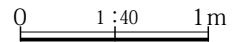


18号石垣 A-A'

- 1 暗褐色土 角礫を少し含む。
 - 2 暗褐色土 1層より多く角礫を含む。
 - 3 暗褐色土 10cm大の角礫を多く含む。
 - 4 暗褐色土 拳大の角礫を多量に含む。
 - 5 暗褐色土 小礫(1cm)を含む。浅間A軽石下畑の耕土。
 - 6 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多混。
 - 7 暗褐色土 ローム粒子を含む。
 - 8 角礫主体の暗褐色土
- ※5～8層は整地層。
6、7層は明瞭に切られているが、2～4層も整地層になる可能性あり。

18号石垣 B-B'

- 1 暗褐色土 角礫を含む。石垣裏込め。
 - 2 暗褐色土 小礫を含む。浅間A軽石下耕土。
 - 3a 暗褐色土 ローム粒子混入。
 - 3b 暗褐色土 ローム粒子多混。
 - 4 暗褐色土 やや暗く、角礫を含む。
 - 5 暗褐色土 4層よりやや明るい。4層と同質。
 - 6 暗褐色土 角礫(15～30cm)を多混。
- ※3、4層は明らかな整地層。石垣の上13～15号建物の整地層。



.C., L=538.00m

.C'



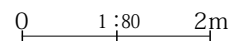
.D., L=538.00m

.D'



.E., L=538.00m

.E'

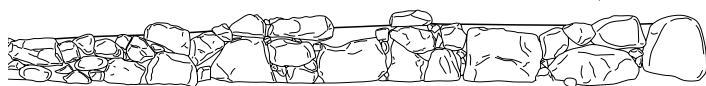


第54図 IV区6号屋敷跡 18号石垣断・立面

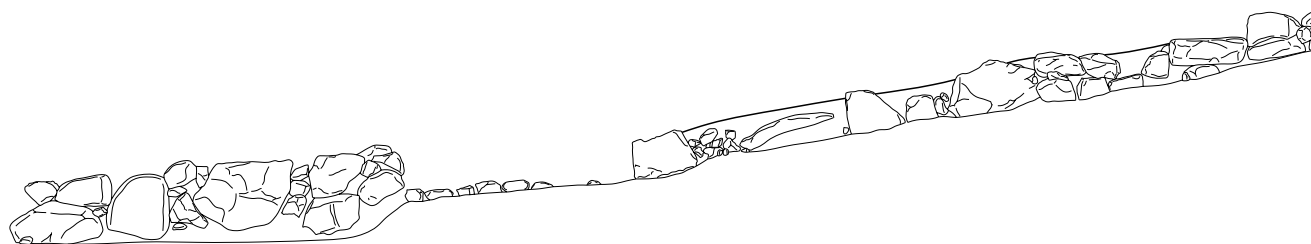
A L=535.00m



A'



B L=537.00m



B'



0 1:80 2m

第55図 IV区6号屋敷跡 19号石垣立面

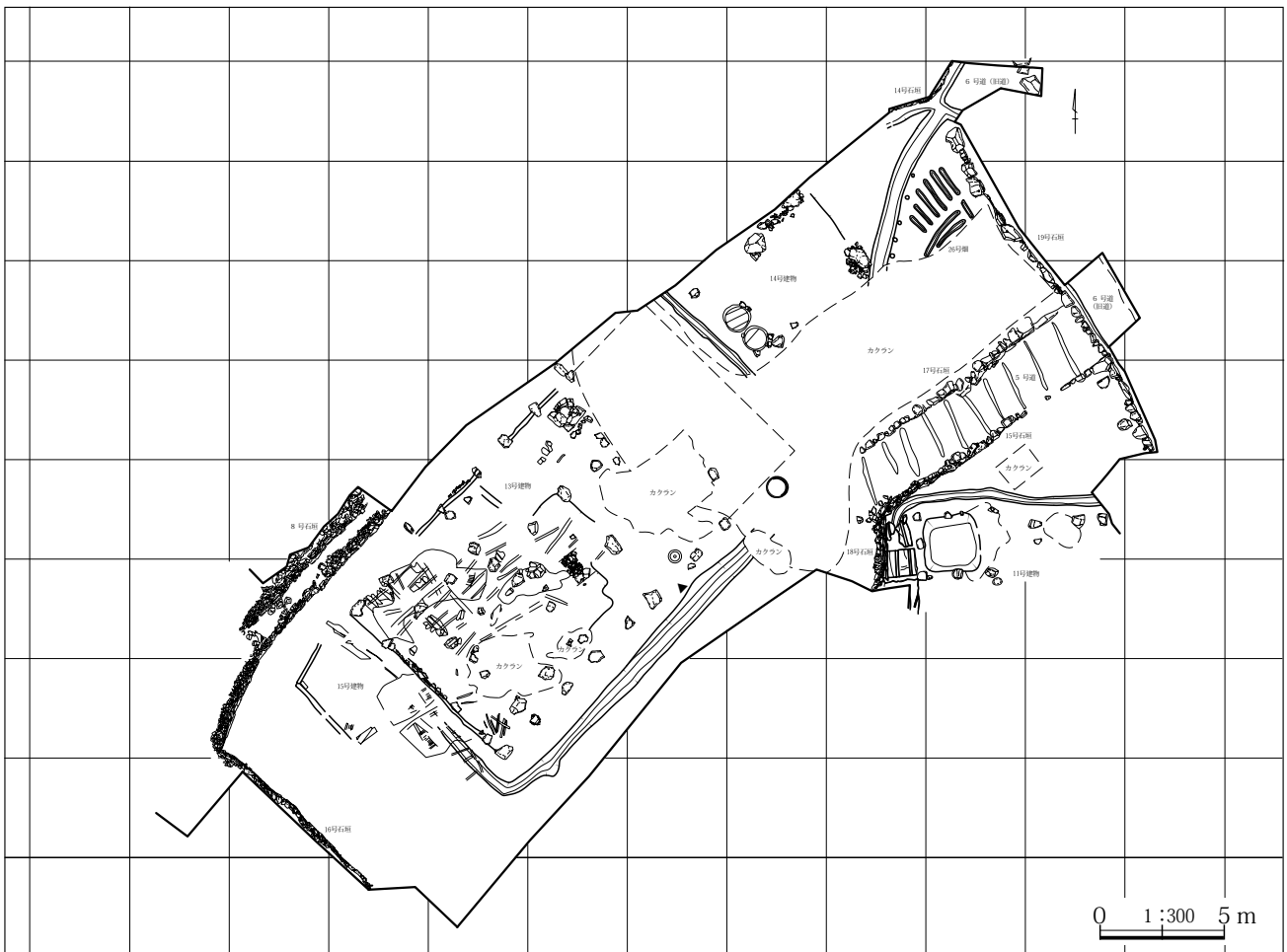
(4) 7号屋敷跡(第57・58図、PL.21)

① 7号屋敷跡の調査経過と調査概要

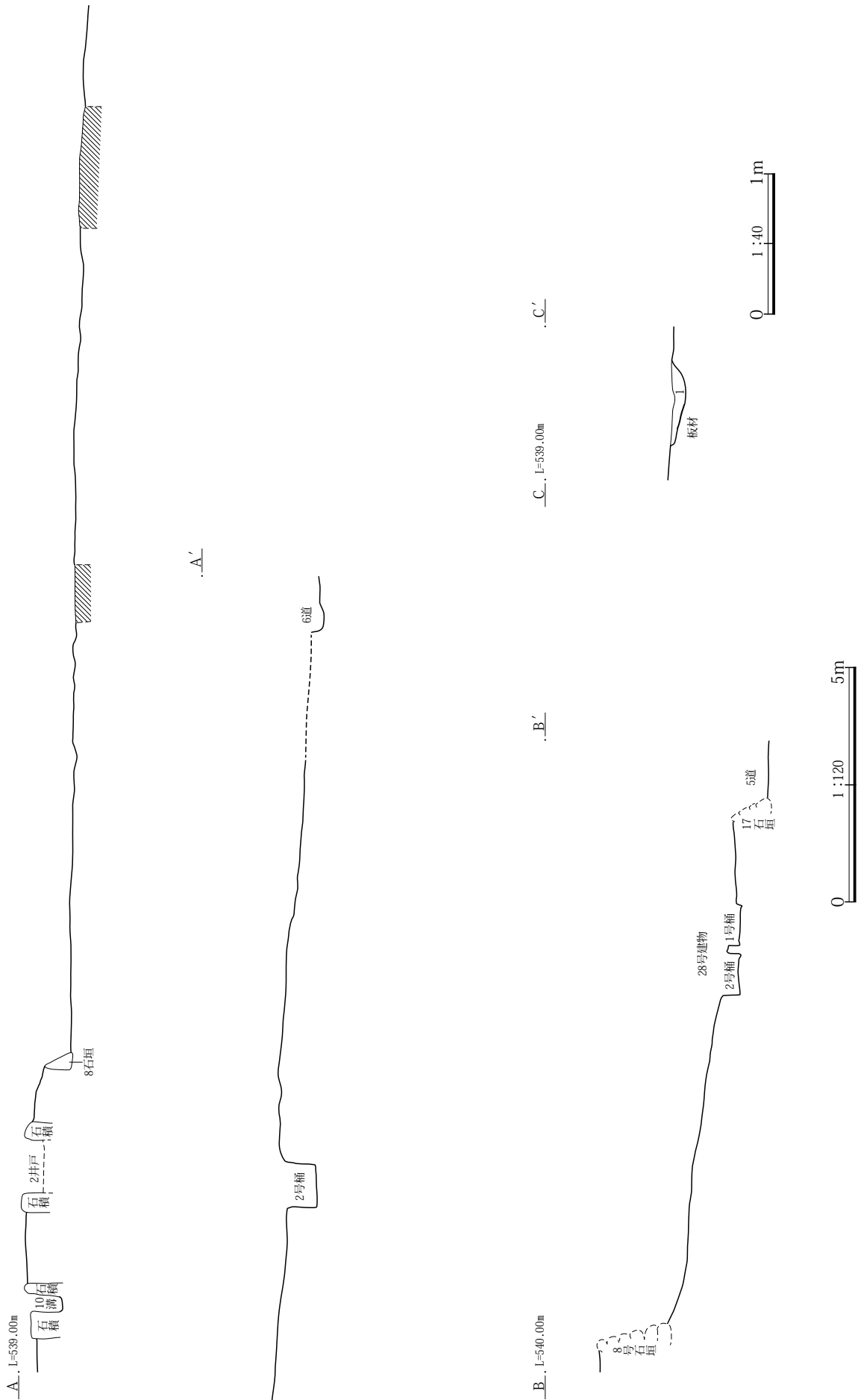
7号屋敷跡は、平成20年9・11・12月および平成21年7月に調査を実施した。調査により主屋である13号建物と13号建物の附属施設とも考えられる15号建物、13号建物北東側に隣接している14号建物や26号畑、6号道から入るための5号道、8・14・15・16・17・18・19号石垣等を発掘し、発掘が終了している部分は『東宮遺跡(1)』(2011)、『東宮遺跡(2)』(2012)として調査報告書が刊行されている。平成26年8～11月まで新たに発掘調査を実施し、前回の調査途中であった13号建物の竈・唐臼・7号屋敷跡下面の遺構の調査、14号建物1・2号桶等の調査を実施するとともに、新たに屋敷跡の南から南東部分の調査を行い、7号屋敷跡全体の調査を実施することができた。

7号屋敷跡の敷地は、北東方向に6号道があり、道路

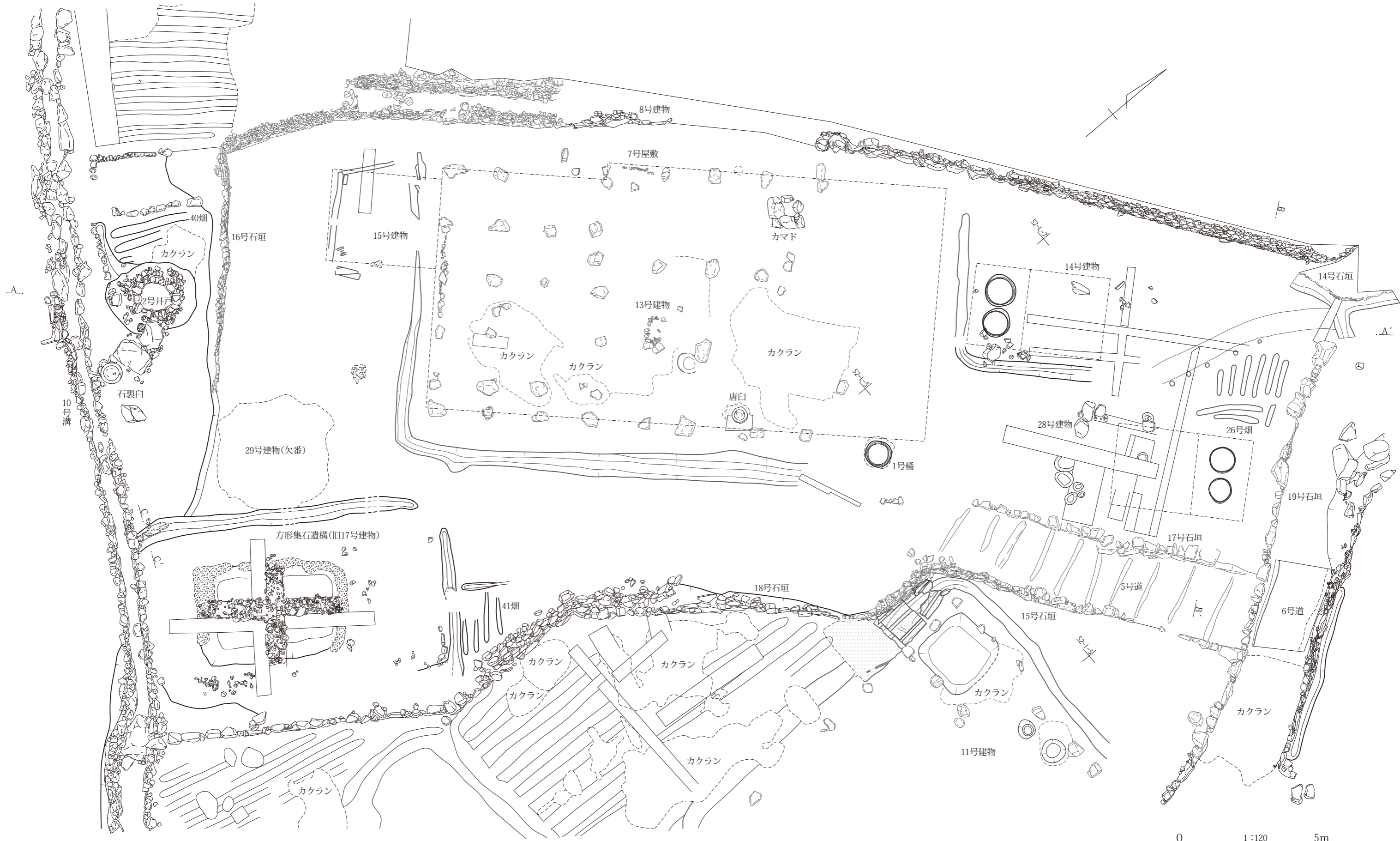
との境に19号石垣、南西から北西にかけて8号石垣、南に16号石垣、南東から北東にかけて18号石垣があり、周辺全て石垣に囲まれている。新たに発掘された遺構は、18号石垣および18号石垣内側に位置する方形集石遺構(旧17号建物)・28号建物、41号畑である。16号石垣の南に10号溝があり、溝との間に2号井戸、洗い場と思われる石敷、底部に穴の開いた石製臼、石製臼から水が流れ出し10号溝に流れる小さな溝等の遺構がまとまって確認された。7号屋敷跡に伴う水場と思われる。2号井戸西側に40号畑がある。40号畑の北西部には石列がある。この範囲までを7号屋敷跡として報告する。平成20・21年度に調査し、報告されている部分の説明は基本的に省略し、継続調査した遺構や新たに発掘した遺構について報告する。なお調査段階で13号建物南西部に位置する29号建物は方形のわずかな高まりがあり、建物の可能性が考えられたので建物として調査したが、礎石・柱穴・雨落溝等が無く建物でないので欠番とした。17号建物は、地



第56図 前回報告IV区7号屋敷跡



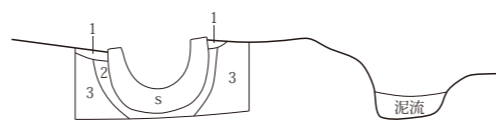
第57図 IV区7号屋敷跡断面



第58図 IV区7号屋敷跡



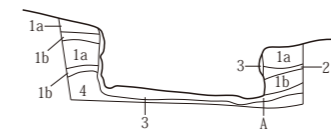
A, L=538.00m



13号建物唐白 A-A'

- 1 黄褐色土 ローム層。粒子密。やや粘性あり。
- 2 黒褐色土 ローム粒含まず。砂礫含まず。地山の層やや軟質。
- 3 黒褐色土 ローム粒含まず。砂礫含まず。地山の層固い。

A, L=538.00m



13号建物1号桶 A-A'

- 1a 暗褐色土 ローム粒子を含む。固く締まる。
- 1b 暗褐色土 ローム粒子多量混入。固く締まる。
- 2 黄褐色ローム土 2層と3層は同質。㊸の部分では立ち上がり不明。埋設桶としてのの一部。
- 3 黄褐色ローム土
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量含む。地山。

0 1:80 2m

0 1:40 1m

第59図 IV区7号屋敷跡13号建物

表面を削って大量の石が捨てられたように入っていた。この建物も礎石・柱穴・雨落溝等が無く建物でないので欠番とし、方形集石遺構として報告する。

②13号建物(第59・177図、PL.99)

13号建物は、平成20・21年度に調査され、報告書の中で報告されている。継続調査や新たに調査した遺構について以下報告する。

(ア) 竈(第61図、PL.21・22)52区M・N-5・6グリッドに位置する。

【確認状況と調査概要】13号建物土間北西隅にある。平成20・21年度に途中まで調査をしており、平面図と断面図を提示し調査内容について報告書の中で記述している。調査再開段階では、竈を構築している切石を中心とした石材の多くが出土した状態で残り、竈内には天明泥流堆積物が残された状態であった。竈は南東方向から押し寄せてきた泥流により、竈を構築している両袖石が山側である北西方向に、奥壁の切石が南西方向に傾いていた。竈周辺の床面は荒らされ残りが悪かった。

【構造と規模】竈は焚口が北東方向と思われる。奥壁は割れているが、幅1.06m高さ56cm厚さ22cmの切石。両袖に使われていた石は、奥壁に向かって左側の袖石が燃焼部内に倒れ掛かっていたが、比較的良好な状態で残っていた。幅86cm高さ55cm厚さ21cmの切石。右側の袖石は割れて残りが悪かった。幅は不明、高さ53cm厚さ23cmの切石が使われていた。焚口部分右側に幅34cmの石が焚口をふさぐような状態で残っていた。おそらく焚口右側に置かれていた石と思われる。奥壁の石北端部は幅22cm奥行30cmの大きさで直角に削られていた。ここに右袖石が組み込まれていたものと思われる。これらの石の組み方から考えられる竈の推定規模は、次のようになる。石組外側で東西南北とも1.00m前後、内側(竈内)で東西南北とも60cm前後となる。竈内は最も上面に天明泥流堆積物、その下に灰を主として炭を含む層となっており、焼土層は無かった。

【所見】竈は、泥流により大きく歪んでいたが、残っていた遺構から多くのことが明らかとなった。切石を使った竈であり、焚口付近の残りが悪かったが、I区1号屋敷跡1号建物の竈に似た構造・規模を持っていた。

(イ) 唐臼(第59図、PL.22)52区K・L-4・5グリッドに位置する。

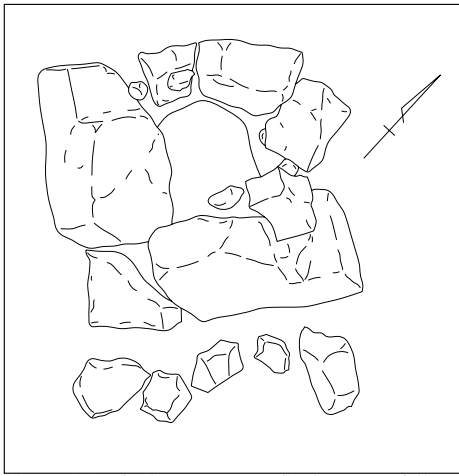
【確認状況と調査概要】13号建物土間の南東側、推定される出入り口の北東側にある。竈同様に平成20年度に途中まで調査をし、平面図と断面図を提示し調査内容について報告書の中で記述している。調査再開段階では、土間に埋まった状態であった。継続調査として、埋まっていた石製の唐臼を取り上げ断面調査も実施した。

【規模・所見】埋まっていた唐臼の大きさは、直径56cm高さ36cmである。唐臼の口縁部が、床面上にわずかに出ている状態で埋まっていた。唐臼の口縁部周辺にローム粒を含む黄褐色土が幅10~30cm、厚さ5cmで整地するような状態で残っていた。唐臼を埋めた土坑状の断面を観察すると土層に違いはなく唐臼に接している土と離れている地山の土との区別は、土の硬軟の違いだけであった。他の屋敷では、唐臼の杵を支える支脚穴が、唐臼から1.30~1.40mほど離れた地点で確認されている例が多い。この唐臼に伴う支脚穴を探してみると、壁面に沿った北東方向の攪乱の下に幅35cm深さ40cm前後で内部に天明泥流が埋まっていた掘り込みを確認することができた。唐臼からの距離は1.30mであった。唐臼の杵を支える支脚穴としての可能性が高いと思われる。

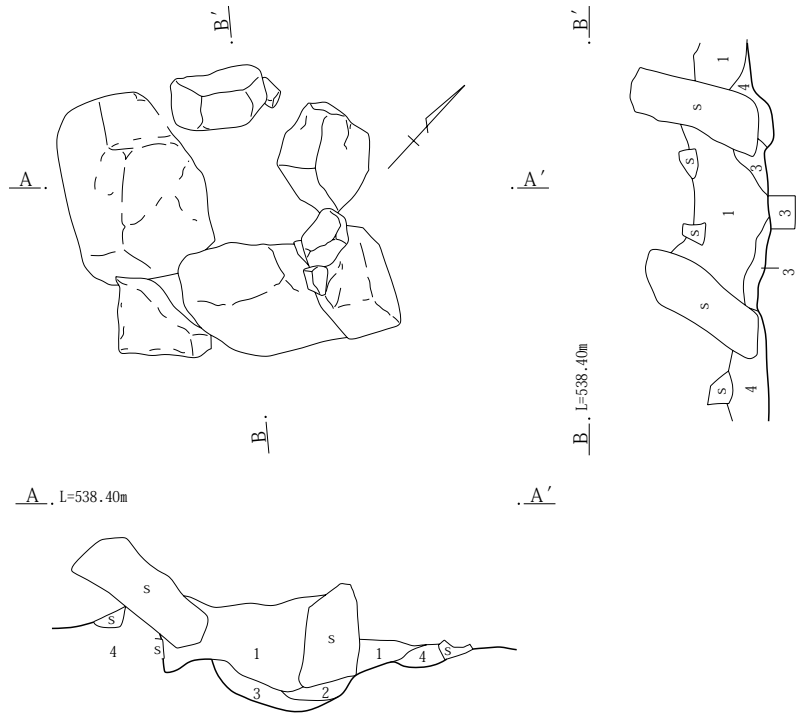
(ウ) 馬屋と1号桶(第59図)52区K・L-4・5グリッドに位置する。

平成20年度の調査で、13号建物北東側に1号桶が確認されている。これが馬屋に伴う桶とも考えられ、馬屋の位置を土間北東側に推定して報告している。馬屋と推定している場所は、土間部分より15~35cmほど低く削られており当時の痕跡はほとんど残っていない。前回の報告書の中で報告されているように、屋敷跡内で位置関係や1号桶が馬屋に伴う桶であるなら、推定通り馬屋があった可能性が高い。1号桶は埋設されており桶の木材は残ってなかったが、埋められた桶下半約1/3の痕跡が良好な状態で残っていた。2本のタガの痕跡と底板縁辺部に側板底部の掘り込みが残っていた。桶の底部・側面にロームが用いられており、ロームの厚さは底部5cm前後、桶の側面に厚さ3cm前後であった。桶口縁部を囲むように幅5~8cm厚さ1cm前後のロームが敷かれていた。桶の大きさは底部付近で直径85cm、残っていた部分での深さは30cmであった。

1面



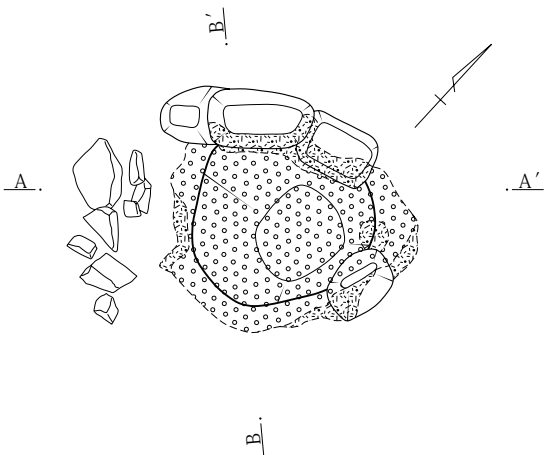
第60図前回報告IV区7号屋敷跡 13号建物 竈



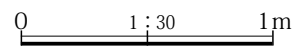
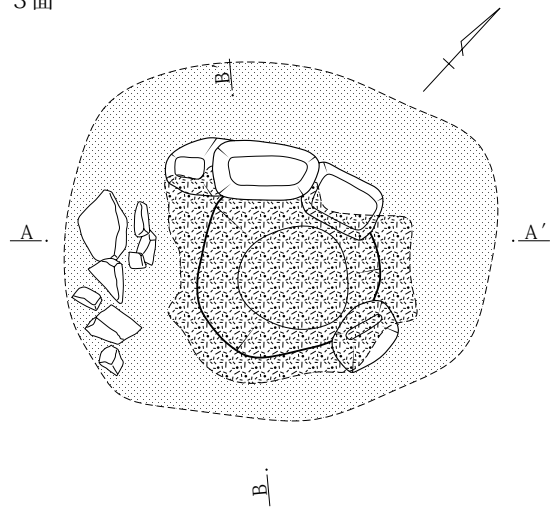
13号建物1号カマド A-A'・B-B'

- 1 天明泥流堆積物
- 2 暗褐色土 多くのローム粒と少量の暗褐色砂質土含む。
- 3 灰色 灰を主として炭を多く含む。
- 4 褐色土 黄褐色ローム小ブロック、ローム粒を多く含む。

2面



3面



第61図 IV区7号屋敷跡 13号建物 竈(1～3面)

③7号屋敷跡下面の遺構(第62～64図)52区L～P-2～6グリッドに位置する。

平成20・21年度に発掘調査し調査報告書の中で「7号屋敷跡下より検出された遺構」として1号焼土が報告されている。「囲炉裏脇から検出され、出土状況から天明泥流に被災した13号建物より古い遺構と考えられる。」この遺構は「1号焼土」として報告されている。平成26年度調査を実施する段階でも、13号建物の下に別な建物があることを推定して13号建物や15号建物の調査終了後、床面下の調査を行った。その結果11個のピット、竈、囲炉裏、焼土等が確認され、それらの遺構から32号建物と仮称して調査を進めた。しかし11個のピットは建物として成り立つほどなく、竈と推定し調査した遺構は、石組や焼土の残り状態から竈とするには無理があり、報告段階で1号焼土とした。また以前の調査で「1号焼土」とした遺構は調査の結果、囲炉裏の可能性が高いことがわかり囲炉裏として遺構名を変更した。他に2基の焼土遺構が13号建物下から確認されている。それらの遺構から13号建物に先行する建物があったと考えられ、確認された遺構から32号建物にするには全体像がつかめないために無理と考え、32号建物は欠番とした。これらの遺構の他に、15号建物東側の3号焼土遺構、13号建物出入口付近の雨落溝下の1号炭出土遺構、13号建物雨落溝南端部分の1・2号石埋設土坑さらに15号建物の下から弥生時代の土器片を出土した弥生土坑は、すべて7号屋敷跡以前、天明泥流以前の遺構なので、13号建物下の遺構を含めて7号屋敷跡下面の遺構としてまとめて報告する。

(ア)ピット群(PL.22・23)

13号建物下を中心に11個のピットが確認された。13号建物前段階の礎石建物でない柱穴を持つ建物と推定して調査したが、一定の配置を示していなかった。また、ピットの大きさは直径23～52cm深さが16～58cmと一定していない。特色あるピットが1基確認されている。ピット1ではピット部分を大きく掘り込み建てられたであろう柱等のまわりにロームを多く含む土で固めていた。他にこのような特色を持つピットは無かった。

(イ) 囲炉裏(旧1号焼土)(第65図、PL.23)52区M-4グリッドに位置する。

【調査経過と概要】以前の調査で1号焼土として報告された遺構である。13号建物の土間と板間を分ける囲炉裏東

側の礎石により一部壊されている。床面全体を掘り下げて遺構全体を調査した結果、他の囲炉裏と同じような構造であるので、1号焼土から囲炉裏に遺構名を変更して報告する。囲炉裏の中央部分と東側が攪乱を受けていたが、攪乱部分を除去すると、残されたロームや焼土の状況から全体像をほぼ推定することができた。

【構造と規模】囲炉裏は、土間を掘り込んで作られている。掘り込まれた幅は約1.30m四方で中央部の深さは30cmと浅い掘り込みである。掘り込まれた全体にロームを厚さ5～6cmほど貼る。囲炉裏を囲む木枠をロームの中に少し埋め込む。木枠の大きさは1.08m前後で、木枠の厚さは6cm前後である。木枠に囲まれた囲炉裏の内径は96cm前後である。囲炉裏の内部にロームが貼られ、そこで火がたかれたようである。囲炉裏の内面は攪乱を受けて灰等は残っていなかった。攪乱の土を除去した囲炉裏底部中央では、幅80cm前後の広さで焼土化していた。焼土面の深さは木枠付近の高さより約30cm深くなっていた。

(ウ) 焼土遺構

・1号焼土遺構(第65図)52区N-5グリッドに位置する。

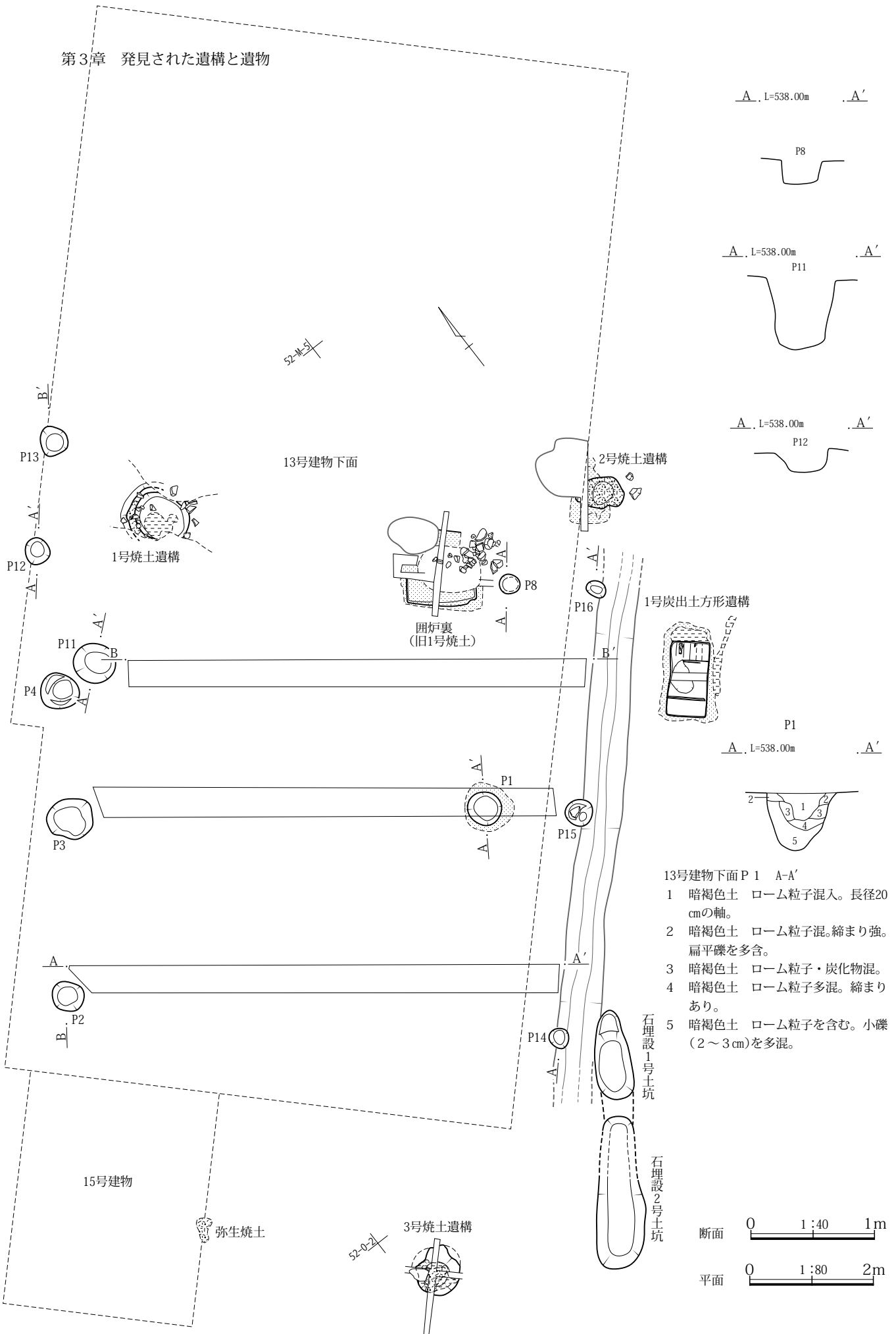
【調査経過と概要】13号建物の土間の下に埋もれており、13号建物竈の南西に位置する。調査段階で32号建物竈として調査したが竈のまわりの石が他の竈に組まれている石と異なり、小さく意図的に並べていると解釈するには無理があり、焼土も部分的であり、竈としての掘り込みも少ない。竈としてではなく1号焼土として遺構名を変更して報告する。

【規模・構造】円形で中央部に炭、北西寄りに焼土とローム、焼土外側から銅製品の破片が出土している。規模は直径10cm前後、深さは最も高いローム粒子を混入する暗褐色土より12cm前後である。

・2号焼土遺構(第66図、PL.23)52区L・M-4グリッドに位置する。

【調査経過・概要】13号建物の入口付近唐白の南東部分に位置し、唐白により一部壊されている。13号建物調査段階では不明であり、床下調査による確認である。大小の石とロームブロックと中央部に焼土ブロックのある遺構である。ロームはブロック状であり方形に近い形であるが、囲炉裏に見られるように、ロームを貼ったような状態ではない。

【規模】南北約1.05m、東西約83cm、深さ約14cmである。

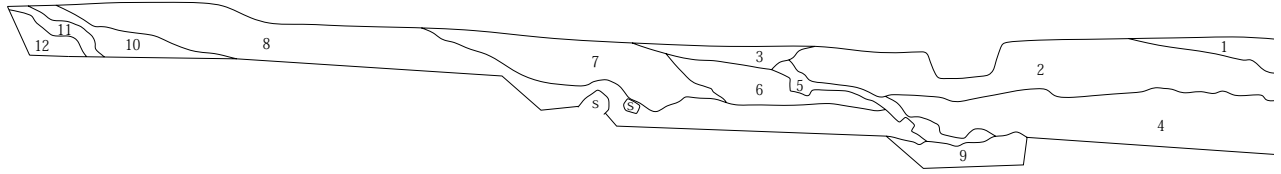


13号建物下面 P 1 A-A'

- 1 暗褐色土 ローム粒子混入。長径20cmの軸。
- 2 暗褐色土 ローム粒子混。縮まり強。扁平礫を多含。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物混。
- 4 暗褐色土 ローム粒子多混。縮まりあり。
- 5 暗褐色土 ローム粒子を含む。小礫(2~3cm)を多混。

第62図 IV区7号屋敷跡 13号建物下面

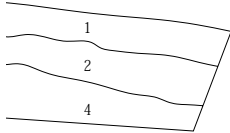
A. L=538.00m



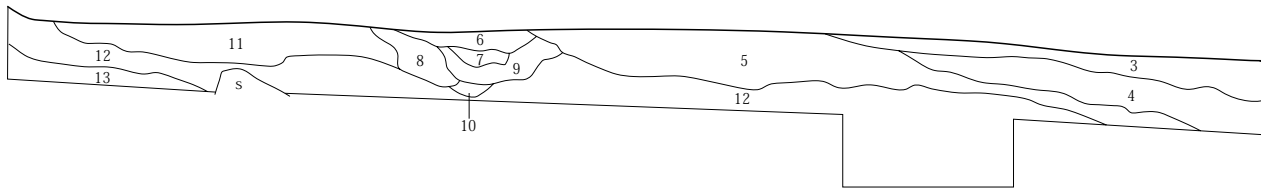
A'

13号建物下面断割 A-A'

- | | |
|---|------------------------|
| 1 暗褐色土 ローム粒子混。 | 7 黄褐色土 角礫を含む。(崩落土起源か) |
| 2 暗褐色土 ローム粒子混。1層よりやや暗い。角礫を含む。 | 8 暗褐色土 ローム粒子混。締まりあり。 |
| 3 黒褐色土 ローム粒子混。 | 9 暗褐色粘質土 ローム粒子等は見られない。 |
| 4 暗褐色土 小礫を含む。 | 10 黒褐色土 ローム粒子多混。 |
| 5 As-K? 上位5cmが青灰色、砂質。下位5cmが黄褐色、砂質。山側は乱れた状態で二次堆積か? | 11 暗黄褐色土 軟質。ローム漸移層。 |
| 6 黒褐色土 ロームブロック含む。 | 12 黄褐色ローム土 |
- ※1・2層は建物整地層。10・11層は縄文期。



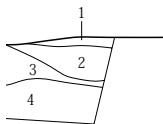
B. L=538.00m



B'

13号建物下面断割 B-B'

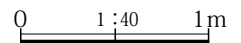
- | | |
|--------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色土 ローム粒子混。 | 10 黒褐色土 ローム粒子混。締まりは弱い。 |
| 2 黄褐色ローム土 ボソボソして締まりない。 | 11 暗褐色土 ローム粒子混。締まりあり。 |
| 3 暗褐色土 1層よりやや明るい。 | 12 暗褐色土 11層より明るい。淡クロ? |
| 4 暗褐色土 ロームブロック混。3層より明るい。 | 13 黒褐色土 ローム粒子混。 |
| 5 暗褐色土 ローム粒子混。角礫を含む。 | ※11~13層 縄文期 |
| 6 黒褐色土 ローム粒子含む。 | 1~5層 整地層 |
| 7 青灰色アッシュ | 6~10層 土坑状に見えるが、立ち上がり不明瞭。遺構として認めず。 |
| 8 黄褐色アッシュ | 7・8層 成層したものではない二次体積。 |
| 9 暗褐色土 小礫を含む。 | |



A. L=538.00m

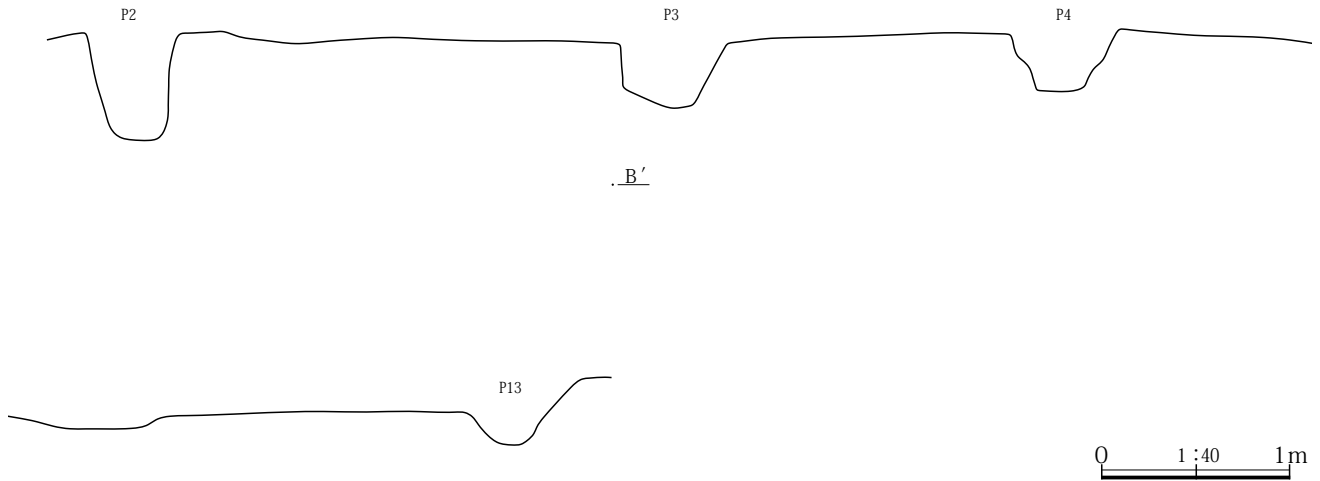


A'



第63図 IV区7号屋敷跡 13号建物下面断面(1)

B . L=539.00m



第64図 IV区7号屋敷跡 13号建物下面断面(2)

【所見】焼土中央面に大小の石があるが、この石は2号焼土内に置かれた石と思われるが、13号建物壁面下に位置しており、そこに敷かれた石の可能性もあるのではないだろうか。

・3号焼土遺構(第66・177図、PL.23)52区O-2グリッドに位置する。

【調査経過・概要】13号建物西側15号建物南東部分に位置し、両建物の下に位置しない。13・15号建物調査終了後確認された。調査段階で15号建物南焼土、炭範囲として調査したが整理段階で3号焼土遺構として遺構名を変更して報告する。多くの炭と褐色土と少量の焼土ブロックを含む遺構である。

【規模】東西58cm南北55cm深さ13cmである。

(工)1号炭出土方形遺構(第67図、PL.24)52区L~M-3グリッドに位置する。

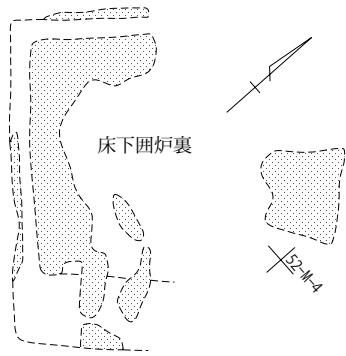
【調査経過と概要】13号建物東側出入口に近い雨落溝の下から長方形に掘られた土坑が確認され、中から多くの炭を出土した遺構である。

【規模・構造】長方形の掘り込みは長辺1.20m短辺62cm深さ7cm、底部には幅10cm前後の6枚の底板の痕跡が残り、一部板材も残っていた。底板と直行する2本の材があり、この材の上に板が置かれていたものと思われる。壁面の

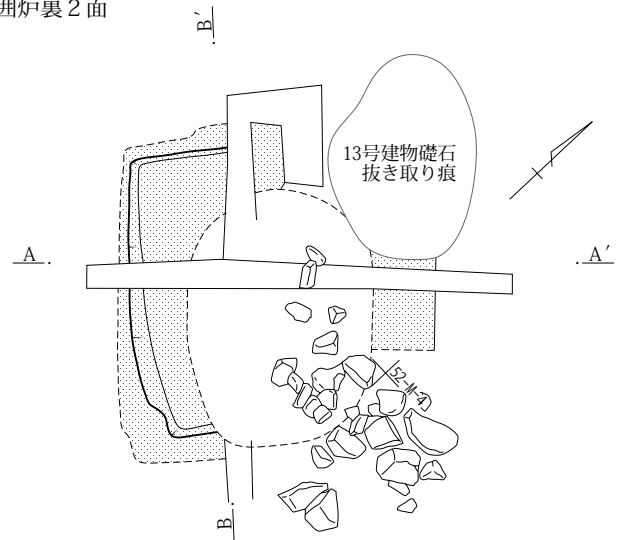
板の痕跡は確認できなかった。長方形の掘り込み外側にはロームが厚さ8cm、幅8cmほど埋め込まれており、その中に板で作られたであろう長方形の箱を埋めていた。貼られたロームの一部は北側で幅30cmと広がっていた部分もある。長方形の掘り込みの中央部は、楕円形に深く掘り込まれており、そこから東側に多くの炭が出土している。板で作られた箱状(長方形)のものが埋められ、その後中央部分を深く東側部分は浅く掘り込み木材が焼かれた。北東コーナー部分には焼土が残り、東の大部分に多くの炭が残ったものである。箱状(長方形)のものが埋められた掘り込みと、炭を伴う掘り込みは時期が異なる。

【所見】13号建物雨落溝内の遺構であり、13号建物より古い遺構であると考え、中央の掘り込みと炭の堆積はその後のものであるとして調査した。またそこより出土した2個の陶磁器の年代は、18世紀中頃から後半であり、天明泥流下の遺構の年代とほぼ一致する。しかし調査した部分は天明泥流が薄く後世の攪乱があり、これらの遺構の上に浅間A軽石は残っていなかった。そのためこれらの遺構と13号建物との新旧関係については、再検討が必要かもしれない。

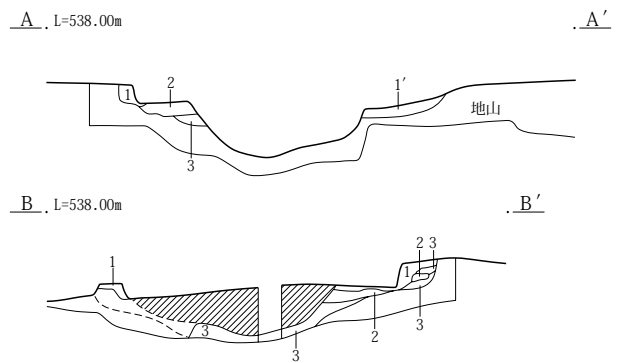
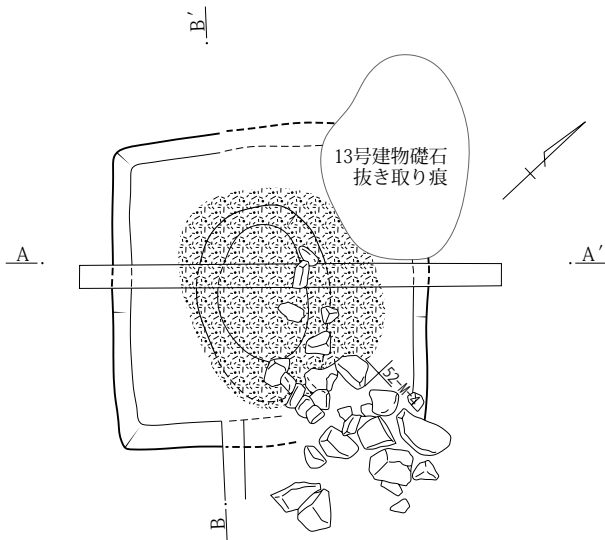
囲炉裏1面



囲炉裏2面



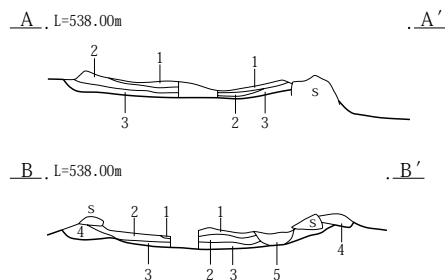
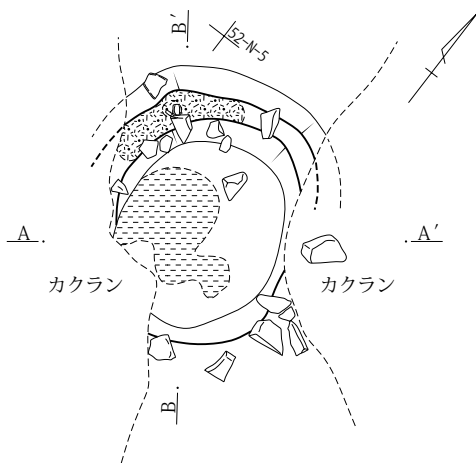
囲炉裏3面



13号建物下面囲炉裏 A-A'・B-B'

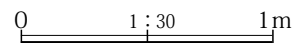
- 1 暗褐色土 ローム粒子・ブロック多混(囲炉裏構造体)
- 1' 1層と同質だが、左側1層のように囲炉裏木枠を固定した構造が確認できない。
(可能性として13号建物礎石を固定する際に壊されているのかもしれない。)
- 2 暗褐色土 ローム粒子少含。
- 3 暗赤褐色ローム土(焼土?)

1号焼土遺構



13号建物下面1号焼土遺構 A-A'・B-B'

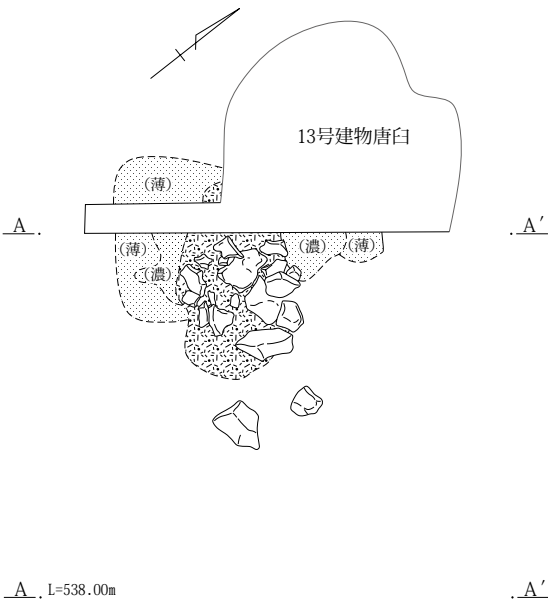
- 1 灰層
- 2 暗褐色土 小礫を含む。
- 3 焼土ブロックを含む暗褐色土。
- 4 ローム粒子を混入する暗褐色土 粘性に富む。
- 5 砂質ローム土? 締まりはなく攪乱か?



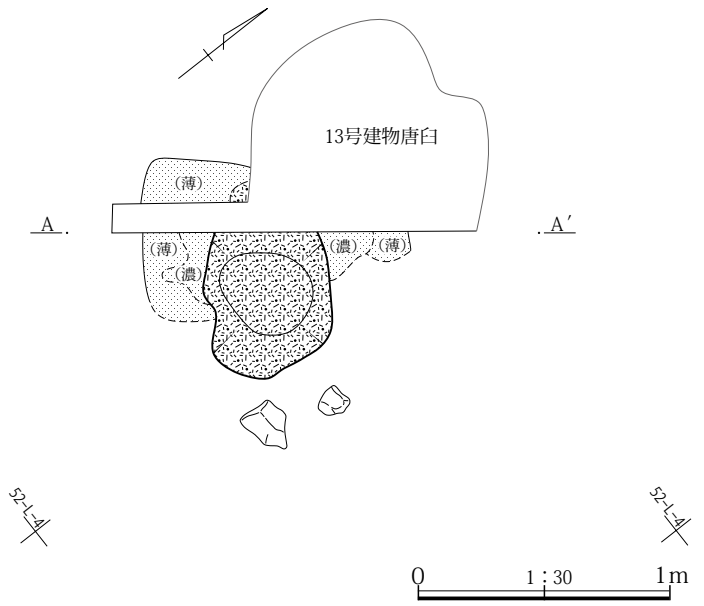
第65図 IV区7号屋敷跡 13号建物下面囲炉裏(1~3面)、1号焼土遺構

第3章 発見された遺構と遺物

2号焼土遺構
1面



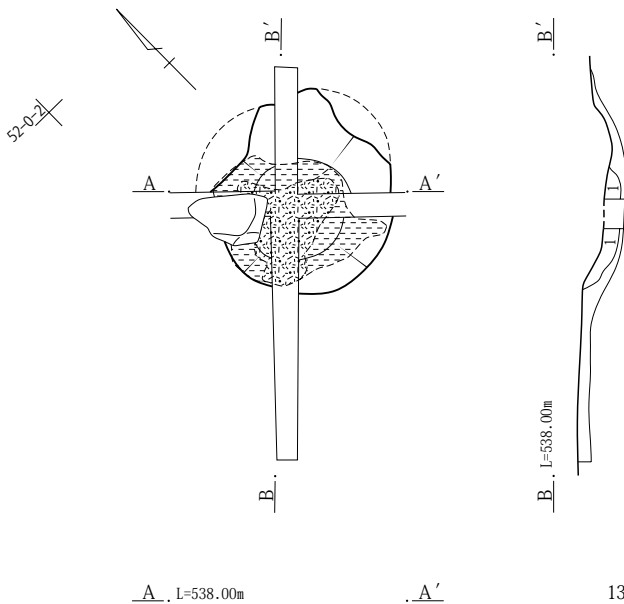
2号焼土遺構
2面



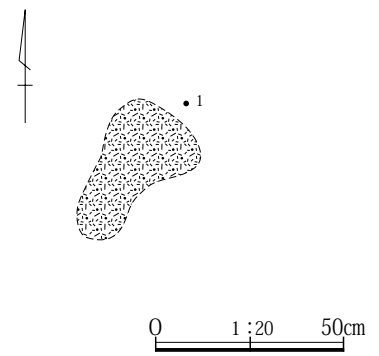
13号建物下面2号焼土遺構 A-A'

- 1 暗褐色土 ローム粒子・小礫を含む。
- 2 焼土層 暗褐色土が混じる。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック混。
- 4 ロームブロックと焼土ブロックを含む暗褐色土。
- 5 暗褐色土 ローム粒子多混。
- 6 暗褐色土 小礫を含む他、灰のブロックが混じる。

3号焼土遺構

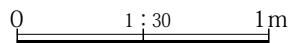
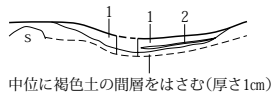


弥生焼土範囲

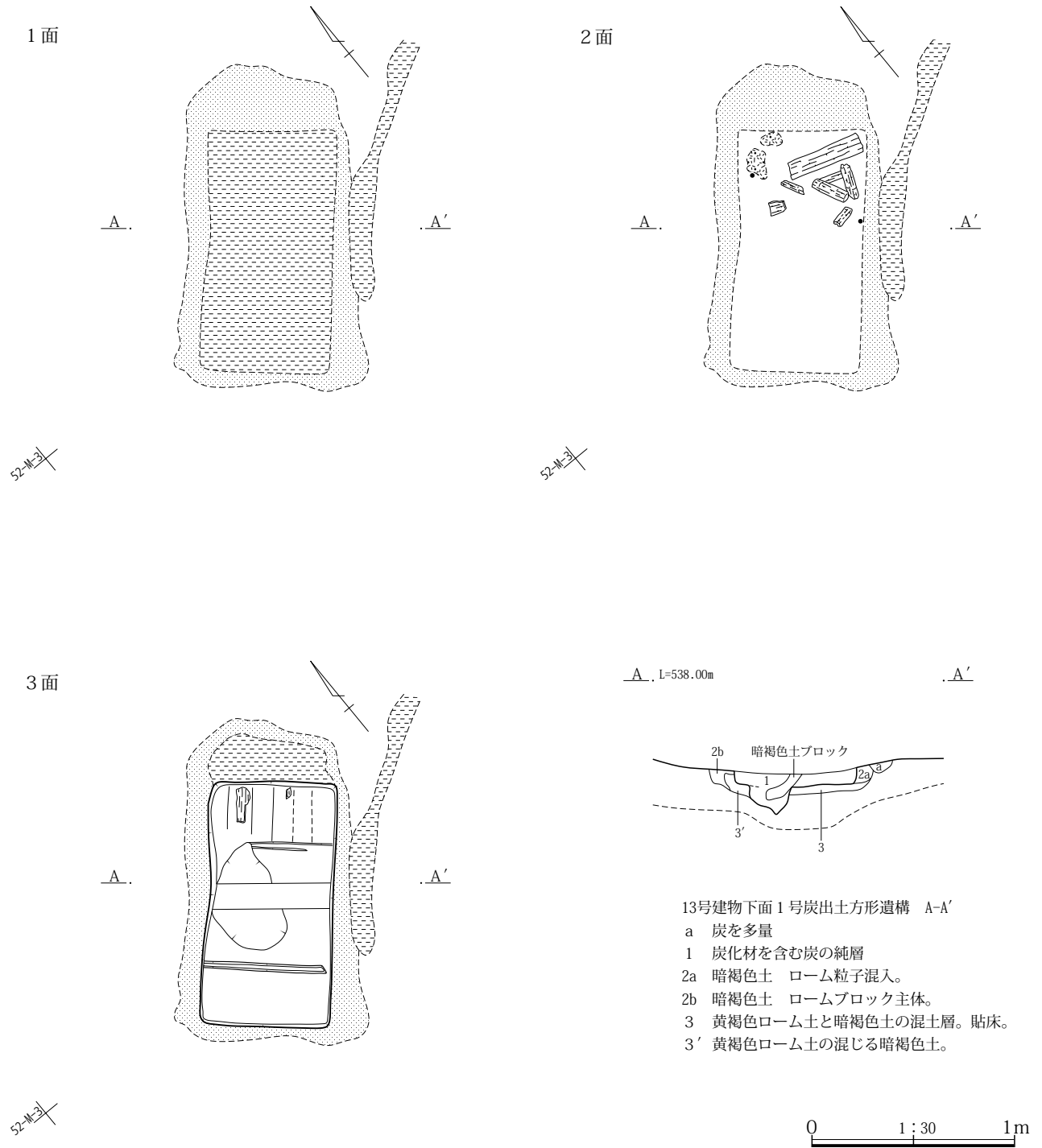


13号建物下面3号焼土遺構 A-A'・B-B'

- 1 炭化物(炭)の純層。
- 2 褐色土 少量の焼土を含む。
中位に褐色土の間層をはさむ(厚さ1cm)



第66図 IV区7号屋敷跡 13号建物下面2・3号焼土遺構、弥生焼土範囲



第67図 IV区7号屋敷跡 13号建物下面1号炭出土方形遺構

(オ)石埋設1・2号土坑(第62図、PL.24)52区L-1・2グリッドに位置する。

【調査経過・概要】13号建物東側の雨落溝南端部分で雨落溝の下に、大小の石が大量に埋まっている土坑が2基ある。北側の土坑を石埋設1号土坑、南側の土坑を石埋設2号土坑と呼称する。この土坑は雨落溝の下であり、13号建物より古い段階に作られたものである。

【規模・構造】石埋設1号土坑の大きさは長径2.47m短径78cm深さ52cm、石埋設2号土坑の大きさは長径1.46m短径58cm深さ52cmである。

【所見】2つの土坑は繋がっていない。不要となった石を埋めたものと思われる。

(カ)弥生土器出土焼土遺構(第66図、PL.24)52区O-2グリッドに位置する。

【調査経過・概要】15号建物床下を調査している段階で、15号建物東壁面中央部付近の下から出土している。地面の一部が焼土化しているところがあり、そのわきから縦位羽状条痕を施した水神平式の壺胴部と思われる破片が9片1個体分出土している。時期的には壺棺再葬墓の可能性を考えたいがそれを証する施設等は確認できなかった。他に弥生土器の出土は無い。

④14号建物(第69図、PL.25)52区J~L-6~8グリッドに位置する。

13号建物北東側に隣接している。13号建物の付属建物と思われる。平成20年度に1・2号桶、礎石、雨落溝等を調査し、調査途中段階で作成した平面図と断面図を提示し調査内容について報告書の中で記述している。調査再開により14号建物全体の確認と1・2号桶の発掘さらに床面下部分の調査を実施した。新たな調査により明らかとなったのは、1・2号桶と14号建物の床面下の整地についてであり、建物の基礎や規模等については根拠となる資料を得ることはできなかった。前回の調査成果、今回の調査成果をもとに図面を作成し報告する。13号建物との間と14号建物南東側の溝上の落込みは雨落溝と思われる。

【構造・規模】建物の規模は不明である。1・2号桶とも板は残ってなかったが、板の痕跡をとどめていた。2個の桶の大きさは異なっており、1号桶は底径97cm口縁部径1.00m高さ67cm、タガが底板部、底板から18cm、58cmのところ3カ所痕跡として残っていた。2号桶は底径

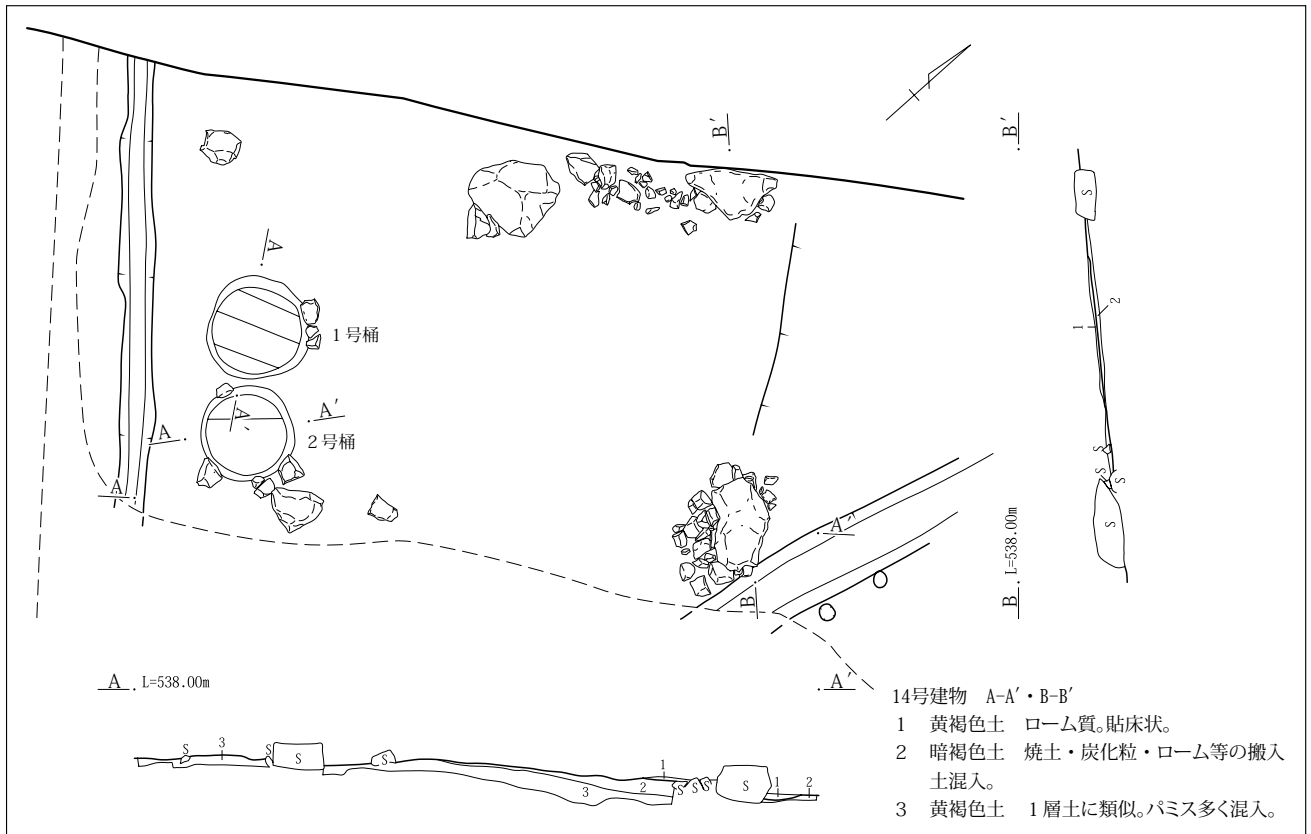
86cm口縁部径88cm高さ58cm、タガが底板部、底板から18cmのところ2カ所痕跡として残っていた。1号桶は2号桶より10cm前後口径が大きい。1・2号桶は16cmほど離れて埋められていた。桶を埋める段階でロームを桶の底部や側面に貼るように埋めている例があるので断面で観察した。その結果2つの桶のまわりや、底部に多くのロームが存在していた。意識的にロームを持ち込んだ箇所もあると思われるが、多くのロームは建物床面全体に層状に堆積しているロームの一部であり、桶の底や側面に別に貼るように特別に持ち込まれたものではないと思われた。床下土層は地山の礫混じりで暗い褐色土の上に10~15cmのロームが層状に堆積し、その上にロームブロック混じり暗褐色土が堆積し、その上の土層が床面となっていた。14号建物を建てるための造成として、厚さ30cm前後盛り土をしている。

【所見】14号建物の規模は不明である。2つの桶を持つ西宮遺跡1・2号厠や東宮遺跡26号建物等の発掘結果をもとに比較検討するとこのような建物は短軸2.70m前後、長軸3.60m前後の2間×3間の建物が多い。それに近い建物と考え点線で建物範囲を図示した。

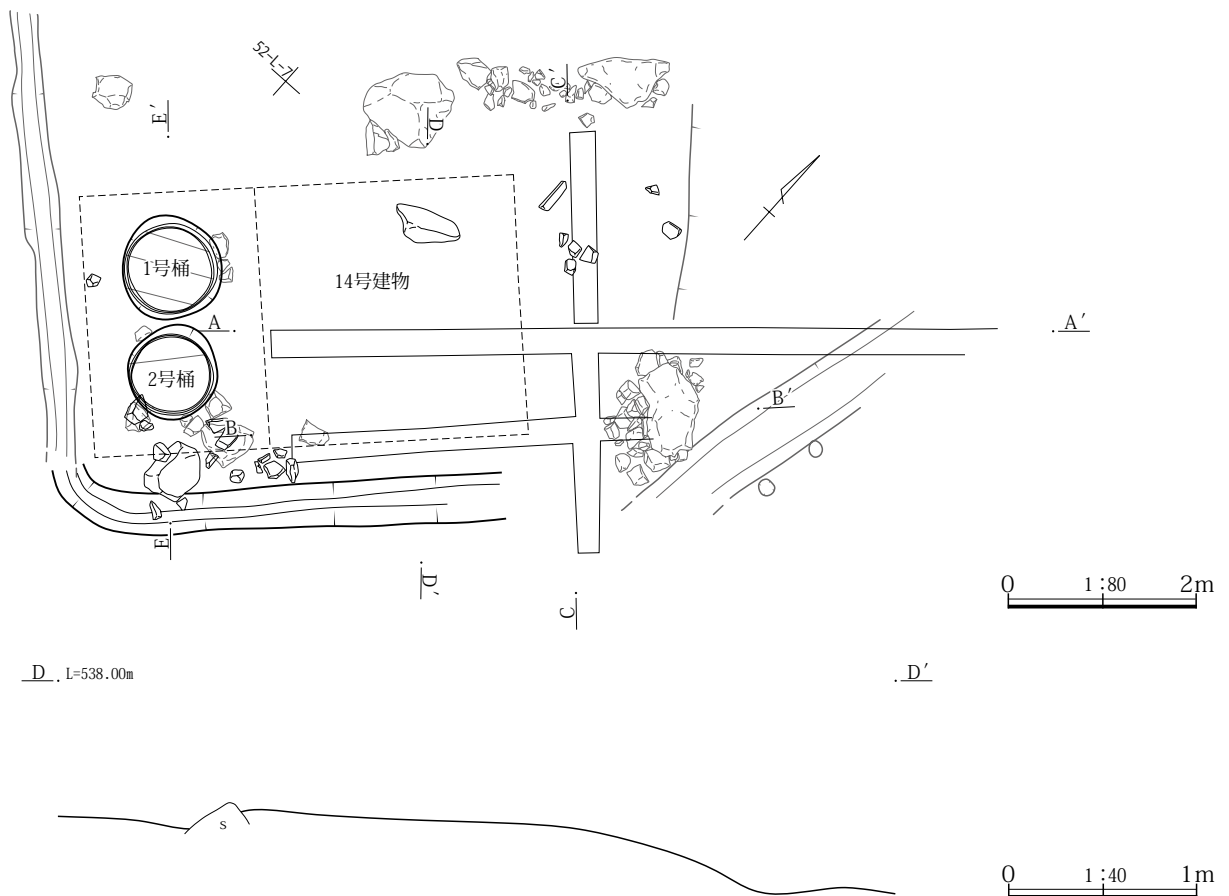
⑤28号建物(第71図、PL.25・26)52区I~K-6・7グリッドに位置する。

【確認状況・調査概要】14号建物南東側に隣接している。平成20年度の調査では、建物が建てられていたと推定される平地に2個の埋設桶跡が、確認されていたが調査は実施することなく埋められ、平成26年度に調査を実施した。

【構造・規模】建物の礎石や柱穴は無く、また雨落溝等も確認されなかった。そのために建物の規模は不明である。1・2号桶とも板は残ってなかったが、板の痕跡をとどめていた。2つの桶の大きさは異なっており、2号桶が大きかった。1号桶は底径70cm高さ22cm、タガは不明。2号桶は底径80cm高さ35cm、タガが底板部、底板から18cmのところに残っていた。2号桶は1号桶より底径で10cm前後大きい。1号桶と2号桶は20cmほど離れて埋められていた。桶を埋める段階でロームを底部や側面に貼る例があるので断面で観察した。その結果2つの桶のまわりや、底部に多くのロームが存在していた。意識的にロームを持ち込んだ箇所もあると思われるが、多くのロームは建物床面全体に層状に堆積しているロームの一



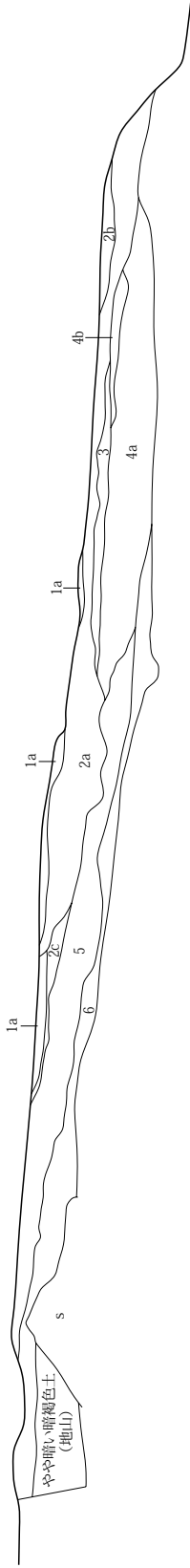
第68図 前回報告IV区7号屋敷跡 14号建物



第69図 IV区7号屋敷跡 14号建物

.A'

A. I=538.00m

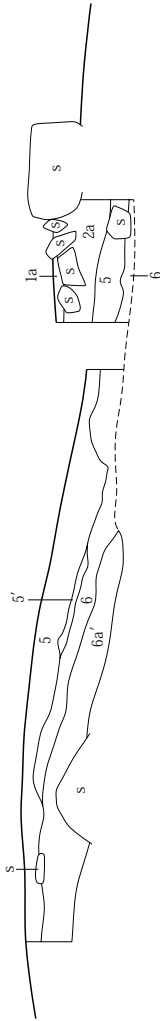


14号建物 A-A'・B-B'・C-C'

- 1a 黒色土と橙色ローム土の混土层。貼床状。
- 2a 暗褐色土 ロームブロック少し含む。上面に1cmの黒色土の薄層。
- 2b 暗褐色土 上面は酸化して鉄分が付く。
- 2c 黒色土と暗褐色ローム土の混土层。
- 3 暗灰色～暗緑色ローム土 貼床状。
- 4a 暗黄褐色土 10cm大の角礫多く含む。
- 4b 暗褐色土 ローム粒子含む。
- 5 ローム土による充填土 上位5cmが暗緑色ローム土。中位3cmが黄色ハミスを多く含む暗褐色ローム土。下位3cmが暗緑色ローム土。最下位が橙色ローム土。灰緑色ローム土をブロック状に含む。
- 5' 暗黄褐色ローム土 締まりに欠ける。
- 6 礫混じり暗褐色土
- 6a' ローム粒子・ブロックを多量混入。

B. I=538.00m

.B'



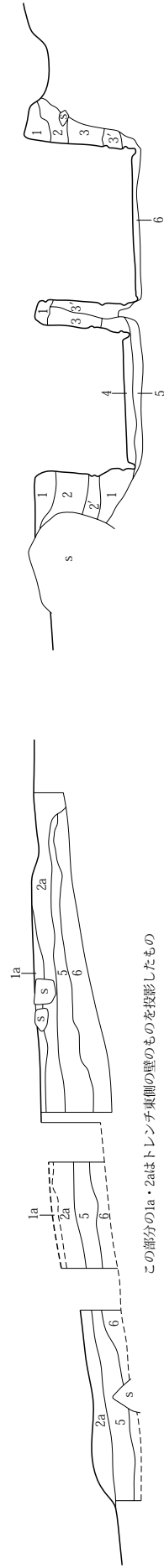
C. I=538.00m

.C'

整地の境目となる石列の可能性のある痕跡。痕跡はごく浅い。

E. I=538.00m

.E'

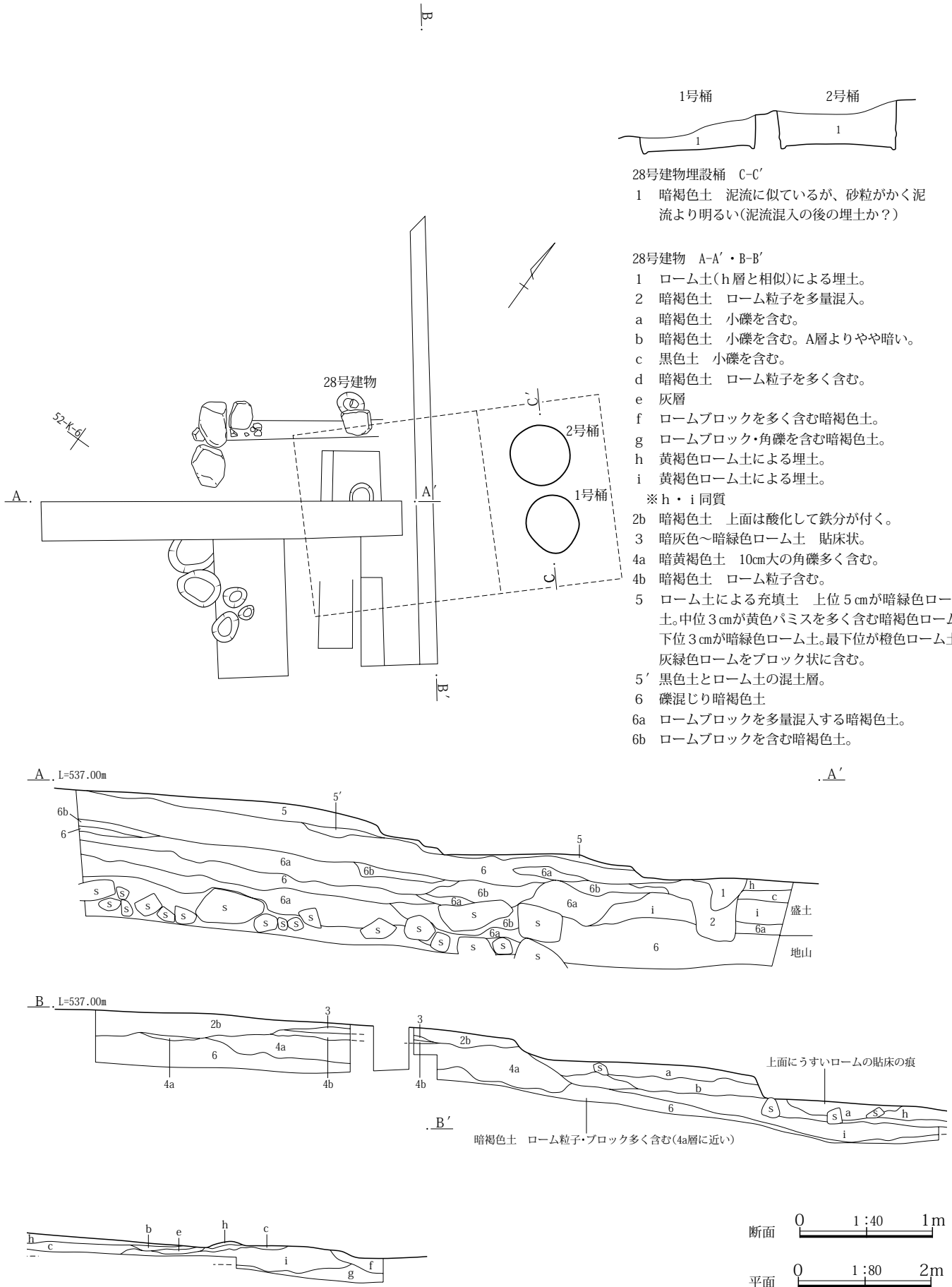


この部分の1a・2aはトレンチ東側の壁のものを投影したもの

14号建物 1・2号桶 E-E'

- 1 黄褐色ローム土による貼床。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多量混入。粘性に富む。
- 2' ローム粒子・ブロックの含有量が少ない。
- 3 黄褐色ローム土主体の埋土 灰色の粘土ブロックを含む。
- 3' 暗褐色土とロームの混土层。
- 4 灰褐色ローム土 よく淘汰されたローム土で、小礫は含まない。
- 5 黄褐色ローム土 1層と同質
- 6 粘性の強い暗褐色ローム質土

第70図 IV区7号屋敷跡 14号建物 1・2号桶断面



第71図 IV区7号屋敷跡 28号建物

部であり、桶の底や側面に別に貼るように特別に持ち込まれたものではないと思われた。

28号建物の床下部分を含む広い範囲の土層についてトレンチ調査を行う。その結果14号建物でも確認されているように、北西方向から南東方向に低くなっている地形を平らにするために土を盛り上げて造成していることが明らかとなった。盛られた土は、大きく分けると地山の礫混じりの暗褐色土とその下に位置するロームを主とした土を用いてほぼ層状に積み上げている。場所によって積み方や層の厚さは異なるが、地山の礫混じりの暗褐色土の上にロームを主とした層、その上に礫混じりの暗褐色土。最も上面にロームを主とした土を盛って、地表面としていたようである。盛られた層は3～4面で、層の厚さは5～20cmで全体の盛土の厚さは40～60cmの場所が確認されている。このロームを主とした造成面の上に14・28号建物は建てられていた。

【所見】13号建物の付属建物として2つの桶を持つ建物が2棟近接して存在したことになる。このような2棟同時存在の例は他の屋敷跡ではなく、新旧関係があることも推定できるが、2棟とも天明泥流下で確認されており桶は天明泥流で埋まっていた。現状では同時存在と考えられる。建物の礎石や雨落溝等が確認されていないのは、天明泥流が薄い場所でありその後の開発に伴い攪乱を受けて確認できなくなったものと考えられる。

28号建物の規模は不明であるが、14号建物と同様な理由で、長軸3.60m前後、短軸2.70m前後の2間×3間に近い建物と考え点線で建物範囲を図示した。

⑥**方形集石遺構(旧17号建物)**(第72図、PL.26)52区L・M-3グリッドに位置する。

【位置・調査概要】13号建物南西側、前庭の西端で10号溝手前部分に位置する。地面を長方形に少し掘り込み、その中に大量の石が投げ込まれたような状態で確認された。調査段階で西側と北側に雨落溝と思われる落ち込みがあったので、建物の可能性も考えられ17号建物として調査した。しかし礎石や柱穴等確認されず、西側の落ち込みは、方形集石遺構から溝中心まで1.50m離れており、雨落溝としては離れすぎている。北の落ち込みは41号畑の南西部境界に掘られた耕作溝と考えられることが明らかとなった。そこで17号建物ではなく多くの石を集めた遺構と考え、方形集石遺構として報告する。確認段階で

は、多くの石が堆積してあったが、遺構の性格が不明で一部除去してしまった。本来は現状より高い位置にも多くの石が堆積していた。

【構造・規模】地表面を長軸方向4.20m短軸方向3.10m深さ30～50cmほど掘り込んで、その中に5～40cmほどの大きさの石が大量に雑多に投げ込まれたような状態である。確認できる石の厚さは50cm弱であるが、本来はさらに高い位置にも積まれていたものと思われる。方形に掘り込まれた掘り込み面にはロームが多く貼りつけたような状態で残っている。

【所見】建物の庭先に大量の石が集められ、浅い方形の掘り込みの中に投げ込まれたような状態で確認された。方形集石遺構の性格は不明である。

⑦**8号石垣**(第73図)52区J～P-4～9グリッドに位置する。

【位置・概要】平成20年度の調査で大部分を発掘し報告している。平成26年度の発掘では、石垣最下段と北端の石垣を追加調査した。前回の報告書の中で「石垣は上・下段の二重構造となっているが、上段部分は現況でほぼ露出していたのに対し、下段部分は天明泥流堆積物に埋没しており、浅間A軽石に被覆されていた。(中略)下段は泥流被災以前、上段は被災後の造築となる可能性(中略)」と説明している。その後の泥流下出土の石垣の調査例から、上段の石垣も細長い石を横方向に積んでおり、積み方の特色から泥流被災以前と思われる。

【規模】石垣の全長は前回の調査範囲で長さ12.0m、追加調査部分で3.60m合計15.6m。石垣の高さは、最も高い部分で3.10mである。石垣最下段に積まれていた石は幅50～90cmと大きな石が多く、その上に積まれている20～40cmの石と大きく異なる。

【所見】8号石垣は、7号屋敷跡敷地造成段階に斜面を切り取った段階で積まれたものと思われる。8号石垣に連続して北東側にも大きな石垣が築かれている。この石垣は天明泥流で埋まっていなかった。石垣を観察すると、8号石垣は、大小様々な石を使い、細長い石は横方向に積んでいる。一方、北東側の石垣は、一定の大きさの丸みを帯びた石を多く使っており、細長い石は横方向でなく斜め方向に積んでいる。使われている石の大きさや、積み方に大きな違いが認められる。天明泥流以降に積まれた石垣と思われる。



第73図 IV区7号屋敷跡 13号建物 8号石垣

⑧水場42区P・Q-25グリッドに位置する。

7号屋敷跡南西部に位置し、集落内を流れる10号溝手前部分に位置する。7号屋敷跡に伴う水場と思われる。2号井戸、平石敷(平らで巨大な石2個)、唐臼と同じような造りで底部に穴を持つ石製臼、石製臼の西側に接して常に水の流れている10号溝等がある。これらの遺構はおそらく一連の遺構であり、7号屋敷跡に伴う水場と思われる。また水場には10号溝の中や石製鉢の周辺および井戸南付近から建築部材や桶・栓・梯子・お盆等多くの木製品が泥流により押し流されたような状態で出土している。水場周辺に建物の礎石や柱穴等は、確認されなかったが、水場に伴う小さな小屋または上屋等の施設があったものと思われる。

(ア) 2号井戸(第74・75・179図、PL.27・100)42区P・Q-25グリッドに位置する。

【位置・規模・形状】水場の最も奥に位置し、泥流堆積物により埋まっていた。平面形はやや歪んでいるが、石をほぼ円形に6～8段積み上げている。使っている石の大きさは20～40cmで、積み方は細長い石を水平に積む平積みである。井戸の直径1.00m深さは1.30mである。井戸を埋めている土は全体に砂質土で表面がやや明るく、下面がやや暗い灰黒色土を主としている。泥流の一種と思われるが、泥流とは少し異なっている。

【構造・所見】積んでいる石の大きさは大小様々で、同じような石をそろえる意図は無かったようである。発掘段階でも湧水が溜まって溢れることはないが、上端部の石2個付近まで常に水が溜まっていた。

(イ) 平石敷(第74図、PL.27・28)42区P・Q-25グリッドに位置する。

【位置と概要】2号井戸と石製臼は2.00mほど離れている。その中間に平らな大きな石2個が、並べられた状態で置かれている。

【構造と規模】2つの石は地山を一部掘り込み、一部は地山の上に置かれていた。規模は南側の大きな石が長軸1.21m短軸90cm厚さ21cm、北側の石は長軸1.02m短軸78cm厚さ20cmである。

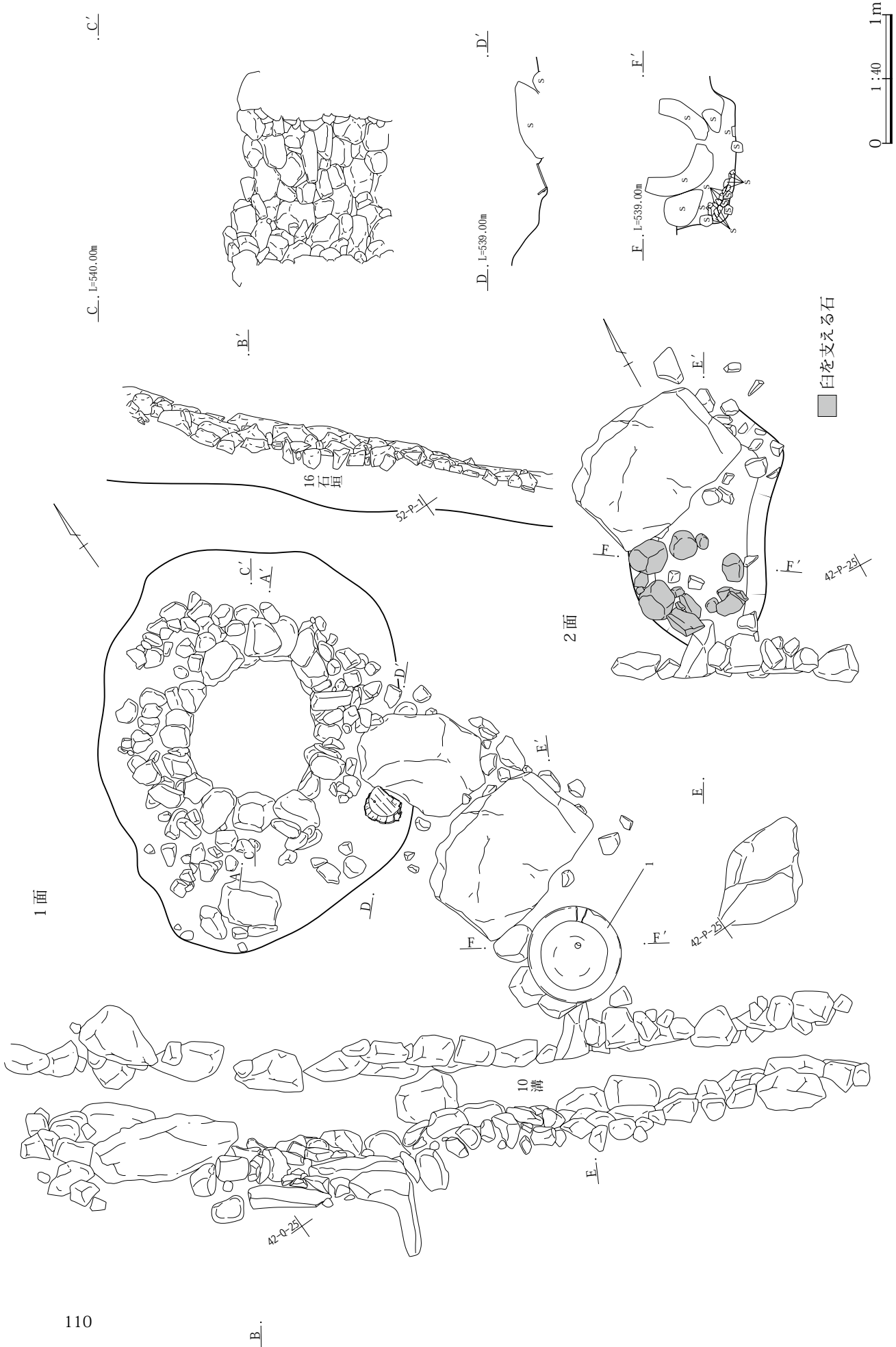
【所見】2つの大きな石は、井戸から水を汲み出すときの台石とともに、汲み出した水を使用して行う作業場(台所)としての機能を持った施設と思われる。大きく平らな石の北側の石の脇に、木製の手桶が出土している。

(ウ) 石製臼(第74図、PL.28・100)42区P・Q-25グリッドに位置する。

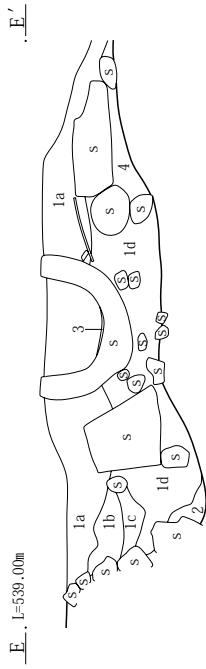
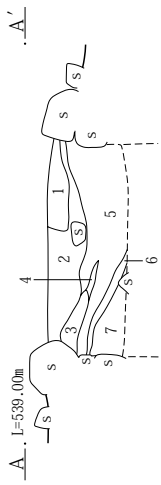
【位置・概要】西側に10号溝、東側に平石敷、平石敷の西側に接して唐臼で使われている臼と同じような造りの石製臼が置かれている。石製臼は13号建物の唐臼より幅18cm高さ13cmほど大きい。13号建物の唐臼を133%拡大して比較するとほぼ同じカーブをもって作られている。石製臼は天明泥流で埋まっていた。天明泥流を取り除くと、底部に浅間A軽石が厚さ1cm以下であるが、明瞭に堆積していた。

【構造と規模】石製臼の大きさは、口径76cm、高さ51cm、壁面の厚さ11～18cmである。石製臼底部に直径5cmの穴が底部まで貫通している。開けられている位置は底部の中央ではなく縁部部である。さらに口縁部の一カ所に幅7cm深さ2cmの溝状の掘り込みがある。掘られている位置は底部に穴が貫通している場所と同じ側面側である。これらの特色から、この石製臼は水を入れて使われたことが分かる。北に接する平石敷に接して据えられ、高さは平石敷の上に口縁部が15cmほど高くなっている。平石は厚さが21cmであるが石製臼は高さが49cmほどある。そこで地表面を掘り込んで設置する必要がある。さらに石製臼底部から流れ出る水を10号溝まで流す溝が必要となる。このような条件を満たすために、石製臼は地表面を27cm前後ほど掘り込み、石製臼底部周辺に20～30cmの石6個を円形に並べ、その上に石製臼底部から15cm前後浮くような状態で据えられていた。底部の穿孔や口縁部に掘られていた溝の位置は、流れ出す10号溝の方向ではなく逆の方向である。なぜあえて逆方向に水が流れ出るように工夫してあるのか不明である。石製臼底部の溝より10号溝の底部は20cm前後低くなっており、石製臼や平石敷から流れ出た水は10号溝に流れ込むようになっていた。石製臼は地表面より浮いた状態であったので、押し寄せてきた天明泥流は石製臼の下空間も埋めていた。

【所見】底部に穿孔されていた穴を塞ぐ木製の栓が石製臼の南東方向2.00m離れた10号溝の中から他の栓3本と重なるような状態で出土している。石製臼に栓がされていない状態で泥流により溝まで押し流されたものと思われる。



第74図 IV区7号屋敷跡 2号井戸(1・2面)



.B'. I=541.00m

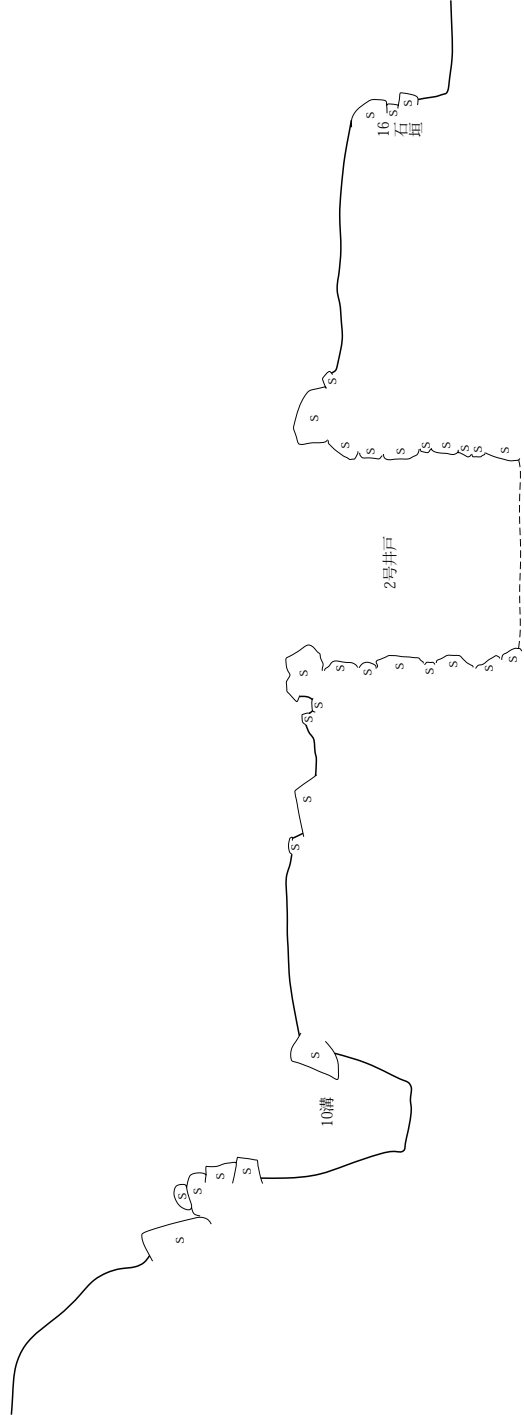
2号井戸 A-A'

- 1 明褐色土 地山の褐色砂質土を主とする層。
- 2 灰褐色土 灰褐色の粘質土。粘性が強い。砂も少量含む。
- 3 赤褐色土 赤褐色の砂を主とした層。
- 4 灰色土 灰色の小さな砂を主とした層。
- 5 灰黒色土 灰黒色の粘土層。下層に3~5cmの石を含む。
- 6 赤色土 1~3mmの赤色の砂を主とした砂層。
- 7 灰色土 灰色の砂を主とした層。

7号屋敷跡水場(10号溝白・平石)E-E'

- 1a やや明るい天明泥流。
- 1b やや暗い天明泥流。
- 1c やや明るい天明泥流で、やや粘性あり。
- 1d 粘性を帯びた天明泥流
- 2 暗褐色粘質土 水性堆積か。流れを示すラミナ状堆積は見られない。
- 3 浅間A 軽石の薄層。
- 4 暗褐色土 小礫を含む。

.B'



第75図 IV区7号屋敷跡 2号井戸断面

⑨出土遺物

13号建物出土非掲載陶磁器類の内訳は、江戸時代の磁器8点54g、陶器14点193g、近現代陶磁器3点5gである。図示し得た陶磁器は3点(1~3)と少なく、残存率も低い。石製品では白(5)が出土している。この白に比してやや大型の石白(1)が2号井戸と10号溝間の水場から見つかっている。木製品では、漆塗の曲物底板1点(4)が出土したのみである。漆塗容器の底部か天井部であろう。7号屋敷(13号建物)下面からは弥生式土器が1点(1)出土している。

14号建物、28号建物からの遺物出土はない。ただし、「28号建物東西トレンチ」として須恵器片1点12g、江戸時代の陶器1点4gが出土している。いずれも細片のため掲載していない。

方形集石遺構(旧17号建物)からは、江戸時代の磁器3点34g、陶器20点96gが出土しているが、細片のため掲載していない。

8号石垣からは近現代の陶磁器が3点9g出土しているが、細片のため図示し得なかった。

2号井戸非掲載陶磁器はなく、出土した3点すべてを掲載した。これらのうち、3の磁器碗が近代の所産である。混入品と考えられるが、出土位置の詳細は不明である。植物遺存体としては、竹片6片、板片4片と桶が出土している。桶は側板6点と底板2/3、竹製のタガが残存していたが、脆弱なため実測を行わなかった。なお、調査時の計測では深さ約8cm、底径約18cmで、平石上に乗る部分が遺存していなかった。

(5) 8号屋敷跡(第76・77図、PL.29・30)

① 8号屋敷跡の調査概要

8号屋敷跡は、南東側方向に向かって低くなる緩やかな傾斜面にあり、集落の中心である6号道(現在町道1-5号線として使用されており発掘できないが、1号屋敷跡と5・6・7号屋敷跡の間で発掘調査されている。また江戸時代の絵図等の検討から町道1-5号線の下に埋まっていると思われる。)から西側に14.0mほど奥に入っており、6号道面より約2.00m高い所に位置する。宅地は西側と南側の斜面を50~100cmほど削り26号石垣を築き、東側と北側は20~30cmほど盛土し22・23号石垣を築き平らな宅地面を造成している。屋敷跡は母屋である16号建物を中心に北に20・26号建物、南に水場である6・7号井戸および1号石組、それらの水を流す13号溝がある。溝の南側は、9号屋敷跡北側の28号石垣が築かれている。集落内の6号道から敷地までは、長さ14.0m、幅90cmの7号道で繋がっている。7号道の両脇には畦サク幅の広い28号畑、29号a・b・c畑がある。この畑は明治6年の壬申地引絵図で屋敷跡の持ち主と同じ地主となっている。時代は違うが、8号屋敷跡に伴う畑の可能性が考えられる。なお畑については後でまとめて報告する。

8号屋敷跡は約1.00m(5cmの表土・5cmの天明泥流)により被覆されていた。泥流の上に堆積している厚さ50cmの厚い表土は上層が耕作土となっているが、大部分は10~30cmの大きな石を含む土砂である。この土砂は西宮との境に流れる境川周辺に厚く堆積しており、天明泥流以降の段階で境川付近から流れ出して堆積した土砂と思われる。土砂の下に50cm前後の天明泥流があり、下に集落が埋まっている。

② 水場の問題

8号屋敷跡南東に位置する6・7号井戸および1号石組が、現状では東宮遺跡、全体の南端に位置する水場である。この水場は8号屋敷跡より少し低い位置に造られ、9・10・11号屋敷跡は、水場より1.50~2.00mほど高い所に造られている。9・10・11号屋敷跡付近は西宮遺跡との境に流れる境川上流から流れ出した土砂が厚く堆積しており、その上に屋敷跡が造られている。水の確保が難しいために、これらの水場より南に位置する9・10・11号屋敷跡では屋敷跡に伴う井戸は無く、これらの屋敷

跡には6・7号井戸および1号石組に通じる道が繋がっている。この水場を共同で利用していたものと思われる。共同して使われたであろうこの水場は、9・10・11号屋敷跡の中でも触れるが詳しい遺構内容の説明は8号屋敷跡の中でまとめて扱う。

③敷地内での浅間A軽石

8号屋敷跡では、16号建物内および軒下に相当する範囲には浅間A軽石は確認できないが、建物の雨落溝に確認できた。前庭には浅間A軽石が、ほとんど残っていなかった。除去されていたものと思われる。西側の建物の雨落溝に良好に残っていた土壁の下には、良好な状態で浅間A軽石が残っていた。

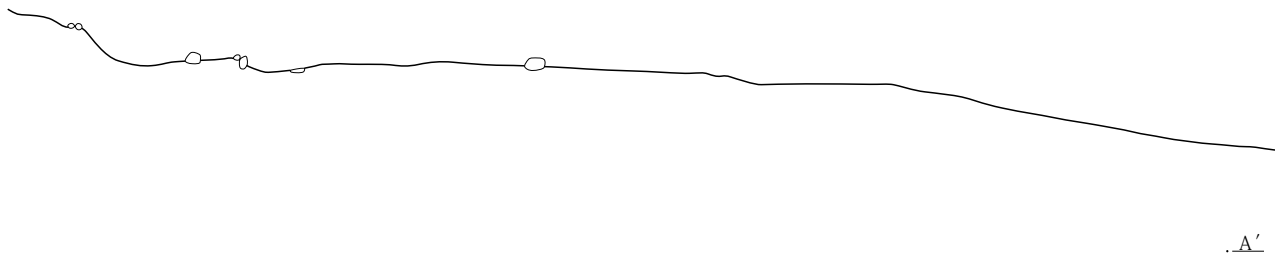
④天明三年以降に作られた井戸と石垣

8号屋敷跡と同時に調査した遺構であるが、天明三年以降に作られた遺構として4号井戸、25号石垣、17号土

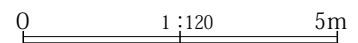
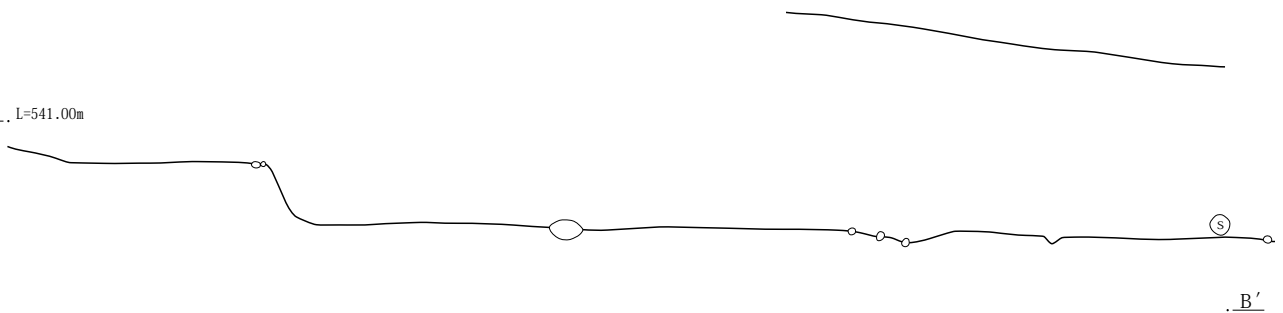
坑がある。調査段階で泥流混じりの土で埋まっており、天明三年の泥流下の遺構として調査した。しかし25号石垣は天明泥流で埋まっている26号石垣を壊して造られていた。16号建物北西端部である4号井戸南付近には26号石垣が一部残っており、その場所には16号建物の土壁が26号石垣に押しつけられた状態で良好に残っていた。その部分から南側では、26号石垣の大部分が削り取られて、石垣に倒れて残っていたと思われる土壁ともに撤去され、石垣より低い位置にあった雨落溝部分に土壁の一部が残っていた。4号井戸も泥流混じりの土で埋まっており、8号屋敷跡と同時に調査した。25号石垣と4号井戸の石垣の積み方は、細長い石を斜め方向に積んでいる。その積み方は天明泥流下の石垣にはない谷積みである。

17号土坑は、22号石垣南端に位置する。土坑の中に乱雑に石が投げ込まれていた。

A, L=541.00m



B, L=541.00m



第76図 IV区8号屋敷跡断面

⑤16号建物(第79・80・179～181図、PL.100～102)42区O～R-14～19グリッドに位置する。

(ア)建物の概要

8号屋敷跡の母屋であり、礎石を用いた建物である。建物の出入り口である東側に半間の下屋がある。この下屋は母屋の梁の延長上に柱が建てられており、母屋を構成する建物の一部をなしているものと思われる。下屋の柱は母屋が1間間隔に柱が建てられていたのに対し2倍の2間間隔となっていた。柱は母屋と異なり下屋は柱が5本の内3本は柱穴、1本は礎石、他の1本は柱穴と思われるが不明である。また建物南側には3本の柱穴を用いて柱を建てた小さな下屋が造られていた。3本の柱穴の間隔は東側2.60m、西側2.80mで等間隔ではない。母屋と下屋を囲むように雨落溝が残っていた。雨落溝の幅は30～70cmであり、出入り口である東側が狭く裏側の西側が広がっていた。建物の柱から雨落溝中央部までの距離は下屋部分以外ほぼ90cm、東側の下屋部分では85cm、南の小さな下屋部分では45cmと狭くなっていた。

16号建物出入り口は東側である。建物には北部分に土間や馬屋が配置され、土間奥に竈が設置されている。竈の北側に唐臼の抜き取り穴と思われる小穴がある。また竈南には、多くの炭の小破片や粉を出土した炭出土方形遺構がある。囲炉裏は、推定される床部分に南北方向に2基配置されている。床の貼られた建物南側には、床材は残っていなかったが、床材の大引き痕・根太痕が床下の土にめり込んだような状態で痕跡として残っていた。

【位置・規模】建物は、礎石列を参考に芯々寸法で計測すると、桁行(南北)12.94m×梁行(東西)6.45m、建物東側に母屋の礎石から90cm離れて下屋柱を持つ。下屋を含めると梁行きは7.35mである。柱を配置する柱間の間隔は、北側の馬屋を含む土間部分と南側の板の間部分で異なるようである。板の間部分は1.84mを1間として梁行3間半、桁行4間としている。一方、土間部分は1間1.84mの寸法で梁行3間半、桁行3間の空間を馬屋の大きさ東西2.76m南北2.45mを基本として梁行4間、桁行5間と細分し礎石芯々寸法を狭めているようである。

【構造】礎石は大小の川原石が用いられていた。建物内の礎石の大きさは一様ではなく、上に柱が建つと思われる部分の礎石は特に大きい。また建物外壁部分となる、4面の壁面に伴う礎石は出入り口の東側で大きな礎石を使

い、他の3面の礎石は比較的小さい。礎石は良好に残っていたものと本来在ったと思われる場所に残っていないものもある。残っていないが礎石の存在が推定されるところは点線で示した。

建物東側出入り口の礎石の周り以外の3面では、礎石の上に置かれた土台の真下から、わずかに外側に土壁を囲むかのように大小の石が連続的に並べられていた。出入り口部分には下屋があり、雨落溝と土壁との距離が他の3面では90cm前後であるが、さらに85cm前後外側に雨落溝が位置し土壁と雨落溝との距離は約1.75m離れている。そのために外部からの雨水や屋根からの雨水等が跳ね返り土壁下部にかかる状態が少なくなっている。それらの理由から他の3面と異なり石を並べる必要が無かったのであろうか。床材は残っていなかったが、建物の南側に建物全体約6割以上の範囲で、床が張られた痕跡を確認することができた。床下の構造材である大引と根太の痕跡がほぼ全面に板の痕跡が一部で確認された。おそらく天明泥流により押しつぶされて床下が落下し痕跡が床下に残されたものと思われる。大引痕は、東西の梁方向に約1.84m間隔で3本、根打痕は南北の桁方向に45cm間隔で12本確認されている。板は痕跡として一部を確認することができた。板の幅は25cm前後である。

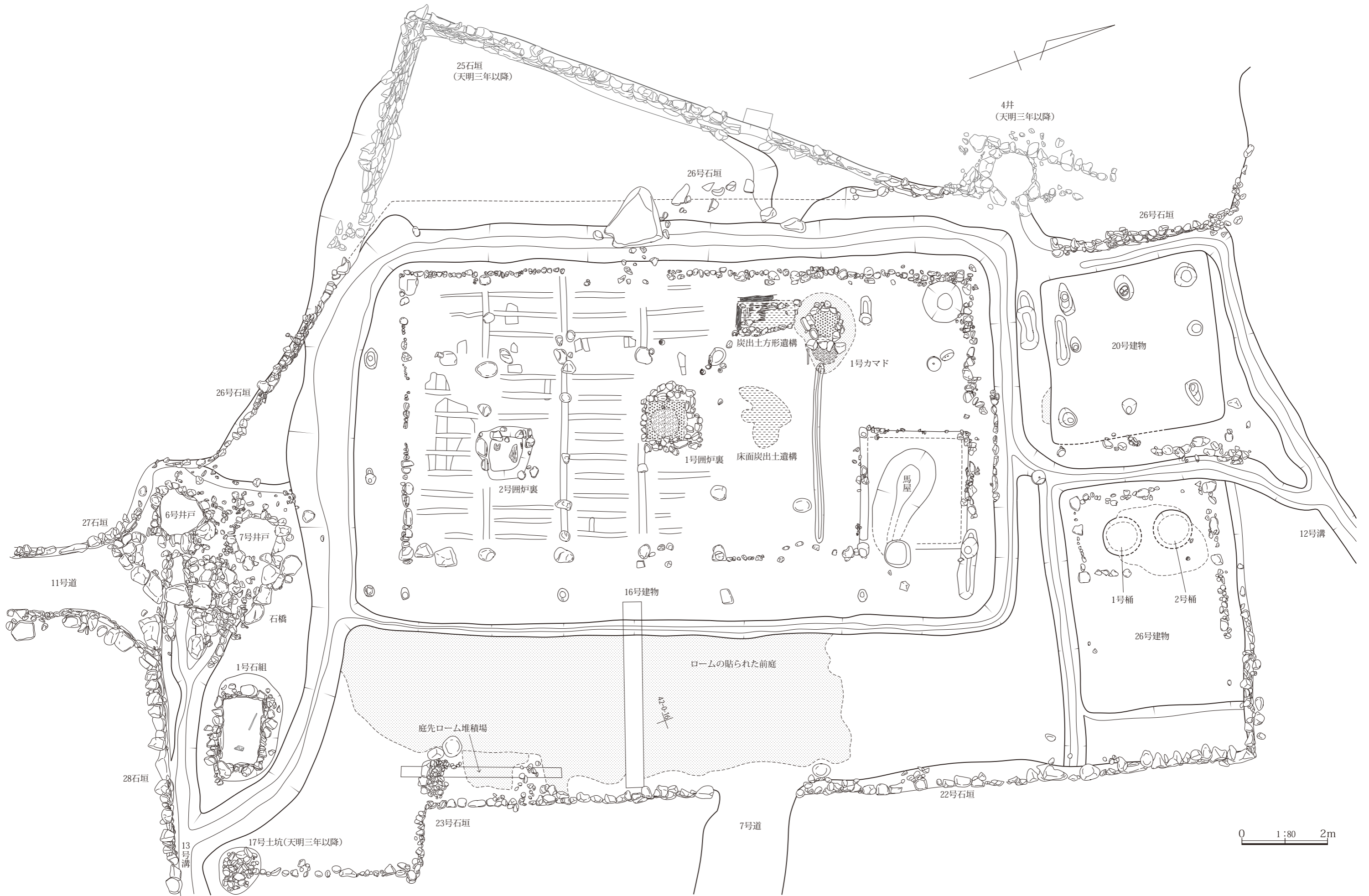
(イ)馬屋(第81図、PL.30)

【位置・規模・構造】16号建物の北東隅に位置する。母屋は基本的に礎石を用いているが、馬屋の柱は、掘立と思われる。4本の柱穴と馬栓棒を受ける柱部分の1本計5本の柱穴が確認された。馬屋の東側には埋設桶が据えられていたと思われる土坑状の掘り込みがある。中には泥流混じりの土を主とし、ロームブロックや少量の炭化物が混じっていた。土坑状の掘り込みの底部や側面に桶のタガや縦板の痕跡も残っていなかったので桶は抜き取られたものと思われる。馬屋は中央部分が凹状にへこんでおり、土間部分より10～15cmほど低くなっていた。低い部分は埋設桶の抜き取り穴まで繋がっていた。

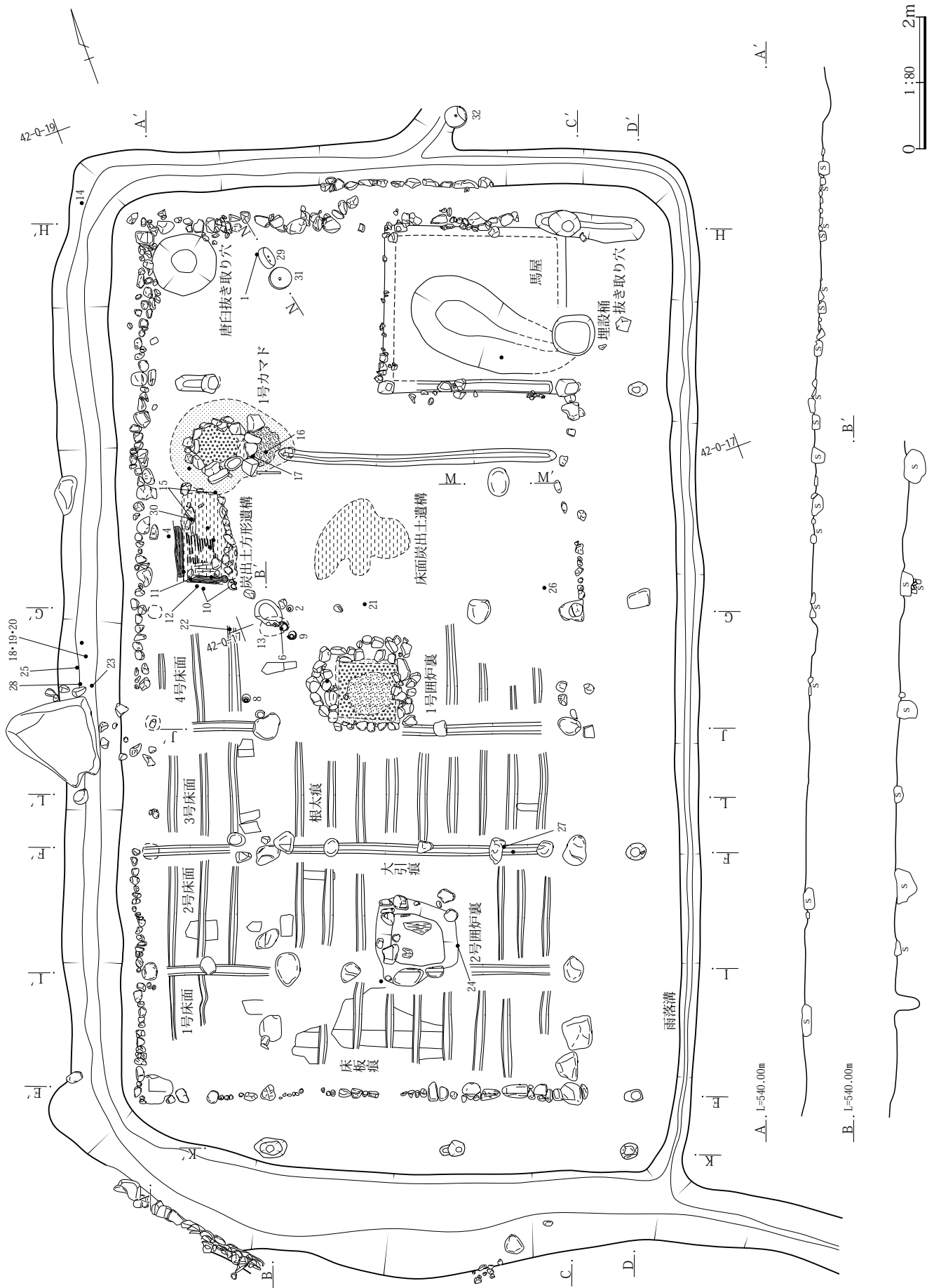
馬屋の規模は芯々寸法で東西方向2.76m、南北方向2.45m、馬の出入り口幅1.84mである。馬屋の北壁下には母屋の外壁部分になる家の土台が据えられていたものと思われる。馬屋南側には、約9cm角の土台と思われる溝状の痕跡が残っていた。他の3面にも少し溝状の落ち込みが確認されたが、南ほど明瞭ではなかった。桶が埋



第77図 IV区8号屋敷跡



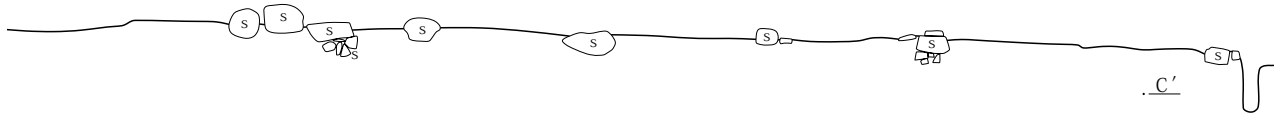
第78図 IV区8号屋敷跡16・20・26号建物



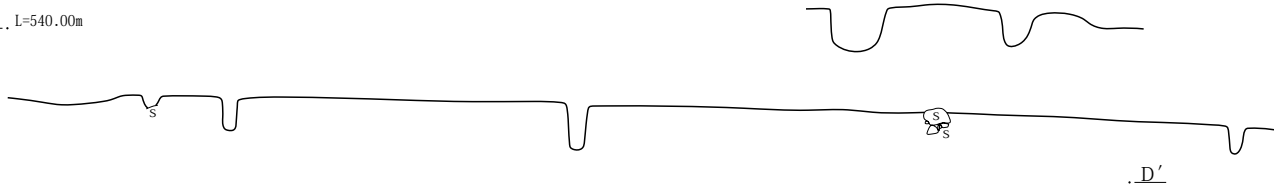
第79図 IV区8号屋敷跡 16号建物

第3章 発見された遺構と遺物

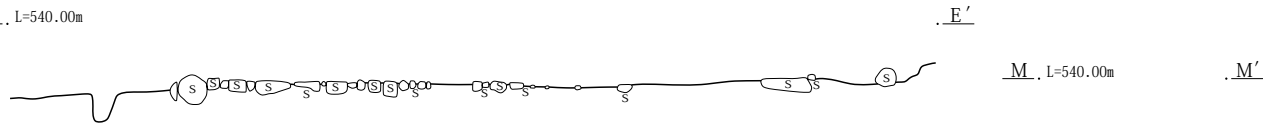
C, L=540.00m



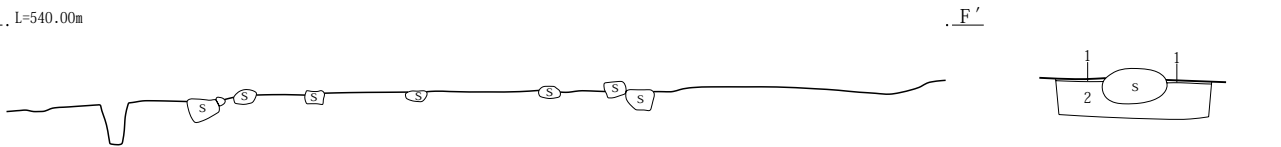
D, L=540.00m



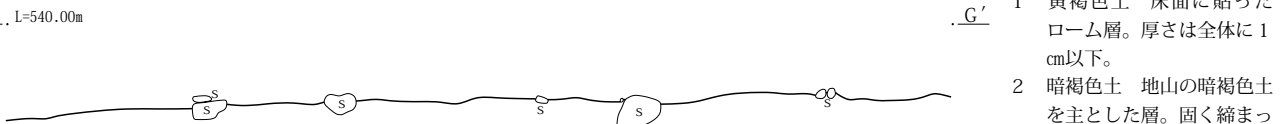
E, L=540.00m



F, L=540.00m



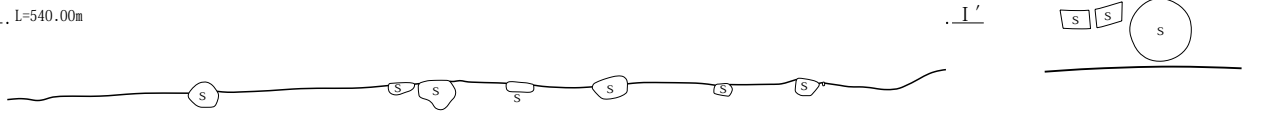
G, L=540.00m



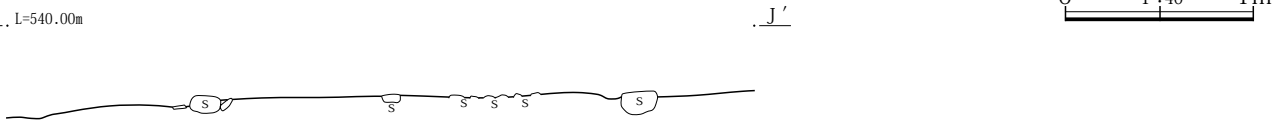
H, L=540.00m



I, L=540.00m



J, L=540.00m



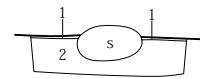
K, L=540.00m



16号建物土間中央礎石 A-A'

1 黄褐色土 床面に貼ったローム層。厚さは全体に1cm以下。

2 暗褐色土 地山の暗褐色土を主とした層。固く締まっている。砂質であるが大小の地山の石は含まない。



0 1:40 1m

0 1:80 2m

第80図 IV区8号屋敷跡 16号建物断面

められていたと思われる掘り込みの大きさは、底部で60cm、深さ46cmであった。他の埋設桶と同じように、口径60cm、高さ70cm前後の大きさの桶が埋まっていたものと思われる。

(ウ)土間(第79図)

【位置・規模】16号建物の北側に位置し、南側が板の間となっている。土間の北東コーナー部分に馬屋が位置する。土間は堅く踏み固められているが、ローム等を用いて固めていた様子は認められない。土間と板床の土部分の高さは、土間部分が15cm低く、土間の前にある前庭より15cmほど高くなっている。竈から建物入口に向かい長さ4.20m、幅15cm、深さ1cmほどの浅い溝状の落ち込みがあった。土間における排水機能であったのだろうか。

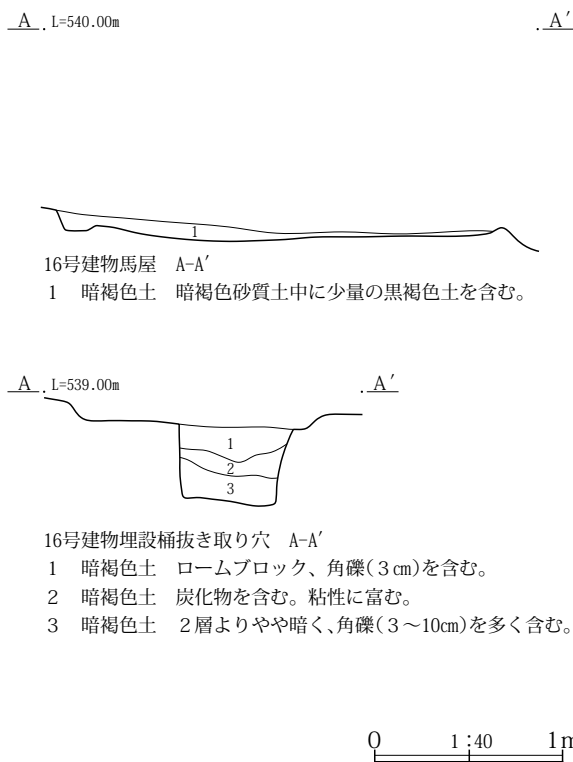
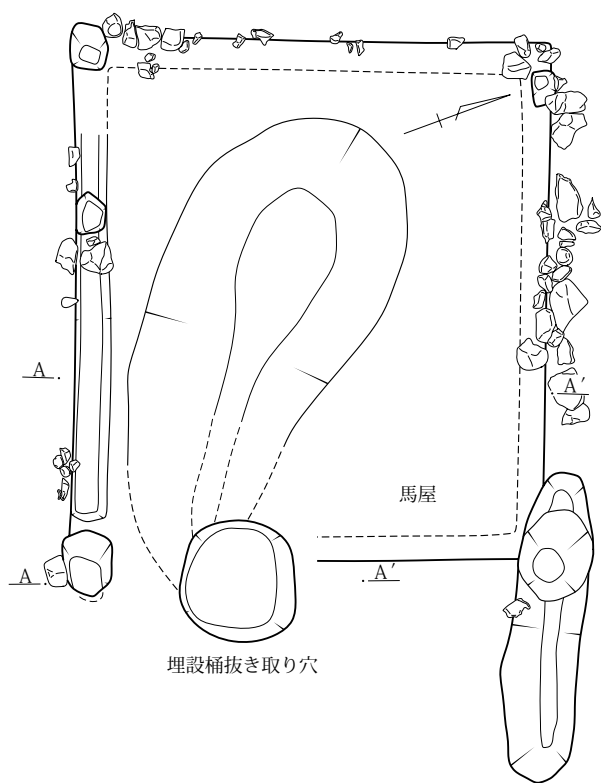
(工)竈(第82図、PL.30・31)

【位置・出土状況】16号建物土間奥に位置する。当初確認段階の竈は、ロームの塊の中に竈の周囲を円形に囲った石組みの上部が東(焚口方向)から西側(奥壁方向)に向かって倒れ込むような状態で、ロームとともに押しつぶされていた。天明泥流が建物を東から西側に押しつぶしながら屋敷跡内に入り、竈を押しつぶした様子を示している。この天明泥流により竈の周囲を円形に囲った8個の立石を囲っていたロームや竈上面で鍋等を受けるため

の構造物等を壊し、竈左袖石の1石が外れて竈内に倒れ込んでいた。竈内の天明泥流を除去すると、竈底部に約1cmと薄い灰が全面に堆積し、灰を除去すると底部中央部から焚口に掛けての範囲に厚さ約1~2cmの焼土面がある。焼土面下には炭と灰が混じった面があり、その下はやや焼土粒もあるが地山の層となっていた。

【規模・形状】竈本体の外形は、竈の周囲を円形に8個の立石で囲っていた。ロームが良好な状態で残ってなく明らかではないが、ローム被覆の厚さを10cmと仮定すると、幅(南北)約1.20m奥行き(東西)1.30mとなる。燃烧部の内径は幅(南北)約50cm奥行き(東西)70cmである。竈燃烧部及び焚口手前部分は、土間レベルより15~20cmの深さで凹んでいる。

【構造・所見】両袖方向の南北1.30m、焚口方向の東西1.50mの範囲を深さ15~20cm洋梨形に掘り込み、焚口部には底部に平石を2枚置き、その両側に袖石となる大きな石を立てる。燃烧部外周壁面部分には8カ所、燃烧部床面から5~6cmほど掘り込み、長さ30~50cmの細長い石を縦方向に並べる。その外側に大小の石を8個の石の隙間を埋めるように並べ、外側全体をロームで覆うようにして竈は作られていたものと思われる。石を被覆するロームの厚さは、奥壁面で厚さ20cmであった。燃烧部に



16号建物馬屋 A-A'
1 暗褐色土 暗褐色砂質土中に少量の黒褐色土を含む。

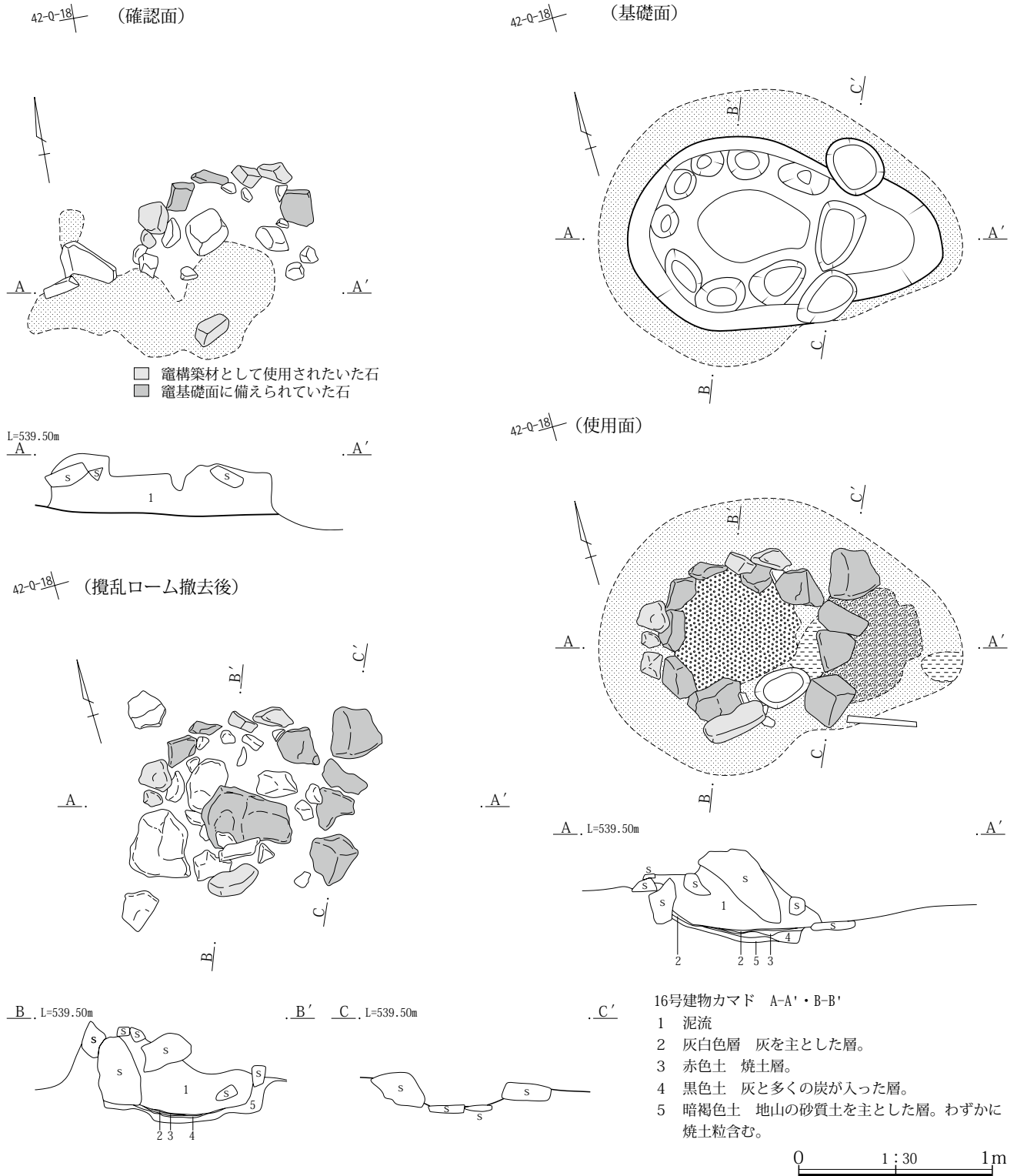
16号建物埋設桶抜き取り穴 A-A'
1 暗褐色土 ロームブロック、角礫(3cm)を含む。
2 暗褐色土 炭化物を含む。粘性に富む。
3 暗褐色土 2層よりやや暗く、角礫(3~10cm)を多く含む。

第81図 IV区8号屋敷跡 16号建物 馬屋

第3章 発見された遺構と遺物

建てられている石は、火を受けて中央から下は、大部分に煤がついており、上部は煤のほかに熱を受けて赤褐色となっている。鍋等を受ける天井部の幅は、50cm前後あり、出土している鍋の大きさは、30cm前後である。竈上面は、狭くなるような構造になっていると思われるが、残っていないので不明である。竈確認段階で焚口反対側

に残っていた多くのロームや石等はこれらの材料であったことが考えられる。図面上で濃い網掛けの石が基礎面に据えられていた石、薄い網掛けの石が竈構築材として使用されていた石、網掛けの無い石がそれ以外の石である。



第82図 IV区8号屋敷跡 16号建物 竈

(オ)炭出土方形遺構(第83図、PL.32)42区Q-17・18グリッドに位置する。

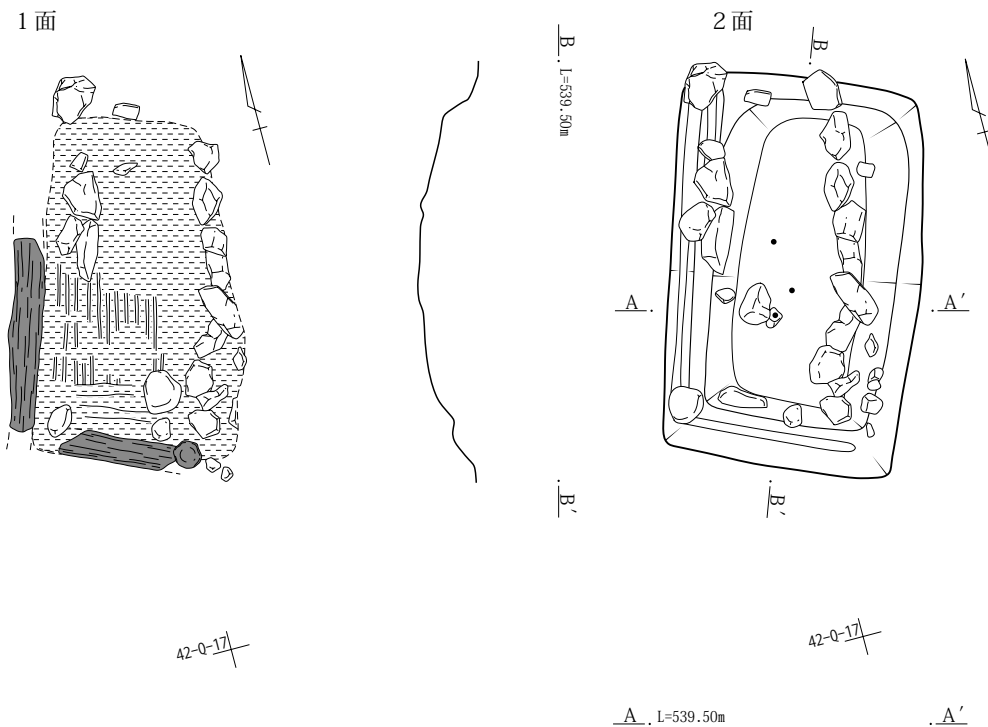
【位置・出土状況】竈の左側(南)に長方形を呈し土坑状に掘り込まれ、底部に粉状の炭が全面に敷いたような状態で残っていた。竈の隣にあり、炭を大量に出土していることより煮炊きに関係した遺構であろうと思われるが類例が少なく用途がわからないので、炭出土方形遺構と呼称した。同じような遺構は、南の西宮遺跡5号建物でも確認されている。

【規模・形状】掘り方で、東西1.00m、南北1.50m、床面から深さ25cm、中央部分が凹状で少し深くなっている。内面の4隅に20~30cmの大きな石を1段並べ壁面としている。石列は、床面側と壁面側に多く南北面両面は少なかつた。石で囲まれた内径は東西40cm、南北1.10mである。竈と反対側の南側と床面と反対側の西側に角材の木質部が多く残っており角材が置いてあったと思われる。

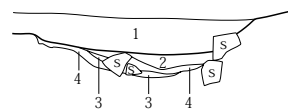
【構造・所見】竈と反対の南側半分に簾状の痕跡が残っていた。この下から粉状の炭、その下から直径12cmの漆椀、細長い木製品等が出土している。この簾状のものが、遺構上部にかぶせてあった可能性がある。その下の粉状の炭の中に焼土粒は全く含まれていなかった。遺構の使用目的は不明である。

(カ)床面炭出土遺構(第79図)42区P・Q-17グリッドに位置する。

竈南東部で炭出土方形遺構東側に位置し、両者は2.00m離れている。1.50×2.00m深さ5~8cmで、遺構内部全面に小さな炭の破片が埋まっていた。灰や焼土粒はほとんど無く、床面が焼けて焼土粒化した部分も認められない。遺構としては浅く不定形を呈しており、炭等を回収したときに床面が低くなったものと考えられる。遺構の目的は不明であるが、竈と炭出土方形遺構に近接しており、台所の煮炊きに関係した遺構と思われる。



- 16号建物炭出土方形遺構 A-A'
- 1 泥流
 - 2 暗褐色土 地山の砂質の暗褐色土に近い層。
 - 3 炭を主とする層。
 - 4 暗褐色土 砂質でやや灰色を帯びている。



0 1:30 1m

第83図 IV区8号屋敷跡 16号建物 炭出土方形遺構

(キ)唐臼(推定)(第79・84図、PL.32)42区P・Q-18・19グリッドに位置する。

建物の北西コーナー一部分に直径1.00m深さ34cmで断面が三角形に近い土坑状の掘り込みがある。この大きさの掘り込みや掘られている位置は、西宮遺跡で発掘された3軒の建物と共通し、大きさは西宮遺跡例や東宮遺跡1号建物の唐臼の掘り込み例に近い。唐臼には、杵を支える支脚がセットとなる。唐臼と支脚を埋めた支脚穴との距離は、同じく西宮遺跡や東宮遺跡1号建物例では、1.30～1.40m離れた位置に掘られている。残念ながら16号建物では見つけることができなかった。ここでは、石製の唐臼が埋めてあったものが、抜き取られた掘り込みと推定して報告する。

(ク)床面(第79図、PL.33)

【位置・出土状況】建物の南側梁行4間×桁行3間半範囲に、床板材等は残っていなかったが、多くの部分で床板・根太・大引の痕跡が残っていた。この区域は床面となっていたと思われる。これらの痕跡が残っていなかったのは礎石周辺や2個の囲炉裏部分、北側の土間に近い部分だけであった。これらの痕跡は天明泥流が押し寄せ、床面全体が天明泥流の重さで床下の土間部分に落下し、根太や大引がめり込んでできたものと思われる。板の痕跡は、床下の圧痕で明らかになったわけではなく、床板が腐食し、その空間に腐食しわずかに残った板材の痕跡と細かな土が流れ込んでできた面を注意して検出したものである。床面全体から見たら検出できた場所は少なかったが、4箇所すべての床面で確認することができた。奥の南側から1～4号床面と呼称する。

【規模・形状】大引痕は、板の間内側で梁方向に3本確認できた。間隔は1.84m前後である。残された大引痕の材の幅(太さ)は12cm前後である。根太痕は、大引痕と直行するように約45cm間隔で1間の間に3本ずつ、ほぼ全面に規則正しく残っていた。根太痕の幅(太さ)は9cm前後である。この大引や根太は、痕跡だけであり実際の大きさは不明である。以前発掘された床材が残っていた1号屋敷跡での幅(太さ)は一定でなく、土台は15cm前後、大引は12～28cm、根太は8～12cm等あり様々である。

【構造・所見】規則的に残された大引痕や根太痕から、計画的に配置された床面の存在が推定できる。東側手前3間半と奥の西側1間の間には他より大きな礎石がある。

この場所に根太痕が無く土台に相当する材があり、柱や壁が存在し別の部屋として区画されていたのではないだろうか。

(ケ)1号囲炉裏(第84図、PL.33・34)42区P・Q-16・17グリッドに位置する。

【位置・出土状況】建物ほぼ中央、床面の最も土間に近い4号床中央部に位置する。囲炉裏周辺の床面には板が貼られていたものと思われる。囲炉裏の木製の杵は、腐食して残っていなかったが、それ以外の部分は使われていた状態をほぼ良好に残しており木製の杵を置けば、すぐにでも使用可能な状態であった。

【構造・規模・形状】床下部分を約1.10m四方の範囲に15～25cmの大きな石を方形に組み内径で90cm四方、深さは15～20cm。石で囲まれた囲炉裏の基礎部分を組んでいる。基礎部分の石組みの外側にはその石を補強するように、同じような大きさの石を多く並べる。石で囲まれた囲炉裏内の底部には、ロームを詰めて固めロームの厚さは、底部中央で5cm、囲んである石の部分では20cmと厚く貼り、ロームで箱状の杵を作る。この杵の大きさは約75cm四方、深さ15cm前後である。この箱状の中に軽石を、縁辺部が高い箱状を呈するように充填させる。軽石の厚さは中央部で5cm、縁辺部は15cm前後である。この軽石の箱状の中に灰を厚く充填する。灰の厚さは10cm前後である。囲炉裏として灰が堆積している部分は約60cm四方、灰の厚さ約10cmである。使用により、囲炉裏表面の狭い中央部には燃え残った小さな炭があり、その下の直径60cmの範囲にある灰層の中に焼土粒や炭は全く残っていない。その外側の灰層には、小さな炭の破片や少量の暗褐色土焼土粒が含まれていた。囲炉裏内の焼土粒は、この灰層周辺部と軽石層と最下層のローム層中央部に残っていただけであった。竈の熱を受けて焼土化したものと思われる。表面の灰層周辺部にある焼土粒は、囲炉裏で燃やした様々なものの中に含まれていた土が焼土粒化したものと思われる。

【所見】使っていた囲炉裏が、天明泥流により埋まった状態を示している。竈と異なり厚い大量の灰の存在が、囲炉裏の特徴を示している。

(コ)2号囲炉裏(第84図、PL.34)42区P・Q-15・16グリッドに位置する。

【位置・出土状況】建物南端1号床東側に位置する。確認

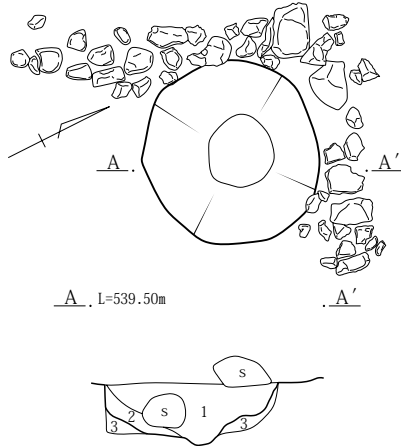
段階で表面に床板と思われる痕跡が残っていた。天明泥流で埋まった段階でこの囲炉裏の上部には、床板が貼られていたと思われる。

【構造・規模・形状】1号囲炉裏と異なり構造的には簡単で、ほとんど使用されなかったことを示している。床下部分を約1.10m四方の範囲に20~30cmの大きな石を少し掘り込み方形に近い形に組んでいるが、石の数が少なく

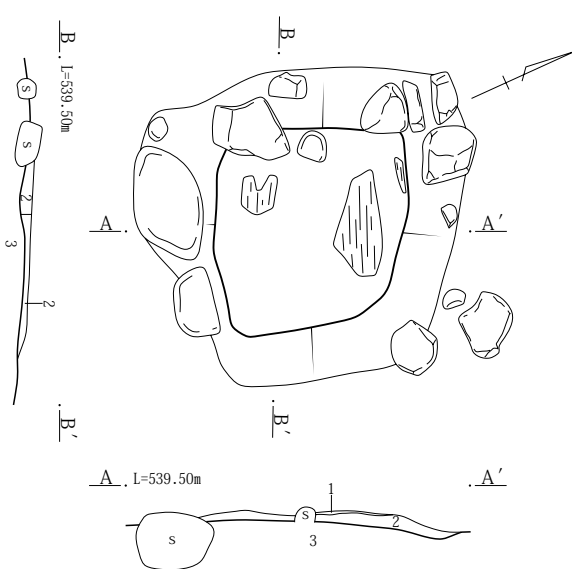
方形に囲みきれていない。内面に1号囲炉裏でみられたようなロームや軽石の持ち込みは全く無く、床下の地山に近い状態である。灰も全く残っていない、中央部にわずかに焼土粒と炭が出土しているだけである。

【所見】囲炉裏を作るために石を配置し、少しは火を焚いていたと思われるが、頻繁に使われることはなく、床面の下に隠れた状態であったと思われる。

唐白抜き取り穴

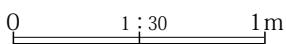


2号囲炉裏(確認面)

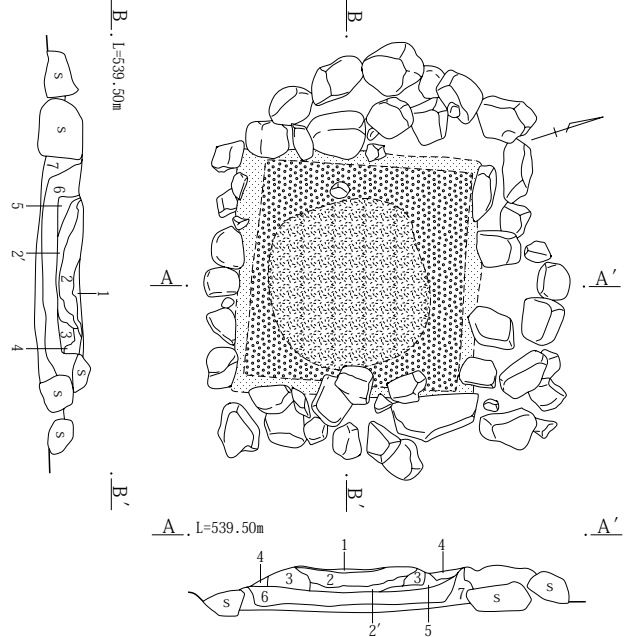


16号建物2号囲炉裏 A-A'・B-B'

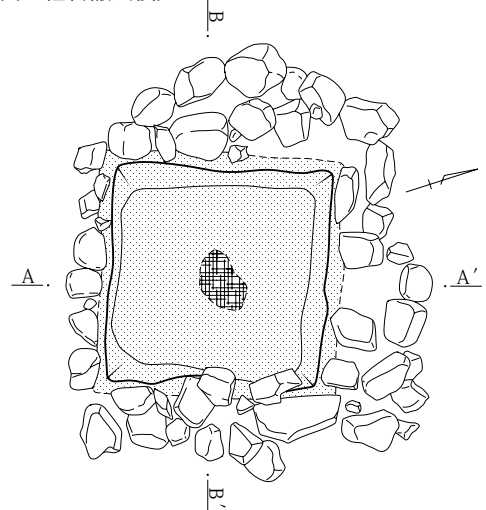
- 1 赤褐色土 少量の焼土と炭を含む。灰は全く含まない。
- 2 暗褐色土 地山の暗褐色土に近い。砂質の層。小石もほとんど含まない。
- 3 暗褐色土 地山の層。地山を掘り込むことなく、石をならべてその中で炭を炊いたものと思われる。完全燃焼のため炭は残ってなかった。2層の下は建物の床面と同じであった。



1号囲炉裏(使用面)



(灰・軽石撤去後)



16号建物1号囲炉裏 A-A'・B-B'

- 1 灰色土 灰白色の灰層中に多くの炭を含む。
- 2 灰白色土 白に近い灰層。わずかに中央部に焼土粒含む。炭は全く含まない。
- 2' 灰白色土 白に近い灰層。中央部に焼土粒含まず。炭は全く含まない。
- 3 灰白色土 灰層中に少量の炭と焼土粒を含む。
- 4 暗褐色土 灰層中に多くの暗褐色土。炭ブロックを含む粘質のある層。
- 5 暗褐色土 灰を主とし、多くの焼土粒(暗い焼土粒)を含む。
- 6 黄褐色層 YK-B軽石を主とした層
- 7 黄褐色層 ローム。粘性少なくやや砂質。

第84図 IV区8号屋敷跡 16号建物 唐白抜き取り穴、1・2号囲炉裏

(サ)土壁(第85・86図、PL.34～36)42区Q・R-15～19グリッドに位置する。

【位置・出土状況】16号建物の土壁が、建物西外側の雨落溝から26号石垣にかけて倒れ、もたれかかるような状態で残っていた。これは、天明泥流により家が押しつぶされたときに、西壁面にあった土壁が倒れたものと思われる。土壁は残りの悪い部分もあるが8枚残っていた。建物の西側はすべて土壁となっており、裏口の出入り口は無かったようである。

【規模・形状】土壁の間隔は、柱間の間隔を反映している。壁の高さは土壁の上の部分が残っていないので不明である。参考までに11号建物では、残りがよく高さ2.35mまでの高さが確認できた。柱間は、床板の在る建物南側と、土間の北側では異なる。そのため土壁の幅も異なる。床板部分では柱間1.66m間隔、北側の土間部分では、竈と炭出土方形遺構の西側が1.55m、馬屋北側が1.11mとなっている。土壁の幅は柱間の芯々寸法距離からみると狭くなっている。それは柱の太さ等を反映しているものと思われる。各土壁の間は幅12cm前後空白となっており、その部分に柱が建っていたと思われる。残っている礎石の位置と、柱部分に相当する土壁が一定間隔で空白となっている部分はほぼ一致する。土壁の厚さは現状で5cm前後であった。土壁最下部から60cmほど高い位置に、柱と直交する幅12cm厚さ3cm前後の通し貫の痕跡が明瞭に残っていた。通し貫はその位置に確認できただけであった。11号建物の土壁は、下から2番目の通し貫が芯々寸法で55cmほど上に残っていた。また西宮遺跡5号建物の土壁でも、ほぼ同じ場所に2本目の通し貫の痕跡が残っていた。16号建物では、土壁最下部から60cmほど高い位置に、通し貫があるがその上は55～60cm残っていただけであり、2本目の通し貫は確認できなかった。

【構造・所見】土壁を内壁側から解体すると内壁側の上部に横方向で幅2cm前後の溝が40cmで9本の本数で確認できた。9本目の溝は太さが3cmあり他の溝より太い。8本の細い溝は横方向の小舞の痕跡で9本目の太い溝は横方向の間渡し竹と思われる。中央部分に横方向で幅12cm厚さ3cmの溝状の痕跡が良好に残っていた。通し貫の痕跡と思われる。通し貫の下部には、明瞭な横方向の溝は確認できなかったが、通し貫の下約38cmに、溝幅3cmの東西方向の溝が明瞭に残っている。これは横方向の間渡

し竹と思われる。これらの通し貫や横方向の小舞や間渡し竹の痕跡を除去すると、下から縦方向で幅2cm前後の溝が40cmに9本の本数で確認できた。これは縦方向の小舞の痕跡と思われる。小舞は縦方向より横方向にやや数多く入っていたようである。これらの小舞を縄で、細かく縛り内外面から土を内部まで押し込み、土壁は作られていたようである。

⑥前庭及び庭先ローム堆積場(第87図、PL.36)42区N～P-14～17グリッドに位置する。

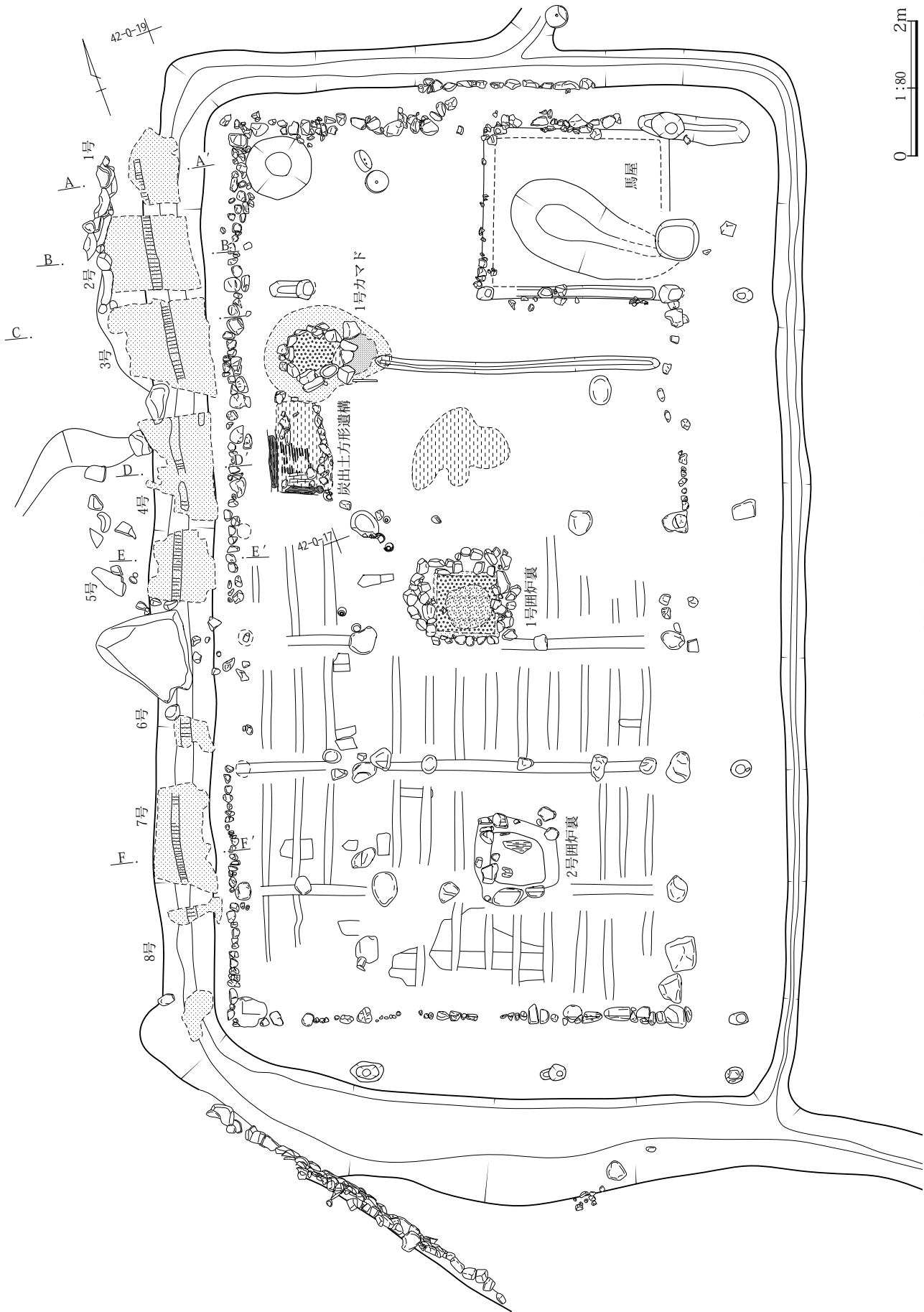
【位置】16号建物出入り口のある東側の雨落溝の外側に東西の幅3.60m、南北の長さ42.0mの範囲を平らに整形し、前庭としている。発掘段階で、この前庭の存在が最も早く注目された。重機で泥流を除去する中で、ロームをほぼ水平に土壁のように塗り込んだ前庭が姿を現した。馬屋前は平らな前庭となっていたが、ロームを塗り込んだ状態ではなかった。浅間A軽石は、きれいに片づけられており残っていなかった。

【規模・形状】南北5.90m、東西1.80m。水場である6・7号井戸や1号石組遺構周辺部分は前庭より低くなっており、前庭には含まない。ロームをほぼ水平に土壁のように塗り込んだ前庭範囲は、東西3.40m、南北11.4mである。庭に貼られたロームは厚さ約2cmであった。

【構造・所見】前庭は、屋敷跡地の造成時において少し盛り土をして平らにしているものと思われる。断面で観察するが、旧地表面が明らかでないので盛り土の厚さは明らかではない。東側に23号石垣の高さが40cm前後あるので、最も厚い場所ではその高さに近い盛り土をして、平らな前庭を形成したものと思われる。

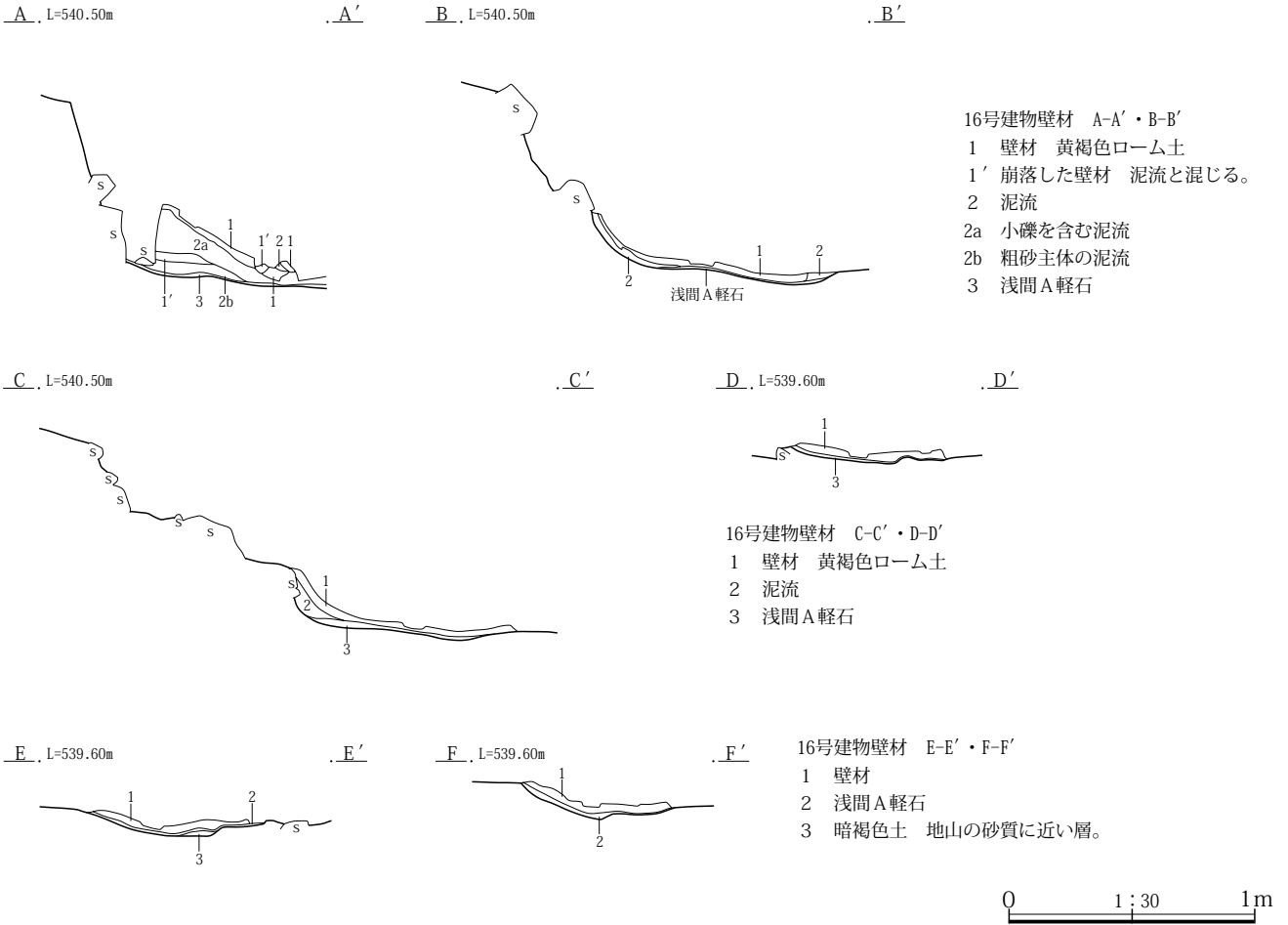
⑦7号道(第88図)42区L～O-14～17グリッドに位置する。

8号屋敷跡に入るための道路である。道路面は、平らに整形され浅間A軽石が全面に残っていた。屋敷跡は東側にある6号道(未発掘)から14.0mほど西側の奥に入っており、道路面より2.00mほど高い位置にある。道路の作られた傾斜面は北西方向が高く、南東方向に向かって低くなる地形である。道路の両側は畑となっている。道路面は南側の畑面より低く、北側の畑面より高くなっている。道路の南側には平行して畑との間に側溝が掘られており、溝の中には多くの浅間A軽石が堆積していた。

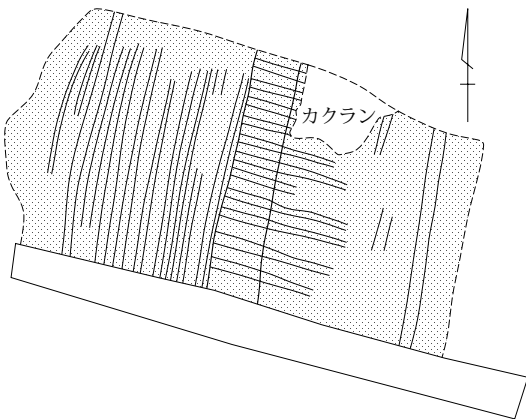


第85図 IV区8号屋敷跡 16号建物 土壁出土状況

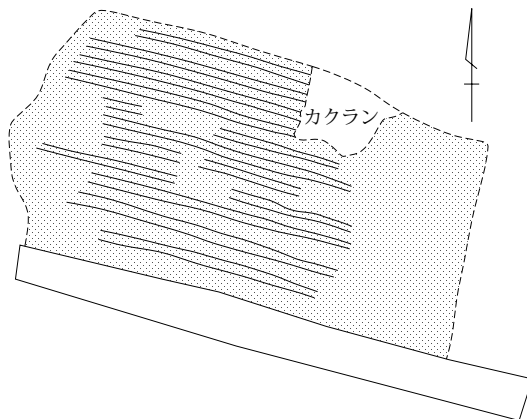
第3章 発見された遺構と遺物



木舞I面



木舞2面

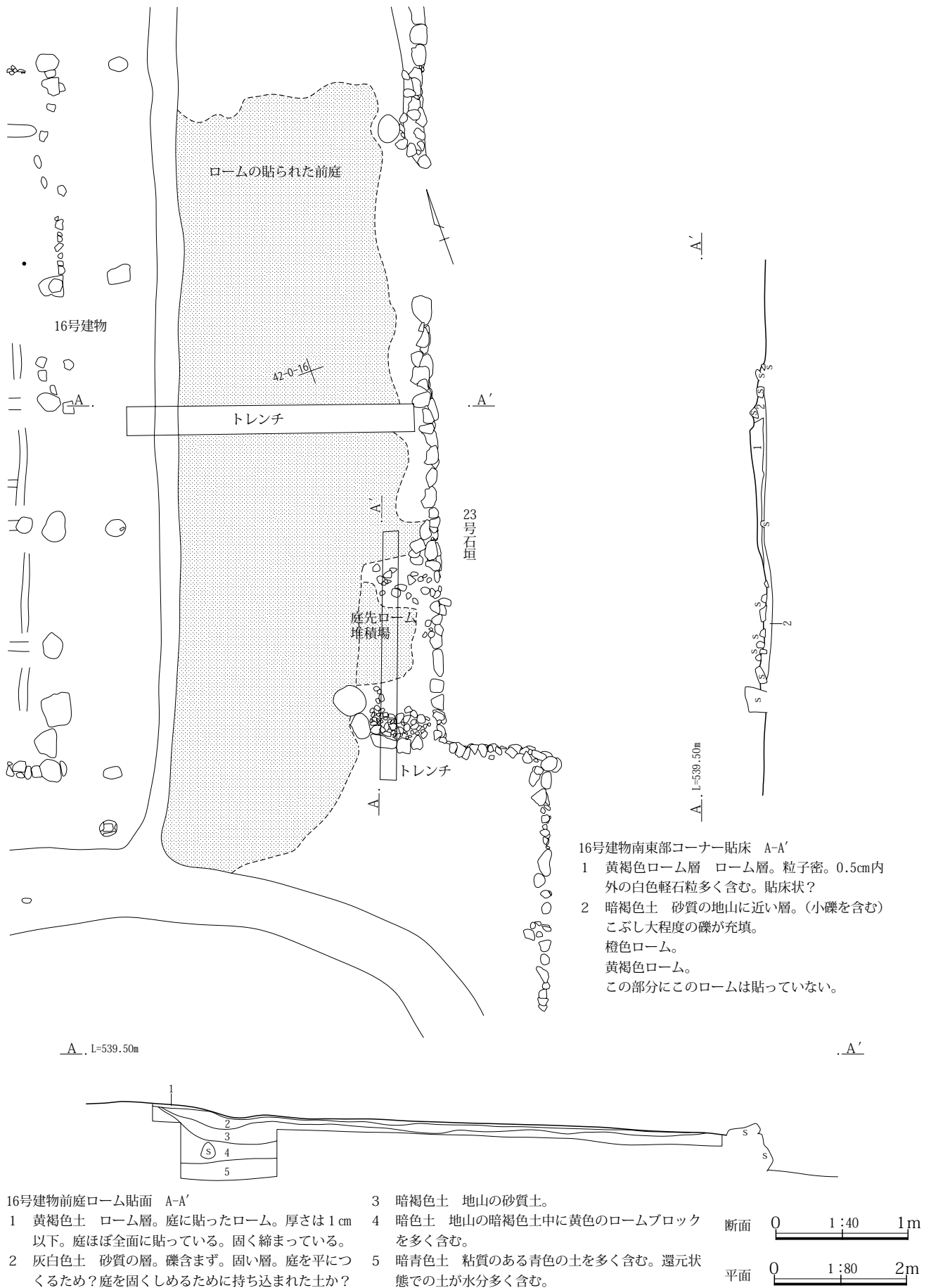


42-0-18

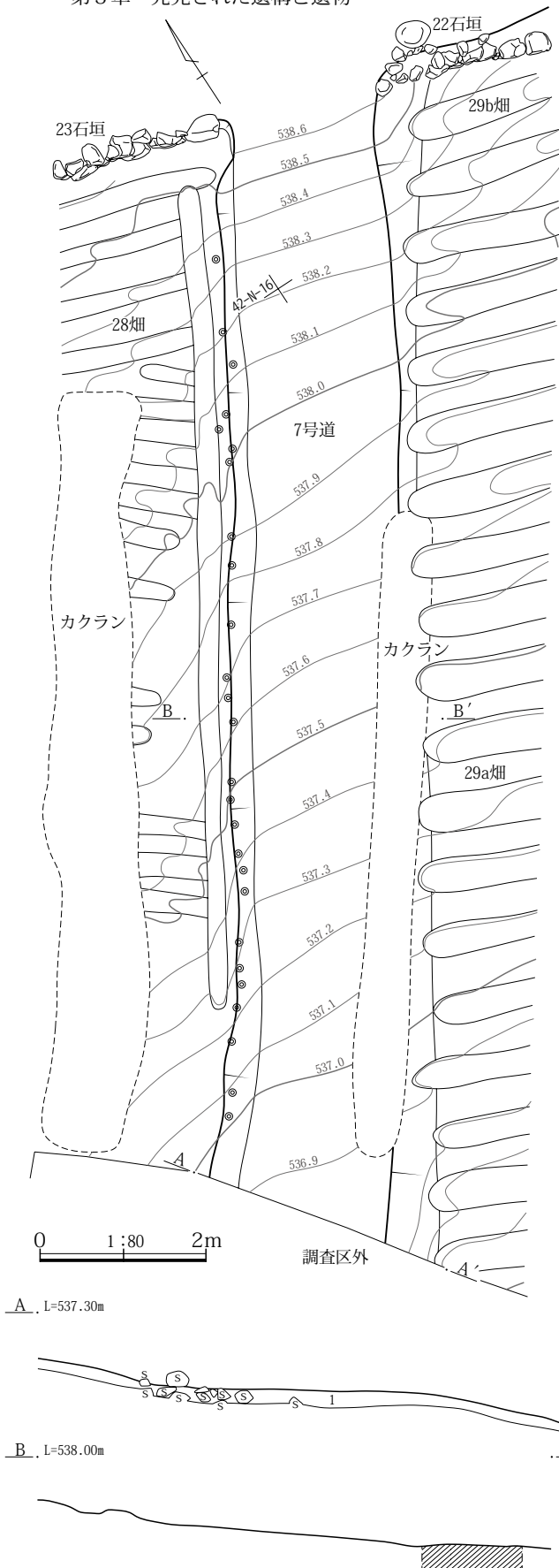
42-0-18

0 1:20 50cm

第86図 IV区8号屋敷跡 16号建物 土壁断面、土壁内木舞



第87図 IV区8号屋敷跡 前庭及び庭先ローム堆積場



A. L=537.30m

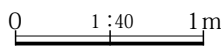
A'

B. L=538.00m

B'

7号道 A-A'

1 暗褐色土 浅間A軽石下畑の耕土と同じ。礫を含む。上面に浅間A軽石が薄く堆積。



第88図 IV区8号屋敷跡 7号道

⑧20号建物(第89・182図、PL.37・102)42区P-19・20グリッドに位置する。

【位置・出土状況】8号屋敷跡内の北側、母屋である16号建物の雨落溝を隔てた北側に位置し、26号建物の西側に位置する。同じ傾斜面を削り平地を確保し、削った西側には26号石垣を築いている。東側は、石を並べて建物の敷地を区画している。石垣の残りは悪かった。平地は16号建物より15~20cmほど少し低くなっている。2間×2間の掘立柱を持つ小さな建物である。建物の内側は、土間で平地となっていたが、焼土粒等は無かった。建物の外側は雨落溝があり、建物内に浅間A軽石はなく雨落溝内には多くの浅間A軽石が堆積していた。

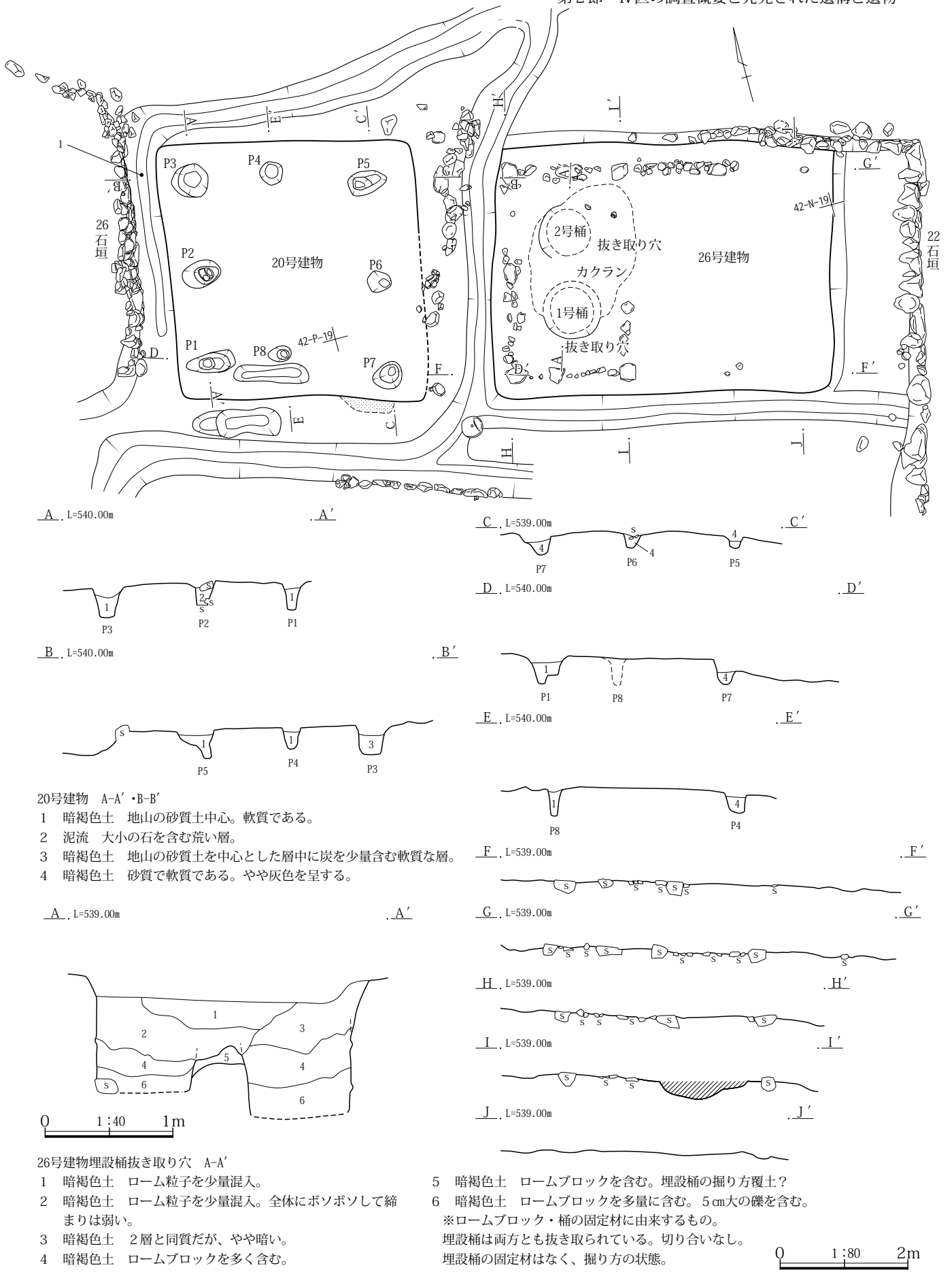
【規模・形状】建物の大きさは、掘立柱柱穴の芯々寸法で、少し歪んでいるが東西南北とも2.80m雨落溝までの整地面は3.90m四方である。柱穴から雨落溝までの距離は60cm前後、雨落溝の深さは1~10cmである。柱穴は、8本あり直径は10cm前後、深さ40cm前後である。26号石垣に近い柱穴は、建っていた柱が天明泥流により西側に倒れた状態の痕跡が残っていた。

【構造・所見】2間×2間の掘立柱を持つ小屋であり、16号建物の附属建物であったと思われる。

⑨26号建物(第89・182図、PL.38・102)42区N~P-18~20グリッドに位置する。

【位置】8号屋敷跡内の北側、母屋である16号建物の雨落溝を隔てた北側に位置し、20号建物の東側に位置する。建物の平地は16号建物より70cmほど、20号建物より50cmほど低くなっている。2間×3間の礎石建物であり、建物の西側に2つの埋設桶、東側は土間である。礎石の外側は雨落溝があり、建物内に浅間A軽石はなく、雨落溝内には多くの浅間A軽石が堆積していた。南側を1号桶、北側を2号桶とした。2つの桶は、埋設桶と思われるが、桶の木質部の残骸は残っていなかった。2つの桶の接する部分以外東西の壁面には、部分的に桶のタガの跡が残り、桶が埋められていたことを示している。また桶の周辺部は攪乱を受けており、特に南側は大きく攪乱されている。2つの桶は天明泥流で一度埋まり、その後掘り出されたものと思われる。

【構造・規模・形状】8号屋敷跡の附属建物と思われるが、西に接する20号建物は掘立柱の建物であり、この26号建物は礎石を持つ建物である。礎石や礎石外側に並ぶ石列



第89図 IV区8号屋敷跡 20・26号建物

は、地形的に高い西側に残っていたが、東側には残っていなかった。残っていた礎石や敷地から復元すると、2間(東西方向)×3間(南北方向)の建物と思われる。建物の規模は南北方向3.06m、東西方向4.60mである。建物の建つ整地規模は南北方向3.90m、東西方向5.30mである。柱穴から雨落溝までの距離は60cm前後である。西側の雨落溝の外側で、22号石垣までの間に1.00m前後の平地があり小さな屋根等が存在したのであろうか。東側2つの埋設桶を囲んで南北方向3.06m、東西方向1.80mの規模で石列が回っていた。26号建物内で埋設桶は区画されていたようである。桶の大きさを痕跡から計測すると、2つの桶は口径・深さとも90cm、底径75cmであったと思われる。タガの痕跡が北側の桶で2カ所、南側の桶で1カ所確認できた。全体的に北側の桶の痕跡が良好に残っていた。桶が抜き取られた跡に埋まっていた土は、底部付近に多くのロームブロックを含み、上部にも少量のローム粒子を含む全体にしまりの少ない土であった。

【所見】母屋である、16号建物の出入り口や馬屋に近い位置にある。人間や馬の糞尿等を貯蔵しておく建物であったものと思われる。埋設桶南の空間は堆肥置き場と推定したい。天明泥流により一度埋没し、その後埋設桶は掘り出され、再利用されたものと思われる。

◎水場(PL.39)

発掘段階で、常に湧水のある場所であり、最近まで水場として利用されていた場所である。8号屋敷跡の南側に6・7号井戸、6・7号井戸東側に石橋、さらに石橋の東側には方形で石に囲まれ、常に水で満杯となっている1号石組、それらの水を集めて流す13号溝、これらの遺構は、すべて関連した一連の遺構であり、天明泥流により同時に埋まっていた。これらの遺構をまとめて水場と仮称する。この水場を境に、ここから一段高い南側にある9・10・11号屋敷跡に伴う井戸は作られていない。(23号建物の南西にある5号井戸は、天明以降の新しい井戸である。)8・9・10・11号屋敷跡では、この水場を共同の水場として使用したものと考えられる。

(ア)6号井戸(第90・182図、PL.39・102)42区Q-13・14グリッドに位置する。

【位置・規模・形状】水場の最も奥に位置し、7号井戸の南西に接している。石をほぼ円形に4～5段積み上げている。使っている石の大きさは30～50cmで、積み方は細

長い石を水平に積む平積みである。井戸の直径1.00m深さは80cmであり、7号井戸より直径・深さが少し大きい。井戸を埋めている土は、灰黒色土で、1cm以下の砂粒を主とした土である。

【構造・所見】積んでいる石の大きさは大小様々で、同じような石をそろえる意図は無かったようである。この井戸は、9・10・11号屋敷跡から降りてくる11号道に近い。(イ)7号井戸(第90図、PL.40)42区P・Q-14・15グリッドに位置する。

【位置】水場の最も奥に位置し、6号井戸の北東に接している。大小の石をほぼ円形に4～5段積み上げている。使っている石の大きさは30～50cmで、積み方は細長い石を水平に積む平積みである。井戸の直径90cm深さは70cmであり、6号井戸より浅く小さい。井戸を埋めている土は上層が灰色粘質土で、6号井戸と異なり砂粒や小さな石はほとんど含まない。下層も灰色粘質土であるが、10×20cmの石を少量、2×10cmの石を多く含む。表土10cmの所からビニールが出土しているので、最近まで使用されていた井戸と思われる。

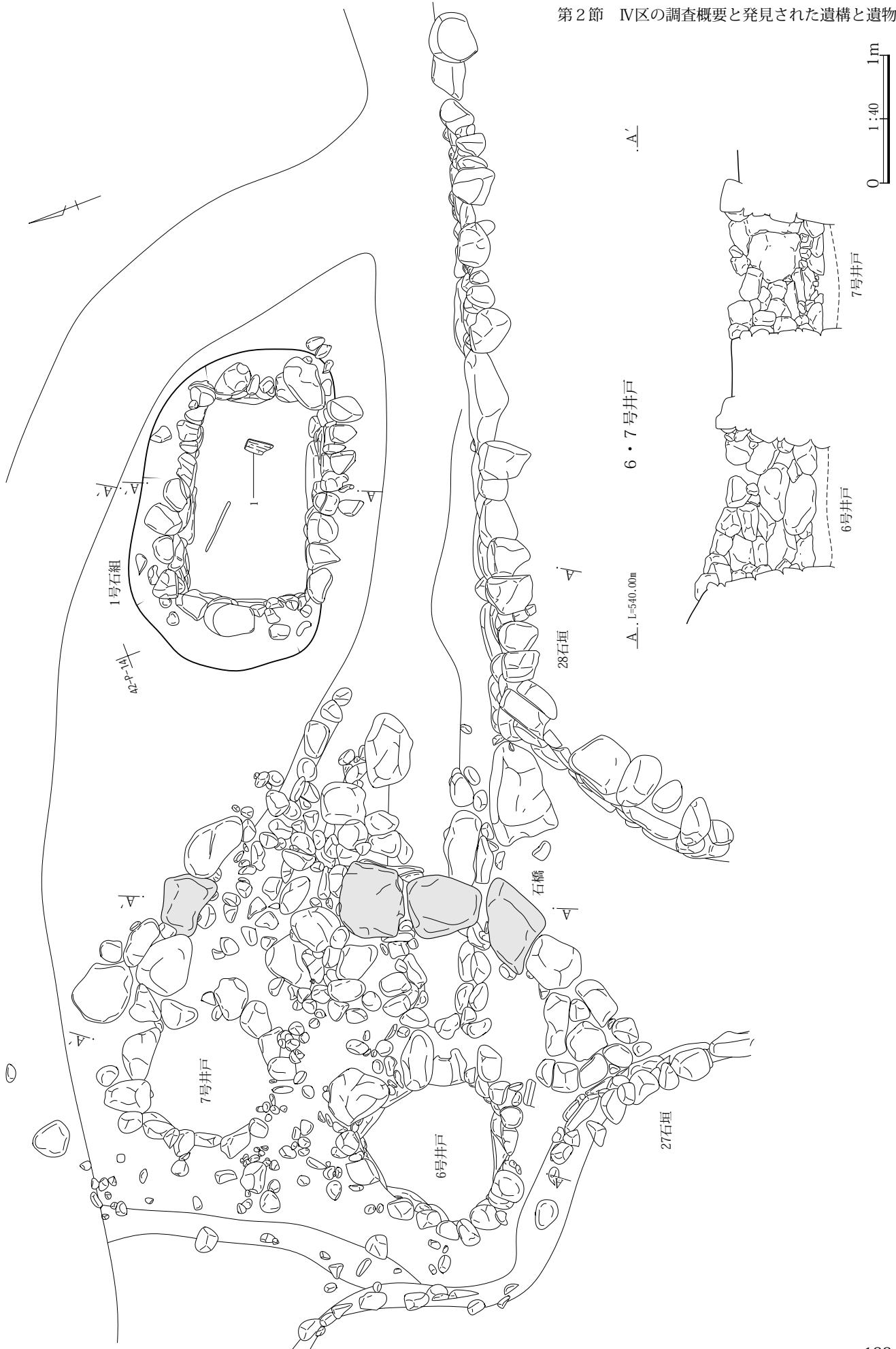
【構造・所見】積んでいる石の大きさは、大小様々で、同じような石をそろえる意図は無かったようである。この井戸は、8号屋敷跡に近いので、主に8号屋敷跡で使用した可能性が考えられる。この井戸は発掘前から存在が明らかで多くの湧水があった。天明以前に作られた井戸が天明泥流で埋まった後、掘り直されて最近まで使用されていたものと思われる。

(ウ)石橋(第90・91図)42区P・Q-13・14グリッドに位置する。

6・7号井戸から1.00mほど南東部分に、2つの井戸から流れ出した水を流す水路の上に石で作られた橋が架けられていた。現状では、6号井戸に伴う水路上の1石と橋脚部分にあたる1石が残っただけであるが、7号井戸に伴う溝の上にもあったものと思われる。この石橋を渡って、8号屋敷跡と9・10・11号屋敷跡は繋がっている。水路上に使われている石の大きさは、幅60cm厚さ5cmである。

(エ)1号石組(第90・91・182図、PL.40・102)42区O・P-13・14グリッドに位置する。

【位置】井戸と同様に常に水が満たされている遺構であり、天明泥流によって埋まっていた。6・7号井戸及び



第90図 IV区8号屋敷跡 6・7号井戸、1号石組、石橋

石橋の下流部分で8号屋敷跡の南東部、9・10・11号屋敷跡の北側に位置する。6・7号井戸から流れ出る水や、8号屋敷跡から流れ出る雨水は、流入しないようになっている。

【形状・規模】長方形の遺構であり、石を3段ほど組んでいる。組まれた石は20～30cmの大きさで、細長い石は水平方向に積まれている。同じように水を得る施設としての井戸は1.00m前後の円形で、深さは70～80cmであった。この1号石組は長方形で、長軸1.50m短軸90cm、深さ50cmである。井戸より平面形は大きく浅くなっている。

【構造・所見】各屋敷跡では、奥にある2つの井戸が、飲料水を確保し洗い流し等はこの1号石組で行ったのではないだろうか。

(オ)13号溝(第78図、PL.40)42区N～Q-12～14グリッドに位置する。

【位置・出土状況】6・7号井戸東側、18号建物北側に位置する。これらの井戸や1号石組、8号屋敷跡・18号建物・11号道・西側の畑等からの水を集めて流す溝である。発掘調査中から、湧水を集めて水は流れていた。地山を掘り込んで造っており、溝の南側は28号石垣が積まれている。北側は、全面石垣で囲うことなく、東側半分ほどの範囲に20cm前後の小さな石を1～2段積んで低い石垣を築いている。

【形状・規模】幅20cm深さ15cm長さ12.7mである。

①石垣

【位置】8号屋敷跡は、周辺をほぼ石垣で囲われている。22号石垣は、26号建物北東コーナーで直角に南側に曲がり、16号建物の前庭東側で、屋敷跡に入るための7号道までとし、7号道から南は23号石垣となる。両石垣は、屋敷跡の東側の盛り土を支える役目も果たしており2段前後と低い石垣である。26号石垣は、屋敷跡の西側に位置し、20号建物西から母屋である16号建物西側、南西コーナー部分から南東方向に曲がり、水場である6・7号井戸の東側に続く。26号石垣は西側の切土部分に積まれた石垣であり、5段前後と高い。この26号石垣は、天明泥流以降、16号建物の西側大部分が削り取られた。その段階で、16号建物西側に新たな平地を確保し、西側に新たな25号石垣を築いていると思われる。25号石垣の北端部に組み込まれているように4号井戸がある。この井戸はおそらく25号石垣と同じ頃に造られたものであり、石垣の積み方が谷積で共通している。天明三年以前の22・23・26号石垣は平積であり、積み方が全く異なっている。

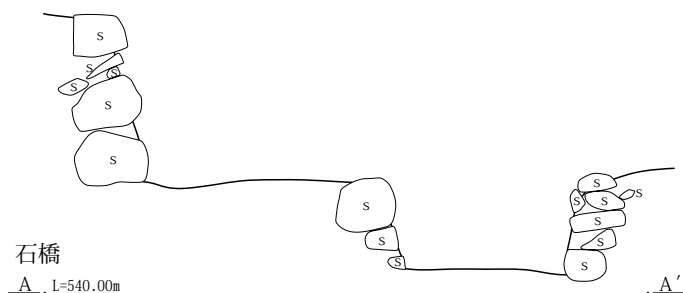
(ア)22号石垣(第78・182図、PL.103・104)42区M～O-17～20グリッドに位置する。

【規模・構造】石垣は30～50cmの大きさの自然石を平積みで2段に積んでいることが多く、一部3段積みがある。石垣の規模は長さが14.4m、高さは30～40cmである。

(イ)23号石垣(第78・182図、PL.103)42区N・O-13～16グリッドに位置する。

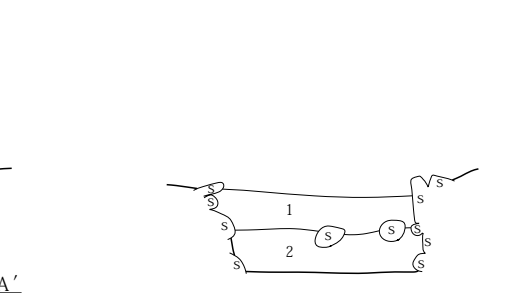
28号石垣・1号石組

A, L=540.00m



1号石組

A', L=540.00m

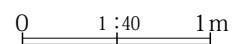


1号石組遺構 A-A'

1 暗褐色土 泥流を主とする。灰色の強い泥流。石を含む量少ない。

2 暗褐色土 1層よりやや暗い。10×10cm前後の石を多く含む。

(天明泥流下の遺構)



第91図 IV区8号屋敷跡 1号石組、石橋断面

【規模・構造】石垣は、南の水場付近で直角に東側に曲がり、さらに南側に直角に曲がって、13号溝手前まで続いている。水場を広く確保するためであろうか。石垣は30～50cmの大きさの自然石を平積みで2段に積んでいることが多く、一部3段積みがある。石垣の規模は11.9m、高さは20～35cmである。

（ウ）26号石垣(第78図)42区Q・R-14～20グリッドに位置する。

【規模・構造】石垣は22・23号石垣と同じ30～50cmの大きさの自然石を平積みで3～6段積んでいることが多く、天明泥流以降、16号建物の西側の大部分が削り取られているが、その部分にあったであろう石垣を含めて計測すると石垣の規模は長さが33.5m、高さは60cm前後である。

（エ）25号石垣(第78図)42区R～T-15～17グリッドに位置する。

【帰属時期】天明三年以降

【規模・構造】天明泥流以降に造られた石垣である。石垣は22・23号石垣と大きく異なり、30～60cmの大きな自然石を使っている。丸石は同じような大きさの石を使っているが、細長い石を意図的に多く使用し、その石はすべて斜め方向の谷積みで組んでいる。石垣は5・6段に積み上げられている。石垣の規模は長さが18.0m、高さは16号建物竈西側60cm前後、直角に曲がる南西コーナー部分で1.57mと高い。

⑫ 4号井戸(第78・92図、PL.41)42区Q・R-19グリッドに位置する。

【帰属時期】天明三年以降

【位置・構造】16号建物西部、25号石垣北端部で石垣と一連であるように組み込まれて造られている。使われている石の中には細長い石が使われ、それらの石は大部分が斜めに谷積みで組まれていた。覆土は、天明泥流混じりの土であるが、天明泥流そのものではなく、畑の耕作土に近い土を含んでいる。

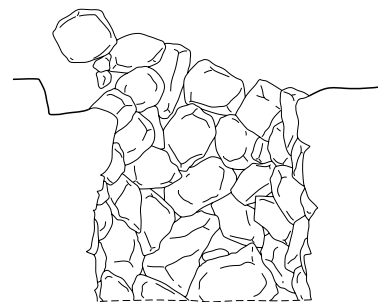
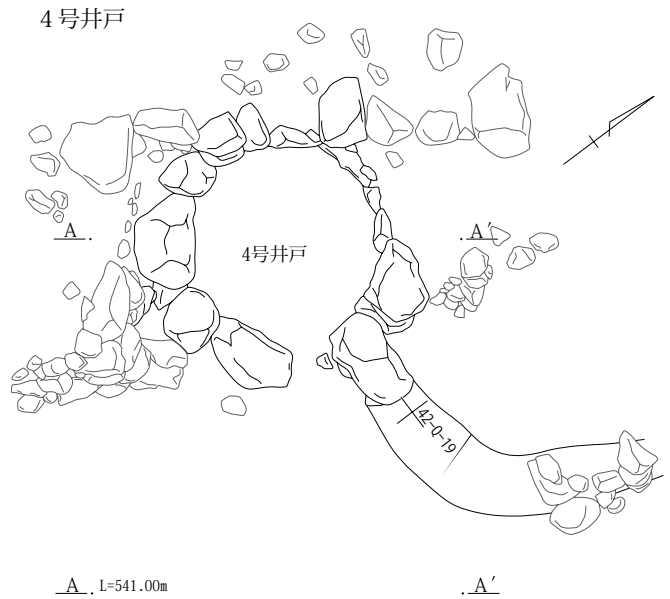
【規模】内径で1.00m、深さ60cm前後である。

⑬ 17号土坑(第78・92・182図、PL.41・103)42区O-13・14グリッドに位置する。

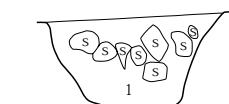
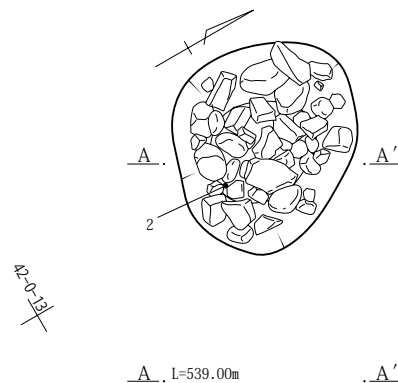
【帰属時期】天明三年以降

【位置】水場である、6・7号井戸、1号石組みの東側23号石垣の南端に位置する。23号石垣と重複している。

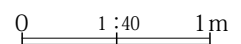
【規模】長軸1.10m短軸1.00m深さ45cm



17号土坑



17号土坑 A-A'
1 泥流層に近い層。



第92図 IV区8号屋敷跡 4号井戸、17号土坑

【構造・所見】土坑状に掘り込み、土坑中央から下層は、天明泥流混じりの土が埋まり、土坑上部には10～15cmの大量の石を投げ込んでいような状態で埋まっていた。石の上から陶磁器が出土している。

⑭出土遺物(PL.41)

16号建物からは陶磁器や金属製品、石製品が出土している。陶磁類は、一般的に天明泥流下から出土する製品類であるが、1の磁器端反碗は天明以降の混入品である。出土時の詳細が不明なため、混入の原因は不明である。金属製品では煙管の出土が多い。柄鏡(28)も1点出土しているが、柄基部の破面が直線的かつ滑らかで、柄が折れた後も使用していたと考えられる。石製品としては石臼4点を(29～32)掲載した。

22・23号石垣出土陶磁器は、図示し得た5点はすべて天明期以降であり、4点は近現代の製品であった。また、23号石垣出土の1、2は裏込め出土である点が気になるが、石垣部に攪乱が及んでいたのであろうか。17号土坑からも磁器皿(1)が出土している。

非掲載遺物は以下の通りである。

16号建物：江戸時代の磁器1点2g、陶器18点329g。植物遺存体は木片2点と漆塗膜のみとなった漆製品3点。非掲載石製品はない。

20号建物3号ピット：江戸時代の陶器1点33g。植物遺存体や石製品は出土していない。

26号建物(桶)：須恵器1点12g、江戸時代の磁器1点10g、陶器9点22g。また、桶1からは遺存状態が非常に悪い木片1点が出土している。石製品は出土していない。

6号井戸、7号井戸：遺物は出土していない。

22号石垣：江戸時代の磁器3点5g、陶器2点10g、近現代陶磁器6点76g。植物遺存体は出土していない。非掲載石製品はない。

23号石垣：江戸時代の磁器3点57g、陶器2点5g。植物遺存体と非掲載石製品はない。

17号土坑：江戸時代の陶器3点35g。植物遺存体は出土していない。非掲載の石製品はない。

1号石組み：江戸時代の磁器1点3g。植物遺存体は出土していない。非掲載の石製品はない。

(6)9号屋敷跡(第93・95・183～187図、PL.42・43)

①9号屋敷跡の調査概要

9号屋敷跡は、南東側方向に向かって低くなる緩やかな傾斜面にあり、集落の中心である6号道(町道1-5号線下にあると思われる)に接している。6号道に最も近い調査面より床面付近は約90cm高い所に位置する。屋敷地は西側の11号道面より30～45cmほど削り屋敷面を整地し、削り面に30号石垣を築いている。積んである石垣の段数は1～3段である。30号石垣は、18号建物の南西コーナー部分から南は確認できなかった。21号建物の南で、9号道北に位置する石列とその延長上に石が抜かれた痕跡が確認された。9号屋敷跡を区画する石列の可能性を指摘しておきたい。このような前提で考えると、屋敷跡の範囲は、6号道西側で28号石垣南、30号石垣東、9号道北に位置し、18・19・21号建物を含む範囲となる。6号道から屋敷跡に入るための出入口は不明である。天明泥流の堆積も浅く、特に6号道(町道1-5号線下にあると推定される)付近および18号建物北側で28号石垣付近の堆積は薄く、18号建物北側と東側・前庭部分の残りが悪かった。また21号建物では東側及びほぼ全面にわたる数本の耕作等により溝状に壊されていた。19号建物の中央部付近に7号土坑が掘られていた。土坑の時期は不明であるが、19号建物より新しい。19号建物の中で報告する。

②敷地内での浅間A軽石

9号屋敷跡内では、天明泥流が6号道近くでは薄く、攪乱を多く受けていた。そのため天明三年段階で地表面が明瞭に残っている部分は少なかった。浅間A軽石は18・19・21号建物内にはなく、浅間A軽石は、18号建物西側・19号建物南側・21号建物北西南側の雨落溝で残っていた。

③18号建物(第94～96図、PL.43・103～106)42区N～R-10～13グリッドに位置する。

【建物・概要】9号屋敷跡の母屋であり、礎石を用いた建物である。建物東側は攪乱をうけており、溝状の耕作痕が多く残っていた。北側の28号石垣の近くも攪乱を受けており、建物の礎石は残っていなかった。そのため遺された礎石や囲炉裏等から推定復元し、以下遺構の説明を行う。床面は8号屋敷跡16号建物のような、床材の痕跡



第93図 IV区 9・10号屋敷跡

は残っていなかった。南側が土間で、土間奥手に竈が設置され南東コーナー部分に馬屋が配置されている。1号囲炉裏から北側が板間となっていたものと思われる。竈の南側に唐臼の抜き取り穴と唐臼の杵を支える支脚が埋められていたと思われる小穴がある。囲炉裏は、南北方向に2基配置されている。北側の一基は、残りが悪く囲炉裏として疑問もあるが、石の出土した位置や出土状況から囲炉裏とした。西端の礎石は9石確認できる。しかし9石は北から6石まで一直線であるが、7石から方向を少し東側に向きをかえてある。最後の9石は直線であったなら据えられたであろう位置から東側に35cm移動している。これは、建物を造る時点で11号道がすでにあり、その道路を削って18号建物を造ることができなかったため、18号建物の南西部分を少し削って建てた結果だと思われる。11号道は、18号建物より古い段階から存在したものと思われる。

【位置・規模】8号屋敷跡の北側に位置する。18号建物を構成する施設(馬屋、竈、唐臼、炭堆積遺構、1・2号囲炉裏)および残っていた礎石は基本的に原位置を保って出土している。板間であろう建物北側には、8号屋敷跡16号建物のような床材の大引き痕・根太痕は残っていなかった。礎石は、建物出入口である東側部分及び建物の北側部分では残っていなかった。残っていた礎石等から規模について推定する。桁行(南北)12.11m×梁行(東西)6.13mで、東の出入口外側に下屋柱を持つ建物と思われる。しかし東側の礎石は、馬屋の南東コーナー部分に推定される1カ所以外残っていない。18号建物の礎石芯々寸法は、南側の馬屋を含む土間部分と北側の板間部分で異なるようである。板間部分は1.84mを1間として梁行3間半、桁行4間としている。一方、土間部分は1間1.84mの寸法で、梁行3間半、桁行1間半の空間を馬屋の大きさ東西南北2.42mを基本として、柱間を決め全体を梁行4間、桁行4間と細分し礎石芯々寸法を狭めているようである。

【構造・所見】18号建物には西側のみ雨落溝が残っており、浅間A軽石が残っていた。礎石から雨落溝までの距離は50cm前後である。東側には雨落溝や礎石もないので、下屋があったのか不明であるが、馬屋に残っていた礎石で東側の壁面とすると、馬屋桶が軒先ぎりぎりの位置となり、雨水等の関係から下屋があったと思われる。馬屋は

母屋同様に礎石が使われており、8号屋敷跡16号建物の馬屋が掘立柱で造られていたのと異なる。礎石は良好に残っていたものと、本来あったと思われる場所に残っていないものもある。推定される部分は点線で示した。

(ア)馬屋(第94・97図、PL.44)42区P・Q-10・11グリッドに位置する。

【位置・規模・構造】18号建物の南東隅、母屋同様に礎石を用いている。馬屋の東側には埋設桶が据えられていた。埋設桶は木製でできており、下半分が水に浸かった状態で腐らずに良好に残っていた。竹製のタガが底板に近い位置で2本残っていた。桶の大きさは底部60cm推定口縁部63cm、深さは、桶の口縁部が桶を囲む石の中段と推定して75cm前後であった。地山を少し大きめに掘りこんで、桶を埋め掘り出した土で桶を固定している。ローム等別の土で桶のまわりを固めてはなかった。馬屋床面は、中央部分が凹状にへこんでおり、土間部分より10～15cmほど低くなっていた。低い部分は埋設桶まで繋がっていた。尿等が流れて埋設桶にたまるような構造と思われる。

馬屋の規模は芯々寸法で東西南北方向2.42m、北側の馬の出入口幅1.80mである。

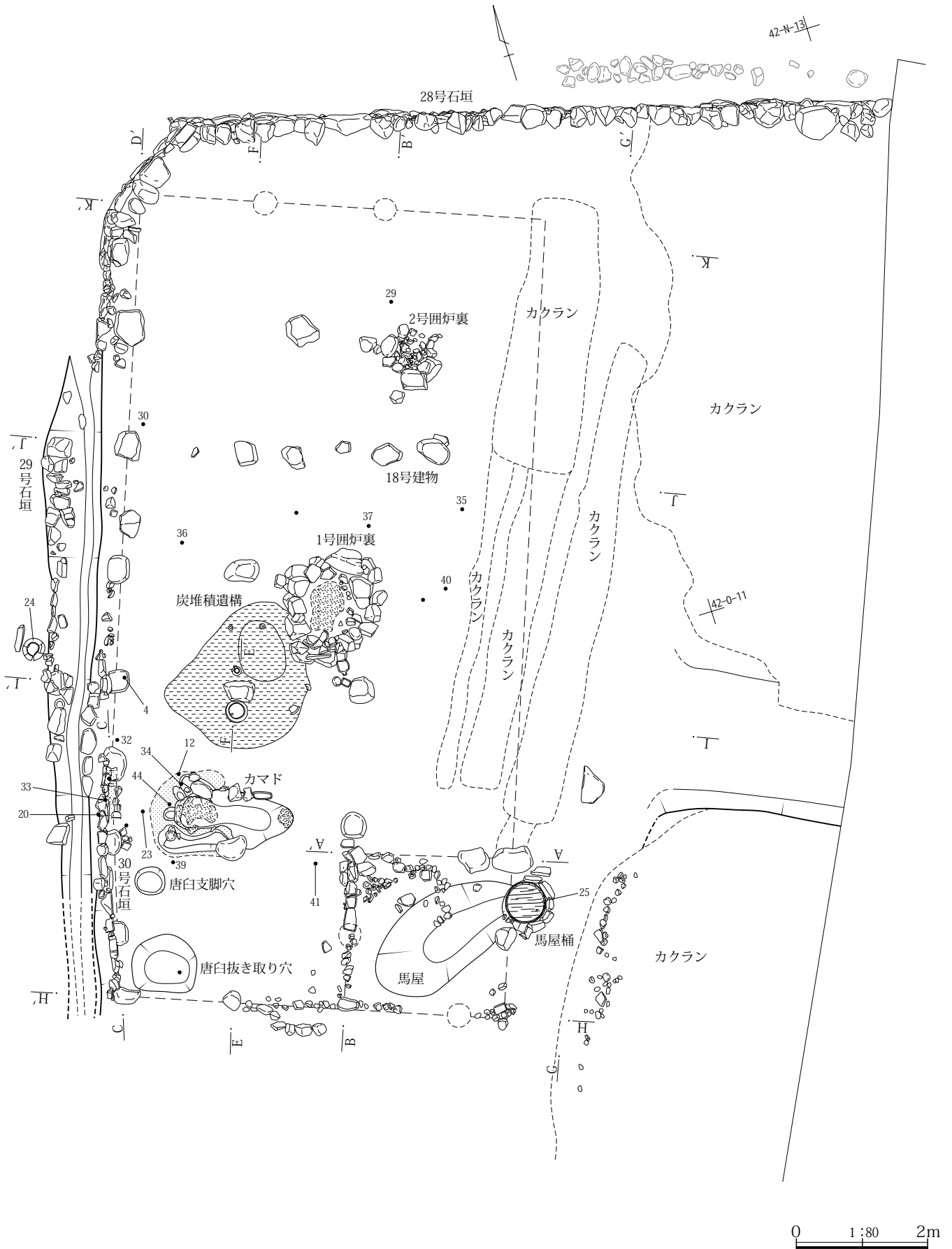
(イ)土間

18号建物北側の板間部分の南側に位置する。土間の南東コーナー部分に馬屋が位置する。土間は堅く踏み固められているが、ローム等を用いて固めていた様子は認められない。

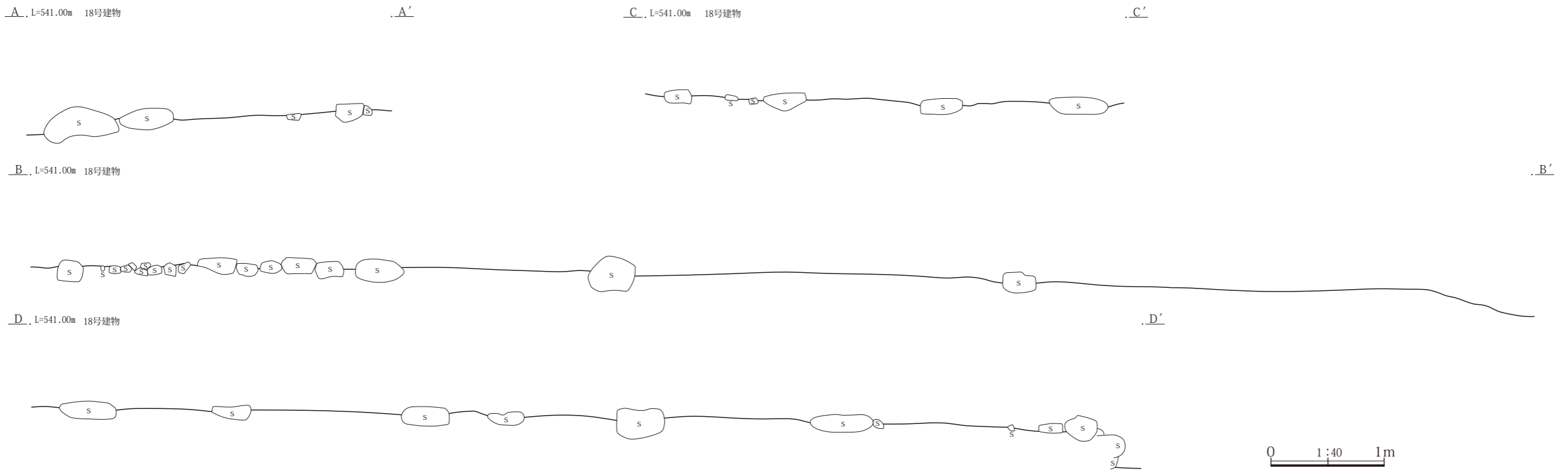
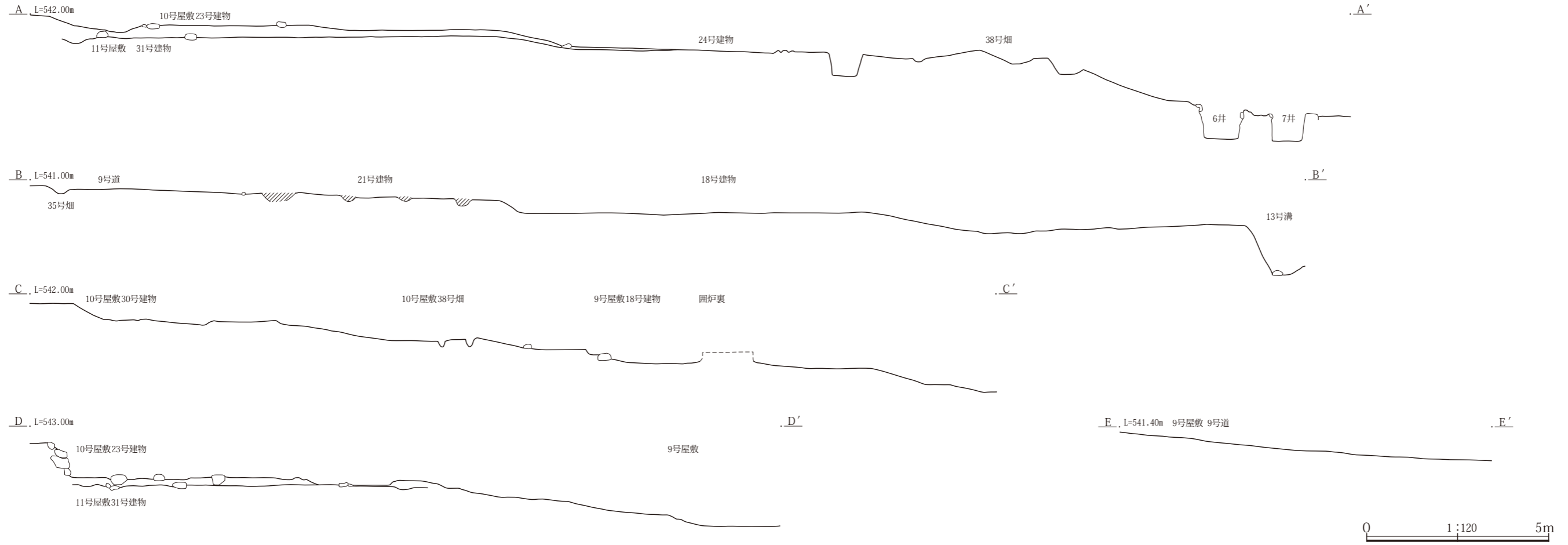
(ウ)竈(第98図、PL.44・45)

【位置・出土状況】18号建物土間奥手に位置する。当初確認段階の竈は、竈の両袖部分のロームが盛り上がり、周辺に石が散在しているような状況であった。竈の焚口部分右側に2つの平石が置かれ、左側には大きな平石が袖のロームを押さえるような状態で残っていた。竈内の泥流を除去すると、竈底部に約1cmと薄い灰が堆積し、灰を除去すると底部中央から焚口にかけての範囲に地山の砂質土が熱を受けて一部焼土化している面となっていた。竈の残りは悪く、竈を造るために囲っていた石の数は不明である。

【規模・形状】竈本体の外形は、竈の周囲を円形に囲ったロームが良好な状態で残っていないので明らかでないが、ロームの範囲は幅(南北)約1.40m奥行き(東西)



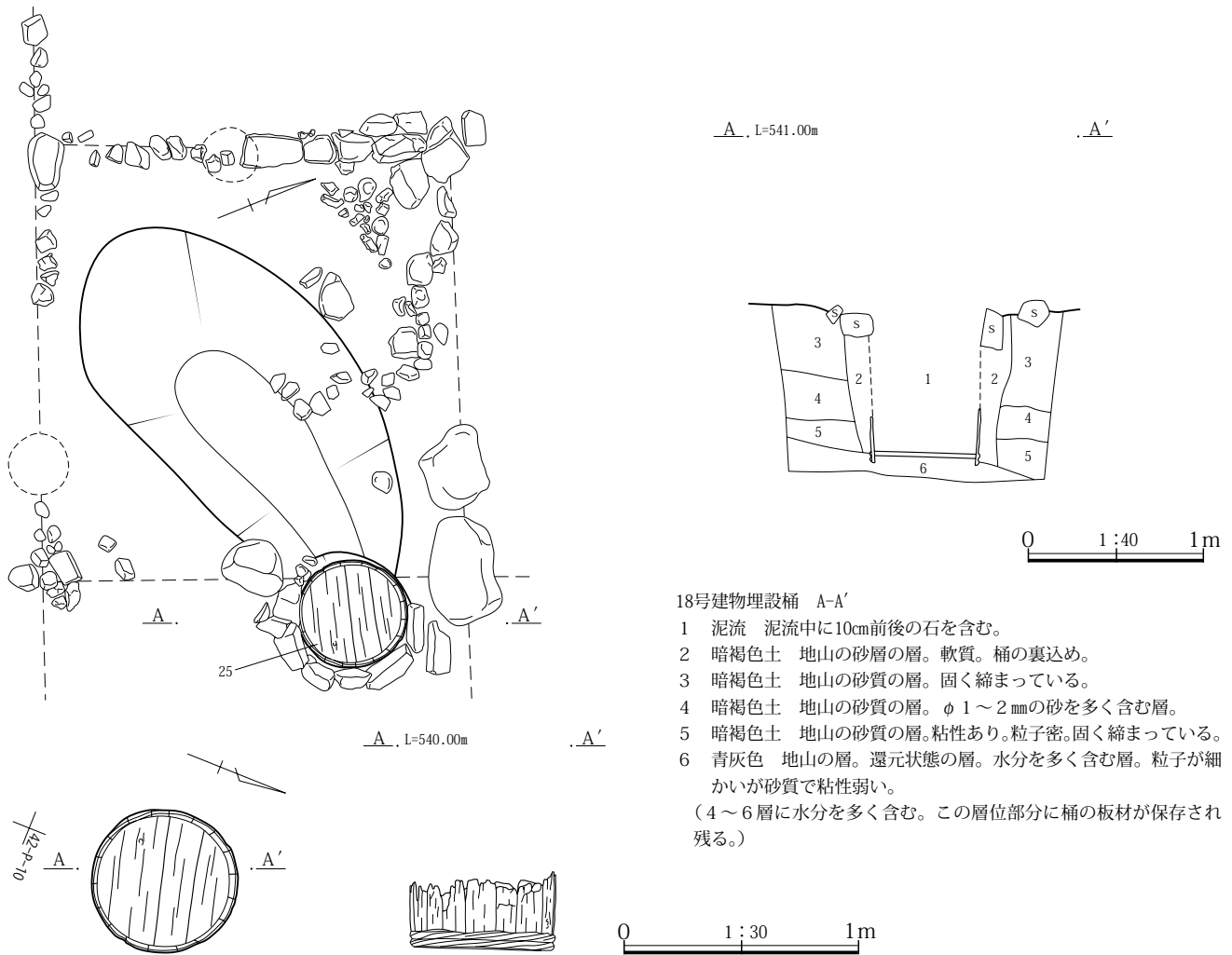
第94図 IV区9号屋敷跡 18号建物



第95图 IV区 9·10·11号屋敷跡(A~E)、18号建物(A~D)断面



第96図 IV区9号屋敷跡18号建物(E~K)断面



第97図 IV区9号屋敷跡 18号建物 馬屋・埋設桶

1.40mで、残された石から計測すると幅(南北)約1.00m奥行き(東西)1.00mとなる。燃烧部は幅(南北)約50cm奥行き(東西)70cmである。竈燃烧部及び焚口手前部分は、土間レベルより15~20cmの深さで凹んでいる。

【構造・所見】両袖方向の南北1.20m、焚口方向の東西1.60mの範囲を深さ15~20cm洋梨形に掘り込み、燃烧部外周壁面部分に石を並べる。石は大きな細長い石ではなく、大小の石をロームで巻き込むようにして積み重ね、竈内の壁面を築いているようである。竈内面のロームが火を受けて焼土化している。

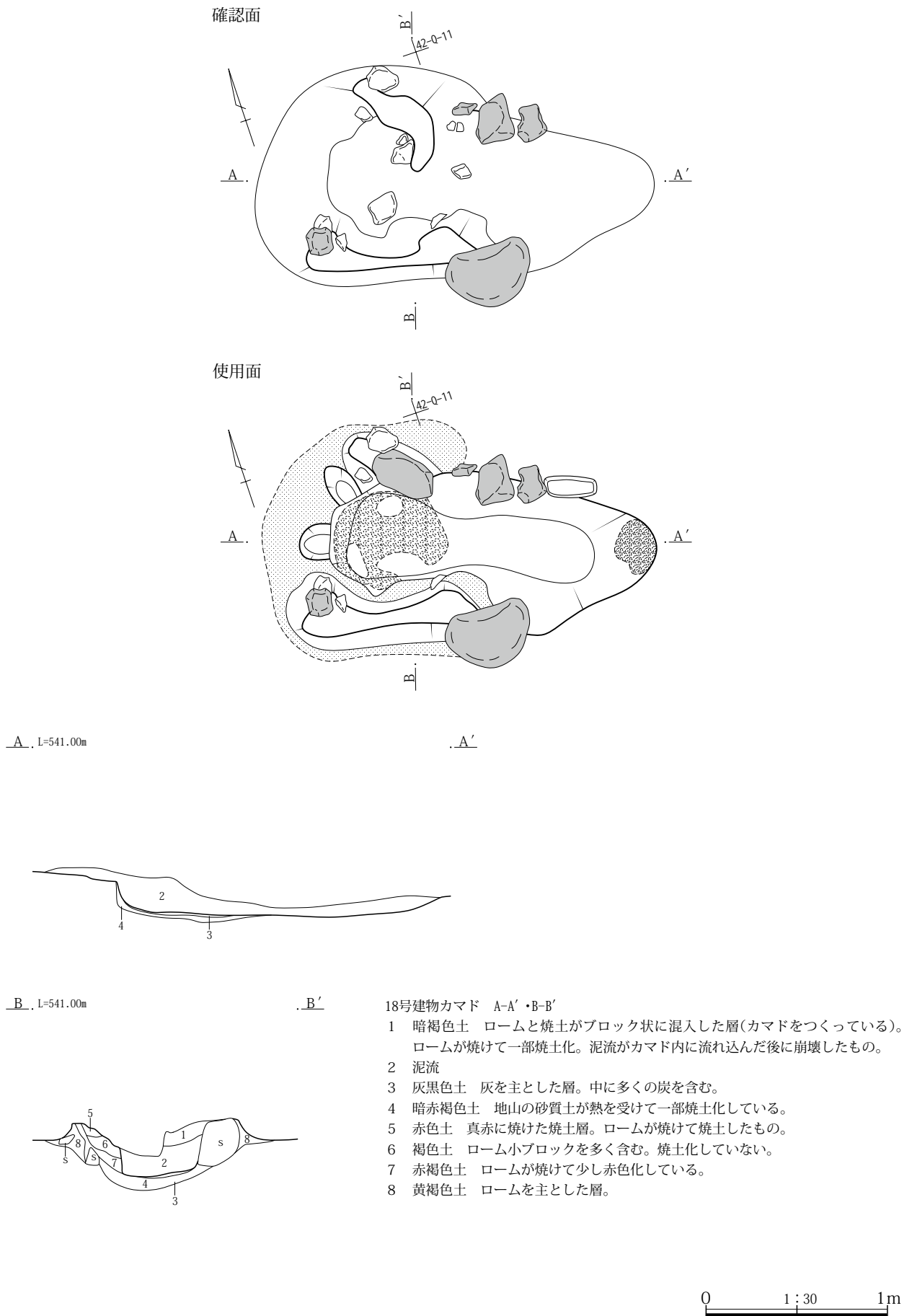
【工】炭堆積遺構(第99図、PL.45)

【帰属時期】天明三年以降

【位置・出土状況・規模・形状】1号囲炉裏の南西部で一部囲炉裏の石組みの下から建物の礎石下の範囲に、幅1.10m前後深さ15cmの落ち込みが確認された。落ち込み

の中には、粉状の炭が大量に含まれていた。中から多くの陶磁器や古銭等も出土した。建物礎石の下になるので、18号建物より古い段階の遺構と思われる。わずかに焼土粒はあるが、ロームや灰は出土していない。用途は不明。**(オ)唐臼(推定)**(第99図、PL.45・46)

建物の南西コーナー部分に直径90cm深さ46cmの掘り込みがある。1.30mほど離れた北側に直径40cm深さ50cmの掘り込みがあり、両掘り込みの中は泥流で埋まっていた。この2つの土坑状の掘り込みは、大きさや壁面コーナー部分に造られている等の特色から、西宮遺跡で発掘された3軒の建物や東宮遺跡1号屋敷跡1号建物の唐臼の掘り込み例に近い。大きな掘り込みは石製の唐臼が抜き取られた後で埋まったものであり、北側の小さな掘り込みは、杵を支える支脚が埋められていたものと考えられる。唐臼と支脚を埋めた支脚穴との距離は、同じく西宮遺跡



第98図 IV区9号屋敷跡 18号建物 竈

や東宮遺跡1号屋敷跡1号建物例では、1.30~1.40m離れた位置に掘られている。ここでの2つの掘り込みの距離は1.30mである。唐白が据えられていたものが、天明泥流後抜き取られ、木製の支脚は腐食し残らなかったものと思われる。

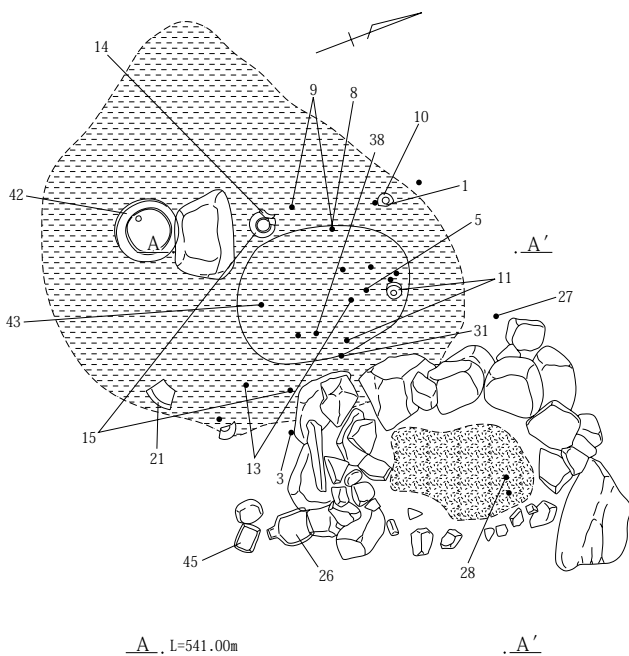
(カ) 1号囲炉裏(第100図、PL.46)

【位置・出土状況】建物は、ほぼ中央部に位置する。囲炉裏は石を組んで方形に造られている。

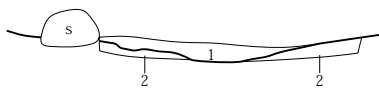
【構造・規模・形状】床下部分を約1.50m四方の範囲に20~50cmの大きな石を方形に組み、内径で90cm四方、深さは約20~25cmとなるように石で囲まれた囲炉裏の基礎部分を組む。基礎部分の石組みの外側には石を補強するよ

うに、同じような大きさの石を用いているが数は少ない。石で囲まれた囲炉裏内の底部には、地山の土を10cmほど盛っている。8号屋敷跡16号建物の1号囲炉裏とは異なり、軽石やロームは全く入れられることなく、15cm前後の小さな石を中心に、それ以下の小さな石が全面に詰め込まれている。その石の上に厚さ8~10cmの灰がある。灰は、囲炉裏内側の全面に堆積しているのではなく中心部に厚く堆積している。周辺部は、わずかな量となっている。灰の中に炭はほとんど含まれず、焼土粒も全く含んでいなかった。

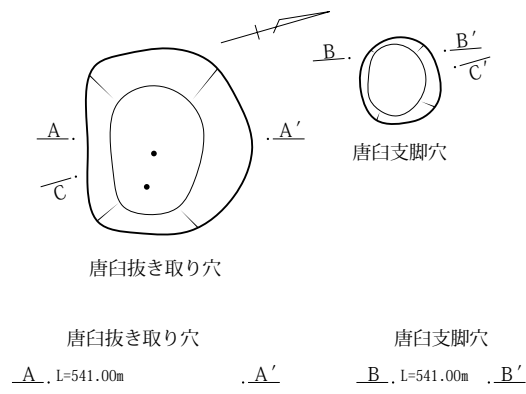
【所見】床面に方形に造られた囲炉裏であり、床面より20~25cmほど高い面を囲炉裏面として使っていた。



A, L=541.00m



18号建物炭堆積遺構 A-A'
1 炭。粉状。
2 暗褐色土 地山の砂質土。

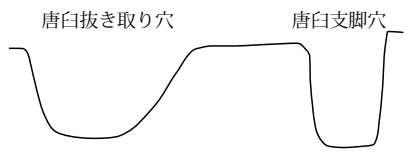


唐白抜き取り穴
唐白抜き取り穴
唐白支脚穴
唐白支脚穴
A, L=541.00m A' B, L=541.00m B' C, L=541.00m C'



18号建物唐白抜き取り穴 A-A'
1 泥流
18号建物唐白支脚穴 A-A'
1 泥流

C, L=541.00m



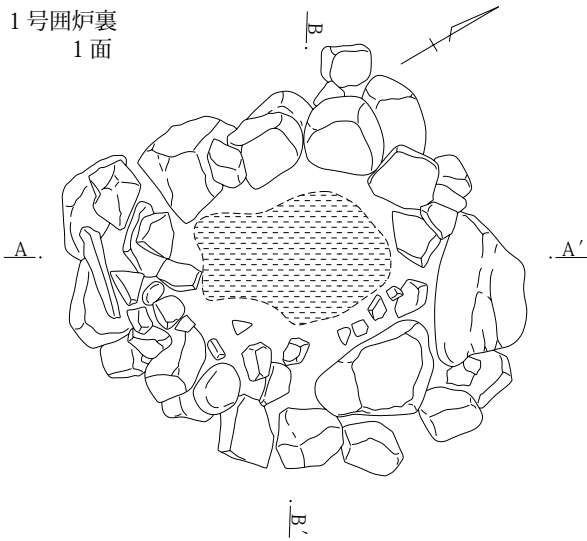
0 1:40 1m

第99図 IV区9号屋敷跡 18号建物炭堆積遺構、唐白抜き取り穴・唐白支脚穴

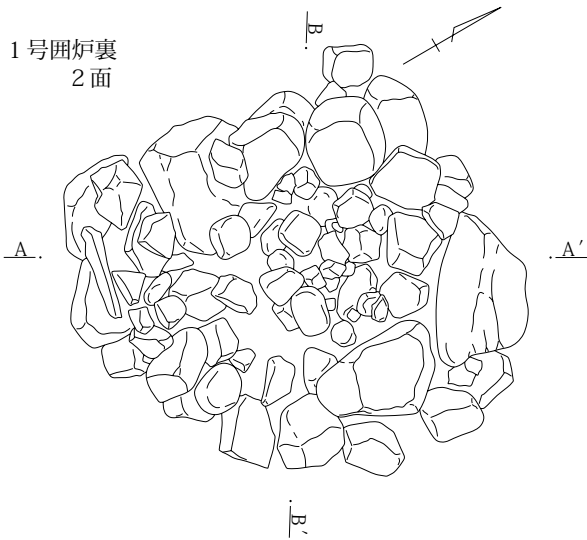
(キ) 2号囲炉裏(第100図、PL.46)

【位置・出土状況】建物北側に位置する。残りの悪い囲炉裏裏であった。

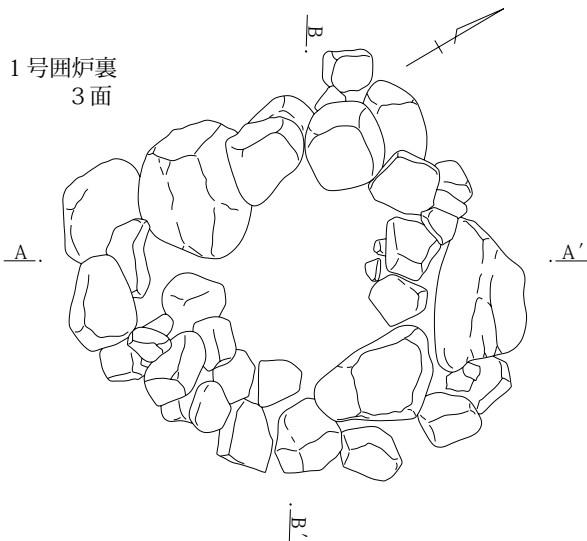
1号囲炉裏
1面



1号囲炉裏
2面

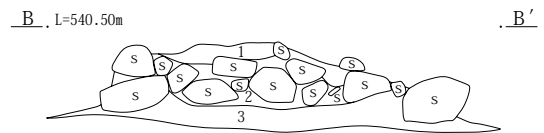
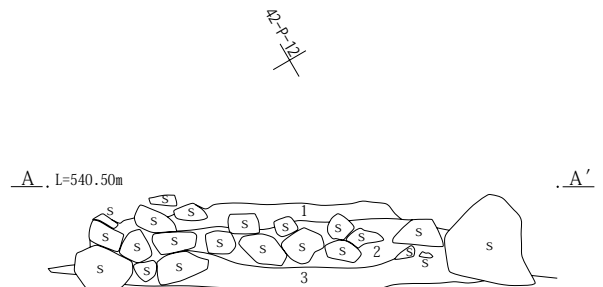


1号囲炉裏
3面



【構造・規模・形状】1号囲炉裏と同じように床下部分を約1.00m四方の範囲に20~40cmの大きな石を方形に近い形に組んで外側に大きな石を配置し、内側に小さな石が少量入っていた。しかし石の数が少なく方形に囲みきっていない。灰も全く残っていない。

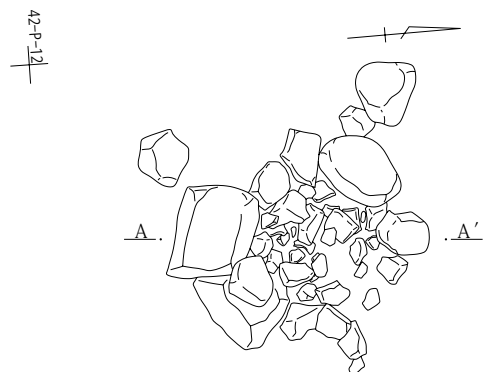
【所見】囲炉裏は、未完成の状態であったのか、後世の攪乱により壊されて残っていないのか不明である。



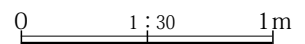
18号建物囲炉裏 A-A'・B-B'

- 1 灰白色土層 灰を主とした層。炭はほとんど含まれない。焼土全く含まない。
- 2 礫層 小さな礫を大量に含む。礫の間に落ちた灰が多く含まれている。
- 3 暗褐色土 地山の砂質の暗褐色土。囲炉裏のまわりに大きな石で囲い、その内側底部に地山の土を10cm前後盛っている。

2号囲炉裏



A . L=540.50m . A'



第100図 IV区9号屋敷跡 18号建物 1・2号囲炉裏

④19号建物(第101・102・187図、PL.48・106)42区O～Q-8・9グリッドに位置する。

【位置・出土状況】9号屋敷跡内の西側、母屋である18号建物の南東に位置し、同じく9号屋敷跡を形成する21号建物の北側に位置する。19・21号建物の東側は6号道(町道1-5号線下にあると思われる)に面していると思われる。19号建物は母屋である18号建物より20～30cmほど少し低くなっている。調査区域外の東側以外3壁面下部分に多くの石が並べられており、特に残りのよい西側部分に大きな礎石と思われる石が残っていた。この礎石上に土台を持つ建物と思われ、礎石外側に雨落溝があり、その溝中には浅間A軽石が残っていた。特に南側の雨落溝に多くの浅間A軽石が残っていた。2間×1間半の礎石建物と思われる。建物内の東側に埋設桶と円形に多くの炭が出土した炉と思われる遺構があった。埋設桶には、桶のタガの跡が1カ所残り、桶が埋められていたことを示す。中央に天明以降と思われる7号土坑が掘られていた。

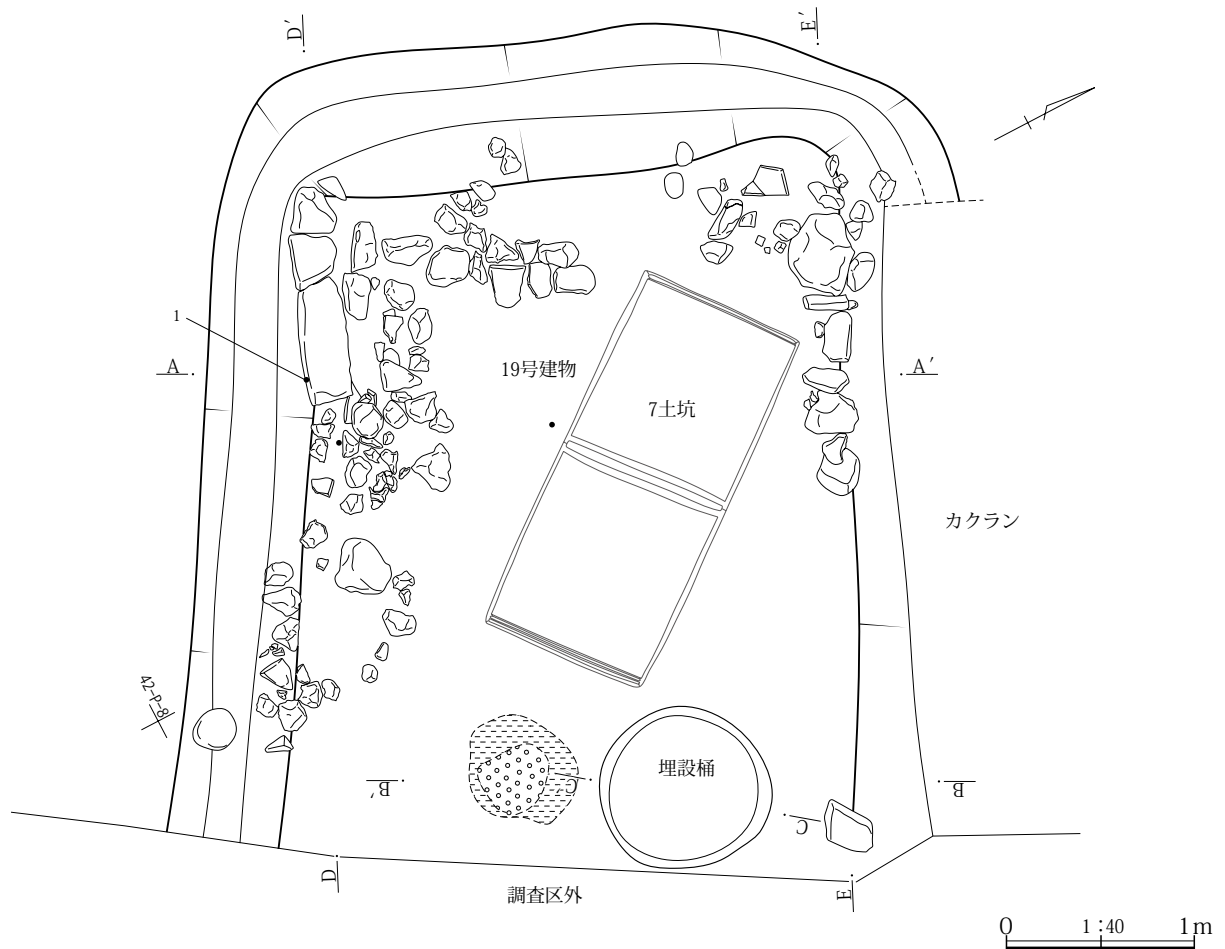
【規模・形状】建物の大きさは、明確な礎石が不明なので正確ではない。また建物東側は、現状の道路(町道1-5号線)であり発掘できていない。現状で東西3.60m、南北2.70mである。礎石から雨落溝までの距離は30cm前後、雨落溝の深さは1～6cmである。埋設桶は、底部で直径75cm、口縁部付近で85cm深さ35cmである。埋設桶南にあった炭を多く出土した炉と思われる遺構は、直径60cm前後、深さ1～2cmである。

【構造・所見】2間×1間半と思われる礎石の上に土台を持つ建物である。18号建物の付属建物と思われる。

(ア)7号土坑(第101・102図、PL.48)42区O～Q-8・9グリッドに位置する。

【帰属時期】天明三年以降

【位置・確認状況】19号建物の床面を掘り込んで長方形の土坑が造られていた。覆土は色調が天明泥流より明るく、泥流中に多く含まれている大小の石はなかった。おそらく天明泥流以降の段階で、天明泥流を多く含む土により埋没したものと思われる。泥流中から磁器の碗2個



第101図 IV区9号屋敷跡 19号建物

第3章 発見された遺構と遺物

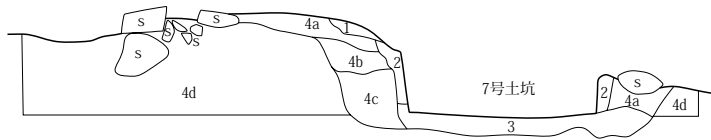
と陶器の破片1点が出土している。

【形状・構造・規模】長方形の土坑であり、底部に板が痕跡として残っていた。壁面に板の痕跡は残っていなかったが、4面ともほぼ垂直な壁面となっており、おそらく板で作られた長方形の箱が埋められていたものと思われる。底部には3カ所横木の痕跡が明瞭に残っていた。横

木以外の底部に、腐って薄くなった板が残っていた。

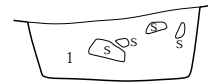
土坑の大きさは、長軸210cm。短軸90cm、深さ27cmである。底板の下の横木の痕跡は、中央の横木の幅10cm、両端の横木の幅6cmであった。板の幅は明瞭でないが、18cm前後を測ることができた。用途は不明である。

A, L=540.40m



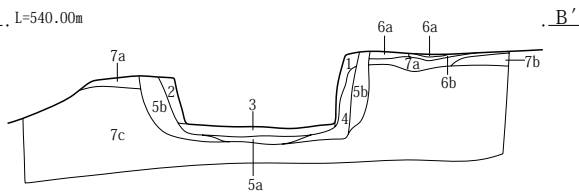
A'

C, L=540.00m



C'

B, L=540.00m

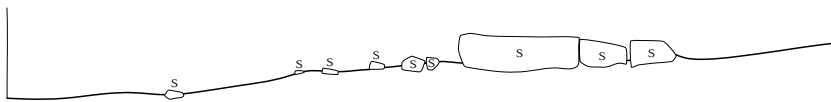


B'

19号建物断割り A-A'

- 1 暗褐色土 やや砂質で小礫を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子混。
- 3 青灰色砂質土
- 4a 暗褐色土 ローム粒子多混。
- 4b 暗褐色土 青灰色砂質土とロームブロックを含む。
- 4c 暗褐色土 青灰色砂質土を多混。
- 4d 地山

D, L=540.40m

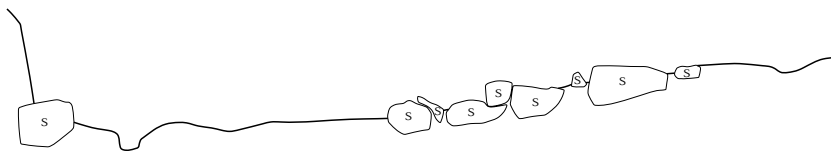


D'

19号建埋設桶 B-B'

- 1 暗褐色土 ローム粒子多混。
 - 2 黄褐色ローム土。
 - 3 暗褐色粘質土 固く締まる。
 - 4 ローム粒子混入。
 - 5a 黄褐色ローム土 粘性に富む。
 - 5b 暗褐色土 ロームブロック多混。
 - 6a ローム粒子、炭化物(1~5mm)を含む。
 - 6b 灰白色粘土
 - 7a 暗褐色土 ローム粒子混。固く締まる。
 - 7b 暗褐色土 ローム粒子、灰白色粘土粒子を含む。
 - 7c 地山
- ※ 1~5b層までが埋設桶にかかわる層。

E, L=540.40m



E'

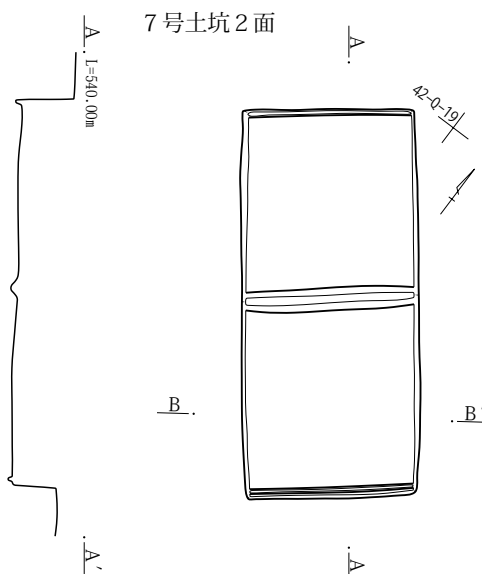
19号建埋設桶 C-C'

- 1 天明泥流

7号土坑1面

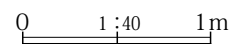


7号土坑2面



B, L=540.00m

B'



第102図 IV区9号屋敷跡 19号建物 埋設桶断面、7号土坑

⑤21号建物(第103・104・187図、PL.48・106)42区P～R-6～9グリッドに位置する。

【位置・出土状況・構造】泥流が薄く、建物全体に東西方向4本の耕作溝、さらに南側雨落溝付近では東西方向の大きな掘り込みにより攪乱を受けていた。発掘当初段階、建物中央部分に南北方向に礎石列と思われる石列があり、この石列の西と東で別な建物があると考え、東を21号建物、西側を22号建物とした。発掘を進める中で、浅間A軽石が残っている雨落溝が21・22号建物全体を囲むように回っており、2つの建物は屋根が一連であることがわかり、一つの建物として21号建物とし、22号建物は欠番とした。18号建物の南東、19号建物の南側に位置する。建物の敷地は18号建物より10cmほど低く、19号建物より30cmほど高くなっている。19号建物同様に建物の調査区域外の東側以外3壁面下部分に多くの石が並べられており、特に残りのよい北側部分に大きな礎石と思われる石が残っていた。この礎石上に土台を持つ建物と思われる、礎石外側に雨落溝があり、その溝中には浅間A軽石が残っていた。規模は異なるが、19号建物に近い構造の2間×3間の礎石建物と思われる。建物の南側は、建物壁面土壁の残存から位置が明らかであり、礎石から雨落溝までの距離が他の礎石から雨落溝までの距離と比較すると2倍以上離れている。おそらく下屋が半間南側に伸びていたものと思われる。建物の出入り口であろうか。発掘当初建物中央にある東西の石列を境にした別の建物と考えた石列は、なぜ存在したのであろうか。当初建物中央部の石列部分が21号建物の西側の範囲であり、その後西側に下屋が造られたものとして理解したい。建物南壁面部分にロームが帯状に幅12cm長さ1.00m高さ5cmほど立ち上がっている部分があり、土壁の残骸と思われる。建物中央部分は残りが非常に悪いが囲炉裏と思われる痕跡が残っていた。石で囲まれ中央部分に少し灰が残っていたが焼土粒はほとんど無い。灰は土間より高い位置にあるので、18号建物1号囲炉裏に共通する床面に付属する囲炉裏の可能性はある。しかし残りが悪く大部分が不明である。

【規模・形状】規模は確実な根拠が薄く明らかでない。南側壁面底部に痕跡として残るロームの土壁の位置と北側の石列をもとに測定した。東西南北方向とも3.70m、西側に1間の張り出し、南側に半間の底を持つ建物と推定

する。

【所見】21号建物は、9号屋敷跡の母屋である18号建物の付属建物と考えているが、他の付属建物と異なり建物内に囲炉裏があり、さらに石臼の出土等から生活の痕跡を伺うことができる。不明な点が多い建物である。

⑥水場と水場から18号建物への水の搬入路(第105図)

42区O～Q-13～15グリッドに位置する。

水場については、8号屋敷跡の中で詳しく触れた。おそらく9号屋敷跡で使用した水場は、8号屋敷跡と共通すると思われる。井戸等の説明は改めて行わない。井戸から9号屋敷跡18号建物に水を運ぶ方法について検討したい。もっとも近い井戸は6号井戸である。この井戸から南側の11号道を登り、18号建物の西側に来る。11号道は、途中で23号建物に向かう本道と18号建物の裏口に向かう細くて一段低い道路が別に造られている。この道を通り18号建物竈西部分付近にあったであろう裏口から、水を運び入れていたと推定したい。

⑦石垣

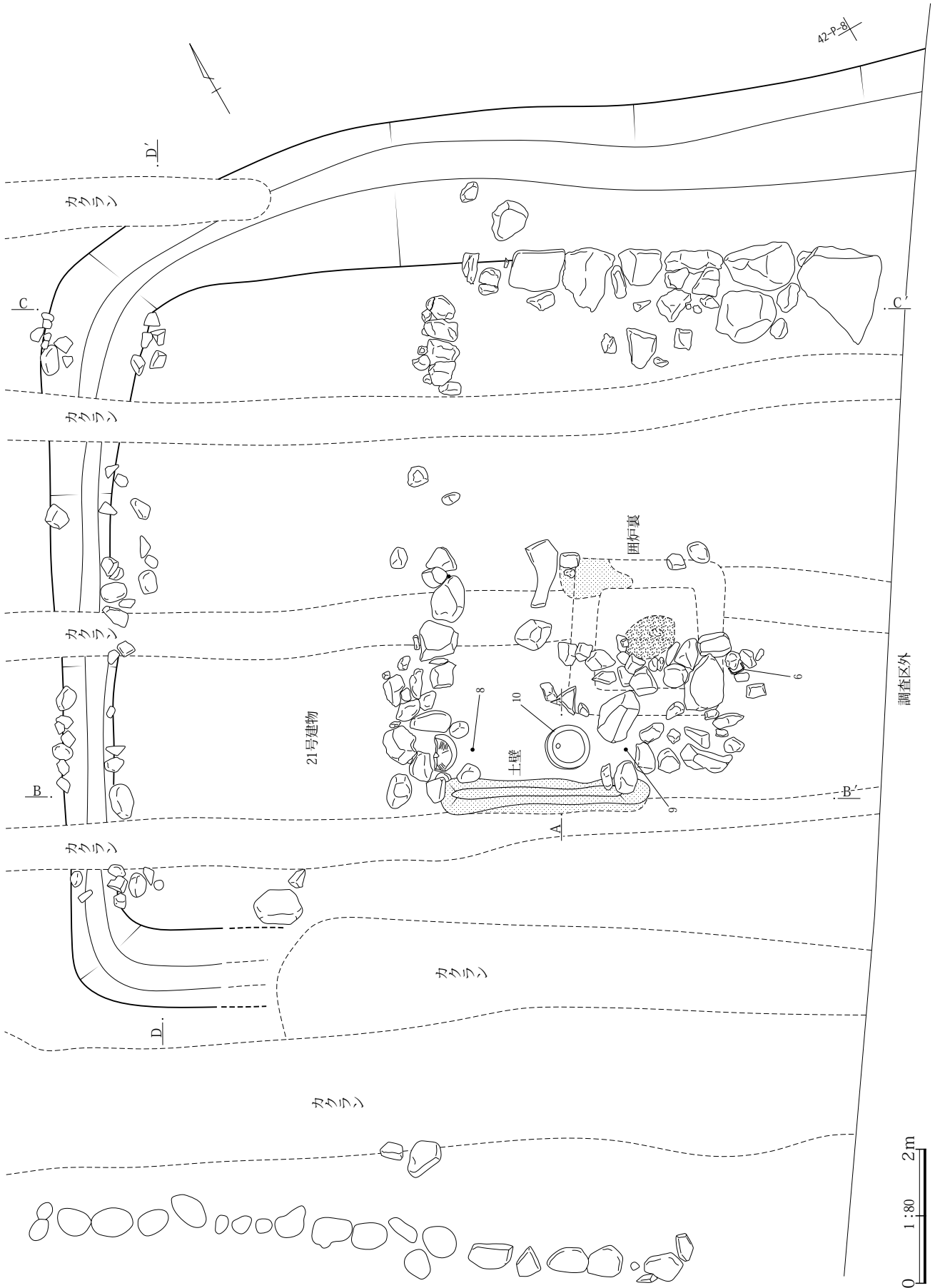
【位置】18号建物は、北側から北西コーナー部分に28号石垣、西側を29・30号石垣に囲まれている。30号石垣の南側及び21号建物の南側を区分する石垣または石列は不明である。28号石垣は、18号建物北側を区画する高い石垣である。北西の水場手前で曲がり18号建物と11号道との間で落差が無くなる所で石垣は消える。30号石垣は、11号道と18号建物の段差の部分に築かれている。29号石垣は、11号道が23号建物に向かう本道と18号建物の裏口に向かう細くて一段低い道路面の段差部分に積まれたものである。石垣は自然石の野面積みであり、細長い石は横方向に積む平積みである。

(ア)28号石垣(第106図、PL.47)42区N～Q-12～14グリッドに位置する。

【規模・構造】石垣は30～40cmの大きさで自然石を中心に、50～70cm石も多く用いている。中には幅1.00m厚さ60cmの大きな石も用いている。平積みで5～6段積んでいる。石垣の規模は東西方向11.0m、コーナー部分1.80m南北方向2.40m長さの合計15.2m、高さは90～110cmである。

(イ)29号石垣(第105図)42区P～R-11～14グリッドに位置する。

【規模・構造】石垣は20～30cmの大きさで自然石を平積みで1～2段積んでいる。石垣の規模は長4.90m、高さは



第103図 IV区9号屋敷跡 21号建物

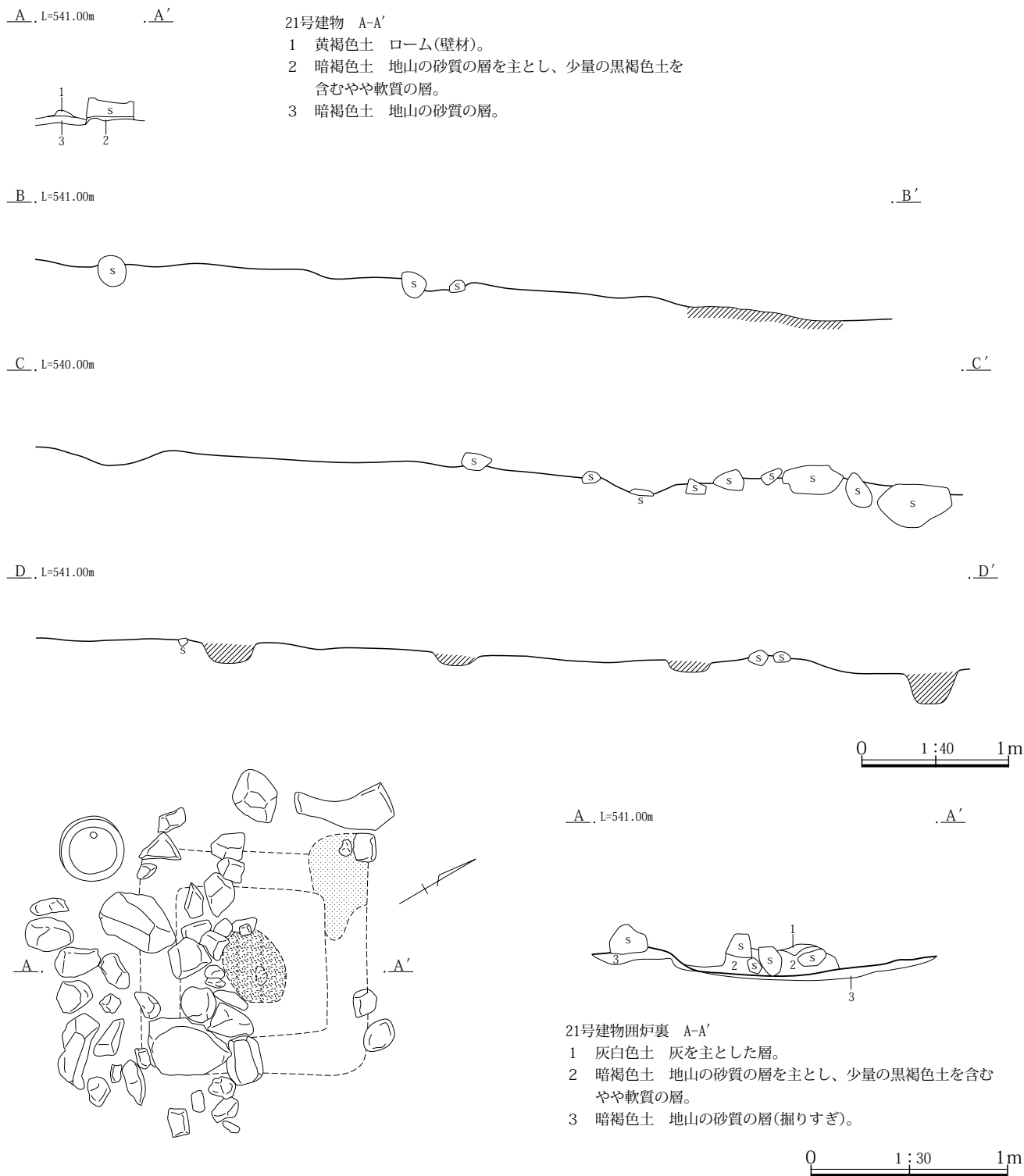
20cm前後である。

(ウ)30号石垣(第105図)42区Q・R-10・11グリッドに位置する。

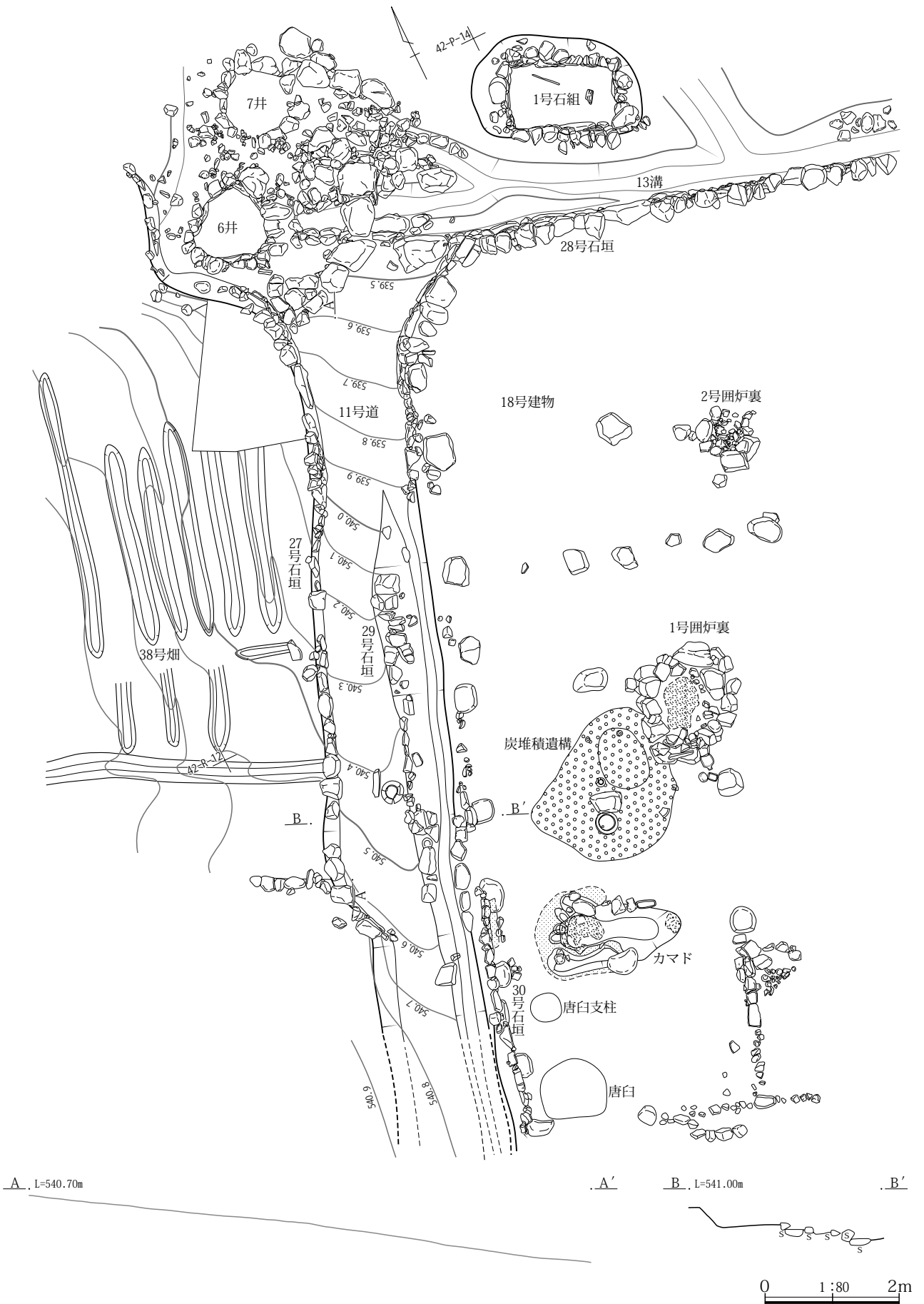
【規模・構造】石垣は29号石垣と同じ20~30cmの大きさで自然石を平積みで1~3段積んでいる。石垣の規模は長さが5.20m、高さは20~30cmである。

⑧出土遺物(PL.47)

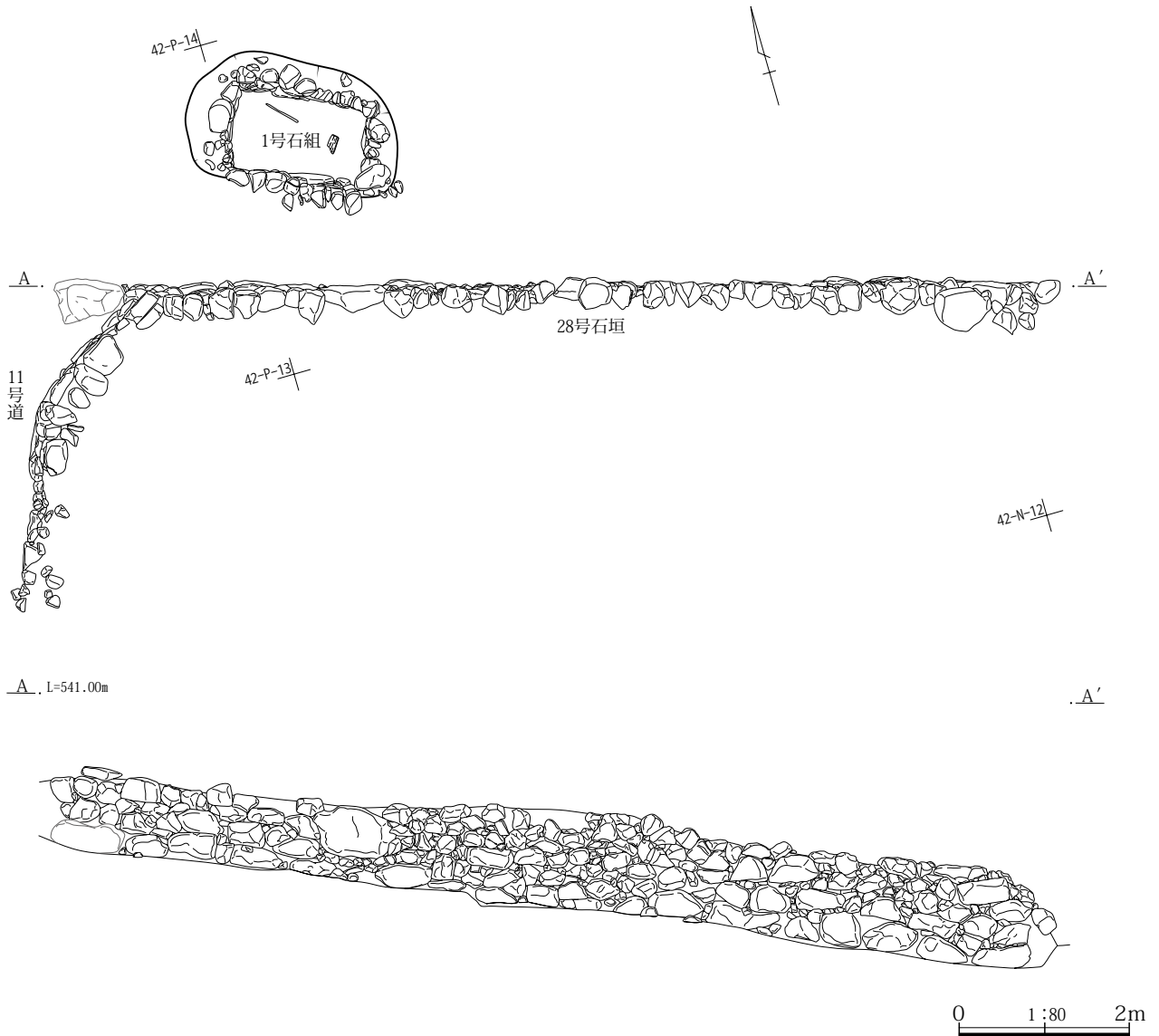
18号建物出土遺物の6は瀬戸・美濃磁器で天明期以降の所産である。他の陶磁器類は天明泥流下で出土するものである。17、18、21のすり鉢は割れ口の一部を擦って平滑に加工している。木製品では馬屋桶の下部(25)を図示した。金属製品では十能(26)や煙管、寛永通寶銅1文



第104図 IV区9号屋敷跡 21号建物断面 囲炉裏



第105図 IV区9号屋敷跡 西側11号道、水場、28・29・30号石垣



第106図 IV区9号屋敷跡 31号建物 28号石垣

銭5枚(36~40)、石製品は砥石(41、43)、石臼(42)、不明石製品(44、45)を図示した。

19号建物では不明鉄製品(1)1点を図示できたのみである。21号建物出土遺物で5の磁器皿は天明期以降である。また、3の碗もその可能性がある。金属製品は農具片(8)と寛永通寶銅1文銭(9)、石製品では石臼(10)を図示した。

非掲載遺物は以下の通りである。

18号建物:江戸時代の磁器39点209g、陶器36点177g。木製品では馬屋前の下屋柱基部が出土している。直径は20cm×15cmで、基部から約42cmが残っていた。金属製品は鉄製品片2点と銅製品片1点、石製品では粗粒輝石安

山岩製の砥石片1点。

19号建物:江戸時代の磁器3点39g、陶器3点、35g。木製品、金属製品と非掲載は出土していない。

7号土坑:江戸時代の磁器2点6gが出土しているが、細片のため掲載していない。木製品では底板の一部が4片出土している。金属製品と石製品は出土していない。

21号建物:陶磁器非掲載はない。非掲載の金属製品はない。また、石製品で掲載しなかったのは、粗粒輝石安山岩製の石臼(下臼)片1点である。

28号石垣、29号石垣、30号石垣:遺物の出土は認められなかった。

(7)10号屋敷跡(第93・95図)

①10号屋敷跡の調査概要

(ア)屋敷跡の立地と遺構配置

10号屋敷跡は、東宮遺跡の最も南側に位置し、標高が541.5m前後で、標高が最も高い場所に位置する。南の境沢を隔てて西宮遺跡となる。屋敷跡は南東方向に向かって低くなる緩やかな傾斜面にあり、集落の中心である6号道(8号屋敷跡の項で説明済み)から12.0mほど西に位置し、6号道に最も近い調査面より23号建物の床面は、1.00m前後高い。屋敷地は西側が高く東側が低い緩やかな斜面の西側を削り、平地を確保している。西側は1.00m前後削り、その面に32・33号石垣を築いている。屋敷跡の南側は、斜面を10～50cmほど削り、削った面は土手としている。北側も、10～50cmほど削り平地を確保し、屋敷跡の附属建物と思われる30号建物を建て、削った西側には33号石垣、北側は土手としている。30号建物北側に畑があり、畑の北側と東側を囲うように土手や石垣で囲われている。東側は、11号道に伴う27号石垣が築かれている。石垣の築かれている部分以外は、ほぼ切り盛りのない状態で屋敷地を確保していると思われる。屋敷前は11号道となっており、前庭等は不明である。以上のように石垣や土手で囲まれている範囲を10・11号屋敷跡として報告する。石垣については、同じ屋敷跡内の11号屋敷跡の中でまとめて説明する。この地区の天明泥流の堆積は、屋敷跡西側の32・33号石垣付近では、1.00m前後堆積しているが、石垣の東側は、天明泥流が薄く畑の耕作痕は残っていなかった。

(イ)遺構概要と遺構の重複関係

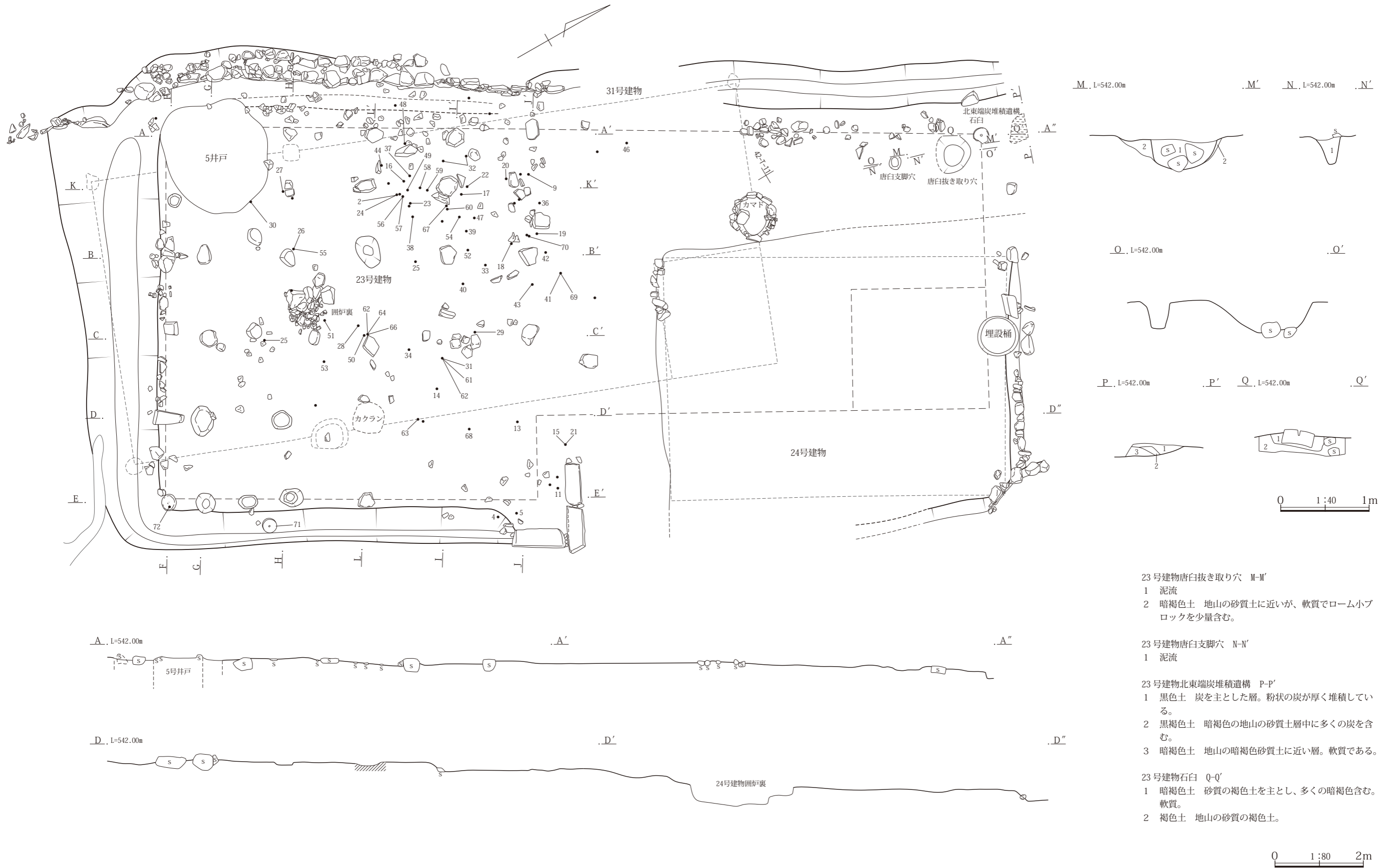
10号屋敷跡の母屋である23号建物と23号建物の北東部を掘り込んで造られている24号建物、また23号建物の下約30cmにある11号屋敷跡31号建物の3軒が重複している。新旧関係は、31号建物→23号建物→24号建物である。最も古い31号建物は、礎石建物で、2個の石囲いの囲炉裏、竈、また馬屋の存在も推定されるので、他の屋敷跡の構造とほぼ同様であり、23号建物との年代差は短いようである。24号建物は、囲炉裏が特別に大きい、建物の規模が小さく土間と板間の区別がわからない。また家の構造は4本の掘立柱建物と思われ、他の屋敷跡の建物と構造が大きく異なっているようである。そこで24号建

物は屋敷跡として扱わなかった。23号建物と31号建物は、高低差約30cmで、建物の規模や軸線が少し異なるが、大部分が重複している。23・31号建物の北側に30号建物がある、この建物は、23号建物と同時に泥流下から確認されており、雨落溝から浅間A軽石が出土しているのも同時期に埋没した建物と思われる。31号建物は、厚さ30cm前後の土砂に埋まっている。その上に23号建物がある。後で詳しく説明するが、30号建物は母屋である23・31号建物両方の附属建物と考えられる。なお23号建物の南西コーナー部分にある5号井戸は、天明三年以降に造られた新しい井戸である。

②23号建物(第107・108・188～191図、PL.49・51・107～109)

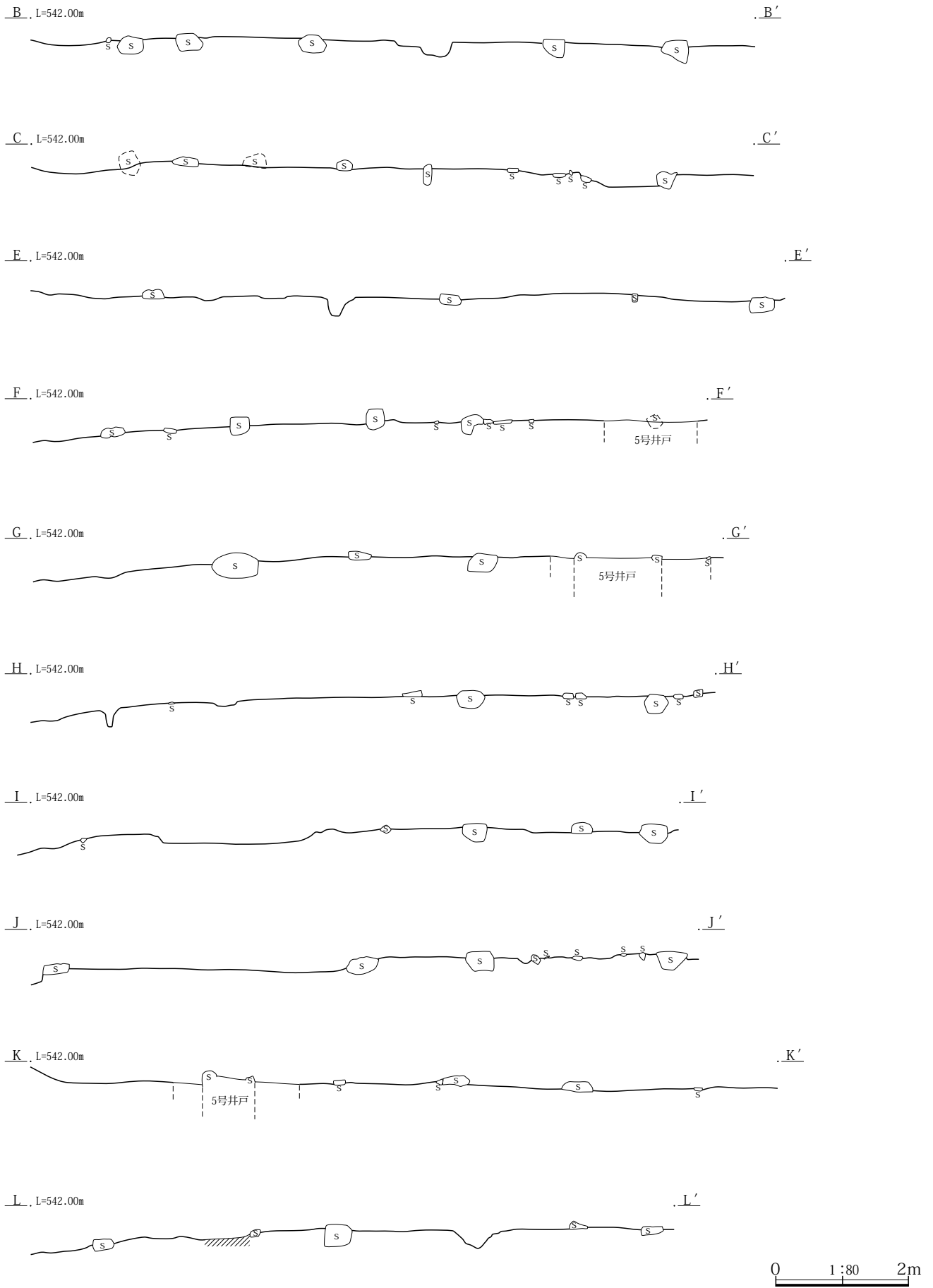
【建物の概要】10号屋敷跡の母屋であり、礎石を用いた建物である。北東部分を24号建物により深く削られていた。建物の中央から南にかけて、大部分が31号建物と重複しており、23号建物は31号建物を埋めた土の上に礎石等を並べて造られていた。このように3軒が重複しており、さらに23号建物の床面は31号建物を埋めた土でできており、地山を床面とした建物と異なり調査は困難であった。調査当初、屋敷跡の北東コーナーにL字状に並ぶ3石の切石までを建物北側の範囲と考え調査を進めた。その結果礎石も一定量並び建物としては成り立つ。

しかし1～9号屋敷跡すべての建物にあった土間がなく、当然竈・馬屋・唐臼等も持たない建物となり、極めて不自然となった。調査を進める中で、23号建物西側に竈、さらに北西コーナー部分に石臼を用いた礎石と唐臼の抜き取り穴と思われる痕跡、北側に埋設桶が確認された。当初推定された範囲の北側に土間の礎石は、1石以外残っていないが、23号建物の土間の存在が推定された。残った問題は、東壁部分にあるL字状に並ぶ切石である。建物の東側は、11号道が軒下部分にある。この道路を含む地形は等高線を追っていくと、L字状に並ぶ切石を直角に西側に回り込んでいる。おそらく天明三年段階でもL字状に並ぶ切石を境に建物が約1間幅で狭くなっていることが推定できた。そのように考えると、さらに北側に続く土間が、11号道と重ならないことが明らかとなった。建物北東コーナー部分に約直径90cmの埋設桶がある。位置からここに馬屋を推定した。なお建物西側の雨落溝は、推定した建物に平行していた。南側の雨落溝には、



- 23号建物唐白抜き取り穴 M-M'
 - 1 泥流
 - 2 暗褐色土 地山の砂質土に近いが、軟質でローム小ブロックを少量含む。
- 23号建物唐白支脚穴 N-N'
 - 1 泥流
- 23号建物北東端炭堆積遺構 P-P'
 - 1 黒色土 炭を主とした層。粉状の炭が厚く堆積している。
 - 2 黒褐色土 暗褐色の地山の砂質土層中に多くの炭を含む。
 - 3 暗褐色土 地山の暗褐色砂質土に近い層。軟質である。
- 23号建物石臼 Q-Q'
 - 1 暗褐色土 砂質の褐色土を主とし、多くの暗褐色含む。軟質。
 - 2 褐色土 地山の砂質の褐色土。

第107図 IV区10号屋敷跡23号建物



第108図 IV区10号屋敷跡 23号建物断面

浅間A軽石が残っており、礎石から雨落溝までの距離は80cm前後である。

【位置・規模】9号屋敷跡の中央部に位置する。42区S～V-7～10グリッドに位置する。

23号建物を構成する施設(馬屋・竈・唐臼・囲炉裏)および残っていた礎石は基本的に原位置を保って出土している。礎石は、建物東側部分及び推定した土間部分では1石以外残っていなかった。残っていた礎石等から規模について推定する。建物は、礎石列を参考に芯寸法で計測すると、推定数値であるが、桁行(南北)18.4m×梁行(東西)8.30m土間部分は梁行(南北)6.42mである。

(ア)馬屋(推定)(第107・109図、PL.50)

【位置・規模・構造】18号建物の北東隅に位置する。馬屋として推定した部分は24号建物により削られて残っていない。推定した馬屋北側に埋設桶がある。当初埋設桶ではなく8号土坑として調査した。形から埋設桶と思われる。タガの痕跡は残っていなかった。埋設桶の直径90cm深さ50cmであった。

(イ)竈(第109図、PL.50)

【位置・出土状況】23号建物北の土間西側に位置する。竈内の泥流を除去すると、少量のローム粒と炭を含む土で埋まっていたが、灰は残っていなかった。細長い石を縦方向に円形に並べて竈の側壁としている。竈の周辺や側壁の間にロームは充填されていなかった。

【規模・形状】竈を石から計測すると幅(南北)約1.05m奥行き(東西)1.10mとなる。燃烧部の内径は幅(南北)約60cm奥行き(東西)80cmである。竈燃烧部及び焚口手前部分は、土間レベルより15～20cmの深さで凹んでいる。

(ウ)唐臼(推定)(第107図、PL.50)

建物の北西コーナー部分に直径75cm深さ41cmの掘り込みがある。1.30mほど離れた南側に直径25cm深さ33cmの掘り込みがあり、両掘り込みの中は天明泥流で埋まっていた。この2つの土坑状の掘り込みは、大きさや壁面コーナー部分に造られている等の特色から、大きな掘り込みは石製の唐臼が埋まったものが抜き取られた小穴であり、北側の小さな掘り込みは、杵を支える支脚が埋められていたものと考えられる。唐臼と支脚を埋めた支脚穴との距離は、同じく西宮遺跡や東宮遺跡1号屋敷跡1号建物例では、1.30～1.40m離れた位置に掘られている。ここでの2つの掘り込みの距離は1.30mである。唐臼が据

えられていたが、唐臼は天明泥流後抜き取られ、木製の支脚は腐食し残らなかったものと思われる。

(エ)囲炉裏(第109図、PL.50)

【位置・出土状況】板間の奥に囲炉裏と思われる石のまどまりが確認されたが残りは良くなかった。本来土間に近い位置にあるべき囲炉裏は残っていなかった。

【構造・規模・形状】床下部分を約1.10m四方の範囲に20～40cmの大きな石を組んでいる。内側には小さな石が詰まっていた。東や南北には大きな石は組まれていない。

【所見】囲炉裏を作るために石を配置したが、頻繁に使われることなく、床面の下に隠れた状態であったのであろうか。

(オ)屋敷跡東中央部にL字状に並ぶ3石の切石

(第107図)

23号建物、②建物の概要の中で説明した切石である。3石中央の石には、石を割るときのかさびの痕跡が明瞭に残っていた。石の大きさは90～120cm、厚さは25～30cmであった。

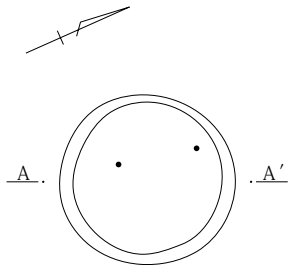
③30号建物(第110図、PL.50・51・110)42区R～T-12～14グリッドに位置する。

【位置・出土状況】10号屋敷跡北側、母屋である23号建物の北に接して位置する。建物を囲むように4面に雨落溝があり、多くの浅間A軽石が残っていた。

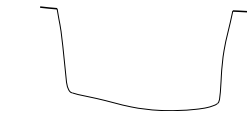
【規模・形状】土台を用いた建物と思われる。大きな礎石は残ってなく、土台の下に置かれたと思われる石が多く残っていた。東西方向に長い桁行(南北)4.60m×梁行き(東西)5.00mの建物である。建物は、3.68m(東西)×4.60m(南北)の建物主要部に入出口として東側に4.60m(南北)×1.32m(東西)が造られていると思われる。建物の主要部分と思われる内部には、南側約半分には厚いロームが貼られた床面となっていた。ロームの貼られた範囲は、東西3.68m南北2.10m、ロームの厚さ7～10cmであった。ロームが貼られた南側と貼られていない北側約半分との境は、ロームの厚さ10cmほどの段差となっており、そこには厚さ10cm内外の角材等が置かれて仕切られていたものと思われる。貼られていたロームは表面に多少の凸凹はあるが、ほぼ水平で堅くしまっていた。特に中央部は堅く踏まれたためか、周辺部より低くなっていた。ロームは礎石の高さに近いが、土台よりやや低く貼られていた。ロームの貼られていない北側の土

埋設桶

42-5-12



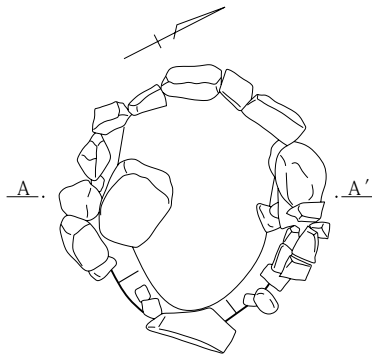
A, L=541.00m



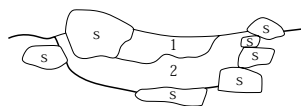
0 1:40 1m

カマド 1面

42-1-11



A, L=542.00m

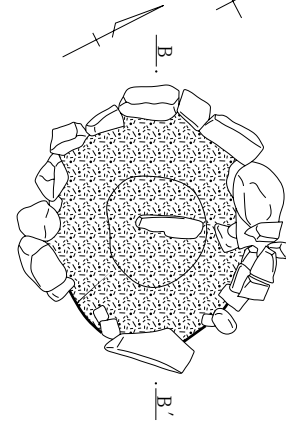


23号建物カマド A-A'

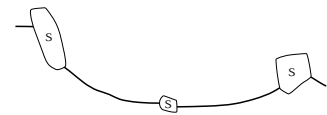
- 1 泥流層。
- 2 黒褐色土 ローム粒と少量の焼土粒と炭を含む。

カマド 2面

42-1-11

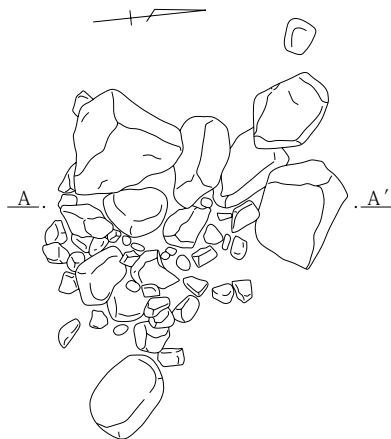


B, L=542.00m

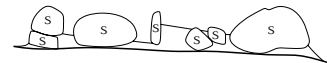


囲炉裏

42-1-8



A, L=542.00m



0 1:30 1m

第109図 IV区10号屋敷跡 23号建物 埋設桶、竈1・2面、囲炉裏

間は、別の土等を持ち込んで水平にした様子はなかった。東側の出入り口と思われる部分も、土台が置かれたであろう部分に大小の石が並べられていた。南東コーナ一部分に礎石は残っていなかったが雨落溝が回っているのので、その部分にも屋根がかかっていた。出入り口と思われる部分の大きさは、南北方向4.60m(南側1.32mの範囲は庇だけか)東西1.32mとなっている。土間の床面は西側の土間より少し低く、多くの小さな石があったが、本来は西側同様に平らな土間となっていたものと思われる。

礎石から雨落溝までの距離は50cm前後、雨落溝の深さは1～10cmである。

【構造・所見】10号屋敷跡内建物であり、母屋である23号建物の附属建物と考えるのが妥当と思われる。しかし23号建物とは建物の軸線が多く異なり、不自然である。23号建物は、屋敷跡を囲う石垣や土手の軸線ともずれている。ずれていない建物は、11号屋敷跡の31号建物である。31号建物と30号建物は軸線がほぼ一致する。可能性の一つとして、30号建物は、31号建物が造られた天明三年段階以前に31号建物の附属建物として使われていた。その後、31号建物から23号建物に変わった段階で、今度は23号建物の附属建物として、使われていたのではないだろうか。

④9号道(第93図)42区Q～T-5～7グリッドに位置する。

【位置・出土状況】9号屋敷跡21号建物南側で、34・35号畑との間に位置する。調査を進める中でこの範囲には耕作痕がなく、西に向かって高くなるなだらかな傾斜面となっており、23号建物南東部では水場から繋がっている11号道とも繋がっていると思われた。幅が広く浅間A軽石の残りも良好でないので、不明な点が多いが9号道として調査した。

【規模・形状・所見】道路幅4.50m、長さは11号道との境が不明なので明らかでないが、推定で8.00m。集落内の主要道路である6号道から23号建物に入るための道路と考えた。

⑤10号道(第93図)42区T・U-4～7グリッドに位置する。

【位置・出土状況】調査区南端10号屋敷跡南東コーナ一部分で、36・37号畑との間に位置する。11号道の南側とな

り、11号道と直線的に繋がると思われる。道路の中央部が少し高く、道路の西側が側溝と思われ多くの浅間A軽石が残っていた。

【規模・形状】道路幅は、他の道路より狭く、60cm前後となっている。長さは11号道までで7.90mである。

【構造・所見】集落内の主要道路である6号道は幅1.80m集落内の道路は幅90cm、10号道はそれより狭い60cmとなっている。畑等に繋がる道路であろうか。

⑥11号道(第93図、PL.51)42区P～R-10～14グリッドに位置する。

【位置・出土状況】6・7号井戸、1号石組、13号溝の水場から9号屋敷跡と10・11号屋敷跡の間を直線的に通過し、南の10号道まで繋がる道路と思われる。水場から18号建物北側10.0m地点までは、地山を掘削し道路両側に石垣を持つ道路となっており、明瞭な浅間A軽石が残る道路面となっていた。しかしその地点以南は、攪乱を受けており、浅間A軽石が明らかでなく、明瞭な道路面を確認することは出来なかった。

【規模・形状】南北32.0m、道路幅は、水場から西に登る付近で1.20m、18号建物北で90cmである。おそらく10号道まで90cm幅の道路が、繋がっていたものと思われる。

【構造・所見】水場から9号屋敷跡北側、10・11号屋敷跡の南側を通り、西宮遺跡に繋がる道路であったと思われる。集落内の主要道路である6号道は幅1.80m集落内の道路は幅90cmとなっている。

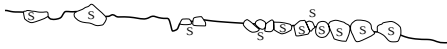
⑦出土遺物

23号建物出土遺物は銭貨が多く、出土した銅銭44点すべてを掲載した。内訳は43点が1文銭で1点が4文銭(11波)。1文銭のうち1点が「祥符元寶」、2点が判読不可能、40点が「寛永通寶」である。背面の文字には「文」、「足」、「小」、「元」が認められる。なお、「文銭」の1枚(30)は孔を円形に再加工している。また、31、39、45、52、63の5点は古寛永である。銭貨以外の金属製品は小柄(14)と鍋か瓶の弦(18)をのぞき用途不明が多い。25の銅製品は松葉簪の可能性がある。

陶磁器類は少なく、土人形の大黒様(1)や磁器碗(4～6)、陶器碗(7、8)、磁器火入か香炉(9、10)練鉢(11)、すり鉢(12)など12点を図示し得たのみである。石製品は流紋岩製砥石1点(70)、石臼1点(71)、凹みを有する不明石製品1点(72)を図示した。

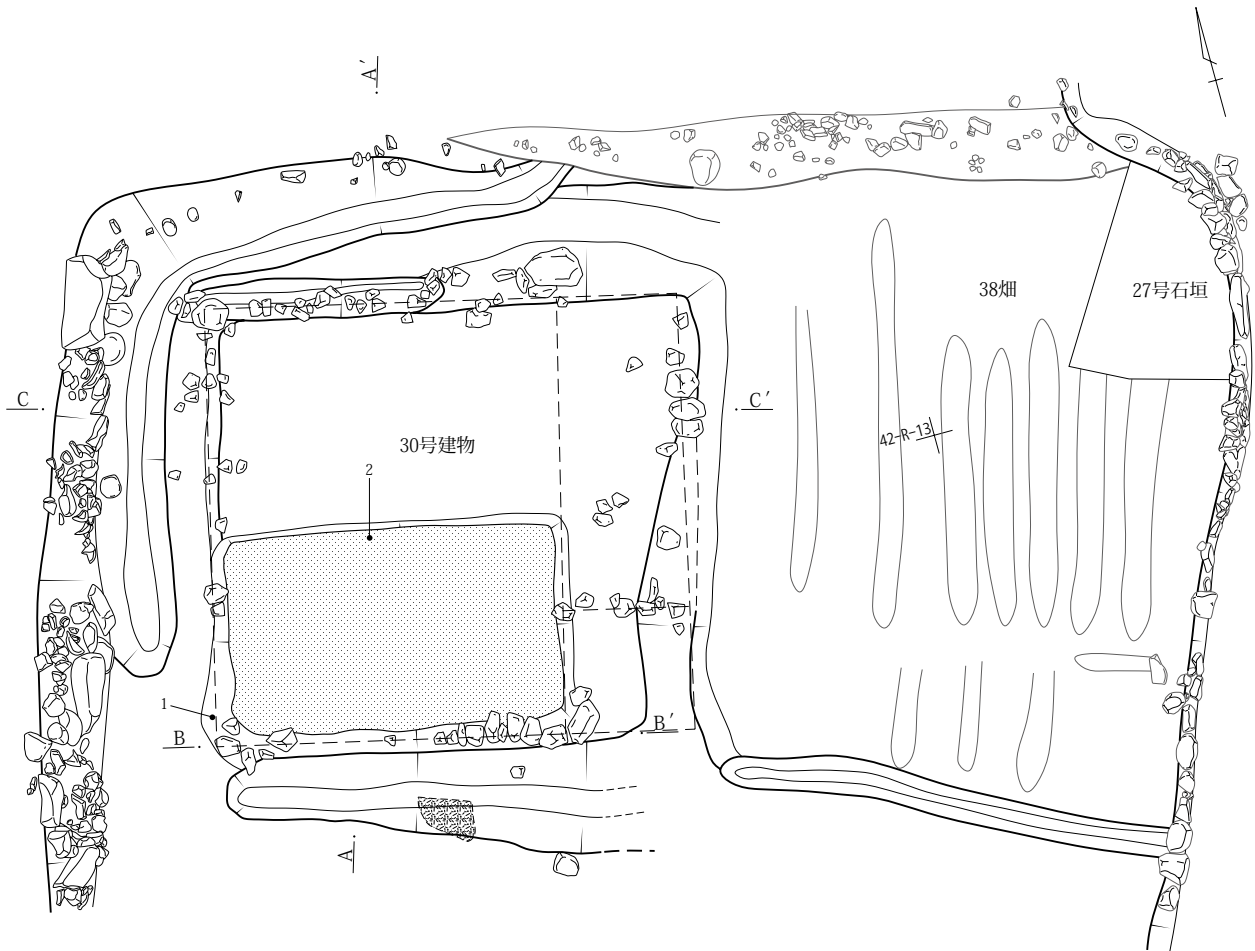
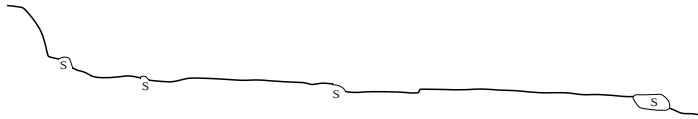
B, L=542.00m

B'



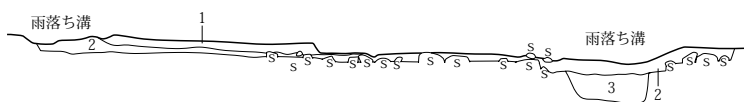
C, L=543.00m

C'



A, L=542.00m

A'



30号建物 A-A'

- 1 黄褐色土 ローム層。全面に固く貼ってある。床面として使用か。
- 2 暗褐色土 砂質の地山の層。少量の黄色の粒含む。
- 3 暗褐色土 2層に近いが、2層より明るく多くの黄色粒含む。

0 1:80 2m

第110図 IV区10号屋敷跡30号建物

30号建物は出土遺物が少なく、銅銭の新寛永1文銭2点(1、2)を図示し得たのみである。

掲載し得なかった遺物は以下の通りである。

23号建物:江戸時代の磁器35点252g、陶器45点696g。粗粒輝石安山岩製の礎石2点。このうち1点は転用された石臼。鉄製品片2点。植物遺存体は出土していない。

30号建物:江戸時代の磁器1点4g、陶器1点7gのみである。

9・10・11号道:遺物は出土していない。

(8)11号屋敷跡(第111図)

①11号屋敷跡の調査概要(31・30号建物)

(ア)屋敷跡の立地と遺構構成

11号屋敷跡の立地状況については、10号屋敷跡の中で詳しく述べたのでここでは省略する。31号建物は、23号建物に先行する建物である。23号建物を含む10号屋敷跡は、23号建物と付属建物と思われる床面にロームを厚く貼ってある30号建物がある。この30号建物の下には、別の建物は埋まっていなかった。30号建物は、23号建物の付属建物と思われるが、建て替えられた23号建物とは大きく軸線が異なり、31号建物の軸線とはほぼ一致する。屋敷跡を囲む石垣や土手の配置からも31号建物と30号建物は自然である。30号建物は、当初31号建物の付属建物として建てられ、新たに23号建物が建てられた段階で、引き続き23号建物の付属建物として使われたものではないだろうか。その前提の上で11号屋敷跡は、31号建物と30号建物で構成された屋敷跡であるとして以下の説明を進める。なお30号建物については、10号屋敷跡の中で説明したので、ここでは省略する。

(イ)遺構概要と遺構の重複関係

11号屋敷跡31号建物は、10号屋敷跡の母屋である23号建物の約30cm下に位置し、31・23号建物より新しい24号建物により北西部を掘り込まれている。このように3軒が重複している。新旧関係は、31号建物→23号建物→24号建物である(切合関係は平面図の第107図に破線で図示した。)23号建物を調査している中で、23号建物の床面が、他の屋敷跡の調査例と異なり、地山の堅い土を床面としていないことに違和感を持った。あたかも周辺の土を盛り上げて平地を造り、そこに礎石を配置して建物が建てられているようであった。盛り上げたであろう23

号建物土間部分の土を部分的に掘り下げると、20～30cm下がほぼ平面をなしており、その面は他の建物にみられる土間に近い土であった。23号建物の下に別な建物が埋まっていることが推定できた。23号建物をはじめとして、他の大部分の建物は、天明泥流を除去することにより確認できたが、23号建物下にあると思われる建物は、それ以前の建物であることが明らかである。そこで23号建物調査終了後、23号建物の礎石や囲炉裏を除去し、31号建物を埋めていた厚さ20～30cmの土を除去し、調査を進めた。その結果良好な状態で多くの礎石・竈2基・囲炉裏5基・ロームを敷き詰めた土間・推定される馬屋等が明らかとなった。31号建物の上に造られていた23号建物より規模が小さく、建物の軸線が北西寄りであり、母屋としての機能を持った建物が確認された。

②31号建物(第111・112・191～194図、PL.52・110～112)

【建物の概要】11号屋敷跡の母屋であり、礎石を用いた建物である。北東の馬屋と思われる部分を24号建物により深く削られていた。大部分が31号建物と重複している。南北に長い建物であり、北側が土間で南側が板間と思われる。土間には竈、囲炉裏5基、ロームを貼った土間、推定される馬屋等があり、板間には石で囲まれた囲炉裏が2基造られていた。唐臼は確認できなかった。雨落溝は、建物の西側・南側で確認でき、東側でも一部確認できた。泥流下の遺構でないために、雨落溝内に浅間A軽石はなかった。

【規模】礎石は基本的に原位置を保って出土している。残っていた礎石等から南北方向に長い建物と思われる。礎石芯寸法は桁行(南北)14.72m×梁行(東西)6.44mである。北側の土間部分が5.52m(南北)×6.44m(東西)、南側の板間部分は、9.20m(南北)×6.44m(東西)であり、板間部分が3.68m(南北)ほど広い。

【所見】天明三年泥流下にあった23号建物の下に位置する一段階古い建物である。礎石建物であり、板間・推定される馬屋・竈・囲炉裏とも天明泥流下の建物と同じようである。この建物の上に造られている23号建物と規模は違うが構造的な違いはあまりない。31号建物は、なぜ埋まったのだろうか。31号建物は、西宮遺跡との境にある境沢に近くこの沢は時々氾濫し、多くの土砂を周辺に堆積させている。その土砂が堆積している境沢は現在周辺で最も高い位置となっている。この土砂により31号建物

は一度埋まり、その上に23号建物が造られ、30号建物は、そのとき境沢から少し離れていたため埋まらずに23号建物の段階でも引き続き使用されていたと考えられないだろうか。

(ア)馬屋(推定)(PL.52)

北東コーナー部分に馬屋を推定した。馬屋とする場合、他の建物では埋設桶(馬屋桶)そのものや抜き取られた跡が多くあった。しかし31号建物では、その部分は24号建物により削り取られており、桶があったとしても残っていない。また土間のロームが馬屋と考えられる範囲で削られて残っていない。その規模は2.40m×2.70mで馬屋の規模とほぼ一致する。しかしその範囲は重複している24号建物の範囲ともほぼ一致している。馬屋を推定して図示した。

(イ)1号竈(旧4号囲炉裏)(第113・114図、PL.52・54)

【位置・出土状況】3号囲炉裏の北西部に重複して確認された。確認時には多くの石が投げ入れられており、(第114図1号竈上面)用途は不明であった。石を除去すると炭や灰の面があり、その下に全面焼土化したU字状の掘り込みが確認された。調査段階では、4号囲炉裏として調査したが、竈の可能性が高いので1号竈として報告する。4号囲炉裏は欠番とする。

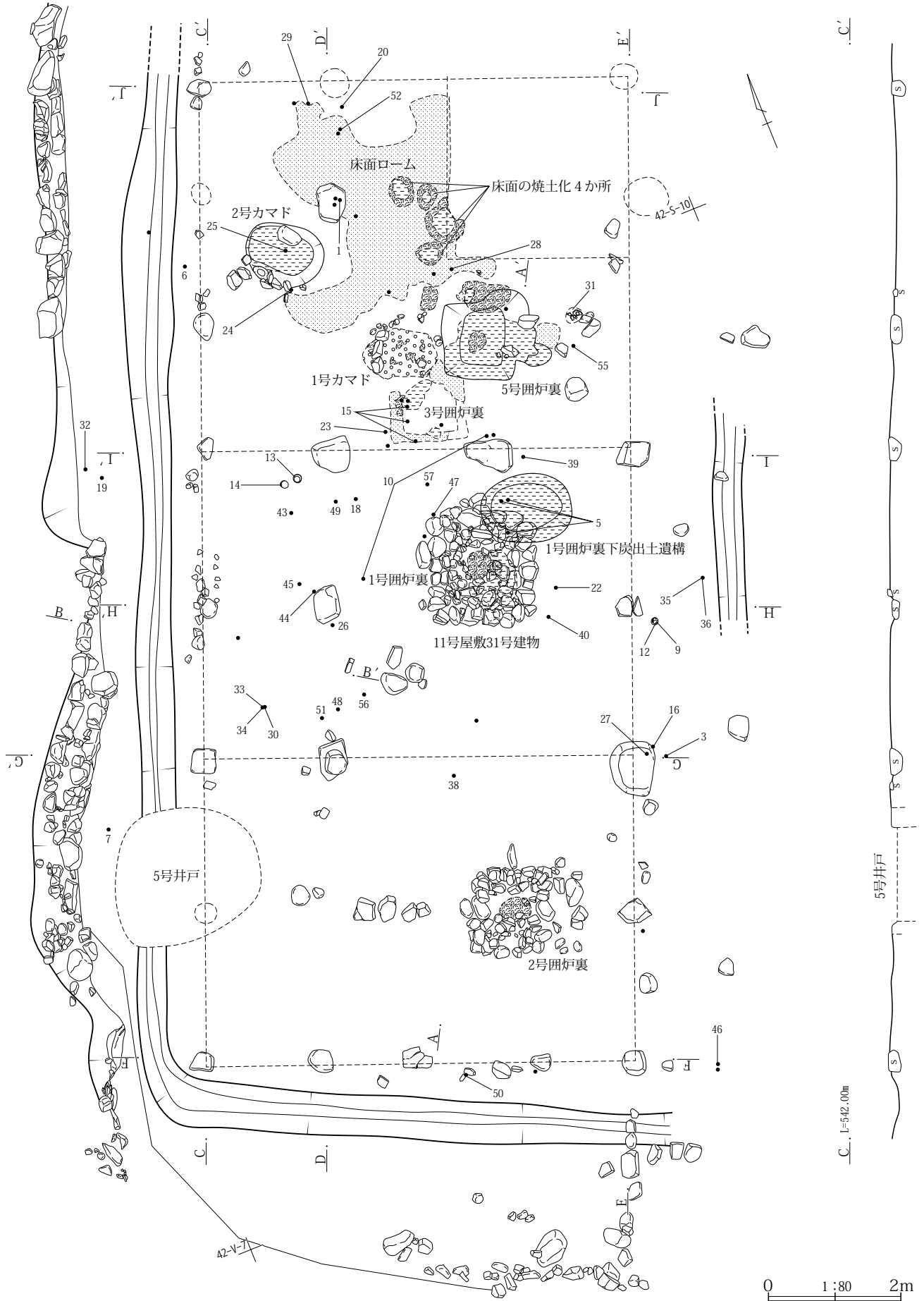
【構造・規模・形状】方形の3号囲炉裏と異なり、西側に20~30cmの石を3個並べている。また北側には同じような石が抜き取られた痕跡が北側に3カ所残っていた。炭や焼土化の範囲は70~90cmである。掘り込まれている全体の形は、方形ではなく円形である。これらの特色から、南東に重複する3号囲炉裏とは大きく異なり、竈の特色を持っている。土間を東西1.40m南北約1.10m四方浅いU字状に、掘り込み東西70cm南北約80cmの範囲が竈内面と思われ、炭・灰・焼土が多く残っていた。側壁に使われたであろう石は西側に3個、北側は抜き取られたであろう痕跡が3カ所残っていた。最も下面に厚さが6cmの焼土面、その上が厚さ6cmの灰を主とした層となっていた。竈内使用面である灰層上面は周辺の土間より8cm前後低くなっている。

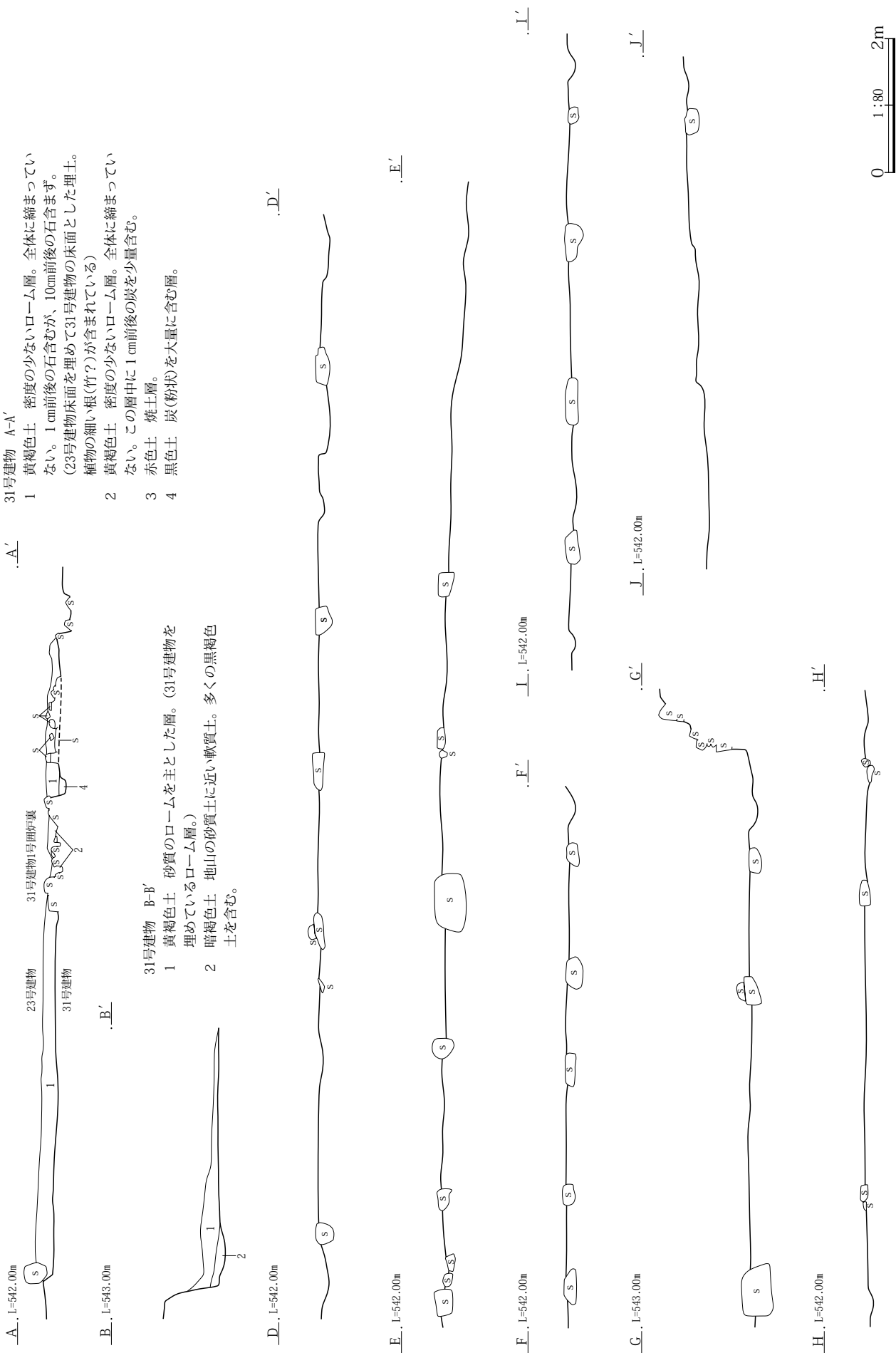
【所見】調査段階で囲炉裏として調査したが、整理段階で検討した結果、竈の特色を持っているために1号竈として報告する。3号囲炉裏と重複しており、1号竈は3号囲炉裏より新しい。2号竈より古いと思われる。

(ウ)2号竈(第113図、PL.53)

【位置・出土状況】土間の西側奥に位置する。竈部分を避けるように竈手前の土間部分には、ロームが厚く堆積している。竈部分は攪乱を受けているためか、床面より15~20cmほど深くなっている。そのため残りが悪く、細長い石で円形に囲った状態では残っていなかった。竈内より多くの炭が出土している。竈として疑問も残るが、竈として報告する。

【規模・形状】竈を石から計測すると幅(南北)約1.00m奥行き(東西)1.20mとなる。炭が残っていた部分の内径は幅(南北)約60cm奥行き(東西)1.00mである。竈燃焼部及び焚口手前部分は、土間レベルより15~20cmの深さで凹んでいる。

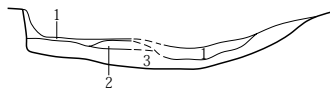
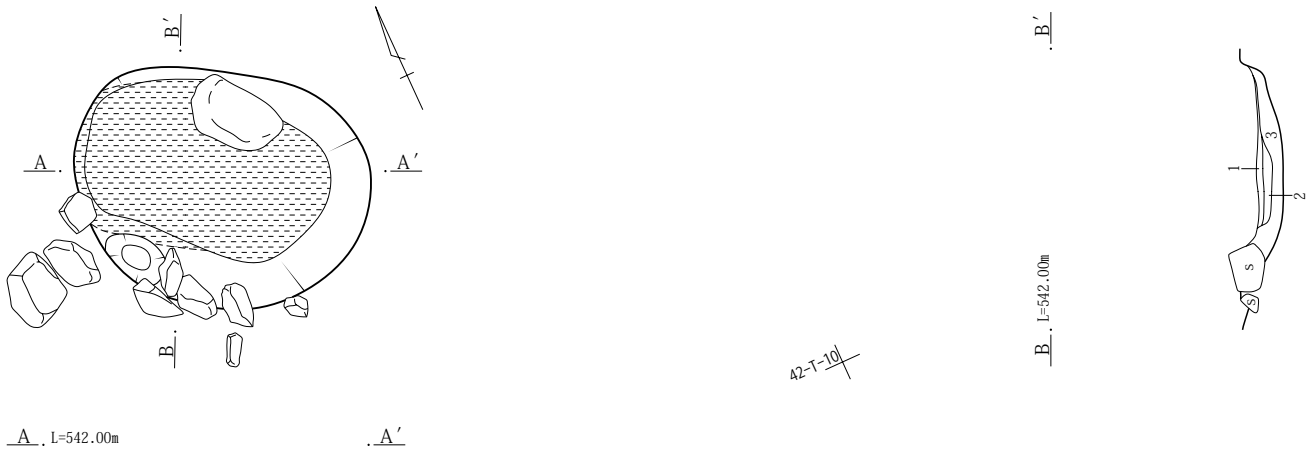




第112図 IV区11号屋敷跡 31号建物断面

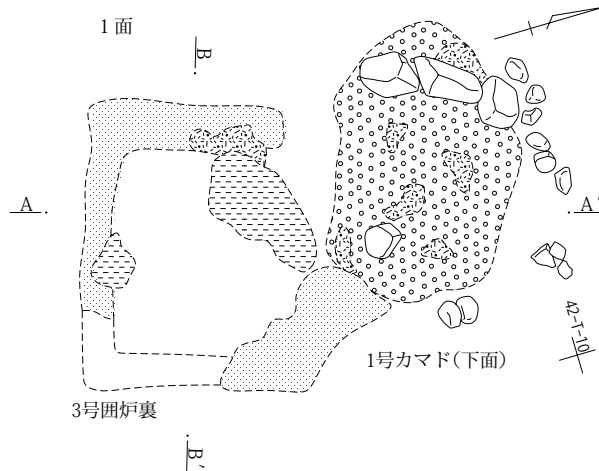
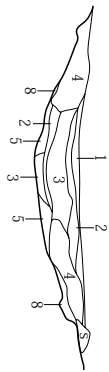
第3章 発見された遺構と遺物

2号カマド



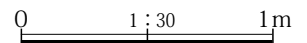
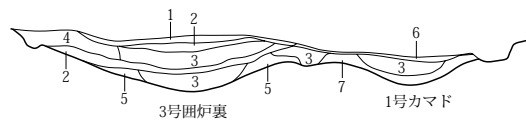
31号建物2号カマド A-A'・B-B'

- 1 黒色土 灰層中に多くの炭を含む。
- 2 灰白色土 灰を主とした層。炭含まず。
- 3 暗褐色土 地山の層。



31号建物3号囲炉裏・1号カマド A-A'・B-B'

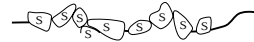
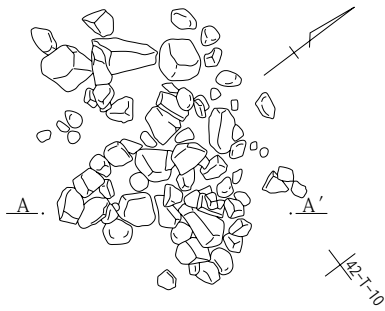
- 1 黒色土 炭を主とした層。
- 2 灰白色土 灰を主とした層。
- 3 赤色土 焼土層。
- 4 黄褐色土 ローム層。
- 5 暗赤褐色土 少量の焼土粒を含む砂質の層。
- 6 黒褐色土 灰層中に多くの炭を含む。
- 7 暗赤褐色土 少量の焼土粒を含む砂質の層。ローム粒含まず。
- 8 灰黄色土 灰黄色ローム。



第113図 IV区11号屋敷跡 31号建物 1・2号竈、3号囲炉裏

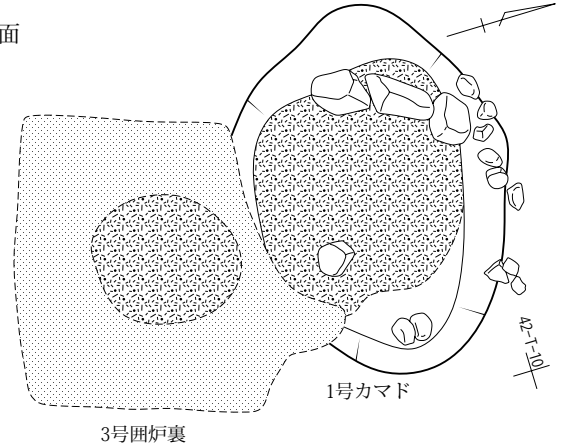
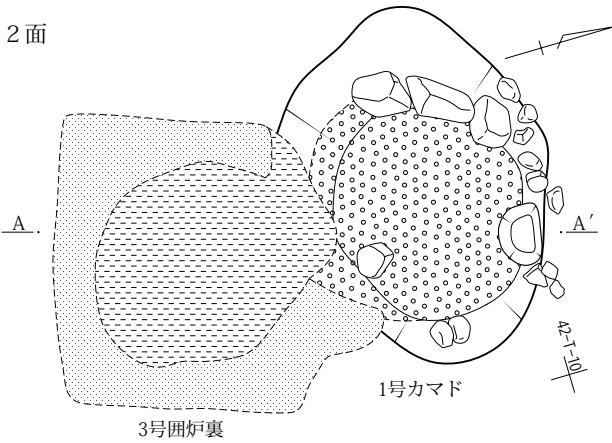
1号カマド上面

A. L=542.00m A'



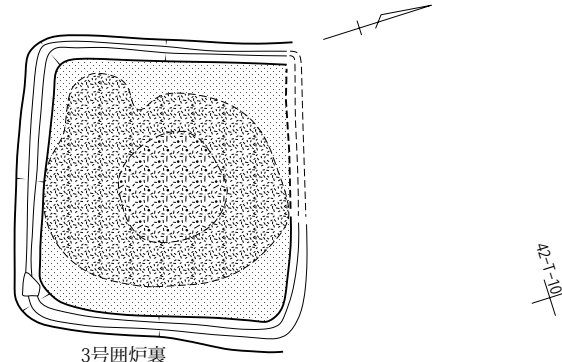
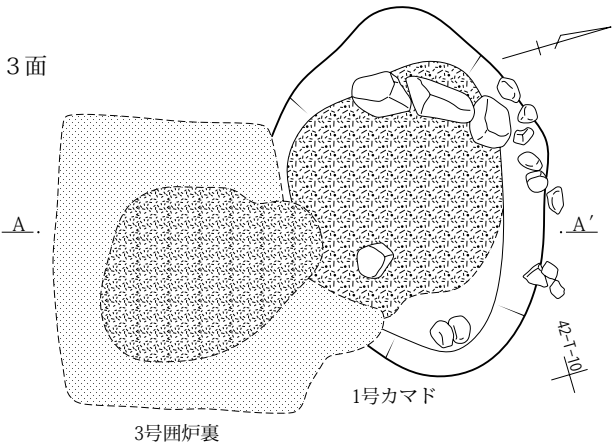
2面

4面



3面

5面

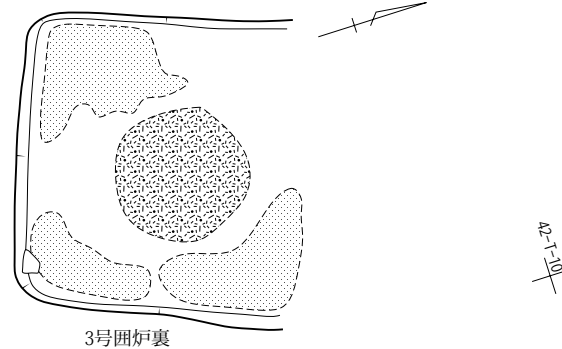


(工) 囲炉裏

囲炉裏が4基造られていた。1・2号囲炉裏は、外形で1.3~1.7m四方の範囲に20~30cmの石で方形に囲い内面を凹状にして、内計90cm前後の使用面を造っている。

これまでに調査してきた囲炉裏では凹部に、土やロームを詰めることもあるが、小さな石を詰めることもある。その上に灰を置いて囲炉裏の使用面としている例や、あまり灰が残っていなかった例もある。残りのよい囲炉裏で観察すると、内計90cmの囲炉裏で直径60cmの範囲が火や炭等を焚いて使用されていたことを示していた。石で積み上げられた囲炉裏面は、土間より20cm以上高い位置

6面



0 1:30 1m

第114図 IV区11号屋敷跡 31号建物 1号竈上面、1号竈、3号囲炉裏

となっている。おそらく方形の枠を取り付け板間で使用されていたものと思われる。一方、板間でなく土間で使用された囲炉裏も多い。3・5号囲炉裏が該当する。この囲炉裏も方形に作られ、規模は90cm前後と同じである。しかし作られた場所が板間でなく土間であり、土間を方形に掘り込んで造られている。

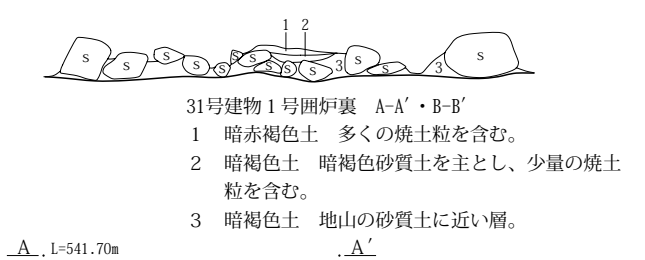
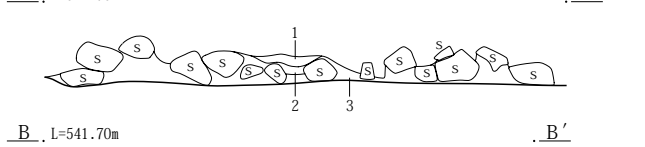
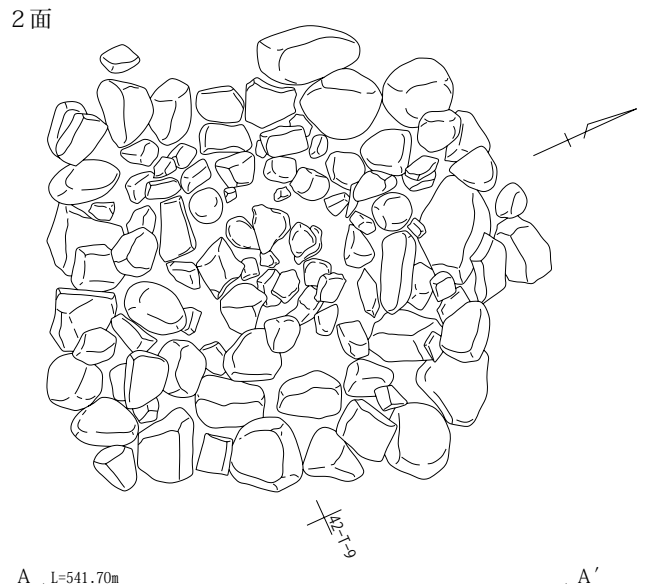
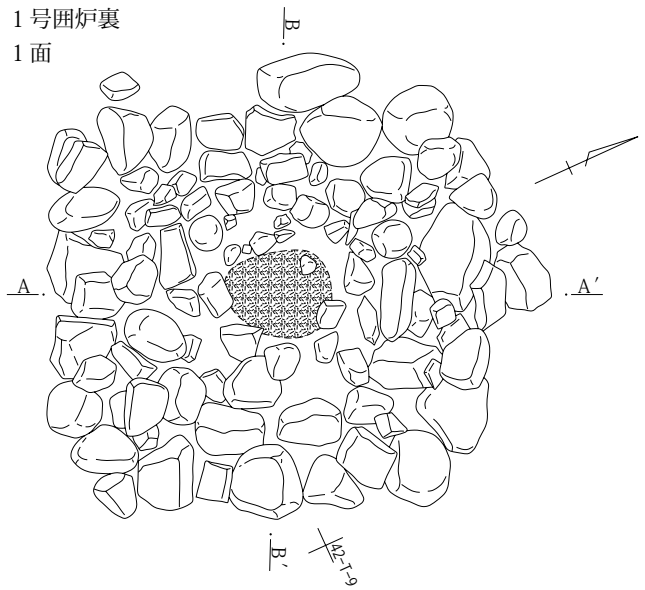
・1号囲炉裏(第115図、PL.53)

【位置・出土状況】建物ほぼ中央部に位置する。囲炉裏は石を組んで高く方形に造られている。囲炉裏としての使用面は、土間より高い面である。

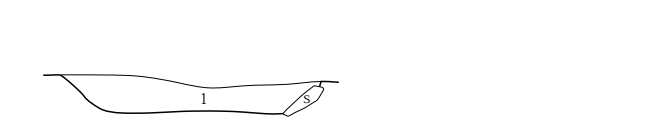
【構造・規模・形状】床下の土間部分の石を方形に組み、北側にはその石を補強するように、同じような大きさの石を用いているが数は少ない。20~30cmの石で方形に囲い、外形は東西南北とも1.70m前後、10~20cmの小さな石が内部に詰めてある凹状の内径は90cm前後である。積まれた石の高さは、20cm前後である。凹状の内部には8号屋敷跡16号建物の1号囲炉裏と異なり、軽石やロームは含まれていなかった。中央部の直径50cmの範囲に、灰はほとんどなく焼土が残っていた。焼土の厚さは6~8cmである。焼土のある面は、囲炉裏を囲んでいる周りの石の上面より低い位置である。8号屋敷跡16号建物や9号屋敷跡18号建物の囲炉裏は灰が厚く堆積していたが、ここでは灰層がなかった。

・1号囲炉裏下炭出土遺構(第115図、PL.53)

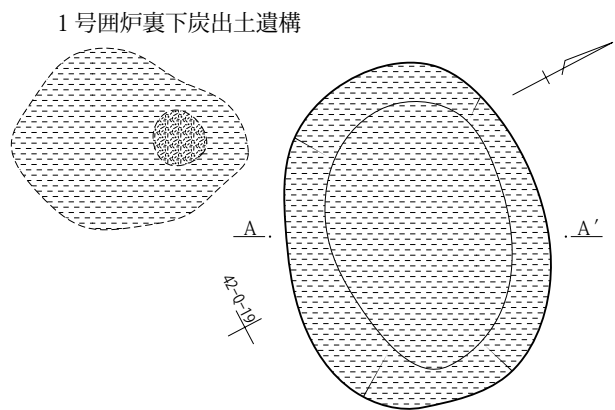
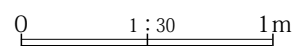
1号囲炉裏下から、ブロック状の炭を含み楕円形の遺構と、炭と焼土を含む小さな楕円形の遺構が出土した。規模は小さな楕円形の遺構が長径94cm短径70cmで一部焼土を含む、北側のやや大きな遺構が長径139cm短径106cm



- 31号建物 1号囲炉裏 A-A'・B-B'
- 1 暗赤褐色土 多くの焼土粒を含む。
 - 2 暗褐色土 暗褐色砂質土を主とし、少量の焼土粒を含む。
 - 3 暗褐色土 地山の砂質土に近い層。



- 31号建物 1号囲炉裏下炭出土遺構 A-A'
- 1 黒色土 暗褐色土中に小破片と粉状の炭を大量に含む。



第115図 IV区11号屋敷跡 31号建物 1号囲炉裏、1号囲炉裏下炭出土遺構

深さ14cmであった。1号囲炉裏以前の遺構であり、用途は不明である。

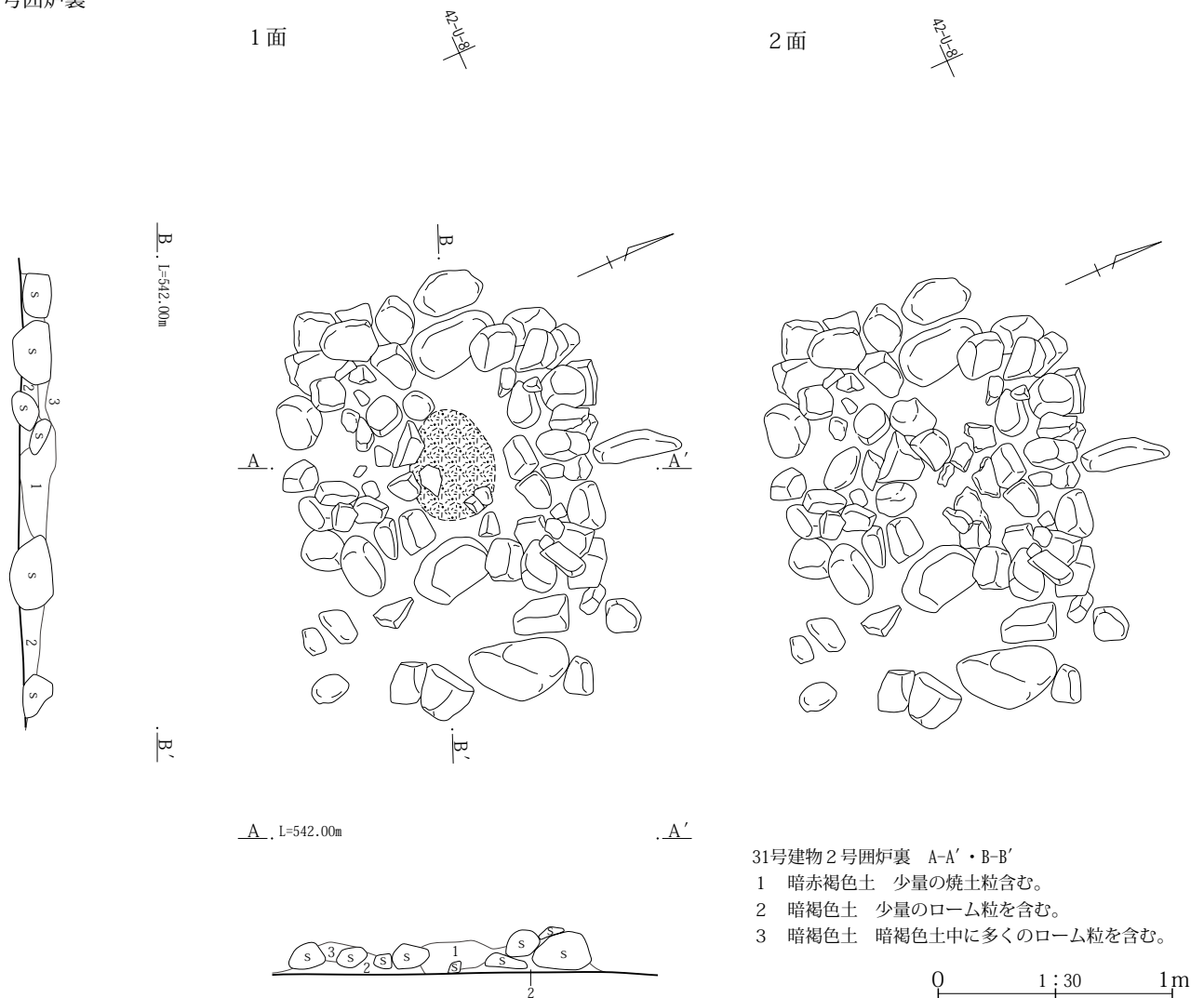
・2号囲炉裏(第116図、PL.53・54)

【位置・出土状況】建物南側に位置する。囲炉裏は石を組んで高く方形に造られている。囲炉裏裏としての使用面は、土間より高い面である。規模は少し小さいが、1号囲炉裏に似ている。

【構造・規模・形状】床下の土間部分を約1.30m四方の範囲に20~30cmの大きな石を、方形に組んでいる。積まれた石の高さは、20cm前後である。内側には、1号囲炉裏

と同じように10~20cmの小さな石を内部が凹状になるように詰めている。凹状の内径は90cm前後で積まれた石の高さは、20cm前後である。凹状となっている内側中央部の40~50cmの範囲に、灰はほとんどなく焼土が残っていた。焼土の厚さは8cm前後である。焼土のある面は、囲炉裏を囲んでいる周りの石の上面より低い位置にある。8号屋敷跡16号建物や9号屋敷跡18号建物の囲炉裏は灰が厚く堆積していたが、ここでは灰層がない。1号囲炉裏より小さく造られた囲炉裏である。

2号囲炉裏



31号建物 2号囲炉裏 A-A'・B-B'
 1 暗赤褐色土 少量の焼土粒含む。
 2 暗褐色土 少量のローム粒を含む。
 3 暗褐色土 暗褐色土中に多くのローム粒を含む。

0 1:30 1m

第116図 IV区11号屋敷跡 31号建物 2号囲炉裏(1・2面)

・3号囲炉裏(第113・114図、PL.54)

【位置・出土状況】土間と板間の境となる土間部分に位置する。床面とほぼ同じ面に、1.18m四方の大きさに15～20cm幅のロームがロ字状に現れ、一部が焼土化していた。北西部分に一部重複して多くの石が投げ入れられたような状態で、1号竈が確認された。

【構造・規模・形状】土間に作られた囲炉裏と思われる。土間を約1.20m四方浅いU字状に、縁辺部は9cm、中央部は深さ25cm前後掘り込む、囲炉裏の枠として長さ1.18m太さ約9cm四方の角材を埋め込んだような痕跡が残り、その内側にロームをほぼ全面に厚さ5～10cmほど敷き詰めている。炉の中央は、幅45cm厚さ7～8cm焼土化していた。焼土の上には、幅約76cm厚さ3cmの灰が残り、その上には多くの炭が黒色土とともに出土した。囲炉裏の使用面である灰層上面は囲炉裏周辺の土間より8cm前後低くなっている。

【所見】土間に造られた囲炉裏としては、囲炉裏に木枠やロームを全面に貼った様子が見られる。北側に重複している1号竈が3号囲炉裏の北西コーナー部分を掘り込んでおり、新しいことを示している。

・5号囲炉裏(第117図、PL.55)

【位置・出土状況】土間部分東側に位置する。3号囲炉裏

と1号竈調査終了後、床面覆土下に炭の層があることがわかり床面の土を除去して、存在が確認された。

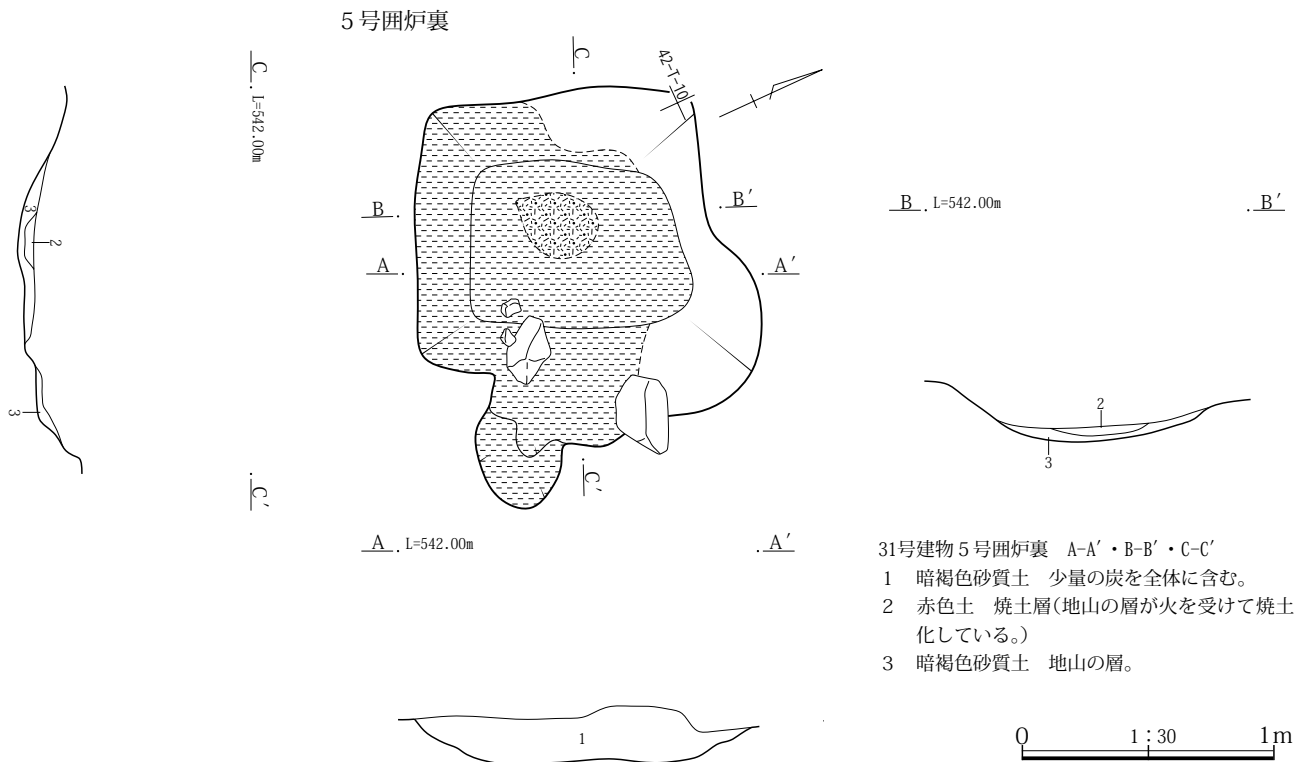
【構造・規模・形状】土間を約1.10m四方浅いU字状に縁辺部は10cm、中央部は深さ20cm前後掘り込む。3号囲炉裏のような枠の痕跡は残っていなかった。またロームを敷き詰めることもなく炉内には攪乱されていた北側以外のほぼ全面に粉状の炭があり、中央部約25cm範囲が焼土化していた。灰層は残っていなかった。焼土上面は囲炉裏周辺の土間より20cm前後低くなっている。31号建物が最終的に使用されていた段階では、すでに廃棄され埋まっていたものである。

(オ)土間のローム面(第111図)

土間中央部にロームを貼って、平らな床面を造っている部分がある。貼られているロームの厚さは6cm前後、貼られている範囲は東西3.00m南北3.50mである。

(カ)床面の焼土化(炭・焼土範囲)(第111図、PL.55)

土間でロームを貼った部分で床面が円形に焼土化していた場所が4か所ある。この部分は図上に炭・焼土範囲として図示した。焼土化の大きさは15～50cmと様々である。焼土化している厚さは10cm前後である。土間で火を焚いたのであろうか。



第117図 IV区11号屋敷跡 31号建物 5号囲炉裏

③石垣

【位置】10・11号屋敷跡は、ほぼ同じ敷地内に造られている。石垣についてまとめて報告する。屋敷跡北東部分に27号石垣、西側に32・33号石垣がある。27号石垣は、水場から繋がる11号道西側に築かれた石垣でもある。33号石垣は30号建物西側で造られ、23号建物西側の中央付近で西側の畑に登る斜面の石垣となり、段差がなくなると石垣もなくなっている。32号石垣は、23号建物西側の中央付近で、屋敷跡西側の畑に登る斜面の東側の石垣として始まり、23号建物南西コーナー部分で、ほとんど無くなる。これらの石垣は、すべて天明泥流下で確認されている。そのため23号建物や30号建物の段階には積まれていた。しかし32号石垣は、31号建物の敷地面より高い位置から積み始められており、さらに31号建物西側の雨落溝の上に位置している。(PL.52、第118図H-H'参照)明らかに32号石垣は、31号建物より新しい段階に造られている。32号石垣は、31号建物の段階には積まれていなく、31号建物が土砂に埋まり23号建物を造る段階で、積まれたものと思われる。33号石垣も同じように31号建物の段階では、積まれていなかったことが考えられるが、31号建物との重複部分が少ないので、不明である。石垣はすべて自然石の野面積みであり、細長い石を横方向に積む平積みである。

(ア)27号石垣(第118図)42区Q・R-11~14グリッドに位置する。

【規模・構造】石垣は20~40cmの大きさを自然石を中心に用いている、中には幅70cmの大きな石も用いている。平積みで2~3段積んでいる。石垣の規模は東西方向10.55m、高さは30~50cmである。

(イ)32号石垣(第118図、PL.52・55)42区U~W-7~10グリッドに位置する。

【規模・構造】南北方向の石垣は、30~40cmの大きさを自然石を平積みで2~4段積んでいる。石垣の規模は長さ12.7m、高さは70cm前後である。東西方向の石垣は、40~60cmの大きさを自然石を1段並べるように積んでいる。長さは4.60mである。

(ウ)33号石垣(第118図)42区T~V-10~14グリッドに位置する。

【規模・構造】石垣は大きさが不揃いである。15~30cmの小さな石を多く、70~90cmの大きな石を少し用いて積ん

でいる。30号建物西側の石垣は、幅20cm以下の小さな石垣が多く、幅90cm前後の石も少量使っている。川原石でなく地山から掘り出した石を多く使用していると思われる。大きな石は1段であるが、小さな石は3~4段積んでいる。石垣の規模は東西方向15.4m、高さは20~50cmである。

④5号井戸(第119・194図、PL.55・112)42区U・V-8・9グリッドに位置する。

【帰属時期】天明三年以降

【位置・確認状況】23号建物南西コーナー部分に5号井戸が掘られていた。確認した段階は、23号建物の礎石とほぼ同じ確認面であり、23号建物を埋めた泥流の上から掘り込まれたものではない。井戸の石垣の積み方は、天明泥流下で大部分の石垣で共通する細長い石を横方向に積む、平積みではなく斜めに積んでおり、谷積に近い積み方である、また積まれている石や、井戸を掘り込み中に埋もれた石の中に、天明泥流に含まれている「通称浅間石」が使われている等により、天明以降に造られた井戸である。23号建物の板間に作られた井戸ではない。

【構造・規模・形状】中央部を深さ2.00mほど掘り込み、底部から井戸の直径1.00m前後になるように2.00mの高さまで石垣を積んで作られている。井戸石垣外側は、南北2.30m東西2.50mの範囲を、1段前後の深さに掘り込み、石垣が崩れないようにするためか多くの石を並べている。使われている石は、幅と長さとも20~30cmの大きさを丸石の自然石が多く、平らで細長い石は使用されていない。

⑤出土遺物

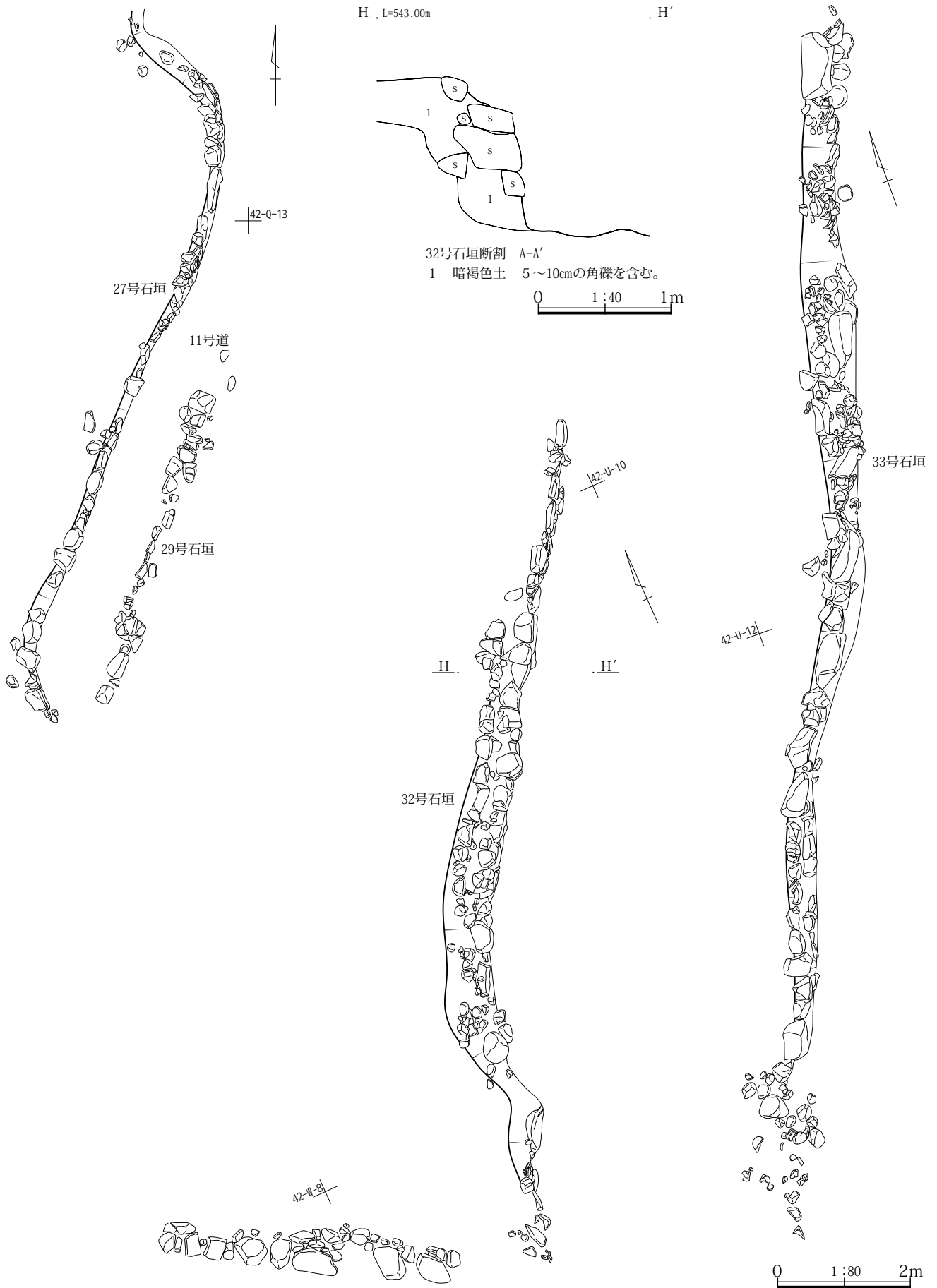
図示した遺物中、5号井戸のすり鉢(1)は近現代の製品である。

非掲載遺物は以下の通りである。

31号建物:江戸時代の磁器37点164g、陶器79点1381g、近現代陶磁器4点44g。鉄製品片と銅製品片各1点。珪質粘板岩製硯片1点。植物遺存体は出土していない。

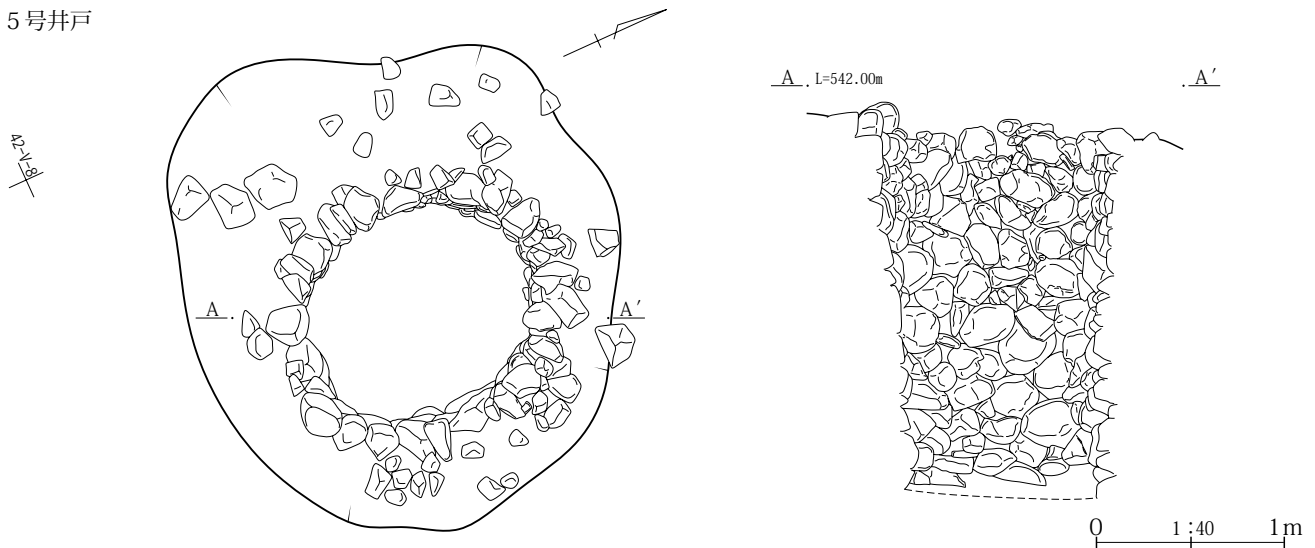
27・32・33号石垣:江戸時代の磁器4点57g、陶器7点44点が出土したのみである。

5号井戸:非掲載遺物はない。



第118図 IV区9・10号屋敷跡 27・32・33号石垣

5号井戸



第119図 IV区11号屋敷跡 5号井戸

(9)24号建物(第120・194・195図、PL.56・112)

【所属時期】天明泥流被災後

①24号建物の調査概要 42区R～T-9～12グリッドに位置する。

24号建物の位置や地形等については、10号屋敷跡の中で、石垣については、11号屋敷跡の中で説明してある。水場の問題は8・9号屋敷跡の項で詳しく述べたのでここでは説明を省く。24号建物は、天明三年段階の建物である23号建物の北東部を深さ65cm、天明以前の建物である31号建物の北東端部を深さ40cmほど掘り込んで造られている。3軒が重複しており新旧関係は、31号建物→23号建物→24号建物である(切合関係は平面図の第107図に破線で図示した。)24号建物は囲炉裏が特別に大きい、建物の規模が小さく土間と板間の区別がわからない。また家の構造は4本の掘立柱建物と思われ、他の屋敷跡の建物と構造が大きく異なっている。24号建物は、天明泥流により埋まった23号建物を掘り込んで造られており、天明泥流被災後の建物であると考えられる。これまで天明泥流被災後の遺構として、23号建物南西部にある5号井戸、8号屋敷跡16号建物北西部にある4号井戸、4号井戸から南西に延びている25号石垣、石捨て場(ヤックラ)から南に延びている34号石垣等で確認されているが、建物は初めてである。一方、天明泥流以前の建物は23号建物の下に位置する31号建物で確認されている。24号建物は、前述のように、南東側の23・31号建物を大きく掘

り込み、南側に大きな囲炉裏、北西寄りに小さな竈と思われる施設を持つ建物である。他の母屋とした建物や、付属建物とも大きく構造が異なっており、建物の範囲を区画する石垣は無く、雨落溝も不明で建物の範囲も明らかでない。4カ所柱穴と思われる掘り込みがあり、4本柱の建物と思われる。屋敷跡ではなく24号建物として報告する。

【規模】建物を推定する根拠は、南側と西側の掘り込み面、4本の柱穴、囲炉裏と竈の配置等である。これらから規模等を推定するのは難しい。参考までに点線で建物範囲を推定した。推定規模は東西4.60m、南北7.30mである。
(ア)竈(第120図、PL.57)

【位置・出土状況】23号建物北の土間西側に位置する。床面から床下部分まで楕円形に焼土化した部分が現れ、囲炉裏または竈として調査を進めた。巨大な方形の囲炉裏が南端部分にあるので、石で囲われてはいないが竈の可能性が高いと判断し竈として調査した。竈内上層には炭と灰、その下は広い範囲が焼土化していた。

【規模・形状】竈の掘り込み面は東西80cm、南北60cm、焼土化面は東西50cm、南北30cm。竈中央部で炭と灰のある面は、土間レベルより約10cm低くなっている。

【構造・所見】石で周辺を囲んだ竈では無かった。多くの焼土の残存から長時間使用された竈と思われる。

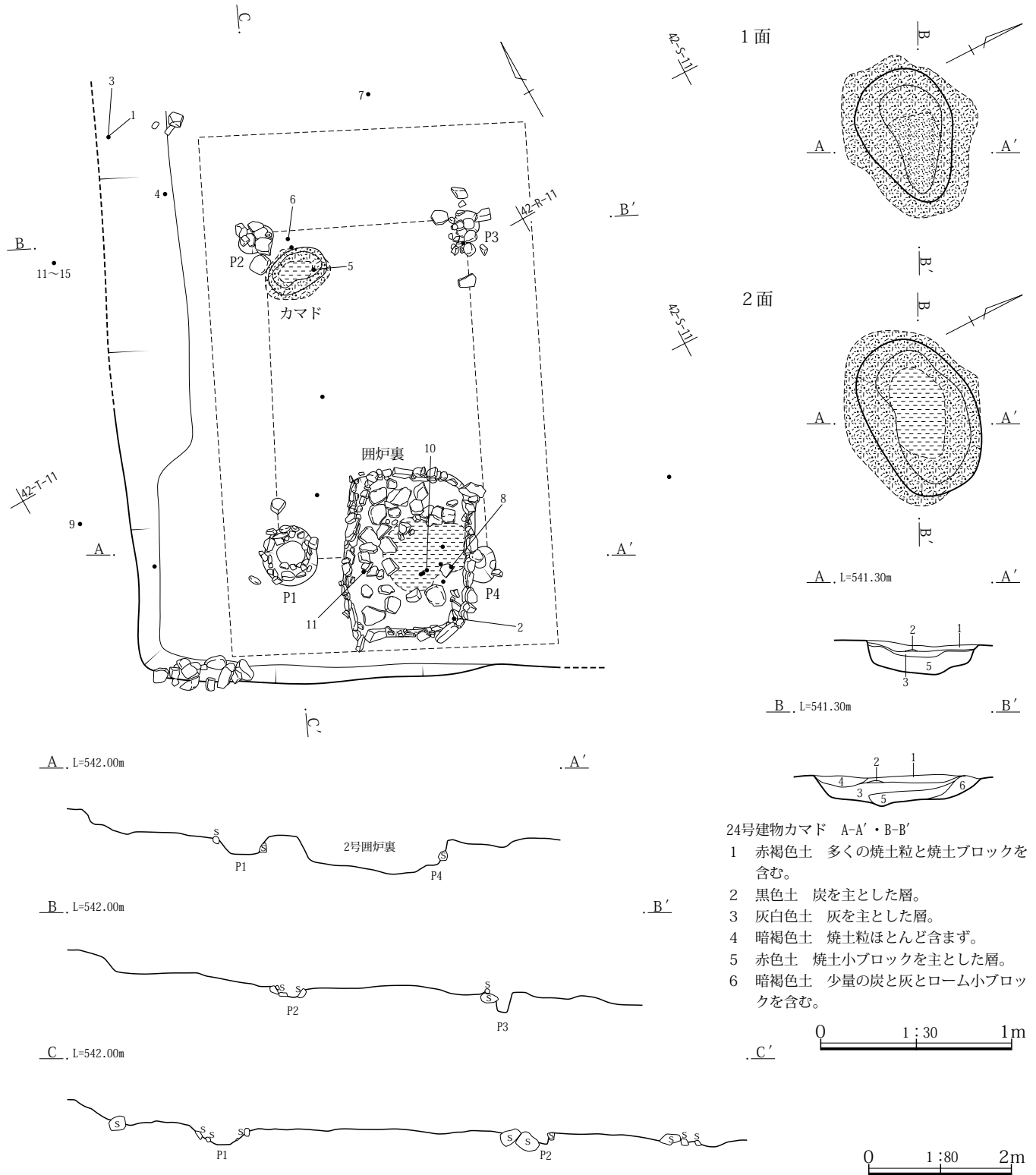
(イ)囲炉裏(第121・122図、PL.57・58)

【位置・構造・規模】建物南端に、長方形に大きく掘り込んで石を組んだ遺構が出てきた。規模は大きく床面東西

第3章 発見された遺構と遺物

1.80m、南北2.35m、深さ約40cmである。掘り込んだ壁面には、15~30cmの石を2段前後積んでいる。幅40cmの大きさの石は1段で壁面としていた。底面は、30cm前後の平石を敷き詰めており、中央部から東側の壁面に約90cm四方、石を敷かない空間を確保する。そこを囲炉裏の中心(燃烧部)として、調理や暖房等の施設として使用

したものと思われる。燃烧部である囲炉裏の中心は、長期間使用されており、少なくとも焼土面が2面確認されている。最も上にローム混じり少量の焼土粒と炭を含む層であり、その周辺は多くの炭を含む層となっており、中央の黄褐色土の下に熱で焼した赤色土がある。さらに下には少量の焼土粒と細かな炭を含む層がある。以下同

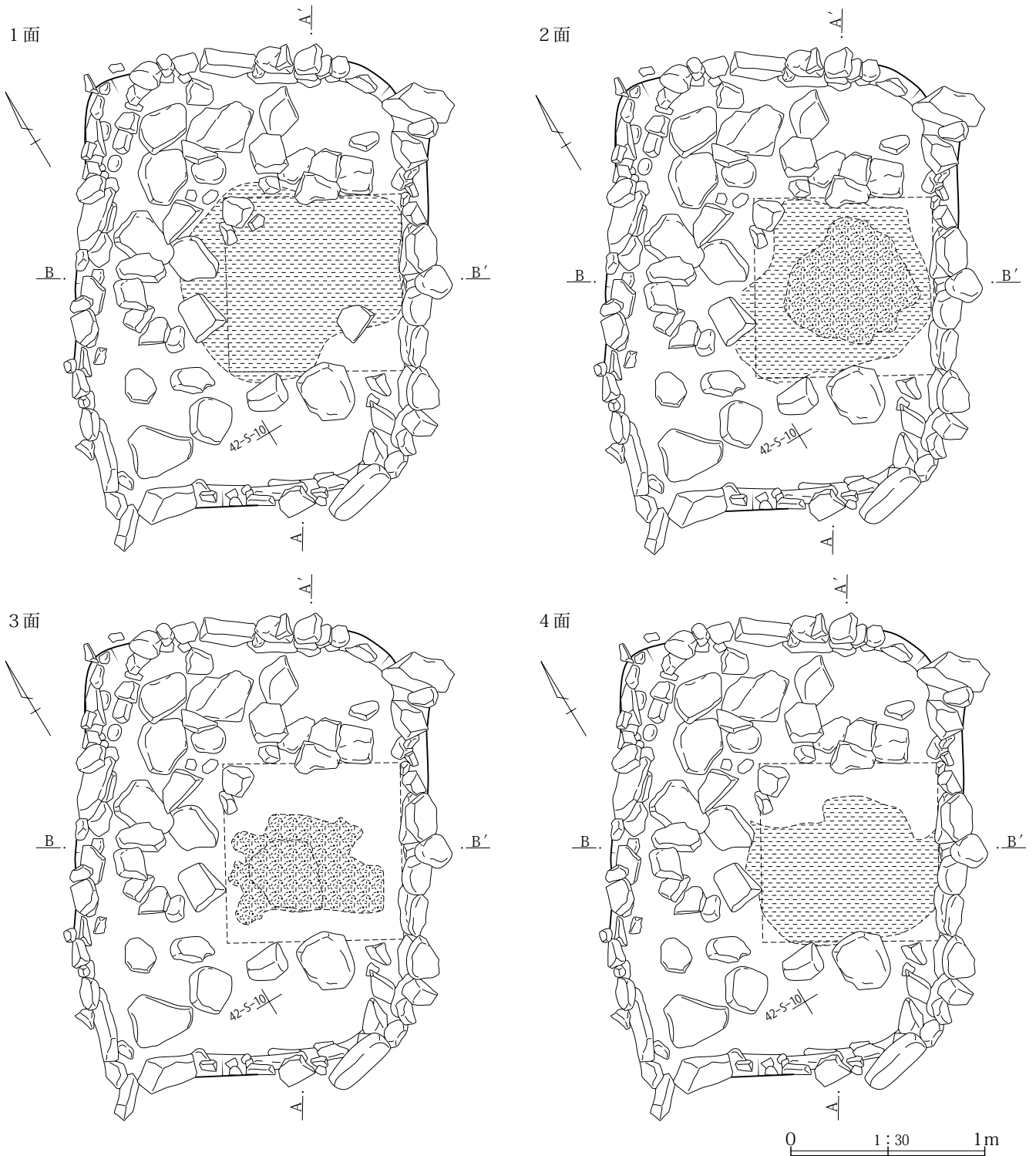


第120図 IV区24号建物 竈

じような土層が繰り返し堆積している。この様子は、残りのよい8号屋敷跡16号建物の1号囲炉裏に共通する部分がある。大きな囲炉裏を持つが、建物の規模が小さく土間と板間の区別もないので、母屋としての機能は持たない建物と思われる。竈は貧弱であり囲炉裏を中心とした建物で、村の集会場の性格を持った建物の可能性があるのではないだろうか。

②出土遺物(PL.58)

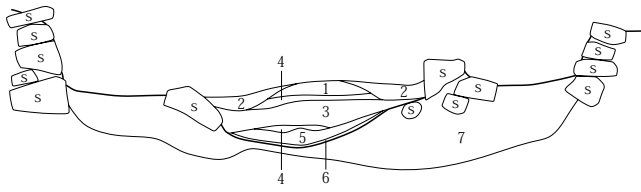
図示した中で3の端反碗は天明期以降の製品であり、24号建物出土片と32号石垣出土片が接合している。掲載しなかった遺物は、江戸時代の磁器9点100g、陶器13点141gである。



第121図 IV区24号建物 囲炉裏(1～4面)

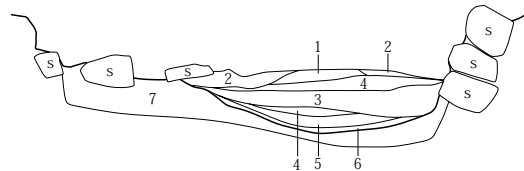
A, L=541.30m

A'



B, L=541.30m

B'



24号建物囲炉裏 A-A'・B-B'

- 1 黄褐色土 多くのロームと少量の灰と炭を含む。
- 2 黒色土 多くの炭と少量の焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 少量の焼土粒と炭を細かい層状に含む。
- 4 赤色土 焼土層
- 5 暗褐色土 多くのローム粒と少量の焼土粒と炭を含む。
- 6 黒色土 粉状の炭を主とした層。
- 7 黄褐色土 1mm前後の砂を主とした層。地山。

0 1:30 1m

第122図 IV区24号建物 囲炉裏断面

(10)25号建物(第123・195図、PL.58・113)

①25号建物の調査概要 42区U～W-5・6グリッドに位置する。

【位置・構造】平成26年度調査区最南端に位置する。25号建物南には、川原畑村の上村につながる道があり、道の西側には西宮遺跡と東宮遺跡の境に流れる境沢が流れている。25号建物は、道路下まで伸びており調査できたのは北側部分であった。25号建物は小さな建物と思われる。立地する場所は、境川が時々氾濫して土砂が堆積している場所で、扇中央部に相当する場所と思われる。地形的に北西が高く、吾妻川に近い南西側が低くなっている傾斜面に位置している。傾斜面の高低差は、25号建物の立地する場所で10.0mの距離で1.45m南西側が低くなっている。その傾斜地に建物を建てるために、低い南西側に幅35～55cmほどの大きな石をL字状に並べ、その内側にも20cm前後の石を並べて土留めとしてその内側に土盛りで平らな敷地を造成している。造成面の中に大量の石が並べられ、その石を囲むように雨落溝と思われる溝が囲っていた。石敷き中央部に20×40cmほどの範囲に多くの炭とわずかな焼土が確認された。炉と思われる。建物の礎石や柱穴はなかった。南側土層断面で観察すると、表土から50～100cm道路面造成等に伴う盛土、その下に旧表

土層と表土に近い暗褐色土、その下の南側に天明泥流が残っておりその下にわずかに浅間A軽石が残っていた。天明泥流下の遺構である。

【規模】礎石や柱穴が無いので雨落溝内側の大きさと測定する。長軸4.00m短軸1.92m雨落溝幅40～70cm深さ10cm。内部に置かれた大量の石の大きさは、10～15cmのほぼ一定した大きさの石が多かった。

【所見】屋敷跡と少し離れた場所に、斜面を造成して建てられた小さな建物と思われる。中央部に炉と思われる施設があった。床面上に大量の石が持ち込まれており、その目的は不明である。雨落溝に浅間A軽石は残っていなかったが、畑との境にある建物北側の溝中には多くの浅間A軽石が残っていた。天明泥流が25号建物南の一部に残っているが、天明泥流は建物の一部を埋めた段階で止まっている。建物の大部分は天明泥流に埋まっていないと思われる。

②出土遺物

図示し得たのは磁器小皿1点(1)と陶器すり鉢片1点(2)のみである。1の磁器小皿は天明期以降の製品であろう。

非掲載遺物は、江戸時代の磁器12点59g、陶器3点16g、近現代陶磁器5点114gのみであり、石製品や金属製品は出土していない。



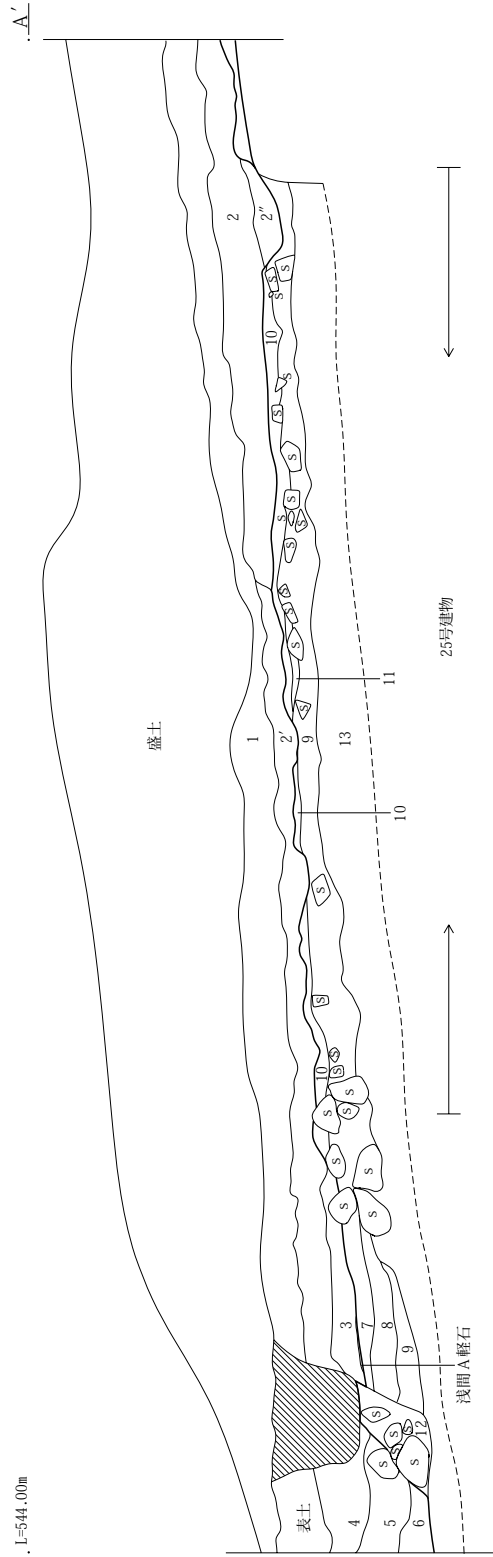
25号建物 A-A'

- 1 表土層
- 2 暗褐色土 北側ほど黒味が強い。
- 2' 2層より漸移的に変化。やや明るい色調を呈す。
- 2'' 暗褐色土 2'層よりやや暗い色調を呈す。
- 3 天明泥流
- 4 黄褐色砂層
- 5 黄褐色砂層 4層よりやや暗い。下位に砂がラミナ状に堆積。

※4層は昭和10年の山津波？

- 6 黒色土 黒味が強くボソボソしている。炭焼窯の灰を多く含むように見える。
- 7 暗黄褐色土 ロームBを含む。
- 8 黒色土とロームRの混土層。
- 9 暗褐色土 小礫、ロームRを含む。
- 10 暗褐色土 ロームブロック混じり。粘土状
- 11 焼土層 白色粘土、黄褐色ロームを含む。最下部に薄い灰が堆積する。
- 12 暗褐色土 大小の石を含む。
- 13 暗褐色土 2層より明るく、黄味が強い。

A. I=544.00m



第123図 IV区25号建物

(11) 畑

①畑の概要

畑の概要について報告し、次に個々の畑について報告する。Ⅰ・Ⅳ区において天明三年の泥流下から多くの畑が確認されている。標高の低い調査区東側は、道路に近く屋敷跡が多く造られており畑は少ない。一方、西側は標高が次第に高くなり、調査区西端は急傾斜面となっている面まではおそらく全面畑として作られていたであろう。しかし標高542.5m以上の場所では天明泥流が浅く耕作面の多くは残りが悪く畑面の確認はできなかった。

これらの畑は、天明三年八月段階での畑である。天明三年以前の畑としては、30号畑の下から耕作痕が一部確認されているが、確認できた範囲は狭かった。天明泥流下の畑の報告を行い、最後に天明泥流下の畑以前の畑を報告する。

(ア)畑の造られている位置

平成26年度に発掘調査した畑は、調査段階で番号をつけ17面の調査となった。あくまでも調査上便宜的につけた番号である。耕作されている畑は、大きく2つのグループに分けられる。

(a) 屋敷跡内あるいは屋敷跡に近接して作られている畑 (5・12・27・28・29abc・31・34・35・36・38～41号畑 13枚)

特色：規模が小さく畝サクの幅が大きい。円形平坦面は基本的に存在しない。明治6年の壬申絵図には、基本的に畑として記録されていない。

(b) 西側の広大な畑地帯から屋敷跡の近くまで続いている畑 (30・32・33・37号畑 4枚)

特色：規模が大きく畝サクの幅が狭い。円形平坦面を伴うことが多い。明治6年の壬申絵図には、基本的に上・中・下畑として記載されている。

(イ) 畝サク幅の違いによる区分

畑は、①畝サクの間隔が45cm以下の30・32・33・37号畑②畝サクの間隔が45cm以上70cm以下の12・28・31・34・35・36号畑③畝サクの間隔が71cm以上の5・29abc・39号畑④畝サクの間隔に一定性が無く、規模も非常に小さな屋敷跡内の畑が27・38・40・41号畑、①～④の4種類に分けられそうである。

①の畑は屋敷跡から少し離れたところに位置し、広い面

積を確保して大規模に作られている。②と③の畑は屋敷跡と屋敷跡の間や屋敷跡に近い位置にあり、一定の畑の規模がある。作られる作物の違いか、畝サクの大きさが少し異なる。④は屋敷跡内の空き地を利用したような小さな野菜畑か。

②明治6年の壬申地引絵図との比較(第214図)

発掘調査された遺跡全体図と明治6年の壬申字引絵図を比較検討してみると、道路・水路・屋敷跡・畑との位置がほとんど一致している。地図に記録されている畑の等級を見ると、地図と同じ位置にあると思われる30号畑は下畑、32・33・34・35・36・37号畑は中畑となっている。他の5・12・27・28・29abc・38号畑は、畑として記録されていない。31・39・40・41号畑は不明である。

③調査された畑

5号畑(第124図、PL.60・61) 42区G～I-6～8グリッドに位置する。

2号屋敷跡西部に位置し西側には6号道、南側には12号畑、その南は8号道となっている。屋敷内の畑であり、畑の東側大部分は平成19・20年度に発掘調査され、報告書の中で報告されている。平成26年度の調査では西側を発掘している。畝間は平均81cmと広い。

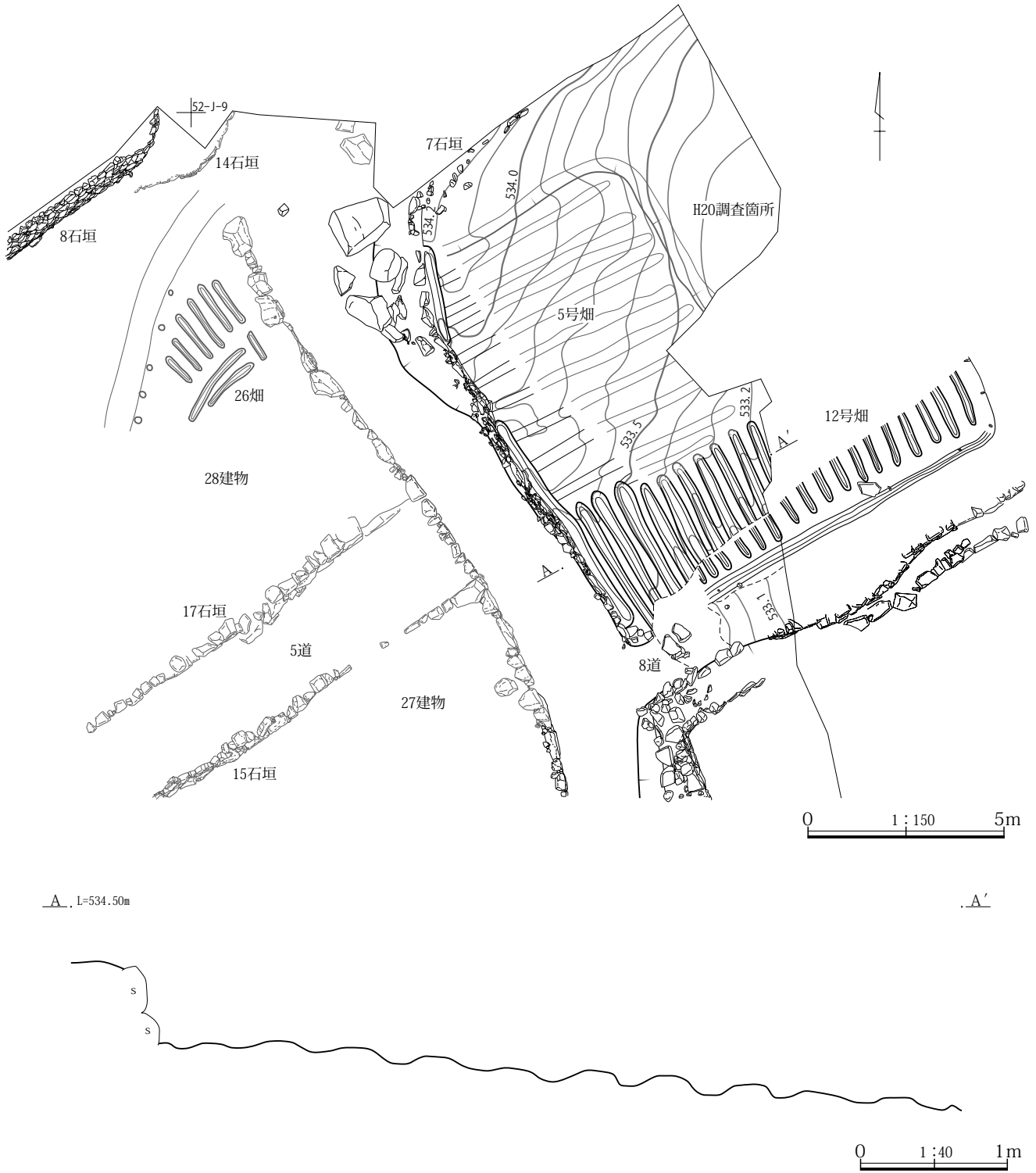
12号畑(第124図、PL.60・61) 42区F～H-6・7グリッドに位置する。

2号屋敷跡南西部に位置し、北側の5号畑に隣接する屋敷内の畑であり、畑の東側大部分は平成19・20年度に発掘調査され、報告書の中で報告されている。平成26年度の調査では西側を発掘している。畝間は平均52cmであり、サクに浅間A軽石が堆積している。

27号畑(第127図、PL.60)42区H～J-25グリッドに位置する。

6号屋敷跡11号建物の南部に位置する。畑の南側の境界には11号石垣がある。平成19・20年度に発掘調査した段階では、畑の東側部分に共聴ケーブル支柱があり調査できなかった。平成26年度の調査ではケーブルが撤去され、その部分を追加調査した。27号畑は、南北方向12本、東西方向が3本である。畝間は41～63cmと一定の幅を持っていない。畝の幅18～46cm前後、サクの幅18～30cm前後である。

28号畑(第125・126・195図、PL.59・61・113)42区L～O-12～16グリッドに位置する。



第124図 I区5・12号畑平面、12号畑断面

8号屋敷跡16号建物東側、8号屋敷跡に入る7号道の南側に位置する。7号道北側には29a・29b・29c号畑がある。この畑は、1枚の畑であるが、8号屋敷跡16号建物から遠い東側と近い西側で、畝サクの方向と畝サク幅が異なっている2種類の耕作痕がある。遠い東側の畝サク幅は47cm前後であり、近い西側は55cm前後である。畑の中で一部混在しており、幅の狭い耕作痕が広い耕作痕を切っており、幅の狭い耕作痕が新しいようである。7号道に近い部分に東西方向に掘られた溝があり、その中には大量の石が埋められていた。天明泥流以降の耕作に伴い不要となった石を埋めた溝と思われる。

29a・29b・29c号畑(第125・126・195図、PL.59・61・113)42区K～N-15～21グリッドに位置する。

8号屋敷跡16号建物東側、8号屋敷跡に入る7号道の北側に位置する。29a・29b・29c号畑東側の、一段下には4号屋敷跡が造られている。29a・29b・29c号畑と3つの畑に区分したが、29a・29b号畑は一連であり29c号畑は、29b号畑との間で耕作痕が途切れているが、南側7号道・西側22号石垣・北側12号溝・東側10号石垣・4号屋敷跡に囲まれた畑であり耕作痕もほぼ共通するので、まとめて報告する。等高線に沿って耕作されており、畝サクの間隔は75cm前後。畝の幅35cm、サクの幅40cmと東宮遺跡の中では最も畝サクの間隔の広い耕作痕である。4号屋敷跡南側の一部や12号溝との間には、畑耕作面を区画するためと思われる溝が耕作方向と直行して掘られている。

30号畑(第127・128図、PL.59・61)42区L～R-20～25グリッドに位置する。

北側に10号溝・南側に12号溝・西側に24号石垣がある。三角形の畑であり東宮遺跡で確認できた最も大きな面積の畑である。等高線に沿って耕作されており、畝サクの間隔は40cm前後、畝の幅20cm、サクの幅20cmと東宮遺跡の中では33号畑の次に畝サクの間隔が狭い耕作痕である。円形平坦面が2個あり、1号平坦面は畑中央部分、2号平坦面は畑の西端24号石垣の手前に位置する。円形平坦面については別にまとめて報告する。

31号畑(第127・128・195図、PL.59・60・62・113)42区K～N-22～25グリッドに位置する。

5号屋敷跡10号建物西側に位置する。畑は等高線に沿って耕作されており、畝サクの間隔は46cm前後、畝の

幅20cmである。10号建物1号施設に接している部分は耕作されていなかった。10号建物1号施設の屋根等があったものと思われる。10号溝に近い畑面から多くの木製品が出土した。細長い、板状のものが多かった。また12号石垣に近い畑面には7本の細い杭の痕跡が残っていた。細く配置も一定でなく、建物にはならないと思われる。10号建物1号施設に近い部分の畑面及び畑下から多くの石が出土した。一部は畑表面に出ていたが、大部分は畑面撤去後確認された。天明泥流以前の段階で、傾斜面の畑面を区画するためのものであろうか。畑面より古いが、31号畑面に図示した。

32号畑(第127・128・195図、PL.59・62・113)42区Q～V-20～25、52区S～V-1・2グリッドに位置する。

30号畑の西側に位置する。畑はさらに西側の段丘面手前の平地部分まで広がっていたと思われるが天明泥流の堆積が薄く、標高542.5m付近が畑を確認できる限界で標高543m以上のところでは畑面は確認できなかった。耕作は等高線に沿っており、畝サクの間隔は南側の30号畑とほぼ同様の41cm前後、畝の幅21cm、サクの幅20cmであり、東宮遺跡の中では畝サクの間隔が狭い耕作痕である。円形平坦面が3個あり、3号平坦面は畑の東端24号石垣の手前。4号平坦面は畑の中央部分、5号平坦面は、確認できた畑の西端に位置する。円形平坦面については別にまとめて報告する。

33号畑(第129図、PL.59・62)42区Q～U-14～16グリッドに位置する。

北側に8号屋敷跡、南側に10号屋敷跡、東側に6・7号井戸がある。畑は西側段丘面手前の平地部分まで広がっていたと思われるが、天明泥流の堆積が薄く標高542.5m付近が畑を確認できる限界で、それ以上の高いところでは畑面は確認できなかった。耕作は等高線に沿っており、畝サクの間隔は36cm前後、畝の幅18cm前後、サクの幅18cm前後であり東宮遺跡の中では最も畝サクの間隔が狭い耕作痕である。確認されている畑面には円形平坦面はなかった。

34号畑(第130図、PL.60・62)42区R・S-5・6グリッドに位置する。

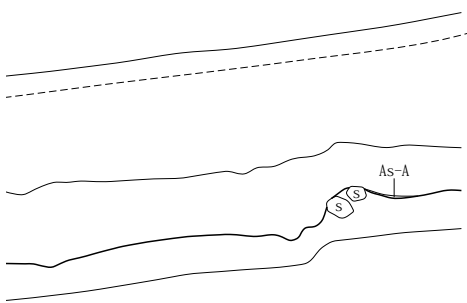
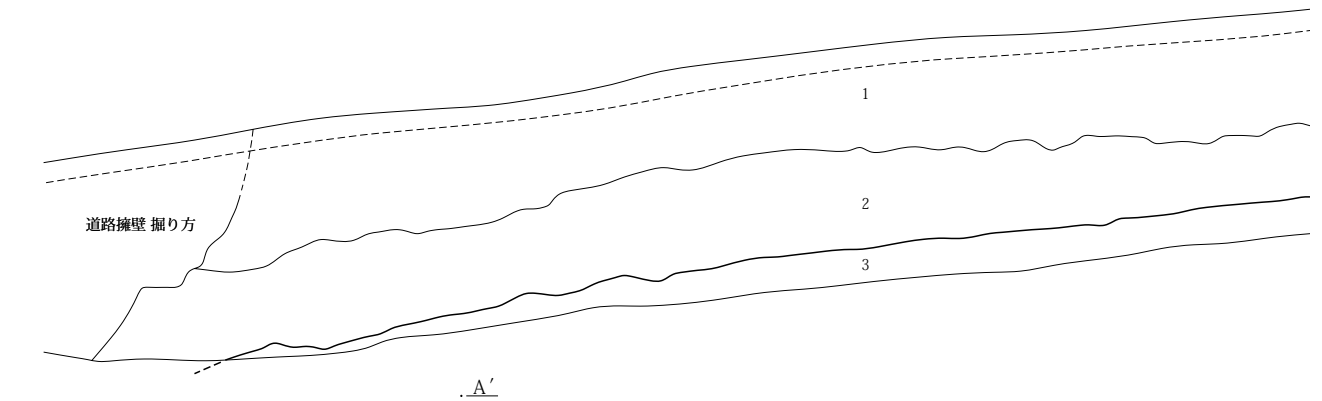
調査区南東端部分に位置し34・35・36号畑がまとまっている。3つの畑の西側には10号道が、畑の北側には9号道があり、畑と道の境には溝が掘られている。同じ畑



第125図 IV区28・29a・b・c号畑

28号畑

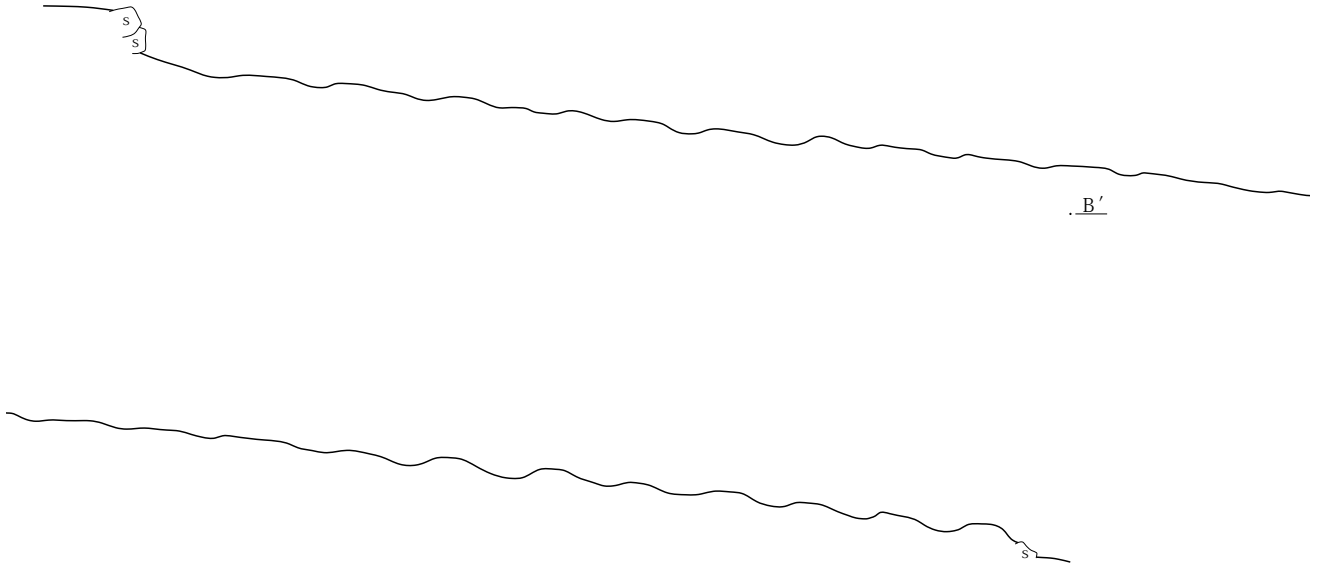
A, L=540.00m



28号畑 A-A'

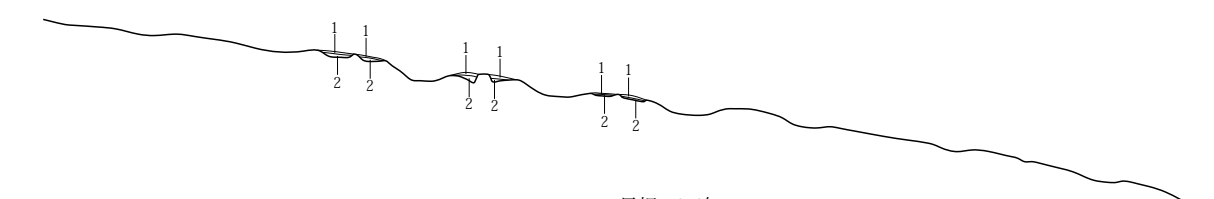
- 1 表土層
- 2 泥流層
- 3 浅間A軽石下畑の耕土
上面には浅間A軽石が1cm程堆積。土寄せはみられない。

B, L=539.00m



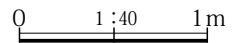
29号畑

A, L=538.00m

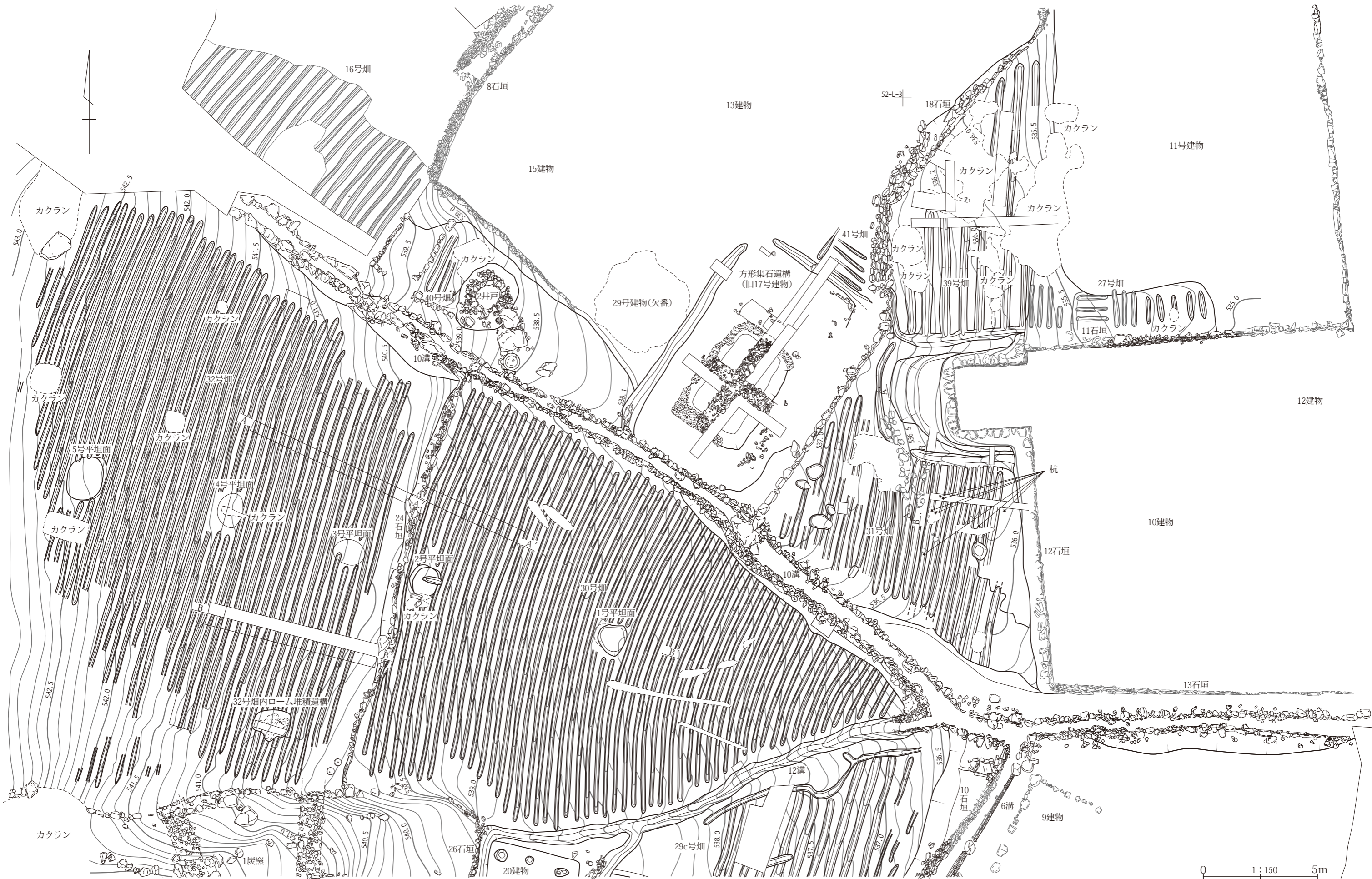


29号畑 A-A'

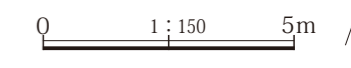
- 1 暗褐色土 浅間A軽石下畑の耕土と同じ。土寄せ。
- 2 浅間A軽石



第126図 IV区28・29c号畑断面



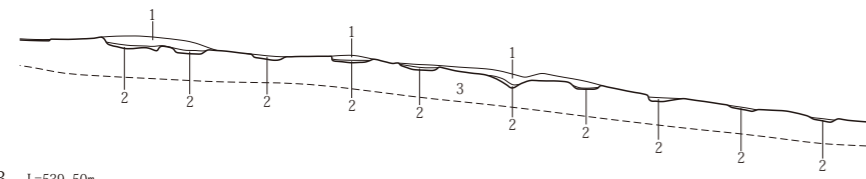
第127図 IV区 27・30・31・32・39・40・41号畑全体



30号畑

A, L=539.50m

A'



- 30号畑 A-A'
- 1 泥流
 - 2 浅間A軽石
 - 3 暗黄褐色土 浅間A軽石下畑の耕土。

B, L=539.50m

B'

2号円形平坦面

1号円形平坦面

31号畑

A, L=537.00m

A'



B, L=537.00m

B'



C, L=537.50m

C'



32号畑

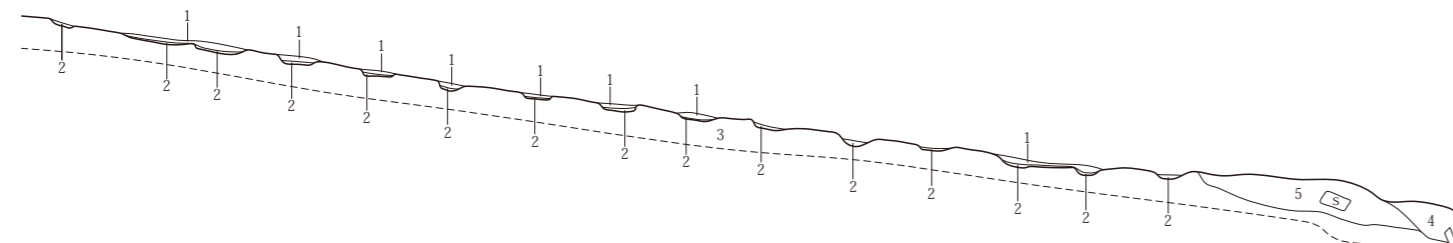
A, L=541.60m

A'

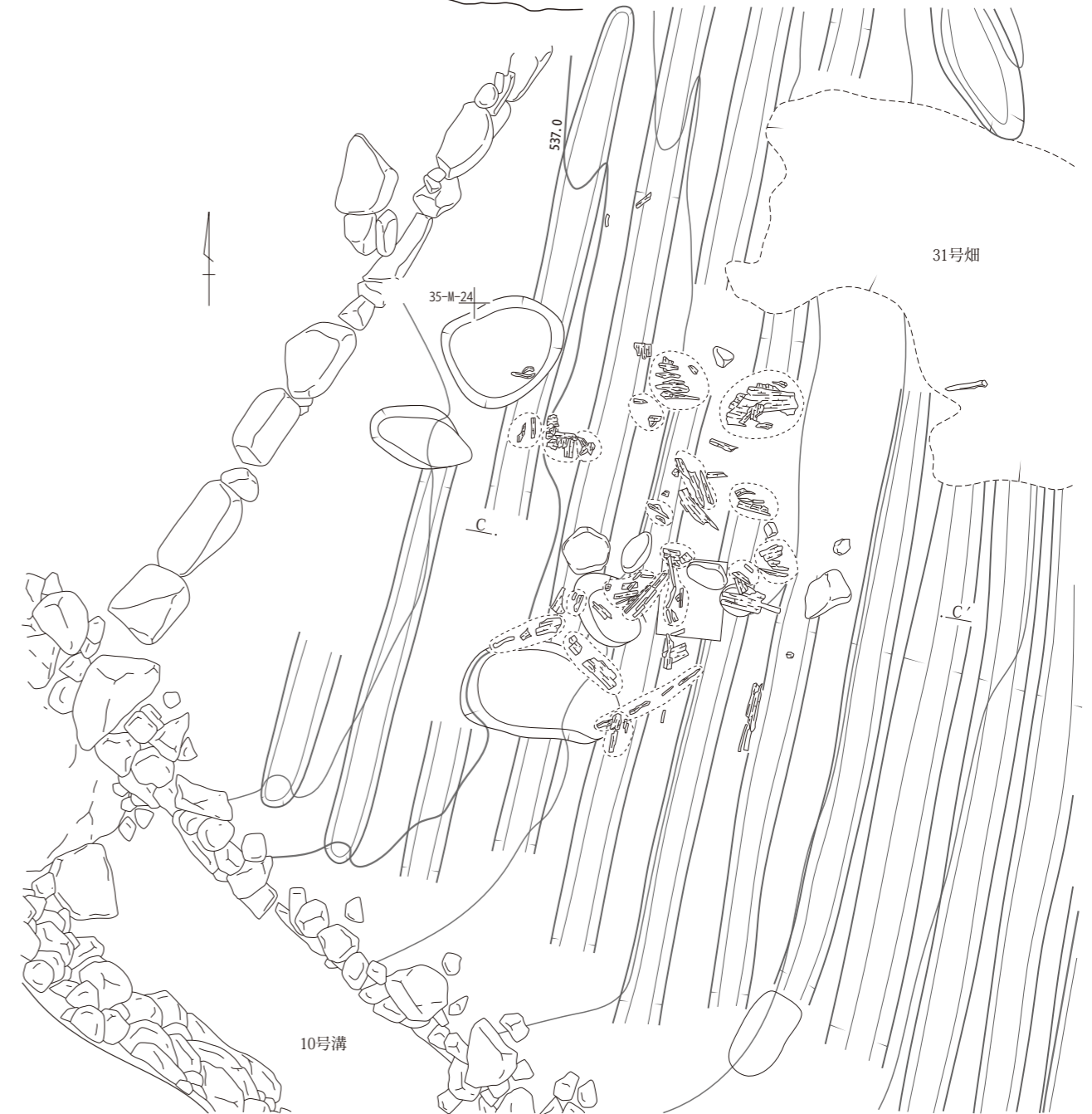


B, L=541.60m

B'



- | | |
|------------|----------------------------|
| 32号畑 A-A' | 32号畑 B-B' |
| 1 浅間A軽石 | 1 天明泥流 |
| 2 浅間A軽石下耕土 | 2 浅間A軽石 |
| | 3 浅間A軽石下畑の耕土 |
| | 4 暗褐色土 24号石垣の裏込 |
| | 5 暗褐色土 黄褐色粒子を含む。浅間A軽石下畑耕土? |



第128図 IV区 30・31・32号畑断面・31号畑出土遺物状況

の可能性もあるが34・35号畑は規模が小さく耕作方向や畝サクの大きさが異なるので別番号の畑とした。34号畑は、南北方向の耕作溝が6本確認されている。畝サクの間隔は63cm前後、畝の幅33cm前後、サクの幅30cm前後であり、東宮遺跡の中では畝サクの間隔が広い耕作痕である。

35号畑(第130図、PL.60・62)42区S・T-5・6グリッドに位置する。

35号畑は、34号畑の西側に位置し、南北方向の耕作溝が2本確認されている。畝サクの間隔は60cm前後、畝の幅30cm前後、サクの幅30cm前後であり、東宮遺跡の中では畝サクの間隔が広い耕作痕である。

36号畑(第130・131図、PL.60・62・63)42区R～U-4～6グリッドに位置する。

36号畑は、34・35号畑の南側に位置する。西側に10号道があり、その西には同じような耕作痕のある37号畑がある。畝サクの間隔は46cm前後、畝の幅26cm前後、サクの幅25cm前後であり、東宮遺跡の中では畝サクの間隔が中間に位置する耕作痕である。

37号畑(第130図、PL.60・63)42区T～W-5～7グリッドに位置する。

調査区南端部分に位置し10号屋敷跡23号建物南に位置する。他の大部分の畑は等高線に沿って耕作されているが、この37号畑は、等高線と直行して耕作されている。畑はさらに西側に伸びていると思われるが、天明泥流の堆積が薄く、標高542.5m付近が畑を確認できる限界で、標高543m以上のところでは、畑面は確認できなかった。畝サクの間隔は40cm前後、畝の幅20cm前後、サクの幅20cm前後であり、東宮遺跡の中では畝サクの間隔が狭い耕作痕である。

38号畑(第129図、PL.59・63)42区Q～S-12～14グリッドに位置する。

10号屋敷跡内北東コーナー部分に位置する。屋敷跡敷地内の狭い空間に作られた畑であり、26・27・41号畑同様に、一定の畝サク間隔を持たない小規模な畑である。南北方向のやや長い耕作痕が北側に7本、南側短い耕作痕が3本ある。畝サクの間隔は52～88cmと一定の幅を持っていない。畝の幅20～40cm、サクの幅20～25cmである。
39号畑(第127図、PL.63・63)42区J～L-25、52区J～L-1～4グリッドに位置する。

6号屋敷跡11号建物西側に位置し、北西から西側を18号石垣、南側は10号建物1号施設に囲まれて、6号屋敷跡敷地内の畑と思われる。11号建物と39号畑との境に北西の一部を除いて石垣等は無く直接畑と繋がっている。東側から押し寄せた天明泥流により11号建物の土壁が1～5号まで5枚あり1・2号土壁が18号石垣の一部に倒れかけた状態で出土している。畑面には全体の大きさが分かるほど良好に3・4号の土壁が倒れ、さらに5号の土壁が39号畑西側の18号石垣手前まで飛ばされて出土した。また家の構造物や家財道具とも39号畑に押し出されており、多くの遺物が39号畑から出土した。これらのものが飛ばされていた部分では畑面の残りは悪かった。等高線に沿って耕作されており、畝サクの間隔は75cm前後。畝の幅35cm、サクの幅40cmと東宮遺跡の中では29a・29b・29c号畑同様に最も畝サクの間隔の広い耕作痕である。10号建物1号施設との境には耕作溝と直行する区画溝が掘られている。

40号畑(第127図、PL.40・63)52区Q-1グリッドに位置する。

7号屋敷跡内南西部分、屋敷跡の水場と思われる2号井戸西側の狭い場所に、耕作溝の長さ2.80m以下3本の耕作溝が確認された。畝サクの間隔は40cm、畝の幅20cm前後、サクの幅20cm前後である。

41号畑(第127図)52区L・M-1グリッドに位置する。

7号屋敷跡内南西部分に、耕作溝の長さ2.80m以下3本の耕作溝が確認された。畝サクの間隔は40cm、畝の幅20cm前後、サクの幅20cm前後である。

円形平坦面(1～6号)

円形平坦面と呼ばれている遺構が30号畑で1・2号、32号畑で3～5号、調査区南端の36号畑で6号、合わせて6個確認されている。他の畑ではなかった。畝サクの耕作痕は、6号円形平坦面以外では円形平坦面手前で止まっており耕作されていない。大きさは直径1.50m前後である。円形平坦面は縁辺部が幅10cm前後円形に1～2cm前後深く、中央部分も畑面より4～8cm深くなっているものが多い。

1号円形平坦面(第132図)42区O-22グリッドに位置する。

30号畑中央部に位置し、畝サクは、円形平坦面手前で止まっている。規模はやや不定円形であり、明確でないが1.40m前後、縁辺部が2cm前後、中央部分が2～4cm

畑面より深くなっている。

2号円形平坦面(第132図)42区Q・R-22・23グリッドに位置する。

30号畑西端で、32号畑に近い24号石垣中央部に近接して位置する。畝サクは、一部円形平坦面と重複するが、中央の畝サクは円形平坦面手前で止まっている。規模はやや不定円形であり、明確でないが1.35m前後、東側縁辺部が2cm前後、中央部分が2～4cm畑面より深くなっている。中央部に長さ90cm幅30cm深さ14cmの細長い掘り込みがあった。

3号円形平坦面(第133図)42区R-23グリッドに位置する。

32号畑東端で、30号畑に近い24号石垣中央部に近接して位置する。畝サクは、一部円形平坦面と重複するが、中央の畝サクは円形平坦面手前で止まっている。規模はやや不定円形であり、明確でないが長辺1.35m短辺

1.10mである。

4号円形平坦面(第133図、PL.62)42区S・T-23・24グリッドに位置する。

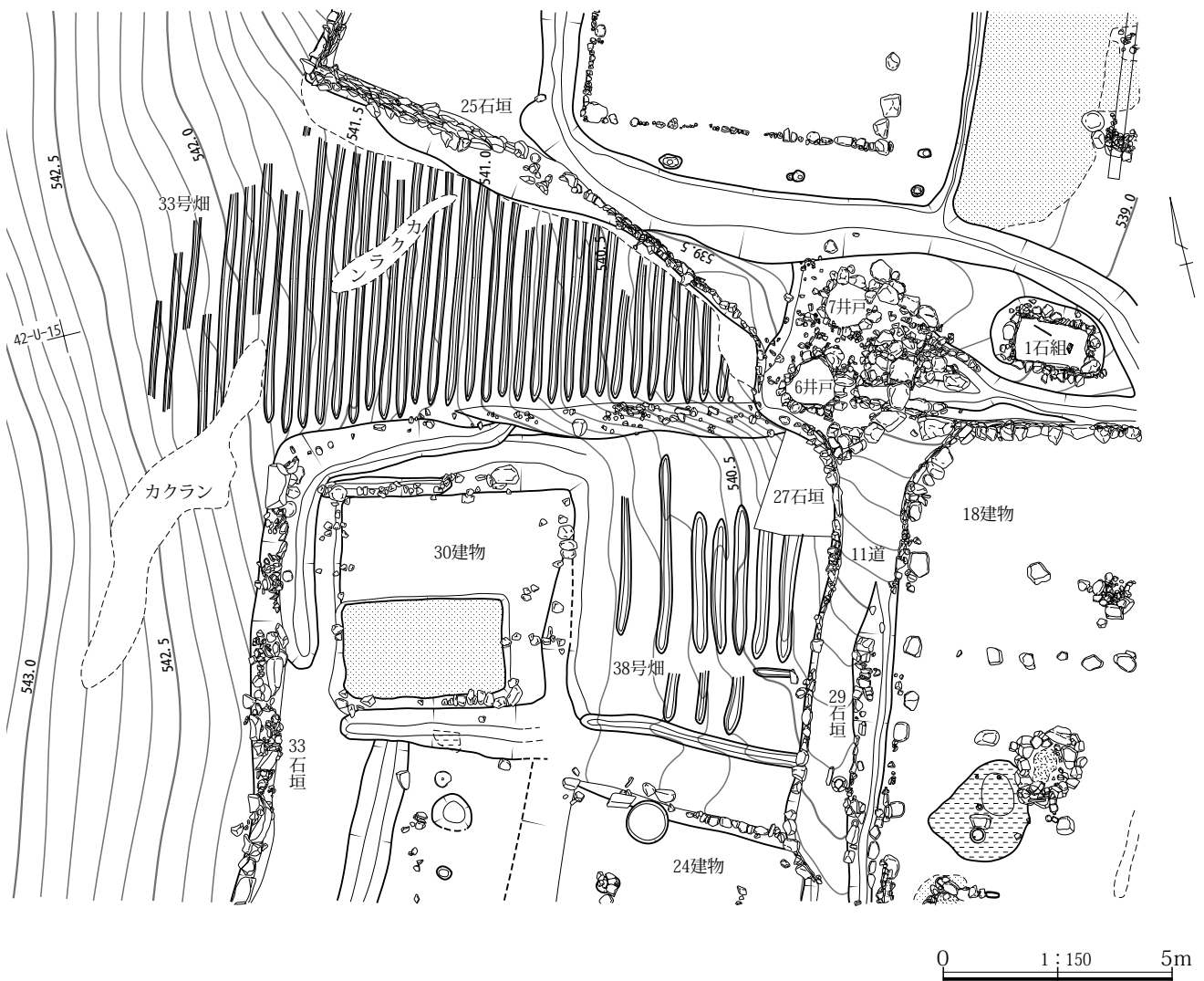
32号畑中央部に位置する。畝サクは、一部円形平坦面と重複するが、中央の畝サクは円形平坦面手前で止まっている。規模はやや不定円形であり、明確でないが長辺1.50m短辺1.10mである。

5号円形平坦面(第133図)42区U-24グリッドに位置する。

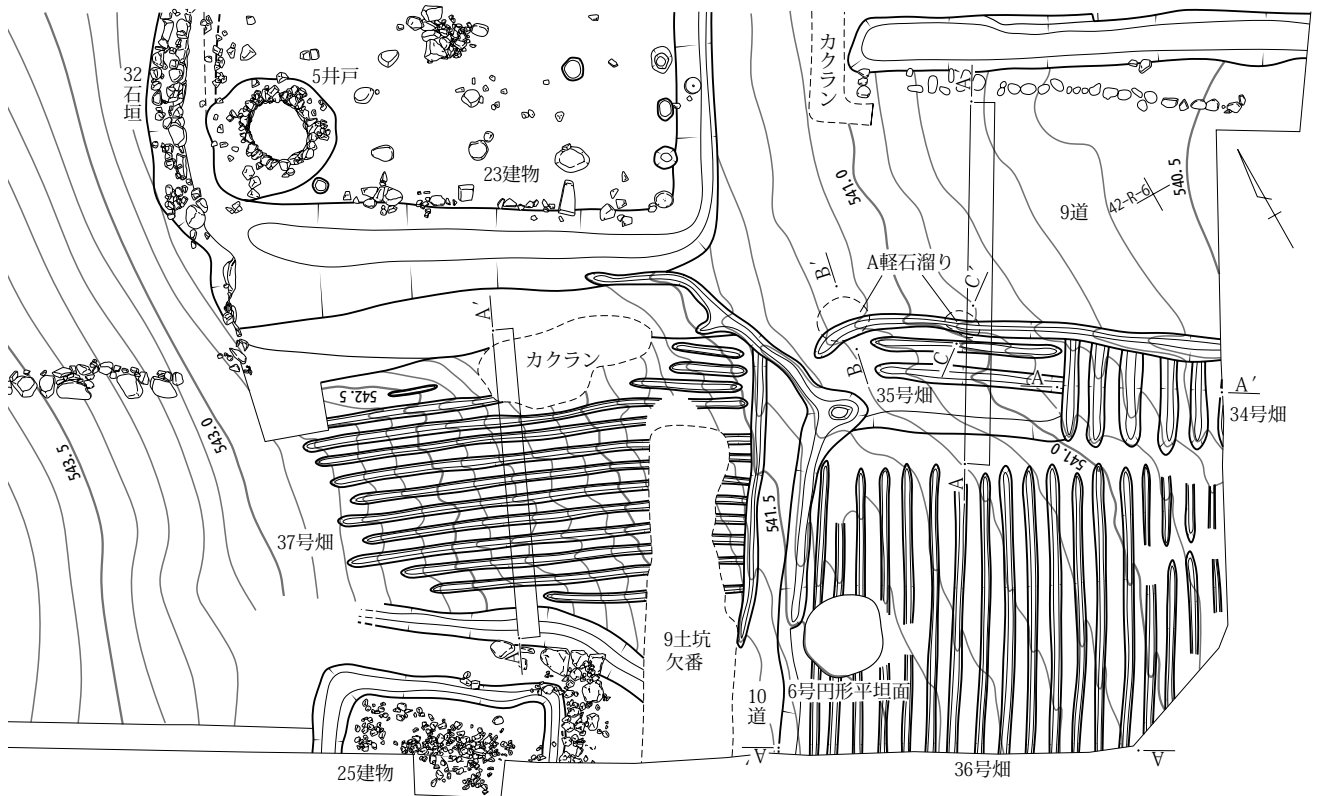
32号畑で確認できた畑面西端に位置する。畝サクは、一部円形平坦面と重複するが、円形平坦面中央部分まで畝サクは無い。規模はやや不定円形であり、明確でないが長辺1.90m短辺1.55mである。

6号円形平坦面(第133図、PL.63)42区T・U-4・5グリッドに位置する。

調査区南端の36号畑面西端に位置する。畝サクは、円



第129図 IV区33・38号畑

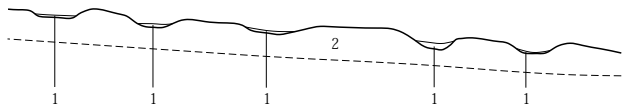


34号畑

A, L=541.00m

A'

0 1:150 5m



34号畑 A-A'

- 1 浅間A軽石
- 2 暗黄褐色土 浅間A軽石下畑の耕土

35号畑

A, L=541.50m

A'



B, L=541.50m

B'

C, L=541.50m

C'

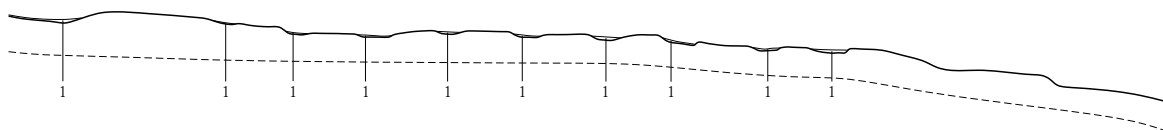
35号畑 A-A'・B-B'・C-C'

- 1 浅間A軽石

37号畑

A, L=543.00m

A'



37号畑 A-A'

- 1 浅間A軽石

0 1:40 1m

第130図 IV区34・35・36・37号畑

形平坦面まで伸びていない。多くの浅間A軽石が堆積しており、他の円形平坦面と様相が異なる。規模は直径1.51mである。

④天明泥流下の畑以前の畑(第134・135図、PL.63)

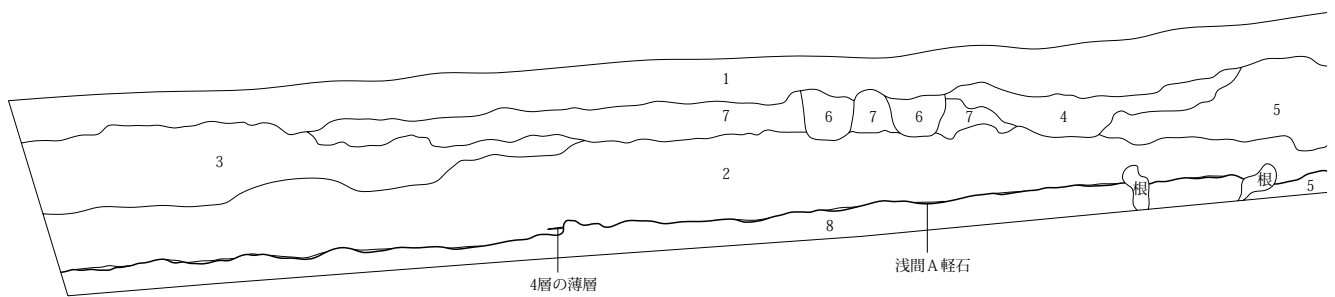
天明泥流下の30号畑調査終了後、さらに古い段階の畑の存在を確認するために30号畑南側一部の範囲で表土を10～30cm除去した。その結果耕作された畝の痕跡が11本(セクションベルト下に想定されるものを含めると12

本)の存在が確認され、天明泥流下の畑より古い段階の畑が確認された。畝サクの上面は削られて残っていなかった。確認できた規模は、12号溝の石垣付近から北側に2.20m、それより北では耕作により残っていなかった。畝幅15cmサク幅30cm前後、畝サク幅45cm前後である。確認された畝サクの痕跡を確認するために周辺を確認したが、残っていなかった。確認されたサクの中には多くの炭化物を含んでおり、この違いによりサクを確認するこ

36号畑

A, L=543.00m

A'



36号畑 A-A'

- 1 表土層
- 2 天明泥流
- 3 暗褐色土 小礫を含む。天明泥流を鋤込んだ旧耕作土か。
- 4 暗褐色土 黒色土(7層?)と混じる。

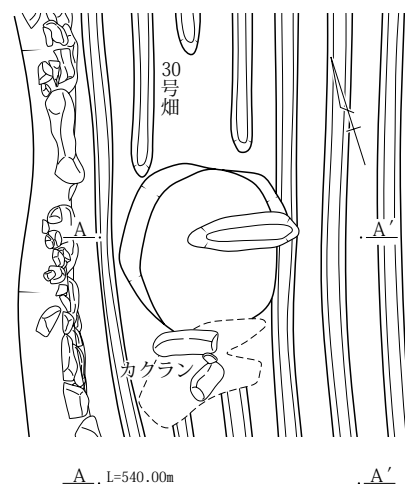
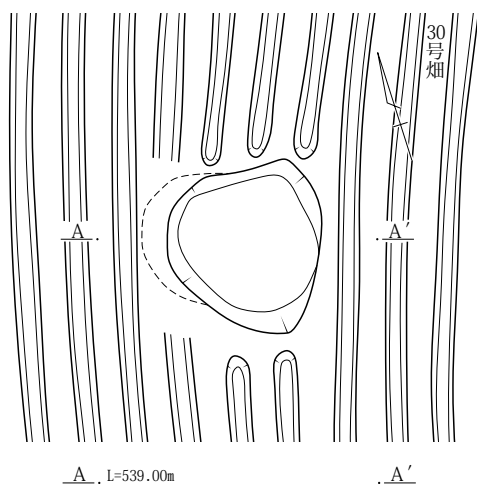
- 5 4層と同質。やや黒色土の量が多い。
- 6 黄褐色砂層
- 7 黒色土 黒味が強くボソボソしている。炭焼窯の炭を多く含むように見える。
- 8 暗褐色土 黄味が強い。

0 1:40 1m

第131図 IV区36号畑断面

30号畑内1号円形平坦面

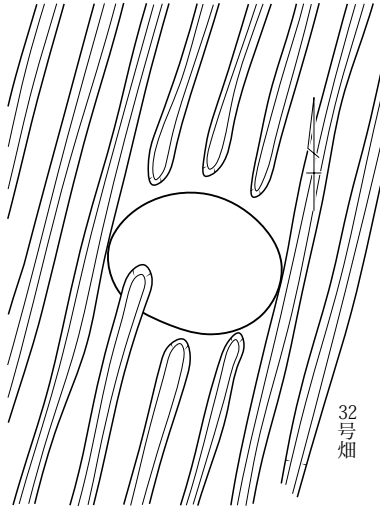
30号畑内2号円形平坦面



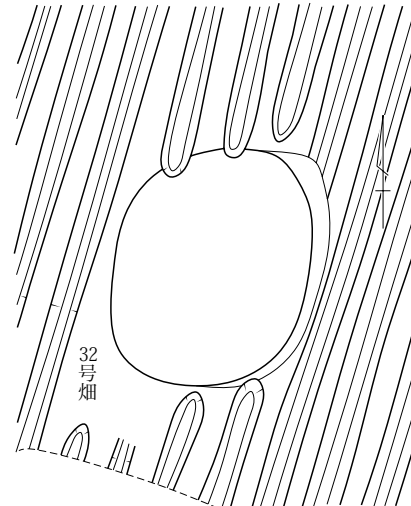
0 1:60 2m

第132図 IV区30号畑内1・2号円形平坦面

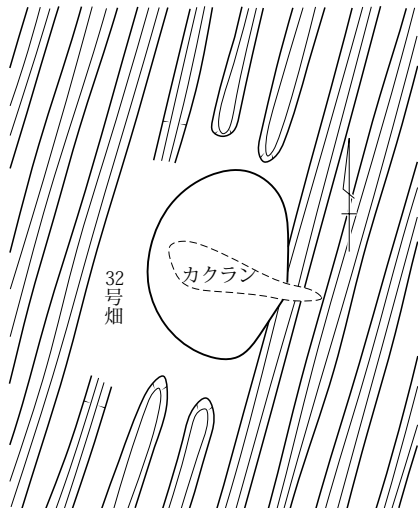
32号畑内3号円形平坦面



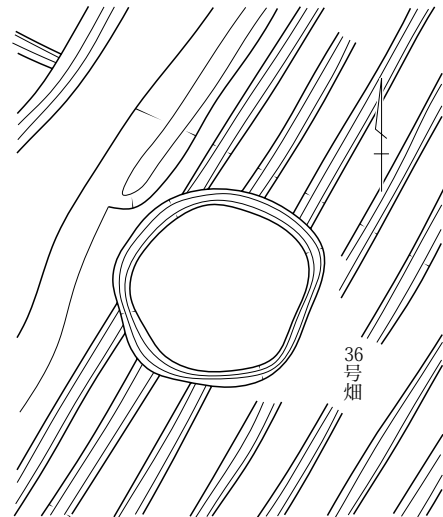
32号畑内4号円形平坦面



32号畑内5号円形平坦面



36号畑内6号円形平坦面



0 1:60 2m

第133図 IV区32号畑内3・4・5・号円形平坦面、36号畑内6号円形平坦面

とができた。この炭化物は南西方向にある炭窯周辺から流れ出したものと思われる。

このように天明泥流下の畑の下から確認された畑は、平成27年に調査された東宮遺跡の対岸にある下湯原遺跡(江戸時代の吾妻郡川原湯村の一部)で確認されている。この畑は、南に位置する山から流れ出した土砂等がサクの中に埋まっており、耕作土との違いから確認することができた。天明泥流下の畑と比較すると、畝サクの幅が広いことや畝サクの長さが狭く、耕作の規模が小さいことが明らかとなっている。

⑤出土遺物

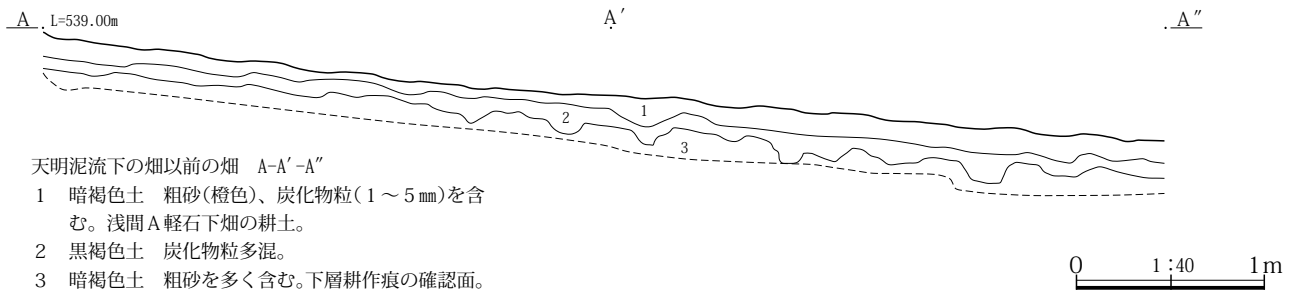
畑出土遺物は残存率が低く、図示可能な物は少ない。

陶磁器では円盤状に二次加工した磁器碗高台部(28号畑1)と陶器徳利(29号畑1)のみである。金属製品では農具片(31号畑1)と寛永通寶の銅1文銭(32号畑1)の2点が図示可能であった。

畑出土の非掲載遺物は、28号畑が江戸時代の磁器1点2g、陶器3点8g。29号畑が江戸時代の磁器3点10g、陶器3点41g。磁器不詳の陶器1点88gである。なお、陶胎染付片1点に12号溝出土片と接合関係が認められる。30号畑は錆着した寛永通寶銅銭と鉄銭1文銭20枚前後。31号畑が江戸時代の磁器2点1g。42点の木片や木製品片。32号畑が江戸時代の磁器3点15g、陶器8点100g。



第134図 IV区天明泥流下畑以前の畑



第135図 IV区天明泥流下畑以前の畑断面

(12)その他の遺構

① 6号道(第137図、PL. 8・61・64・65)42区F・G-23～25、52区F～J-1～9グリッドに位置する。

【位置と概要】東宮遺跡のI・IV区の間、1・5・6号屋敷跡の間に幅2.00m長さ52.0mの6号道が発掘調査された。道路面は天明泥流で埋まっており、泥流下の道路面には浅間A軽石が明瞭に堆積しており、天明三年段階で使われていた道である。この6号道は、現在の町道1-11線のほぼ真下にあたる。6号道は川原畑村の幹線道路であり、各屋敷跡への出入口のための道と繋がっている。北側で7号屋敷跡に入るための5号道、中央部で2号屋敷跡に入るための8号道、南端部分で東側の1号屋敷跡に入るための12号道である。

【規模・構造】道は西側が高く、東側が低くなる傾斜面に作られており、道の両側には石垣が築かれている。道と各屋敷跡との境は明瞭となっている。発掘で確認されている道部分の長さは52.0mである。道はさらに北や南に延びている。道幅は石垣を省いた土の部分で2.00～2.20mで基本は2.00mと思われる。部分的には1号屋敷跡に入る部分で幅が2.50m前後と広がっている場所もある。5号屋敷跡部分は、石垣が道路面より50cmほど屋敷跡内に入った状態で積まれている。その石垣の外側には幅30～50cmの側溝が掘られており、側溝幅を省く道路幅は2.00m以上となっており、最低でも道幅2.00mは確保されている。石垣外側に掘られている溝は道路を斜めに掘り込み反対側の12号道の南側まで確認されている。その先は未発掘のため不明である。道路面の高さは、7号屋敷跡部分付近以外はほぼ水平で、5・6号屋敷跡に面した部分では30.0mの距離で北側が1cm高くなっていた。一方、7号屋敷跡に入るための5号道手前付近からは傾斜地となっており、17.0m進んだところで2.70mほ

ど高くなっており、しだいに急傾斜の山道となっている。南端部分は、現在使用されている道路があり南側の発掘はできなかった。その部分で断面図を作成した。表土から14cm前後が現在の道路面になりその下が天明泥流である。その下が6号道となっていた。この地点では6号道と天明泥流との間に浅間A軽石は残ってなかった。断面中央部分の掘り込みは5号屋敷跡西側の石垣外側に掘られていた側溝からつながる溝である。泥流のように砂質の土で埋まっているが、泥流とは異なっている。天明泥流段階では埋まっていたものと思われる。断面東側の掘り込みは、1号屋敷跡に入るための12号道に設置された階段状に置かれた土留め用の丸太が腐食した状態を示している。

【所見】天保十四年(1843)に書かれた「上野国川原畑村絵図面」の中に、三ツ堂から西宮や諏訪神社まで繋がっている様子が詳しく描かれている。三ツ堂から南に延びている道が、吾妻川に向かって曲がり、すぐに境沢付近で北側に曲がっている道の様子が詳しく描かれている。吾妻川に向かって曲がっている部分が、発掘した6号道と思われる。この道が江戸時代川原畑村の幹線道路であれば、元禄十五年(1702)天保九年(1838)の上野国絵図、天保八年(1837)川原畑村絵図等に描かれた幹線道路である可能性が高い。

②10・11・12号溝の概要

発掘調査された東宮遺跡集落の中央部に位置し、年間を通して水が流れている水路が10号溝である。この水路は、調査区北西の一段高い段丘面の上に作られている集落の西端、明治時代に活躍した野口茂四郎氏宅出入口東側にある湧水地から流れ出た水を源流として流れてきている。この溝は発掘段階において常に水が流れており、今日まで東宮集落の大切な水路であった。発掘の結果この水路は、天明泥流で一度埋まっており、10号溝に沿っ

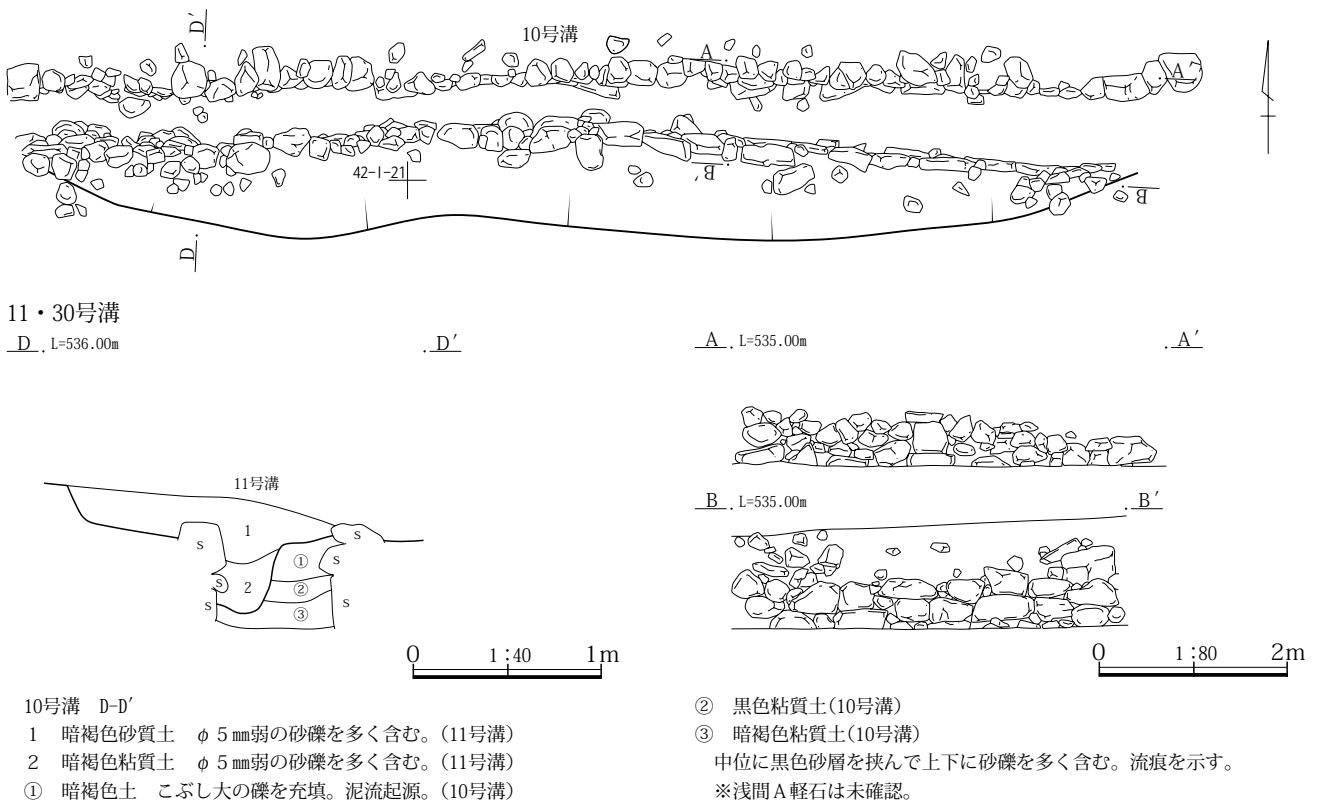
て溝の位置や規模等を少し変えながら平成段階まで使用されていた。下流では10号溝覆土上面の一部を使用し、上流部では10号溝が埋まった覆土上面を溝として利用していた。この溝を11号溝(第136・200図、PL.66・118)と呼称し、一部は断面図で図示したが平面図等は作成していない。天明泥流段階で10号溝と繋がっており同時に存在した溝は、6・12号溝である。これらの溝は泥流で埋まっており多くの木製品等を出土している。12号溝は6号溝西約4.00mのところまで10号溝とY字状につながっている。この二つの溝は、造られた時期は、同じ頃かもしれないが、12号溝は天明泥流が押し寄せた段階では、土石流等で大部分が埋まり浅い溝状の掘り込みのある溝となっていた。10号溝は、途中で埋没したであろう土石流等を撤去し、天明泥流で埋まるまで使い続けられていた。6号溝は4号屋敷跡のところまで報告している。11号溝については新しい溝なので改めて報告しない。以下10・12号溝について報告する。

(ア)10号溝(第136・138~144・178・196~199図、PL.9・66・77)42区G~R-21~25グリッドに位置する。

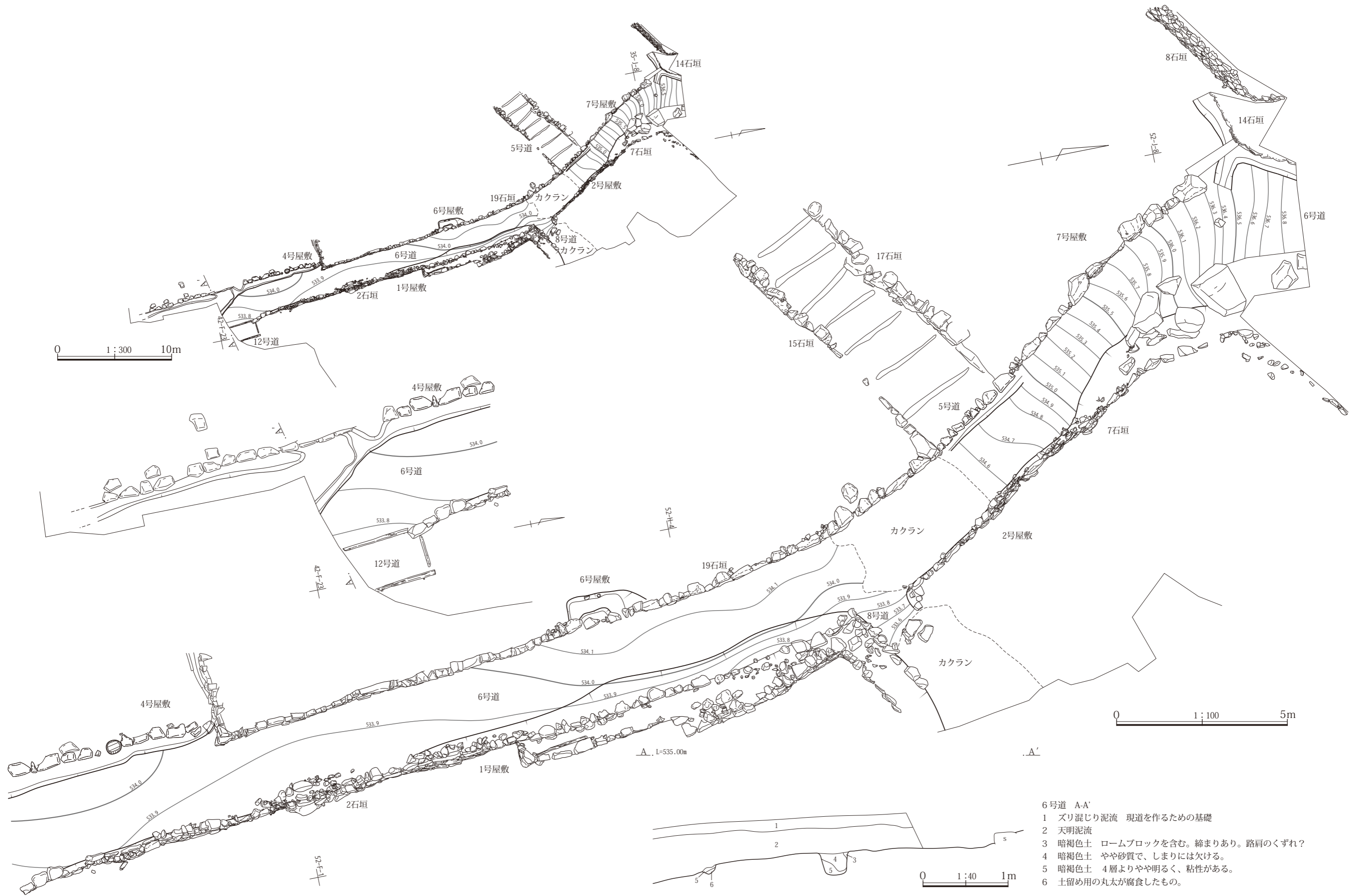
【位置・確認状況】調査区中央部分を北西方向から南東方(3)

向に流れている。発掘段階で常に上流から水が流れていた。6・12号溝につながっている。10号溝中央付近の溝底部に大きな石があり、溝はその石を撤去することなく造られていた。石の上と下では落差が約70cmとなっている。

【形状・規模・構造】溝の両岸はすべて石垣が築かれている。溝の両側に積み上げられている石垣は、自然石を3段前後積んでいる。石の大きさは、3段に積み上げられている場合、最下段の基礎石は幅60cm前後、中段に使われている石は40cm前後、最上部に使われている石は20cm前後の石が多く基礎部分には大きくてしっかりした石を組んでいるようである。10号建物の12・13号石垣に見られたような細長い石を意図的に選び、水平方向に積み上げる意図はそこには認められない。積む場所によって石の大きさを分けているようである。使われている石の大きさは、上流や下流で特に使い分けられている様子は無い。溝の長さは、下流である東端の町道から上流である調査区北西部分まで56.6mで落差(標高差)は6.54mである。溝の幅と深さは、場所により一定ではないが、12号溝と交差する付近を境に少し異なっており、下流側は幅40~60cm、深

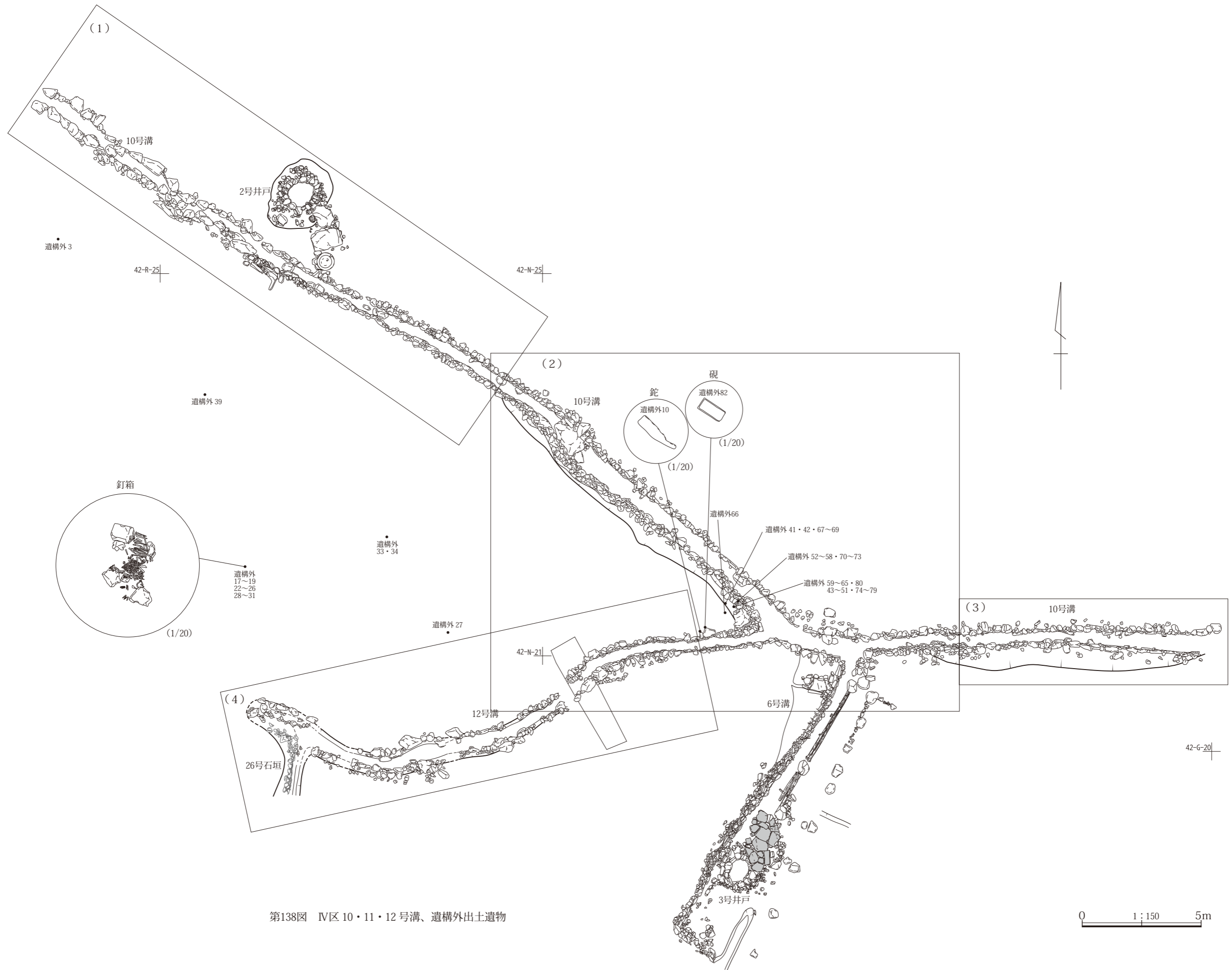


第136図 IV区10号溝(3)

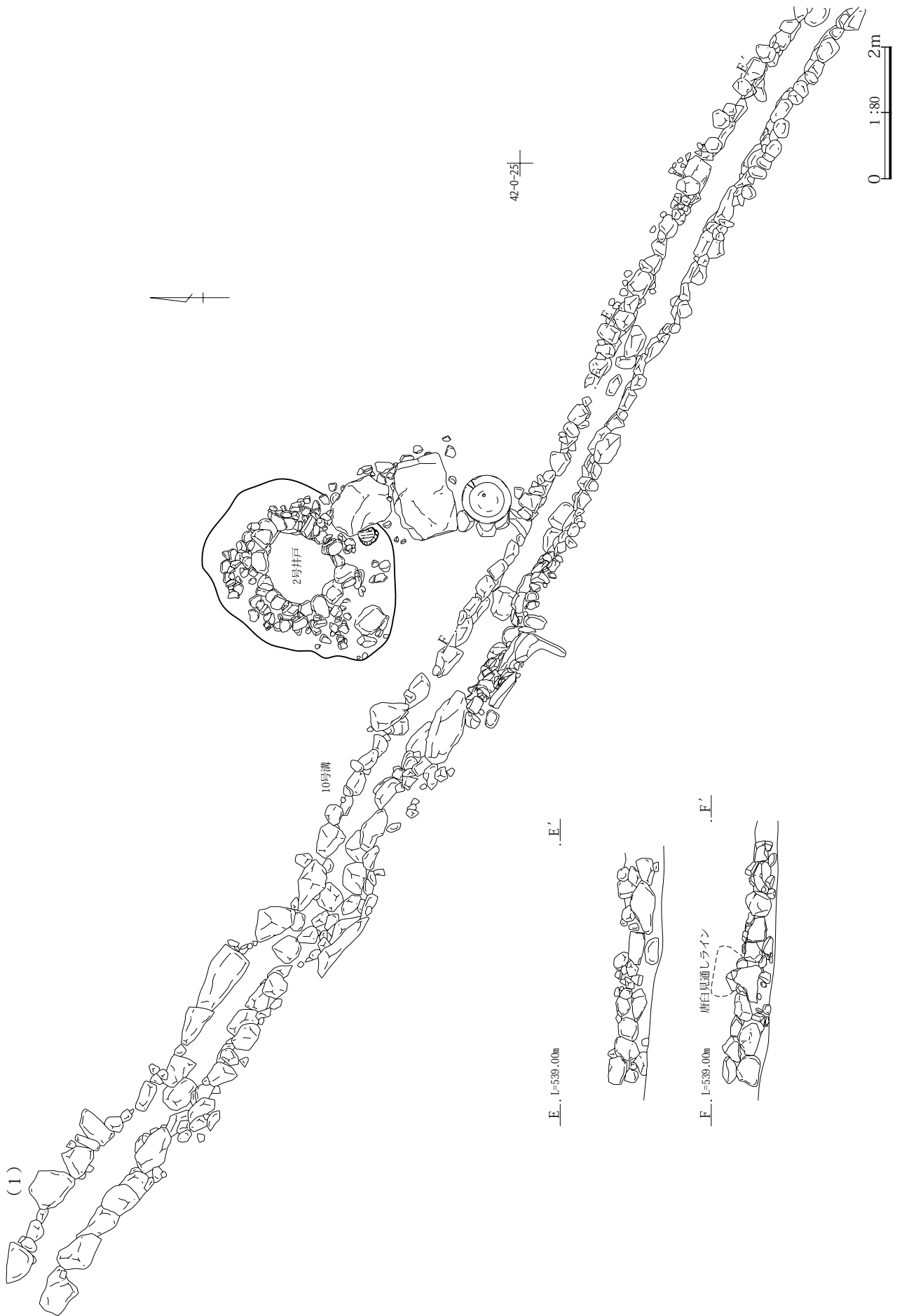


- 6号道 A-A'
- 1 ズリ混じり泥流 現道を作るための基礎
 - 2 天明泥流
 - 3 暗褐色土 ロームブロックを含む。締まりあり。路肩のくずれ?
 - 4 暗褐色土 やや砂質で、しまりには欠ける。
 - 5 暗褐色土 4層よりやや明るく、粘性がある。
 - 6 土留め用の丸太が腐食したものの。

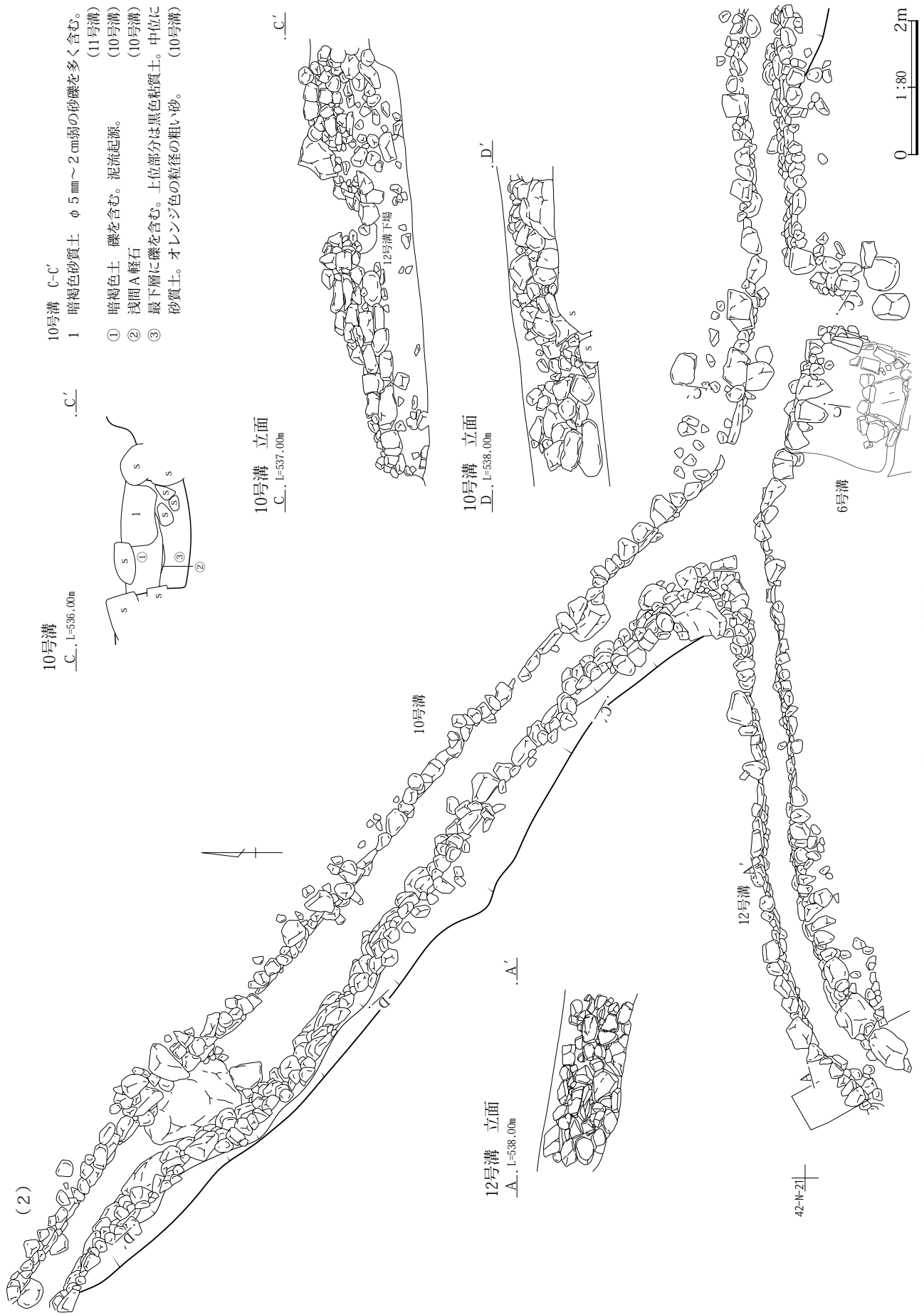
第137図 I・IV区6号道



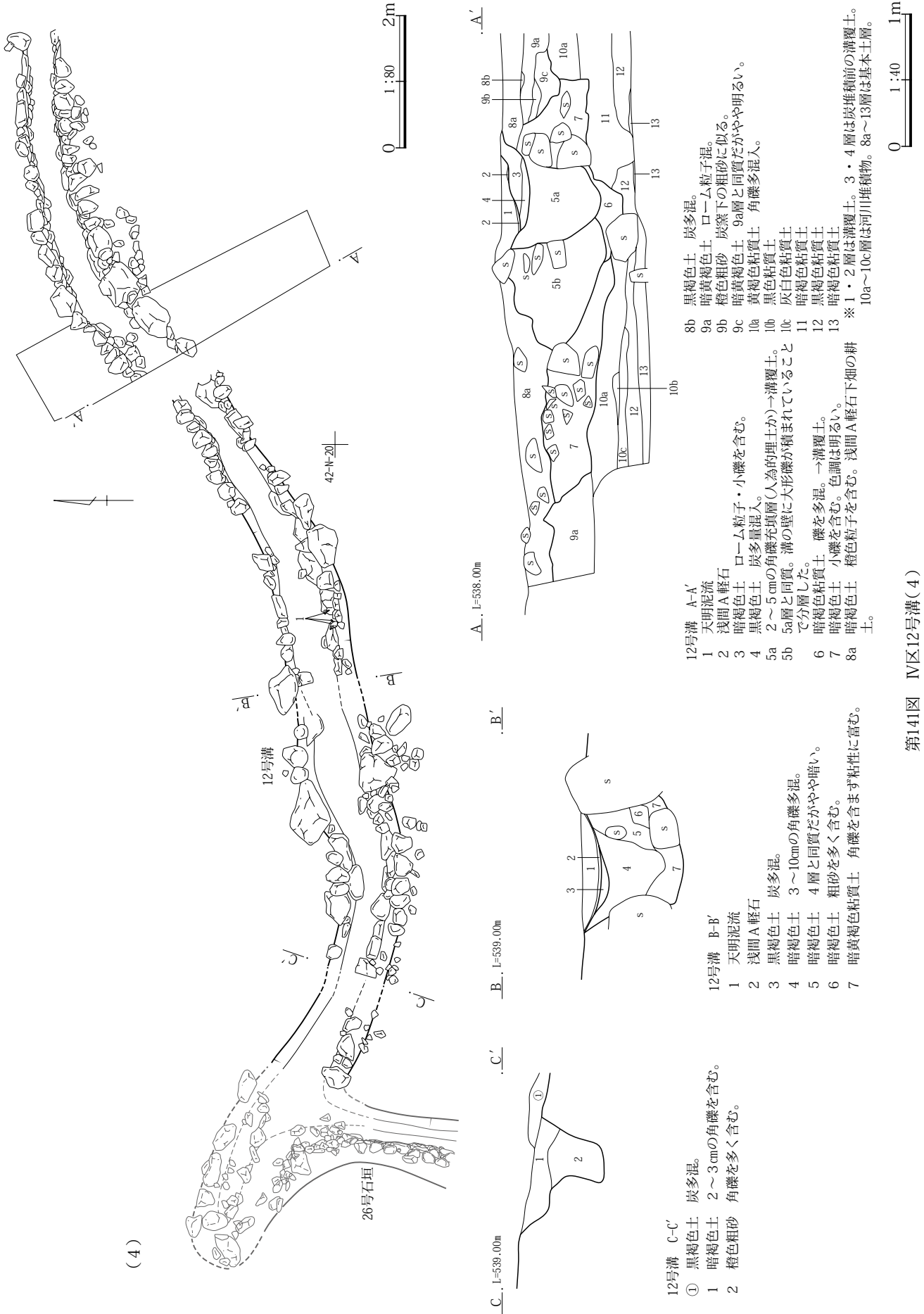
第138図 IV区 10・11・12号溝、遺構外出土遺物



第139図 IV区10号溝(1)



第140図 IV区10号溝(2)



第141図 IV区12号溝(4)

第3章 発見された遺構と遺物

さは1.00m前後、上流側は幅30～40cm、深さは70cm前後であり、幅が狭く浅くなっている。

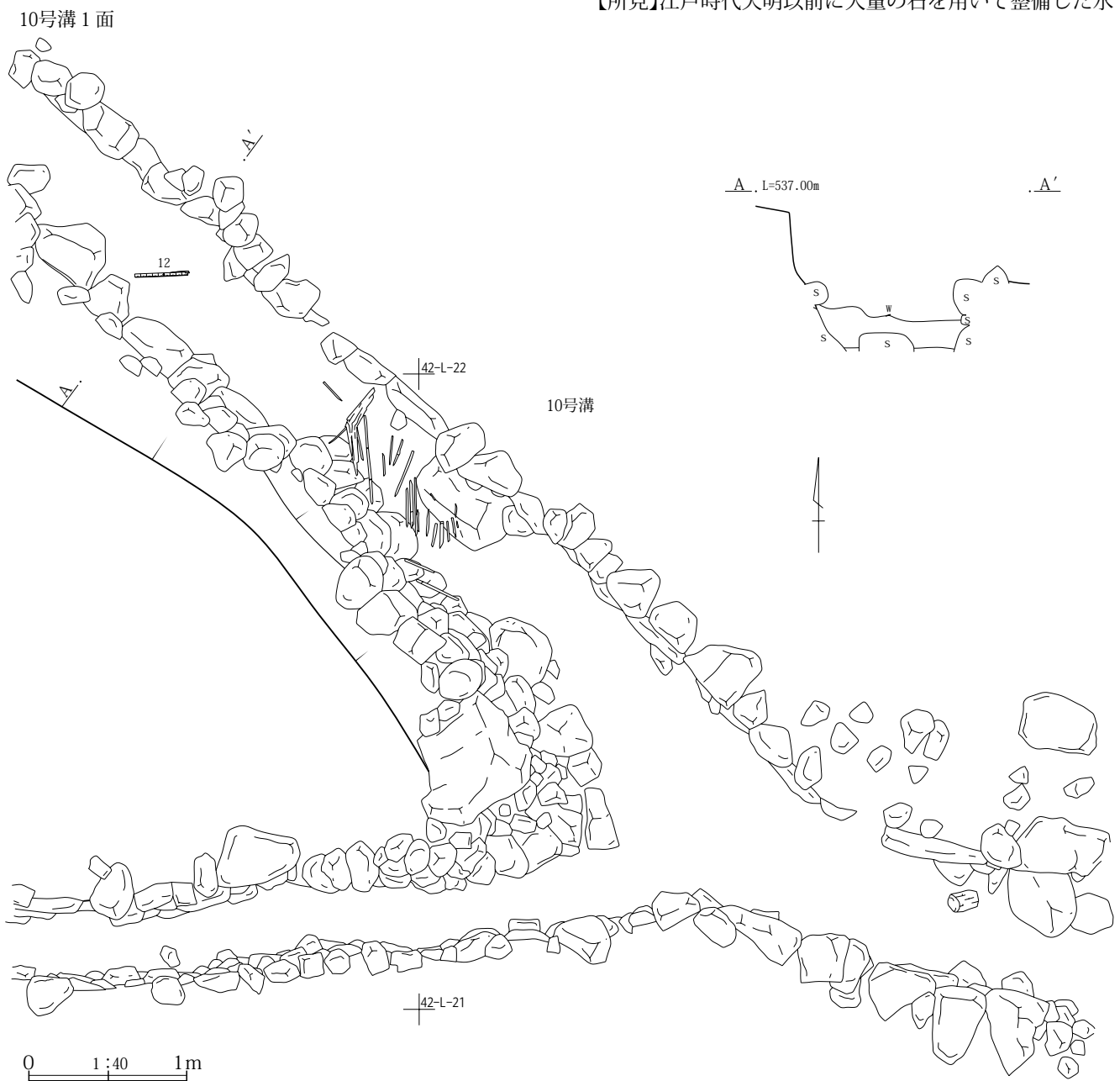
【所見】江戸時代天明以前に集落の中心を流れる水路として大量の石を用いて整備した水路である。調査した範囲は溝の一部であり、溝はさらに上流や下流にも繋がっているものと思われる。調査範囲内だけでも溝の両岸に積まれた石は、膨大な量であり大工事であったと思われる。10号溝は復旧され、その後改修を重ねながら平成段階まで使用されていた。

(イ)12号溝(第138・200図、PL.66～68・118)42区L～Q-20・21グリッドに位置する。

【位置・確認状況】12号溝は8号屋敷跡の北側、石捨て場(ヤックラ)の東端付近から始まり、4・5号屋敷跡西側付近で10号溝と合流している。

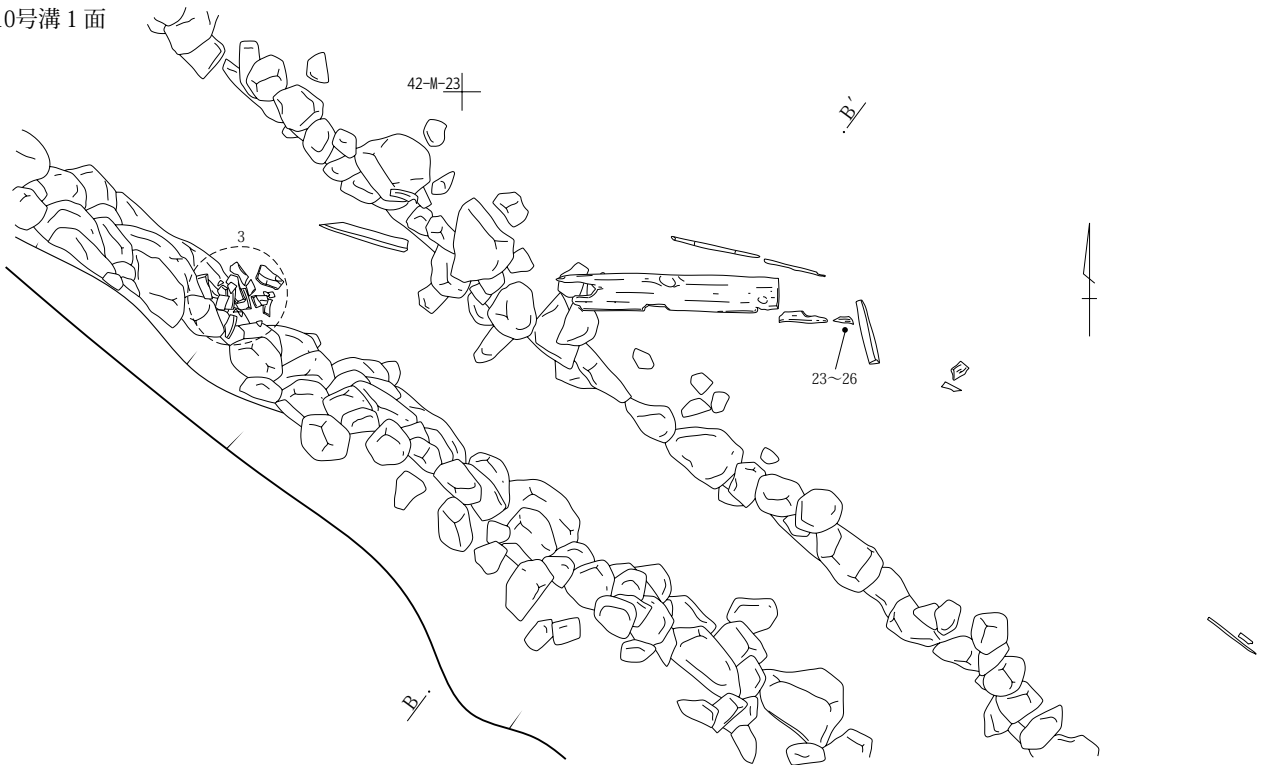
【形状・規模・構造】溝の両岸はすべて石垣が築かれている。溝の両側に積み上げられている石垣は、自然石を3段前後積み上げている。石の積み方は10号溝とほぼ共通する。使われている石の大きさは、上流や下流で特に使い分けられている様子は無い。溝の長さは、23.0mで落差(標高差)は2.85mである。幅30cm前後、深さは60～70cmである。

【所見】江戸時代天明以前に大量の石を用いて整備した水



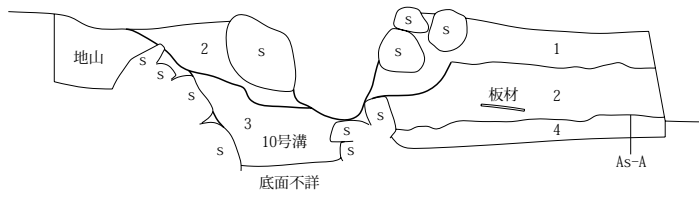
第142図 IV区10号溝1面遺物出土状況(1)

10号溝 1面



B, L=537.50m

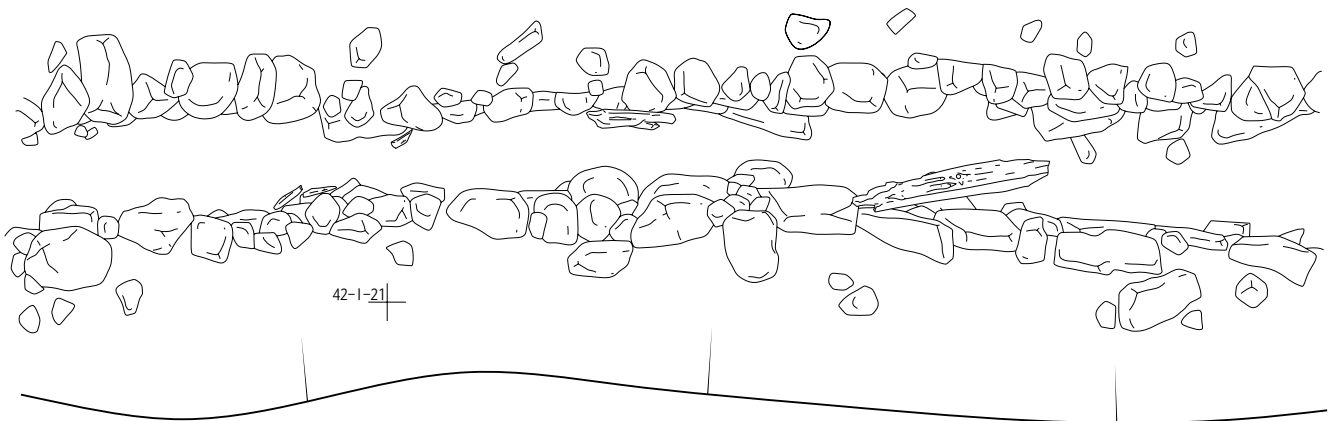
B'



10号溝 B-B'

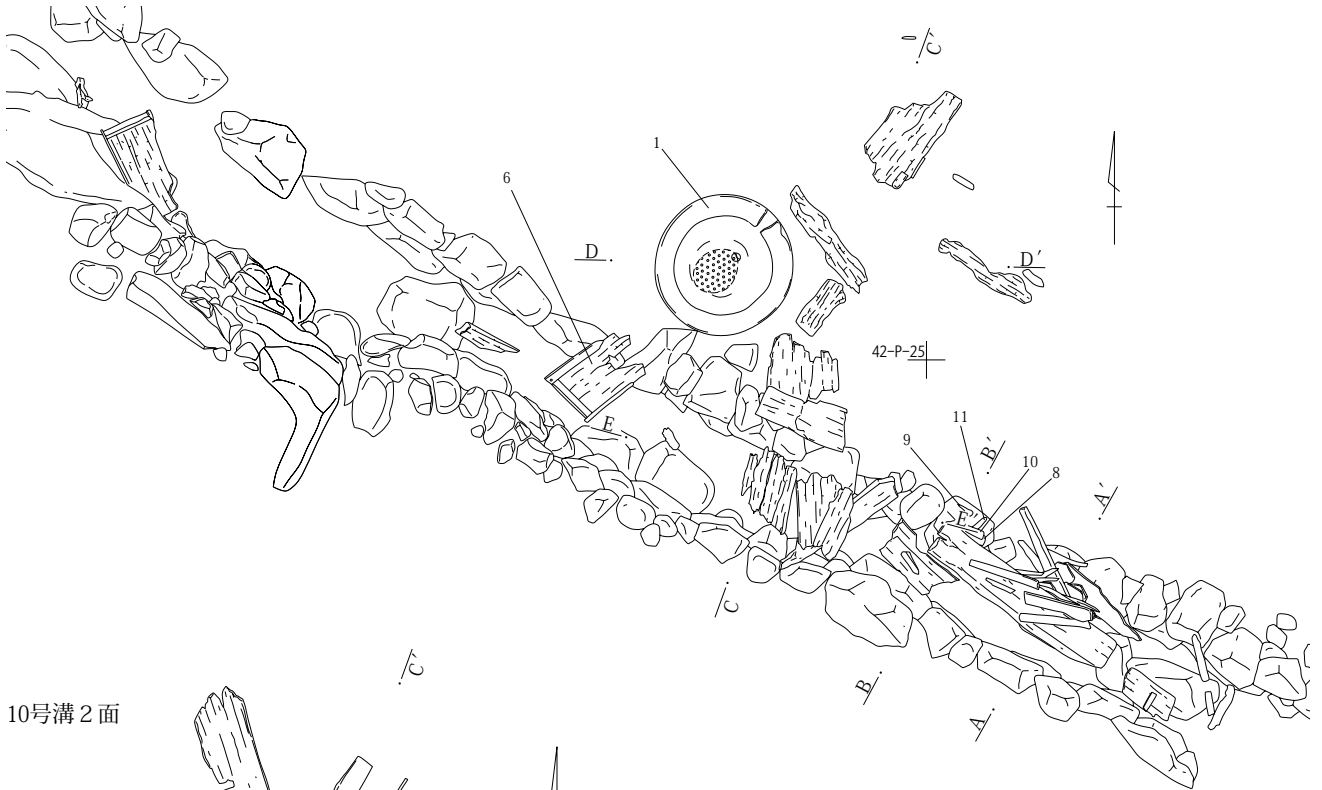
- 1 天明泥流。
- 2 やや明るい天明泥流。
- 3 粘性を帯びた天明泥流。
- 4 浅間A軽石下耕作土。上面に薄く浅間A軽石が堆積。

10号溝 1面

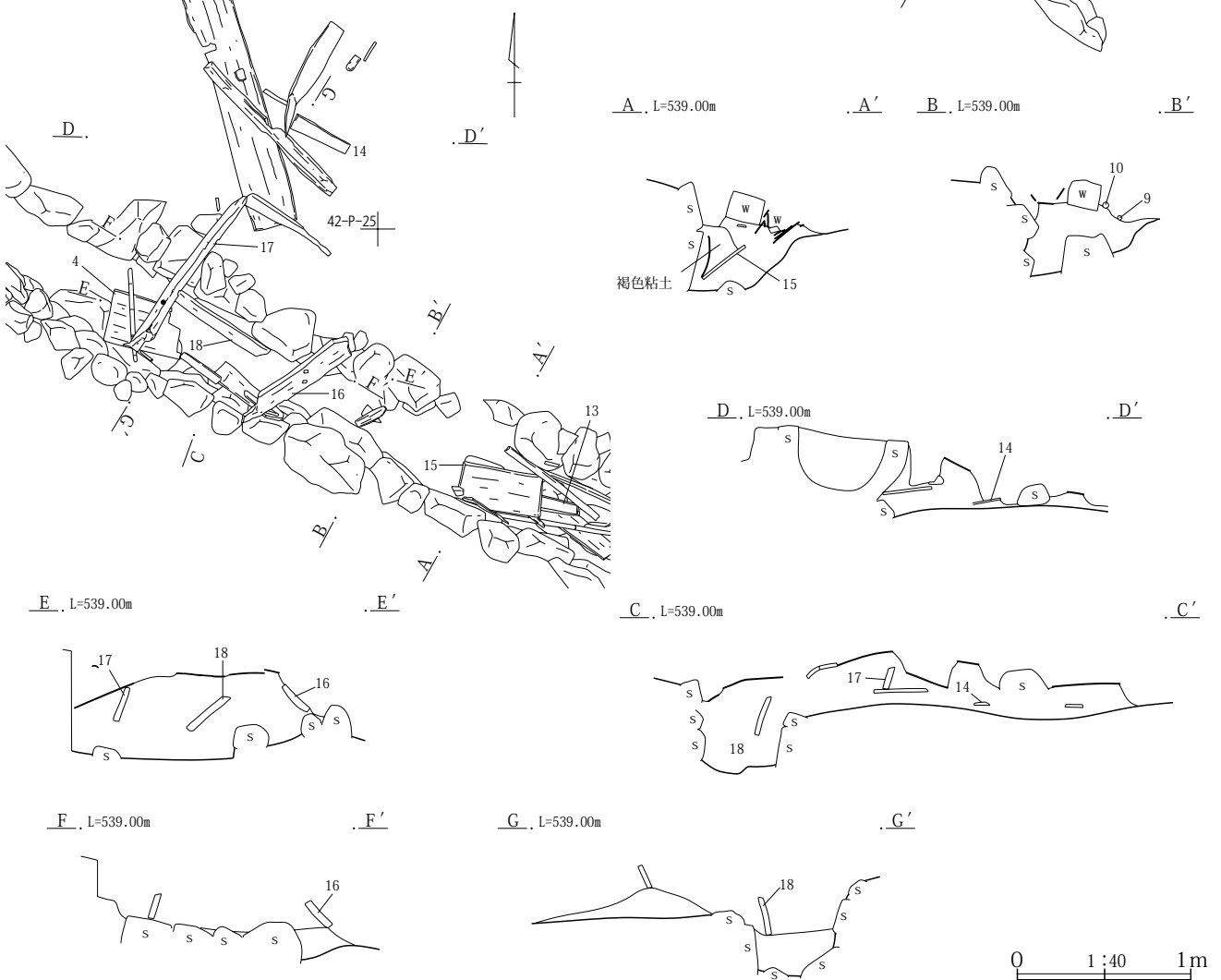


第143図 IV区10号溝1面遺物出土状況(2)

10号溝 1面



10号溝 2面



第144図 IV区10号溝1・2面遺物出土状況

路である。天明泥流以前の段階で土石流等により埋没し、その後溝底面まで掘りなおされることは無かった。埋没後溝上面を深さ20cm程度掘り、水路として機能させていた。水が8号屋敷跡や29c号畑に流れ込まないように南側を特に厚い土手状に盛り上げている。溝底部には浅間A軽石が良好に残っており、天明泥流段階で浅い溝が機能していたことを示している。30号畑、8号屋敷跡や29c号畑の境にある溝で、8号屋敷跡や大量の石を積み上げた石捨て場(ヤックラ)や畑等から流れ出す雨水等を流す溝と思われる。

③24号石垣(第145図)42区Q・R-20~25グリッドに位置する。

【位置】10号溝南側30号畑と32号畑の中央に位置する。2つの畑を区分するように等高線に沿ってほぼ南北方向に積まれている。

【規模・構造】西から東に向かって低くなるなだらかな斜面に作られた畑の中段に位置する。石垣の長さは19.4m、石垣の高さは、南側で60cm、北側では1.20mある。石垣を繋ぎ2つの畑をなだらかな傾斜にしている。使われている石垣の石は、南側と北側で少し異なる。段差が少ない南側の石垣は、横幅50~80cmのほぼ一定の石を用いて1~2段積んでいる。北側の石は、横幅70~110cmの大きな石を6個使い他は20~50cmの石を2~6段ほど積んでいる。

【所見】石の大きさが揃いの石垣である。造られた時期が違うのであろうか。

④石捨て場(ヤックラ)(第146・147・200図、PL.118)42区P~U-19~21グリッドに位置する。

【位置・概要】発掘調査された東宮遺跡集落の中央部西側に位置し、8号屋敷跡北西部、30・32号畑南側に位置する。石捨て場とは、大量の小さな石が積み上げられている遺構をこのように呼称した。発掘の中ではヤックラと呼称することが多い。おそらく耕作等により出土した不要な石を一定の場所に捨て、それが長い間に大きな山となったものと思われる。

【規模】不定形を呈している。西側の一部は重機により掘りすぎたため規模は概数で示す。長軸方向24.0m短軸方向10.0m、積まれた石の高さは最も高い場所で1.00mである。

【所見】天明泥流以前の耕作土の多くは、西側の山から流

れ出した土石流を基本としていると思われる。この土石流中には、大小の石が大量含まれている。耕作等に伴い出土した石を集落内の一定の場所にまとめて捨てた場所がこの石捨て場(ヤックラ)と思われる。石の大きさは様々であるが、石垣で使われている大きさの石は少なく、幅20cm以下が大部分である。

⑤34号石垣(第146図)42区R~T-17~20グリッドに位置する。

【帰属時期】天明泥流被災後

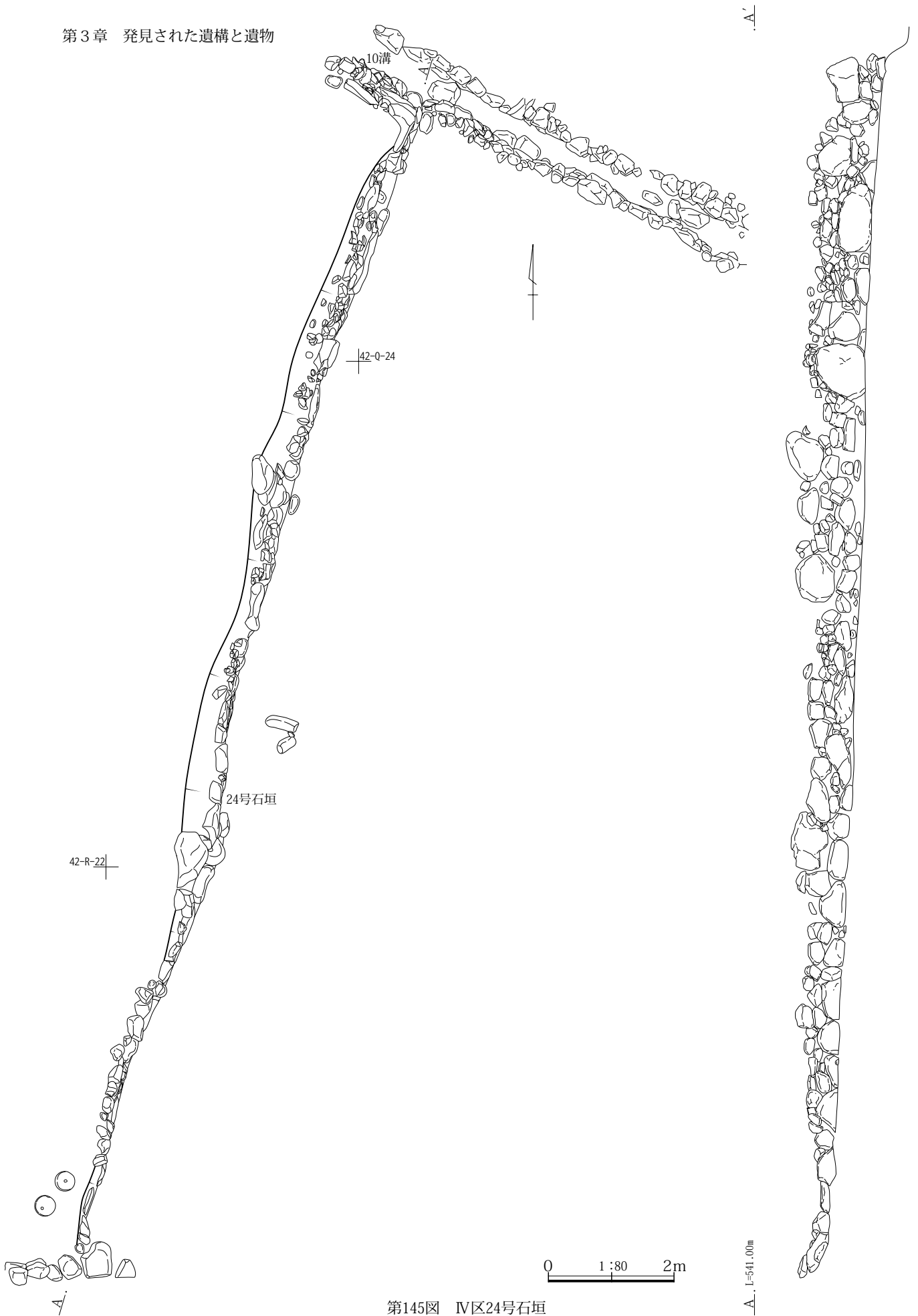
石捨て場(ヤックラ)の南で25号石垣の西北に位置する。両石垣とも西側の高い斜面を削り石垣を築いて東側に平地を確保している。天明泥流が薄く、畑の耕作痕が残っていない場所に位置する。両石垣は細長い石を斜め方向に積む谷積の特色を持っており、天明泥流下に埋もれている細長い石を横方向に積む平積と異なる。天明以降に積まれた石垣と思われる。34号石垣は、北東方向から南西方向にコの字型で積まれている。石垣は2~3段積み、使われている石は、幅30~40cmの大きな石が多い。石垣の長さは11.2m、石垣の高さは最も高いところで60cm前後である。

⑥炭窯(第146・200~202図、PL.68・72・118~201)42区S-20グリッドに位置する。

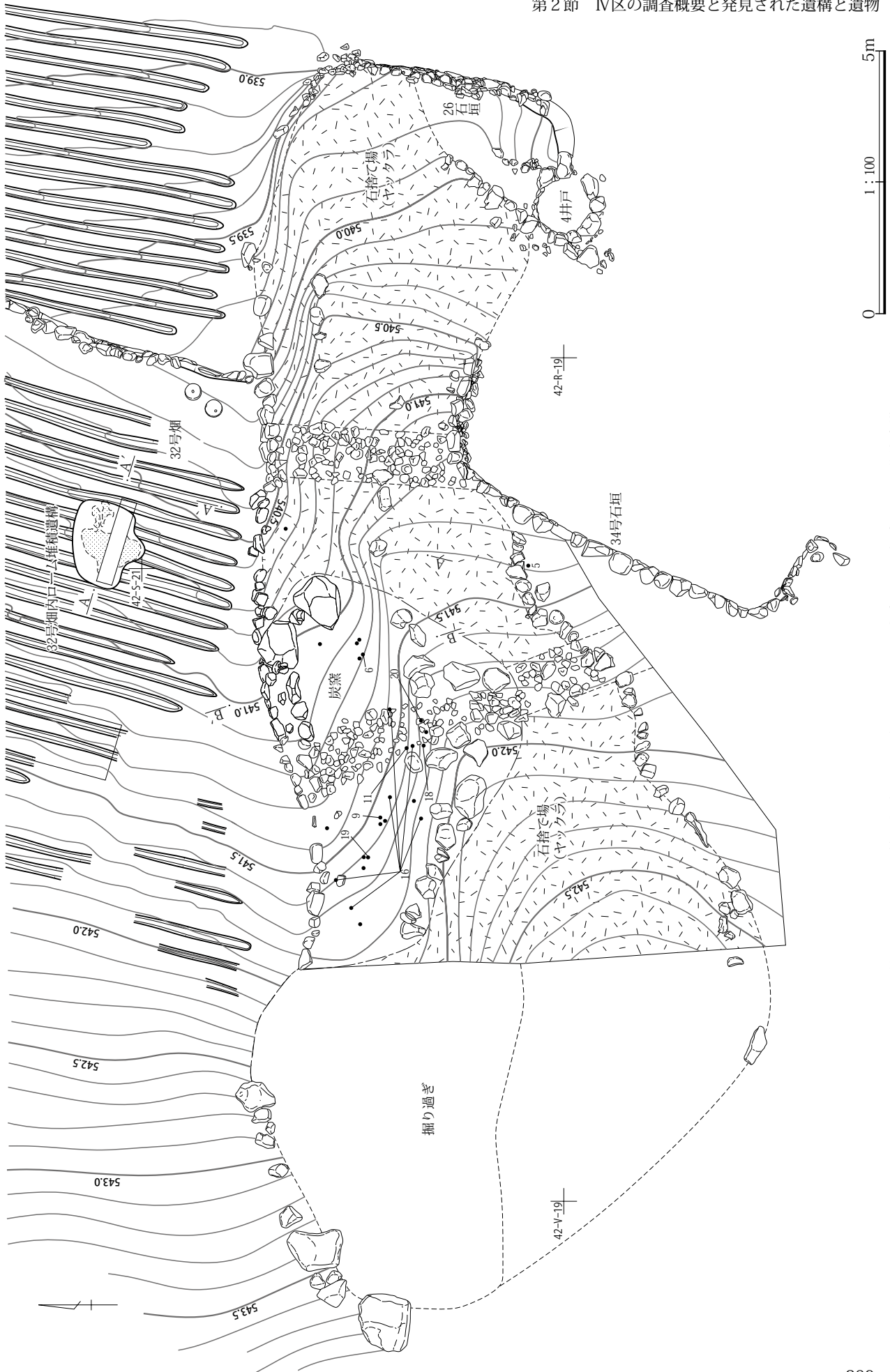
【位置・概要】石捨て場(ヤックラ)中央部北側の一角を削り込んで作られている。石捨て場(ヤックラ)の北側を調査すると、大量の粉炭が出土した。この炭は雨水等により流れ出し、12号溝の西側覆土上層および30号畑の下にある畑面からも確認された。調査する中で炭が厚く堆積している場所はほぼ一定であるので、この場所に炭窯があったと推定して調査を進めた。厚く堆積している炭範囲を囲むように幅50~100cmの石が半円形に並び、その中から多くの陶磁器が出土した。その陶磁器は、表面の釉が熱を受けて一部発泡していた。ここで陶磁器が高温の火を受けていることが明らかとなった。しかし炭窯に用いられたであろうロームとそれが焼けた焼土等の壁材は全く出土しなかった。不明な点が多いが、当初の推定通り炭窯として呼称し報告する。

【規模】長軸7.50m短軸4.50m厚く炭が堆積している土層の厚さ35cm以上。

【所見】畑として利用されていない石捨て場(ヤックラ)の一部を利用して造られた施設である。大量の粉炭が出土



第145図 IV区24号石垣



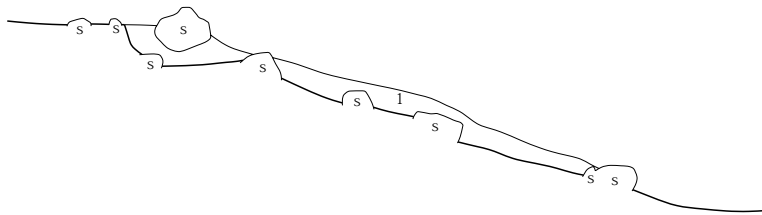
第146図 IV区石捨て場(ヤックラ)、34号石垣、炭窯、32号畑内ローム堆積遺構

第3章 検出された遺構と

炭窯

A, L=542.00m

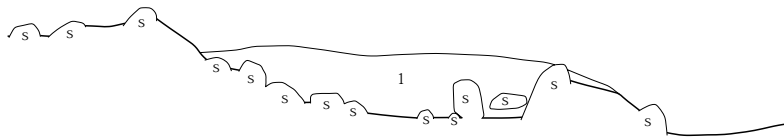
A'



炭窯

B, L=542.00m

B'



炭窯 A-A'・B-B'

1 黒褐色土 炭を多量に含む
他、ローム粒子少量混入。
※覆土中より陶磁器片等が多量
に出土。

32号畑内ローム堆積遺構

A, L=541.00m

A'



32号畑内ローム堆積遺構A-A'

1 黄褐色ローム質土。
2 暗褐色土。

0 1:40 1m

第147図 IV区石捨て場(ヤックラ)、34号石垣、炭窯、32号畑内ローム堆積遺構断面

し、出土陶磁器が高温を受けており、火を焚いた施設であることに間違はないと思われる。炭窯として報告したが、遺構の性格は不明である。

⑦32号畑内ローム堆積遺構(第146図)42区R・S-21・22グリッドに位置する。

【位置・概要】32号畑南端で石捨て場(ヤックラ)および炭窯北側に近接した場所にある。畑の畝サクの上にロームが貼られていた。ロームは畝サクの耕作痕を反映して凸凹を呈していた。浅間A軽石は畑の畝サクとロームの間および貼られたロームの上にも無かった。

【規模】ロームが貼られた範囲は明確でないが、東西1.55m南北1.40mの範囲内で3カ所残っていた。残りの良い中央部のロームの厚さは5cmであった。

【所見】畑内の畝サクの上になぜロームが貼られていたのだろうか東宮遺跡では例がないので畑ではなく南に接してある炭窯に関連した遺構と考えたい。炭窯自体が明らかではないが、大量の炭と陶磁器等の遺物を出土している遺構である。この遺構に関連した物置等のために、ロームを持ち込んで整地した遺構ではないだろうか。

⑧調査区西端中段の道と石列群(付図1、第202図、PL.68・119)42区X・Y-22~25、43区A・B-22~25、52区X・Y-1・2グリッドに位置する。

標高543mより高いなだらかな傾斜面には、天明泥流が浅く畑は残っていなかったが、明治6年の壬申地引絵図には、畑として記録されており、おそらく天明三年段階でも畑として耕作されていたものと思われる。標高545m付近になると急傾斜面となっている。明治6年の絵図には、下畑と記されているので、条件は非常に悪いが畑として耕作されていたようである。その急傾斜面の中段に明治6年の絵図に書かれている道がある。この道は最近まで使われており、現在でも歩くことができる。天明三年段階に使われていたかの確認のための2本のトレンチ調査を実施した。しかし浅間軽石を被った道路面を確認することはできなかった。また急傾斜面の途中や急傾斜面からなだらかな傾斜面に変換する地点に大小の石を並べているので、遺構の存在を推定した調査を行った。しかしこの石列は、急傾斜面からの落石や土砂が畑に流れ込まないように並べられたものと思われる。並べられた時代を特定することもできなかった。

⑨出土遺物(PL.69～72・113～118)

10号溝は常に水があり、そこに堆積した木製品を保存していた。多く出土した場所は12号溝の合流部分北西部分と7号屋敷跡水場である2号井戸周辺である。

10号溝は水の影響で木製品が多く出土しており、盆(4～7)、竹製鯨尺(12)、階段(16～18)などが出土している。階段の踏み板(18)は遺物ラベルに17の測板と組み合わさっていた状態で出土したことが記されていた。木栓は4点(8～11)出土している。8は「ハコノミ」と考えられる。また、鹿角も1点出土している。鹿角は角座下に切断痕が認められ、落角ではないことは明瞭であるが、他に加工痕は認められない。金属製品では鋳掛けにより補修された鉄鍋(20)が目される。21の箸状の製品は、アルミのような金属であり、陶磁器にも近現代製品の混入が認められ、本製品も混入品の可能性を考えておきたい。陶磁器類は近現代の磁器を円盤状に加工した1や文様部分が欠損する柳碗(2)、八ッ場ダム関連調査では出土量が少ない土器火鉢(3)が出土している。

10号溝出土の非掲載遺物は、陶磁器類は中世の在地系鉢・鍋類が1点37g、江戸時代の磁器26点280g、陶器21点309g、近現代の陶磁器18点155g、磁器不詳土器4点51g。木製品片や木片、竹片などの植物遺存体123点である。

11号溝からは磁器碗(1、2)と寛永通寶銅1文銭(3)1枚が出土している。磁器碗のうち1点(1)は混入と考えられる近現代の製品である。非掲載遺物は江戸時代の磁器6点37g、陶器5点89gである。

12号溝からは陶器片口鉢(1)と火打金の可能性がある鉄製品(2)が出土している。非掲載遺物は江戸時代の磁器2点9g、陶器6点111g。銭種不明銅銭1枚である。

石捨て場からは陶器皿(1)、鬢水入(4)、香炉(3)と磁器香炉か水入(2)が出土している。なお、1の皿は1号炭窯出土片と接合している。また、陶器皿(1)と磁器香炉か火入(2)には二次被熱が認められる。非掲載遺物は江戸時代の磁器5点74g、陶器1点29g、近現代の陶磁器1点40gである。

炭窯出土遺物は、著しい被熱痕のある陶磁器や熱熱した鉦鼓(19)の存在を特徴とする。出土遺物の残存率は高くないが、碗、皿、すり鉢、在地系土器火鉢など器種は揃っている。なお、12の皿は石捨て場、14のすり鉢は12号溝

との間に接合関係がある。また、17は板などの圧痕が認められる焼土塊であるが、炭窯の壁材ではないと考えられる。非掲載遺物は、江戸時代の磁器60点651g、陶器26点1193g、時期不詳土器1点76gで二次的な熱を受けるものが多い。

北側石列出土遺物は蹄鉄(1)と文久永寶(2)、非掲載遺物が近現代陶磁器1点217gと出土遺物すべてが天明期以降の製品である。

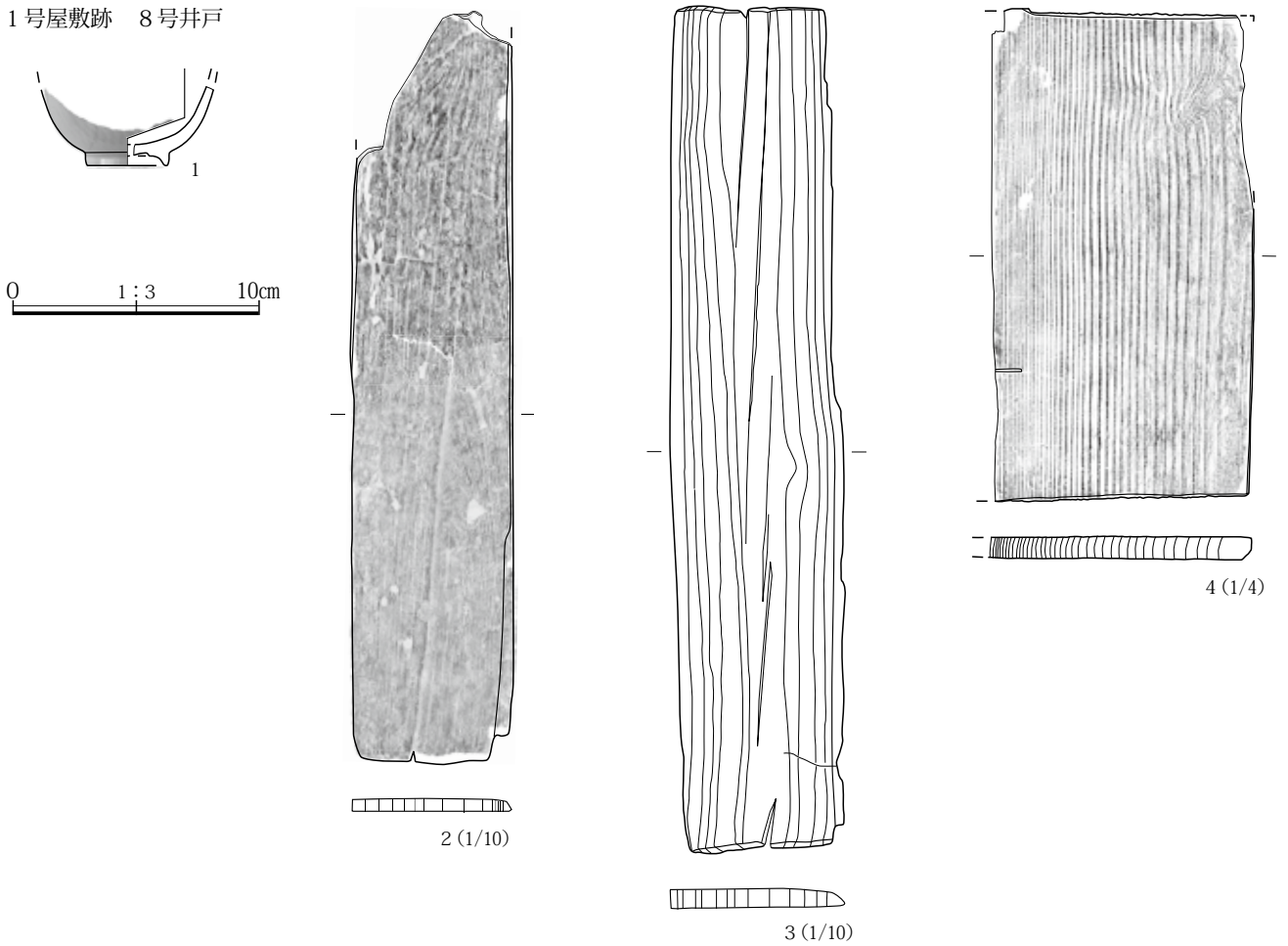
(13)遺構外出土遺物(第203～208図、PL.120～124)

どの建物や畑に属するか判断できない場所から出土したものを遺構外出土遺物として掲載した。遺構外出土遺物は金属製品が多く、製品としては鉋や釘、銭貨が目立つ。釘は、釘箱に入った状態で出土(28～31)しており、単体で掲載した製品(17～19、22～26)も釘箱と共に出土している。サイズ違いが若干混在するものの、釘箱はサイズ別に仕切られていたようである。図示した鉋(10、11)は共柄で、11は石突きを有し、目釘と木質が残る。銭貨は寛永通寶銅銭で1文銭が30枚、4文銭が14枚である。銭貨が不鮮明な製品もあるが、42と57、58、65が古寛永で39と40は古寛永の可能性はある。新寛永の背文字は「文」(60)と「元」(61)が認められる。

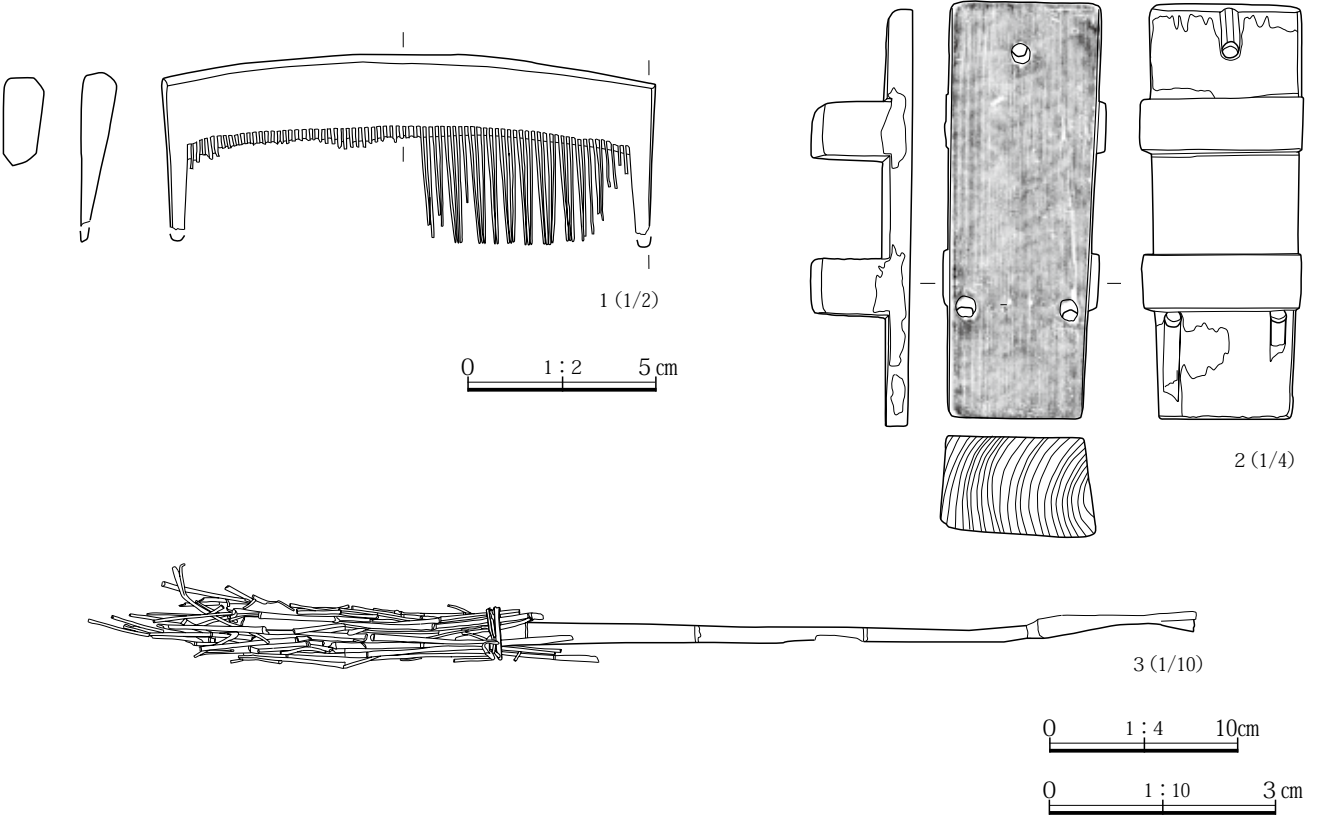
非掲載遺物については6号屋敷で記載している。

第3章 発見された遺構と遺物

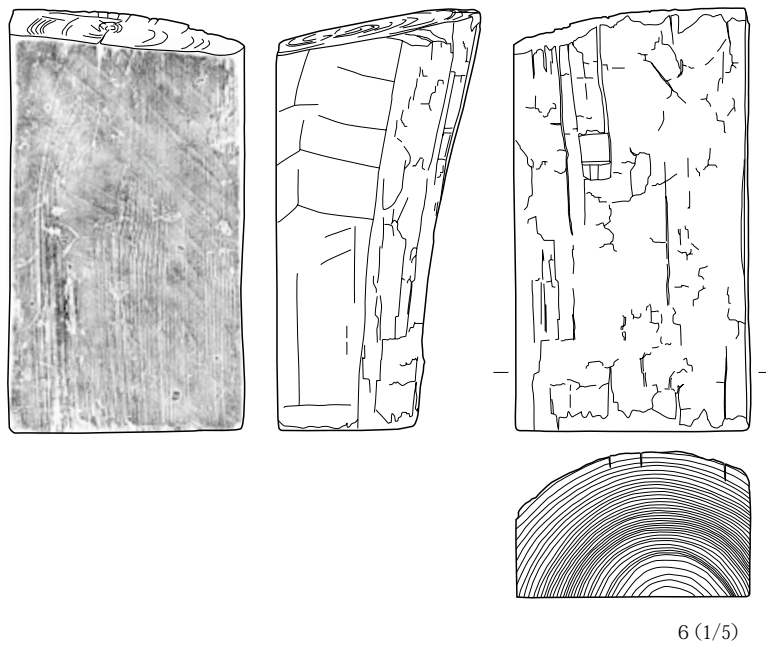
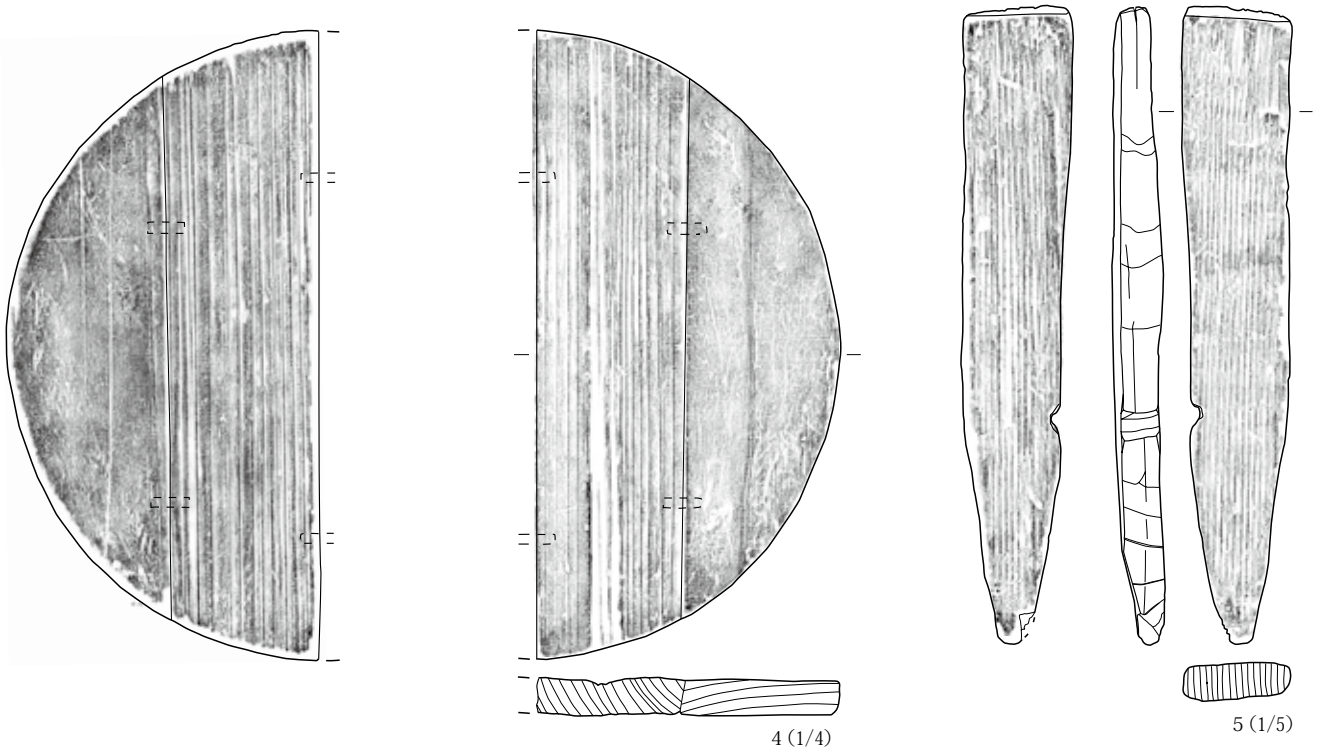
1号屋敷跡 8号井戸



1号屋敷跡 8号溝



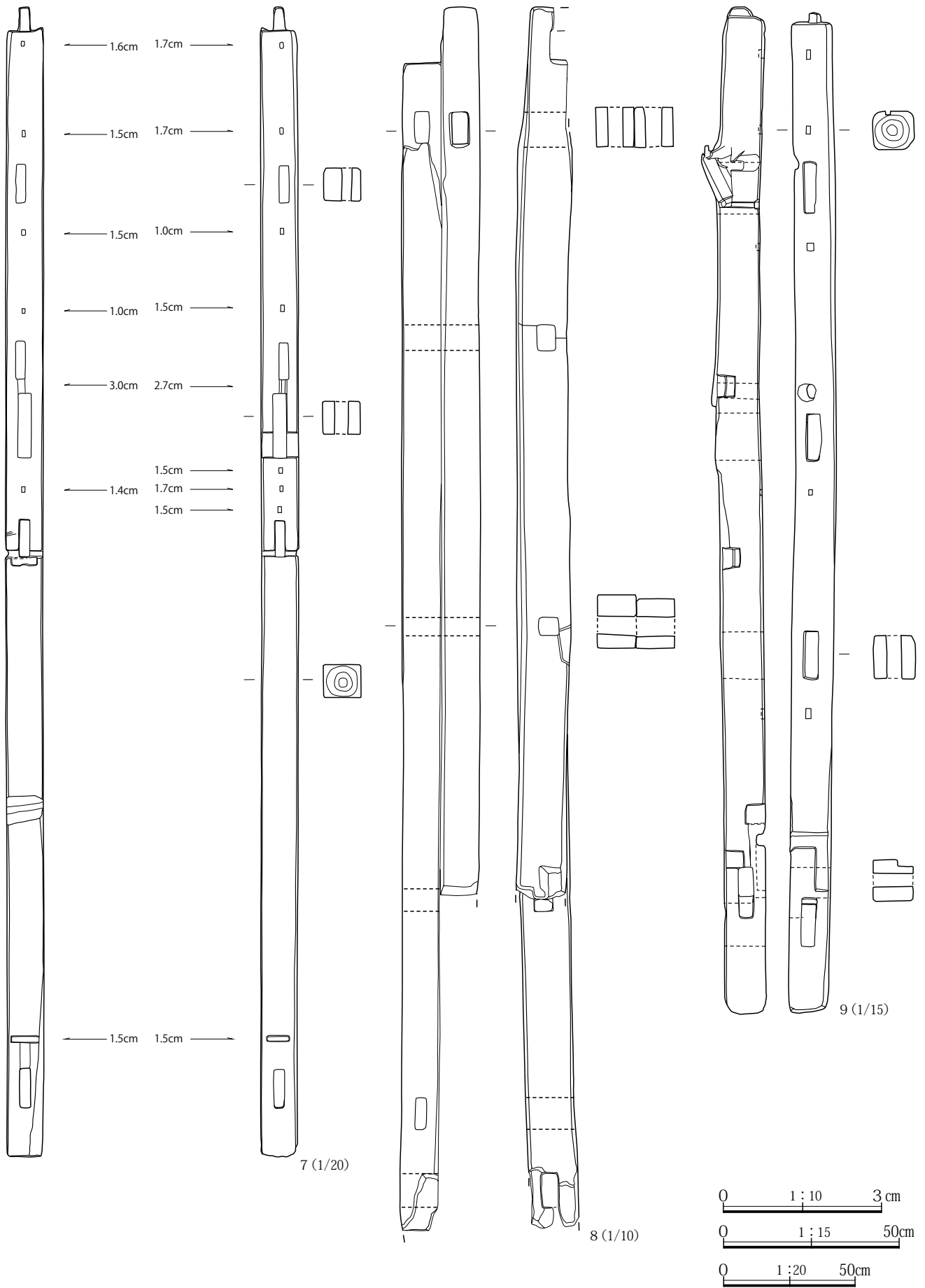
第148図 I区1号屋敷跡8号井戸、8号溝出土遺物(1)



0 1:4 10cm

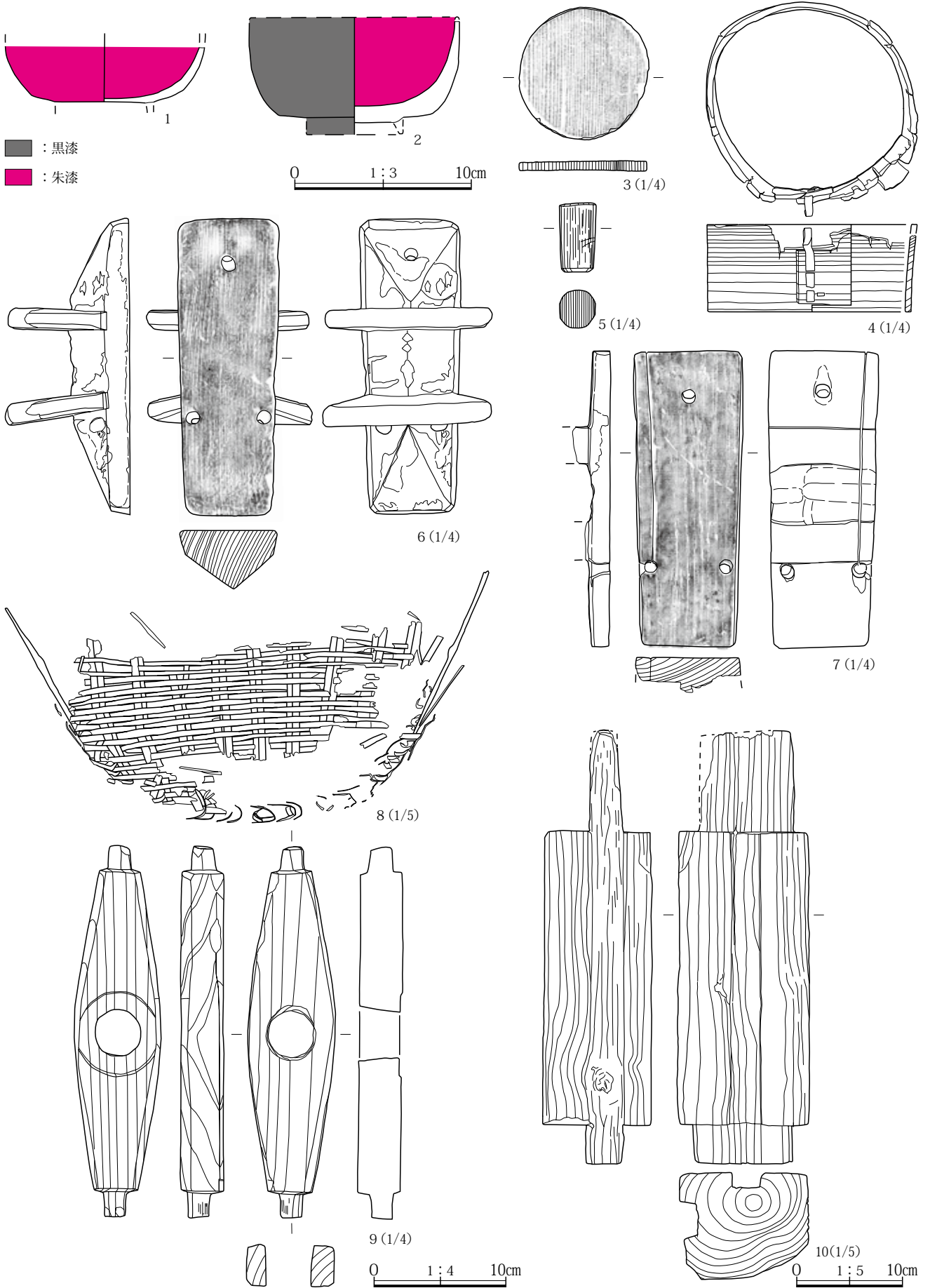
0 1:5 10cm

第149図 I区1号屋敷跡8号溝出土遺物(2)

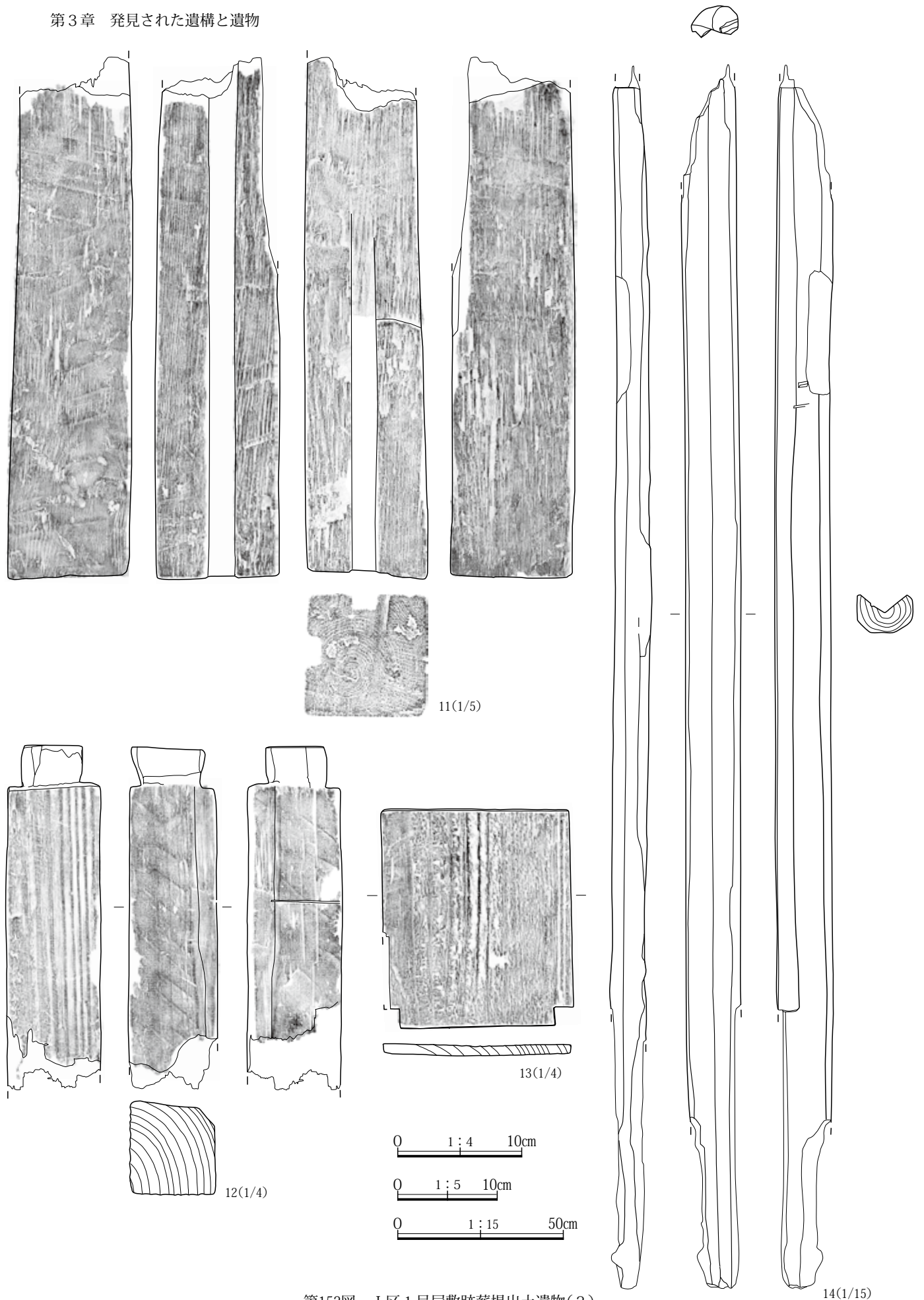


第150図 I区1号屋敷跡8号溝出土遺物(3)

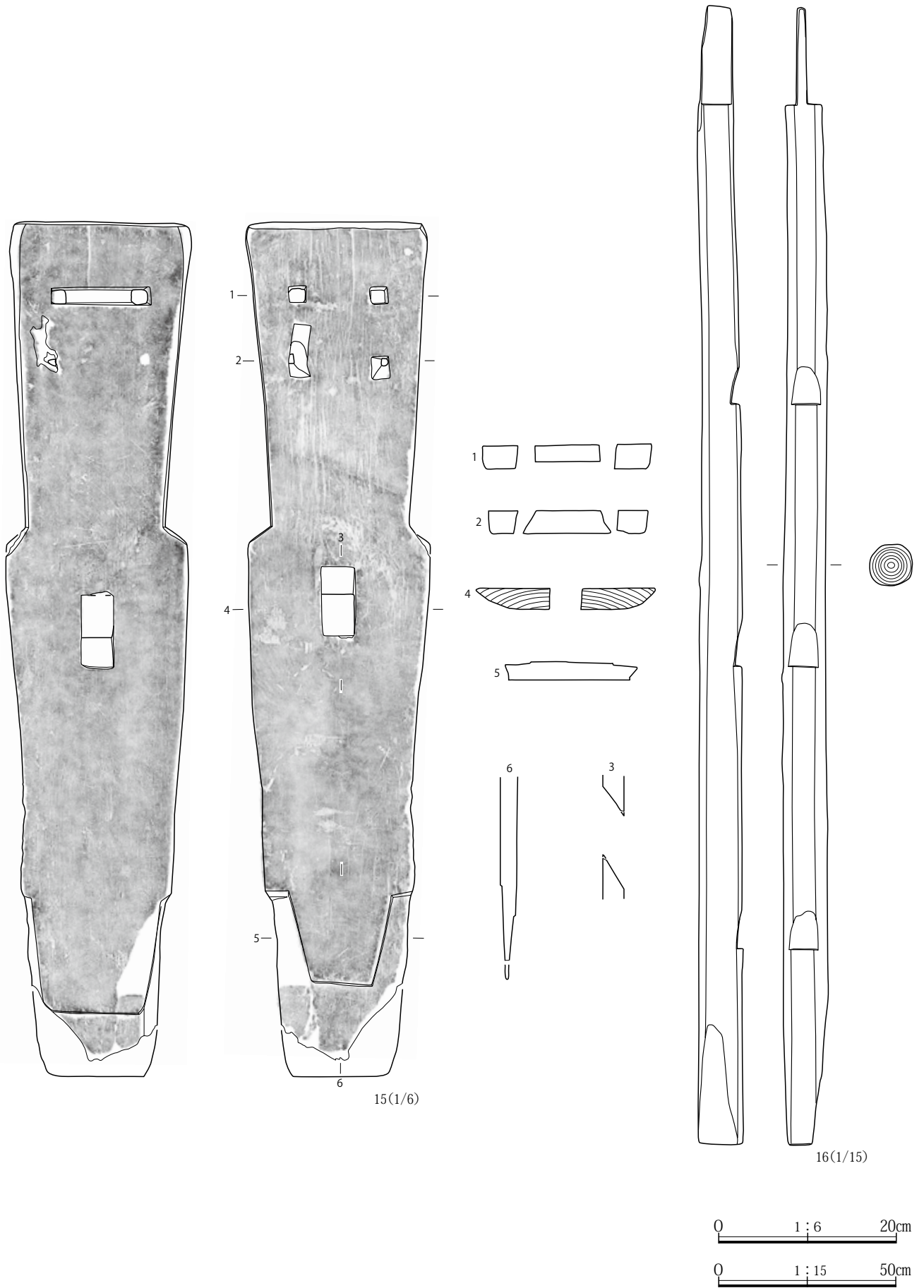
第2節 IV区の調査概要と発見された遺構と遺物



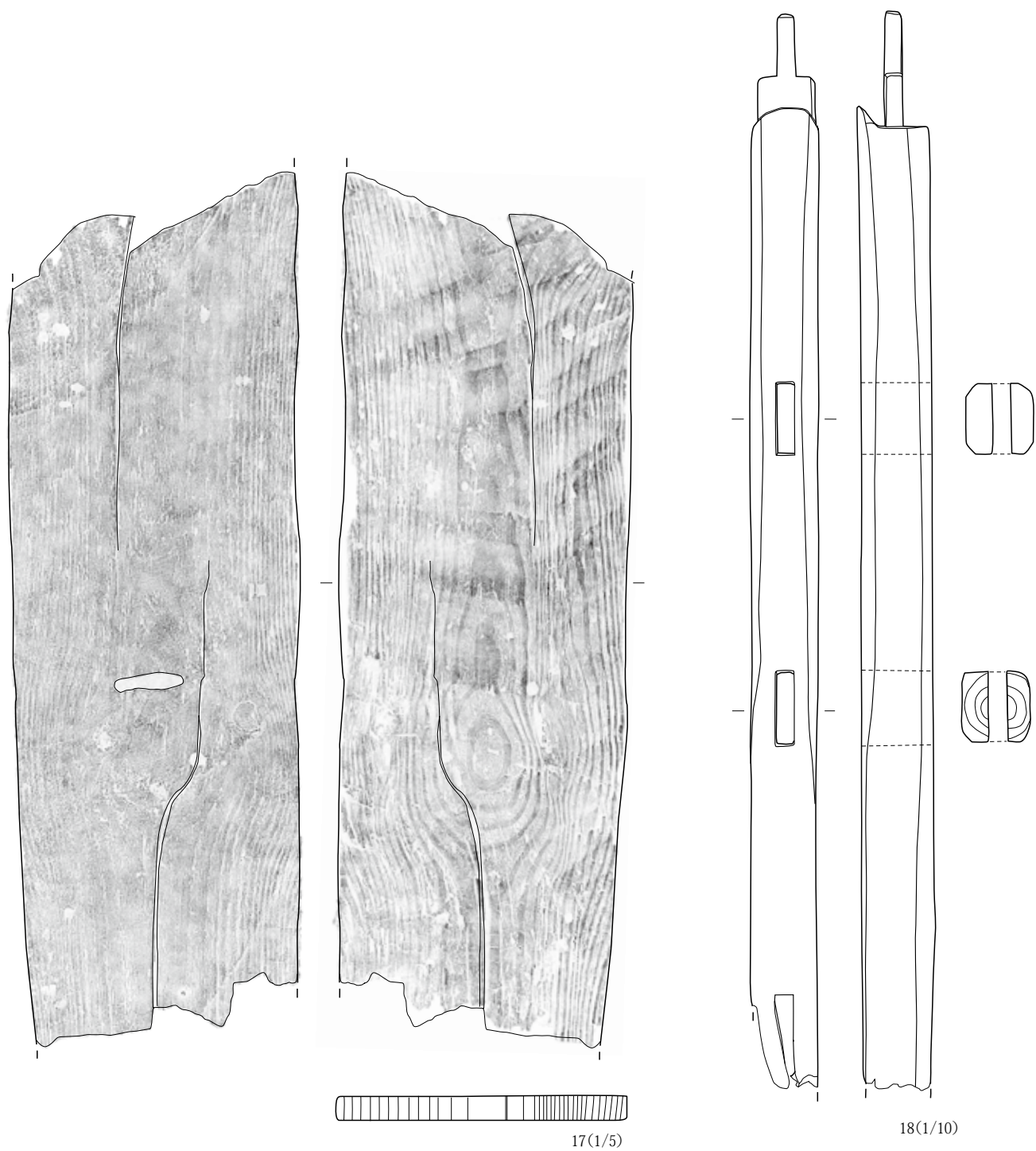
第151図 I区1号屋敷跡薪場出土遺物(1)



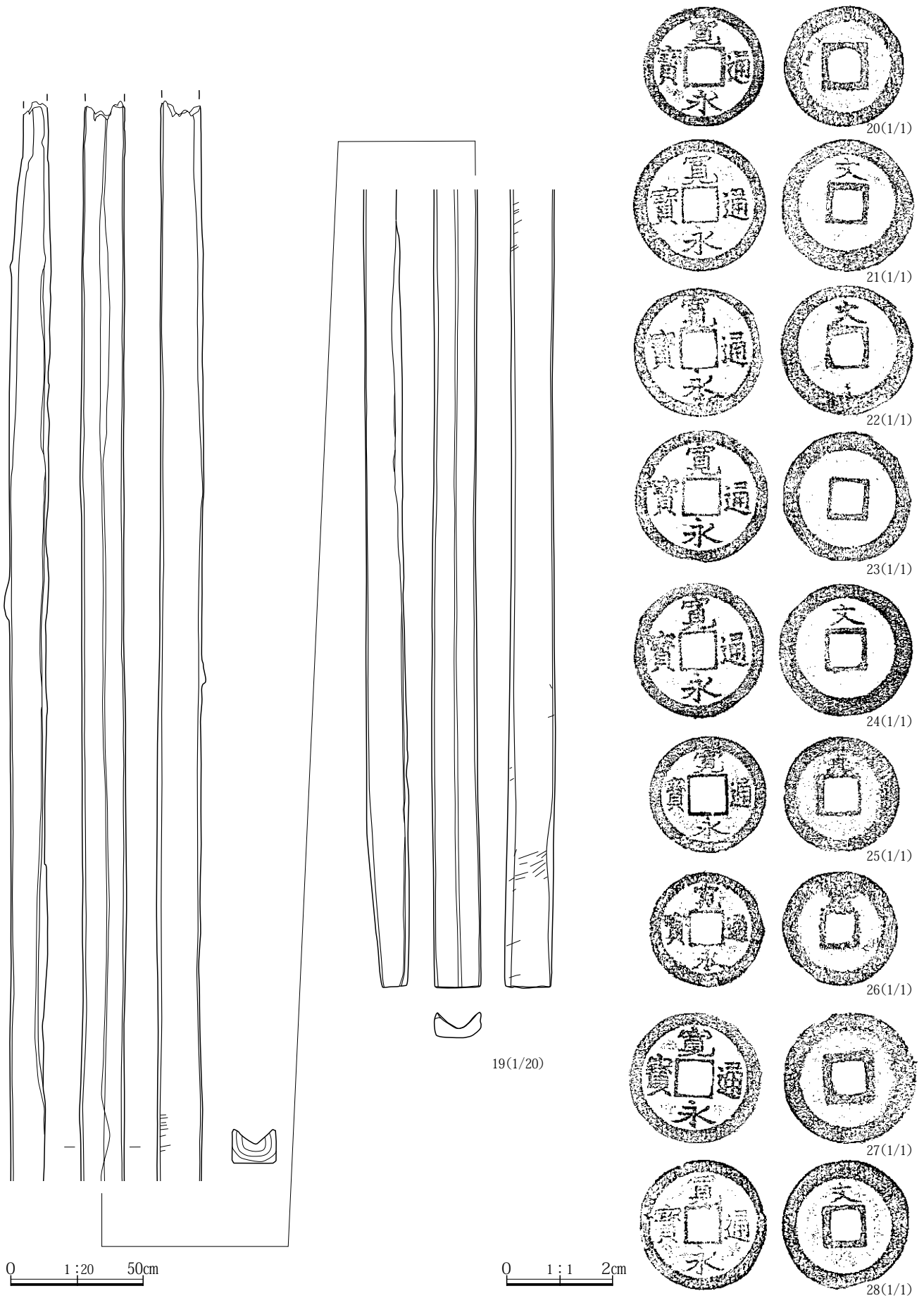
第152図 I区1号屋敷跡薪場出土遺物(2)



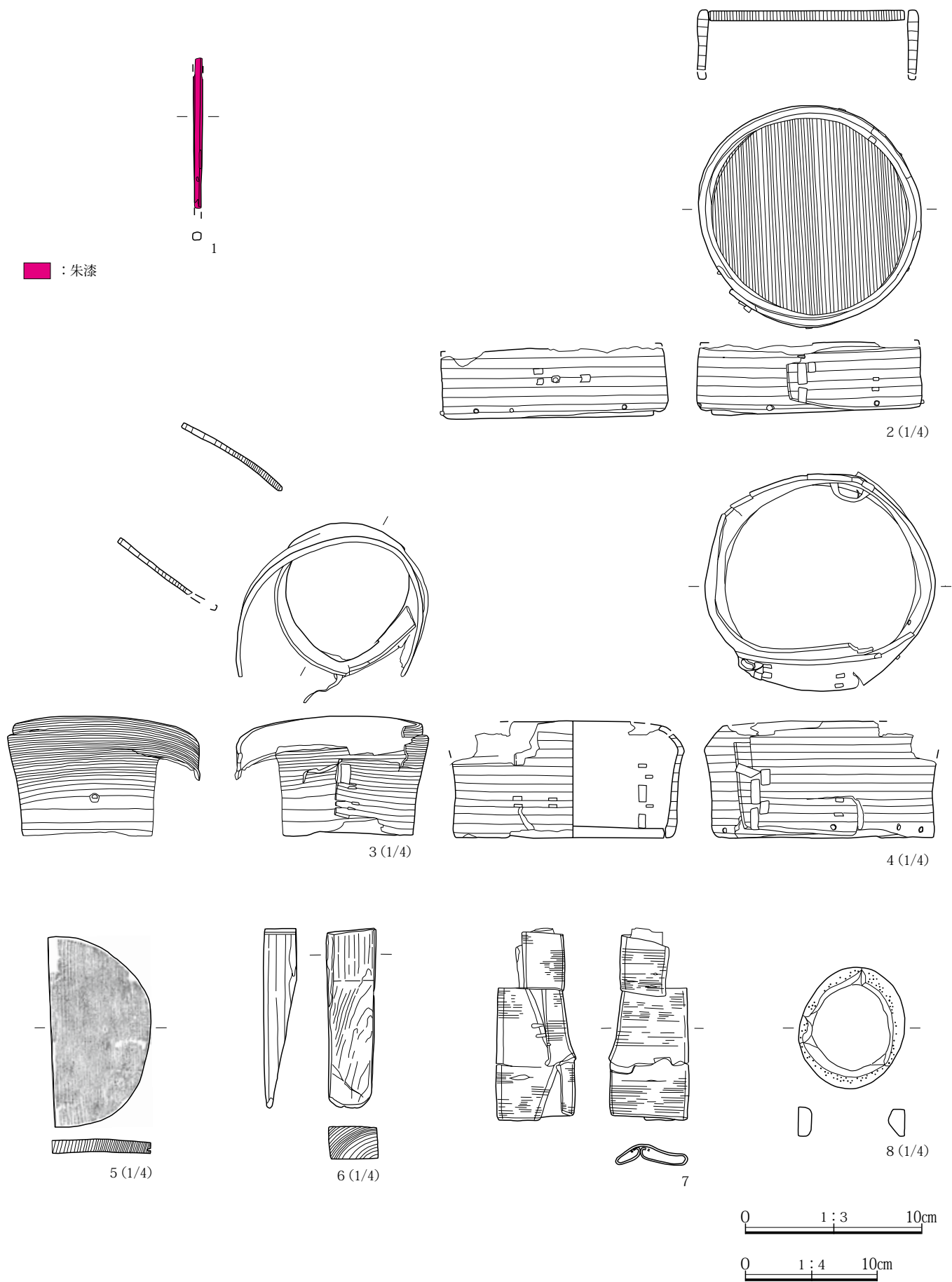
第153図 I区1号屋敷跡薪場出土遺物(3)



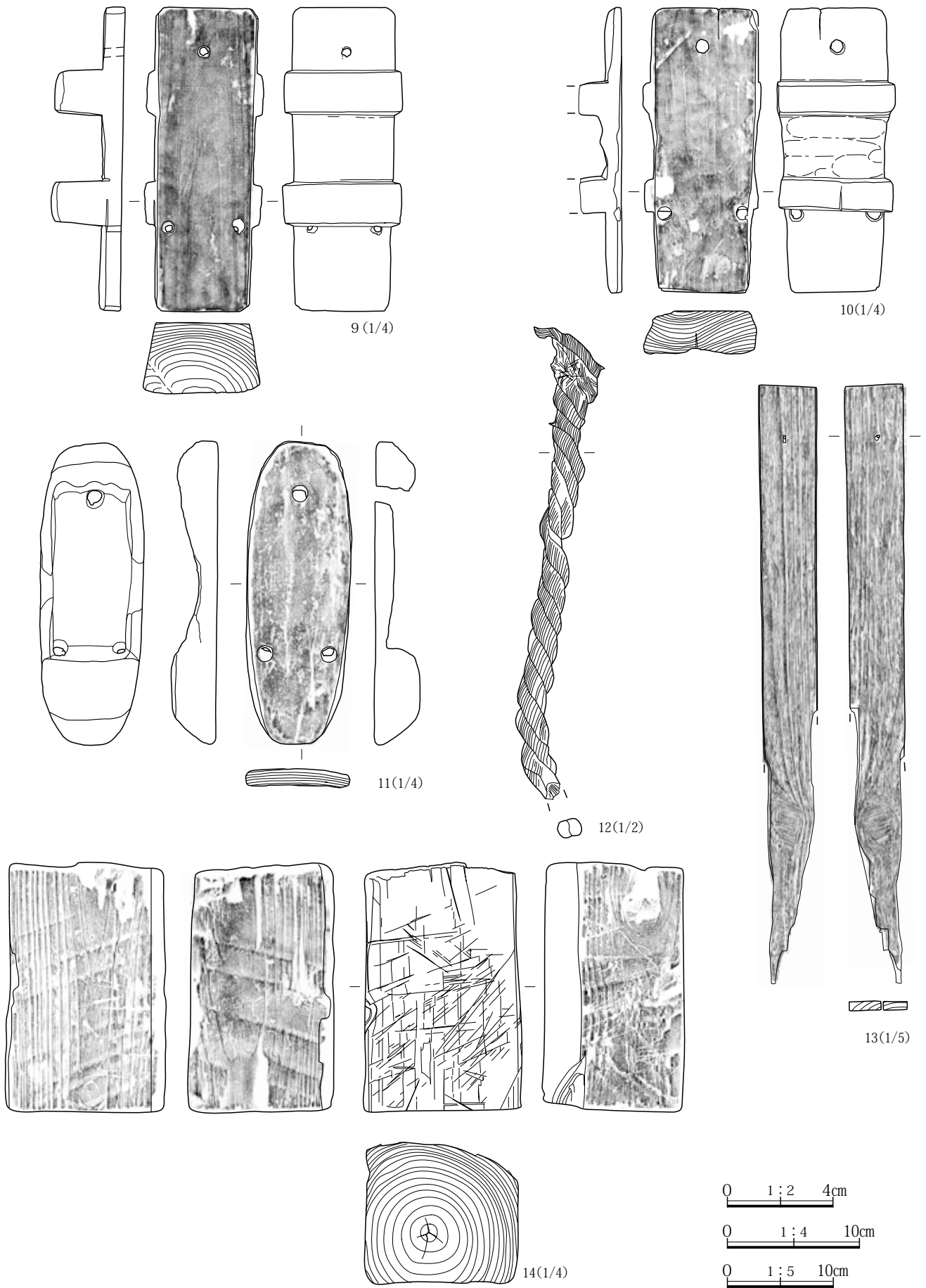
第154図 I区1号屋敷跡薪場出土遺物(4)



第155図 I区1号屋敷跡薪場出土遺物(5)

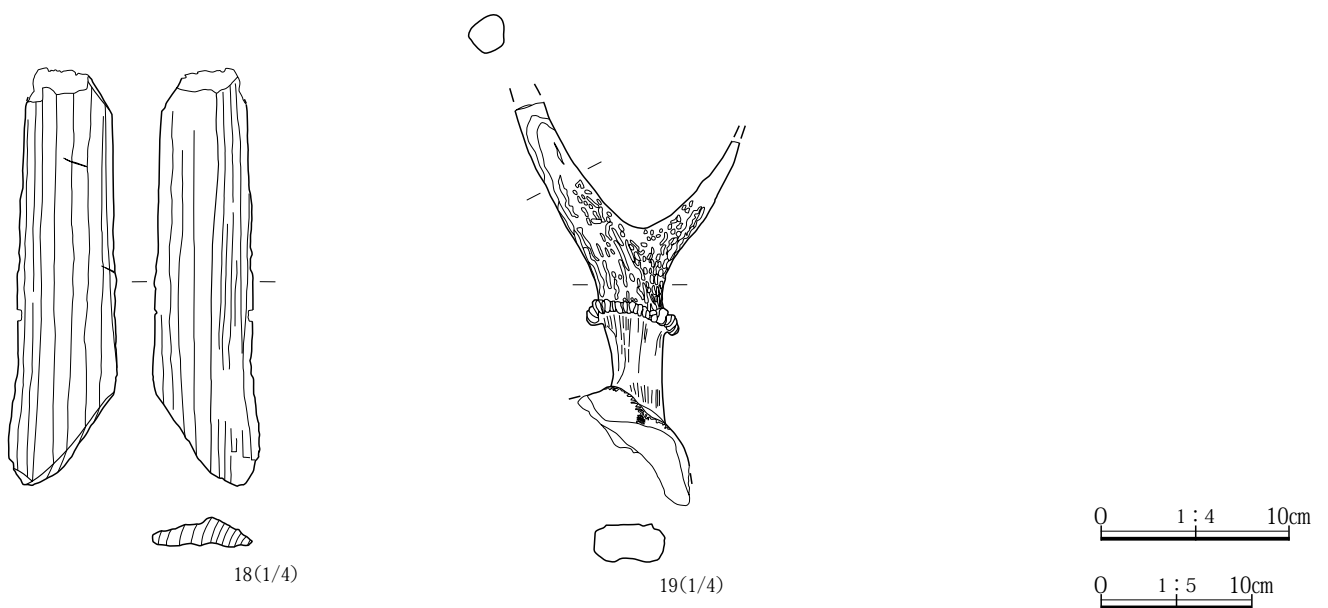
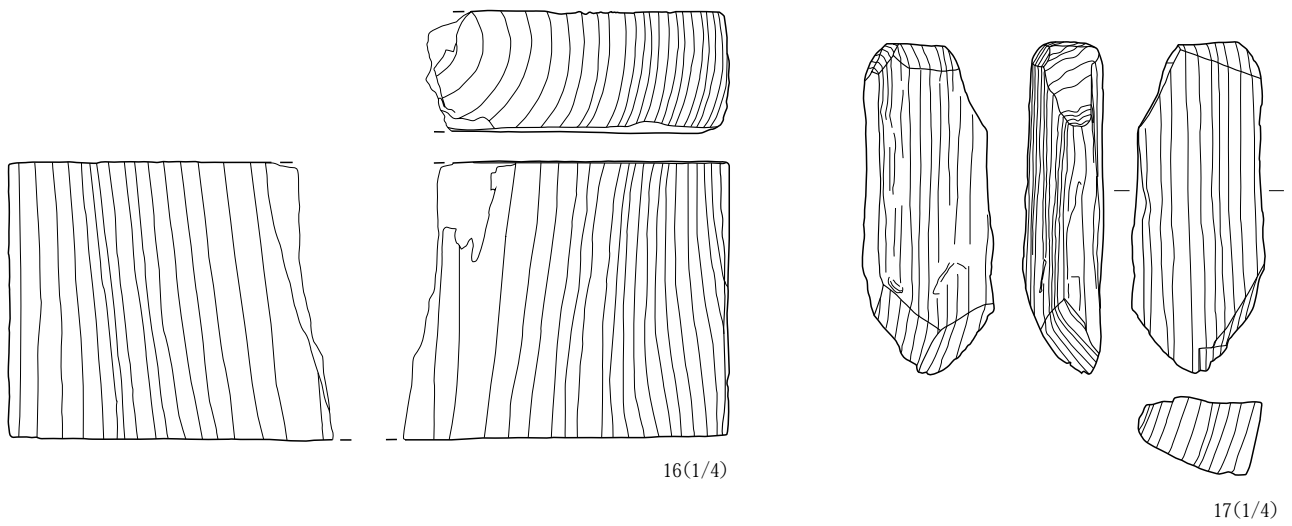
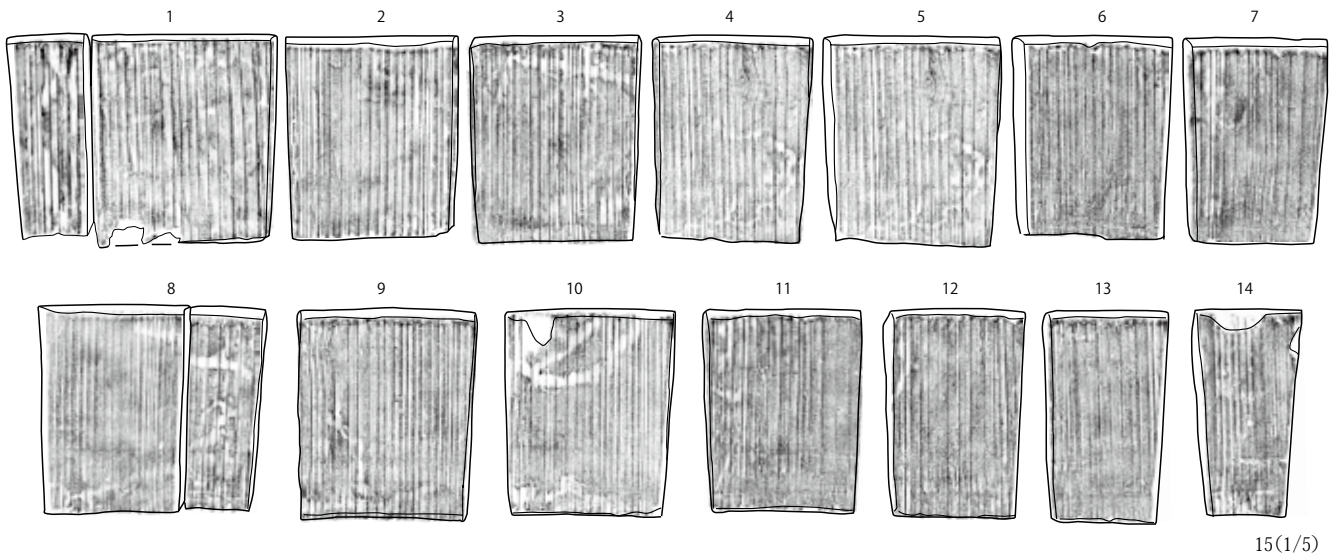


第156図 I区1号屋敷跡天明三年以前の出土遺物(1)

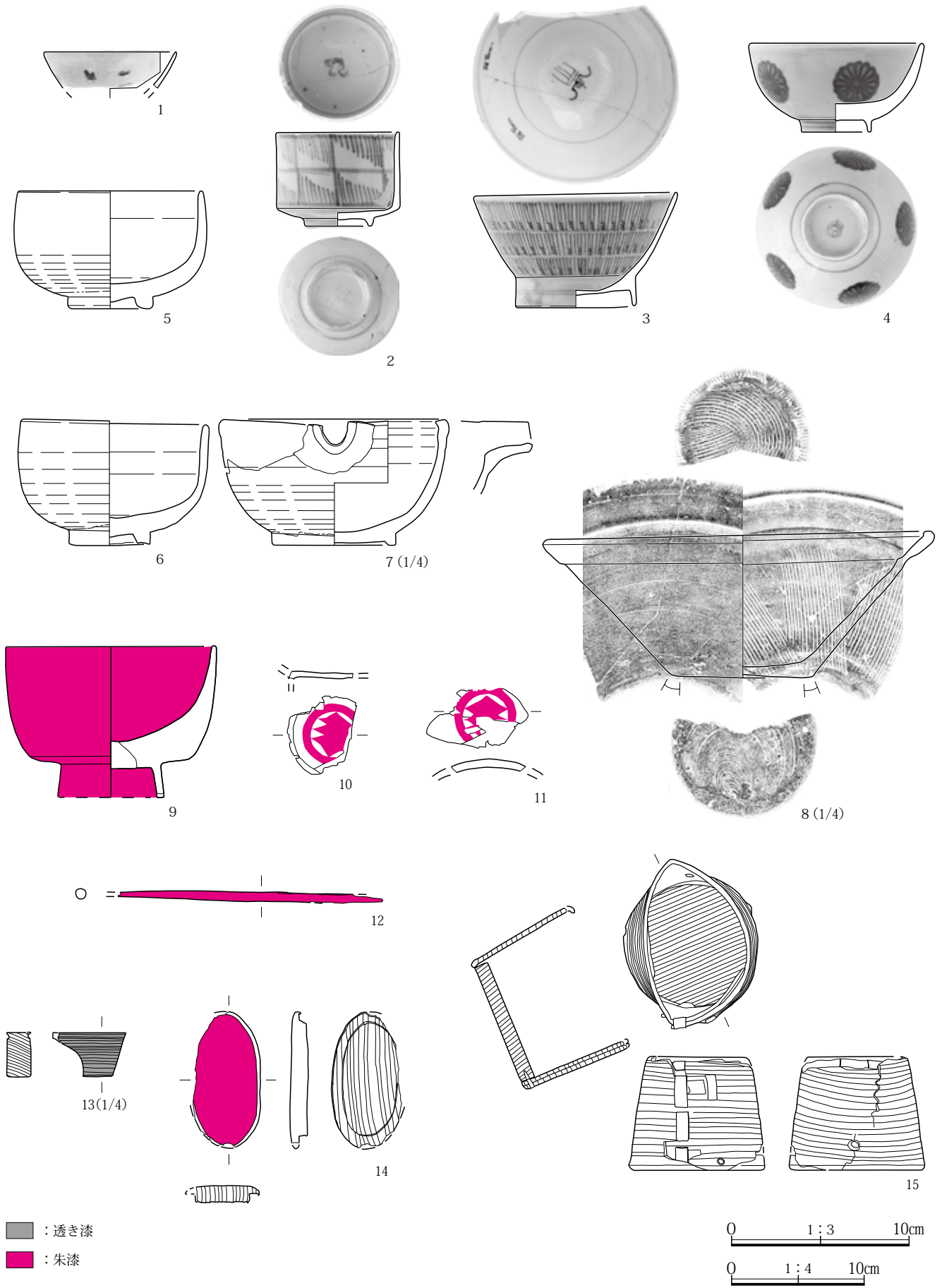


第157図 I区1号屋敷跡天明三年以前の出土遺物(2)

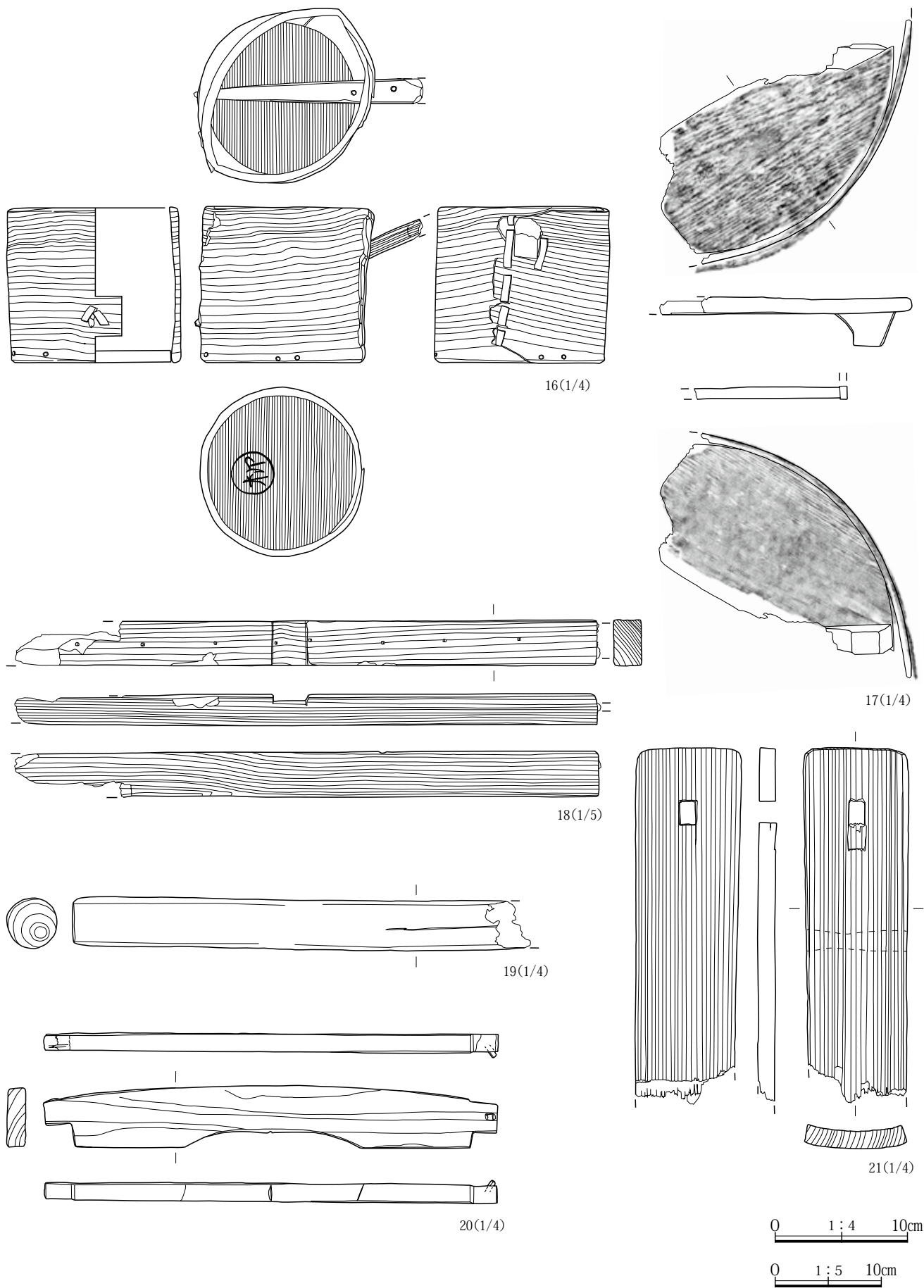
第3章 発見された遺構と遺物



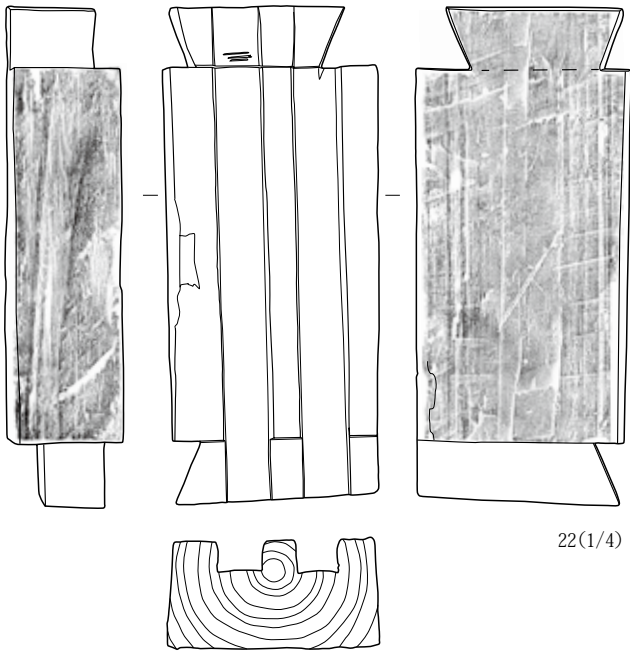
第158図 I区1号屋敷跡天明三年以前の出土遺物(3)



第159図 IV区4号屋敷跡3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(1)

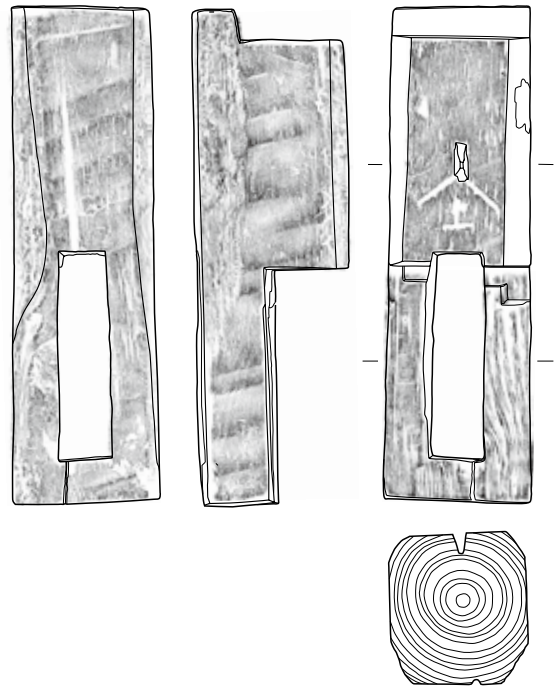


第160図 IV区4号屋敷跡3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(2)

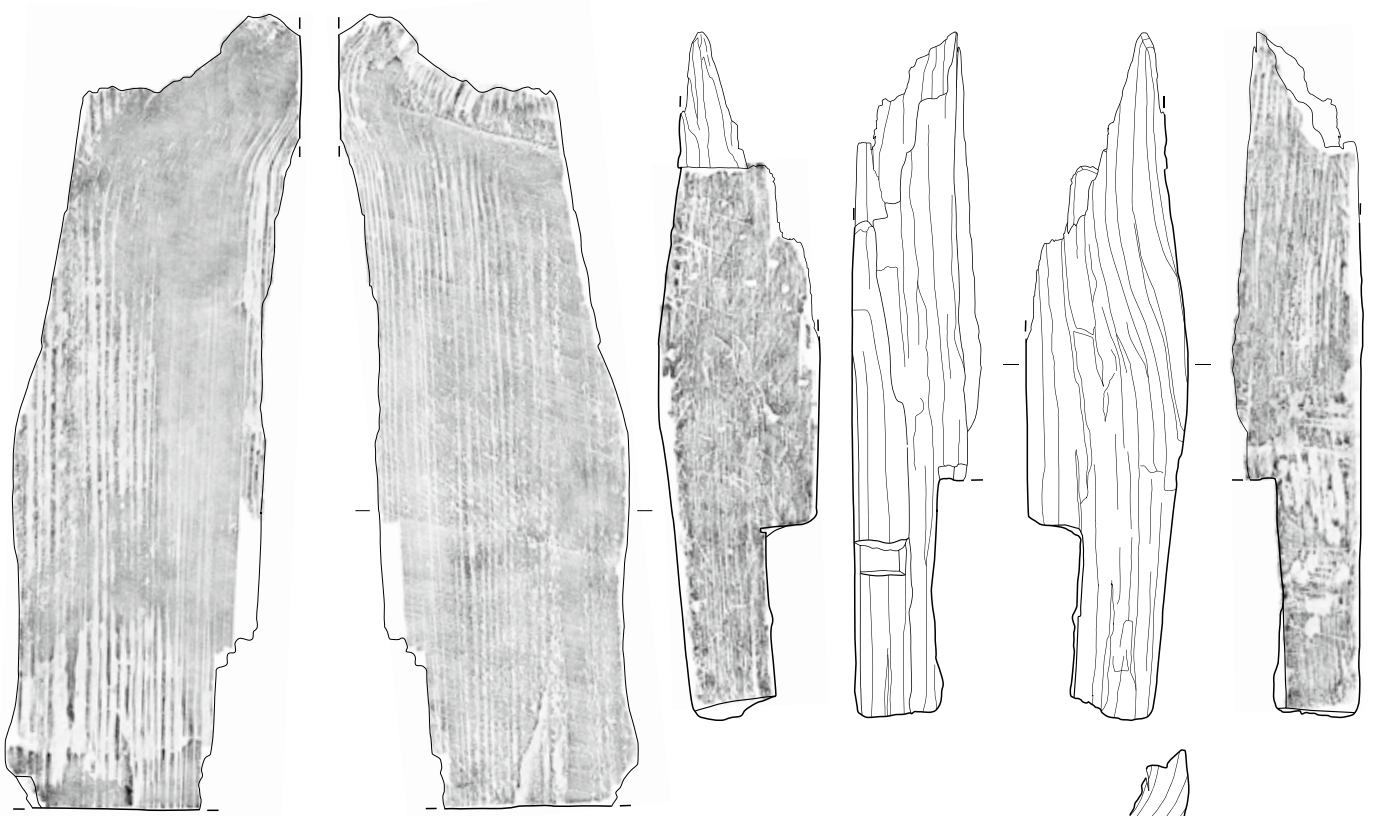


22(1/4)

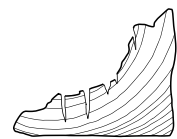
0 1:4 10cm



23(1/5)



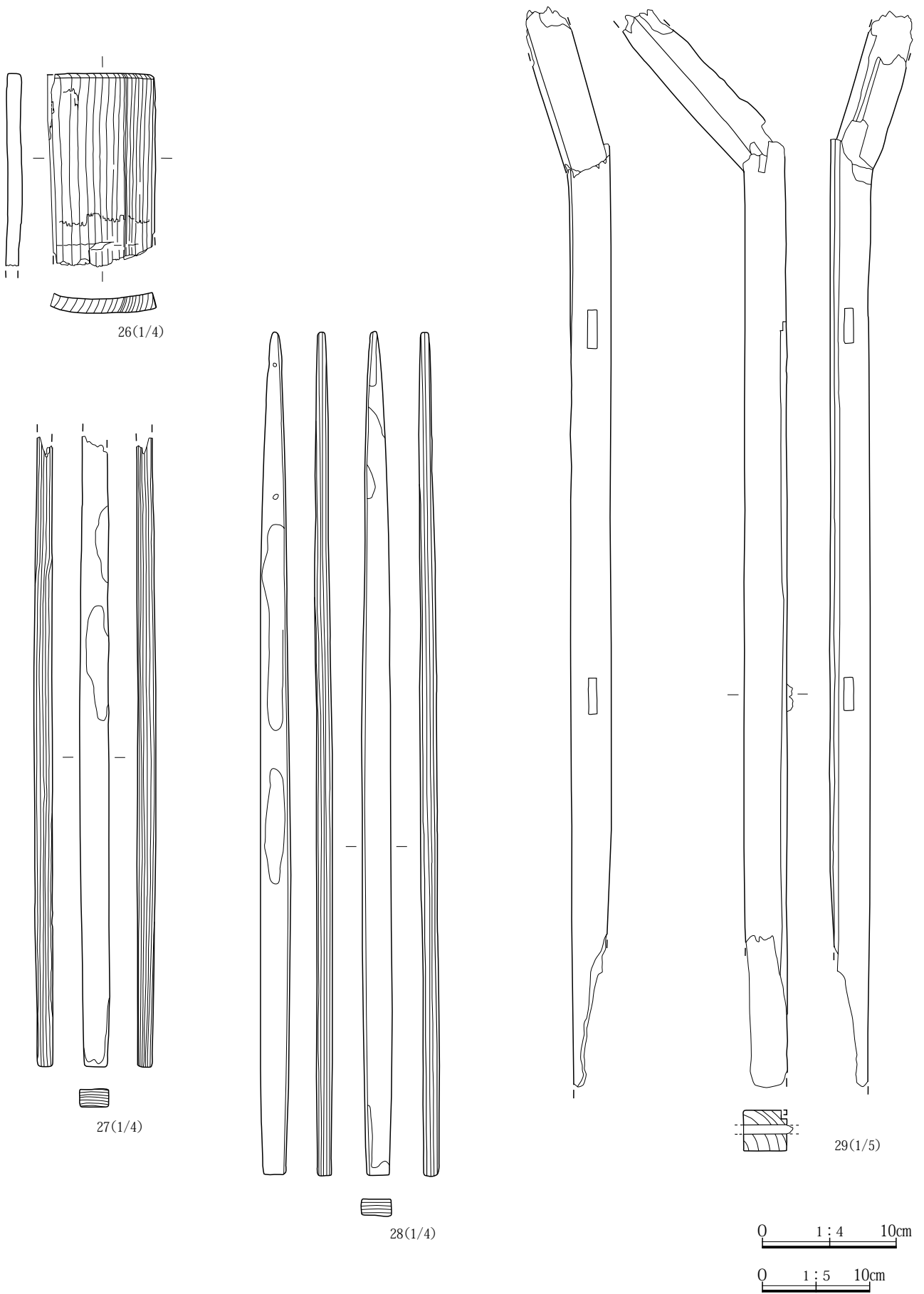
24(1/5)



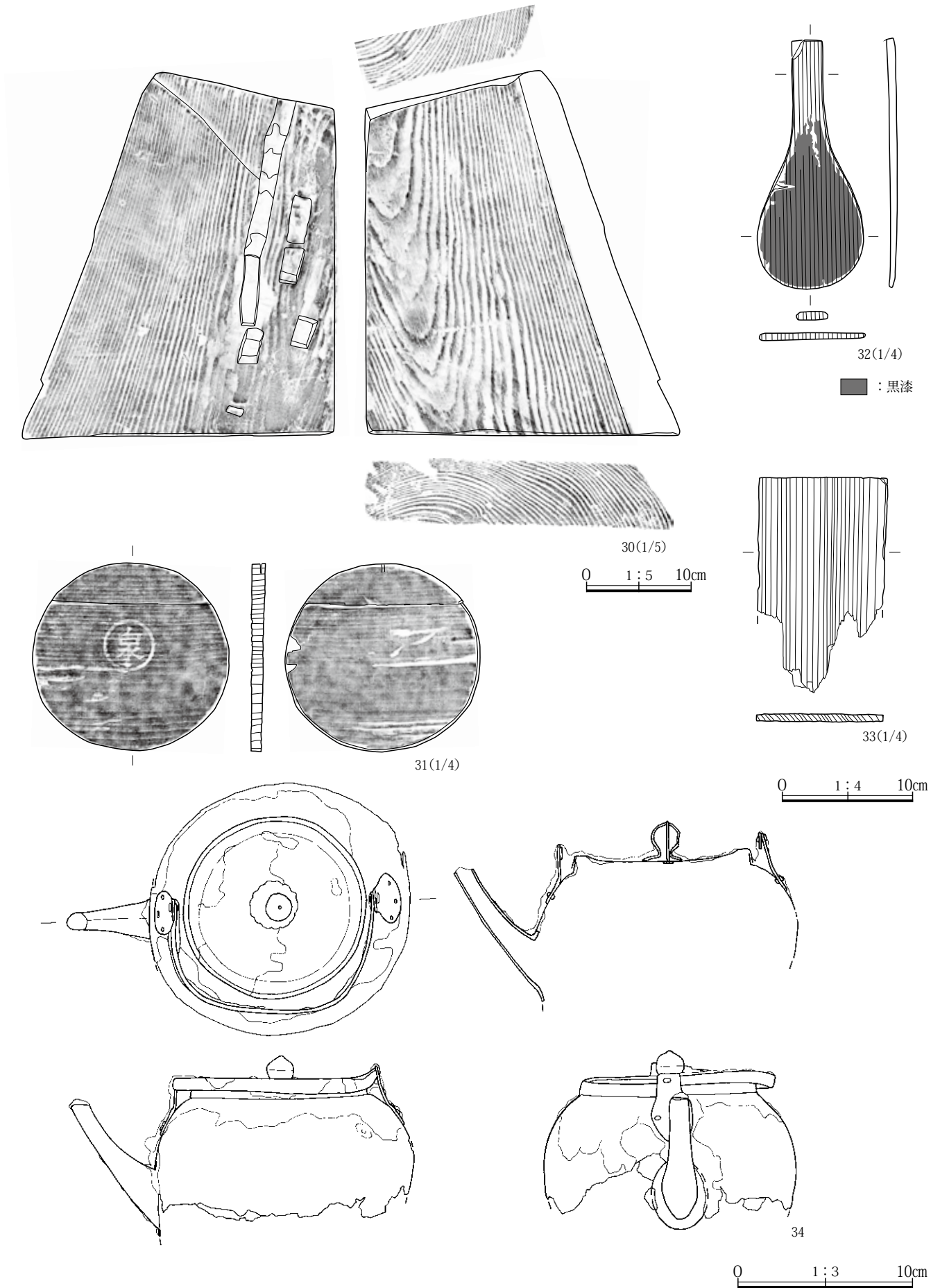
25(1/5)

0 1:5 10cm

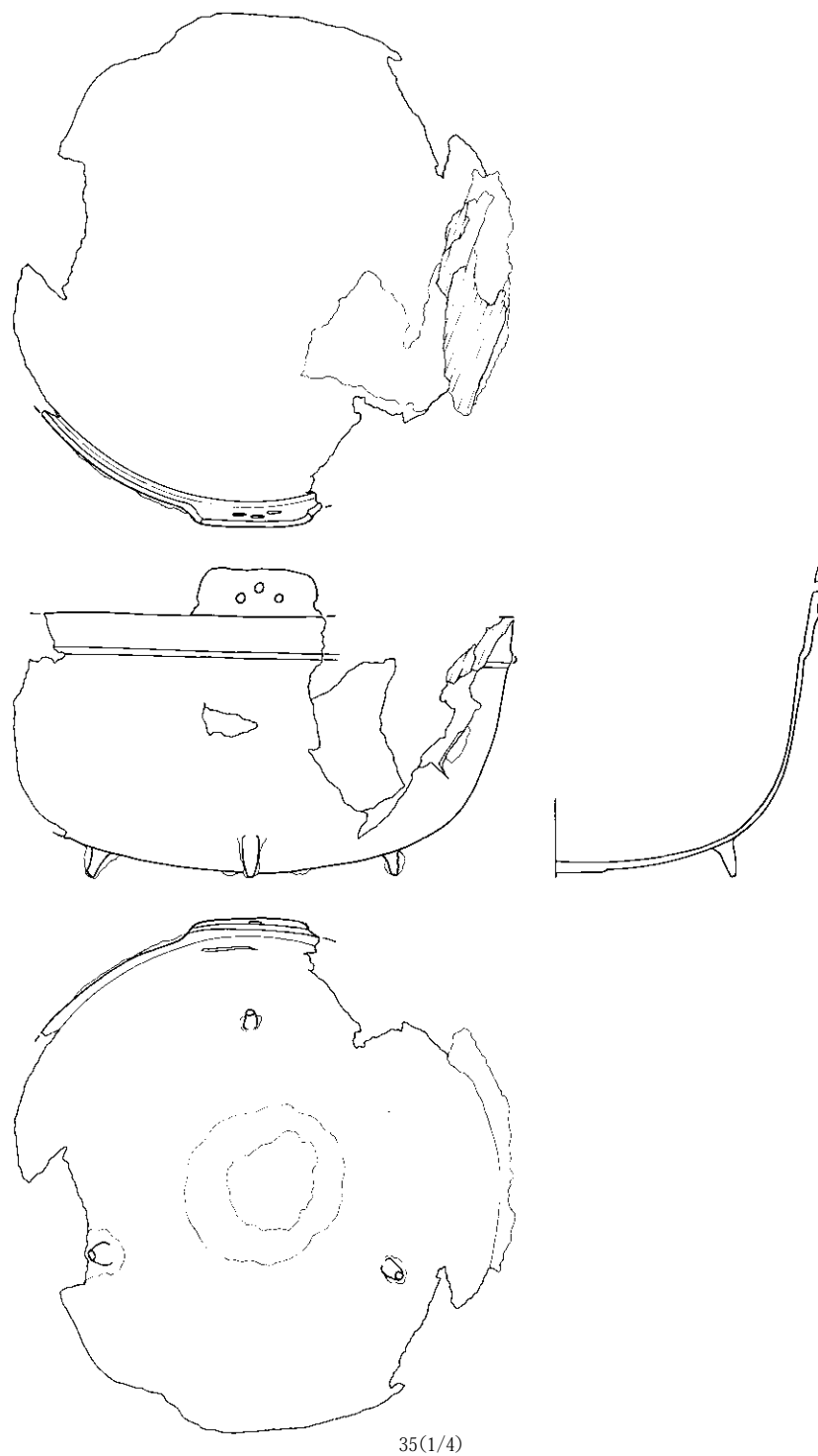
第161図 IV区4号屋敷跡3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(3)



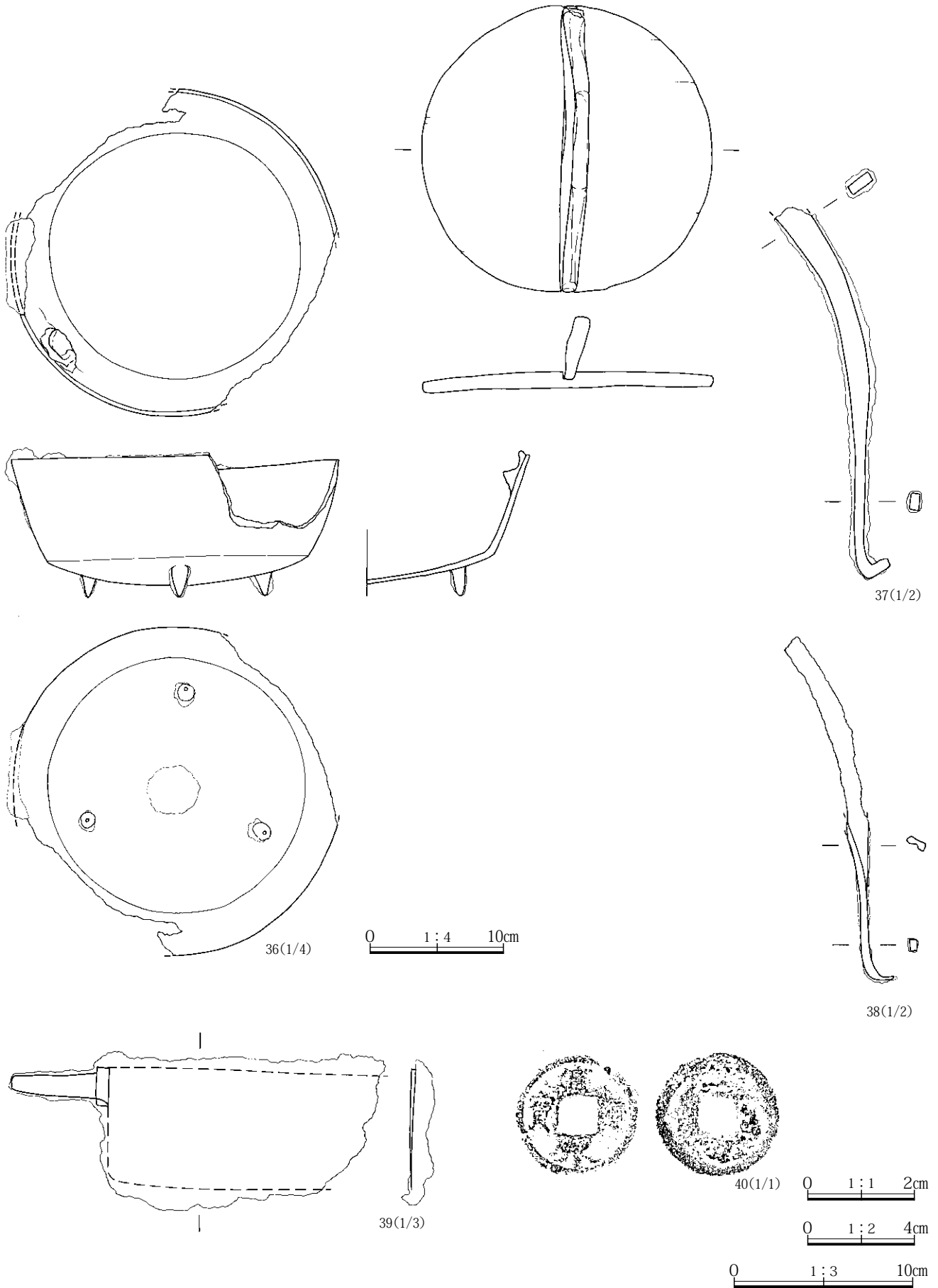
第162図 IV区4号屋敷跡3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(4)



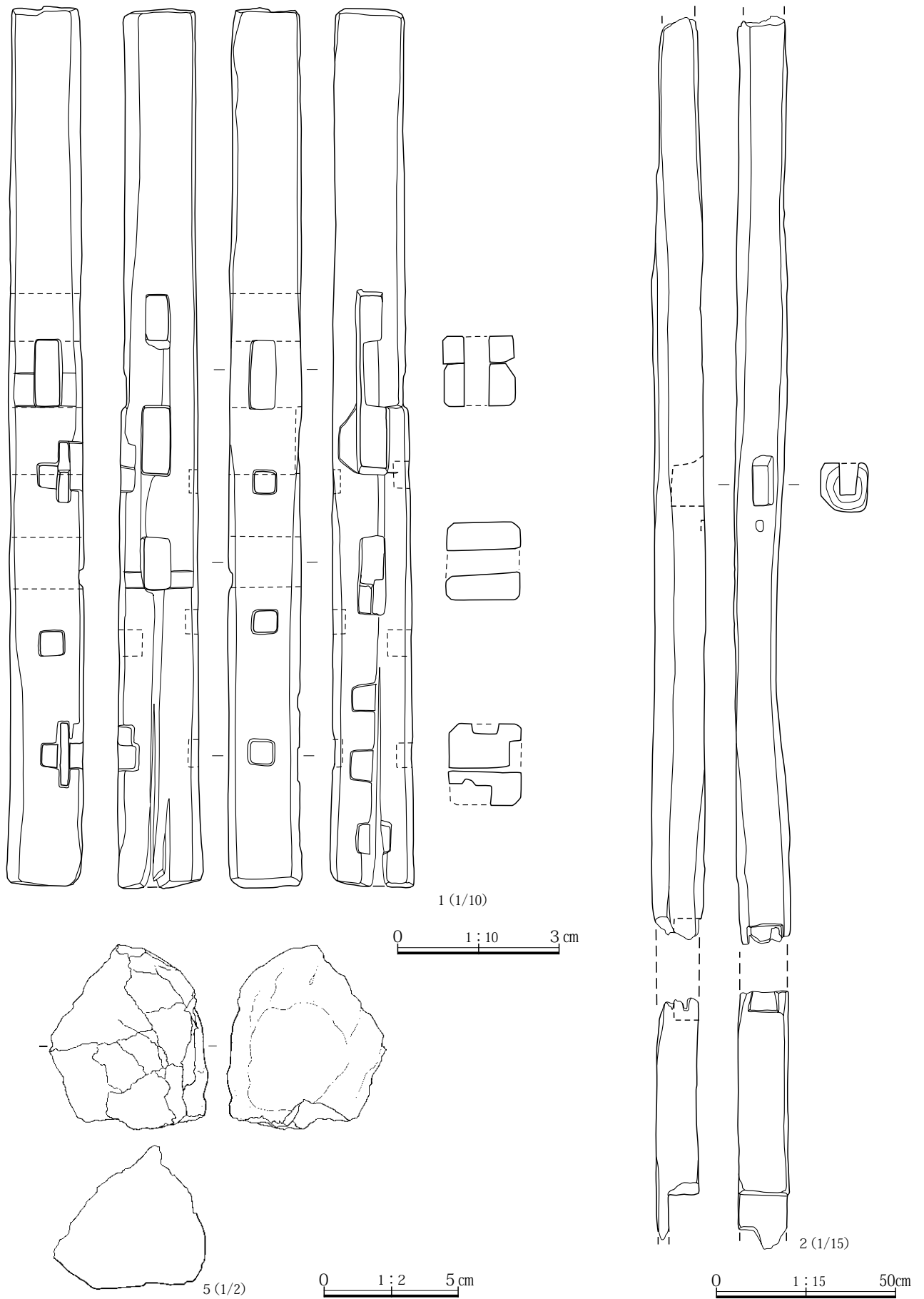
第163図 IV区4号屋敷跡3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(5)



第164図 IV区4号屋敷跡3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(6)

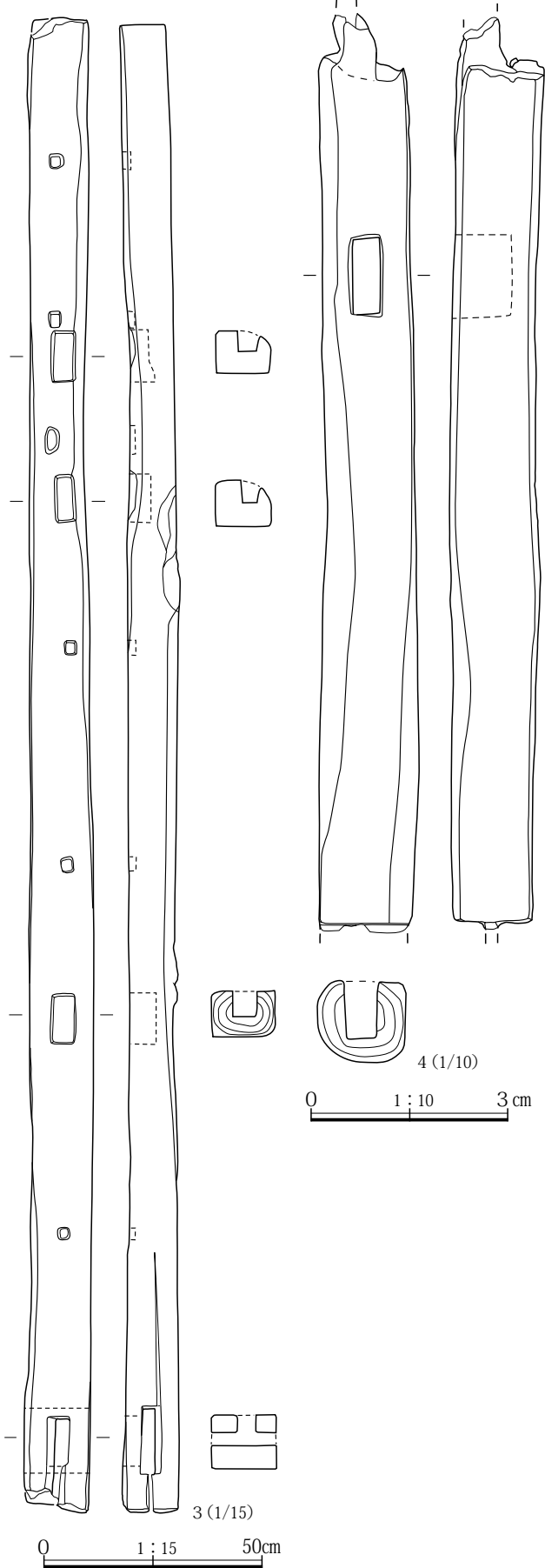


第165図 IV区4号屋敷跡3号井戸・3号井戸北側からの出土遺物(7)

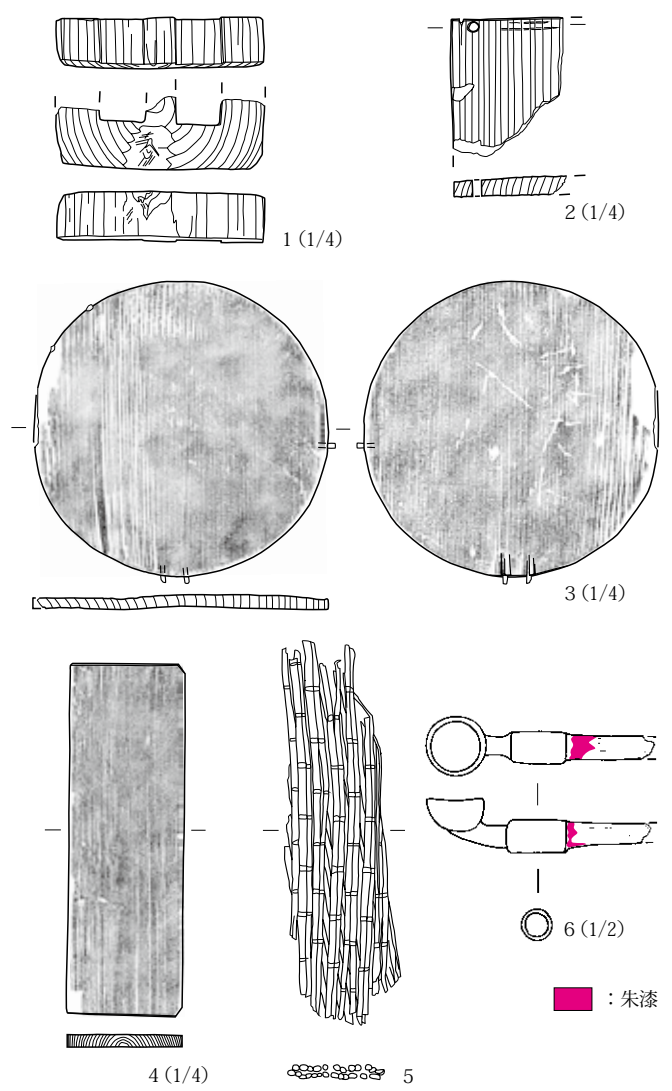


第166図 IV区4号屋敷跡6号溝出土遺物(1)

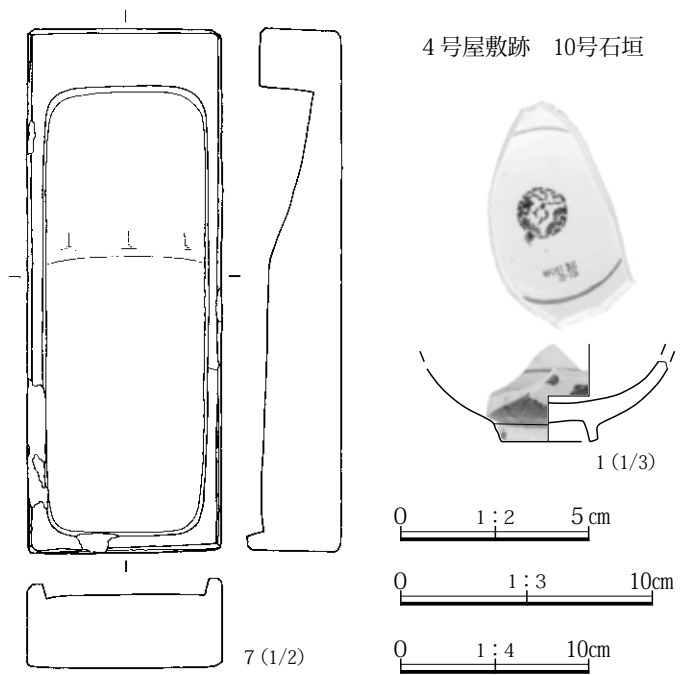
4号屋敷跡 6号溝



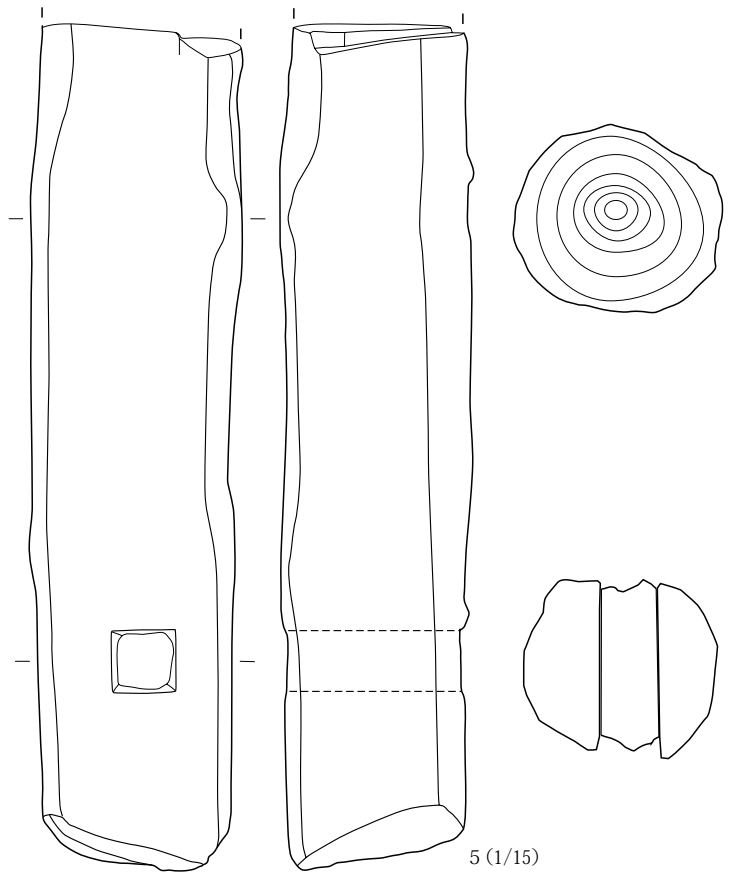
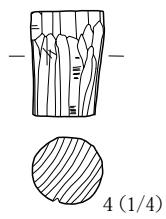
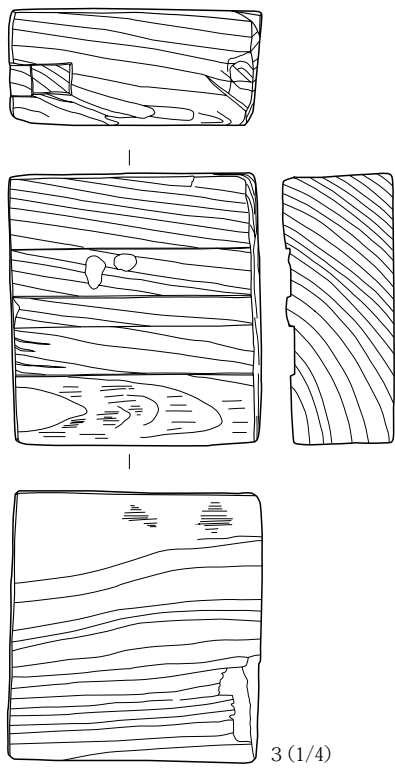
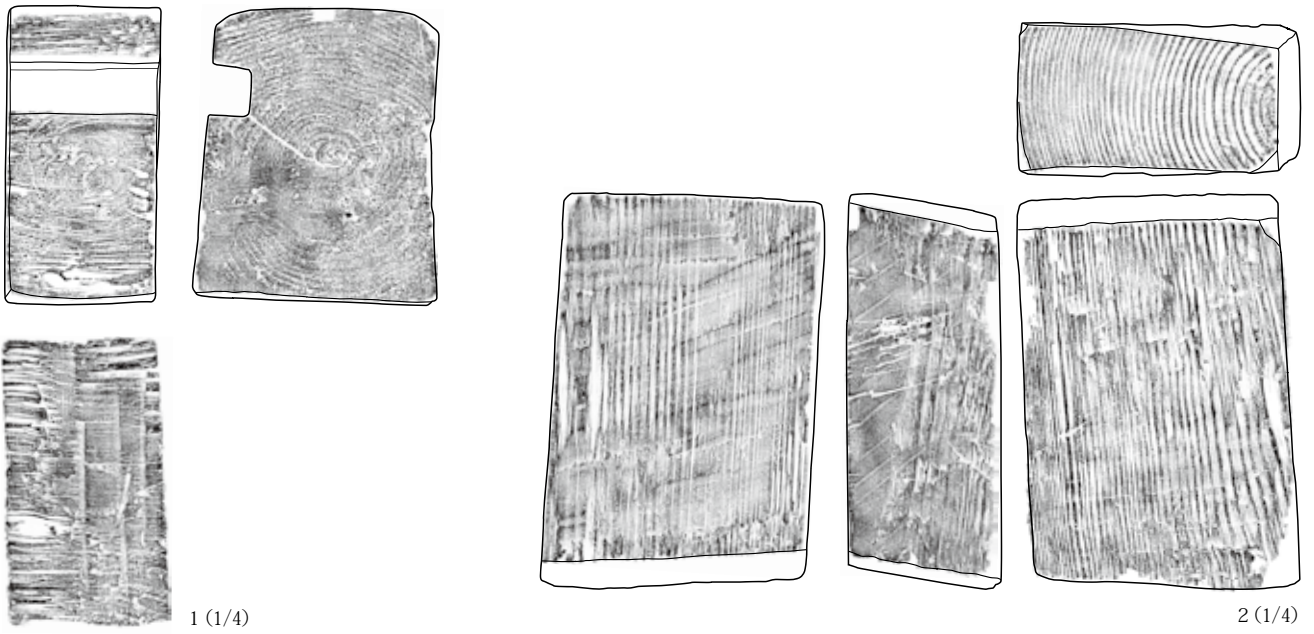
4号屋敷跡 南西部



4号屋敷跡 10号石垣



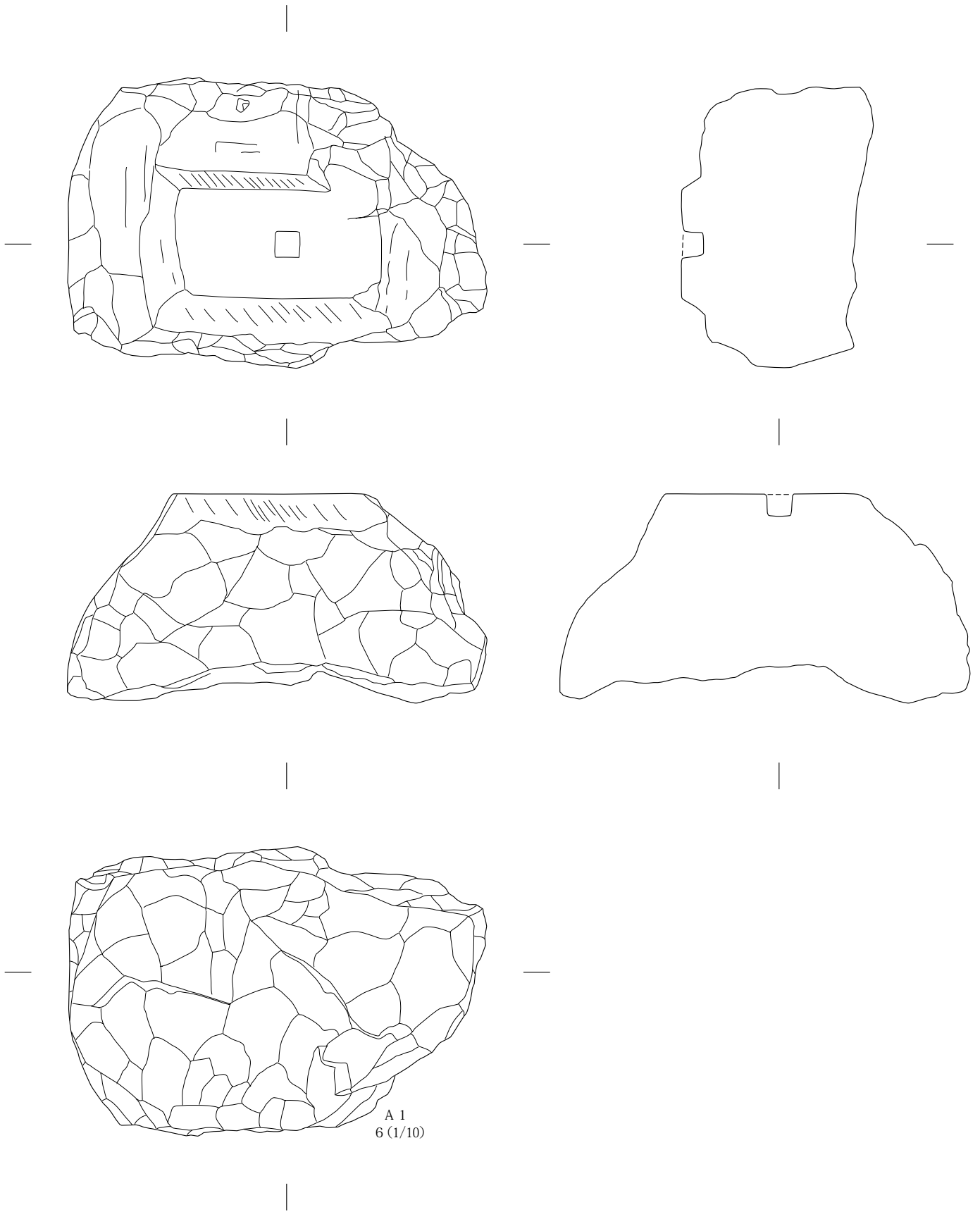
第167図 IV区4号屋敷跡6号溝出土遺物(2)、6号溝南西部、10号石垣出土遺物



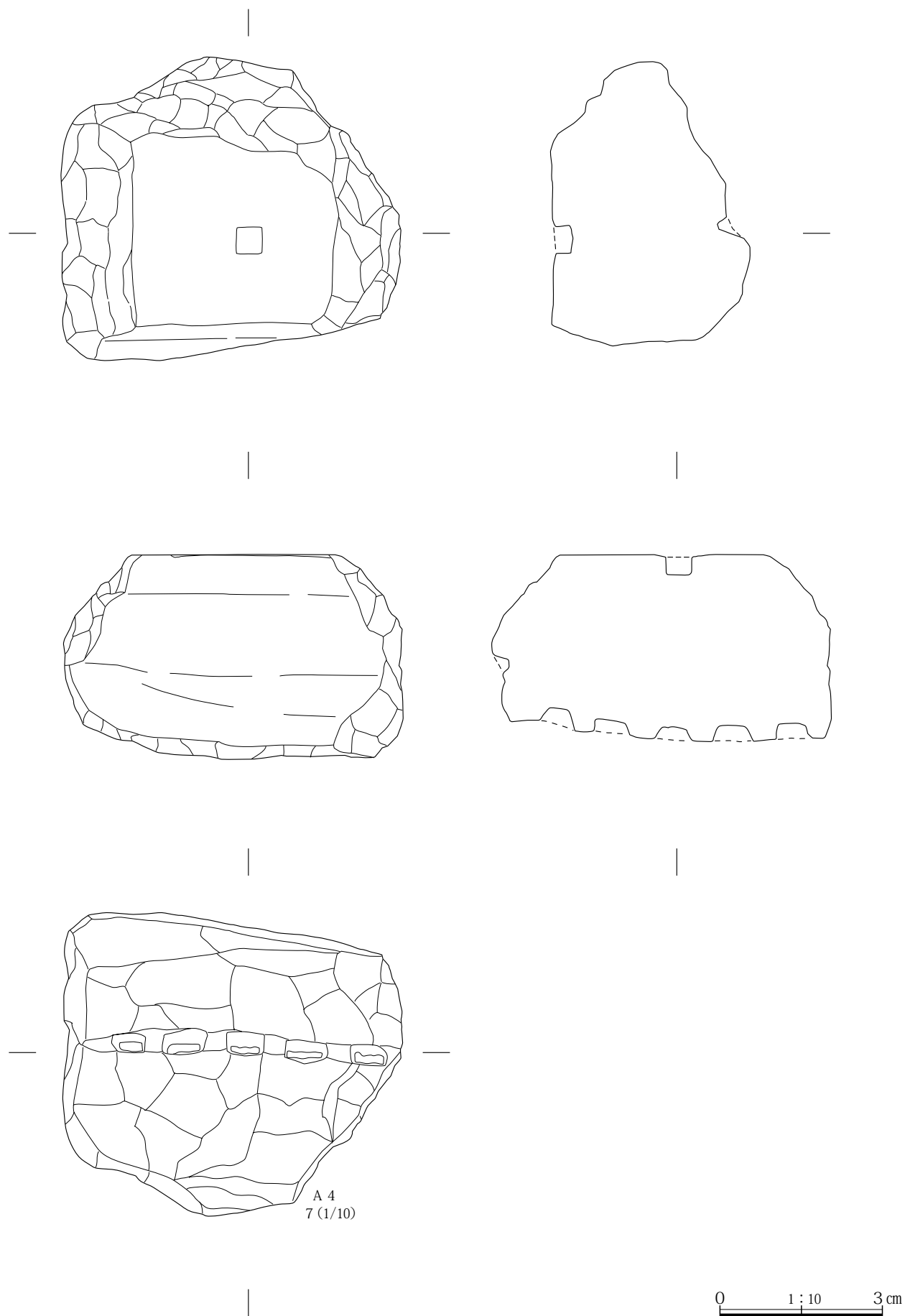
0 1:4 10cm

0 1:15 50cm

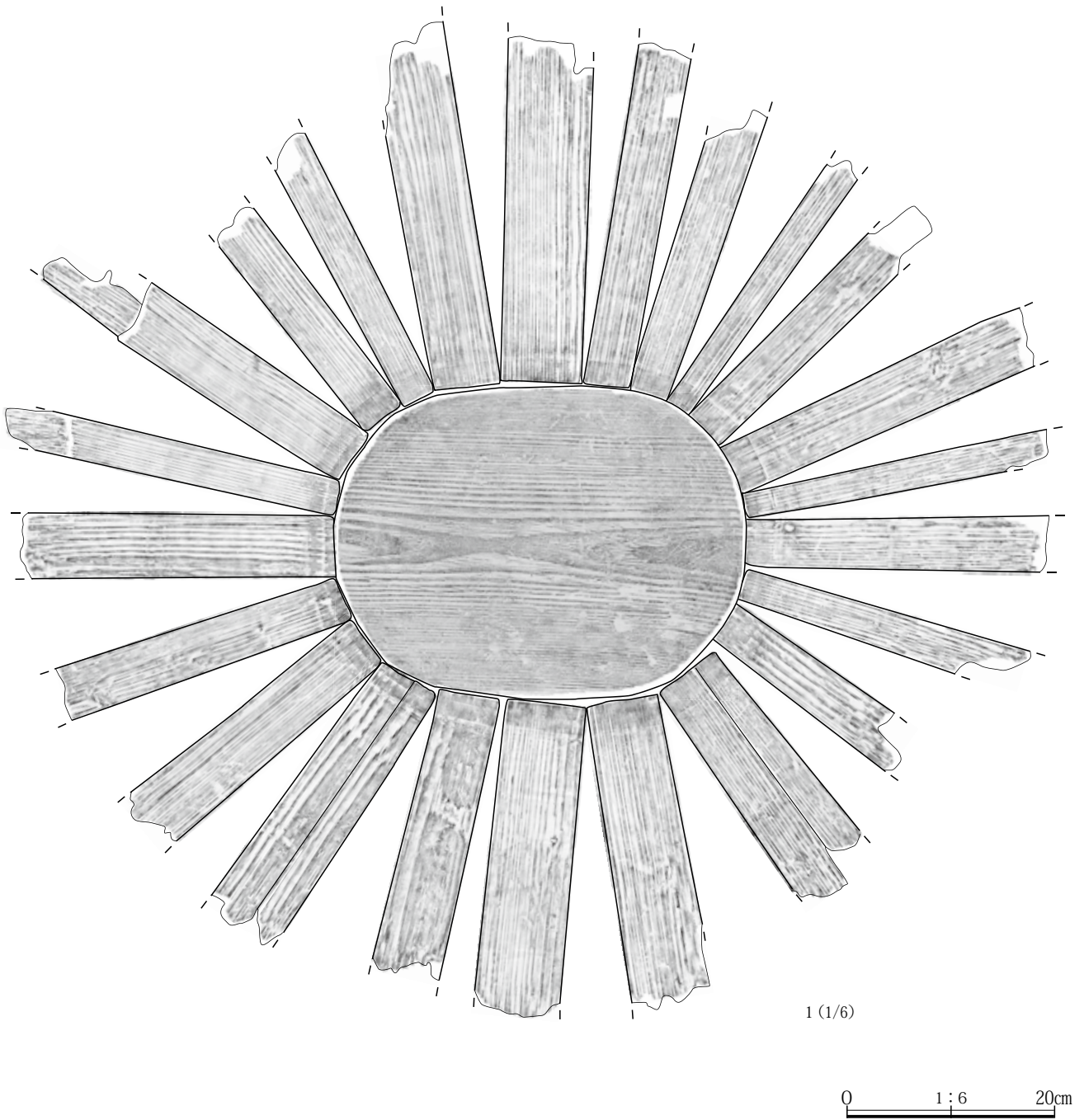
第168図 IV区5号屋敷跡10号建物出土遺物(1)



第169図 IV区5号屋敷跡10号建物出土遺物(2)

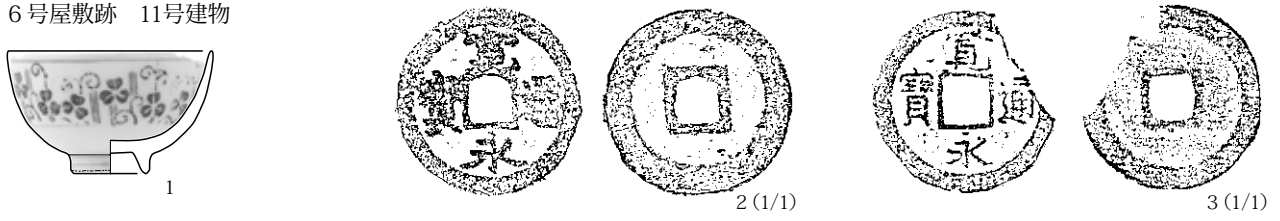


第170図 IV区5号屋敷跡10号建物出土遺物(3)

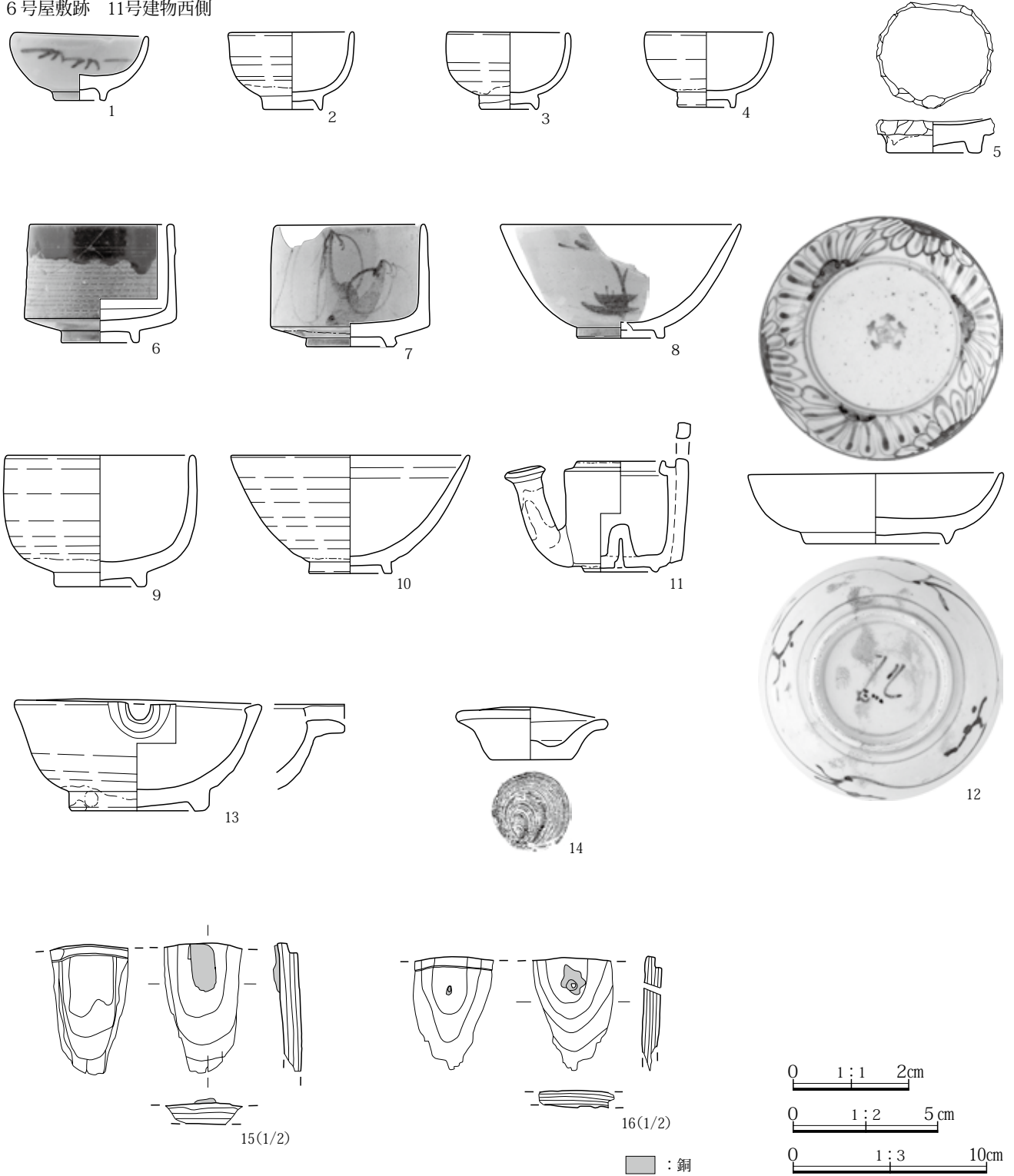


第171図 IV区 5号屋敷跡12号建物出土遺物

6号屋敷跡 11号建物

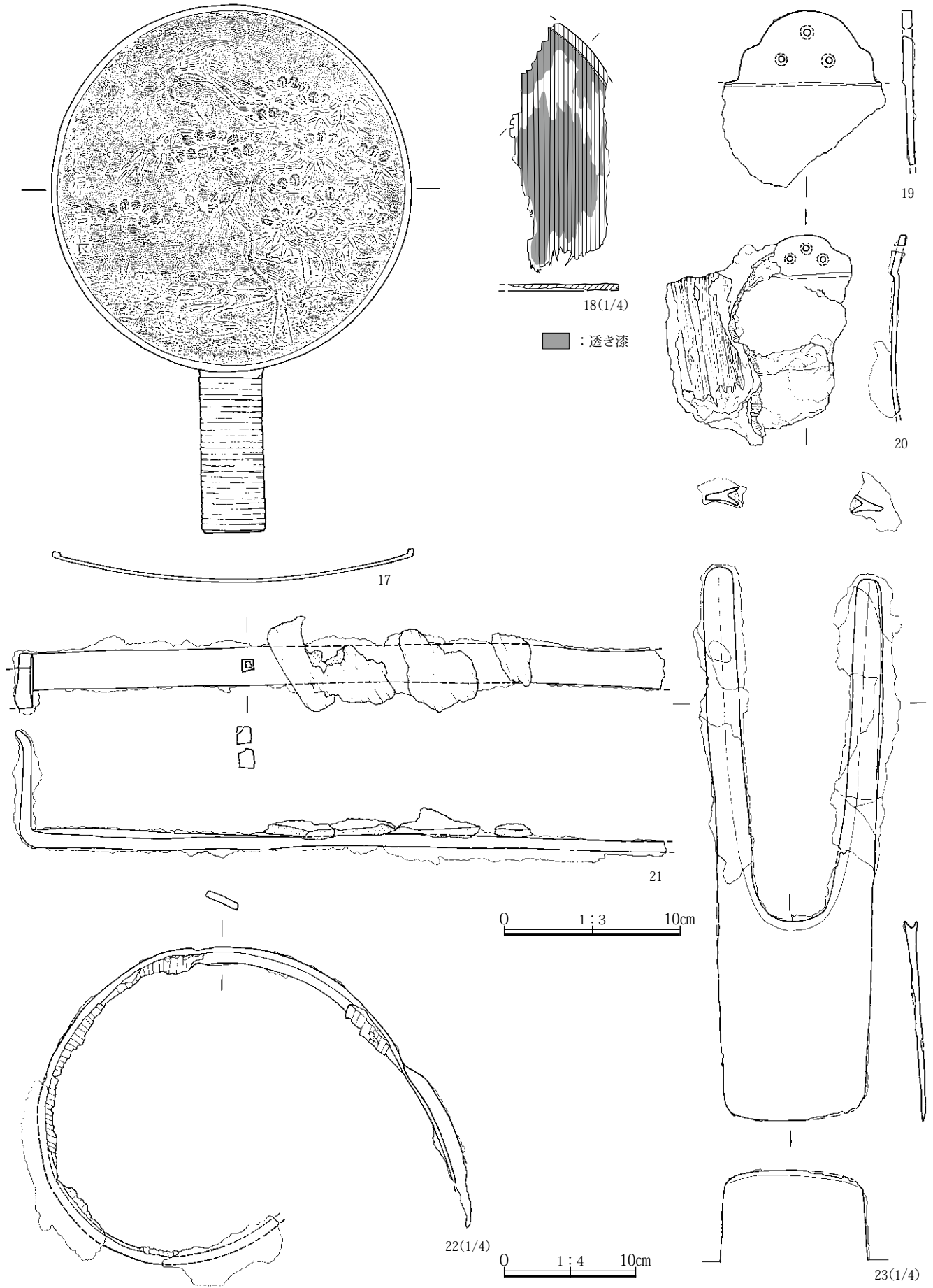


6号屋敷跡 11号建物西側

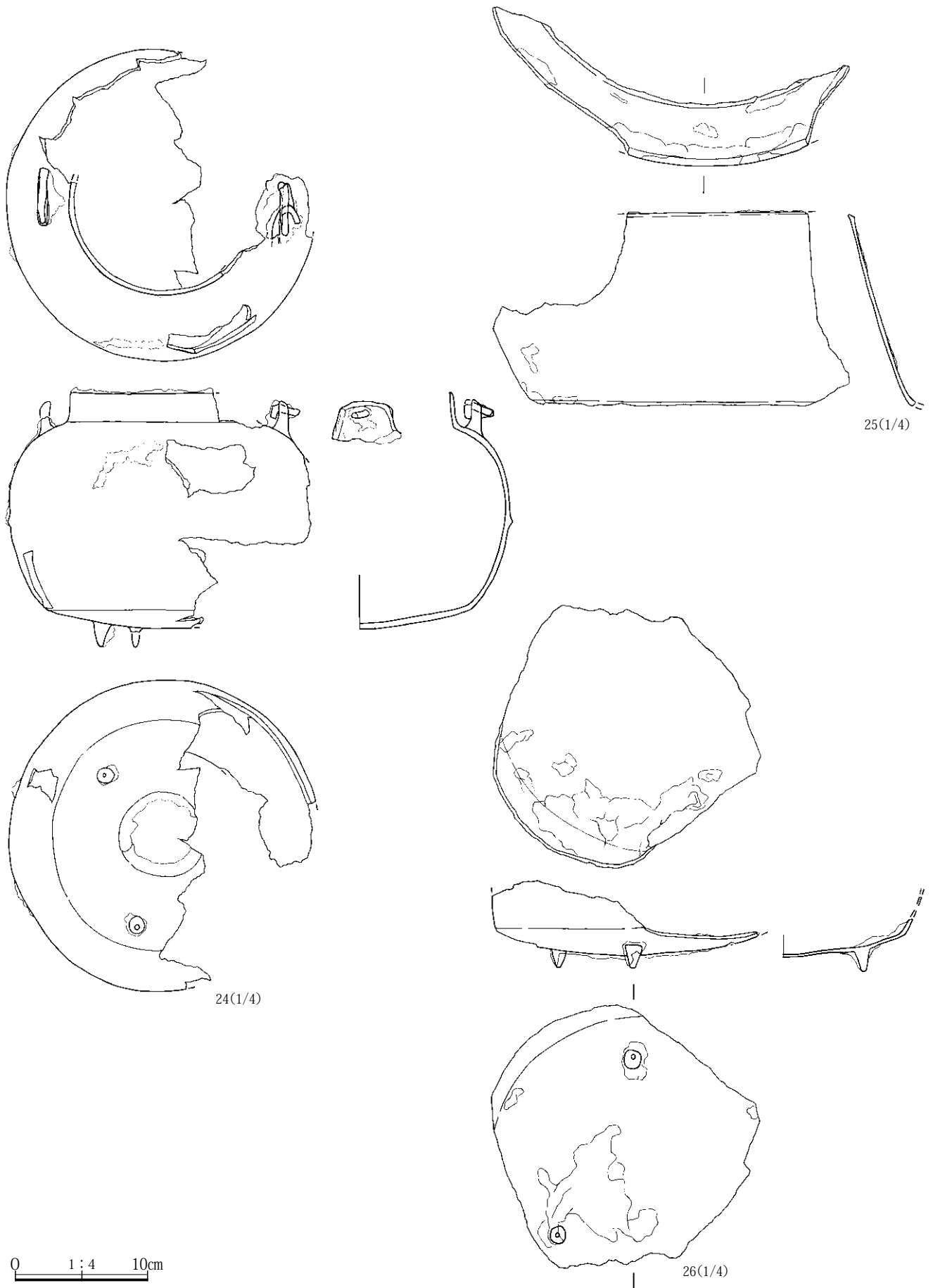


第172図 IV区6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(1)

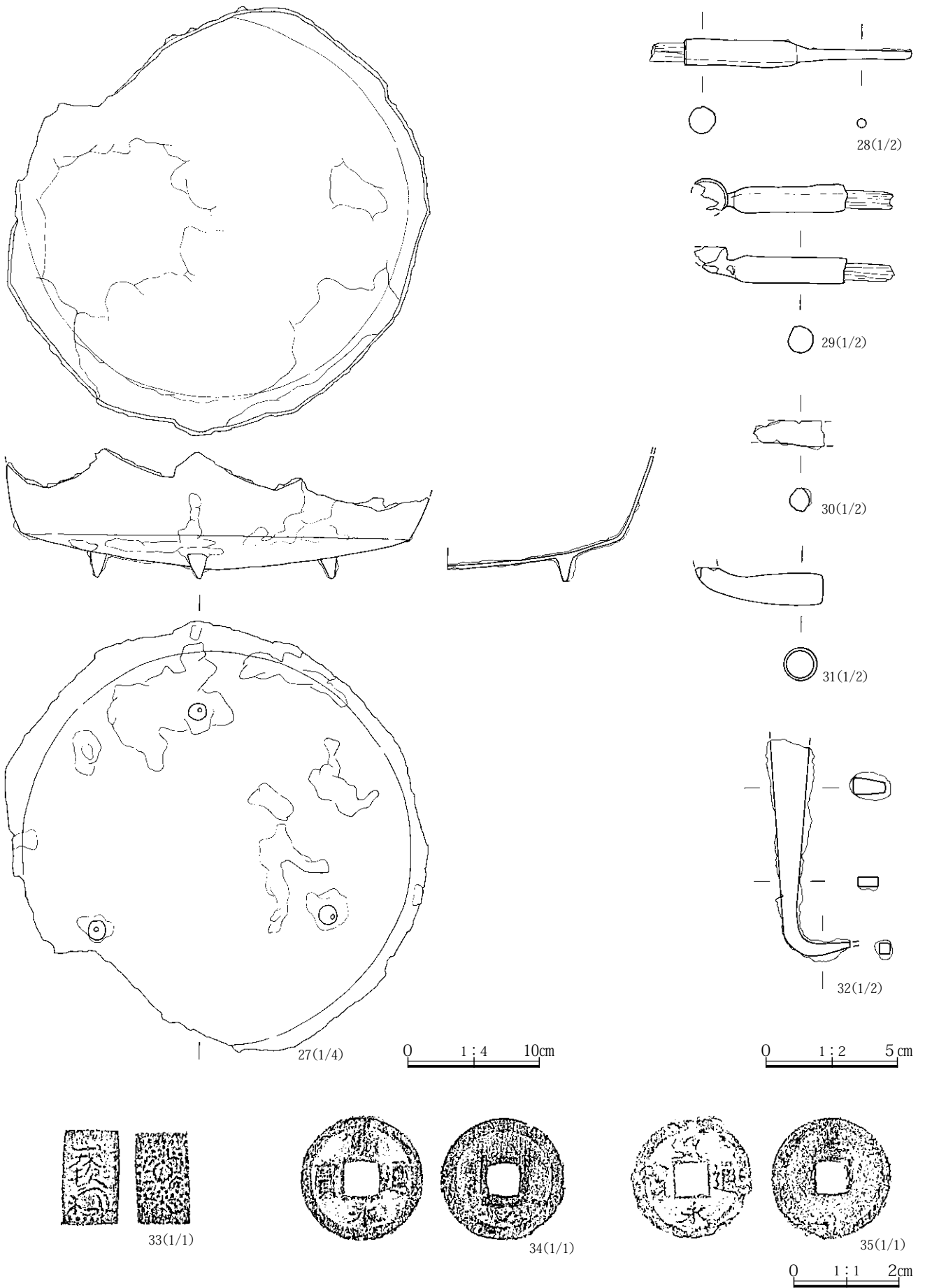
第2節 IV区の調査概要と発見された遺構と遺物



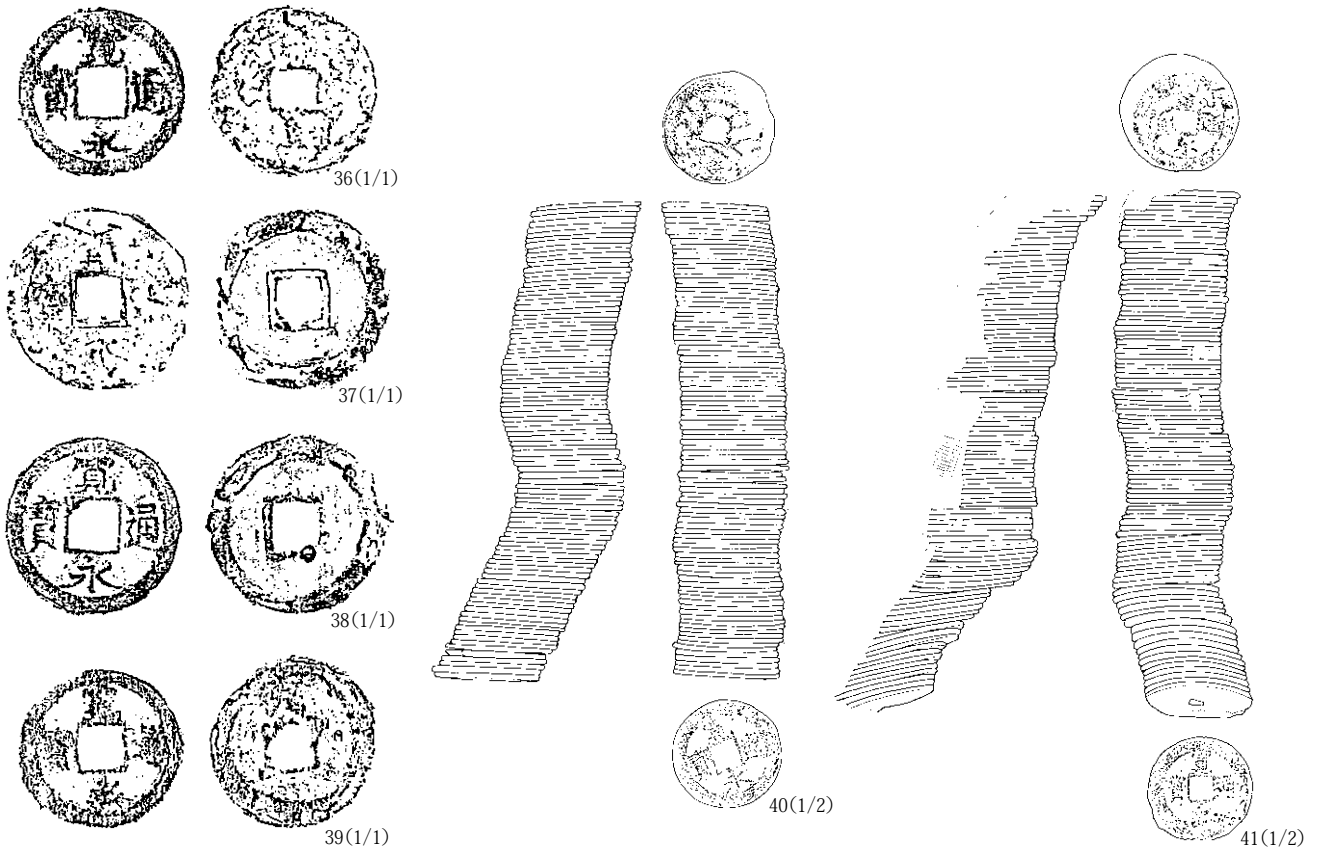
第173図 IV区6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(2)



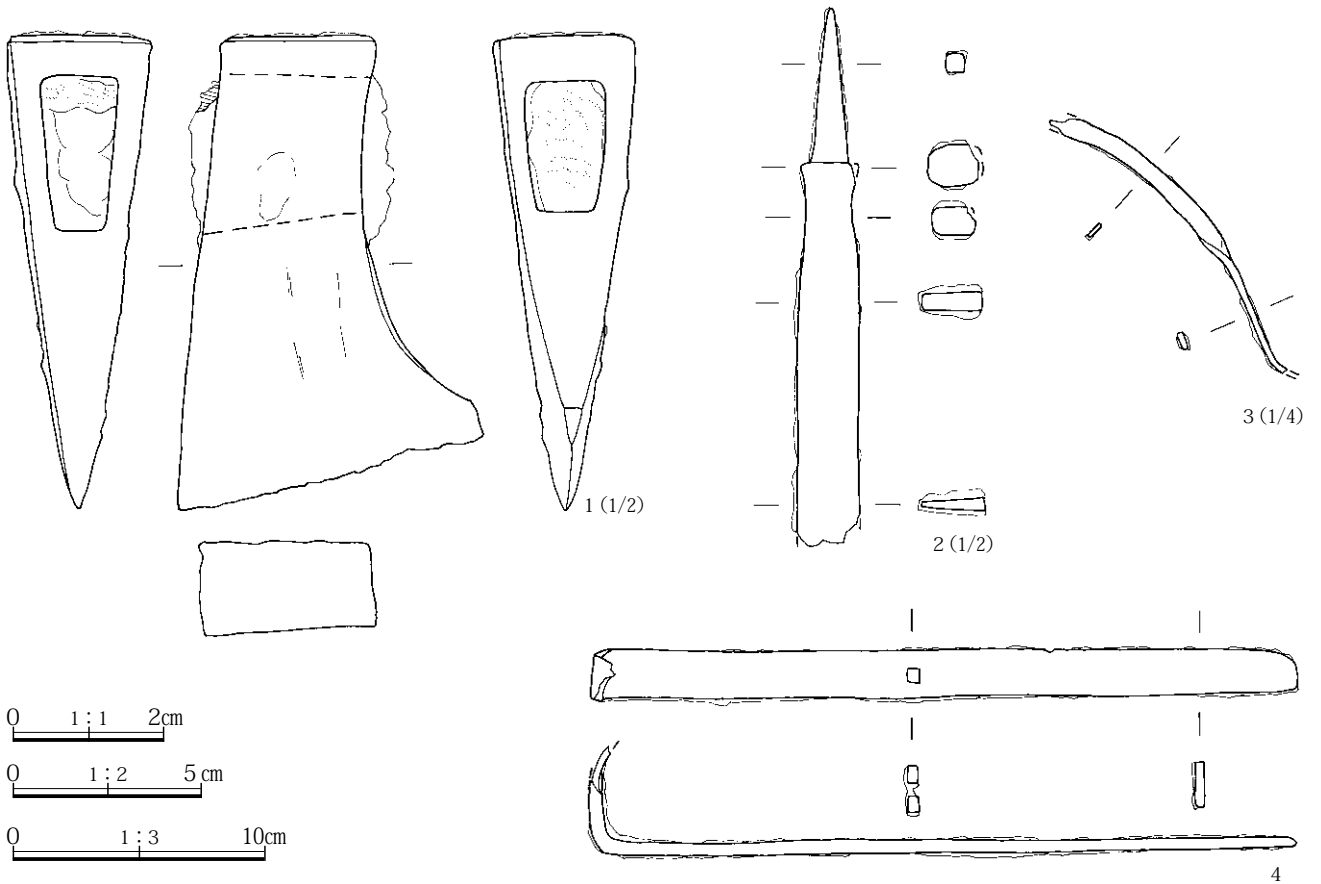
第174図 IV区6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(3)



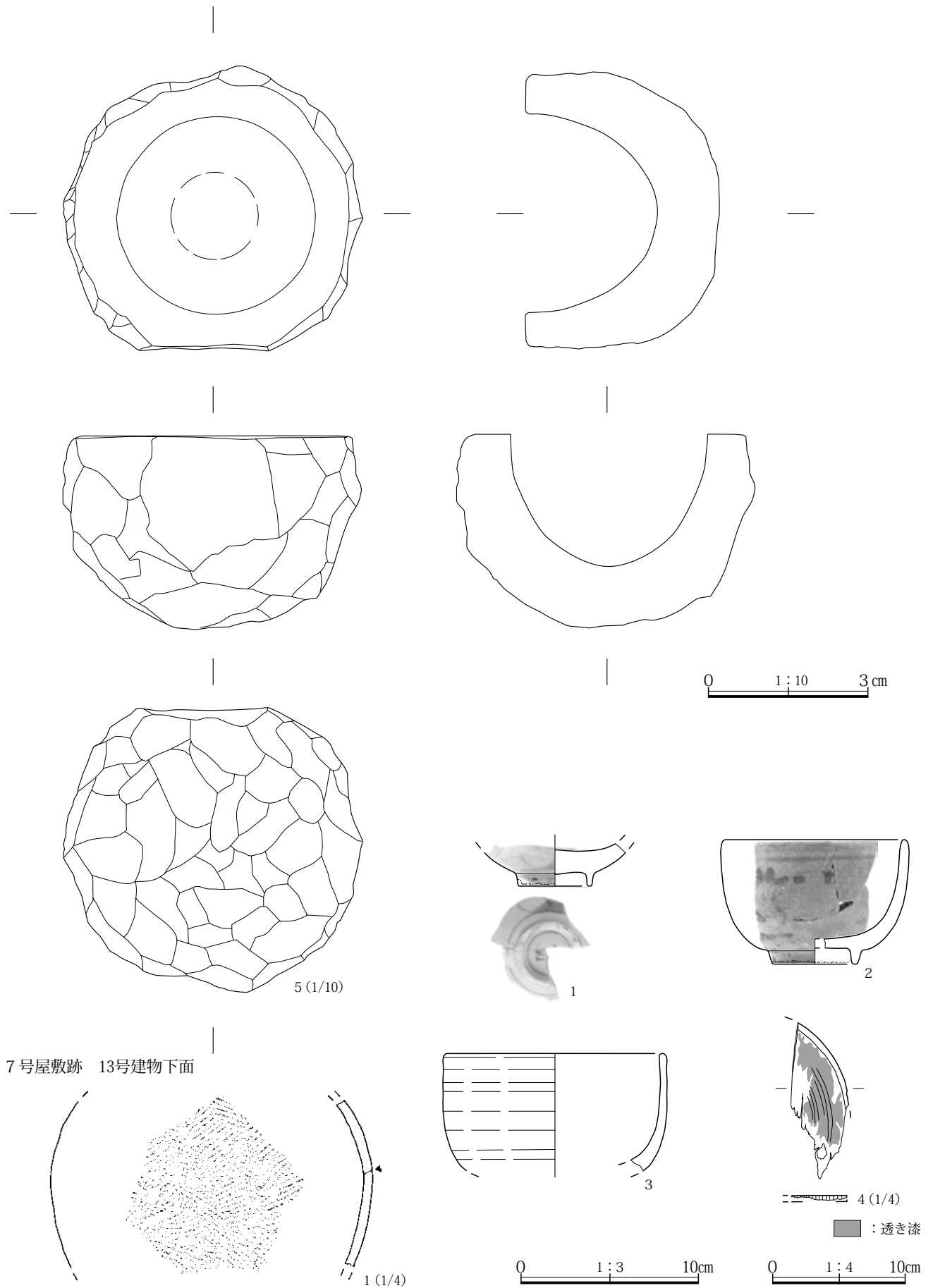
第175図 IV区6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(4)



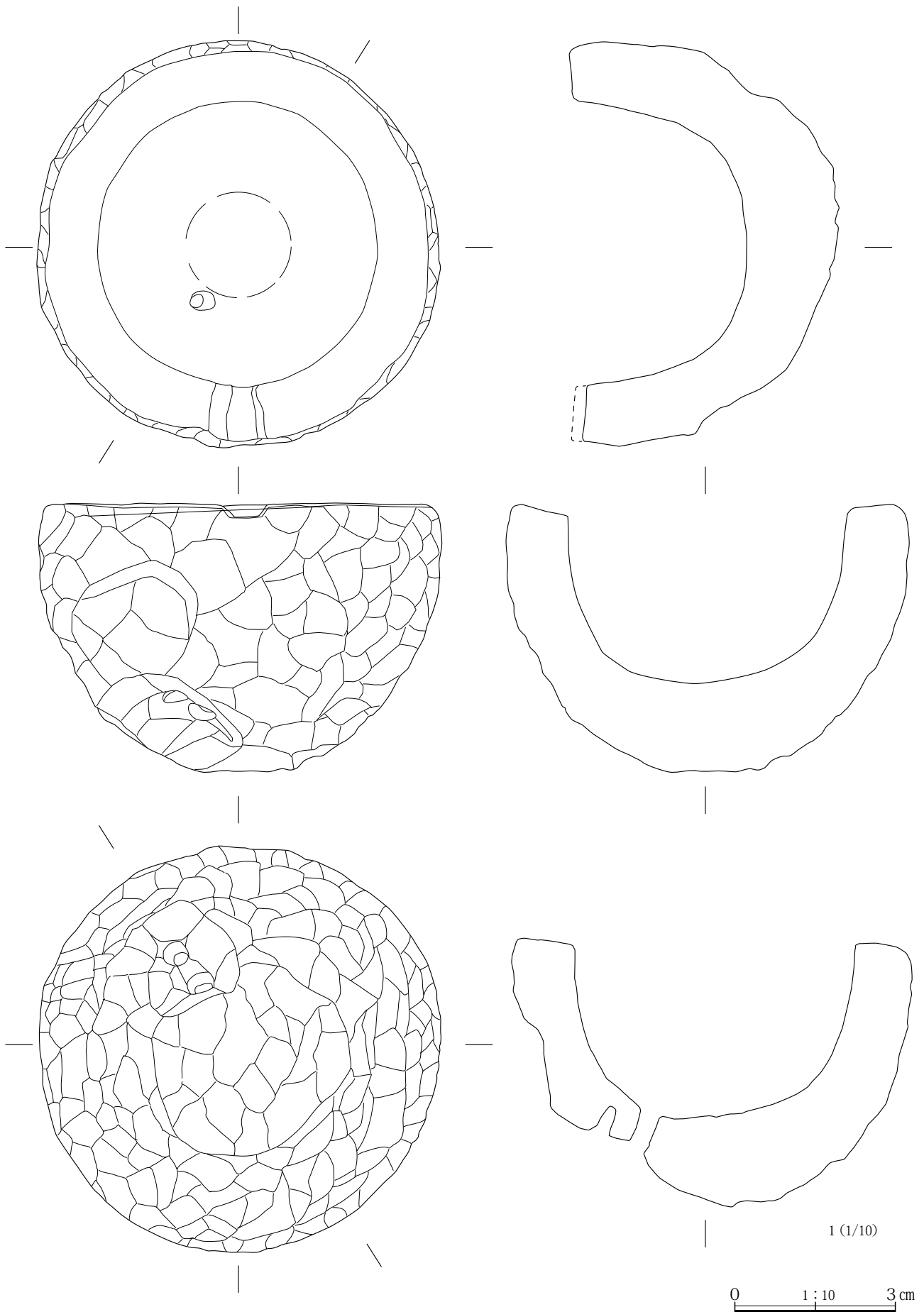
6号屋敷跡 18号石垣



第176図 IV区6号屋敷跡11号建物西側出土遺物(5)、18号石垣出土遺物

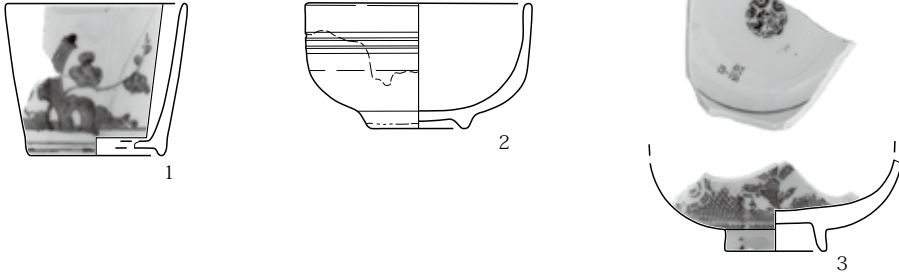


第177図 IV区7号屋敷跡13号建物・13号建物下面出土遺物

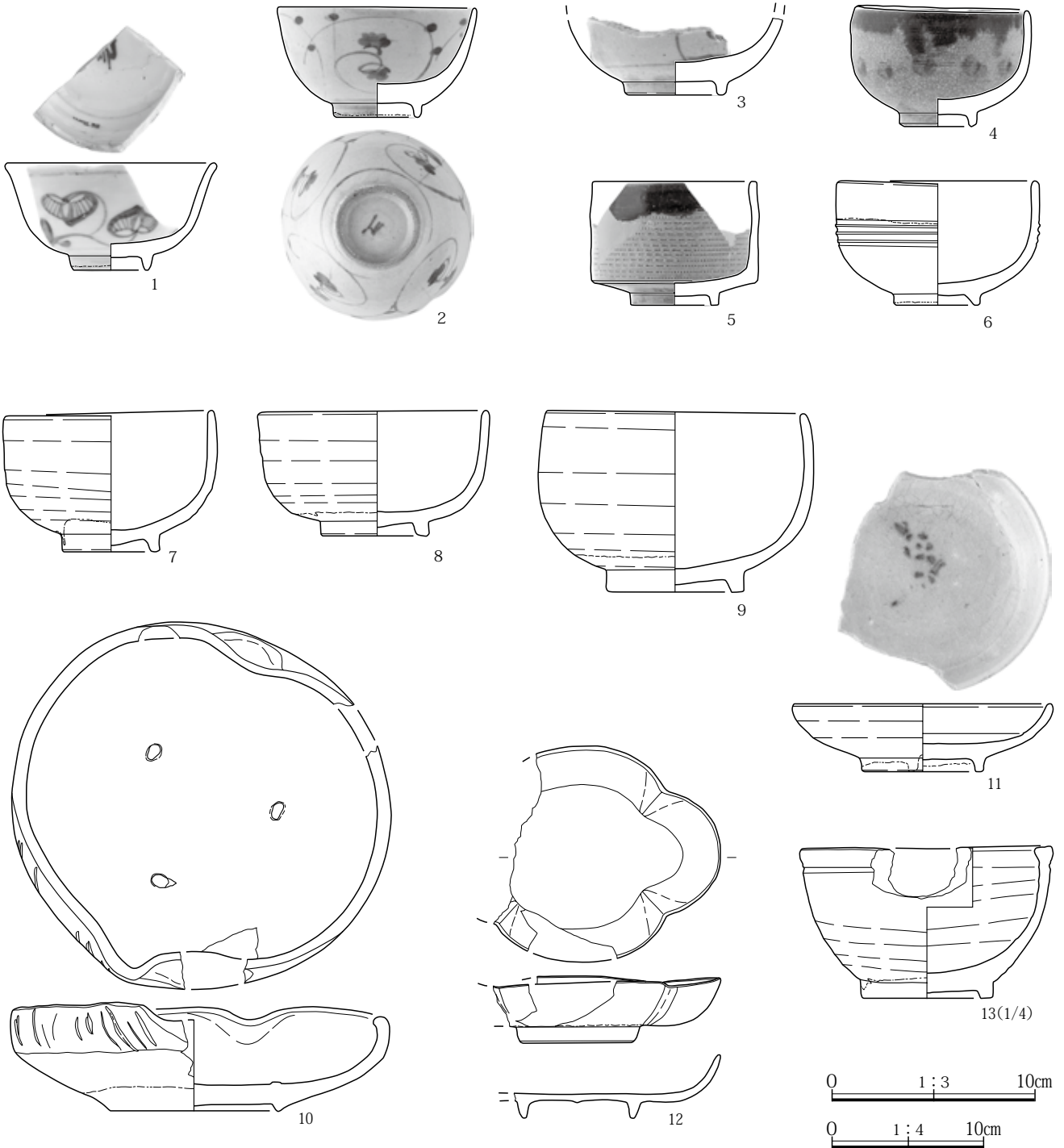


第178図 IV区7号屋敷跡水場10号溝出土遺物

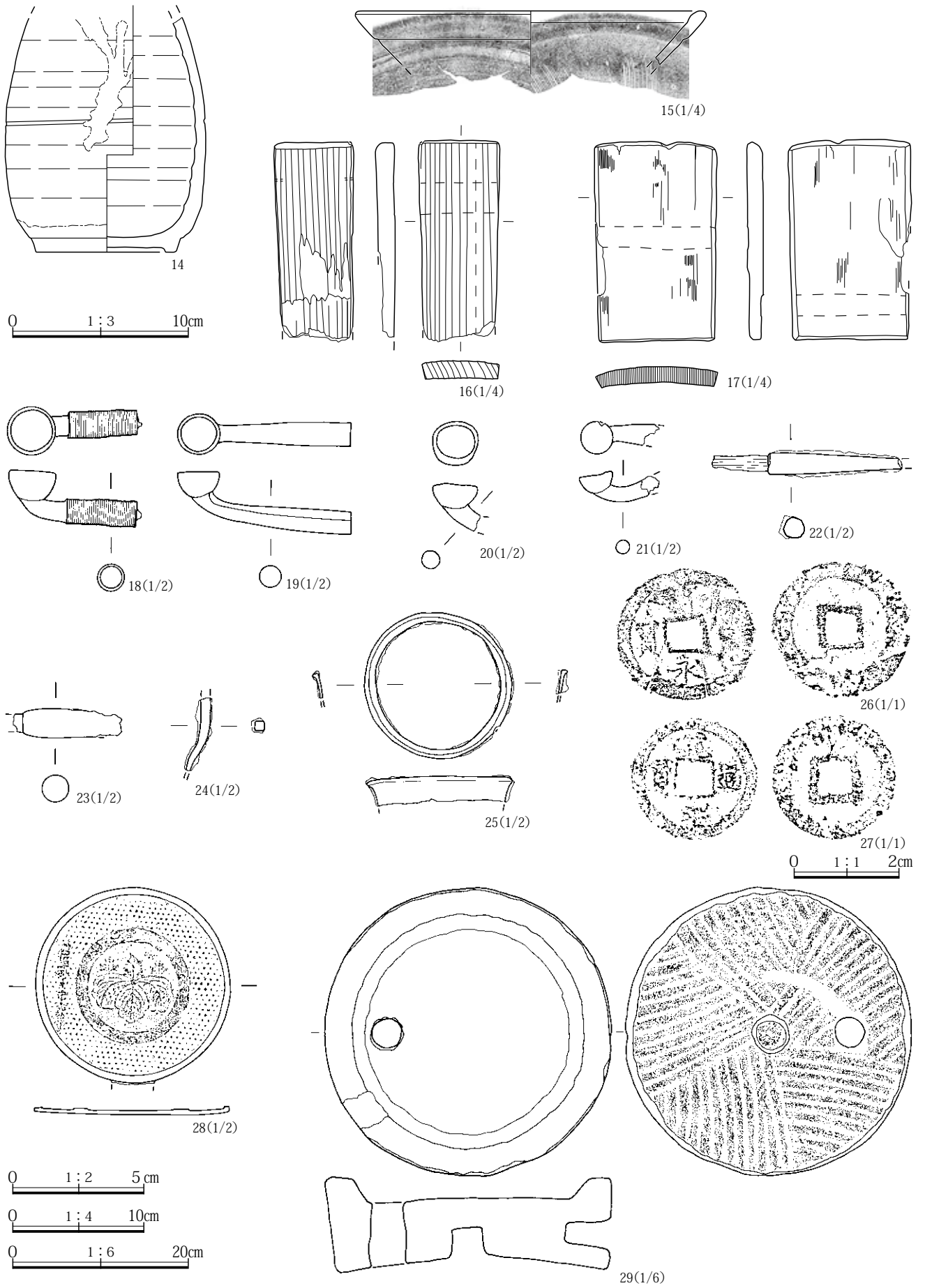
7号屋敷跡 水場2号井戸



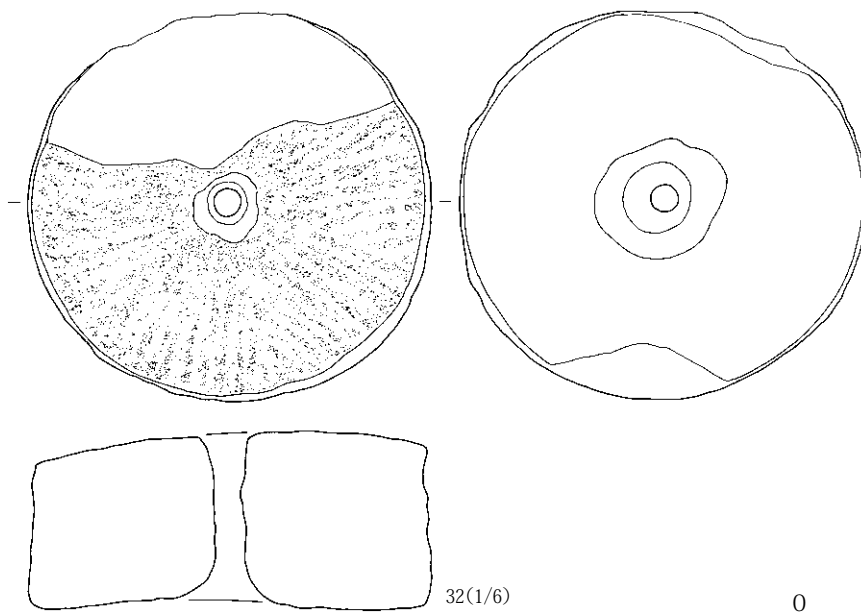
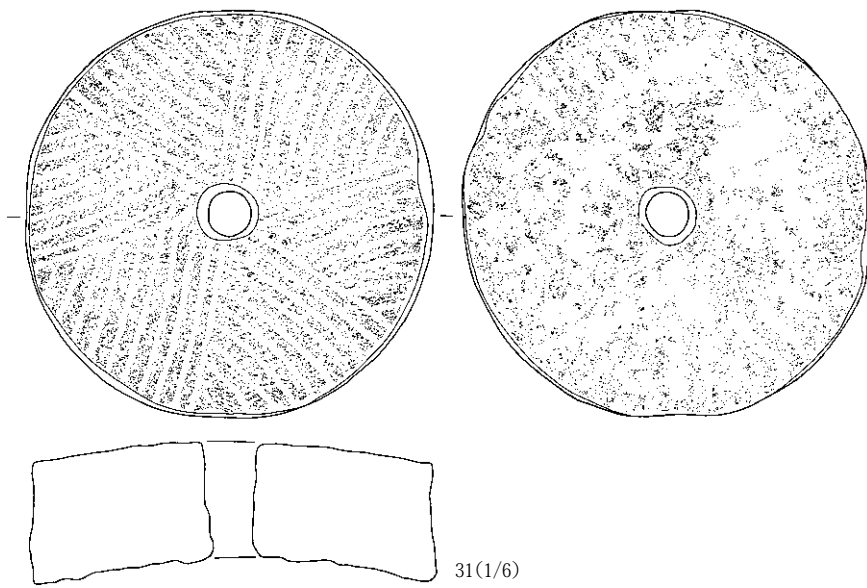
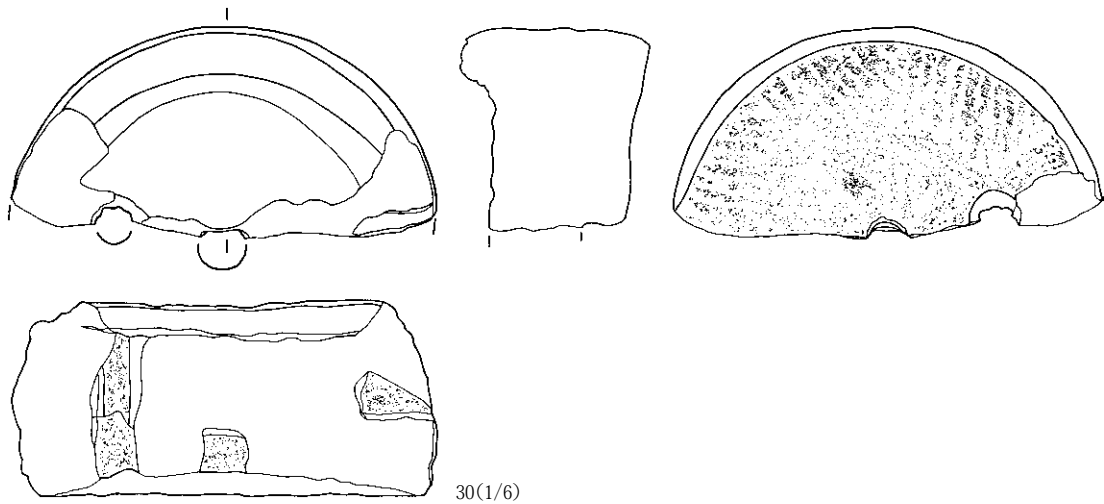
8号屋敷跡 16号建物



第179図 IV区7号屋敷跡水場2号井戸出土遺物、8号屋敷跡16号建物出土遺物(1)



第180図 IV区8号屋敷跡16号建物 出土遺物(2)

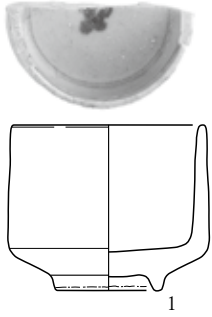


0 1:6 20cm

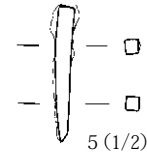
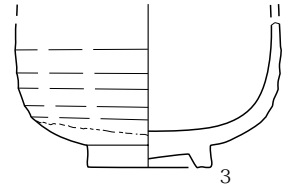
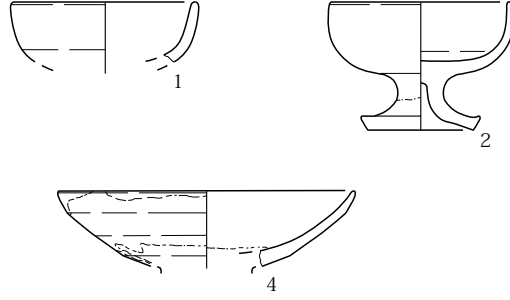
第181図 IV区8号屋敷跡16号建物出土遺物(3)

第3章 発見された遺構と遺物

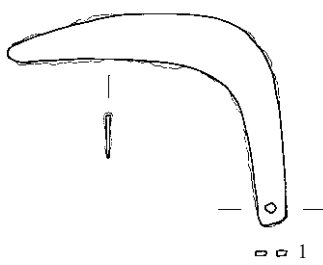
8号屋敷跡 20号建物



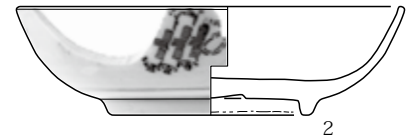
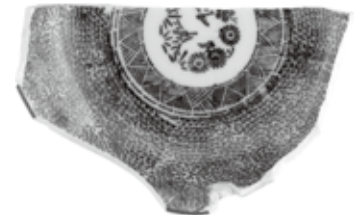
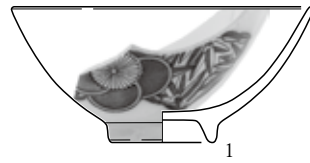
8号屋敷跡 26号建物



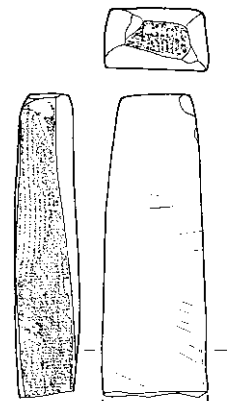
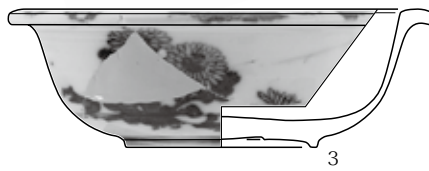
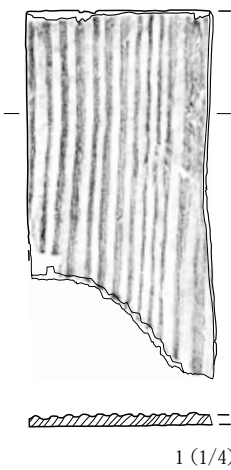
8号屋敷跡 6号井戸



8号屋敷跡 22号石垣

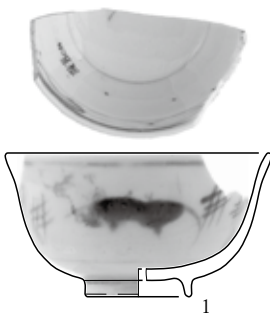


8号屋敷跡 1号石組

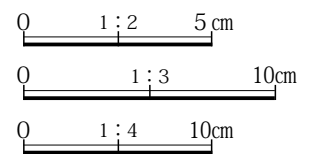
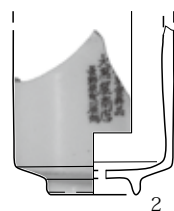
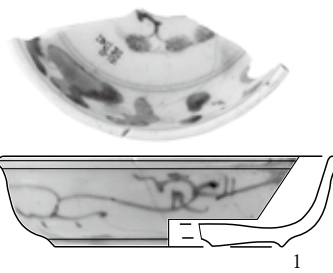


4 (1/2)

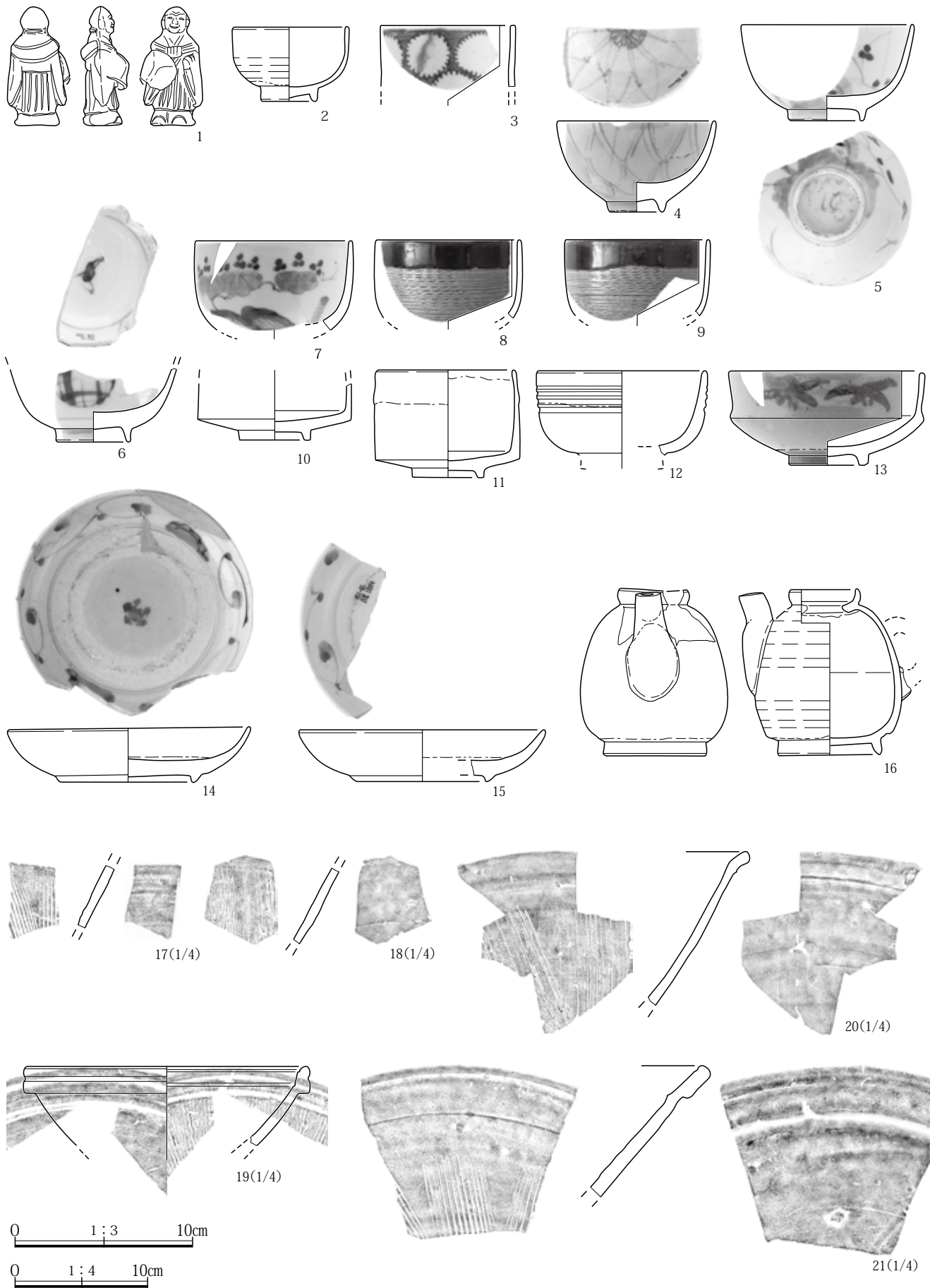
8号屋敷跡 23号石垣



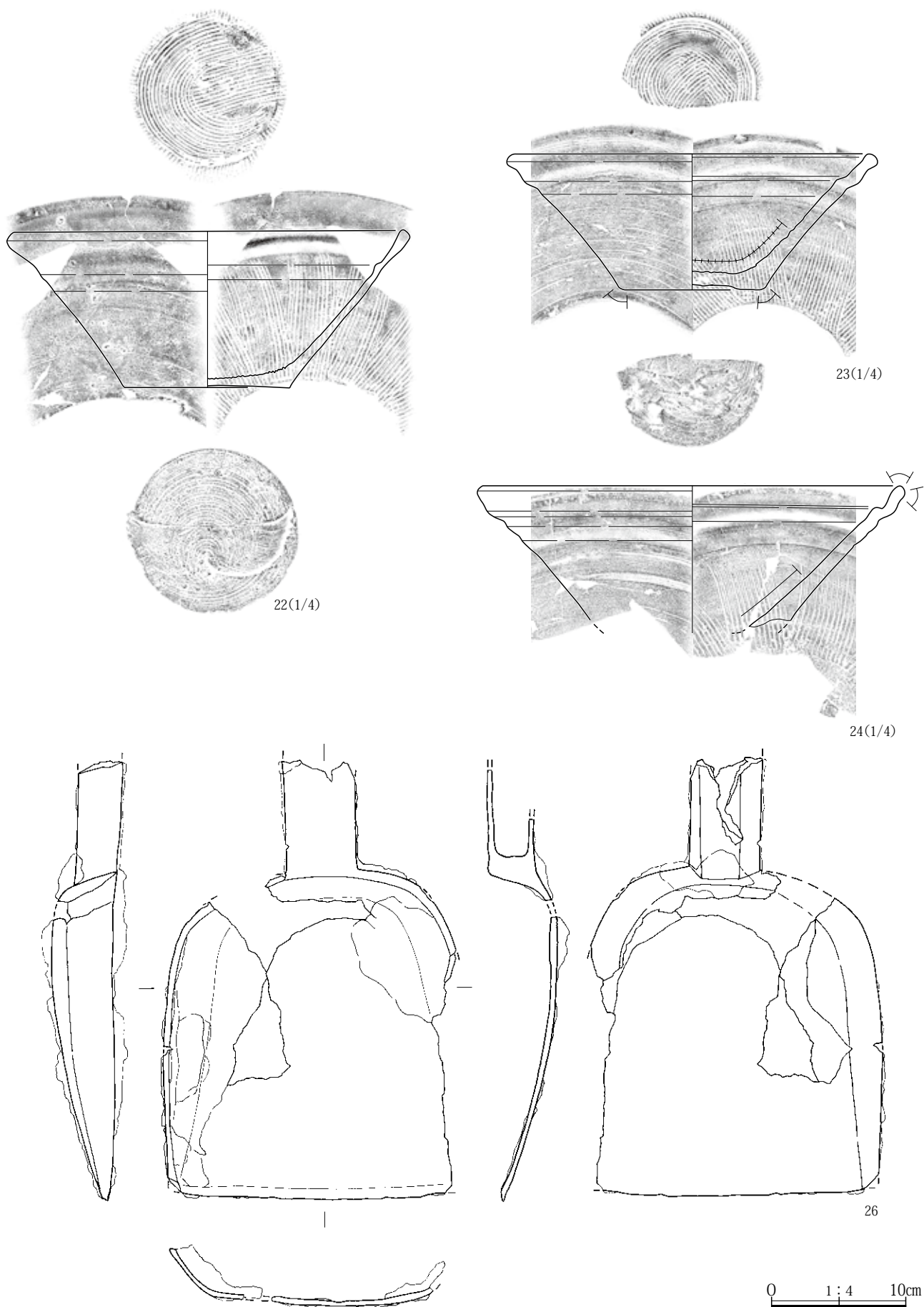
8号屋敷跡 17号土坑



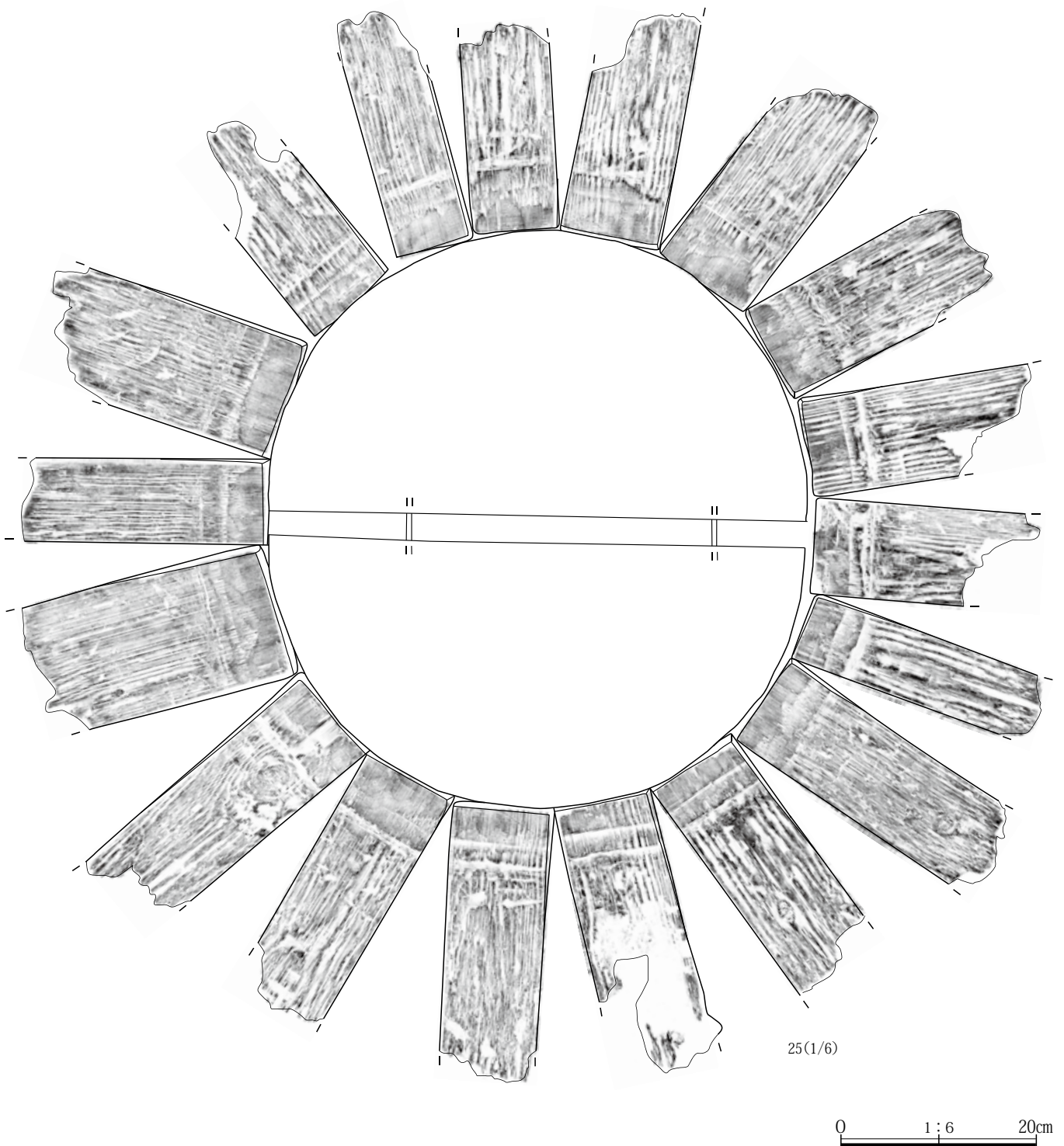
第182図 IV区8号屋敷跡20・26号建物、6号井戸、1号石組、22・23号石垣、17号土坑出土遺物



第183図 IV区9号屋敷跡18号建物出土遺物(1)

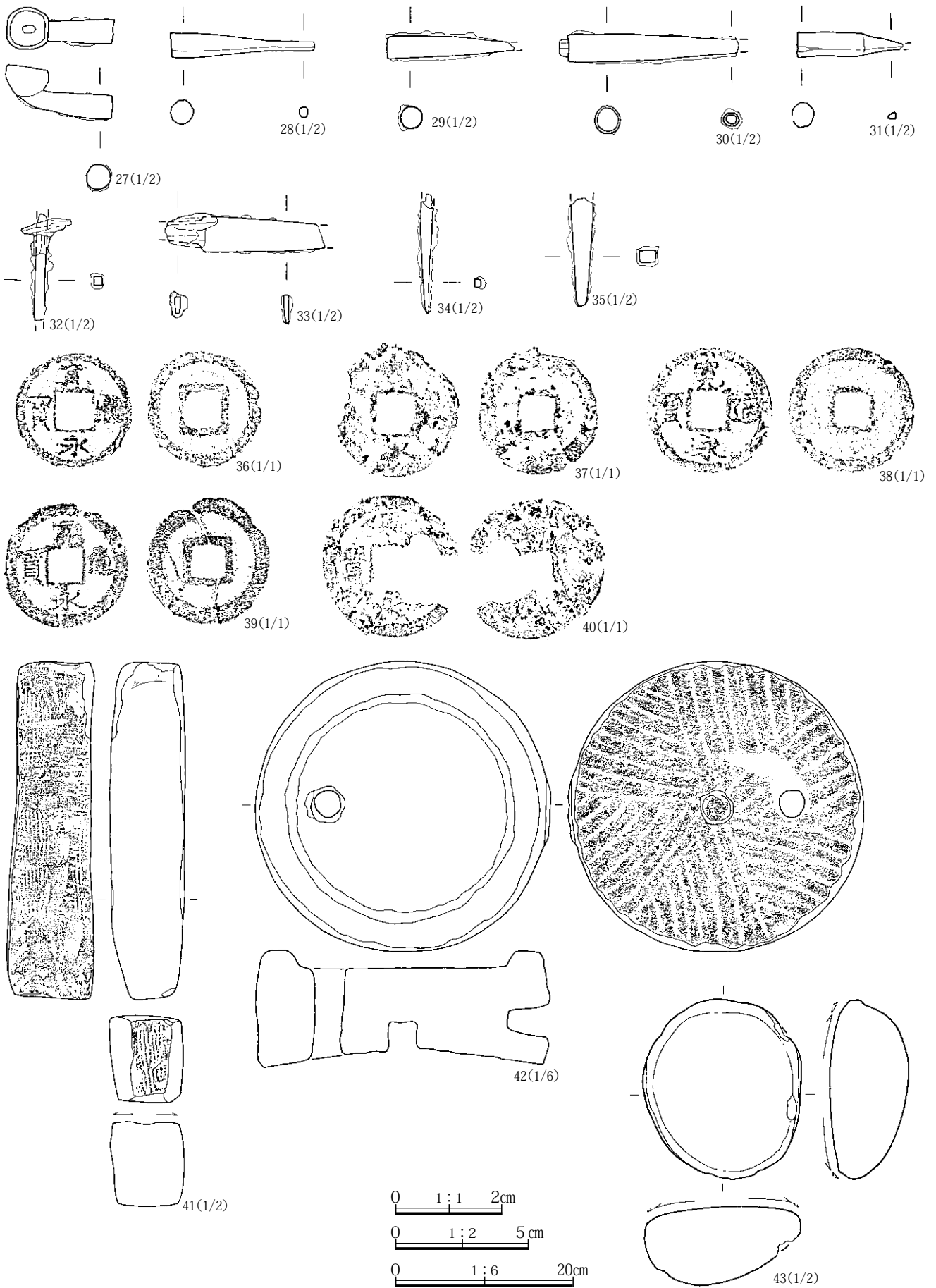


第184図 IV区9号屋敷跡18号建物出土遺物(2)

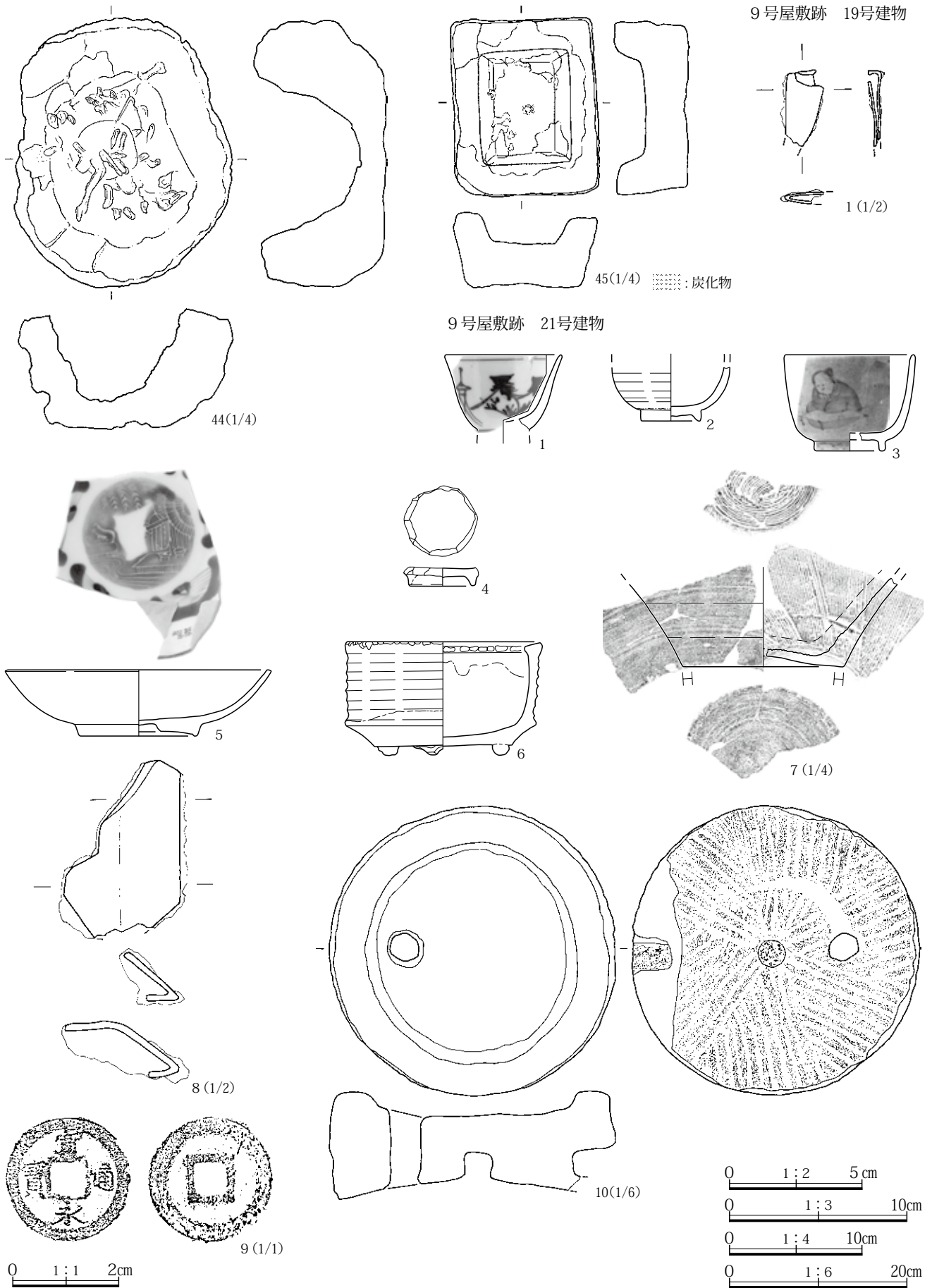


第185図 IV区9号屋敷跡18号建物出土遺物(3)

第3章 発見された遺構と遺物

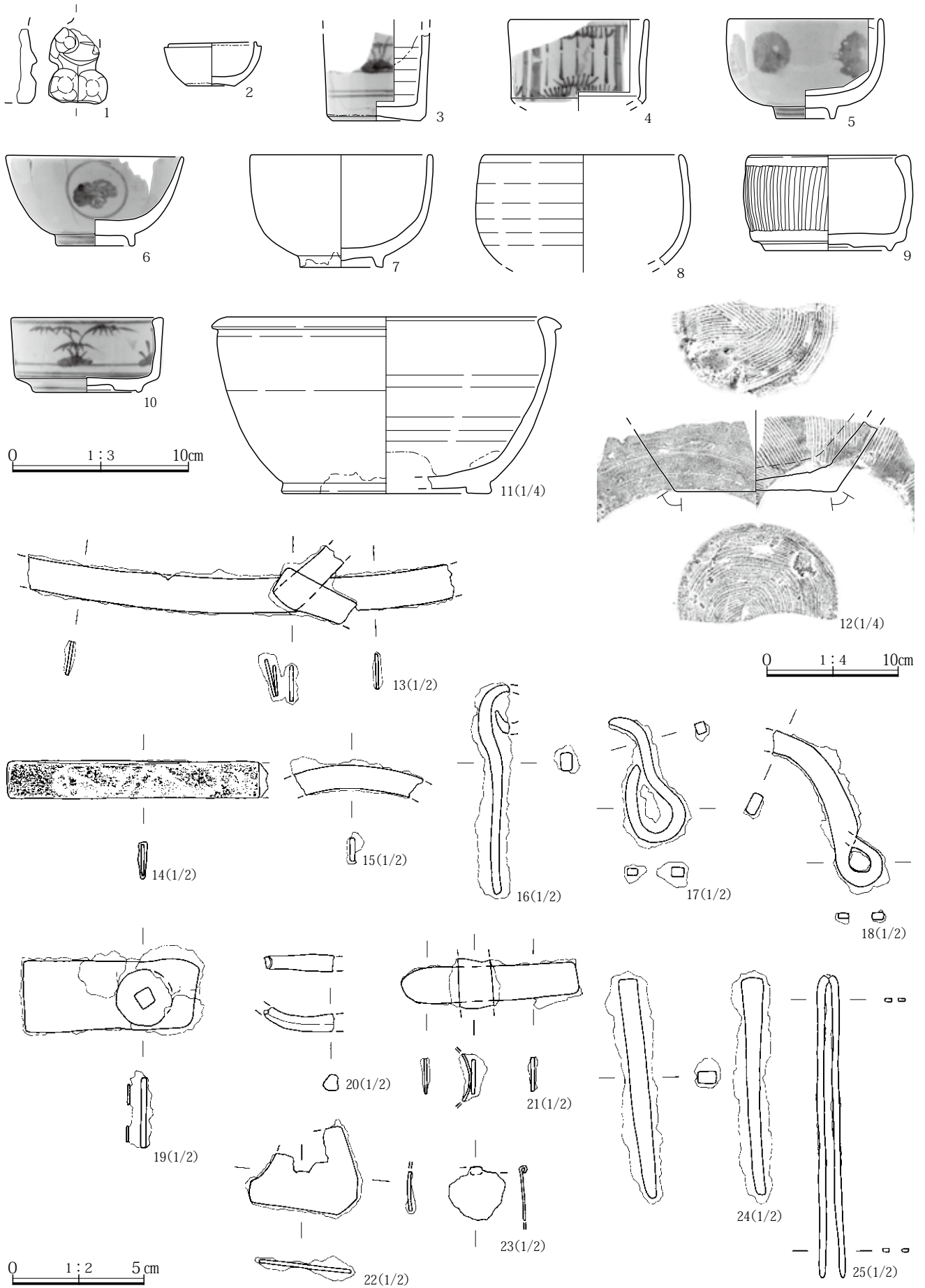


第186図 IV区9号屋敷跡18号建物出土遺物(4)

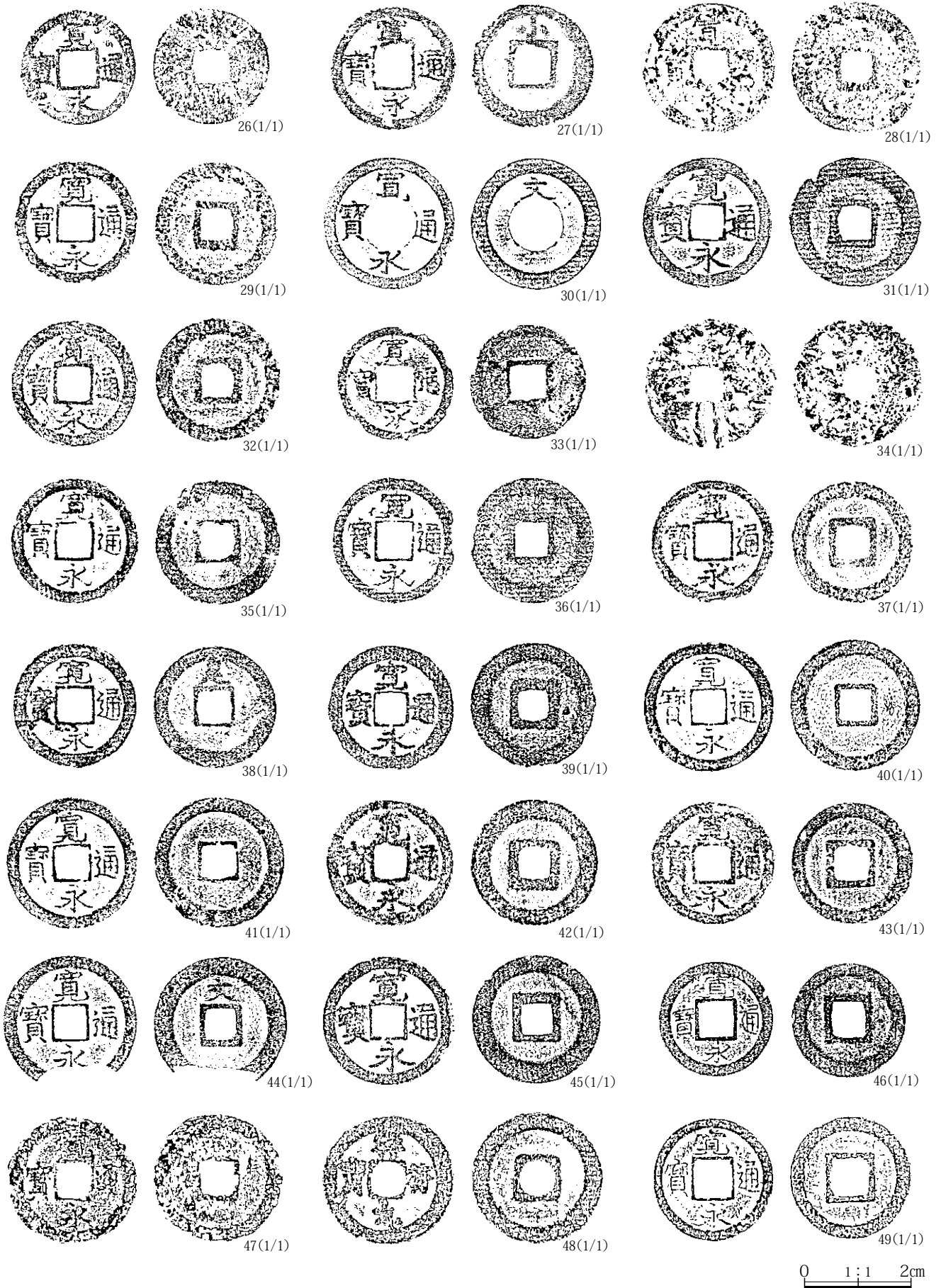


第187図 IV区9号屋敷跡18号建物出土遺物(5)、19・21号建物出土遺物

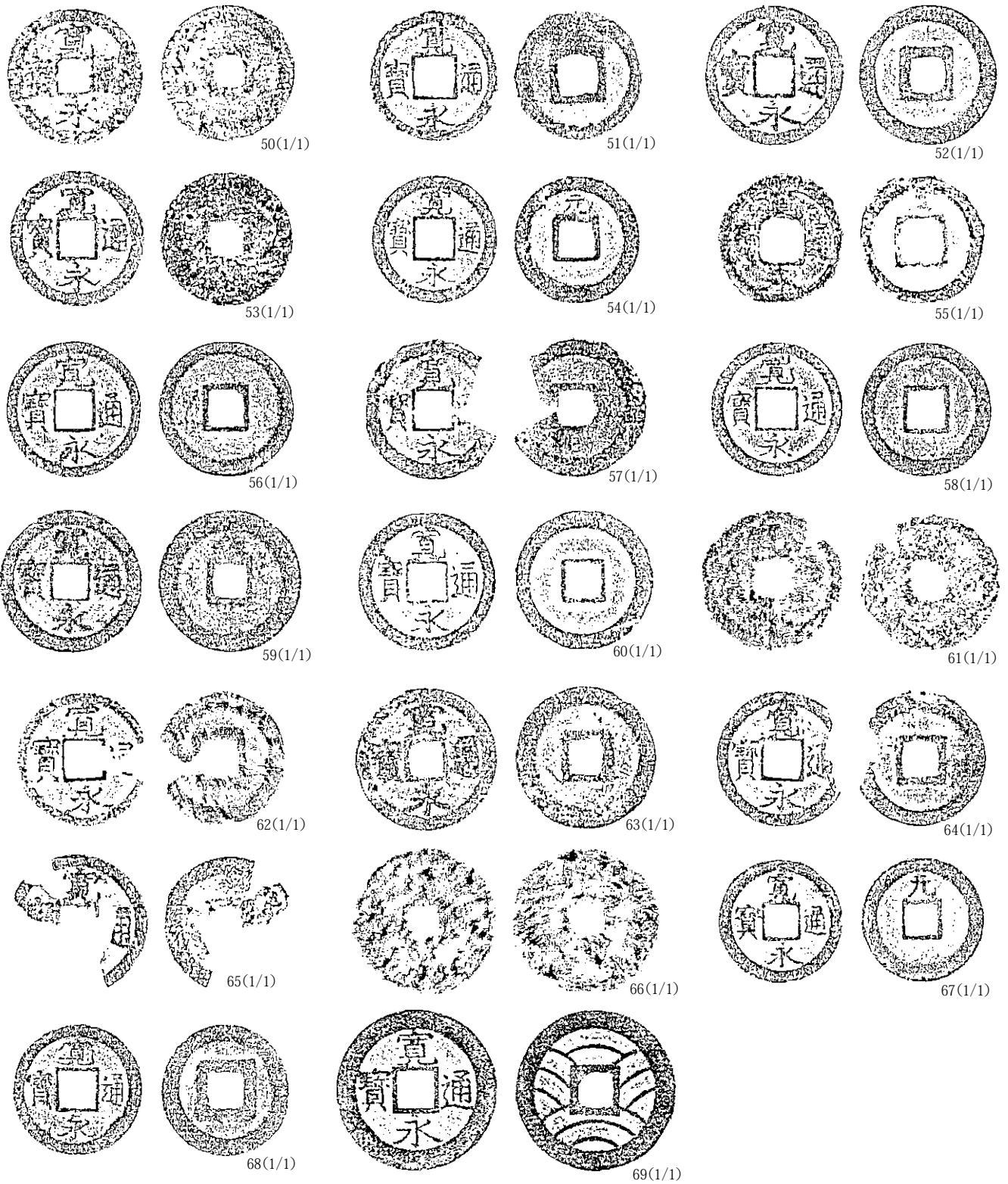
第3章 発見された遺構と遺物



第188図 IV区10号屋敷跡23号建物出土遺物(1)

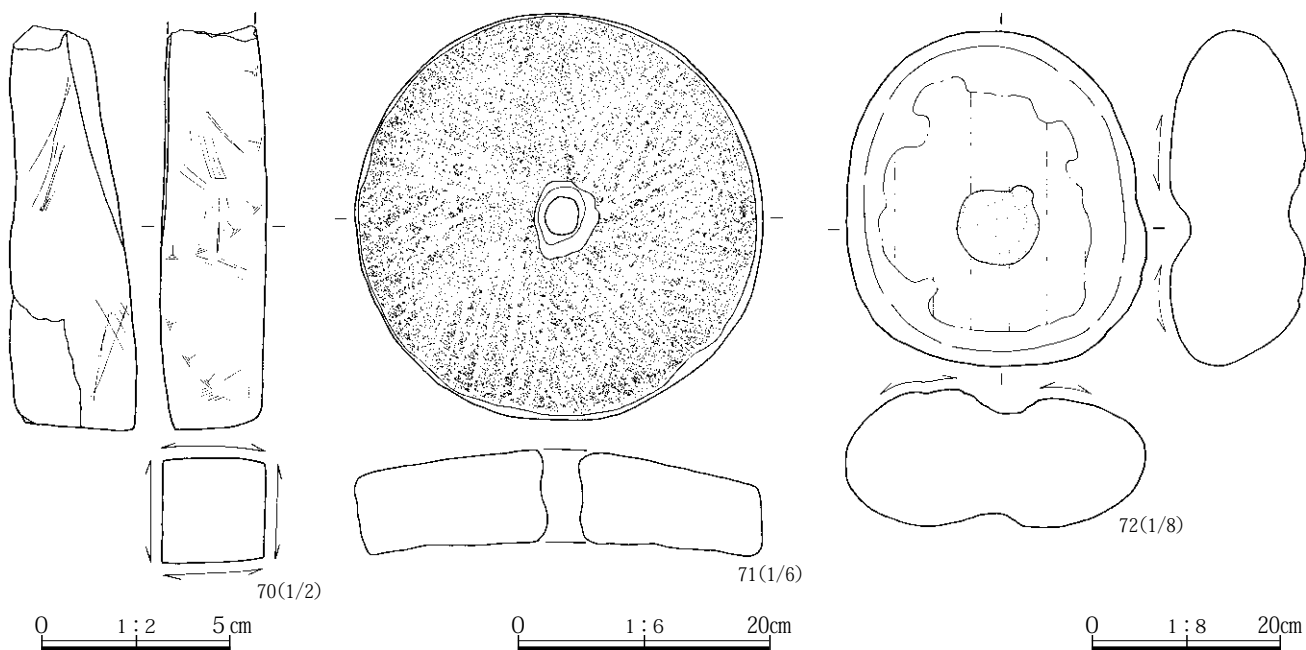


第189図 IV区10号屋敷跡23号建物出土遺物(2)

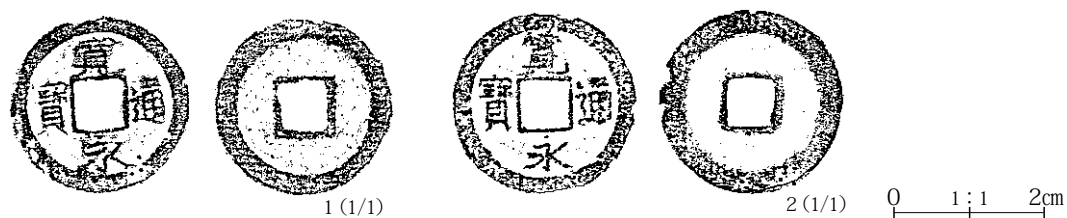


0 1:1 2cm

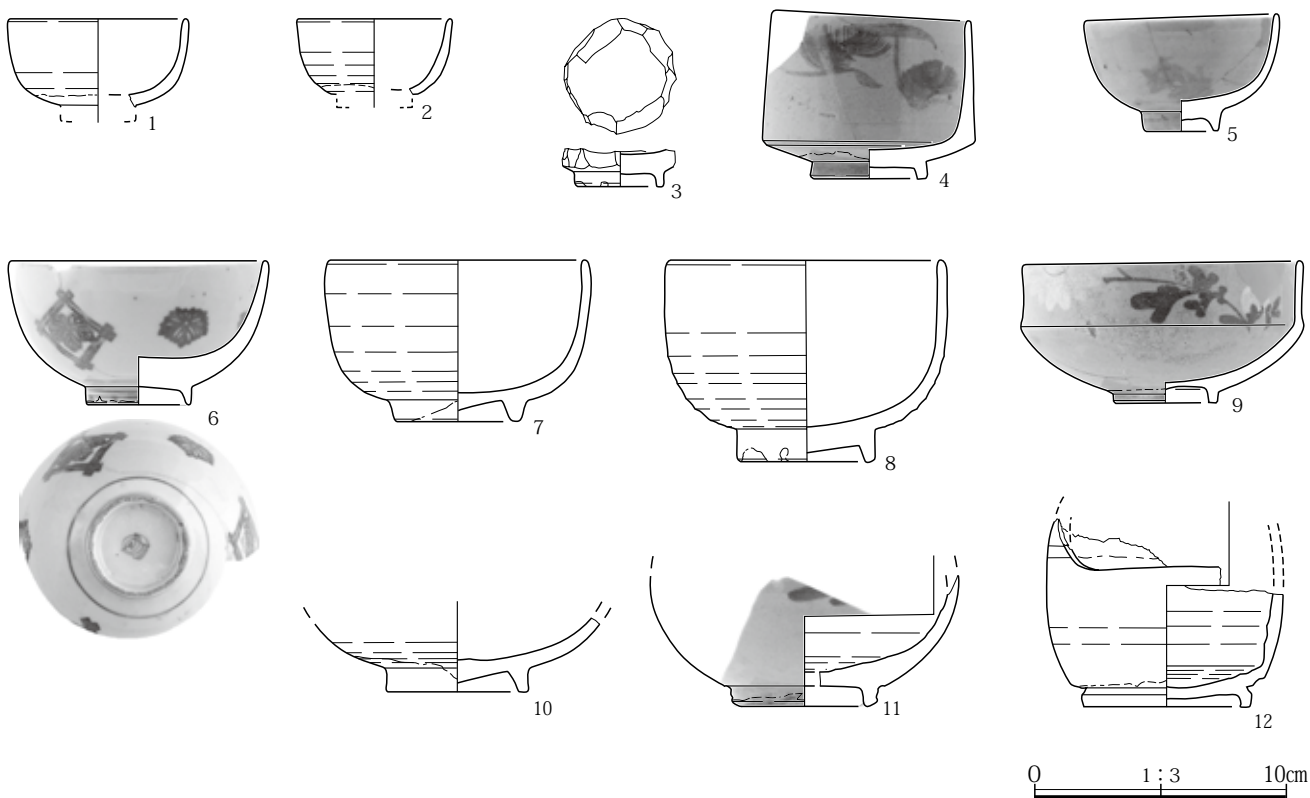
第190図 IV区10号屋敷跡23号建物出土遺物(3)



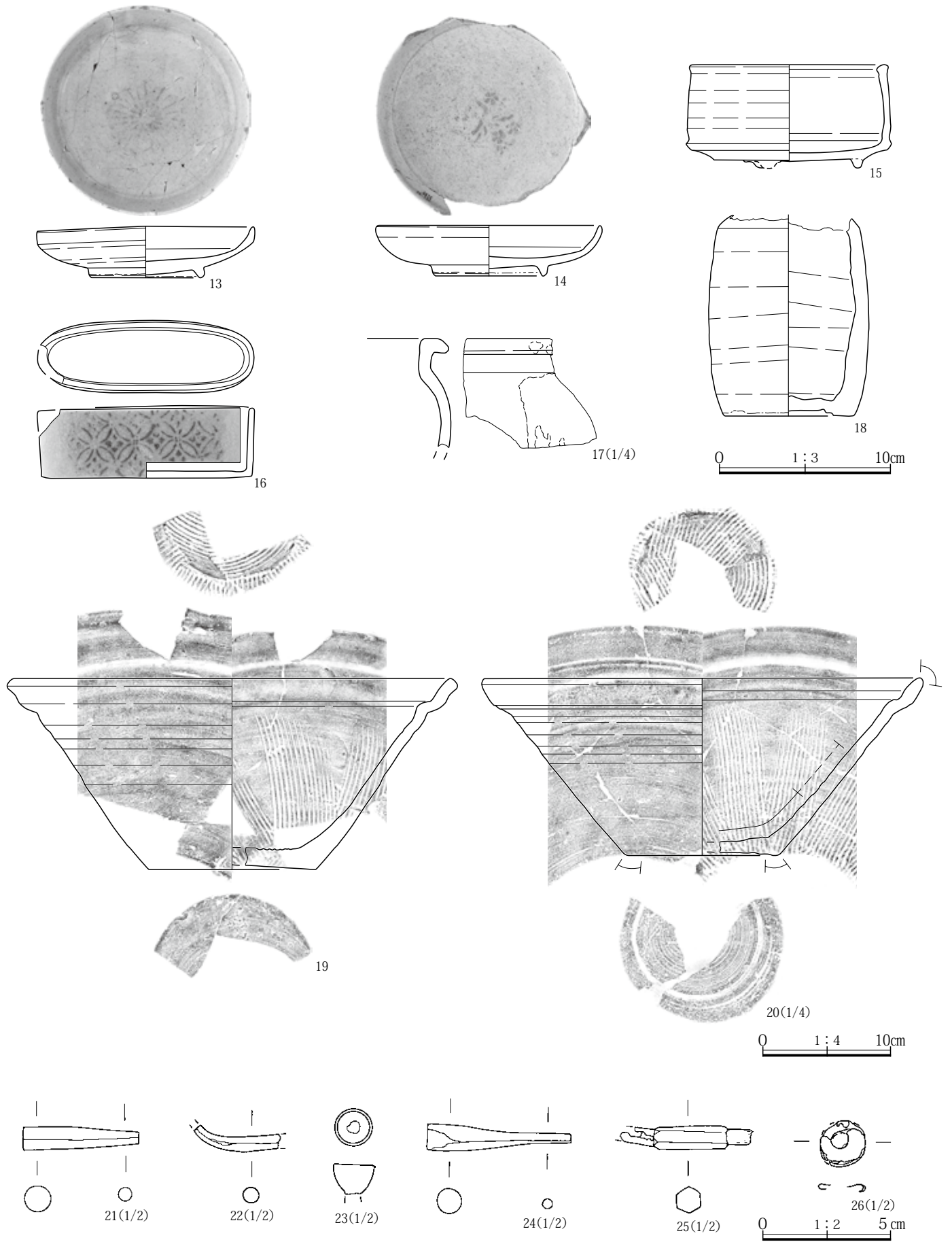
10号屋敷跡 30号建物



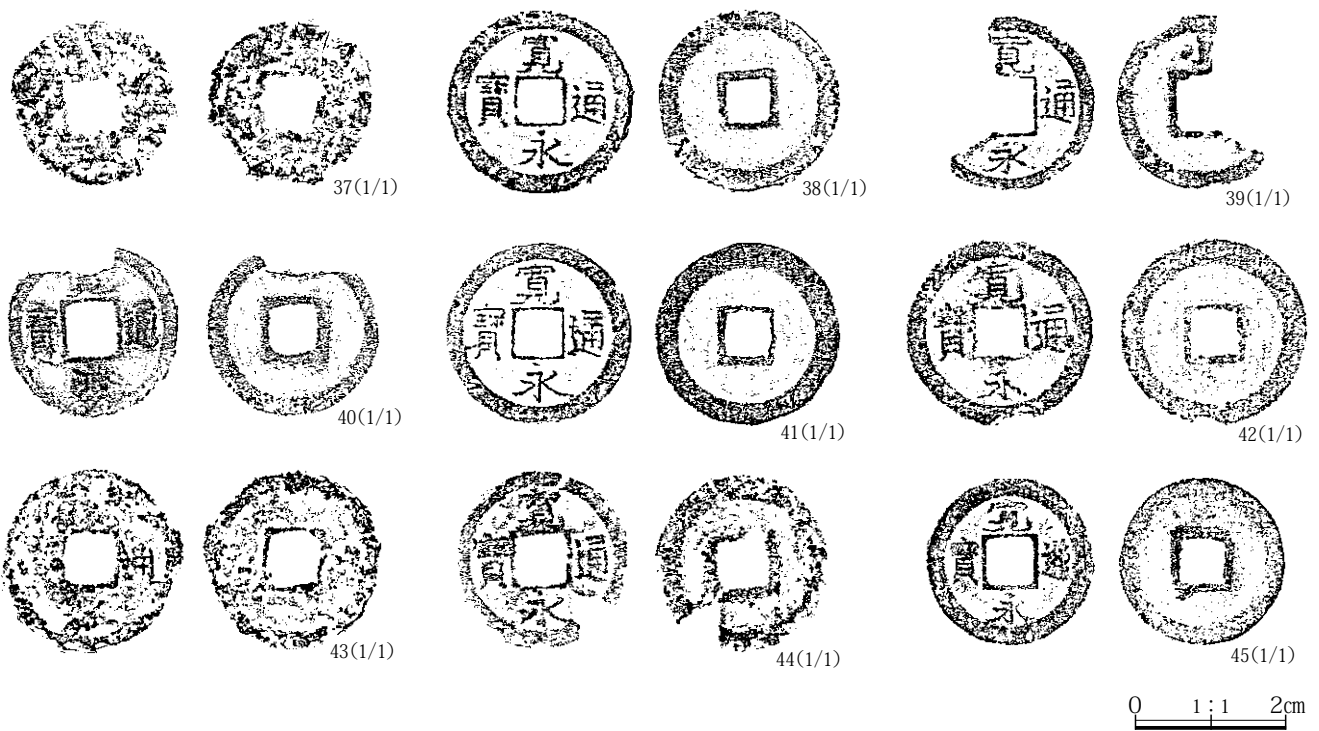
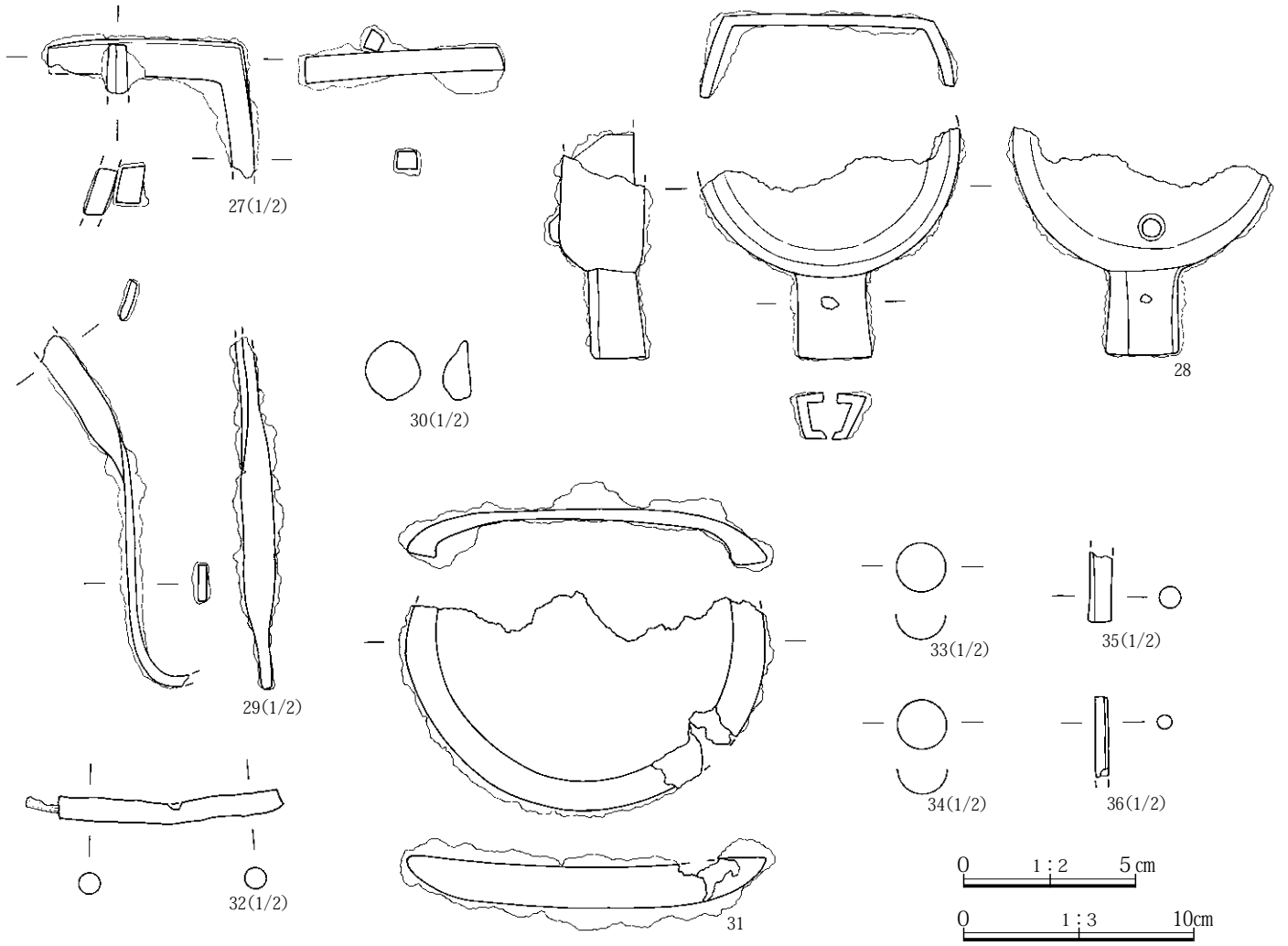
11号屋敷跡 31号建物



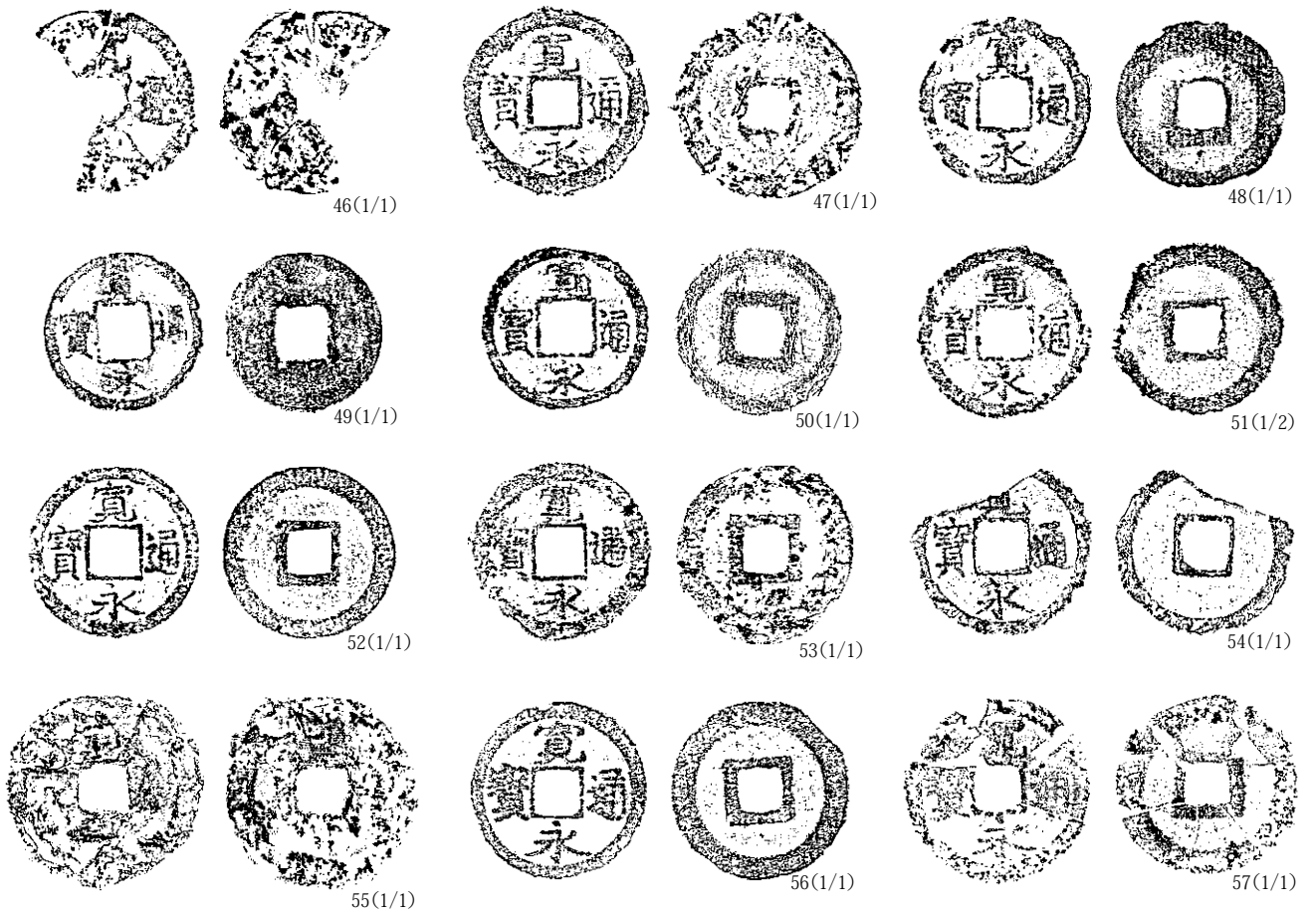
第191図 IV区10号屋敷跡23・30号建物出土遺物(4)、11号屋敷跡31号建物出土遺物(1)



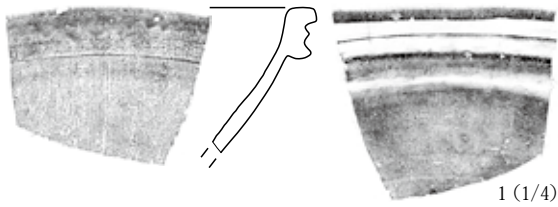
第192図 IV区10号屋敷跡31号建物出土遺物(2)



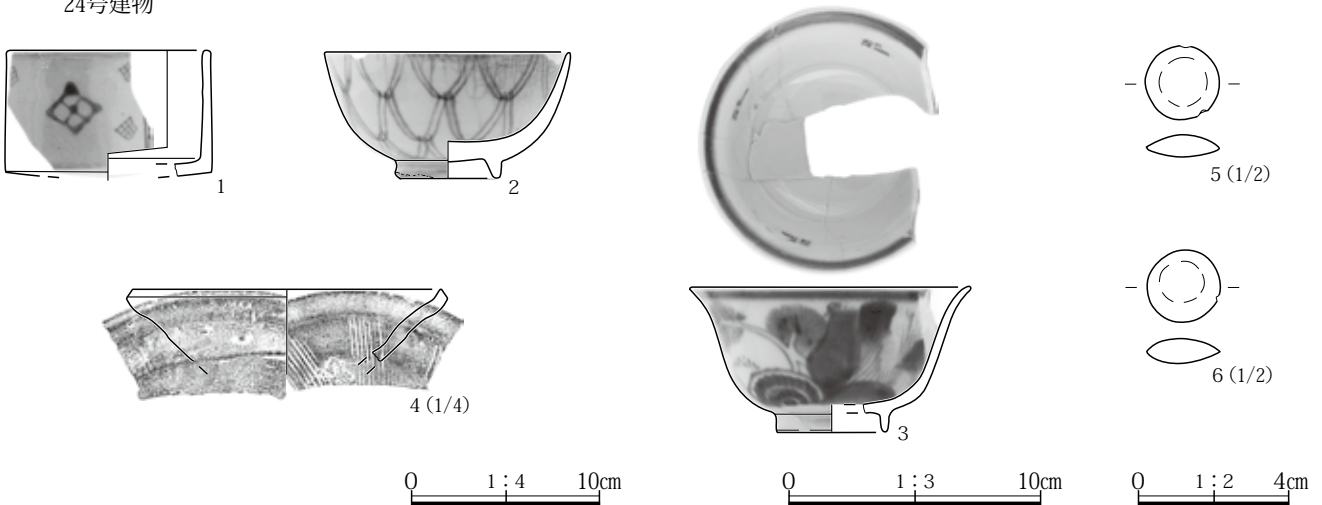
第193図 IV区10号屋敷跡31号建物出土遺物(3)



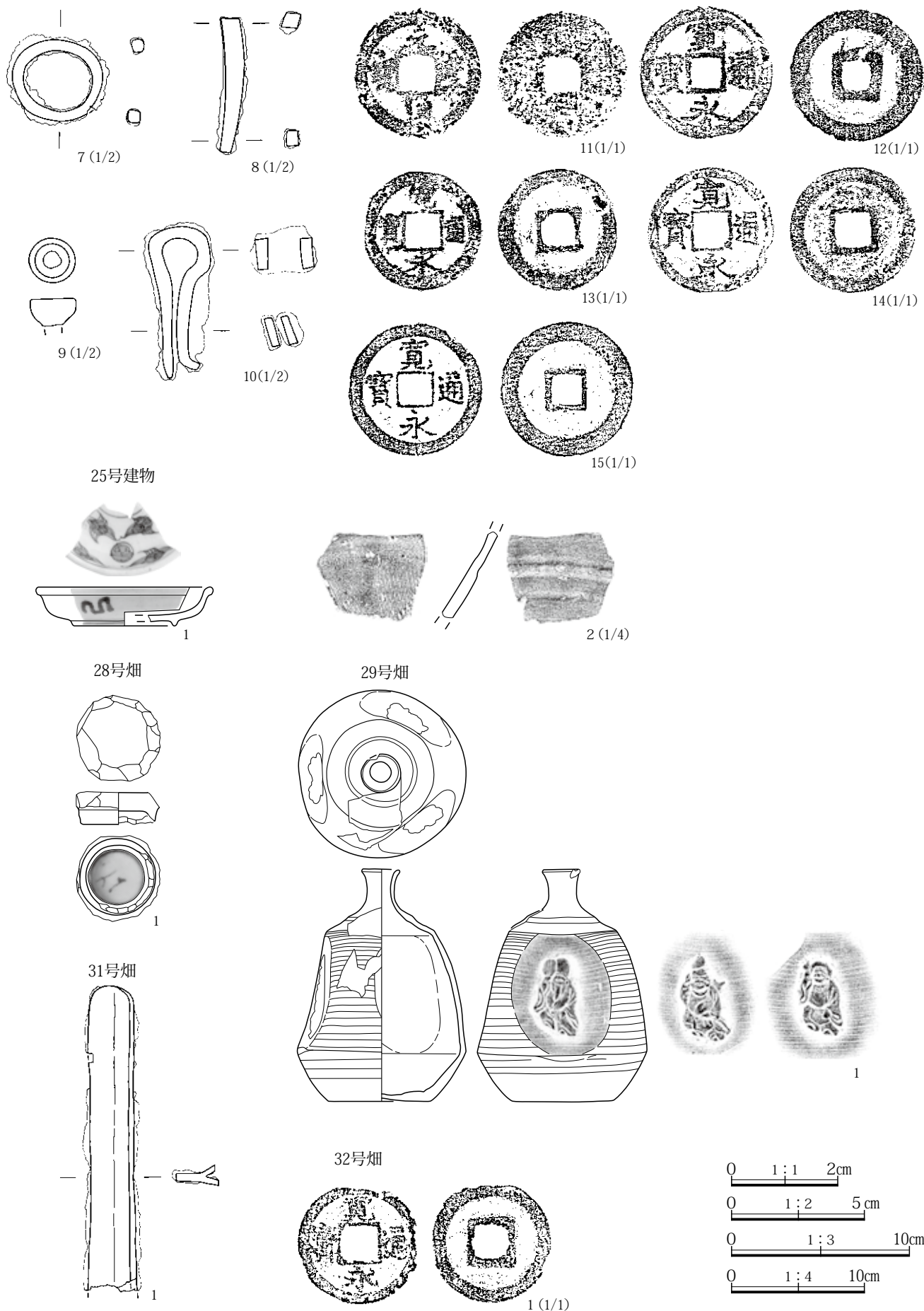
11号屋敷跡 5号井戸



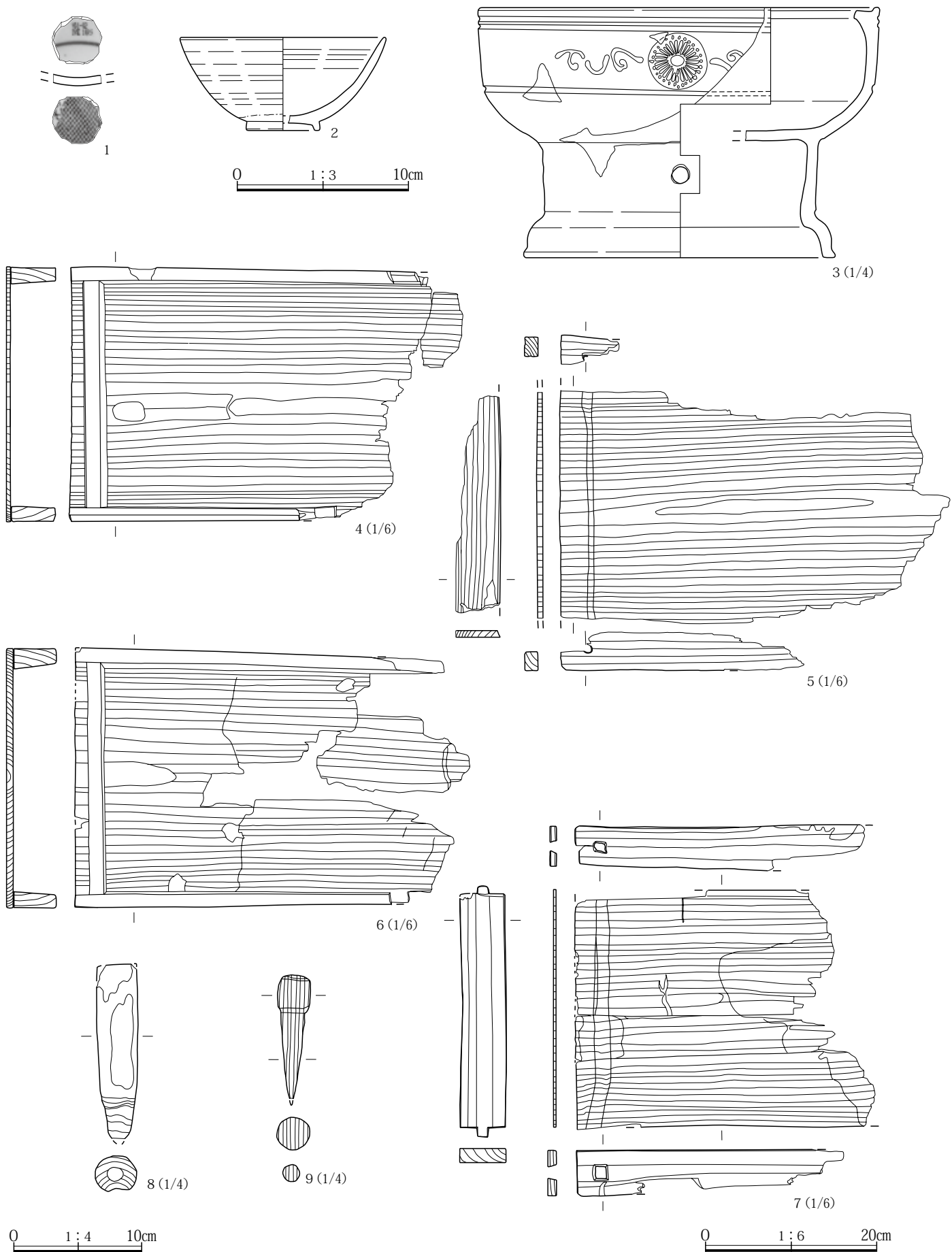
24号建物



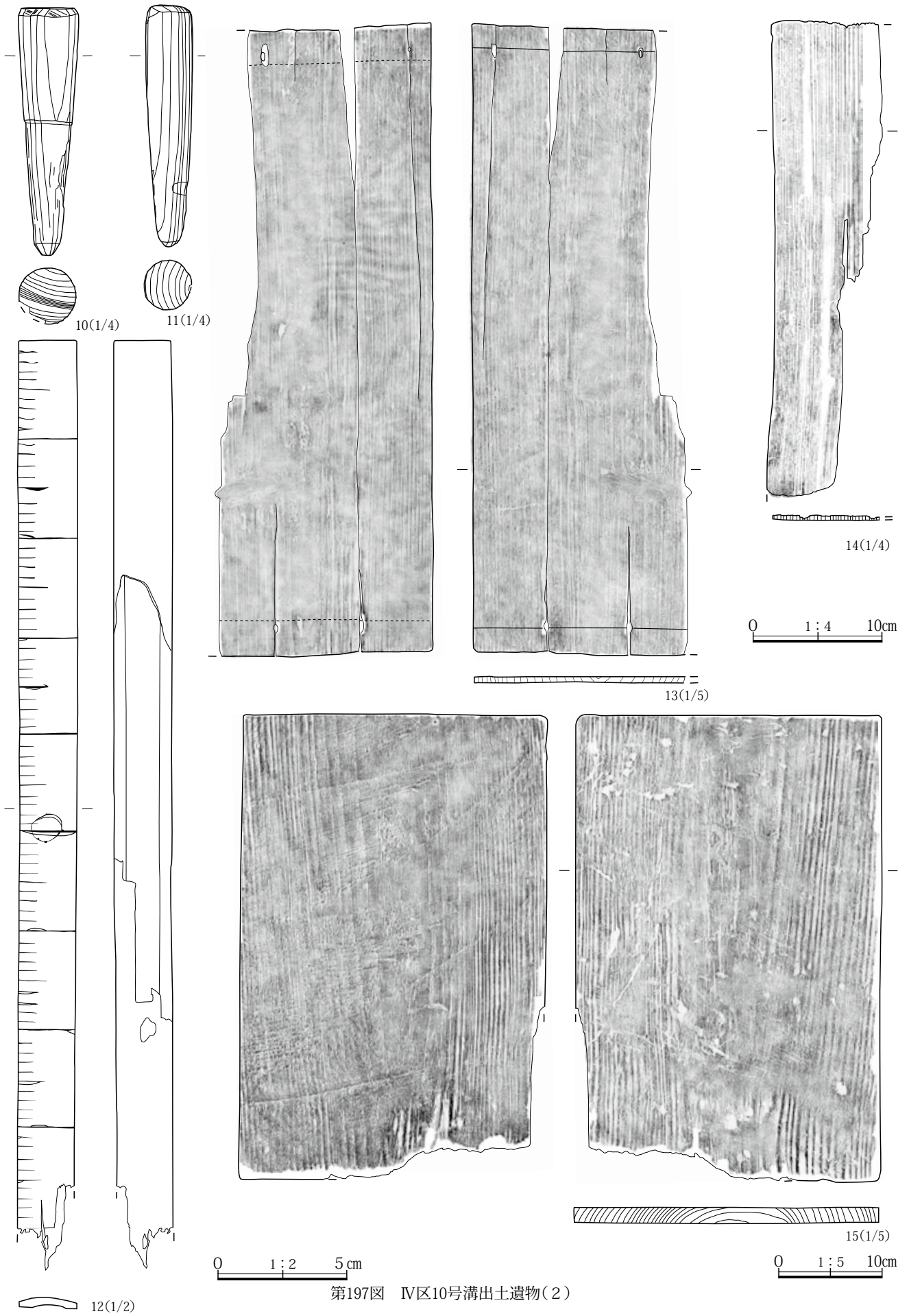
第194図 IV区11号屋敷跡31号建物 出土遺物(4)、5号井戸、24号建物出土遺物(1)



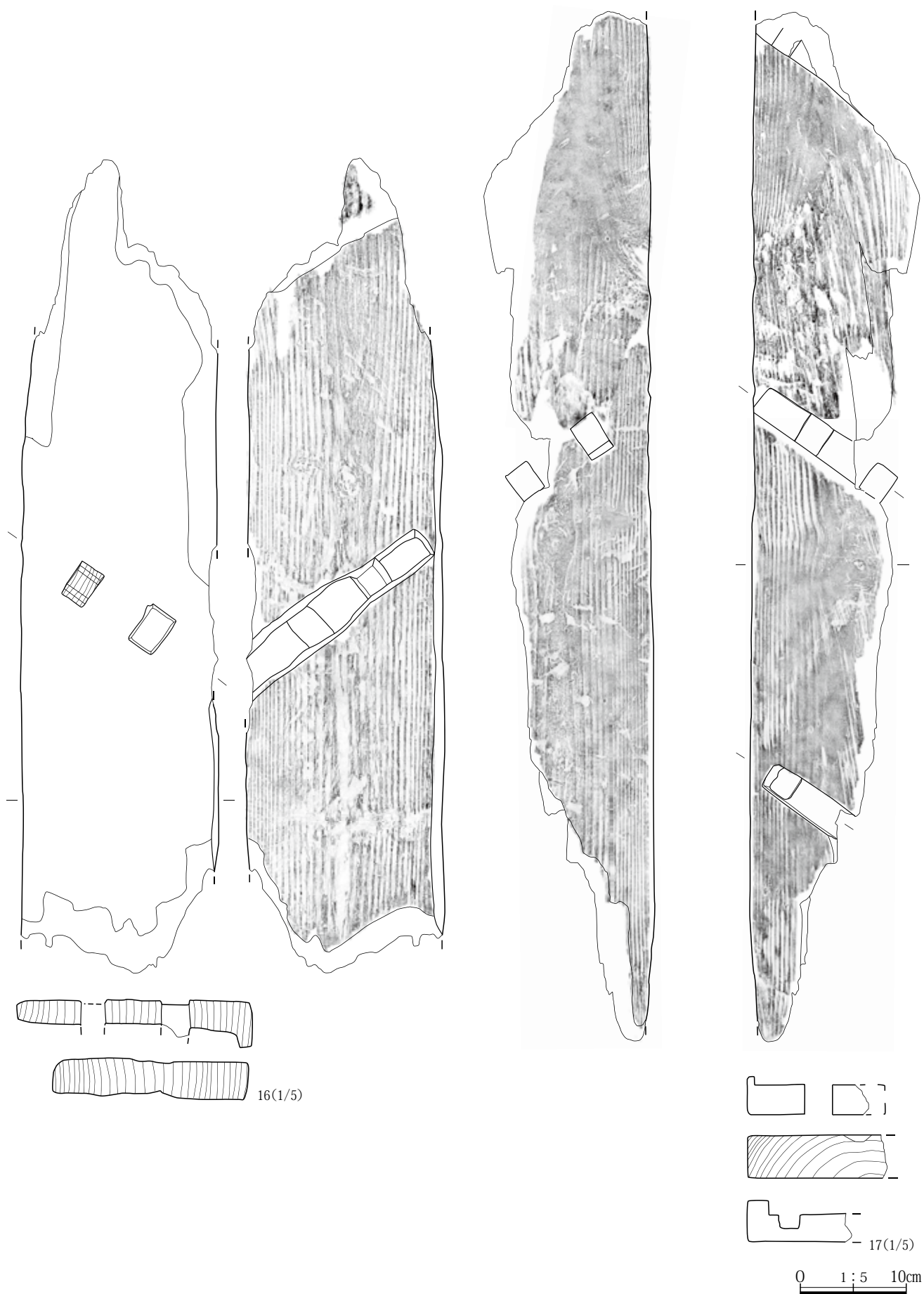
第195図 IV区24号建物出土遺物(2)、25号建物、28・29a・b・c・31・32号畑出土遺物



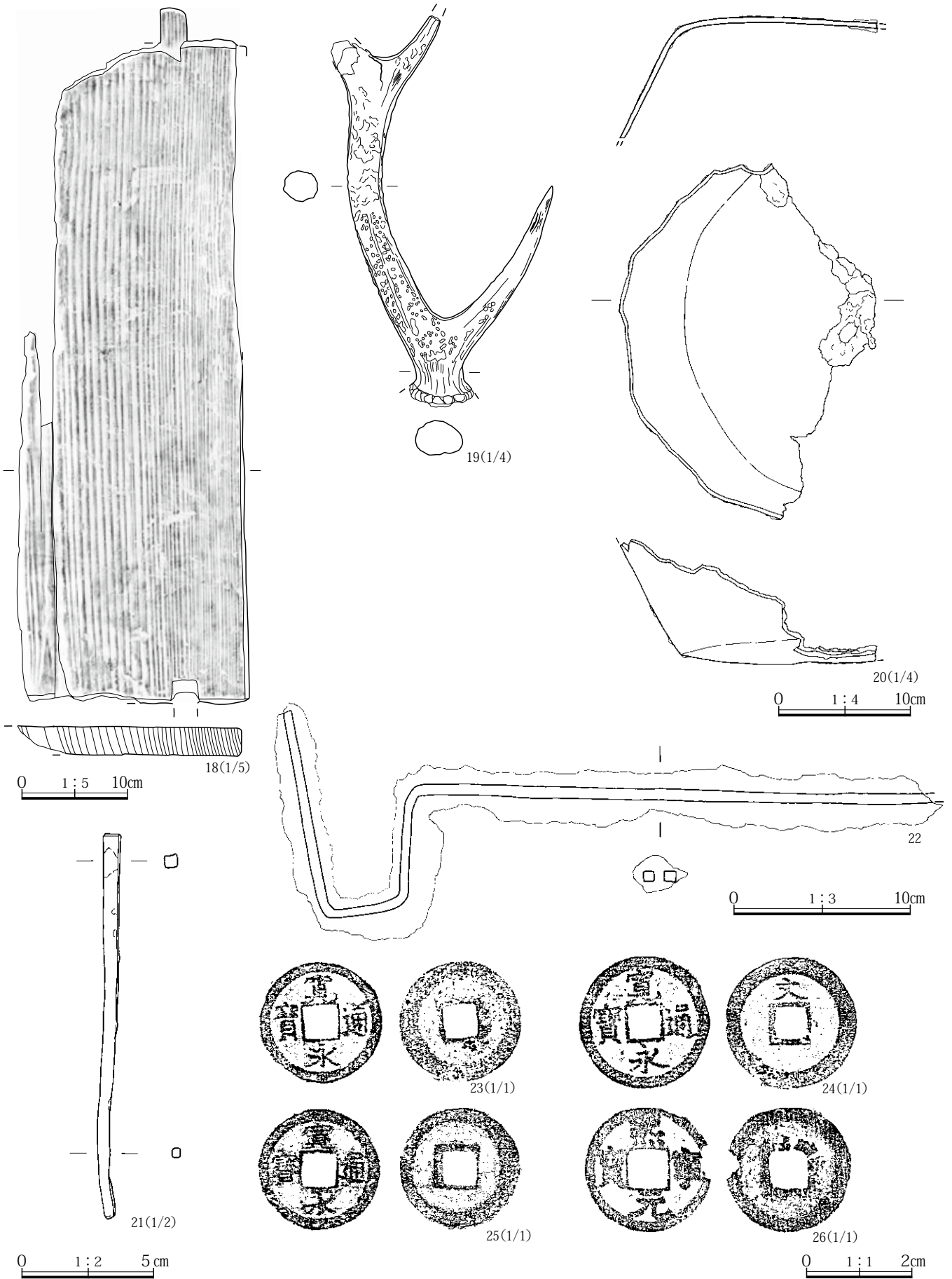
第196図 IV区10号溝出土遺物(1)



第197図 IV区10号溝出土遺物(2)

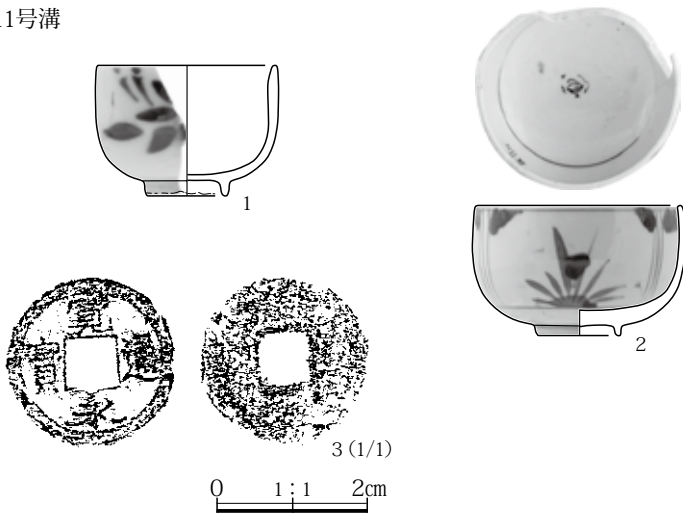


第198図 IV区10号溝出土遺物(3)

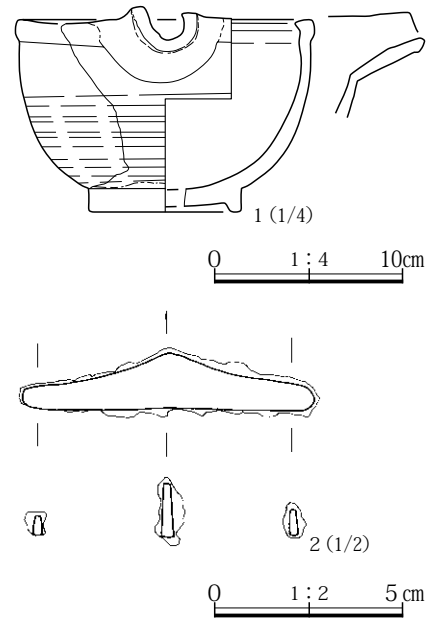


第199図 IV区10号溝出土遺物(4)

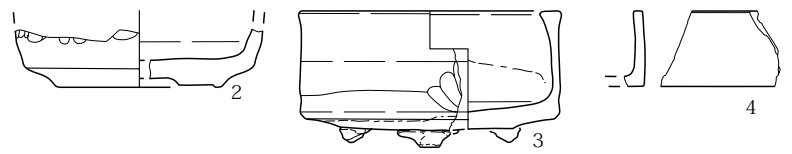
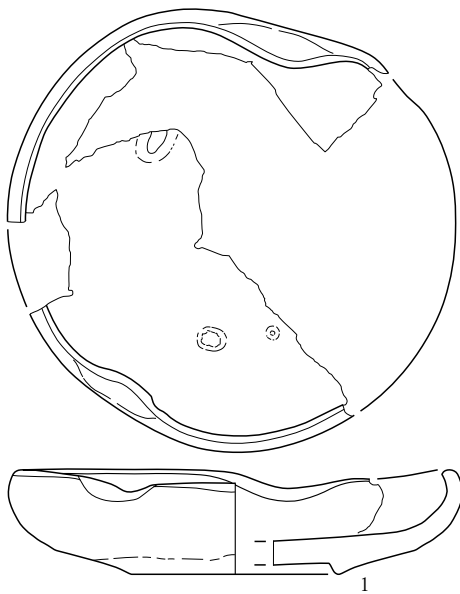
11号溝



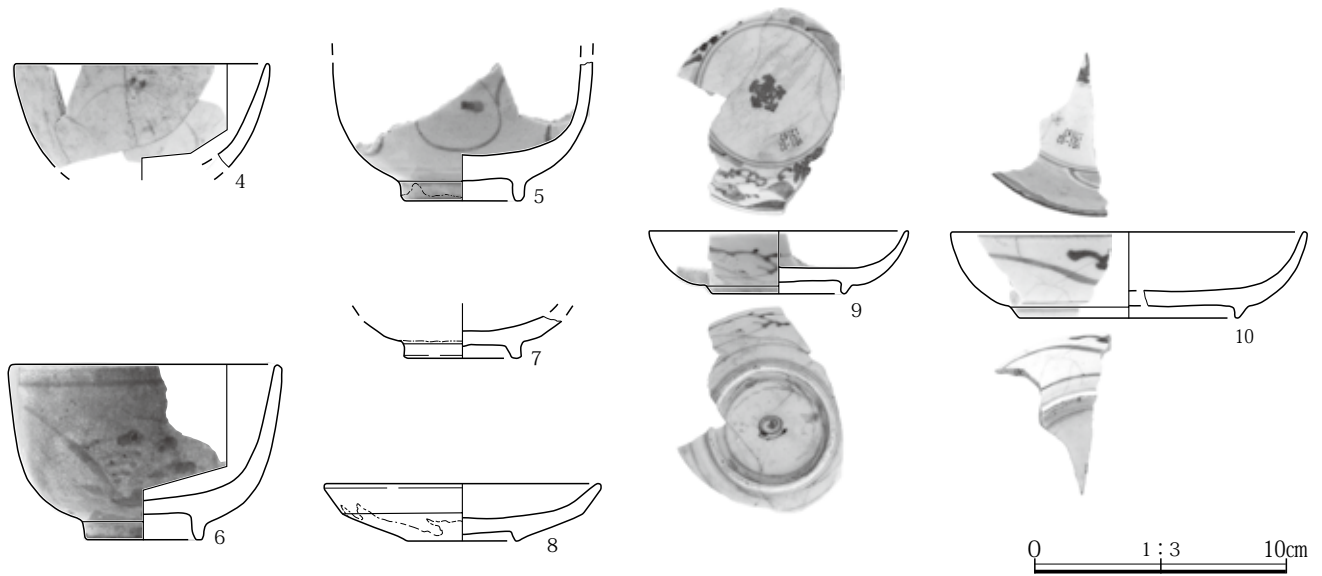
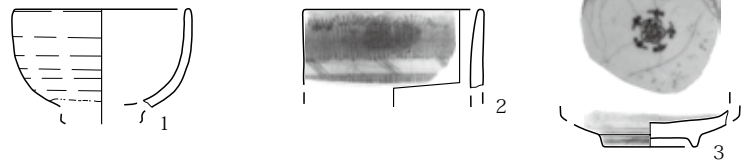
12号溝



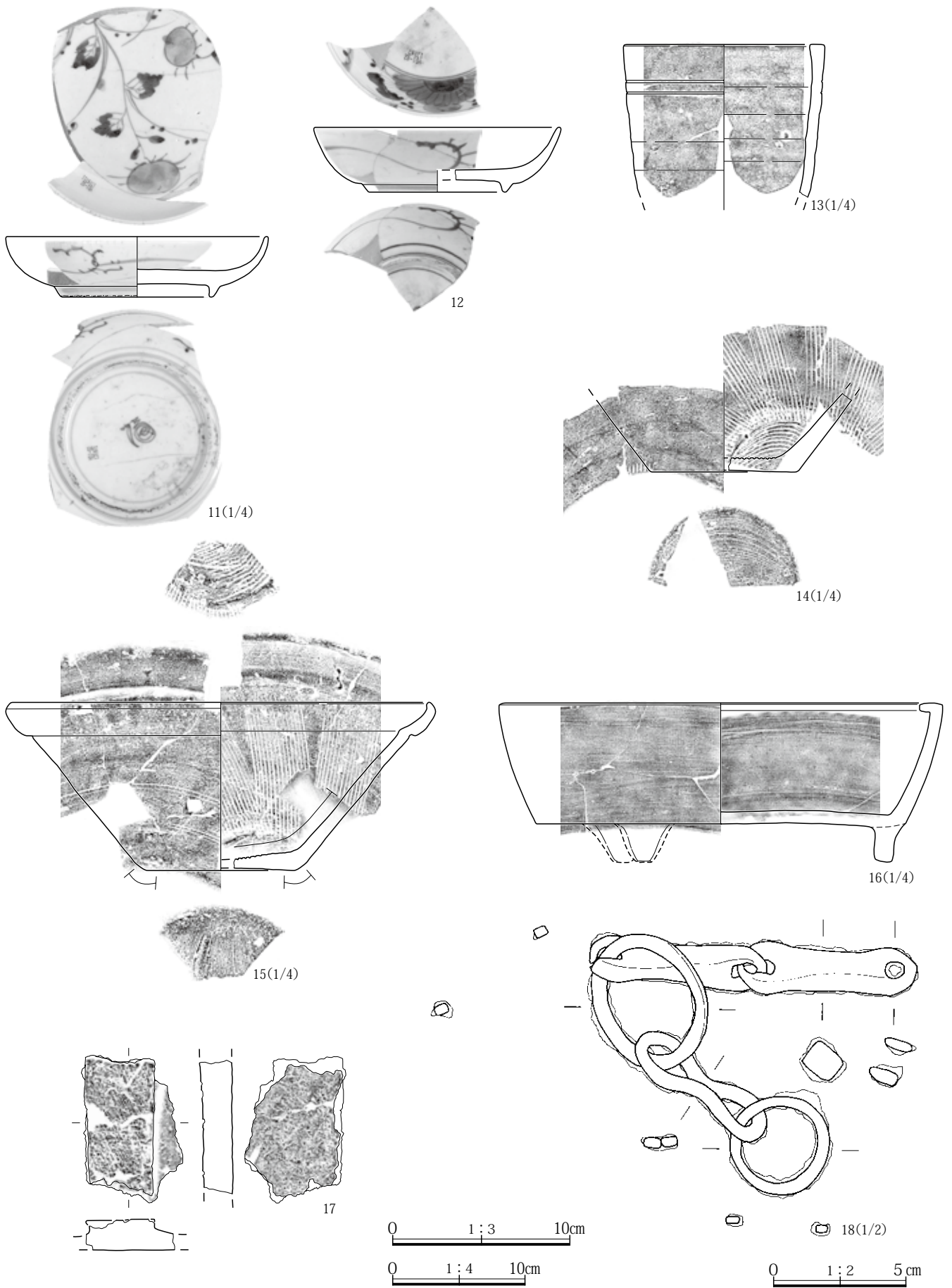
石捨て場



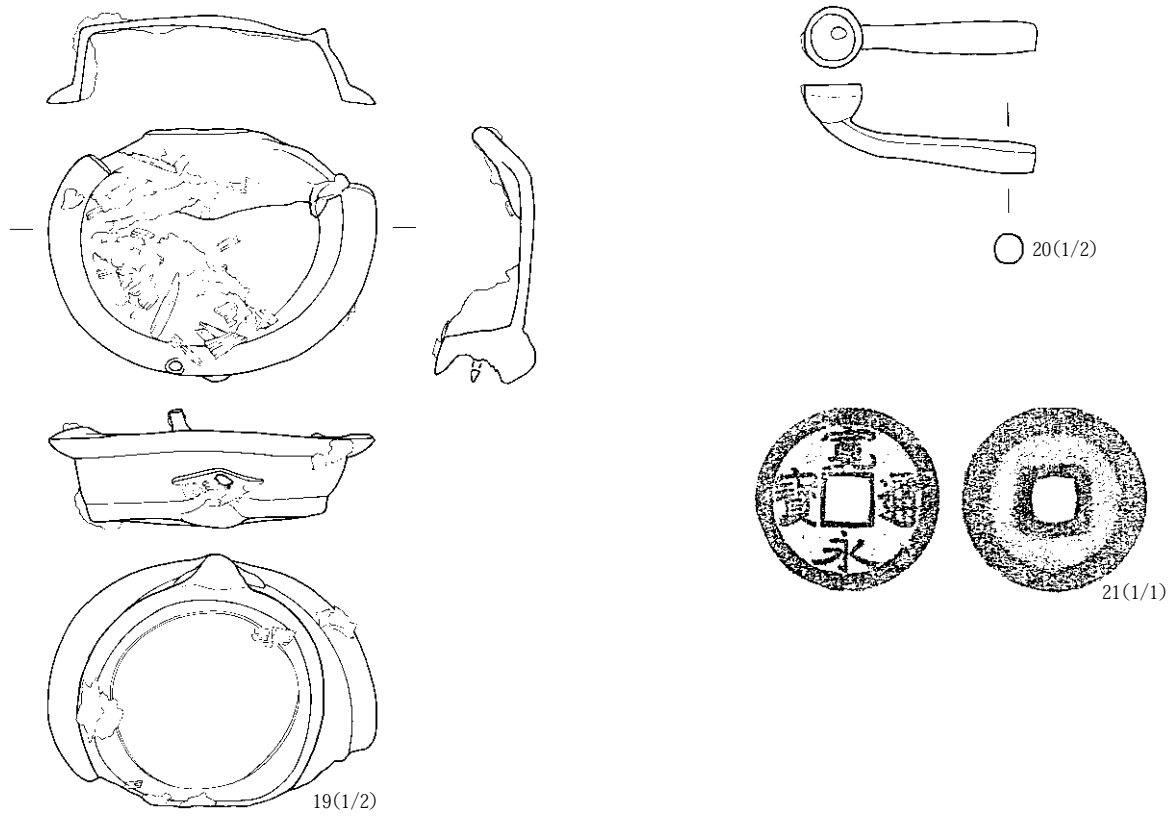
炭窯



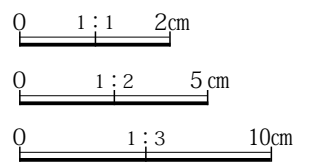
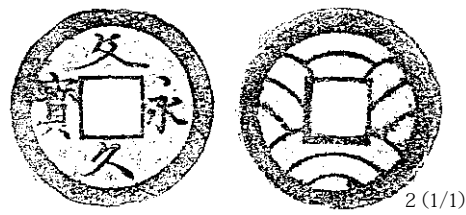
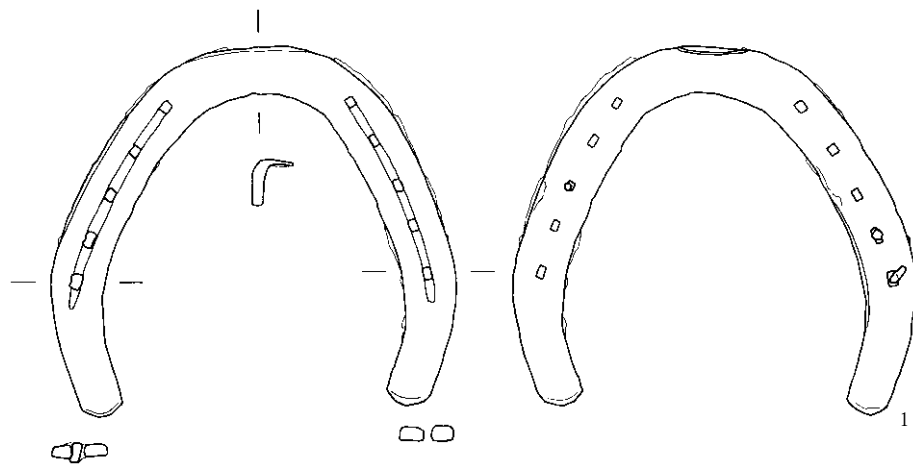
第200図 IV区11・12号溝、石捨て場(ヤックラ)、炭窯出土遺物(1)



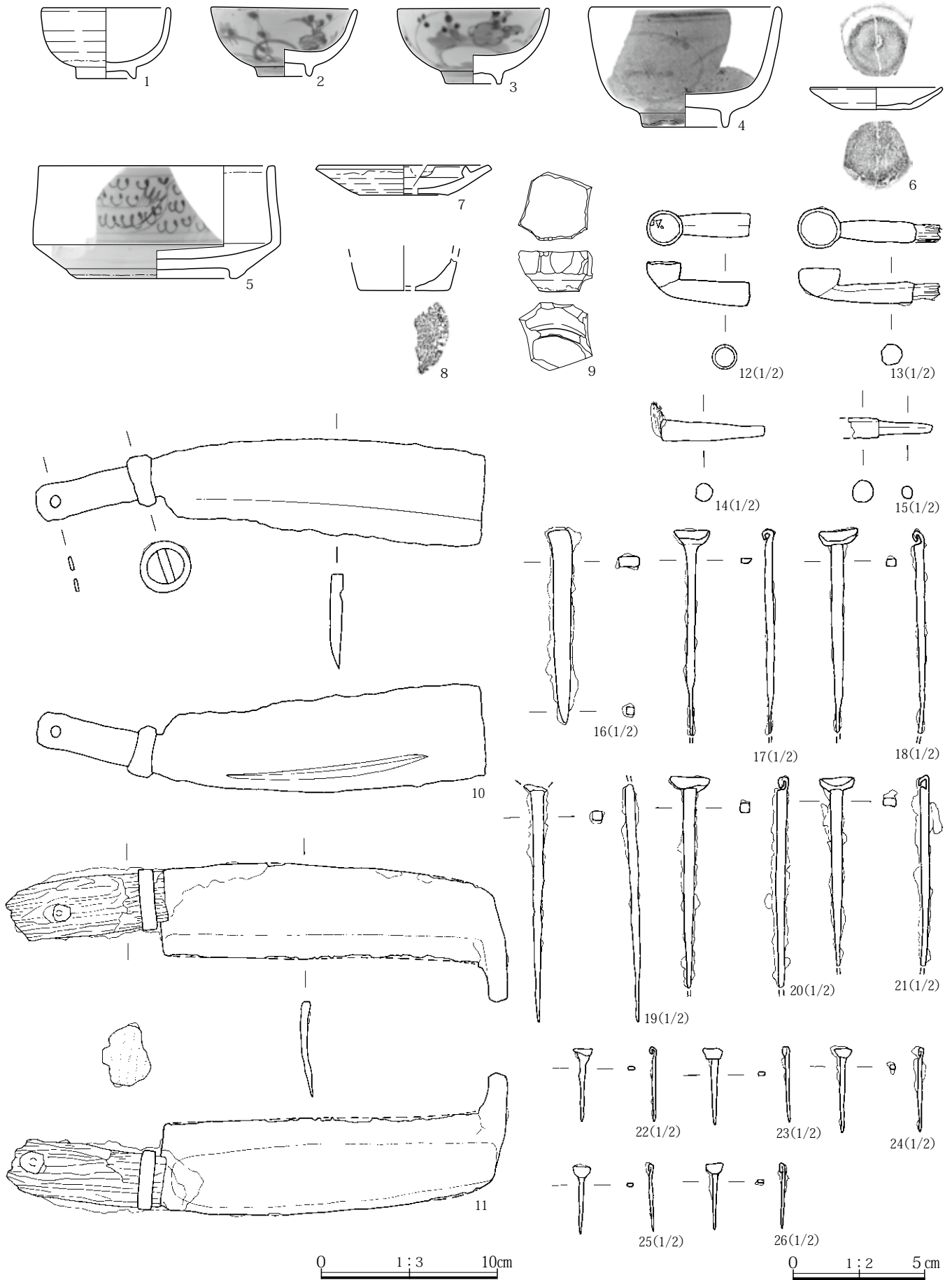
第201図 IV区炭窯出土遺物(2)



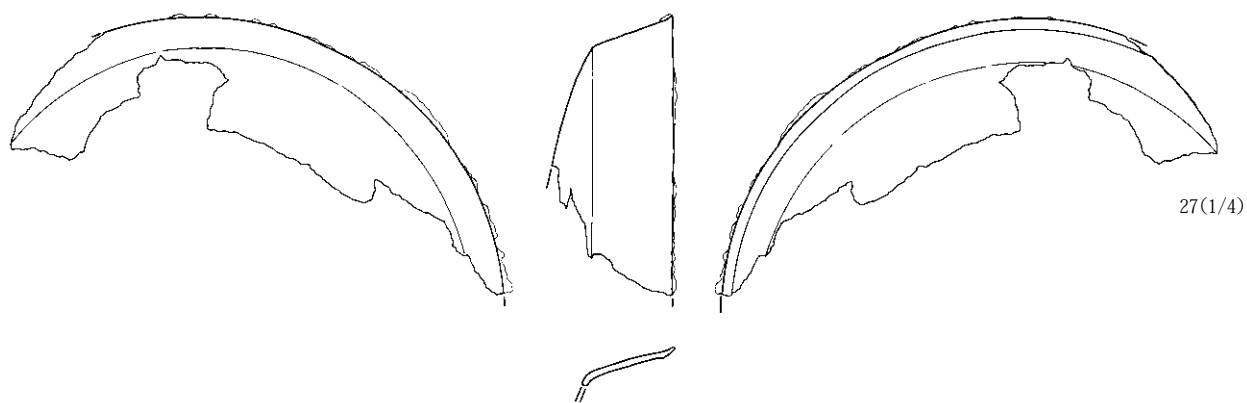
北側石列



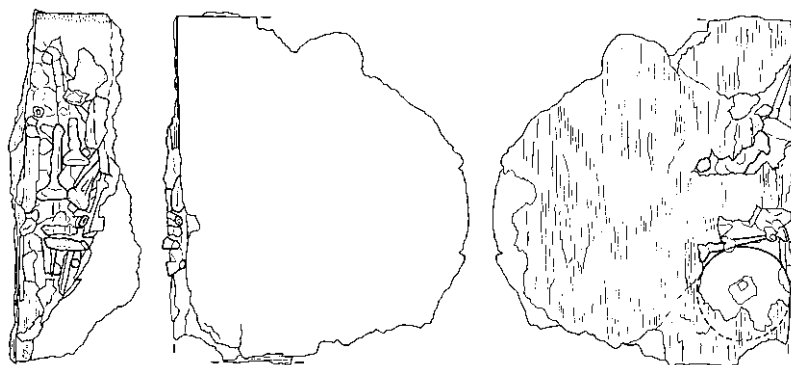
第202図 IV区炭窯出土遺物(3)、北側石列出土遺物



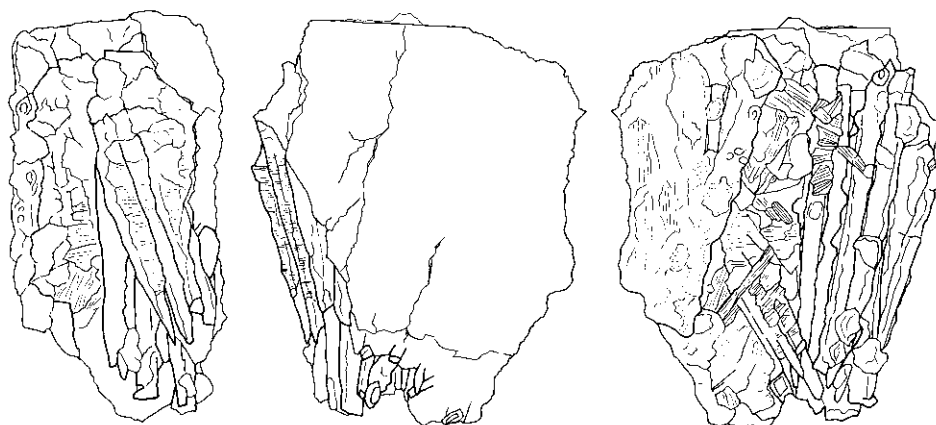
第203図 遺構外出土遺物(1)



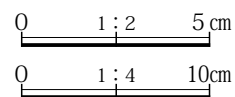
27(1/4)



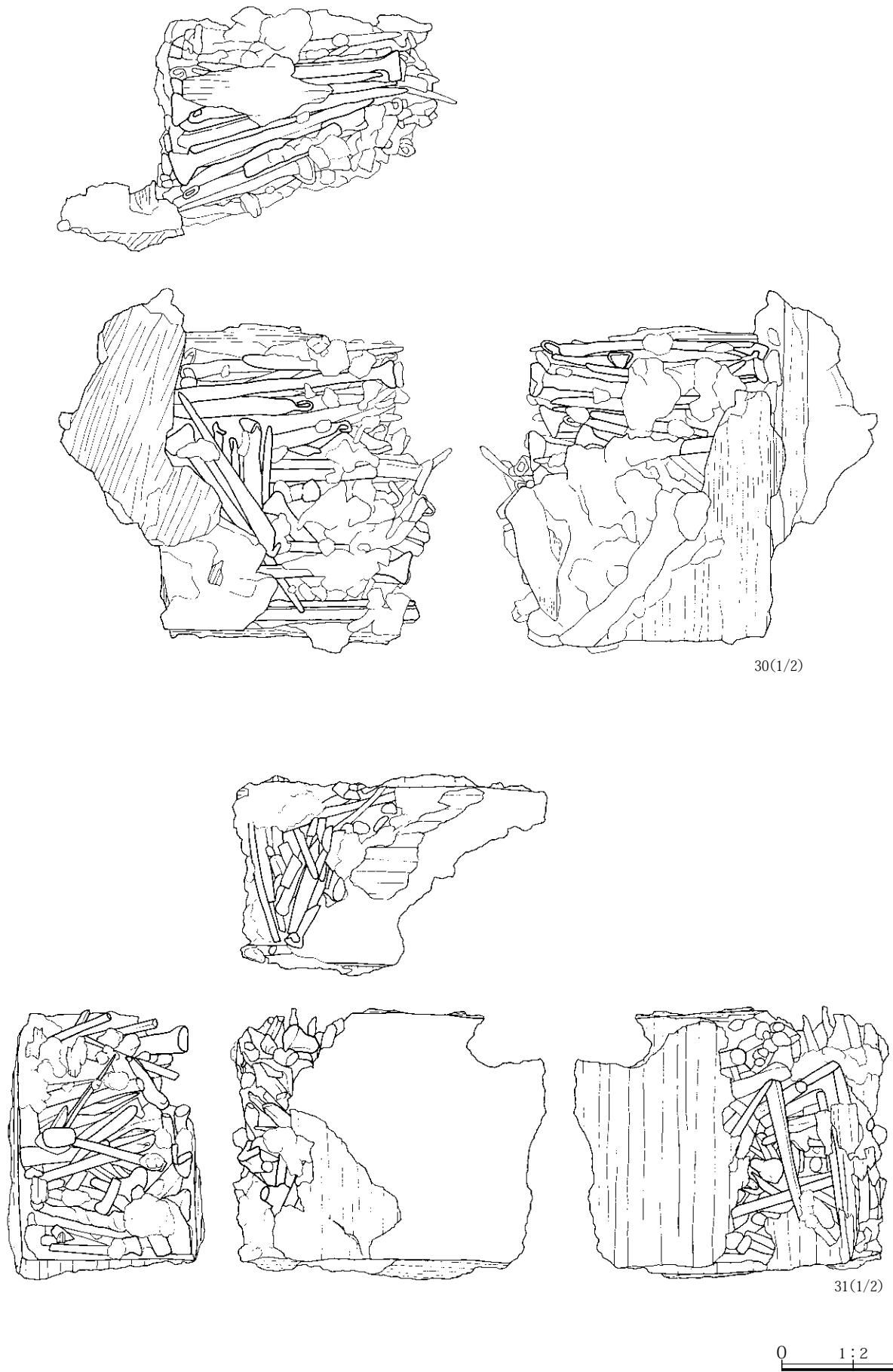
28(1/2)



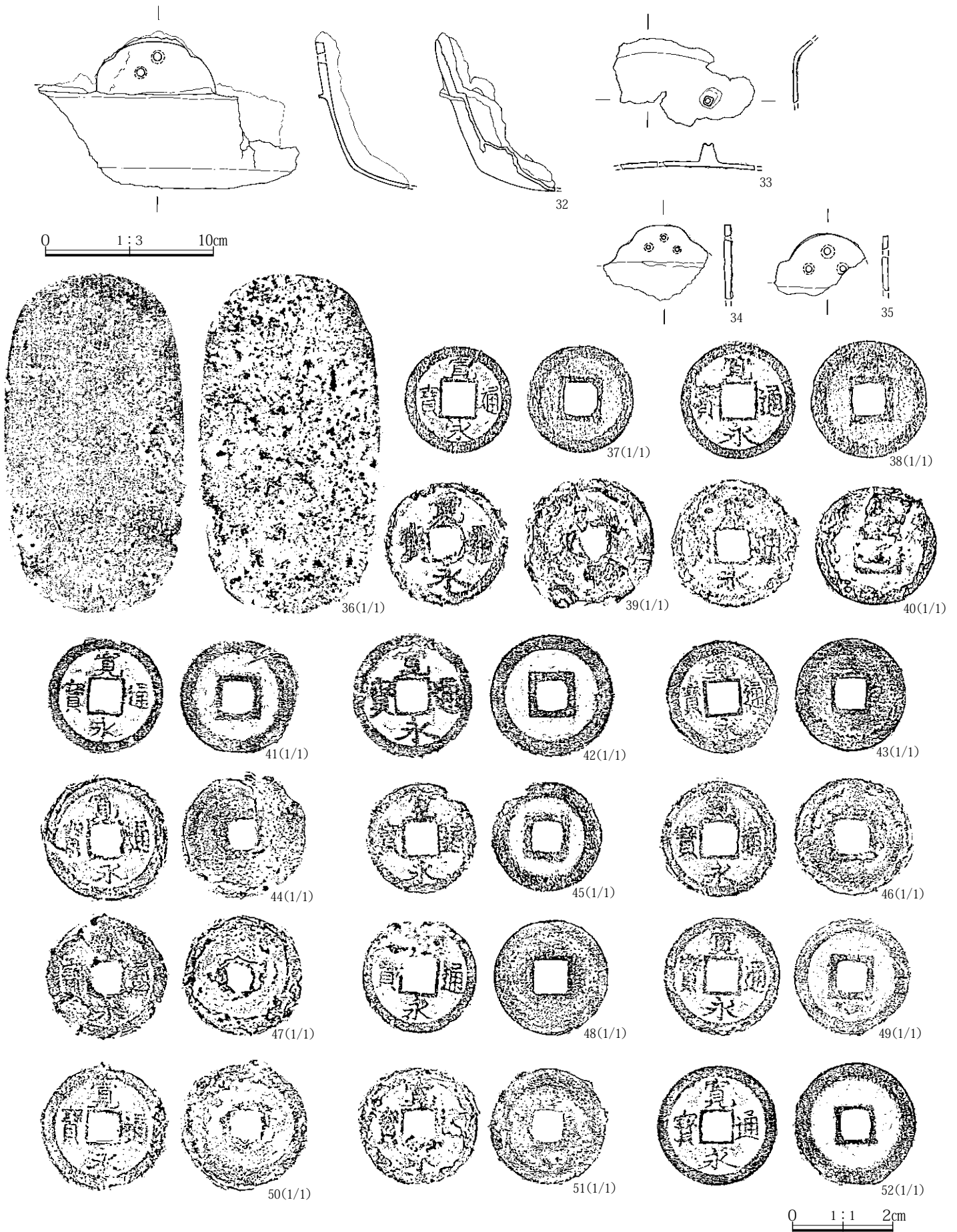
29(1/2)



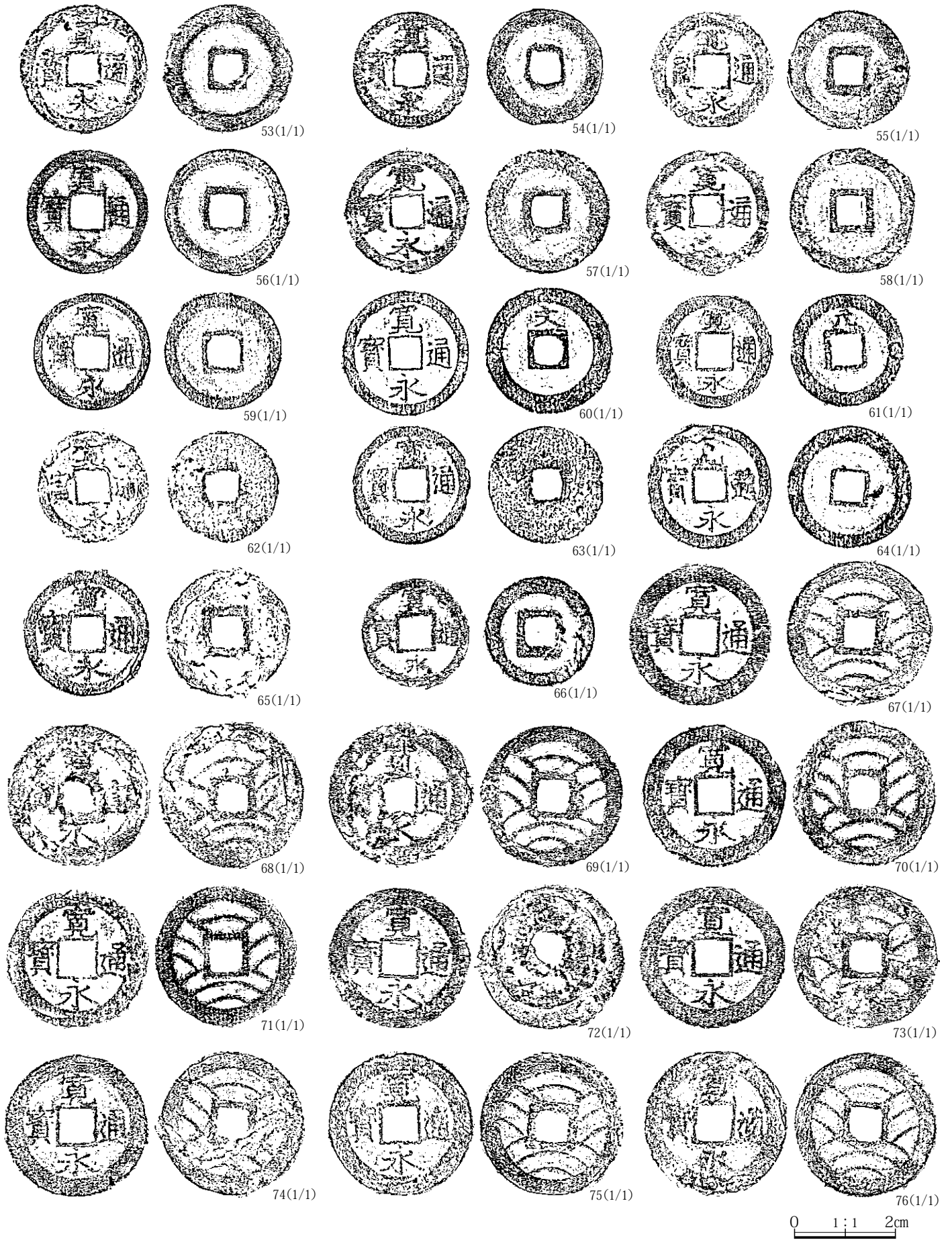
第204図 遺構外出土遺物(2)



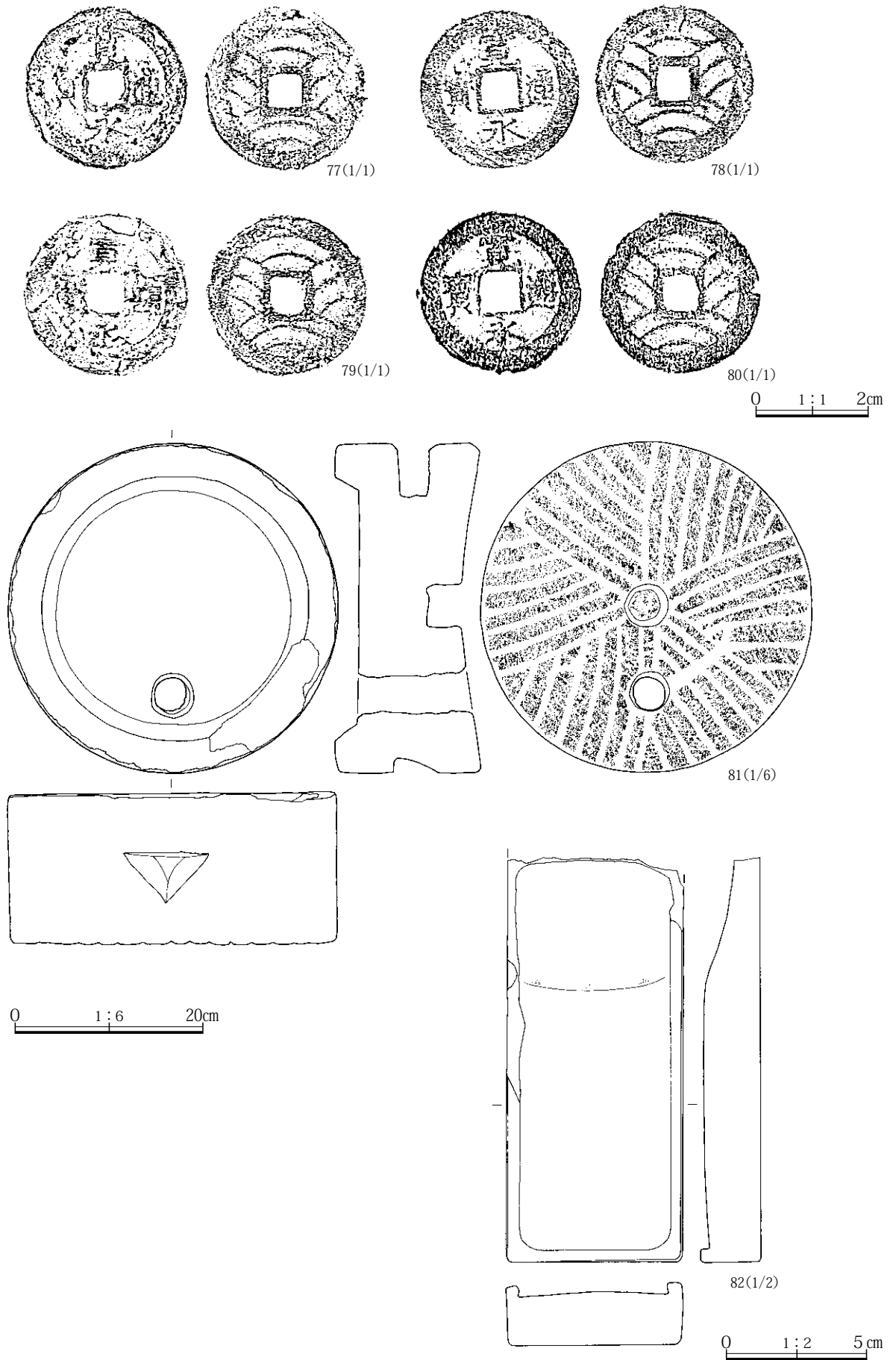
第205図 遺構外出土遺物(3)



第206図 遺構外出土遺物(4)



第207図 遺構外出土遺物(5)



第208図 遺構外出土遺物(6)

第4章 調査の成果とまとめ

第1節 遺構について

1. 囲炉裏について

東宮遺跡で発掘調査した母屋である建物には、竈とともに囲炉裏が存在する。竈は土間の奥に置かれ、囲炉裏は土間の中央部座敷に近いところにある下の座敷や、座敷の中央部付近に設置されることが多い。竈と囲炉裏は煮炊きに欠かすことの出来ない設備であるが、使われる目的や場所が異なっている。竈は主に煮炊きやお湯等を沸かすことや暖房等の目的に使われている。一方、囲炉裏は、①煮炊き、②焼物、③食事場、④家族だんらん、⑤接客、⑥暖房、⑦乾燥、⑧明かりの確保等の役割を持っているものと思われる。ここでは東宮遺跡で発掘調査されていた建物内の囲炉裏について、他の天明三年泥流下から発掘調査された遺跡の囲炉裏と比較検討する。

(1) 囲炉裏の構造的分類

- ・土間とほぼ同じ低い位置に造られる囲炉裏。3面を板間、1面を土間と接する囲炉裏(13号建物下面囲炉裏、31号建物3・5号囲炉裏)
- ・板間の一部に作られる囲炉裏。囲炉裏として使用する面は板間より低い土間面より高くなるために、大きな多くの石を用いて床面で使用できる高さまで方形に組み、中央部に灰を入れて使用する。(上記の囲炉裏以外)

(2) 囲炉裏の規模

規模について検討する。平面形では、最小が1号建物2号囲炉裏で約40×50cm四方、最大が同じ建物である3号囲炉裏で約120×140cmである。最少と最大で約3倍の大きさに違いがある。最も多い規模は80～100cm四方の囲炉裏で全体の半分近くがこの範囲に入る。最も大きい1号建物3号囲炉裏は、土間に張り出して作られた囲炉裏であり、家族や来客者の接待場としても使われていたと思われる。逆に最も小さな1号建物2号囲炉裏は、1号囲炉裏で煮炊きの役割を果たしているため、暖房や最小限の煮炊き等の役割を果たすために小さいものとなっているのではないだろうか。最も多い80～100cm四方の

囲炉裏は、建物内で囲炉裏本来の機能を果たすためのものと思われる。床下から囲炉裏使用面までの高さは、30cm前後が多い。10cm前後の方形の木製枠がその上に置かれている例がある。高さ20cmと低い囲炉裏に、1号建物3号囲炉裏がある。この囲炉裏は土間に造られており、座敷より一段低い位置となっている。

(3) 囲炉裏の築かれる場所と数

場所

- ・下の座敷(土間と一体となっている空間を持つ板間・家族の食事や一般の接客空間。上の座敷がある場合は下の座敷、無い場合は座敷と呼称)1・9号建物
- ・上の座敷(土間と区分された空間を持つ部屋、家族団らんや一般の接客空間・寝室。下の座敷ある場合は上の座敷、無い場合は座敷と呼称)1・7・9・11・13・16・18・31号建物
- ・デェ(冠婚葬祭や特別の客間・寝室)1・9・16・18・31号建物。

数

建物内にある囲炉裏の数 1基 5・11・13号建物(23号建物は不明)、2基 16・18・31号建物、3基 1・9号建物。

(4) 東宮遺跡における囲炉裏の特色

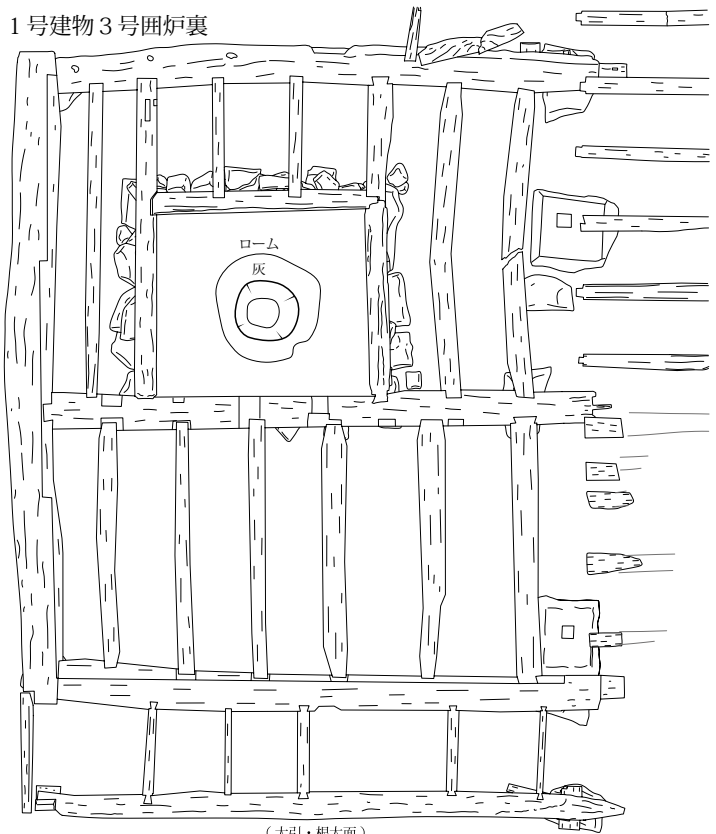
東宮遺跡では、大部分が多くの石を積み上げて床面で使用するように造られている。土間に接し、土間の高さに近い低い位置で使用される囲炉裏はわずかであった。囲炉裏が造られている位置は東宮遺跡では、一軒の建物内に3基確認されている建物が2軒ある。

また、最も建物の奥に位置するデェに囲炉裏と思われる施設を持つ建物が5軒存在する。これまで発掘調査した天明三年泥流下の建物や江戸時代から最近まで存在している大きな農家を調べてみても、囲炉裏が3基以上確認されている建物やデェに囲炉裏を持つ例を確認することはできなかった。東宮遺跡の特色の一つなのであろう。

1号建物2号囲炉裏

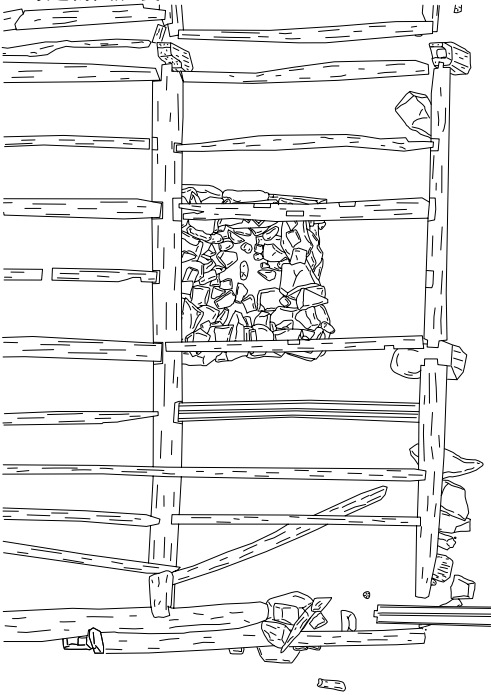


1号建物3号囲炉裏

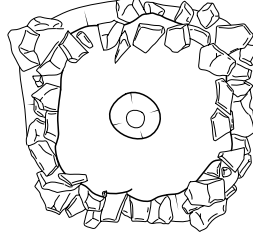


(大引・根太面)

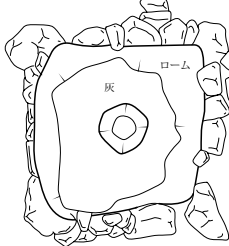
5号建物囲炉裏



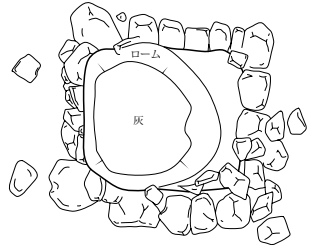
7号建物囲炉裏



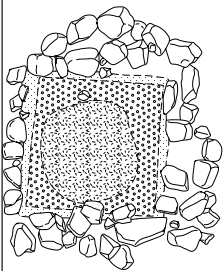
9号建物1号囲炉裏



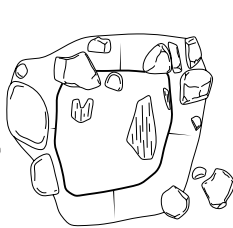
9号建物2号囲炉裏



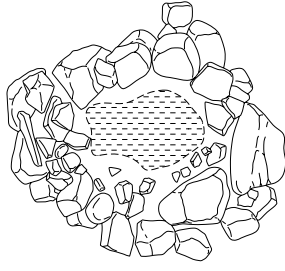
16号建物1号囲炉裏



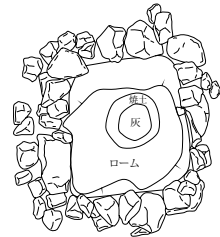
16号建物2号囲炉裏



18号建物1号囲炉裏



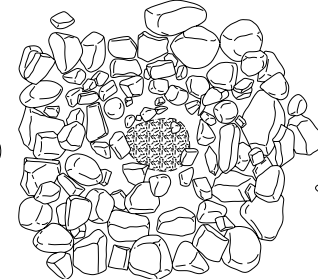
9号建物3号囲炉裏



18号建物2号囲炉裏



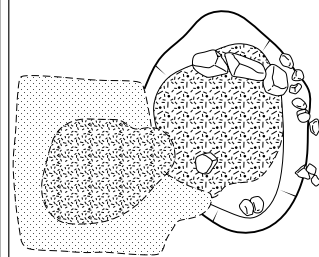
31号建物1号囲炉裏



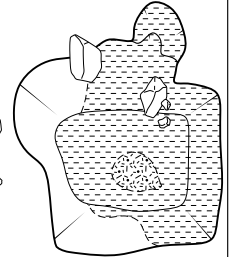
31号建物2号囲炉裏



31号建物3号囲炉裏



31号建物5号囲炉裏



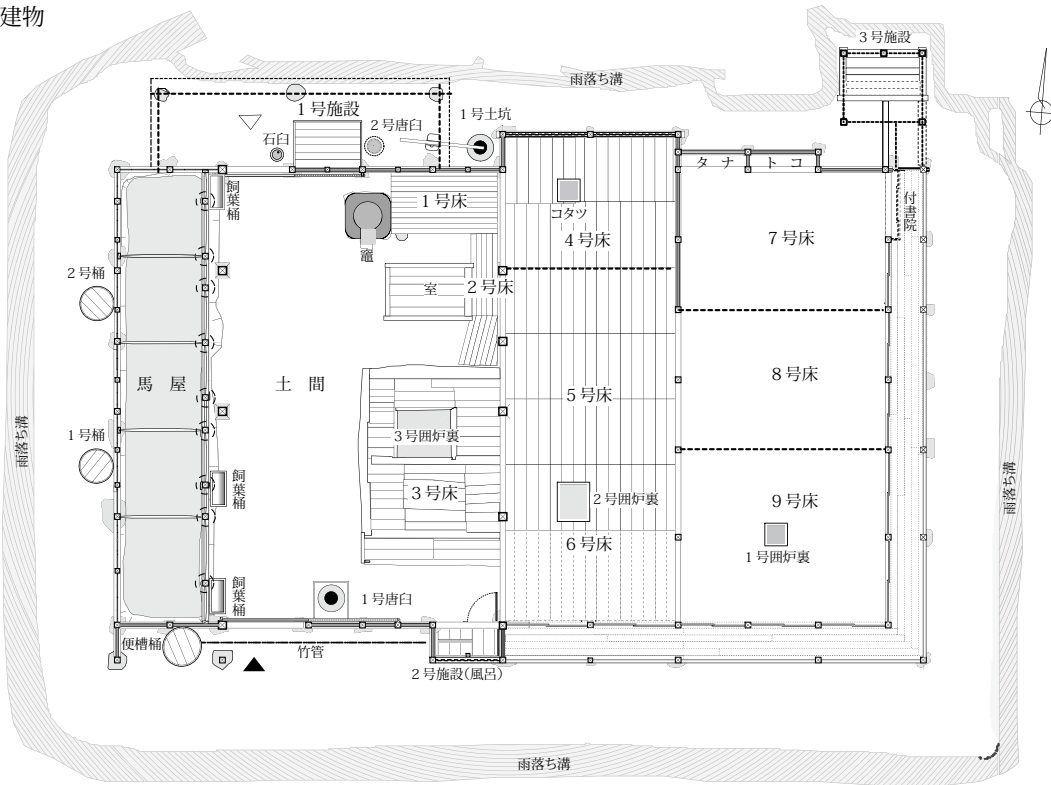
板間の高さに近い高い位置に造られる囲炉裏

土間とほぼ同じ低い位置に造られる囲炉裏

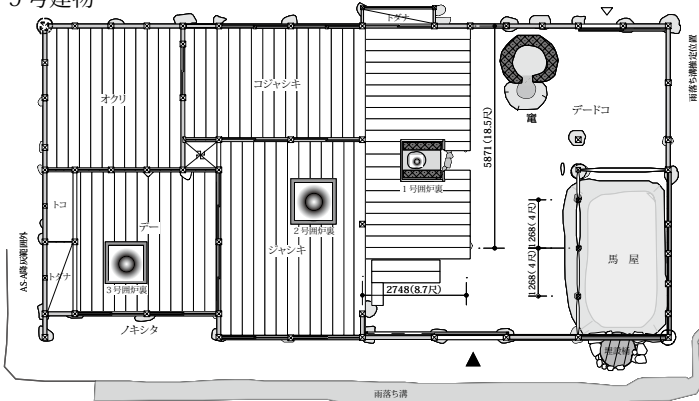
0 1:50 2m

第209図 東宮遺跡で確認された囲炉裏

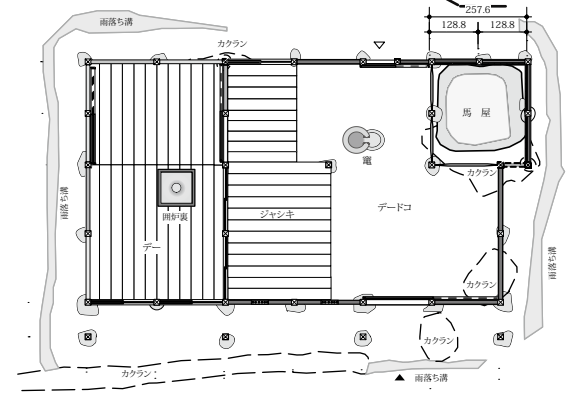
1号建物



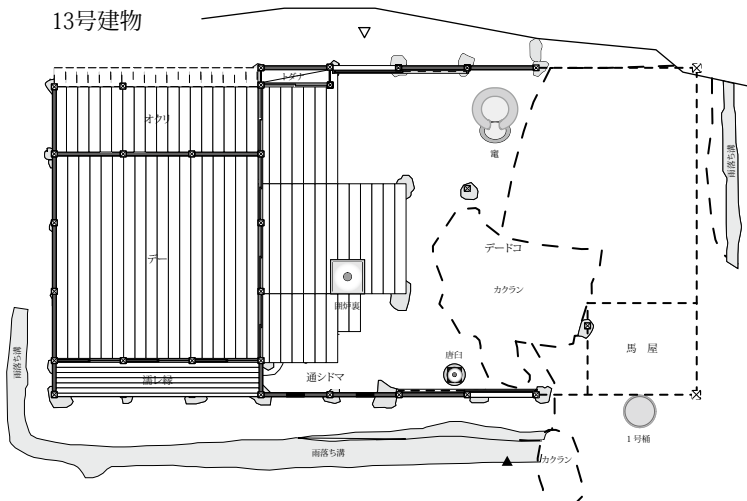
9号建物



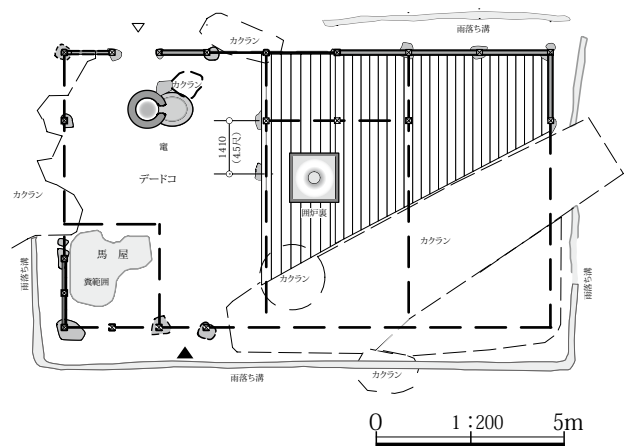
11号建物



13号建物



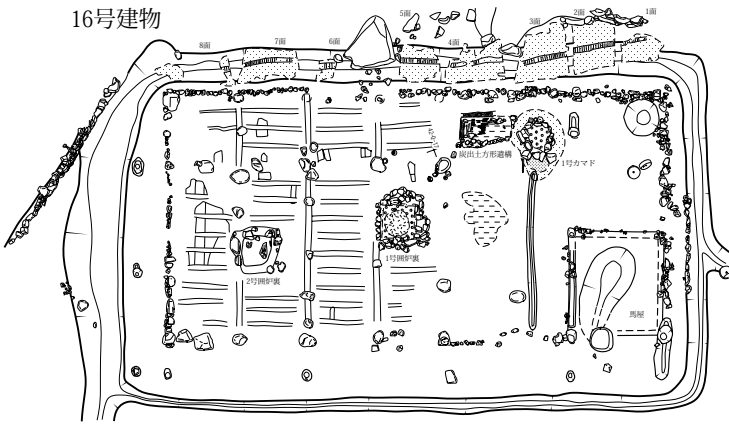
7号建物



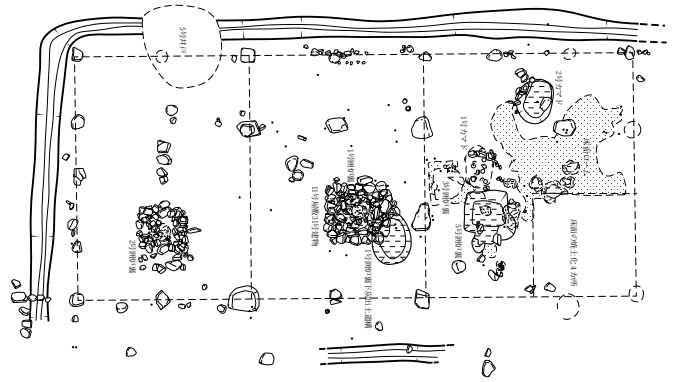
第210図 天明三年泥流下で調査報告された東宮遺跡建物内における囲炉裏(1)

第4章 調査の成果とまとめ

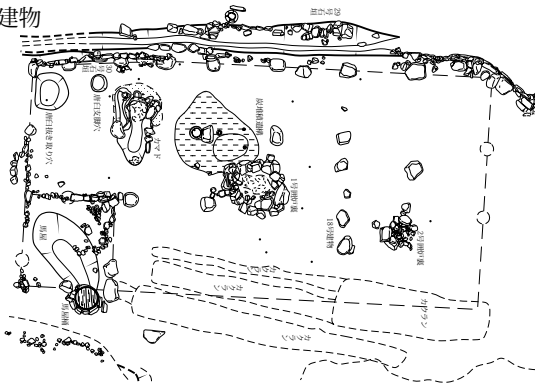
16号建物



31号建物



18号建物



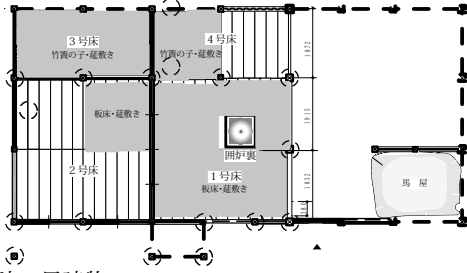
0 1:200 5m

第211図 天明三年泥流下で調査報告された東宮遺跡建物内における囲炉裏(2) (天明三年泥流以前の31号建物含む)

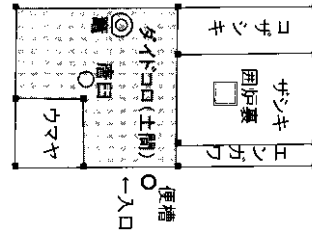


座敷とデェに囲炉裏を持つ東宮遺跡16号建物

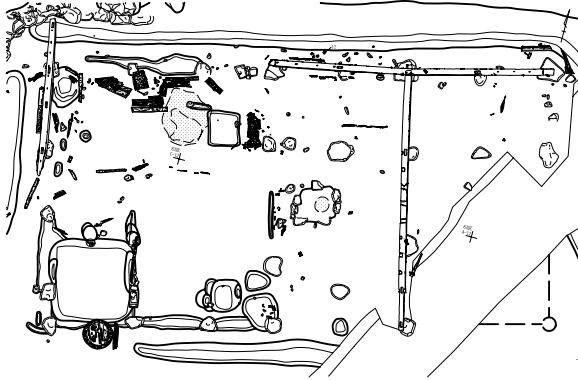
東宮遺跡5号建物



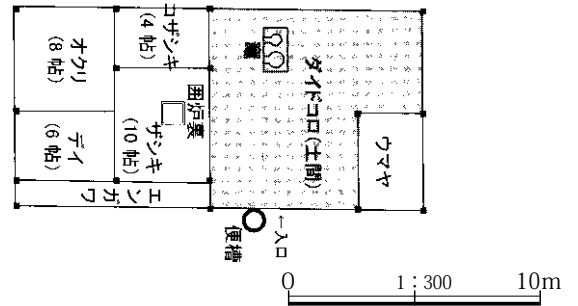
上郷岡原遺跡1号建物



尾坂遺跡1号建物



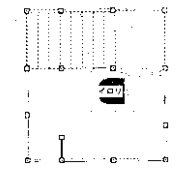
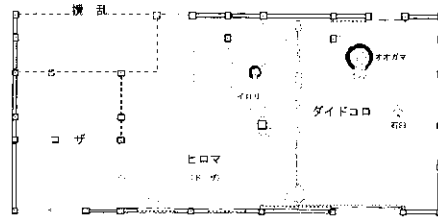
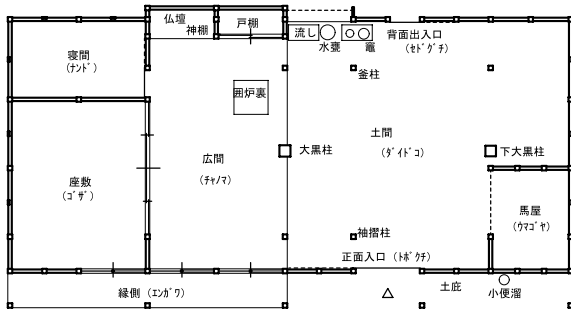
上郷岡原遺跡2号建物



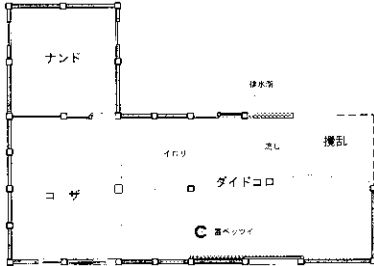
上福島中町遺跡Ⅱ区1号建物

上福島中町遺跡Ⅲ区3号建物

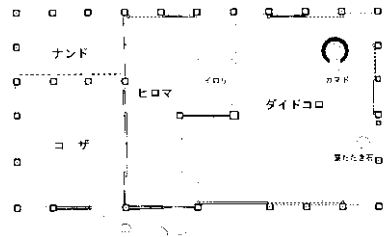
田口下田尻遺跡1号建物



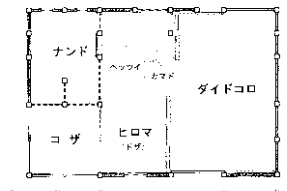
上福島中町遺跡Ⅵ区1号建物



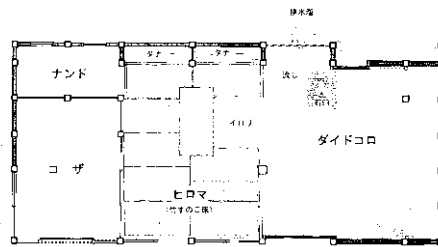
上福島中町遺跡Ⅱ区4号建物



上福島中町遺跡Ⅱ区6号建物

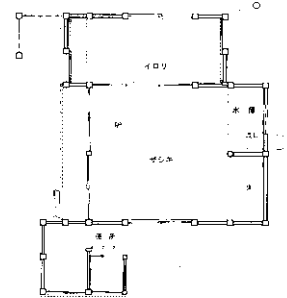
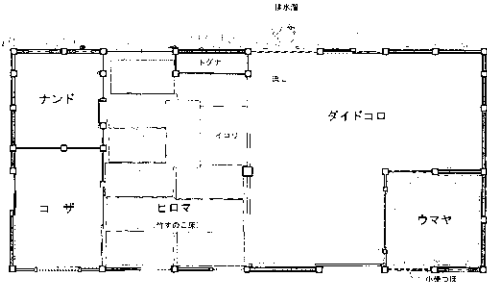


上福島中町遺跡Ⅵ区3号建物

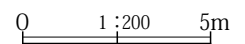


上福島中町遺跡Ⅵ区6号建物

上福島中町遺跡Ⅵ区2号建物



文献
 上郷岡原遺跡(1) (財)群埋文410集 2007
 尾坂遺跡(2) (公)群埋文618集 2016
 田口上田尻・田口下田尻遺跡(財)群埋文527集 2012
 上福島中町遺跡(財)群埋文318集 2003



第212図 天明三年泥流下で調査報告された建物内における囲炉裏

第4章 調査の成果とまとめ



1



2



3



5



4



6

- 1.2 土間に接して作られた囲炉裏『群馬県の民家』群馬県教育委員会 1971年
- 3.4 囲炉裏使用状況(利根郡新治村須川。現水上町)都丸十九『上州の暮らしと祭り』1977年
- 5 囲炉裏使用状況(多野郡中里村・現神流町)『聞き書群馬の食事』社団法人農山漁村文化協会1990年
- 6 2階建て建物における囲炉裏設置例 天井に煙が抜ける構造となっている。中之条町大道「国指定重要文化財富沢家住宅」

2. 馬屋と馬数

(1) 東宮遺跡における馬屋と馬数

東宮遺跡では、現在まで11軒の屋敷が確認されており、酒蔵である10号建物と攪乱により不明の23号建物以外の9軒では馬屋が造られている。しかし馬屋があることと、天明三年泥流段階で馬が飼われていたことは必ずしも一致しないと思われる。馬屋内に糞が残っていれば、馬のいた可能性が高いが、糞の確認された屋敷は、1号建物と7号建物の2棟だけである。飼葉桶が残っていたのは、1号建物だけである。糞尿等を集める馬屋桶が馬屋に伴う例は、6軒(1・9・13・16・18・23号建物)であり5号建物は不明である。馬屋桶の伴わない建物は2軒であった。(7号建物は馬屋内に糞があるが馬屋桶なし、11号建物は掘られていなかった)

発掘結果から、このような状況は観察できるが、天明三年段階で、どの馬小屋に馬が飼われていたについては、馬糞が残っていたことを根拠とする1号建物と7号建物以外ではわからない。馬屋で馬を飼わなくなったとしても、馬屋は壊さずに使われるために、構造物としては残っている。そのために発掘調査により馬屋の存在は確認できるが、天明三年段階で実際に馬が飼われていたかについての判断は難しい。そこで文献に残された資料から、村内における飼われている馬の頭数と使われ方について検討する。

(2) 天保八年における川原畑村の家数と馬数

文献資料として、東宮遺跡の存在する川原畑村の様子を記した絵図と文書がある。(282頁に掲載)以前刊行された『東宮遺跡(2)』の中で釈文とともに紹介されており、文書には「御代官山本大善様当分御預所 上州吾妻郡 川原畑村」と表題に書かれており天保八年に作成されたものである。この中で、「一 当村家数三拾壹軒/一 人数百三拾七人(内男七拾壹人/女六拾六人/馬貳拾疋)(=割注)」と書かれている。31軒ある中で馬は20疋飼われていることが分かる。馬の所有率は20疋/31軒で約65%である。

(3) 天保九年における長野原町の家数と馬数

長野原町の資料として長野原町誌の中で「天保九年宗門人別書上帳の実態(長野原町)」として天保九年の段階での百姓名・所持石高・馬数・労働人口・宗門等を紹介

している。その中に書かれた資料から調べると、天保九年の長野原町では、家数が72軒、その中で所持石高がある百姓は70軒、2軒は土地を所有していない。飼われている馬は72軒中49軒(1軒で2頭飼っている家があるので総数は50頭)馬の所有率は49疋/72軒で約68%である。この中で土地は持っていない2軒で馬が各1疋飼われている。また家族数も4人と5人いるので、この2軒は田畑からの収入でなく、馬を用いた駄賃稼ぎ等の仕事から収入を得ていたことが考えられる。馬が農耕以外に使われていたことについて、少し触れる。元禄二年「吾妻郡長野原町と川原湯村荷物馬継ぎ連判証文」(281頁に掲載)によると、信州から酒荷物は、川原畑でおろし、原町まで搬送することが取り決められている。そのほかの荷物についても馬で荷物を搬送していることがわかる。関連資料として原町を中心とした資料であるが、荷物や人を運んだ場合の駄賃について記された文書があるので、参考までに掲載した。(280頁に掲載)

(4) 東宮遺跡における馬について

東宮遺跡では、発掘結果やこれまで検討してきた資料から各屋敷に馬屋は存在するが、馬屋の存在と馬が実際飼われていたかは一致しない可能性がある。天保八年の川原畑村の資料及び天保九年の長野原町の資料から、当時馬は7割弱の家で飼われており、3割前後の家には飼われていなかったことが分かる。飼われている家と飼われていない家との違いは、長野原町の資料から、馬を持っている家は広い土地を所有している家が多く、狭い土地を持っている家は馬を持たない傾向があるが、所持石高0.4石の家で馬を飼っているが、所持石高2~13石の家で馬を飼っていない家があり、また全く土地を持たないで所持石高無い家でも、馬を飼っている家があるので一様ではないことが分かる。また東宮遺跡1号建物では、3疋の馬の存在が考えられる。「この屋敷では酒造りを行っていた。(天明泥流被災時に)大切な酒は馬五頭につけて逃げた。」(『東宮遺跡(1)』第2章第2節)と伝わっている。酒を馬で運んだことは、大戸村加辺安左衛門第7代目重実の時、馬を使い中山道の宿場の松井田まで往復80km往復したといわれている。(萩原進「富豪加辺安盛衰記」『あがつま史帖』1973年参照)

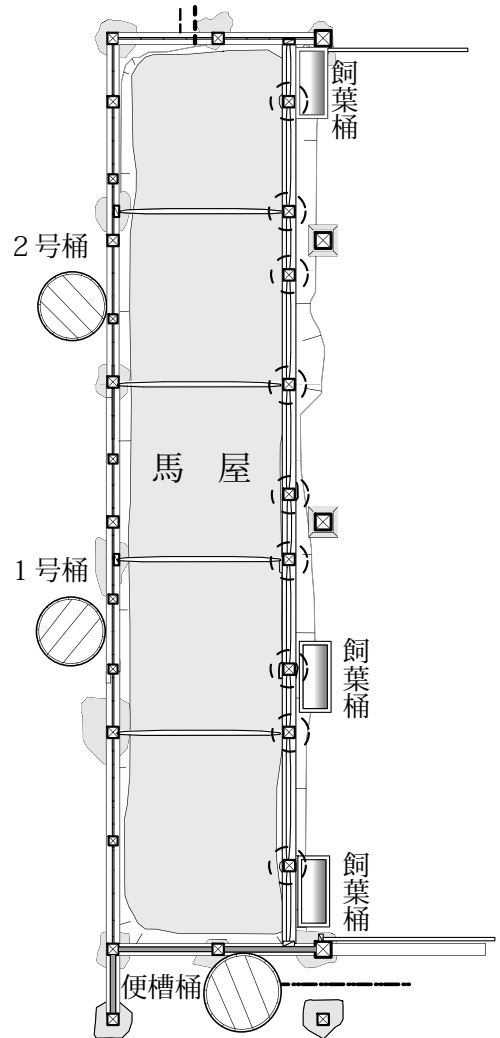
このように、酒も馬で運ばれており、酒蔵のある東宮遺跡では、東宮1号屋敷1号建物に多くの馬がいたの

は、農耕馬や馬継等の運搬の他に酒を運ぶためにも必要であったことが考えられる。

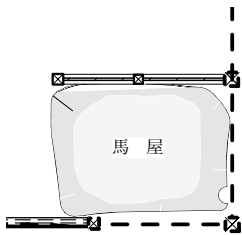
(小林文瑞「継立」『岩島村誌』岩島村誌編纂委員会 1971年)	右之通少茂	享保廿歳卯ノ正月	原町
	相違申間敷候	以上	問屋
	以上		名主
			組頭
	一 本馬 百六拾文	五町田迄	
	一 軽尻 百拾貳文	三町	
	一 本馬 百三拾九文	大戸町迄	
	一 軽尻 九拾文	式り半	
	一 本馬 三拾九文	中之条迄	
	一 軽尻 五拾四文	廿六丁	
一 本馬 三拾六文	郷原村迄		
一 軽尻 貳百廿四文	中山本町迄		
一 本馬 百六拾六文	四町		
一 軽尻 百拾貳文	沢渡湯迄		
一 本馬 貳百廿四文	三町		
一 軽尻 百五拾四文	四万村山口ゆ迄		
一 本馬 百五拾文	四町		
一 本馬 貳百七拾八文	四万村新湯		
	五町		

当町方村々江駄賃並道法

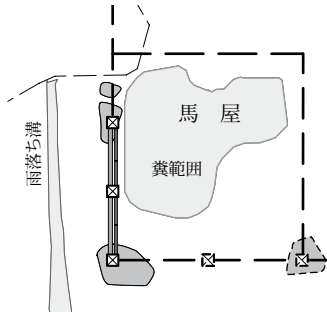
東宮遺跡1号建物



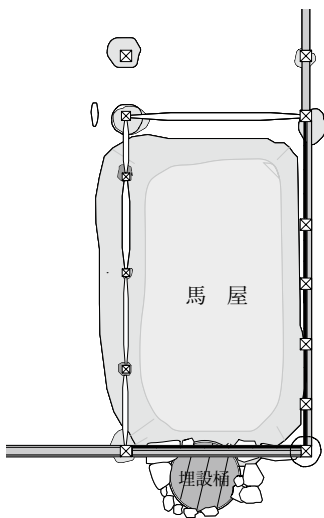
東宮遺跡5号建物



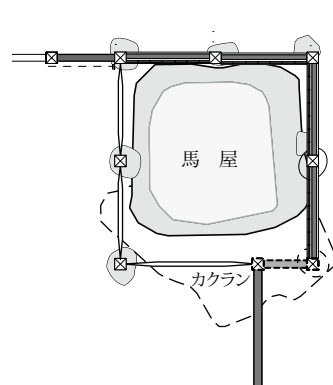
東宮遺跡7号建物



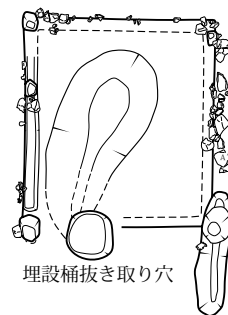
東宮遺跡9号建物



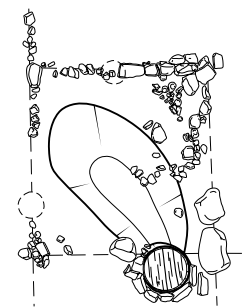
東宮遺跡11号建物



東宮遺跡16号建物

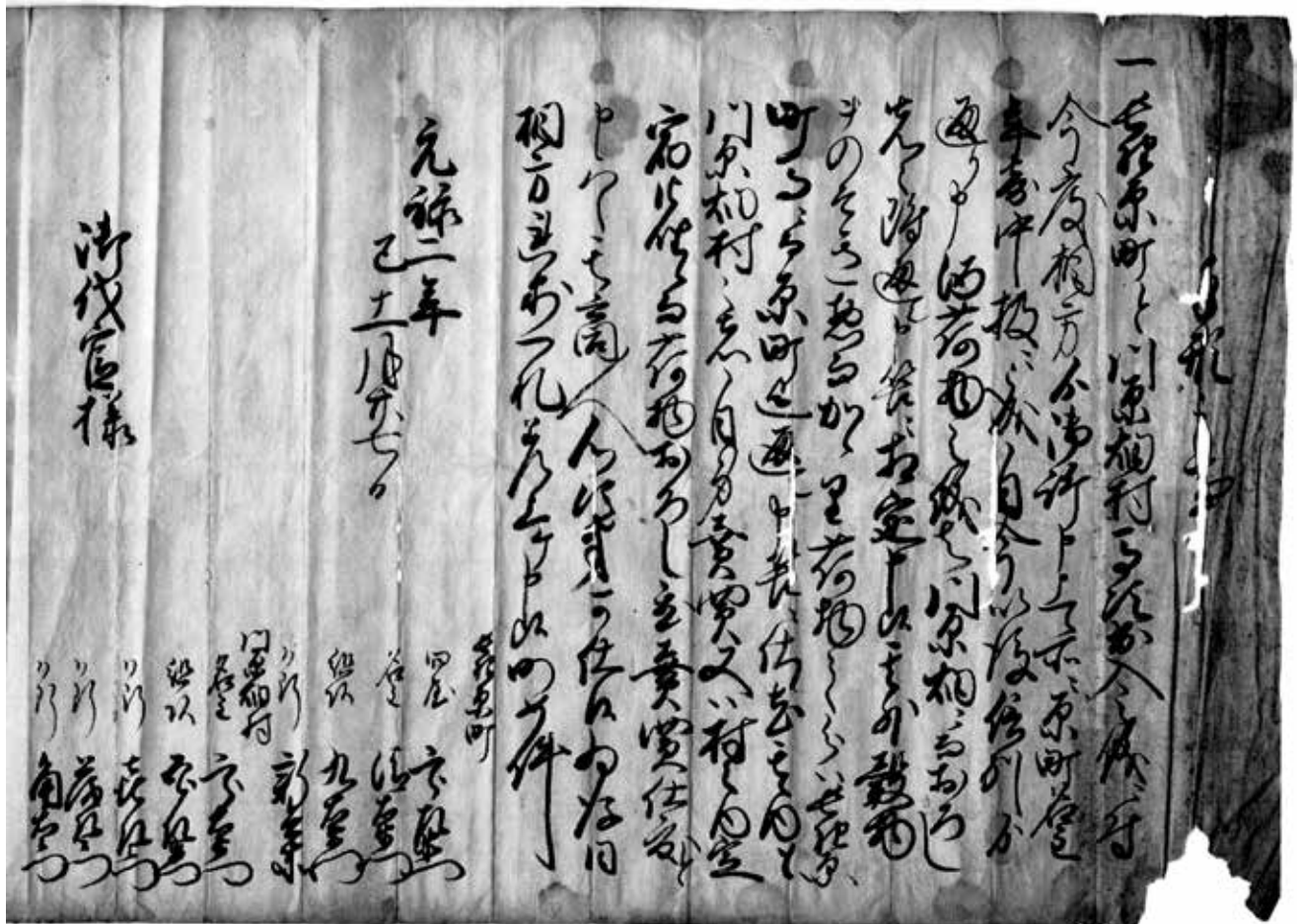


東宮遺跡18号建物



0 1:100 3m

第213図 東宮遺跡で確認された馬屋



吾妻郡長野原町と川原畑村荷物馬継ぎ連判証文
 (元禄二年：一六八九)

手形之事

一 長野原町と川原畑村馬次出入之儀ニ付、
 今度相方より御訴申上候所ニ、原町名主・
 年寄中扱ニ被レ成、自今以後、信州より
 通り申酒荷物之儀者川原畑ニ而おろし、
 先々附通シ申等ニ相定申候、其外穀物
 フのそぎ、惣而かゝり荷物之分ハ、長野原
 町馬ニ而原町迄通シ申等ニ仕候、尤其内も
 川原畑村之者自身売買、又ハ村之内定
 宿御座候而荷物おろし置、売買仕度と
 申候ハ、其商人心次第可レ仕候、為ニ後日
 相方連判一札差上ケ申候、仍如レ件

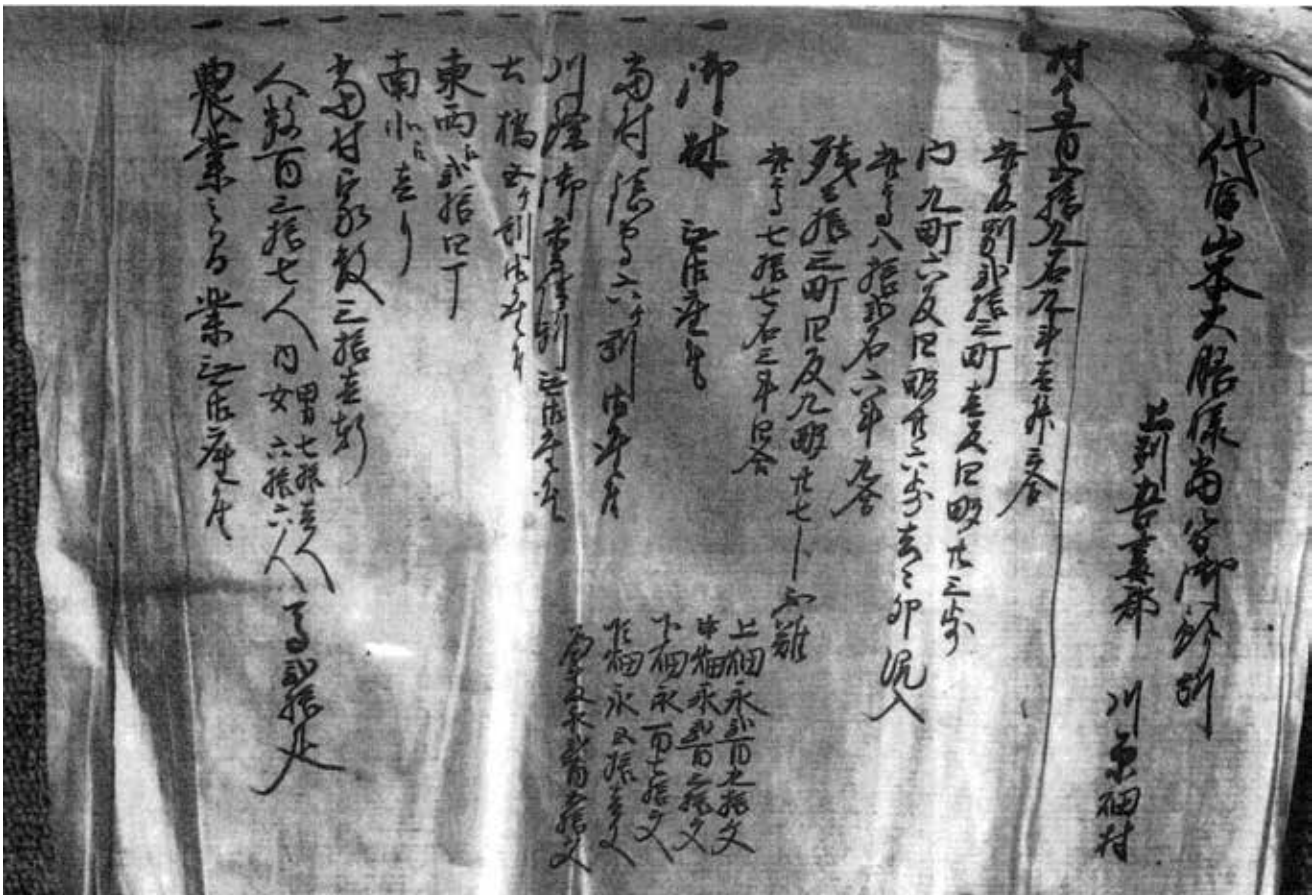
長野原町

元禄二年
 巳十一月廿七日
 問屋 二郎左衛門
 名主 清右衛門
 組頭 九右衛門
 同断 新兵衛
 川原畑村

御代官様

名主 二郎右衛門
 組頭 五郎左衛門
 同断 喜左衛門
 同断 茂左衛門
 同断 角右衛門

〈長野原町・市村家文書 P〇二〇二 No二九七〉



川原畑村の絵図と古文書(所蔵者高山直行氏に許可を頂き掲載)

第8表 長野原町百姓別所持石高概要、家族人数別軒数、馬数と馬所有状況 石高別軒数

天保九年宗門人別書上帳面から

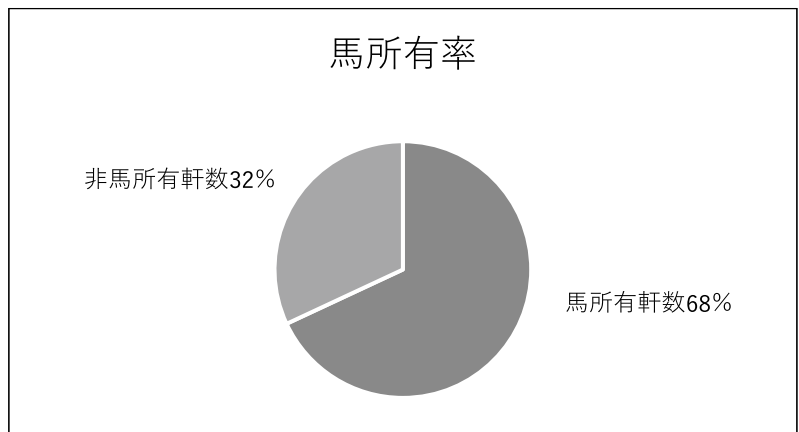
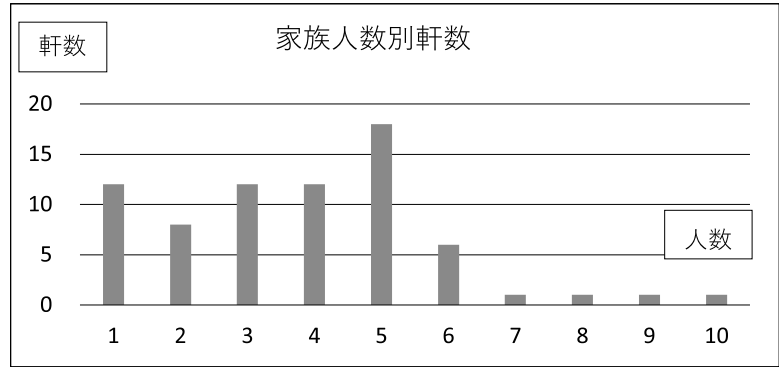
家数	72軒
人口	272人
馬数	50疋
土地所有者	70人
非土地所有者	2人

家族人数別軒数

家族数	軒数	軒
1	12	軒
2	8	軒
3	12	軒
4	12	軒
5	18	軒
6	6	軒
7	1	軒
8	1	軒
9	1	軒
10	1	軒

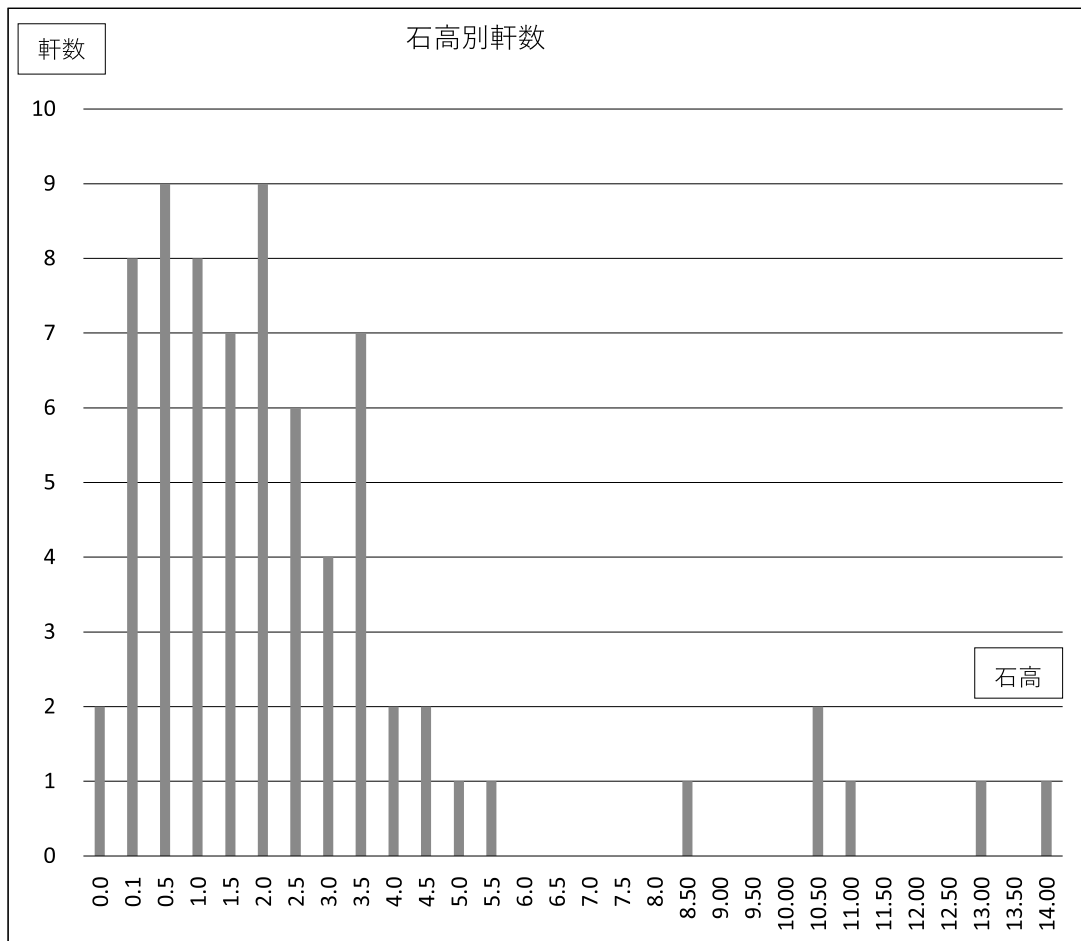
馬数と馬所有状況

馬所有内訳	所有数	軒
家族軒数	72	軒
馬所有軒数	49	軒
非馬所有軒数	23	軒
馬総数	50	頭
	(1軒に2匹)	
馬所有率	68%	



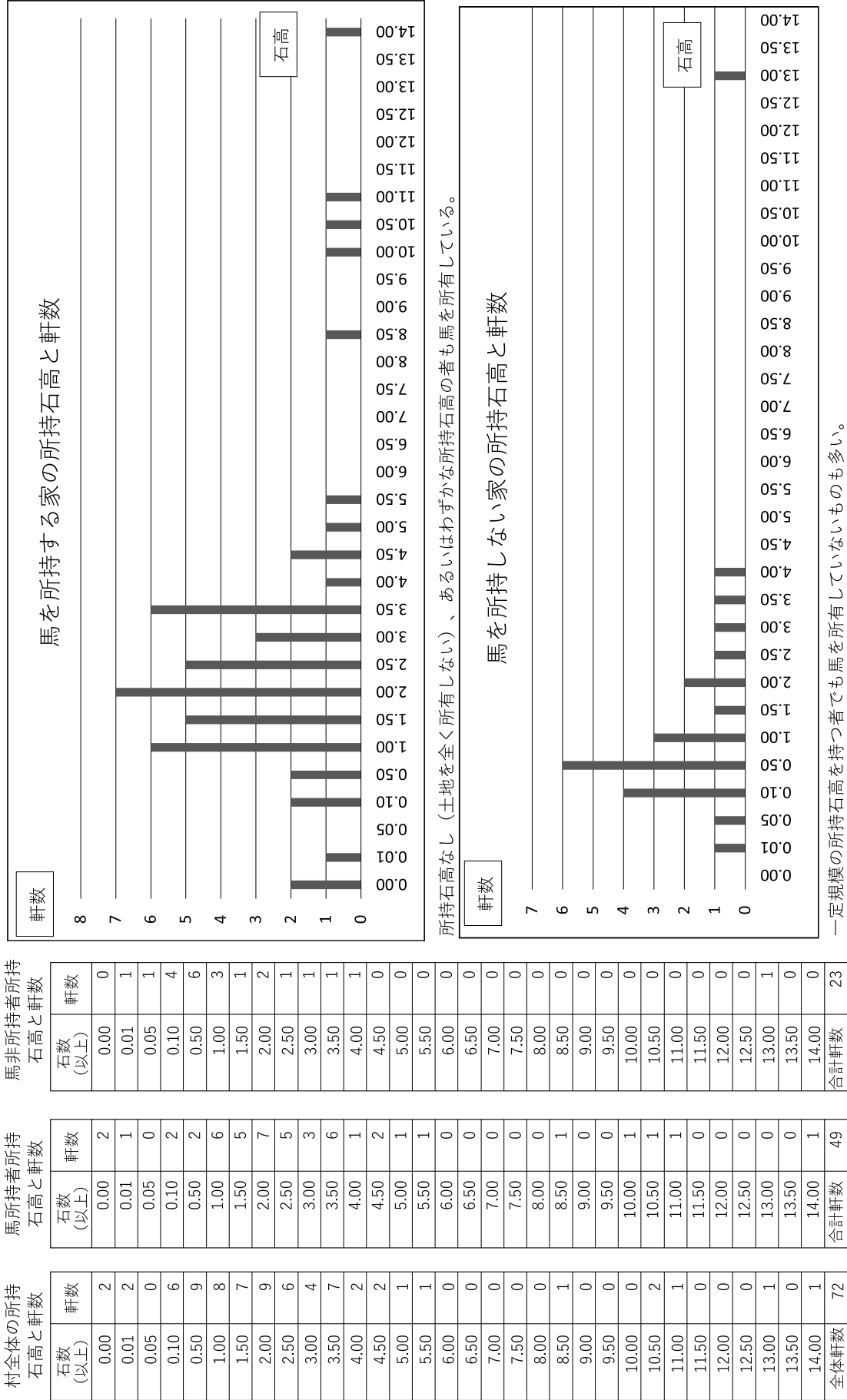
石高別軒数

石数(以上)	軒数
0.0	2
0.1	8
0.5	9
1.0	8
1.5	7
2.0	9
2.5	6
3.0	4
3.5	7
4.0	2
4.5	2
5.0	1
5.5	1
6.0	0
6.5	0
7.0	0
7.5	0
8.0	0
8.50	1
9.00	0
9.50	0
10.00	0
10.50	2
11.00	1
11.50	0
12.00	0
12.50	0
13.00	1
13.50	0
14.00	1



『長野原町誌』上巻「人口の動態」長野原町 1976を参照にして作成

第9表 長野原町における馬を所有する家と所有しない家の所持石高と軒数



一定規模の所持石高を持つ者でも馬を所有していないものも多い。
『長野原町誌』上巻「人口の動態」長野原町1976を参照にして作成

3. 東宮遺跡周辺における貞享三年(天明三年・川原畑村)と明治6年における屋敷坪数の変化

はじめに

東宮遺跡では、屋敷が11軒発掘調査されている。その中で、平成26年度発掘調査した9軒の屋敷について、屋敷坪数を検討する。屋敷坪数は、石垣や道等により区画されている範囲を屋敷の範囲と考えた。しかし発掘の結果屋敷全体が発掘調査されている屋敷は少なく、さらに道路に面して、発掘できなかった範囲もあるが、屋敷範囲を想定して屋敷坪数を算出した。そのために多くの間違いも含んでいると思うが、全体像を知る手掛かりになると思われるので、あえて屋敷坪数を算出した。また発掘調査したほぼ同じ場所が、明治6年の壬申地引絵図に描かれており、屋敷坪数が記されている。これらの資料から、天明三年段階東宮遺跡の所属する吾妻郡川原畑村の屋敷坪数の様子とその後約100年後の屋敷坪数がどのように変化したのかについて検討する。検討の結果、集落の指導的役割を果たしていたであろう300坪以上の屋敷坪数を持つ大規模な屋敷が急激に減少し、200坪前後の屋敷坪数を持つ屋敷が農村の中心になっていく姿が次第に明らかとなってきた。このような現象が川原畑村の西に接する林村、対岸の川原湯村と横壁村においても、指摘できるかについて調べ、江戸時代における農村を取り巻く政治経済の変化について検討し、東宮遺跡の置かれていた天明三年前後の村のあり方について理解するための一資料としたい。検討資料として、東宮遺跡は天明三年の浅間泥流下の集落と明治6年の壬申地引絵図を用いた。他の川原湯村・横壁村・林村は、明治6年の壬申地引絵図と貞享三年の御検地水張に記されている屋敷の坪数を使用した。(貞享三年の川原畑村御検地水張は、残念ながら存在を確認できなかった。)

(1) 東宮遺跡(川原畑村)における屋敷坪数(発掘結果における天明三年段階と壬申地引絵図に描かれた屋敷坪数の比較)(第11表)

発掘調査された江戸時代天明三年段階での東宮遺跡9軒の屋敷坪数は、未発掘場所を含めた推定坪数ではあるが、第11表の通りである。最も大きな屋敷は、1号屋敷の347坪で、次に195坪の7号屋敷があり、他は100坪前

後の屋敷7軒となっている。このように300坪前後・200坪前後・100坪前後の屋敷があり、50坪以下の屋敷はない。最も大きな屋敷と小さな屋敷とでは、5倍以上の大きな差がある。このような屋敷の坪数がその後どのように変化しているかについて、知る資料として約100年後の明治6年に作成された壬申地引絵図がある。この絵図には発掘したほぼ同じ場所に、道路や水路とともに、畑や屋敷の番地・所有者名・畑等の等級・屋敷坪数等が記されている。その中から畑の等級別や坪数および屋敷の位置と坪数を選び出し、発掘成果の図面と重ね合わせ作成したのが第214図であり、屋敷の坪数を示したのが第11表である。図から明らかであるように、天明三年段階の200~300坪の大きな屋敷は、一部が畑となり狭くなりつつある。天明三年段階での4号屋敷は、2軒に分かれて、狭い屋敷となっていることも分かる。

発掘で得た天明三年段階では、300坪前後の屋敷1軒(11%)、200坪前後1軒(11%)、100坪前後7軒(78%)、50坪以下が0軒(0%)となっている。300坪前後の大きな屋敷は1軒であり、大部分は100坪前後である。約100年後の壬申地引絵図に描かれた屋敷坪数では、300坪前後の屋敷は0軒(0%)、200坪前後の屋敷0軒(0%)、100坪前後の屋敷は4軒(44%)、50坪以下の屋敷5軒(56%)となっている。200~300坪以上の屋敷はなくなり、全て100坪以下となり、50坪以下が44%と最も多くなっている。

(2) 川原湯村における屋敷坪数(貞享三年検地帳と壬申地引絵図に描かれた屋敷坪数の比較)(第12表)

東宮遺跡において天明三年段階と明治6年段階での屋敷の変化について、200~300坪以上の屋敷の減少あるいは消滅していることが明らかとなった。対岸の川原湯村での傾向について調べ、東宮遺跡の傾向が一般的なのかについて検討する。川原湯村にあたる石川原遺跡では、現在多くの屋敷が発掘調査されているが、現在発掘中で詳しい屋敷の内容は明らかでない。そこで天明三年より約100年古い吾妻郡川原畑村御検地水張(貞享三年1686)と貞享三年より約200年後の壬申地引絵図(1873)に記されていた屋敷坪数を調べたのが第12表である。東宮遺跡と違い、壬申地引絵図では場所を特定できるが、検地水張では場所を特定できてない。屋敷軒数は貞享三年の検地帳で23軒記されており、壬申地引絵図から11軒探

した。屋敷軒数は異なっているが全体傾向を知ること
は出来るものと考えた。貞享三年の資料では、300坪前
後の屋敷5軒(22%)、200坪前後2軒(9%)、100坪前後
9軒(39%)、50坪以下が7軒(30%)となっている。300
坪前後の大きな屋敷が多くあることが分かる。400坪以
上が3軒あり、中には500坪を超える大きな屋敷があり、
他の3地区の中でも特に広大な屋敷の存在が特色であ
る。約200年後の壬申地引絵図に描かれた屋敷坪数では、
300坪前後の屋敷は1軒(9%)、200坪前後の屋敷2軒
(18%)、100坪前後の屋敷は6軒(55%)、50坪以下の屋
敷2軒(18%)となっている。400坪以上の屋敷は無くな
り、300坪前後の屋敷は5軒から1軒に減少している。

(3)横壁村における屋敷坪数(貞享三年検地帳と壬申地
引絵図に描かれた屋敷坪数の比較)(第13表)

川原湯村と同じように吾妻郡横壁村御検地水張 貞享
三年(1683)と貞享三年より約200年後明治6年(1873)の
壬申地引絵図に記されていた屋敷坪数を比較作成したの
が、第13表である。貞享三年の資料では、300坪前後の
屋敷2軒(15%)、200坪前後の屋敷0軒(0%)、100坪
前後の屋敷が9軒(69%)、50坪以下の屋敷2軒(15%)と
なっている。約200年後の壬申地引絵図に描かれた屋敷
坪数では300坪前後の屋敷は無くなり(0%)、200坪前後
の屋敷が2軒(15%)、100坪前後の屋敷が9軒(69%)、50
坪以下の屋敷が2軒(15%)となっている。300坪前後の
屋敷が2軒消えて、新たに200坪前後の屋敷が2軒あら
われている。

(4)林村における屋敷坪数(貞享三年検地帳と壬申地引
絵図に描かれた屋敷坪数の比較)(第14表)

川原湯村や川原畑村と同じように吾妻郡横壁村御検
地水張 貞享三年(1683)と貞享三年より約200年後明治
6年(1873)の壬申地引絵図に記されていた屋敷坪数を
比較作成したのが、第14表である。貞享三年の資料で
は、300坪前後の屋敷2軒(7%)、200坪前後の屋敷2
軒(7%)、100坪前後の屋敷21軒(70%)、50坪以下の屋
敷が5軒(17%)となっている。約200年後の壬申地引絵
図に描かれた屋敷坪数では300坪前後の屋敷はなくなり
(0%)、200坪前後の屋敷が1軒(8%)、100坪前後の
屋敷が5軒(42%)、50坪以下の屋敷が6軒(50%)となっ
ている。300坪前後の屋敷が2軒消えて、200坪前後の屋
敷が2軒から1軒に減少している。

(5)屋敷坪数の変化

これまでの検討結果から以下のことが明らかとなっ
た。(第10表)

◎貞享三年段階では、300坪前後以上の屋敷を持つ屋敷
が必ず存在し、その比率は13%前後である。また200坪
前後以上の屋敷を持つ屋敷もほぼ存在し、その比率は
7%前後である。200坪前後以上の屋敷を持つ屋敷が全
体の20%前後存在していた。最も多くの比率を占めたの
が100坪前後の屋敷面積を持つ屋敷であり、64%前後存
在していた。50坪以下の屋敷を持つ屋敷は、16%前後で
ある。

◎明治6年段階では、300坪前後以上の坪数を持つ屋敷
は、川原湯村に1軒存在していたが他の村では消えてい
た。200坪前後以上の坪数を持つ屋敷が全体の10%前後
存在していた。最も多くの比率を占めたのが100坪前後
の坪数を持つ屋敷であり、53%前後存在していた。50坪
以下の坪数を持つ屋敷は、35%前後である。

東宮遺跡周辺における貞享三年(天明三年・川原畑村)
と明治6年における屋敷坪数の変化を比較検討した結
果、300坪前後以上の屋敷が4村中3村でなくなり、わ
ずかに残った川原湯村でも1軒残っただけとなっている。
200坪前後の屋敷は、10%前後とほぼ変化なく存在
している。集落の中心をなすのは100坪前後の屋敷であ
る。いずれの時期とも50%を超えている。これらの結果
から、江戸時代の貞享三年段階から明治6年に至る約
200年の間で、300坪前後以上の屋敷は、ほぼ消えて一回
り小さな200坪前後の屋敷が、最も広い屋敷へと変化し
ている。集落で最も多い屋敷坪数は、100坪前後であり、
貞享三年と明治6年段階で変化は少ない。50坪以下のご
く狭い屋敷は、16%から36%に増加している。これらの
数字は何を意味しているのだろうか。

おわりに

大規模屋敷農家の解体と中小規模屋敷農家の増加

「農民の存在形態」群馬県史通史編4 第三章第二節の中
で、「天和四年二月 群馬郡渋川村人別改張」について解
説している。その中で三つの典型的な家族を紹介してい
る。Ⅰ型は譜代下人と抱え百姓を持つ家の類型であり、
抽出した1軒の屋敷の広さは2反6畝14歩(794坪)であ
る。Ⅱ型は、自家労働力と譜代下人を有する家の類型で
ある。抽出した1軒の屋敷の広さは1反3畝1歩(391坪)

である。Ⅲ型は、譜代下人も抱え百姓も持たず、ただ自己の家族労働だけで農業経営をしている小農経営者の家である。抽出した1軒の屋敷の広さは2畝27歩(87坪)である。Ⅰ型からⅡ型を経過してやがてⅢ型に移行していくことについて説明している。このように大規模農家の解体によって、次第に小規模農家が増加していくことに

ついて説明している。筆者は全くの専門外であるが、このような事柄が吾妻郡川原畑村周辺でも起きており、その結果が屋敷面積の変化をもたらしているのではないだろうか。また4つの村の様子を調べてきたが、隣接する集落であっても各村により、変化はさまざまである。

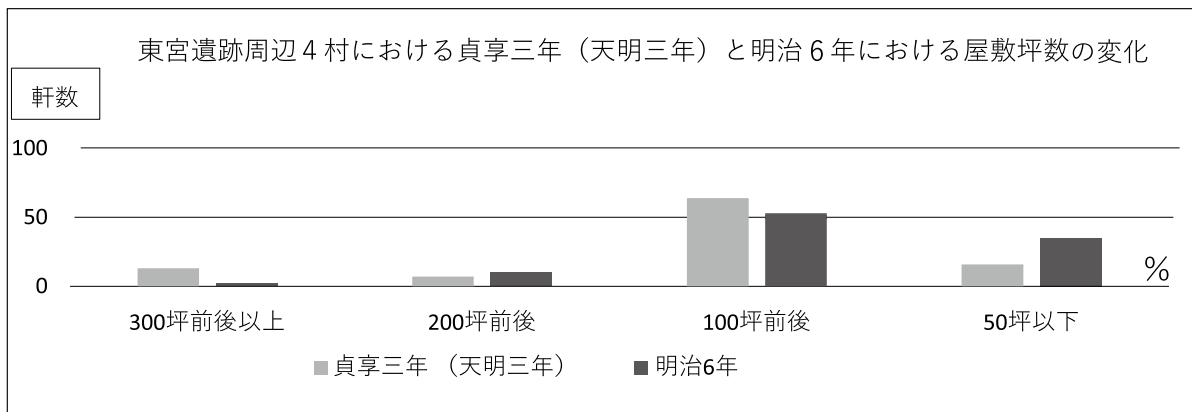


長野原町教育委員会蔵

第10表 東宮遺跡周辺4村における貞享三年(天明三年・川原畑村)と明治6年における屋敷坪数の変化

	貞享三年 (天明三年) %	明治6年 %
300坪前後以上	13	2
200坪前後	7	10
100坪前後	64	53
50坪以下	16	35

東宮遺跡周辺4村における貞享三年(天明三年・川原畑村)と明治6年における屋敷坪数の変化



発掘資料と御検地水帳及び明治6年壬申地引絵図の資料より作成

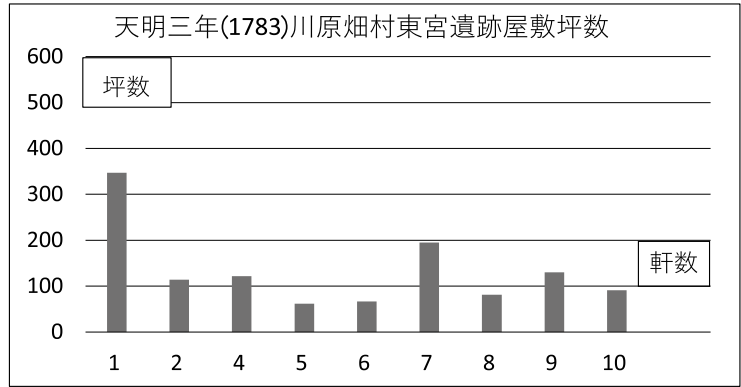
第4章 調査の成果とまとめ

第11表 川原畑村における天明三年と明治6年における屋敷坪数

川原畑村屋敷坪数比較

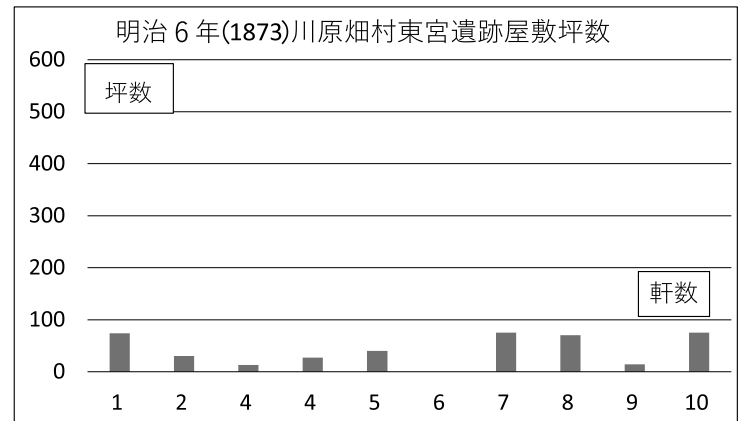
天明三年発掘屋敷番号	天明三年屋敷坪数	m ²	備考
1	347	1145.1	
2	114	376.2	
4	122	402.6	
5	62	204.6	酒蔵
6	67	221.1	
7	195	643.5	
8	81	267.3	
9	130	429	
10	91	300.3	
合計	1,209		
平均	121		

- ・屋敷内全域発掘していないので推定坪数。
- ・屋敷内畑の坪数含む。



(発掘調査された屋敷番号と屋敷坪数を使用)

明治6年発掘屋敷番号	明治6年屋敷坪数	m ²	備考
1	74	244.2	
2	30	99	
4	13	42.9	4号屋敷に2軒建っている
4	27	89.1	
5	40	132	5・6号屋敷に1軒建っている
6	0	0	
7	75	247.5	
8	70	231	
9	14	46.2	
10	75	247.5	
合計	418		
平均	46		

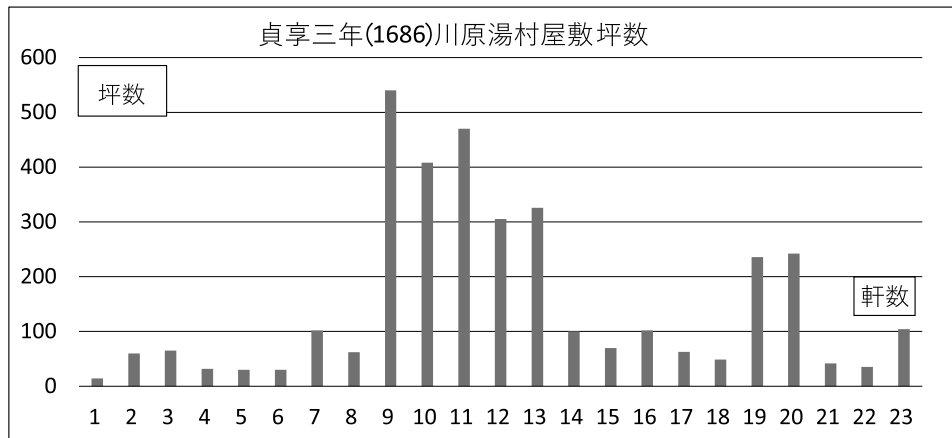


(明治6年壬申地引絵図川原畑村の屋敷坪数から作成)

第12表 川原湯村における天明三年と明治6年における屋敷坪数

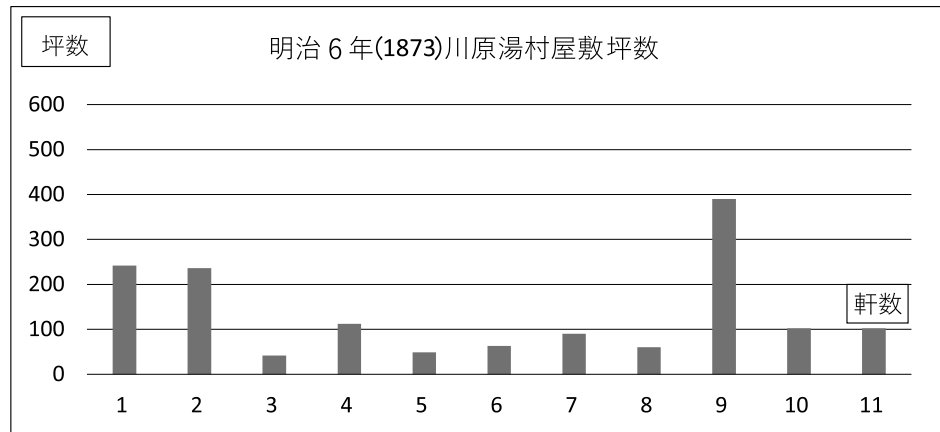
川原湯村屋敷坪数

貞享三年屋敷仮番号	貞享三年屋敷坪数	m ²
1	14	46
2	60	198
3	65	215
4	32	106
5	30	99
6	30	99
7	102	337
8	62	205
9	540	1,782
10	408	1,346
11	470	1,551
12	305	1,007
13	326	1,076
14	100	330
15	70	231
16	102	337
17	63	208
18	49	162
19	236	779
20	242	799
21	42	139
22	35	116
23	104	343
合計	3487	
平均	152	



(貞享三年上野国吾妻郡川原湯村御検地水張から作成)

明治6年屋敷仮番号	明治6年屋敷坪数	m ²
1	242	799
2	236	779
3	42	139
4	112	370
5	49	162
6	63	208
7	90	297
8	60	198
9	390	1,287
10	102	337
11	102	337
合計	1488	
平均	135	

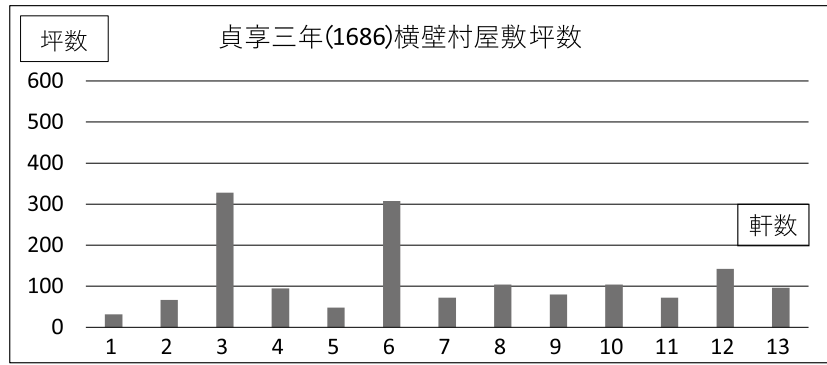


(明治6年壬申地引絵図川原湯村の屋敷坪数から作成)

第13表 横壁村における貞享三年と明治6年における屋敷坪数

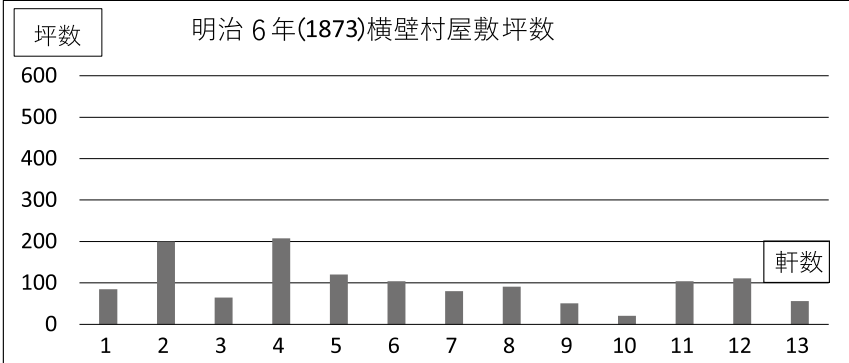
横壁村屋敷坪数比較

貞享三年屋敷番号	貞享三年屋敷坪数	㎡
1	32	106
2	67	221
3	328	1,082
4	95	314
5	48	158
6	308	1,016
7	72	238
8	104	343
9	80	264
10	104	343
11	72	238
12	142	469
13	96	317
合計	1,548	
平均	119	



(貞享三年上野国吾妻郡横壁村御検地水張から作成)

明治6年屋敷番号	明治6年屋敷坪数	㎡
1	85	281
2	200	660
3	65	215
4	208	686
5	120	396
6	104	343
7	80	264
8	91	300
9	51	168
10	21	69
11	104	343
12	111	366
13	56	185
合計	1296	
平均	100	

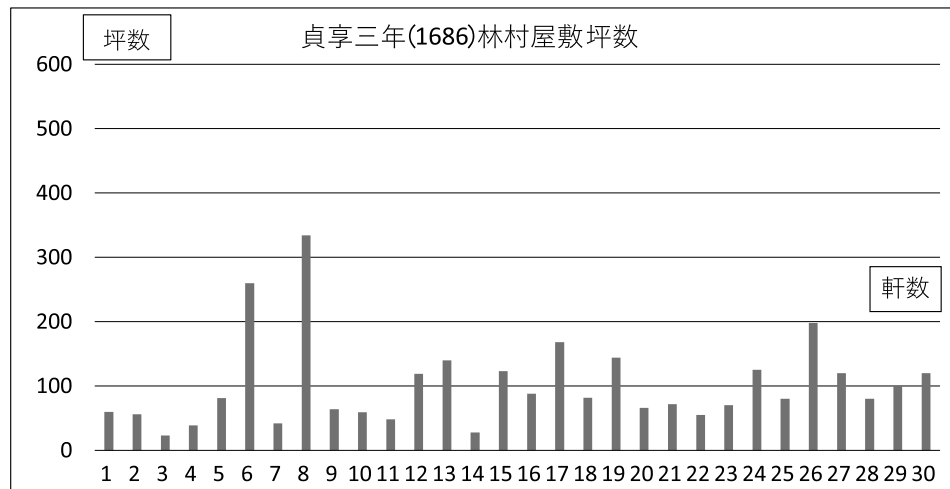


(明治6年壬申地引絵図林村の屋敷坪数から作成)

第13表 林村における貞享三年と明治6年における屋敷坪数

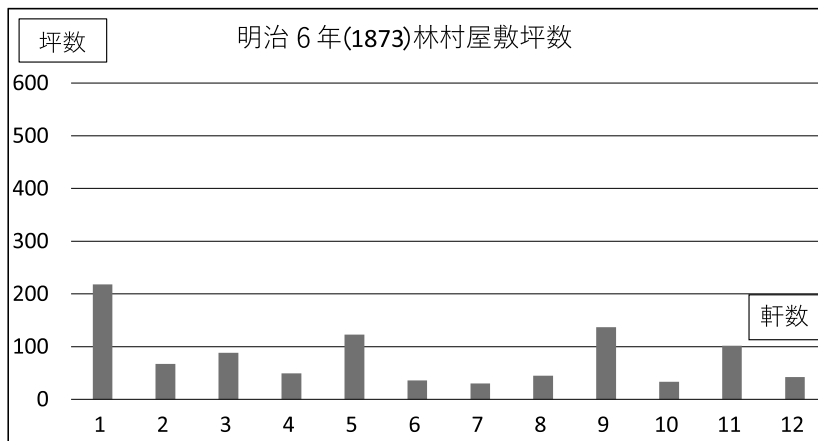
林村屋敷坪数比較

貞享三年屋敷番号	貞享三年屋敷坪数	㎡
1	60	198
2	56	185
3	23	76
4	39	129
5	81	267
6	260	858
7	42	139
8	334	1,102
9	64	211
10	59	195
11	48	158
12	119	393
13	140	462
14	28	92
15	123	406
16	88	290
17	168	554
18	82	271
19	144	475
20	66	218
21	72	238
22	55	182
23	70	231
24	125	413
25	80	264
26	198	653
27	120	396
28	80	264
29	100	330
30	120	396
合計		3,044
平均		87



(貞享三年上野国吾妻郡林村御検地水張から作成) ・紙面の都合上水張から屋敷5軒省略した

明治6年屋敷番号	明治6年屋敷坪数	㎡
1	218	719
2	67	221
3	88	290
4	49	162
5	123	406
6	36	119
7	30	99
8	45	149
9	137	452
10	33	109
11	102	337
12	42	139
合計		970
平均		81

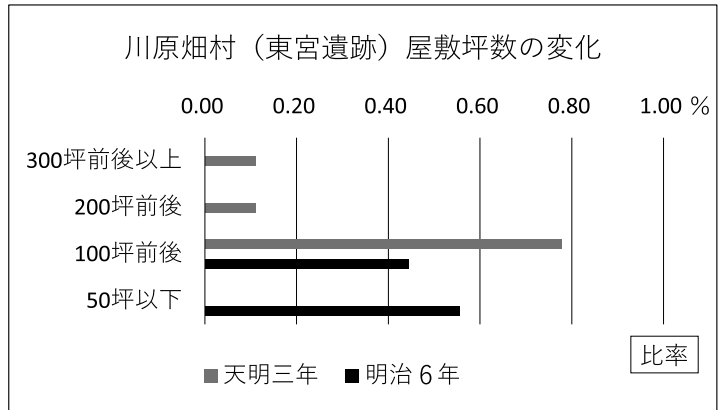


(明治6年壬申地引絵図林村の屋敷坪数から作成)

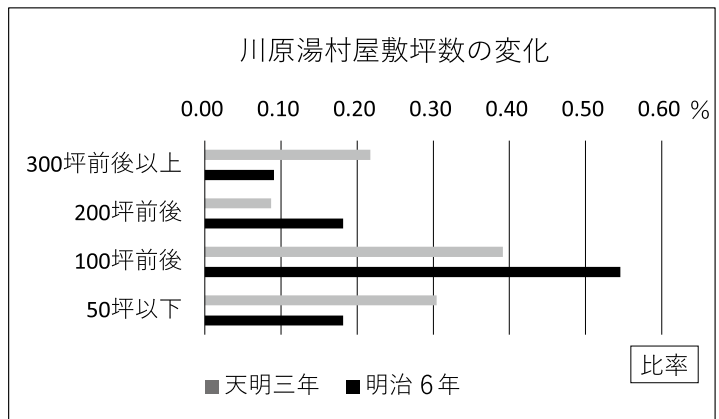
第4章 調査の成果とまとめ

第15表 東宮遺跡周辺4村貞享三年(1686)天明三年・川原畑村(1783)明治6年(1873)屋敷坪数の変化

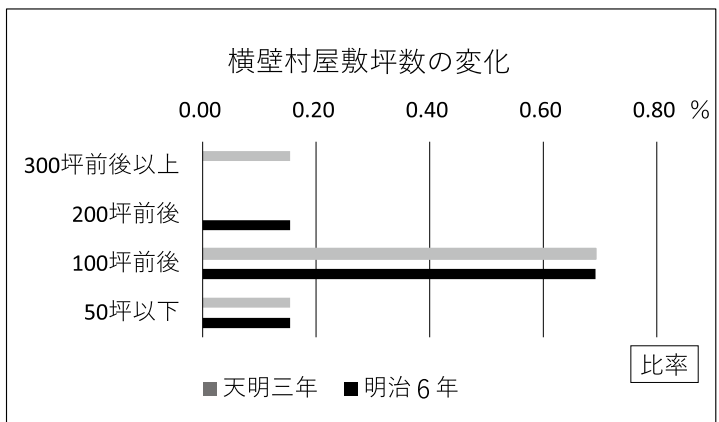
川原畑村	坪数	貞享三年	天明三年	明治6年
		軒数	軒数	軒数
	300坪前後以上		1	0
	200坪前後		1	0
	100坪前後		7	4
50坪以下		0	5	
合計軒数		9	9	
東宮遺跡	規模	貞享三年	天明三年	明治6年
		比率	比率	比率
	300坪前後以上		0.11	0.00
	200坪前後		0.11	0.00
	100坪前後		0.78	0.44
50坪以下		0.00	0.56	



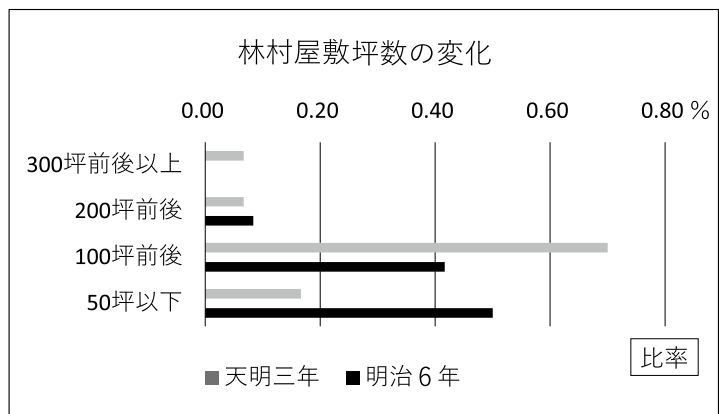
川原湯村	坪数	貞享三年	天明三年	明治6年
		軒数	軒数	軒数
	300坪前後以上	5		1
	200坪前後	2		2
	100坪前後	9		6
50坪以下	7		2	
合計軒数	23		11	
規模	貞享三年	天明三年	明治6年	
	比率	比率	比率	
	300坪前後以上	0.22		0.09
	200坪前後	0.09		0.18
	100坪前後	0.39		0.55
50坪以下	0.30		0.18	



横壁村	坪数	貞享三年	天明三年	明治6年
		軒数	軒数	軒数
	300坪前後以上	2		0
	200坪前後	0		2
	100坪前後	9		9
50坪以下	2		2	
合計軒数	13		13	
規模	貞享三年	天明三年	明治6年	
	比率	比率	比率	
	300坪前後以上	0.15		0.00
	200坪前後	0.00		0.15
	100坪前後	0.69		0.69
50坪以下	0.15		0.15	



林村	坪数	貞享三年	天明三年	明治6年
		軒数	軒数	軒数
	300坪前後以上	2		0
	200坪前後	2		1
	100坪前後	21		5
50坪以下	5		6	
合計軒数	30		12	
規模	貞享三年	天明三年	明治6年	
	比率	比率	比率	
	300坪前後以上	0.07		0.00
	200坪前後	0.07		0.08
	100坪前後	0.70		0.42
50坪以下	0.17		0.50	



*坪前後とは該当する坪の前後50坪まで範囲とした。

(貞享三年の資料は各村の御検地水帳から天明三年は発掘成果明治6年は壬申地引絵図から作成)

4. 東宮遺跡における天明泥流下と明治6年段階の土地利用について

(1) 天明三年の泥流下の東宮遺跡と明治6年壬申地引絵図について

天明三年八月の泥流により、川原畑村の下段にある東宮遺跡周辺の大部分は泥流に埋もれた。その後復旧状況については、毎年¹⁾の皆済目録から村の収穫状況の変化等を詳しく知ることができ、また天保八年の絵図と文書についていた「御代官山本大膳様当分御預所上州吾妻郡川原畑村」と表題に記された村の明細を記した文書。(282頁掲載)さらに天保14年に作成された「上野国吾妻郡川原畑村村絵図面 耕地色分○御取場耕地目印」の図面に描かれた山や谷・泥流埋没範囲・集落の立地・道水路や社寺・田畑における等級と年貢高等について知ることができる。明治6年の壬申地引絵図には、村の地図と、地図の中に道や水路、畑の番地・字名・畑や田の区別と等級・所有者名・屋敷の番地・字名・坪数・所有者名等が書かれている。壬申地引絵図には発掘された東宮遺跡部分も明瞭に描かれており、東宮遺跡発掘区域1/700の地図に、明治6年の壬申地引絵図の縮尺は定かでないが、重ねて作成したのが第214図である。天明三年段階の村が、明治6年になるとどのように変化し土地利用されているかについて多くの情報を知ることが出来る。

(2) 天明以前の土地利用と明治6年の土地利用

発掘された東宮遺跡全体図を黒インクで、明治6年の壬申地引絵図に書かれていた情報の一部を赤インクで重ね合わせた。明治6年の壬申地引絵図から道や水路・所有者別の境界等を選び出し、番地・字名・所有者名等は省いた。重ね合わせてみると道・水路は、天明三年泥流下と明治6年の図面とほとんど一致している。公である土地はほとんど復元され使い続けていた。また天明三年段階の屋敷の上には屋敷が、畑の造られていた場所には畑が造られていた。家9軒は、1軒の屋敷に2軒建てられ、酒屋と隣の屋敷の2軒が1軒になっているが、天明三年段階で建てられていた場所が、屋敷となっていた。

以下詳しく説明する。

(3) 発掘調査された東宮遺跡における天明三年泥流下の村と明治6年壬申地引絵図に描かれた村の違い

・道

村の道幹線道路に関しては、発掘された6号道から繋がる現在の町道部分と、明治6年の道はほぼ一致する。

天明三年以前の道・明治6年の道・昭和の道がほぼ同じ場所に継続的に使用されている。発掘調査で明らかとなっている各屋敷に入るための道については、明治6年壬申地引絵図には書かれていない。

・水路

明治6年壬申地引絵図に発掘された10号溝と同じ場所に水路が描かれている。また西宮との境にある堺沢も描かれている。大きな水路については、継続的に使われていた。各家の井戸や排水路等については描かれていない。

・屋敷

発掘された酒蔵を含めた9軒の屋敷は、明治6年壬申地引絵図では、4号屋敷部分で1軒が2軒に細分され、酒蔵と隣の6号屋敷部分で1軒の屋敷が造られていた変化はあるが、軒数で見ると同じ9軒である。屋敷の造られていた場所には、屋敷が造られていた。しかし、屋敷の使い方や屋敷面積については大きく異なっている。以下1・4・7号屋敷の変化を例として説明する。

・1号屋敷

天明三年泥流下の1号屋敷では、ほぼ周辺を石垣で囲まれた屋敷に、母屋である1号建物をはじめ2～4・8(4・8号建物は同じ場所であるため同時存在していない)号建物の4棟の建物敷地が確保されており、屋敷東側に小さな畑が造られていた。明治6年壬申地引絵図では、屋敷の北東部(三畝十三歩)の場所が他の所有者の土地となり、畑となっている。また屋敷南東部分も中畑(四畝拾歩)となっており、屋敷(三畝拾四歩)は、天明段階の300坪前後から1/4以下に減少している。

・4号屋敷

天明三年泥流下の4号屋敷では、北・南・西側を石垣で囲まれ、東側は道に面していたと思われる。母屋である9号建物があり、付属建物は確認できなかった。裏側の石垣下には井戸や水路があった。屋敷面積は100坪前後あり、おそらく最も一般的な敷地規模の屋敷であった。明治6年壬申地引絵図では、屋敷が道

に面して、2軒に分かれており、屋敷面積は1軒が13坪、他の1軒が27坪と記載されている。50坪以下の極めて狭い屋敷となっている。

・7号屋敷

天明三年泥流下の7号屋敷は、北側が幹線道路である6号道に面し、西側の急傾斜地に石垣、南側に水場と水路、東側は石垣により区画されている屋敷であり、母屋である13号建物をはじめ14・15・28号建物を持つ広い建物面積が確保され200坪近い屋敷面積が確保されていた。明治6年壬申地引絵図では、屋敷が3つに区分され、所有者も3人に分かれている。屋敷は道に面した場所となり、屋敷面積は75坪(貳畝壺五歩)半分以下に狭くなり、母屋の建っていた13号建物の場所は下畑となり、さらに南側も下畑となっていた。他の屋敷も天明三年段階に建てられた場所に壬申地引絵図には屋敷となっている。しかし屋敷面積は、いずれも狭くなっている。

・畑

畑については、1枚の畑全体を発掘調査できた畑がほとんどないので、詳しい検討はできない。その中で30号畑が、ほぼ全面発掘することができた。1枚だけであるが検討してみる。天明三年段階での30号畑の面積は約60坪前後である。壬申地引絵図に同じ場所に下畑I 畝廿貳歩と書かれている53坪である。坪数が合わないのは、どの範囲を畑とするかの基準により大きく異なるようである。屋敷面積も壬申地引絵図の面積と書かれている。面積を比較すると図上で実測した面積より、壬申地引絵図に書かれた面積が1～2割狭くなっている傾向を示している。壬申地引絵図に作成段階で屋敷・石垣や水路・道路や畑等の境部分について一定の基準で、換算しないような方法がとられていたのではないだろうか。

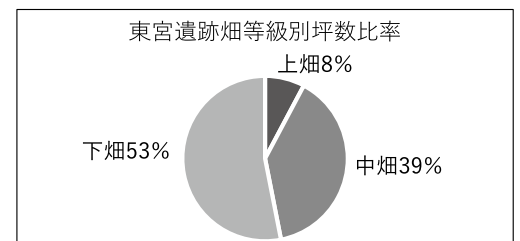
天明泥流下に残っていた畑を検出するために、畑が検出できる限界まで発掘調査を行い、畑が検出できなくなっても一定の範囲では、調査区のなだらかな傾斜地が急傾斜地に変換する地点まで調査を進めた。天明泥流は、標高542.5m以上の場所では薄くなり、泥流下の畑の検出はほとんどできなかった。そのために天明三年段階の畑が、どの範囲まであったかについて知ることはできなかった。しかし壬申地引絵図を調べ

ることにより、どの範囲まで畑が作られていたかを推定することができる。第214図には発掘した全体図と、壬申地引絵図に書かれていた畑の面積と等級を記入した。その結果、時代は違うがおそらく発掘した区域全体、および急傾斜面まで畑として栽培されていたことが推定できた。この資料により、畑の面積や等級を知ることができる。天明三年とは100年以上違うが、天明泥流下と上での土地利用が多くの部分で共通しているとの前提で畑の坪数と等級について調べてみる。表で明らかのように、畑は16枚作られており、畑の面積は36～130坪まで大小の違いがある平均すると75坪である。上畑が0.8%、中畑が39%、下畑が過半数の53%となっている。立地条件が良いためか下畑はない。

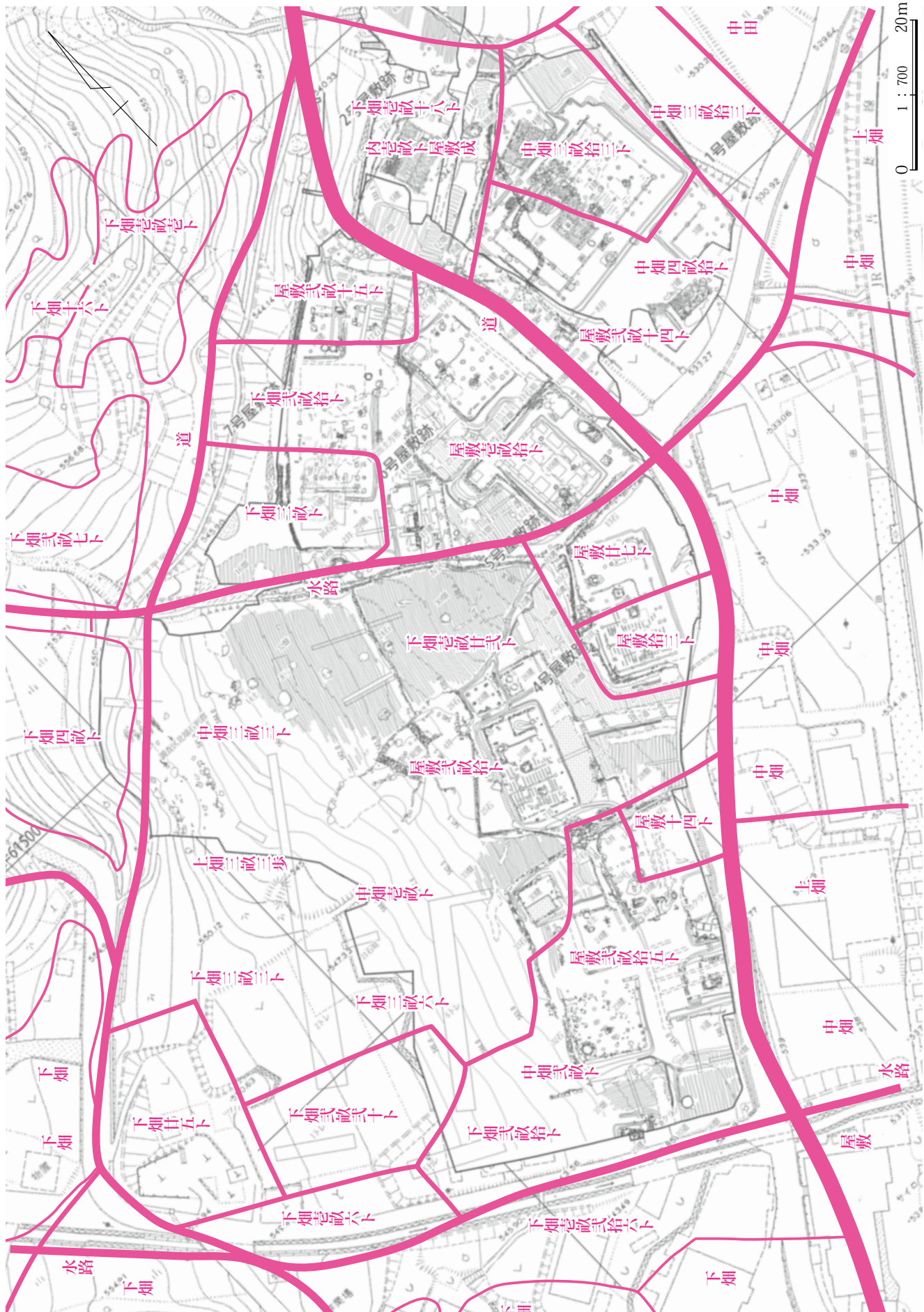
第16表 東宮遺跡発掘範囲畑・田坪数と等級

畑・田番号	等級別	坪
1	下畑	48
2	中畑	103
3	中畑	55
4	中畑	130
5	下畑	70
6	下畑	90
7	下畑	52
8	中畑	90
9	上畑	93
10	下畑	93
11	中畑	30
12	下畑	96
13	下畑	80
14	下畑	36
15	中畑	60
16	下畑	70
合計		1,196
平均		75

	等級別坪数	等級別坪数比率
上畑	93	0.08
中畑	468	0.39
下畑	635	0.53



群馬県立文書館蔵壬申地引絵図川原畑村A0181AMA1298より作成



第214図 天明三年(1783)泥流下の村(東宮遺跡・黒色)と明治6年(1873)壬申地引絵図は任意に拡大し位置は推定して合成)

5. 畑における栽培作物について

(1) 東宮遺跡における畑地と周辺において栽培されたであろう作物について

東宮遺跡では、屋敷の他に畑が調査されている。この畑について第3章第2節(11)のなかで説明した。ここではこれらの畑でどのような作物が栽培されていたかについて検討する。これまで八ッ場ダム建設に伴い多くの遺跡で発掘調査が行われ、多くの畑が検出されてきた。それらの畑の多くは区画整備されたような大きな区画で规格的に細分化され栽培されている様子を示している。また地形に沿った不定形の畑もあり栽培の在り方は様々である。その畑に何を栽培していたかについての研究もされてきた。発掘された作物遺体としては麻が代表的である。上郷岡原遺跡等において大量の麻の茎が重なったような状態で泥流下から出土している。また他の遺跡でも麻の茎が出土している遺跡が多くあり、多くの畑で麻の栽培がおこなわれていたことが確認されている。また東宮遺跡では4号屋敷跡6号溝に置いてあった桶の中に大量の麻の実が入った状態で出土している。しかし、畑全体から見ると、麻の出土は一部であり、全面的に麻栽培がおこなわれていたと説明するには無理がありそうである。科学分析で栽培作物について調べた遺跡として、平成7年度に発掘調査された東宮遺跡でソバ属、平成10年度に発掘調査された川原湯勝沼遺跡でソバ属、平成11年度に発掘調査された尾坂遺跡でソバ属が確認されている。また平成10年度に発掘調査された東宮遺跡の対岸にある西の上遺跡では、アワカヒエの作物痕跡を確認している。平成11～13年度に発掘調査された中棚Ⅱ遺跡では畝に残された空隙に石膏を流し込み、サトイモと考えられる植培作物痕を検出している。またヒエ属やオオムギ属等も確認されている。しかしどのような作物がどのように栽培されていたかについては不明な点が多い。

(2) 大柏木村における天明三年段階の栽培作物について

天明三年段階において、東吾妻町や長野原町で麻が栽培されていたことは、ほぼ間違いないであろう。しかし他の作物が、どのように栽培されているかについて、発掘成果から詳しく知ることは難しい。当時の様子を記した資料の一つとして、「天明三年八月 吾妻郡大柏木村畑方作秋作小前書上張」(群馬県史資料編11近世3 群

馬県1980年)がある。この資料を用いて、当時栽培されていた作物について検討を加える。資料の作成された大柏木村は、長野原町の南にある。この村は、天明泥流で埋もれることは無かったが、浅間山の噴火による降灰やその後の天候不順により作物の大部分が七分損あるいは全損となり、大変な被害をうけた。資料には1番の畑から596番の畑までの畑の様子が詳しく書かれている。1例を次に記す。「百九十八番 麻作 一 上畑壹畝拾三反歩 勘右衛門◎ 百九十九番 大豆作 一 中畑拾壹歩 同人◎ 二百番 あわ作 一下畑壹反七畝廿拾一歩 同人◎ 二百壹番 粟作 一下々畑貳反四歩 同人◎ 二百二番 稗作 一 下々畑壹反五畝歩 同人◎ 二百三番 そば作 一 下々畑壹反五畝歩 同人◎」このように天明三年九月段階の畑番号・栽培作物・畑等級と面積・地主名が記され、村全体の畑の様子が書かれている。畑の説明の後に上畑・中畑・下畑・下〃畑別に石高と栽培作物の坪数および被害状況が書かれている。最後に「右者此度浅間山大焼山津波二而、川筋村々大変御座候得共、拙者共、村方之儀者、田畑損地等者無御座候得共、浅間山間近之村方故、日々焼砂泥灰等降り申候而、当秋作畑作之大方枯切申候二付、小前張相仕立御検分二奉願上候処、少し茂相違無御座候、何卒以御慈悲百姓御救被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上 天明三年卯九月 上州吾妻郡大柏木村 名主 久右衛門◎ 年寄 九兵衛◎ 同 伝右衛門◎ 組頭 治右衛門◎ 同 市兵衛◎ 組頭 弥左衛門◎ 百姓代 善六◎ 同 喜兵衛◎」と書かれており、資料の作成目的と作製者名が書かれている。その資料を表とグラフで示したのが第17表である。表で分かるように、最も多く栽培されていたのは、粟(41%)、蕎麦(33%)、稗(14%)、大豆(6%)、麻(6%)であった。麦は時期が9月なので栽培されていない。最も多く栽培されていたのは粟・稗・蕎麦であり、麻は6%であり全体から見ると極めて少ないことが分かる。また表から、これらの作物が畑のどの等級に栽培されていたかについても明らかである。麻は、上畑と中畑が中心で、下畑では少ない。大豆は中・下・下〃畑が中心であり、上畑は少ない。粟は下畑と下〃畑が中心であり、上畑と中畑は少ない。稗は下〃畑が中心であり、わずかに下畑で栽培されている。蕎麦は全て下〃畑で栽培されている。このように畑の等級により

第17表 天明三年八月吾妻郡大柏木村方畑作秋作小前書上張

	石	斗	升	合
高	261	0	1	8
上畑	22	6	8	9
中畑	31	1	2	9
下畑	90	5	1	5
下〃畑	111	6	8	5
	254	18	19	28
石高換算	256	0	1	8

1石	10斗
1斗	10升
1升	10合
1町	10反
1反	10畝
1畝	30歩
1歩	3.3058㎡ (1坪)

麻	3.9
大豆	4.4
粟	27.9
稗	9.6
そば	22.2

畝歩省略

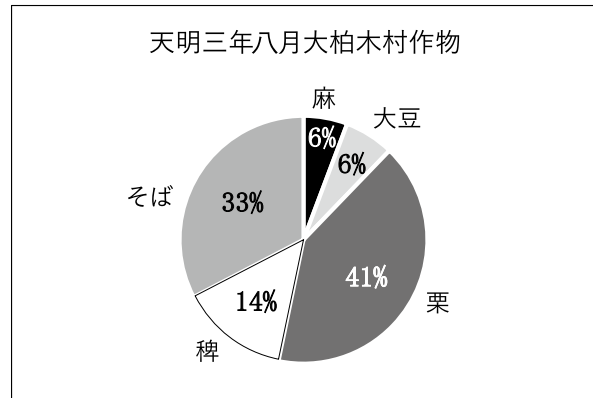
麻	町	反	畝	歩
上畑	1	8	9	9
中畑	1	8	9	4
下畑	0	3	5	5
下〃畑	0	0	0	0
計	2	19	23	18
面積換算	3	9	23	18

稗	町	反	畝	歩
上畑	0	0	0	0
中畑	0	0	0	0
下畑	0	1	5	10
下〃畑	9	5	2	21
計	9	6	7	31
面積換算	9	6	8	1

大豆	町	反	畝	歩
上畑	0	6	1	6
中畑	1	4	4	21
下畑	1	8	1	3
下〃畑	1	2	3	6
計	3	14	8	30
面積換算	4	4	9	0

そば	町	反	畝	歩
上畑	0	0	0	0
中畑	0	0	0	0
下畑	0	0	0	0
下〃畑	11	2	0	22
計	11	2	0	22
面積換算	22	2	2	22

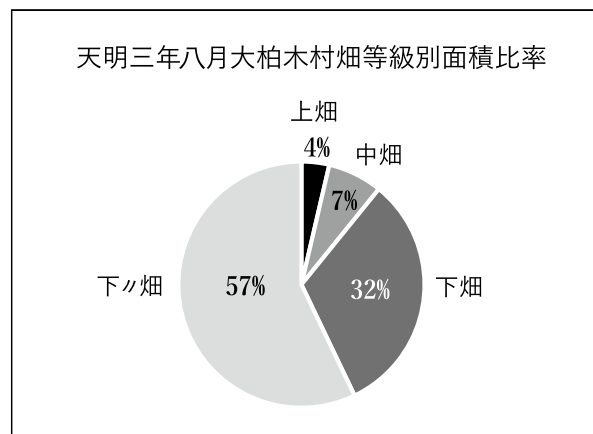
粟	町	反	畝	歩
上畑			1	18
中畑	1	1	0	26
下畑	15	7	8	21
下〃畑	11	0	2	1
計	27	8	10	48
面積換算	27	9	1	18



上畑	2.05
中畑	4.04
下畑	18.01
下〃畑	32.09

畝歩省略

群馬県史資料編11第四章第二節276より作成



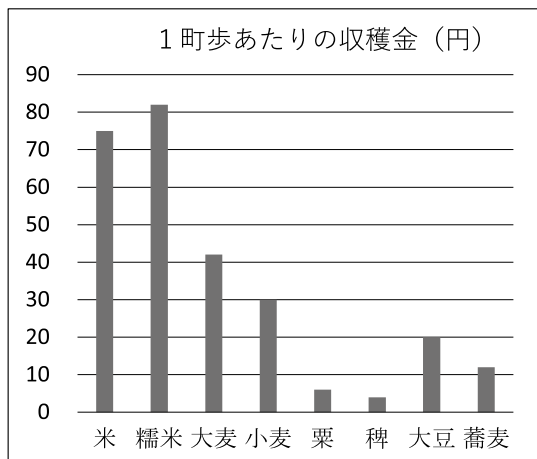
第4章 調査の成果とまとめ

栽培される作物の種類は分けられていたようである。この中で、麻は基本的に上畑での栽培が主であるのに、なぜ中畑や下畑で栽培されているのか少し疑問が出る。そこで個人における畑の所有形態についてさらに調べる。すると上畑や中畑を所有していない栽培者がいることがわかる。例えば「百六十六番 麻作 一下畑貳畝歩 治右衛門◎ 百六十七番 大豆作 一下畑壹畝壹六歩 同人◎ 百六十八番 粟作 一下々畑貳反貳畝歩 同人◎ 百六十九番 稗作 一下々畑七畝歩 同人◎ 百七十番 そば作 一下々畑六畝貳歩 同人◎」この治右衛門は、上畑や中畑を所有していない。下々畑で麻や大豆を栽培していることが分かる。上畑を持たない地主の場合は中畑で麻が栽培されている例がある。このように畑の所有の在り方から、栽培される作物の種類が決められることも明らかとなった。栽培作物として、最も優れた畑では、最初に麻が造られ、次に大豆である。おそらく現金収入を得るために、上畑や中畑では麻や大豆を優先し

て作っていることがわかる。しかし、食料を確保するために畑の大部分では、粟・稗・蕎麦が大々的に植えられていたこともわかる。このような状況が、東宮遺跡のある川原畑村や対岸の川原湯村であったとすると、発掘調査された畑の多くの、下畑や下々畑では、粟・稗・蕎麦等が栽培され、麻畑は上畑や中畑に限られた狭い範囲であったものと思われる。麻は、畑の所有者が持っている最も条件の良い畑で栽培されているので、最も大事な作物であったものと思われる。あるいは、麻は畑の地力がないところには適さないために、作る畑が制限された結果もそこに反映されていると思われる。参考までに明治10年の資料、前橋市龍蔵寺村での米・糯米・大麦・小麦・大豆・粟・稗・蕎麦の1町歩あたりの収穫金が明らかな資料があるので提示する。これによれば大豆が粟や稗の数倍の収穫金を確保できることがわかる。麻との比較資料は、今後探して検討する。

第18表 明治10年上野国勢多郡普通物産表 第三大区二小区龍蔵寺村

産物種別	面積	収穫高	収穫金額 (円)	一石あたりの収穫金額	1町あたりの石数	1町あたりの収穫金 (円)
米石	八町六反六畝六歩	百三石九斗	653.1205	金六円二十五銭	12	75
糯米石	壹町八反	貳拾三石八斗	181.44	金六円三十銭	13	82
大麦石	六町五反六畝十一歩	百三十一石二斗	275.55	金二円十銭	20	42
小麦石	二町六反八畝十五歩	二拾壹石四斗八升	79.4706	金三円七十銭	8	30
粟石	九反八畝歩	壹石五斗五升	3.060205	金三円十二銭五厘	2	6
稗石	五反七畝二十歩	二石三斗	1.73	金一円也	4	4
大豆石	一町八反五畝十一歩	七石七斗八升	55.6	金五円也	4	20
蕎麦石	二反九畝十五歩	壹石壹斗五升	2.67	三円也	4	12



産物種別	金額 (円)
米	75
糯米	82
大麦	42
小麦	30
粟	6
稗	4
大豆	20
蕎麦	12

「物産取調御書上張・明費御書上張他 (明治11年・1878)」
群馬県立文書館所蔵 前橋市龍蔵寺自治体文書P8303No.232より作成

第2節 自然科学分析

テフラ分析について

本遺跡が、吾妻川左岸の下位段丘面上に立地することはすでに述べた通りである。吾妻川沿いの下位段丘面は上位段丘斜面から礫供給を受け、崖錐堆積で覆われることが多く、段丘本来の地形観をみることはできない。遺跡のある川原畑地区にも小規模な扇状地地形が形成され、その扇端部は吾妻川左岸の国道付近まで達していることがほぼ確実だが、あくまでも見通しに過ぎず、これを客観的にデータ化することが必要であった。

東宮遺跡の発掘調査では、天明泥流下屋敷跡の調査に並行して、泥流の及ばない山側の地点や旧川原畑村内に残された古道の調査を進めていった。発掘調査では、はたして古道がいつころまでさかのぼるのか、また、どこまで掘れば縄文期以降は確認できるのか、ということも考え併せ調査を進めることとした。

今回依頼したテフラ分析は、そうしたことを考える一つの材料になることを期待しておこなったものであるが、2号トレンチにおいては黒色土中の青味を帯びたテフラについてその給源を明らかにすること、これより下層に縄文期遺構・遺物包含層があるのか、4号トレンチでは古道がいつころまでさかのぼるのか、このことを明らかにすることを目的とした。10・15号建物のトレンチでは、石垣裏込め状況の確認(10号)、及び、丘陵を切り盛り整形した状況確認(15号)を目的としたものである。12号溝では、As-A(浅間A軽石)降下以前に埋没していた溝覆土を調べる。

今回の分析では、2号トレンチ内で確認された黒色土中の青味を帯びたテフラがAs-Kk(浅間粕川テフラ)に、4号トレンチ内でAs-Kn(浅間六合軽石)が確認されたほか、10号建物裏のトレンチ(石垣および裏込め断ち割り調査)では鈹物レベルだがAs-B(浅間Bテフラ)が明らかにされている。いずれも重要な知見となったが、10号建物裏トレンチのAs-Bの検出が重要で、これにより遺跡の地形発達史的な理解を深めることができた。すなわち、1108年の浅間山噴火から1783年の噴火(As-A)までの間に、2度の土石流災害があったこと、そしてそれ以下に

も厚く土石流が堆積、縄文期遺構および遺物包含層は相当な深度に埋没しているという見通しを得ることができた。

1. はじめに

関東地方北西部に位置する吾妻川流域とその周辺には、浅間、榛名、草津白根など北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログ(たとえば町田・新井, 2011)などに収録されており、考古遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには考古学的に遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

長野原町東宮遺跡の発掘調査でも、層位や年代が不明な遺構やテフラ粒子など認められたことから、地質調査を実施して土層やテフラ層の記載を行うとともに、高純度で分析試料を採取し、実験室内でテフラ分析(テフラ検出分析および火山ガラスの屈折率測定)を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を実施することになった。調査分析の対象は、2号トレンチ、4号トレンチ(斜面部)、10号建物裏トレンチ、15号建物下トレンチ、12号溝断面の5地点である。

2. 土層の層序

(1) 2号トレンチ

2号トレンチでは、下位より亜角礫混じりでやや黄色がかった灰色砂質土(層厚15cm以上、礫の最大径112mm)、亜角礫混じりでやや暗い灰褐色土(層厚24cm、礫の最大径108mm)、青灰色細粒火山灰層(レンズ状、最大層厚1cm)、砂混じり暗灰褐色土(層厚7cm)、亜角礫混じりで砂を多く含む灰褐色土(層厚19cm、礫の最大径19cm)、亜角礫に富む灰褐色表土(層厚34cm)が認められる(図1)。

(2) 4号トレンチ(斜面部)

斜面部に位置する4号トレンチでは、下位より黒色土(層厚10cm以上)、若干明るい黒色土(層厚11cm)、褐色軽

石混じり黒褐色土(層厚9cm, 軽石の最大径11mm)、褐色軽石混じり黒色土(層厚8cm, 軽石の最大径4mm)、褐色軽石混じりで若干明るい黒色度(層厚19cm, 軽石の最大径5mm)、亜角礫混じり黒褐色土(層厚13cm, 礫の最大径53mm)、とくに暗い暗褐色土(層厚9cm)、亜角礫混じり暗褐色砂質土(層厚6cm, 礫の最大径63mm)、とくに暗い暗褐色表土(層厚9cm)が認められる(図2)。

(3)10号建物裏トレンチ

10号建物裏トレンチでは、下位より亜角礫混じり青灰色土石流堆積物(層厚15cm以上, 礫の最大径413mm)、亜角礫混じり青灰色砂質泥層(層厚13cm, 礫の最大径18mm)、樹木片混じり暗灰褐色泥層(層厚9cm)、下部に成層した暗灰色砂層(層厚4cm)をもつ亜角礫を多く含む褐灰色土石流堆積物(層厚22cm, 礫の最大径213mm)、砂混じり暗青灰色泥層(層厚8cm)、亜角礫に富む灰色土石流堆積物(層厚39cm, 礫の最大径167mm)、灰色砂質土(層厚8cm)、砂混じり暗灰色土(層厚6cm)、亜角礫混じりでやや暗い灰色土(層厚46cm, 礫の最大径73mm)が認められる。最上位の土層の上面には、As-Aに覆われた畑が作られている(図3)。

(4)15号建部下トレンチ

15号建部下トレンチでは、角礫層(層厚30cm以上, 礫の最大径207mm)の上位に、下位より角～亜角礫混じり灰褐色土(層厚18cm, 礫の最大径74mm)、角礫を多く含む黒褐色土(層厚38cm, 礫の最大径87mm)、黄色軽石を多く含む黒褐色土(層厚22cm, 軽石の最大径18mm)が認められる(図4)。

(5)12号溝断面

12号溝の覆土は、下位より亜角～角礫層(層厚47cm, 礫の最大径277mm)、炭化物層(層厚4cm)、亜角礫混じりで砂を含む暗灰色土(層厚3cm, 礫の最大径52mm)、細粒の白色軽石層(層厚2cm, 軽石の最大径5mm)、角礫混じりでしまった暗灰色泥流堆積物(層厚11cm, 礫の最大径52mm)からなる(図5)。

このうち、白色軽石層とその上位の泥流堆積物は、層相から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)と浅間天明泥流堆

積物にそれぞれ同定される。このことから、12号溝の層位はAs-Aより下位にあることがわかる。

3. テフラ分析

(1)分析試料と分析方法

2号トレンチ、4号トレンチ(斜面部)、10号建物裏トレンチにおいて採取された試料のうちの6点を対象に、火山ガラスや鉱物などのテフラ粒子の特徴や量を定性的に把握するテフラ検出分析を行って、指標テフラの検出を実施した。分析方法は次のとおりである。

- 1)試料8gを秤量。
- 2)超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3)恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4)実体顕微鏡下で観察。

(2)分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。2号トレンチの試料3には、淡褐色軽石(最大径2.1mm)がごくわずかに、また、淡灰色、淡褐色のスポンジ状軽石型火山ガラスが多く含まれている。そのほか、黒灰色、黒色、暗褐色、暗灰色のスコリア型の火山ガラスも比較的多く認められる。強磁性鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石および単斜輝石が認められる。

4号トレンチ(斜面部)の試料6には、白色や無色透明のスポンジ状や繊維束状の軽石型ガラスや、無色透明の分厚い塊状や破片状の中間型ガラスも含まれている。強磁性鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石および単斜輝石が認められる。

10号建物裏トレンチの分析対象試料のうち、最下位の試料7には、白色のスポンジ状軽石型ガラスのほか、斜方輝石や単斜輝石やがわずかに含まれている。試料6より上位では、褐色の軽石(最大径2.0mm)や、淡褐色、淡灰色、褐色のスポンジ状軽石型ガラスが認められ、それらは試料6に比較的多い。これらの試料には、黒灰色や黒褐色のスコリア型ガラスも含まれている。強磁性鉱物以外の重鉱物としては、斜方輝石および単斜輝石が多く、ほかにわずかに角閃石が含まれる試料もある。

4. 屈折率測定(火山ガラス)

(1)測定試料と測定方法

テフラ検出分析により特徴的な火山ガラスが検出された試料のうち、10号建物裏トレンチの試料6に含まれる火山ガラスの屈折率(n)の測定を実施し、指標テフラとの同定精度の向上を図った。測定に用いた機器は温度変化型屈折率測定装置で、テフラ検出分析後に分析篩による篩別で得られた1/8-1/16mm粒子中の火山ガラスを測定の対象とした。

(2)測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。この表には、吾妻川流域周辺の後期旧石器時代以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も示した。10号建物裏トレンチの試料6に含まれる火山ガラス(23粒子)の屈折率(n)は、1.526-1.530である。

5. 考察

テフラ検出分析および屈折率測定の対象となった10号建物裏トレンチの試料6に含まれる火山ガラスは、その岩相や屈折率特性などから1108(天仁元)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 町田・新井, 1992, 2003)に由来すると考えられる。したがって、10号建物裏トレンチの最下位の土石流堆積物より上位の、試料6の採取層準以上の堆積物は、As-Bより上位と推定される。このことから、本地点では、As-Bの降灰後で、As-Aの降灰前に、2度の土石流が堆積していることになる。

2号トレンチの試料3が採取された青灰色火山灰層は、層相や含まれる軽石および軽石型ガラスの岩相などから、1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間粕川テフラ(早田, 1991, 2004)に同定される。

4号トレンチ(斜面部)の試料6から検出された火山ガラスの多くは、岩相から、約1.3~1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003など)に関係する可能性が高い浅間草津黄色軽石(As-K, 新井, 1979, 町田・新井, 1992, 2003など)に由来すると考えられる。しかしながら、

斜面部の同層準に含まれる軽石は褐色で、通常のAs-Kの軽石の黄色の色調とは異なる。浅間火山起源の完新世のテフラのうち、約5,400年前*1に浅間火山から噴出した浅間六合軽石(As-Kn, 早田, 1991, 1996など)については、屈折率測定が困難な軽石で(故新井房夫群馬大学名誉教授談)、これまでその火山ガラスの屈折率特性は知られていない。このことから、試料6採取層準の褐色軽石は、As-Knに由来する可能性が指摘される。

なお、このAs-Knに同定される可能性がある軽石は、東吾妻町松谷松下遺跡で検出された土坑の覆土でも認められている(火山灰考古学研究所, 2014)。

6. まとめ

長野原町東宮遺跡において、地質調査とテフラ分析(テフラ検出分析・火山ガラスの屈折率測定)を実施した。その結果、浅間粕川テフラ層(As-Kk, 1128年)や浅間A軽石(As-A, 1783年)層のほか、浅間草津黄色軽石(As-K, 約1.3~1.4万年前*1)、浅間六合軽石(As-Kn, 約5,400年前*1)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)などに由来するテフラ粒子が検出された。発掘調査で検出された12号溝の層位は、As-Aより下位にある。また、本遺跡周辺では、As-B降灰後でAs-A降灰前に2度土石流が発生していることも明らかになった。

*1: As-YPの暦年較正年代は、約1.5~1.65万年前と推定されている(町田・新井, 2003, 2011)。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報, no.14, p.1-45.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
 町田 洋・新井房夫(2011)「新編火山灰アトラス(第2刷)」. 東京大学出版会, 336p.
 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2-7.
 について. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について—. かつつけの 里博物館編「1108—浅間火山—中世への胎動」, p.45-56.

第4章 調査の成果とまとめ

表1 テフラ抽出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物	軽鉱物 β石英	備考
		量	色調	最大径	量	形態	色調			
2号トレンチ	3	*	淡褐	2.1	***	pm(sp), sc	淡灰, 淡褐, 黒灰, 黒, 暗褐, 暗灰	opx, cpx		
4号トレンチ(斜面部)	6				*	pm(sp, fb), md	白, 無色透明	opx, cpx		軽石は風化が進む.
10号建物裏トレンチ	2				*	pm(sp), sc	淡灰, 黒灰	opx, cpx, (am)		As-B混じり.
	4				*	pm(sp), sc	淡灰, 白, 黒灰	opx, cpx, (am)		As-B混じり.
	6	*	褐	2.0	**	pm(sp), sc	淡褐, 淡灰, 褐, 黒灰, 黒褐	opx, cpx		As-B混じり.
	7				*	pm(sp)	白	(opx, cpx)		

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない.

最大径の単位は, mm. bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, sc: スコリア型.

重鉱物(鉄鉱物以外)は, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石. ()は量が少ないことを示す.

表2 屈折率測定結果

試料・テフラ	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定粒子数	
10号建物裏トレンチ・試料6	1.526-1.530	23	本報告
〈吾妻川流域周辺の指標テフラーAT降灰以降〉			
浅間A (As-A, 1783年)	1.507-1.512		1)
浅間粕川テフラ(As-Kk, 1128年)	(未詳)		
浅間B (As-B, 1108年)	1.524-1.532		1)
榛名二ツ岳伊香保(Hr-FP, 6世紀中葉)	1.501-1.504		1)
榛名二ツ岳渋川(Hr-FA, 6世紀初頭)	1.500-1.502		1)
	1.498-1.505		3)
榛名有馬(Hr-AA, 5世紀)	1.500-1.502		4)
浅間C (As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520		2)
浅間D軽石(As-D, 約4,500年前*1)	1.513-1.516		2)
浅間六合軽石(As-D, 約5,400年前*1)	(未詳)		
鬼界アカホヤ(K-Ah, 約7,300年前)	1.506-1.513		1)
浅間藤岡軽石(As-Fo, 約8,200年前*1)	1.508-1.516		2)
浅間総社(As-Sj, 約1.0~1.1万年前*1)	1.501-1.518		2)
浅間草津(As-K)	1.501-1.503		1)
浅間板鼻黄色(As-YP, 約1.5~1.65万年前)	1.501-1.505		1)
浅間大窪沢2(As-Ok2, 約1.6万年前*1)	1.502-1.504		1)
浅間大窪沢1(As-Ok1, 約1.7万年前*1)	1.500-1.502		1)
浅間白糸(As-Sr)	1.506-1.510		1)
浅間萩生(As-Hg, 約1.9万年前*1)	1.500-1.502		2)
浅間板鼻褐色(群)(As-BP Group)	上部	1.515-1.520	1)
	中部	1.508-1.511	1)
	下部	1.505-1.515	1)
始良Tn(AT, 約2.8~3万年前)	1.499-1.500		1)

1)町田・新井(1992, 2003), 2): 早田(1996), 3)早田(2014), 4)町田ほか(1984).

本報告および2)~3): 温度変化型屈折率測定装置.

1)および4): 故新井房夫群馬大学名誉教授による温度一定型屈折率測定法.

*1: 放射性炭素(14C)年代.

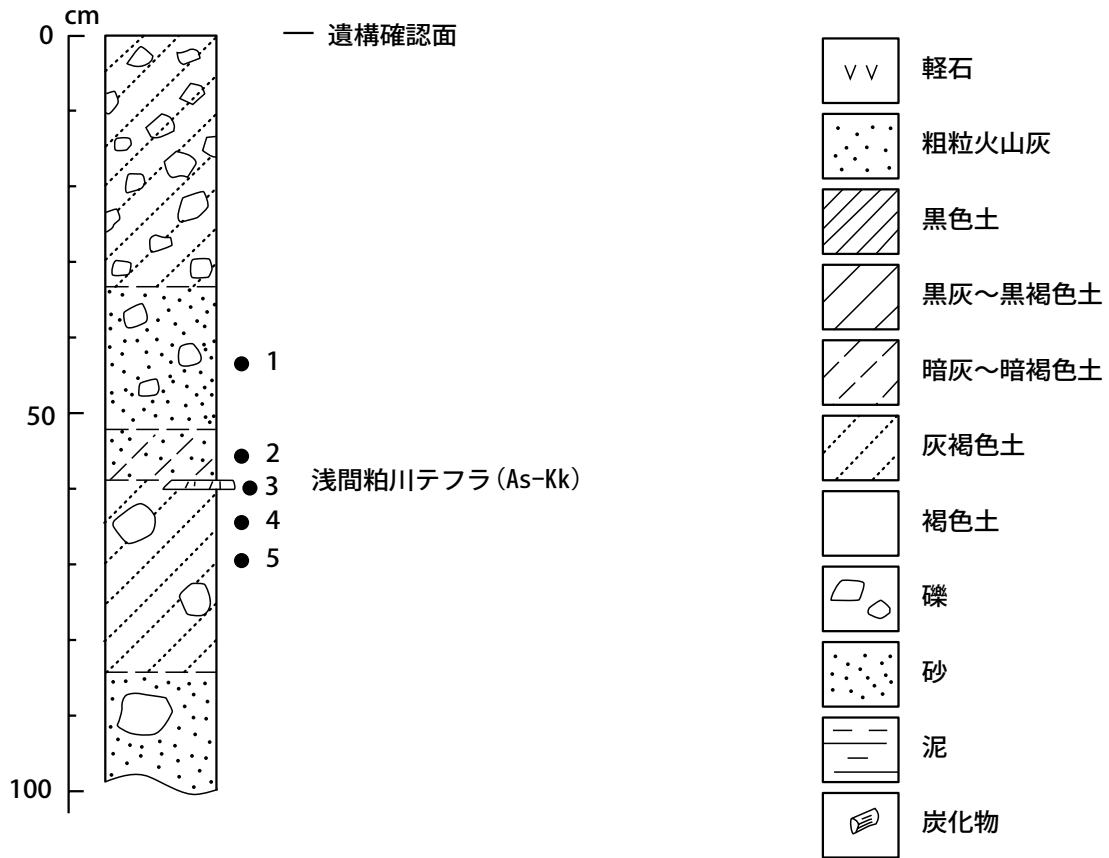


図1 2号トレンチの土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位、数字：テフラ分析試料番号

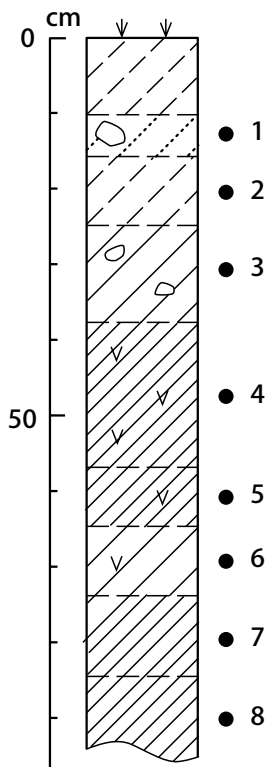


図2 4号トレンチ(斜面部)の土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位、数字：テフラ分析試料番号

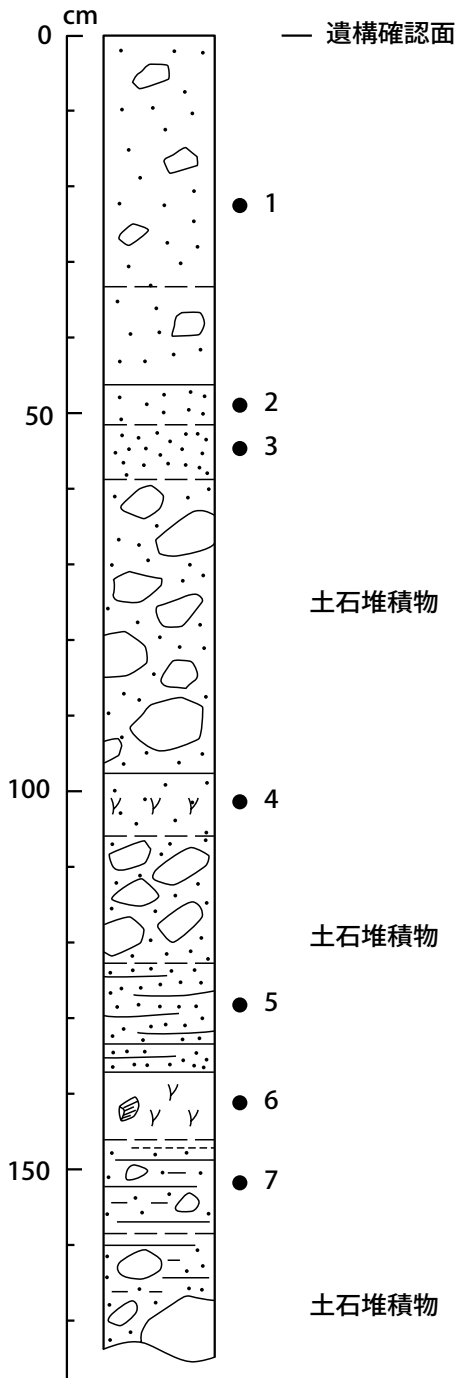


図3 10号建物裏トレンチの土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位、数字：テフラ分析試料番号

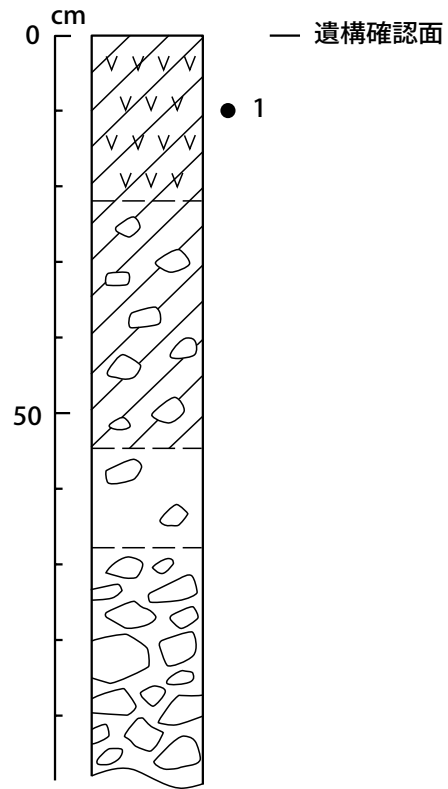


図4 15号建物下トレンチの土層柱状図
●：テフラ分析試料の層位、数字：テフラ分析試料番号

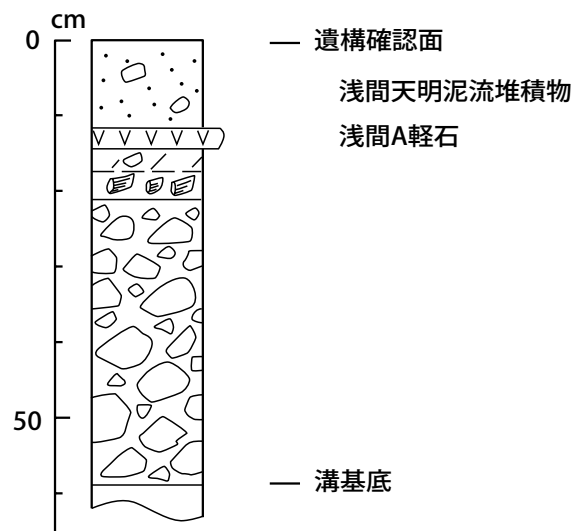


図5 12号溝断面の土層柱状図

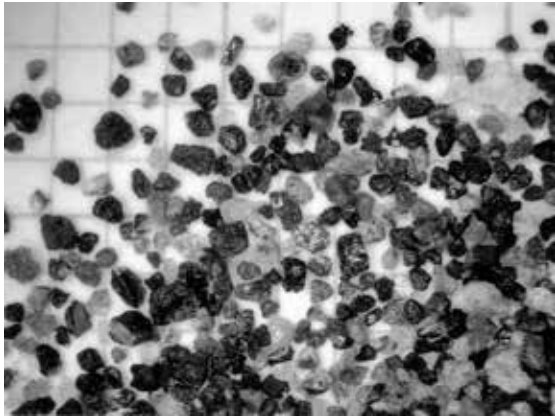


写真1 2号トレンチ・試料3
浅間粕川テフラ(As-Kk)。褐色の軽石型ガラスが含まれる。

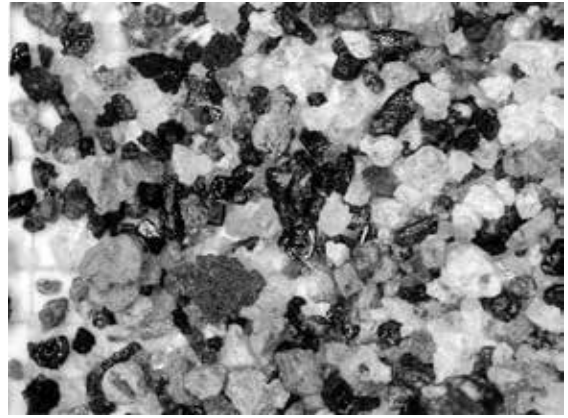


写真2 4号トレンチ・試料6

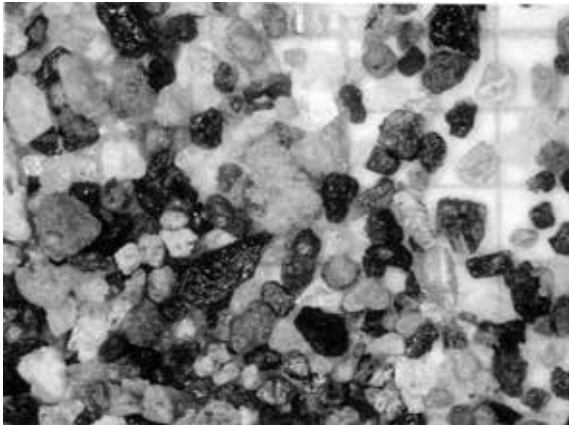


写真3 10号建物裏トレンチ・試料6
浅間Bテフラ(As-B)起源の淡灰色や淡褐色の軽石型ガラスが含まれる。

(背景：1mmメッシュ)

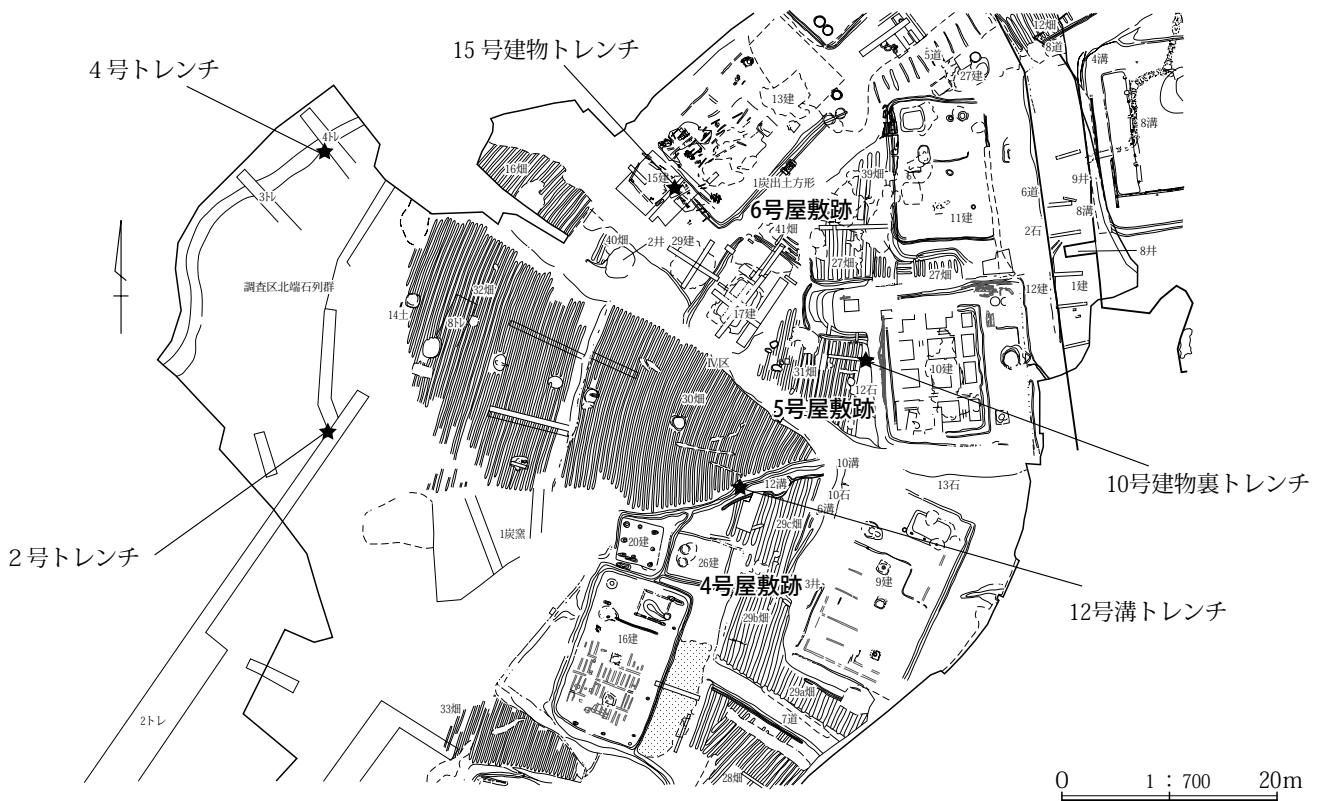


図6 テフラ分析資料採集場所

遺物観察表

I区1号屋敷跡8号井戸

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第148図	1	瀬戸・美濃 磁器か 青磁小碗	底部1/3	口底 — (3.2)	高 —	厚 —	/白/	外面飛鉋状の施文。内面から高台外面クローム青磁。高台端部から高台内無釉。	近現代。
第148図 PL.73	2	木製品 厚板	端部欠	長幅 21.0	厚 2.2	—	—	板目材の厚板。一方の端部欠損。	マツ属複雑管束亜属
第148図 PL.73	3	木製品 板	不詳	長幅 —	厚 2.5	—	—	厚さ2.2cmの厚板材。右側縁は直線的でなく、断面形も斜めであり欠損している可能性が高い。板目材。	
第148図 PL.73	4	木製品 板	一部欠	長幅 26.2	厚 1.3	—	—	柾目材。やや厚手の板材。測縁の遺存状態やや不良で欠損状態不明瞭。	マツ属複雑管束亜属

I区1号屋敷跡8号溝

第148図 PL.73	1	木製品 櫛	櫛歯1/2欠	長幅 13.0 5.1	厚 0.9 1.1	—	—	歯1枚の厚さは0.7mm。現状で白木。歯1/2欠損。	サクラ属
第148図 PL.73	2	木製品 連歯下駄	完形	長幅 20.8 6.97.8	高 4.5 5.2	—	—	高さはつま先を上にした状態で、つま先左側が4.5cm、つま先右側が4.7cm、踵側は左右ともに5.2cmと左側に傾く。横緒孔は後歯後方に開ける。	クリ
第148図	3	竹製品 竹筥	一部欠	長幅 —	厚 —	—	—	整製作業時には実測不可能な状態であり、出土状態写真から図を作成した。竹の幹に切った竹枝を蔓で縛る。	
第149図 PL.74	4	桶 底板	1/2	径厚 (33.0) 3.7	—	—	—	柾目と板目板を竹釘で3枚以上留め底板とする。欠損部にも竹釘が残る。	ヒノキ属
第149図 PL.74	5	木製品 不詳	完形	長幅 41.5 1.5 7.2	厚 1.4 2.2	—	—	一端を尖らせた杭状の角材。横断面は長方形を呈する。一部に溝状の抉り込みがある。上部を叩いたような痕跡は認められない。	クリ
第149図 PL.74	6	木製品 端材か	完形	長幅 28.1 15.6	厚 9.1 13.5	—	—	3面が平坦面で1面が年輪に沿った曲面を持つ。曲面に柄穴状の彫り込みが1カ所あるが用途不明。鋭痕も認められない。	クリ
第150図 PL.75	7	木製品 構築部材	完形	長幅 434.0 14.0	厚 12.0	—	—	表裏に貫通する平柄孔5カ所と貫通しない小さく浅い柄孔を上部に設ける。中央付近3方には浅い溝を切る。下部柄孔上部には直交方向の貫通しない柄孔を設ける。下部四分の一ほどの箇所裏面には鉋かヨキで溝状に刻んだ箇所が存在するが、構築物とは無関係と考えられる。芯持ち材。	ヒノキ属
第150図 PL.75	8	木製品 構築部材	不詳	長幅 — 10.0	厚 14.5	—	—	現存長230cmで2本の角材が接して出土し、柄孔が一致していたため一個体として測図した。両端付近には前者と直交方向の平柄孔が並列で存在する。2本共に芯持ち材。	
第150図 PL.75	9	木製品 構築部材	完形	長幅 281.5 12.0	厚 12.0	—	—	芯持ち材の角材で上端に平柄を設け、下端は切断している。表面から裏面に貫通する通し平柄孔を4カ所、通しの丸柄孔1カ所と貫通しない方形の浅い柄孔を5カ所あける。表面下部には「L」字状の欠き込みを有する。左面には複数箇所の欠き込みがあり、上部には円形柄孔の破損箇所が認められる。	クリ

I区1号屋敷跡薪場

第151図 PL.76	1	木製品 漆椀	口縁部、高台欠	口底 — —	高 —	厚 —	—	全体に器壁は薄い。主漆塗りで外面は下地が露出。	ブナ
第151図 PL.76	2	木製品 漆椀	口縁端部と高台欠	口底 — —	高 —	厚 —	—	腰部は稜をなし、高台脇は水平。内面朱漆で外面黒漆。体部下位から底部の器壁厚い。	コナラ節
第151図 PL.76	3	木製品 曲物底板	底板	径 9.6 9.9	厚 0.6	—	—	柾目材。周囲に竹釘は認められない。若干目痩せ。	ヒノキ属
第151図	4	木製品 曲物	側板	径高 15.5 —	—	—	—	合わせ部は2カ所で榫留め。側板底部側に2カ所竹釘孔。	針葉樹
第151図	5	木製品 栓	完形	長最大径 5.2 3.0	最小径 2.6	—	—	裁頭円錐形の短い栓。樽の栓か。両端は面取り。断面形は楕円形。	エノキ属
第151図 PL.76	6	木製品 陰卯下駄	完形	長幅 22.2 6.3 7.4	高 8.3 10.0	—	—	角形の陰卯下駄で差歯は台形状に開く。台の幅はつま先側が7.4cm、踵側が6.3cm。高さは現状でつま先側が8.3cm、踵側が10.0cm。表面に黒色に塗られる。横緒孔は後歯後方に下方が内側に向くよう斜めに穿孔。	側板 トチノキ 底板 コナラ節
第151図 PL.76	7	木製品 連歯下駄	台部完	長幅 22.2 6.6 7.9	高 —	—	—	角形の連歯下駄で台の幅はつま先側が7.9cm、踵側が6.6cm。歯の殆どは欠損。横緒孔は後歯後方に開ける。前後歯の間は横方向の削り痕残る。	クリ
第151図 PL.76	8	竹製品 箕	一部	長幅 —	厚 —	—	—	遺存状態が悪く、整製作業時は形状がわからない状態であった。実測図は現場写真から作成したもので、縦方向の竹は2枚平行に用い、横方向は1枚で編む。	
第151図 PL.76	9	木製品 不詳	完形	長幅 27.8 6.6	厚 3.3	—	—	部材としては完形。中央に直径3.5cmの心棒を通す孔をあけ、一方に心棒を受ける直径6.3cm、深さ1.5mmの段を設ける。両端には長さ1.8cmの柄を削り出す。横断面形は長方形であるが、角を面取りする。	スギ
第151図 PL.76	10	木製品 建築材	完形	長幅 40.8 12.1	厚 10.8	—	—	芯持ち材。両端に柄を作り、2面に溝を切る。一方の柄は長い。1面は平坦に削らず丸みを持つ。	クリ
第152図 PL.77	11	木製品 柱か	一部	長幅 — 12.5	厚 12.3	—	—	芯持ちの角材で、2方に幅2.5cm、深さ1.4cmの溝を刻む。端部のみが残存。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚	6.7			
第152図 PL.77	12	木製品 角材	端部	長 幅 7.4	厚 6.7		端部に高さ3.3cmの核杓継状の柄を作る。柄基部に斜めの削りがあり、形状は蟻形柄に似る。1面に鋸によると考えられる浅い切り込みがある。ヨキによると推定される整形痕あり。	コウヤマキ	
第152図 PL.77	13	木製品 板	一部欠	長 幅 17.5 15.1	厚 0.7 0.9		板目材。一方の端部両端に1.5cm×1.5cmの欠き込みを入れる。1カ所不明小孔がある。片面の目痩せが著しい。	ヒノキ属	
第152図 PL.77	14	木製品 槌状製品	不詳	長 幅 18.0	厚 12.0		断面八角形状を呈した芯持ち材を半裁し、半裁した面から断面「V」字状に深さ5cmほど抉る。現存長は367.5cm。	マツ属複雑管束重	
第153図 PL.78	15	木製品 踏鋤	一部欠	長 幅 94.7 20.5	厚 20.8		先端部欠損。基部付近が厚く、歯先に向かうにしたがい薄くなる。基部には4カ所柄穴を開け、端部側の2個は溝でつながる。歯先は鉄製の刃部を装着するための段差が設けられる。写真では3カ所に見えるが、1カ所は泥が詰まっていた。	コナラ節	
第153図 PL.78	16	木製品 構築部材	完形	長 幅 320.2 11.2	厚 12.0		芯持ちの丸材上部を長い平柄とし、下部は左右両面を斜めに削り端部を薄くする。表面は75～80cm間隔で階段状に浅く削る。	スギ	
第154図 PL.79	17	木製品 板		長 幅 23.7	厚 1.9		板目材で両端欠損。側縁は残存する可能性高い。図下方の端部付近の板内に鉄釘1カ所残る。釘は折れて板内のみ残る。	散孔材	
第154図 PL.79	18	木製品 構築部材	不詳	長 幅 11.2	厚 12.0		現存長188cmの芯持ち材を用いた角材で角を面取りする。表面から裏面に貫通する通し平柄孔を3カ所あける。下部は柄孔部分で折損する。	ヒノキ属	
第155図 PL.80	19	木製品 槌状製品	不詳	長 幅 16.5	厚 13.0		芯持ち材角材の1面を深さ6.0cmほど「V」字状に抉り槌状とする。上部は欠損し、現存長は704cm。	針葉樹	
第155図 PL.80	20	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.320 2.310	厚 重 0.105 3.00		寛永通宝。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏側も外縁・郭とも明瞭。永と通の字のおよび寶の字の間に鑄欠けの凹みが見られる。裏側外縁と郭の間一カ所に鑄溜りの突出がある。		
第155図 PL.80	21	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.524 2.492	厚 重 0.117 3.31		寛永通寶(背文)。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。		
第155図 PL.80	22	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.488 2.491	厚 重 0.110 3.18		寛永通寶(背文)。表側は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。表側には微小な鑄溜りの突起が見られるほか通と永の字の間に鑄欠けとみられる小孔が見られる。		
第155図 PL.80	23	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.469 2.493	厚 重 0.124 3.50		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。寛の字の上部は文字がつぶれ気味。		
第155図 PL.80	24	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.523 2.486	厚 重 0.106 3.08		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。		
第155図 PL.80	25	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.206 2.203	厚 重 0.091 1.60		寛永通寶(背元)。表側は外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も外縁・郭とも明瞭で斜め右下がりの平行な傷が全体についている。		
第155図 PL.80	26	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.182 2.184	厚 重 0.113 2.40		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。郭は正方形だが孔はバリが残るように凹凸する。		
第155図 PL.80	27	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.500 2.470	厚 重 0.111 2.92		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや平坦だが外縁・郭とも明瞭。通の字の上に鑄欠けによる三日月形の孔が開いている。		
第155図 PL.80	28	銅製品 銭貨	完形	縦 横 2.442 2.390	厚 重 0.130 3.53		寛永通寶(背文)。表側は外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も外縁・郭とも明瞭。外形はやや歪の形状で外縁の幅は場所により異なる。		

I区1号屋敷跡天明三年以前

第156図 PL.81	1	木製品 箸か	一部	長 径 0.5	—	—	朱塗り。両端欠損。	タケ類
第156図 PL.81	2	木製品 柄杓	合部上位欠損	径 高 16.5 —	—	—	側板合わせ部は2カ所で榫留め。底板は3枚で構成され、竹釘でつなぐ。底板は8カ所竹釘で留める。合わせ目の榫留め反対側にも榫留めが行われ、榫留め間に小孔が認められる。柄杓であろう。	側板 ヒノキ属 底板 ヒノキ属
第156図 PL.81	3	木製品 柄杓	合側板	径 高 10.3 10.7	—	—	底板欠損。側板合わせ部は1カ所で榫留め。榫留め部反対側に柄先端を通す小孔。小孔周囲に榫留めは認められない。榫留め部上位は欠損し、柄を通す孔は欠損。	ヒノキ属
第156図 PL.81	4	木製品 曲物	側板	径 高 16.7 8.8	—	—	側板の重なりは10cm以上あり、2カ所で榫止めを行う。側板重複部反対側にも榫止めが認められるが、板は1重で内面にゆとりを持った状態となる。内側に止めていたものがとれた可能性がある。	カラマツ
第156図 PL.81	5	木製品 曲物	底板1/2	長 厚 15.1 1.1	—	—	柁目材。割れ口に竹釘孔ない。周囲4カ所に竹釘孔。	ヒノキ属
第156図 PL.81	6	木製品 楔状	完形	長 幅 14.1 3.7	厚 2.4		断面長方形を呈した短い角材の一面を途中から斜めに削る。先端は若干潰れるが、めくれは認められない。	クリ
第156図 PL.81	7	樹皮製品 樹皮	完形	長 幅 10.8 4.5	厚 0.06		幹からはがした樹皮の丸まったもの。榫留めの材料か。	
第156図 PL.81	8	竹製品 端材か	完形	径 高 2.1	厚 1.5		竹を輪切りにした状態。他の加工は認められない。肉厚は1.5cmと厚い。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	高	厚			
第157図 PL.81	9	木製品 連歯下駄	完形	長幅 22.6 6.7 7.3	高 4.9 5.0			角形の連歯下駄で台の幅はつま先側が7.3cm、踵側が6.7cm。前後の高低差はほぼなく、高さは5cm。材は歯先側が樹芯側台部から歯先まで台形状を呈する。横緒孔は後歯後方に開ける。前後歯の間は横方向の削り痕残る。四隅は面取りを行う。	ヒノキ属
第157図 PL.81	10	木製品 連歯下駄	台部完	長幅 21.0 6.6 7.8	高 —			角形の連歯下駄で大の幅はつま先側が7.8cm、踵側が6.6cm。歯先は欠損していると考えられる。断面形は台部から歯先に向けて広がる台形を呈する。前後の歯間は横方向の削り痕が残る。この削り痕は1号屋敷跡薪場と同様であるが、長さは異なり、別個体である。	コナラ節
第157図 PL.82	11	木製品 削り下駄	完形	長幅 22.4 7.6	高 2.9 3.3			丸形の削り下駄で台中央部上面幅7.6cm。長さ22.4cm。高さはつま先側が2.9cm、踵側が3.3cm。前壺から横緒孔間を挟り、両端を削り残して歯とする。	クリ
第157図 PL.82	12	繊維製品 綱	一部	長径 — 0.8	—	—		乾燥状態で直径約8mmの綱。繊維束2条に撚りをかけて作成。	
第157図 PL.82	13	木製品 板	不詳	長幅 — 6.6	厚 0.8			板目材。一方の小口は残るが、両側縁は割れている可能性がある。小口付近に釘穴と推定される小穴1カ所。	ヒノキ属
第157図 PL.82	14	木製品 鉈台	完形	長幅 18.5 12.0	厚 10.4			芯持ち材。角材で3面が平坦、1面が曲面を持つ。曲面に直線的な刃物痕が多数残り、刃物痕間が割られる箇所も多い。鉈台として使用されたと考えられる。	ヒノキ属
第158図 PL.82	15	木製品 側板	完形	長幅 — 4.7 11.7	高 13.1			側板上部の幅は4.7cm～11.7cmと大きさにバラツキがある。高さは13.1cmと浅い。側板の厚さは上部で1.5cm、下部で1.2cm。上下端部は丸く仕上げる。外面のタガ痕不明瞭。内面下部の底板痕も不明瞭であるが、色調差から厚さ2cmほどの底板と推定される。側板に竹釘痕は認められない。	側板 ヒノキ属 底板 ヒノキ属
第158図 PL.83	16	木製品 端材か	一部欠	長幅 14.9 —	厚 6.1			樹心部分欠損。本来は直方体か。各面は平坦で目立つ加工痕はない。	マツ属複雑管束亜属
第158図 PL.83	17	木製品 端材か	完形	長幅 17.5 6.7	厚 4.3			割材。幅広側端部を尖らせるように大きく削る。狭い側は面取り状に削る。	クリ
第158図 PL.83	18	木製品 端材か	完形	長幅 21.0 5.3	厚 1.4			割材。割材成形段階の端材か。断面三角形。幅が狭い側の端部は若干潰れる。	クリ
第158図 PL.83	19	鹿 頭蓋骨と角	先端欠	長幅 — —	厚 —			頭骨の一部が残る左角。基部の切断痕は認められない。角欠損部は状態が悪く切断痕は不明瞭。実測図は頭部中央から見た図。	

IV区4号屋敷跡3号井戸・井戸北側

第159図 PL.83	1	肥前磁器 赤絵小碗か	口縁部1/2	口底 (7.4) —	高 —		/白/	外面に黒色で線を描き、赤、緑、薄紫の3色で花状の文様を小さく描く。貫入入る。	
第159図 PL.83	2	肥前磁器 染付筒形碗	口縁部一部欠	口底 6.8 3.6	高 5.3		/灰白/	外面格子内に縦線。高台脇1重圏線。口縁部内面2重圏線。底部内面1重圏線内に簡略化した五弁花。	
第159図 PL.83	3	肥前磁器 染付広東碗	口縁部1/4欠	口底 11.3 6.6	高 6.3 6.5		/白/	外面唇文。高台外面と口縁部内面2重圏線。高台内1重圏線内に不明跡。	
第159図 PL.83	4	肥前磁器 染付碗	完形	口底 9.6 3.8	高 5.0		/灰白/	外面5カ所にコンニャク判による菊花文。内面無文。高台内渦福字崩れ銘か。	
第159図 PL.83	5	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部1/4、底部完	口底 (10.2) 4.2	高 6.7		/灰/	体部外面上位以下回転篋削り。内面から体部外面下位鉛釉。	
第159図 PL.83	6	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口底 10.2 4.5	高 6.8 7.2		/灰白/	体部外面上位以下回転篋削り。内面から体部外面下位鉛釉。	
第159図 PL.83	7	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	口縁部1/4、底部完	口底 (16.5) 9.0	高 9.0 9.5		/灰白/	口縁部外面下位以下回転篋削り。片口1カ所貼付。内面から高台脇付近黄釉。底部内面目痕3カ所。体部外面4カ所、内面1カ所釉に指痕残る。	
第159図 PL.83	8	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部2/3、底部1/2	口底 28.7 10.0	高 10.4 11.0		/淡黄/	内面18本一単位のすり目。底部右回転糸切無調整。内外面錆釉。体部内面下位から底部内面使用により器表摩滅。底部外面周縁器表摩滅。	
第159図 PL.84	9	木製品 漆碗	1/2	口底 12.0 —	高 —			高台端部欠損。内外面朱漆。体部下位から底部器壁厚い。無文。口縁部に泥流こびりつく。	トチノキ
第159図 PL.84	10	木製品 漆碗か		口底 — —	高 —			厚さ0.2から0.4cmの碗か皿片。体部下位と底部片で内面朱漆、外面黒漆塗りで外面朱漆で丸に松皮菱状の文様。	ブナ 11と同一個体
第159図 PL.84	11	木製品 漆碗か		口底 — —	高 —			厚さ0.2から0.4cmの碗か皿片。体部下位と底部片で内面朱漆、外面黒漆塗りで外面朱漆で丸に松皮菱状の文様。	ブナ 10と同一個体
第159図 PL.84	12	木製品 箸か	一部	長径 — 0.4 0.5	—	—		朱塗り。一方がやや細く、箸と考えられる。	
第159図 PL.84	13	木製品 膳か	脚部	幅高 — 3.3	厚 1.8			上部側面で本体との蟻掛け吸付きで留める。透き漆塗りか。	ヒノキ属
第159図 PL.84	14	木製品 容器か	底板か天井	長短 7.6 4.0	厚 1.0			楕円形容器の蓋か底板。外面は朱漆で内面は白木状態。段差部分に黒漆の付着があり、外面の朱漆が途切れることから側板の存在が考えられる。	ケヤキ
第159図 PL.84	15	木製品 柄杓	合完形	径高 8.0 6.5	—	—		側板は榫留め。側板榫留め部に接して柄挿入部を設け、他方も榫留めで補強。底板は2カ所竹釘で留める。柄先端は側板から突き出る。	ニレ属

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				径高	厚	長			
第160図 PL.84	16	木製品 柄杓	合完形	径高 12.5 11.5	—	—		側板重複部を榫留めし、柄は榫留め部に接して挿入する。挿入部の他方は榫留めで補強する。柄先端部は側板から突きだし、この部分も榫留めで補強する。柄は竹釘で抜け留めを施す。柄は挿入部付近で欠損。底板裏面には○内に「柳」の焼印1カ所。	柄杓部 ヒノキ属 取っ手 ヒノキ属
第160図 PL.84	17	木製品 膳か	1/4	径高 (32.0) —	厚 0.8			厚さ8mmの底板に厚さ5mmの側板を周囲に回す。側板高さは不明。脚は1カ所残存。内外面透き漆か。	ヒノキ属
第160図 PL.84	18	木製品 構築部材	不詳	長幅 — 4.2	厚 2.7			鉄釘と推定される小孔、直線的に認められる。残存部中央付近に平掛け相継ぎが相欠き継ぎと考えられる加工がある。一方に平柄を作るが欠損する。	マツ属複雑管束亜属
第160図 PL.85	19	木製品 丸棒	一部	厚 3.3 3.9	長 —			芯持材を用いた棒。端部がやや細く、欠損部側がやや太い。整形は丁寧で表面に加工痕見えず平滑に仕上げる。	マツ属複雑管束亜属
第160図 PL.85	20	木製品 桶取手	取手	長幅 33.8 4.3	厚 1.4			板目材。上部はアーチ状を呈し、下部は直線的で下部中央に持手部分を削り込む。持手中央に刻み1カ所。両端は柄を作り、一方は竹釘で留める。	スギ
第160図 PL.85	21	木製品 桶側板	下部欠	長幅 — 7.9 7.5	厚 1.2			下部欠損。取手を通す部分の側板。上部に柄穴。側板内面の柄穴下部には1mmほど凹んだ取手の当たり痕が認められる。	ヒノキ属
第161図 PL.85	22	木製品 鴨居	完形	長幅 26.0 11.0	厚 5.7			芯持材。2条の深い溝があり、形状は鴨居であるが、両端に溝部分を削り落とした蟻形柄を作り出す。ヨキによると推定される整形痕が認められる。鴨居からの転用材の可能性あり。裏面縦軸中央と両側に欠き込みがある部分に墨打ちの十字線が認められる。	スギ
第161図 PL.85	23	木製品 建築材	完形	長幅 32.4 9.9	厚 9.7			芯持材。平坦面にヨキによると推定される整形痕。両端に掛け合わせ柄。掛け合わせ柄の長い側に平柄継ぎの柄穴。平坦面の方に「八上」の屋号を刻む。屋号に接して小さく浅い平柄穴。深さは9mmから13mmで中央が深い。	クリ
第161図 PL.85	24	木製品 板	一部	長幅 — —	厚 1.4			厚さ1.4cmの板。板目材。一方の小口のみ残存で幅と長さは不明。	マツ属複雑管束亜属
第161図 PL.86・ 87	25	木製品 不詳	一部	長幅 — —	厚 —			角材端部片で端部に継ぎの加工が残る。角材の割れ口には袋状の布が付着していた。材の整形面には刃痕と推定される直線的な条線が複数認められる。芯持ち材か。	クリ
第162図 PL.85	26	木製品 桶	側板	長幅 — 7.8	厚 1.1			柁目材。側板上部片。側面は斜めに削る。	スギ
第162図 PL.86	27	木製品 柄杓柄	2/3	長幅 — 2.3	厚 1.4			板目材の断面長方形角材。整形が丁寧で形状から柄杓柄と考えられる。先端付近欠損。	ヒノキ属
第162図 PL.86	28	木製品 柄杓柄	完形	長幅 62.9 0.6 2.2	厚 0.6 1.2			板目角材の一端を丁寧に尖らせる。柄杓合部を留める竹釘2カ所痕残る。竹釘は貫通しない。	ヒノキ属
第162図 PL.86	29	木製品 建具	破片	長幅 — 3.9	厚 3.8			角材に2.7～3.0cm×0.7～0.9cmの長方形柄穴を開け、棧木状の長方形板を通す。右面の棧木は明らかに折れるが左面は平坦であり、折損でない可能性がある。右面、表側は深さ、幅ともに5mmの断面「コ」時状の溝を設ける。折れ曲がった側の端部に柄穴が存在した可能性が高い。	
第163図 PL.87	30	木製品 端材か	完形	長幅 34.5 19.0 29.5	厚 5.0 6.1			台形状を呈し、側縁の一方は年輪に沿って斜めとなる。裏面は部分的に鑿で彫り込むが意図不明。	
第163図 PL.87	31	木製品 曲物底板	一括 完形	径 14.2 14.8	厚 0.6 1.0			厚さの差がある1枚板の底板で側面を細かく削って円形に整形。片面に○内に「泉」の焼印。	マツ属複雑管束亜属
第163図 PL.87	32	木製品 杓文字	一括 一部欠	長幅 18.9 2.4 8.0	厚 0.4 0.7			柄が若干短い、欠損している可能性もある。すくう側に向かって緩く湾曲。右利きで使用したためか、図右下の張り出しが少ない。表面に黒漆残る。	ホオノキ
第163図	33	木製品 板	一括 一部	長幅 — 9.8	厚 0.5			一方の短辺は残存するが、測縁は割れている可能性がある。やや斜めの柁目材。	スギ
第163図 PL.87	34	銅製品 薬缶	一部欠損	長幅 19.4 14.3	高重 10.2 255.59			銅製の薬缶。本体は薄くたき出しによる成型と見られる。注ぎ口は別づくりで、側面に孔をあけ内側から差し込み取り付け。ツルは前後2カ所に鎮めした金具上部に取り付ける。蓋もたたき出し成型で中央に宝珠状の持ち手を花形の台座とともに取り付けられている。	
第164図 PL.88	35	鉄製品 鍋	破片	長幅 29.2 (口)	高重 16.6 1221.84			推定直径約30cm・高さ14cm程の鉄鍋。底部外側3カ所に高さ2cm程の脚を持つ。外面の一部には黒色の煤が残存する。釣り手部分内側には3カ所の丸い凹みが見られるが、外側に貫通するものは中央の1カ所のみ。	
第165図 PL.88	36	鉄製品・木 製品 鍋・蓋	一部欠損	長幅 24.5 (口)	高重 10.6 1600.38			鉄製鍋に木製の蓋がされた状態で出土する。鍋は上部に2カ所が破損し吊り手部分は残存しない。蓋は円形の丸い板目材に溝を掘り山形の持ち手を取り付ける。鍋内部は土砂が詰まり食物残渣等は確認できない。	
第165図 PL.88	37	鉄製品 鍋・つる	破片	長幅 13.8 4.3	高重 1.0 24.33			鉄製鍋のつる。断面は長方形で鍋側では?状に曲がる、反対側の端部は劣化破損する。	
第165図 PL.88	38	鉄製品 鍋・つる	破片	長幅 13.0 0.8	高重 0.8 9.27			鉄製鍋のつる。断面は長方形で鍋側5cm付近で90°ねじりを加え端部はしの字状に曲がる。反対側の端部は劣化破損する。	
第165図 PL.88	39	鉄製品 包丁	破片	長幅 20.9 8.8	高重 4.0 378.93			鉄製の包丁で柄部分には錆化した木質が一部残存する。刃は薄く幅広いが、厚く硬い錆に覆われ本体は脆弱なため詳細は不明。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦横	厚	重量			
第165図 PL.88	40	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.301 2.302	厚 0.180 1.59		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。外縁は劣化破損により凹凸が見られる。	
IV区4号屋敷跡6号溝									
第166図 PL.89	1	木製品 構築部材	完形	長幅	163.0 13.5	厚 14.5		貫通する平柄穴と貫通しない各柄穴を直交方向にあける。芯持ち材の四方を削り角材とする。	クリ
第166図 PL.89	2	木製品 構築部材	不詳	長幅	— 8.5	厚 9.0		貫通しない平柄穴が2カ所あり、うち1カ所で折損する。現存長217cm。芯持ち材。下端は相欠き接ぎ状に削る。	クリ
第167図 PL.90	3	木製品 構築部材	完形	長幅	225.5 14.0	厚 10.5		表面に4カ所の平柄穴と6カ所の浅い角柄穴をあける。下端は前者と直交方向に通し平柄穴を1カ所あける。	クリ
第167図 PL.90	4	木製品 構築部材	一部欠	長幅	— 15.2	厚 13.6		柄部先端付近欠損。現存長136.6cm。上端は表側に偏った肩付き平柄で、下端は平柄が基部付近で欠損する。芯持ち材の2面を平坦に整形するが、同一面を全体に平坦にしていない。上部には貫通しない平柄穴をあける。	クリ
第166図 PL.89	5	石製品 火打石(原石)	完形	長幅	6.8 5.9	厚 5.3 201.9	チャート	右側面から裏面にかけて自然面が多く認められ円礫を利用する。表面は多くの剥離面で構成されるが稜上に明確なつぶれや微細剥離痕は認められない。火打石の原石(素材)と判断した。	
IV区4号屋敷跡南西部									
第167図 PL.90	1	木製品 敷居端材	一部欠	長幅	10.9 —	厚 2.4		元は敷居材であるが、両端を鋸で切断。建築時か再利用時の切り落としてであろう。正面の年輪帯は節により乱れる。	スギ
第167図 PL.90	2	木製品 板か	一部	長幅	— —	厚 0.4		柁目板の一部か。端部に小円孔1カ所。	マツ属複雑管束亜属
第167図 PL.90	3	木製品 曲物	2/3	径高	— —	— —		出土状態から側板と底板はセットと考えられるが、側板が割れて広がっているため、個別に測図した。底板は径15.5cm、厚さ0.7cmの柁目板。3カ所に竹釘残存。裏か内面に「新たなね八入」を焼火箸状のもので書く。側板は厚さ0.5cmの板目材を使用し、1カ所で榫留。出土時には内部に径0.6cmの中空植物茎が長さ8cmほどに切りそろえられた状態で出土。側板底部側には竹釘孔が残る。	側板 ヒノキ属 底板 ヒノキ属
第167図 PL.90	4	木製品 板	完形	長幅	18.5 6.0	厚 0.7		樹芯付近の板目材。表面調整が丁寧で2方の角を面取り。製品の一部の可能性高い。	ヒノキ属
第167図 PL.90	5	木製品 敷物	一部欠	長幅	— —	厚 0.5		直径3mmから5mmの草本性茎を糸で編む。現状で2重に折りたたまれた状態。	
第167図 PL.90	6	銅製品 キセル・雁首	一部欠損	長幅	5.9 1.6	高重 1.5 7.30		銅製のキセル雁首で羅宇の木質が2.5cm程残存する。羅宇表面の一部には赤褐色の被膜(漆か)が見られる。雁首本体は硬い鍍に厚く覆われ本体は脆弱なため詳細は不明。	
第167図 PL.90	7	石製品 硯	ほぼ完形	長幅	13.8 5.2	厚重 2.5 294.1	デイスaito	硯側、硯背、縁は平坦で滑らかである。丁寧に研磨整形される。	
IV区4号屋敷跡10号石垣									
第167図 PL.90	1	製作地不詳 磁器 染付碗	底部完	口底	— 3.6	高 —	/白/	型紙絵付け。底部内面1重圏線のみ手描き。	近現代。
IV区5号屋敷跡10号建物									
第168図 PL.91	1	木製品 端材か	2号施設 完形	長幅	15.2 12.8	厚 7.8		右側面に幅2.6cm、深さ2.0cmの溝を掘る。建築材の端材であろう。	
第168図 PL.91	2	木製品 端材か	槽場 完形	長幅	18.5 20.0 13.7 14.0	厚 8.0		直方体と呈する。ヨキか手斧による整形痕が認められる。一方の側面に鉋状の刃物痕残る。	
第168図 PL.91	3	木製品 敷居	槽場 完形	長幅	13.0 14.1	厚 5.5		敷居の端材か。1面に深さ4mmの溝を2条切る。測縁端部を鑿状工具で斜めに削る。小口はきれいに切断される。	ミズキ
第168図 PL.91	4	木製品 柱	2号施設 完形	長最大径	4.0 5.6	— —		周囲を細かく削って整形。削り痕が全体に残り、使用痕は認められない。	スギ
第168図 PL.91	5	木製品 男柱	槽場 不詳	長幅	— 40.5	厚 36.5		現存長165cm。芯持ち材で基礎梁を設けた柱。基礎梁は角柄孔に芯持ち材の角材を通して設置。地中部は残るが、地上部は残らない。上部は鋸による切断されるが、切断時期は不詳。	
第169図 PL.92	6	石製品 礎石	A1	長幅	55.0 79.5	厚重 40.0 計測不能	粗粒輝石安山岩	上側面は自然面であり巨大な円礫を利用する。裏面、下側面、左右両側面は打割面で構成される。表面に縦約35cm×横約20cmの矩形の平坦面を作出する。平坦面には平ノミ状の工具痕が認められ、中央部に一辺約5cm深さ約4cmの矩形の孔が認められる。孔の内面は丁寧に整形される。	
第170図 PL.92	7	石製品 礎石	A4	長幅	56.0 63.0	厚重 38.0 計測不能	粗粒輝石安山岩	底面から下側面にかけては自然面が大きく残り巨大な円礫を利用する。上側面と左右両側面は大きな打割面で構成される。表面には平坦面が作出され平ノミ状の工具痕がわずかに認められる。表面の中央には一辺約5cm深さ約3cmの矩形の孔が認められる。孔の内面は丁寧に整形されている。	
IV区5号屋敷跡12号建物									
第171図 PL.93・94	1	木製品 桶	上部欠	長短	41.0 31.5	高 —		底板は板目材の一木で長径39cm、短径29.5cm。側板は厚さ1.0cmで底板部は0.7cmとやや薄い。側板は板目材23枚で構成。側板が直線的な部分の対角線上に2カ所に墨書。1カ所は「中湊/長居」。もう1カ所は「△(記号)/大」。側板外面の2カ所にタガ痕。	①竹類②スギ 側板 マツ属 複雑管束亜属 底板 マツ属 複雑管束亜属

IV区6号屋敷跡11号建物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第172図 PL.95	1	製作地不詳 磁器 染付碗	1/2	口底 2.9	高 4.9	厚 2.9	/白/	外面ゴム印版。内面無文。	近現代。
第172図 PL.95	2	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.490 2.499	厚 0.104	重 2.13		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。波打つようにわずかに変形する。	
第172図 PL.95	3	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.44 -	厚 0.129	重 2.92		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。寛から通の外縁は折れ曲がりちぎれたように破損する。	
PL.95	4	植物 壁芯材	一部	長幅 -	厚 0.4	重 1.0		蔓性植物蔓。直径4mmから1cmの蔓と推定される。	写真のみ
PL.95	5	石製品 竈石		長幅 70.0 30.5	厚 19.5	重 59200.0	粗粒輝石安山岩	表面、左右両側面、上部小口面は比較的丁寧な整形されている。表面と上部小口面には平ノミ状の工具痕が認められる。裏面から下部小口面にかけては大きな打割面で構成される。	写真のみ
PL.95	6	石製品 竈石		長幅 53.0 28.0	厚 28.0	重 53400.0	粗粒輝石安山岩	表面、左側面、上部小口面は丁寧な整形されており平ノミ状の工具痕が明瞭に認められる。裏面、右側面、下部小口面は大きな打割面で構成される。	写真のみ

IV区6号屋敷跡11号建物西側

第172図 PL.95	1	肥前磁器 染付小碗	完形	口底 6.9 2.6	高 3.3 3.5	厚 3.3 3.5	/灰白/	外面に笹文。高台端部無釉。	
第172図 PL.95	2	瀬戸・美濃 陶器 小碗	完形	口底 6.4 3.0	高 4.0	厚 4.0	/灰白/	内面から高台脇灰釉。貫入入る。	
第172図 PL.95	3	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部1/3欠	口底 6.4 2.9	高 2.9	厚 2.9	/灰白/	内面から高台脇灰釉。貫入入る。	
第172図 PL.95	4	瀬戸・美濃 陶器 小碗	体部一部欠	口底 6.4 2.9	高 3.9	厚 3.9	/灰白/	内面から高台脇灰釉。貫入入る。	
第172図 PL.95	5	瀬戸・美濃 陶器 円盤状製品 (碗)	完形	径底 6.1 5.0	高 1.7	厚 1.7	/灰/	飴釉碗の高台脇片を打ち欠いて円盤状に整形。	二次加工。
第172図 PL.95	6	美濃陶器 甕碗	口縁部1/7欠	口底 7.5 4.0	高 6.1	厚 6.1	/灰/	筒型。体部外面回転施文具による施文。内面から口縁部外面鉄釉。体部外面から高台内鉄化粧。高台端部無釉。	
第172図 PL.95	7	瀬戸・美濃 陶器 柳筒形碗	一部欠	口底 7.7 4.5	高 6.3	厚 6.3	/灰黄/	口縁部から体部外面の一方に鉄絵具による枝垂れ柳。内面から高台脇灰釉。削出高台。	
第172図 PL.95	8	瀬戸・美濃 陶器 柳碗	口縁部1/8、底部 1/4	口底 (12.3) (4.4)	高 5.9	厚 5.9	/灰白/	深い平碗形。口縁部尖り気味。外面鉄絵具による枝垂れ柳。内面から高台脇灰釉。粗い貫入入る。	
第172図 PL.95	9	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部から体部 1/2欠	口底 (9.6) 4.7	高 6.7	厚 6.7	/淡黄/	外面口縁部以下回転甕削り。高台回転横撫。内面から高台脇飴釉。	
第172図 PL.95	10	瀬戸・美濃 陶器 柳碗か	口縁部1/2欠	口底 (12.2) 4.2	高 6.1	厚 6.1	/灰白/	深い平碗形。口縁部尖り気味。残存部無文。内面から高台脇灰釉。貫入入る。	
第172図 PL.95	11	瀬戸・美濃 陶器 灯火具	完形	口底 4.6 3.8	高 7.7	厚 7.7	/灰白/	蓋受け部内面と端部上面の釉拭う。底部内面に粘土を貼付けた後、固定孔をあける。蓋受け部外面から高台外面付近錆色の鉄釉。内面は錆釉状に薄く施釉。高台脇に直径4.5cmの重ね焼き痕があり、蓋受け部の径と一致する。	
第172図 PL.95	12	肥前磁器 皿	完形	口底 13.0 7.3	高 3.6	厚 3.6	/灰白/	口縁部から体部内面半菊文。底部内面2重圏線内コンニャク判による五弁花。口縁部から体部外面唐草文。高台内1重圏線内に不明銘。	
第172図 PL.95	13	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	完形	口底 12.6 6.9	高 5.8	厚 5.8	/淡黄/	内面から高台外面付近黄釉。底部内面目痕3カ所。	
第172図 PL.95	14	瀬戸・美濃 陶器 蓋	完形	口底 7.2 7.6 4.2	高 2.0 2.7	厚 2.0 2.7	/淡黄/	平面形は楕円形に歪む。下部外面右回転糸切無調整。つまみ部は盛り上がる程度。無釉。	
第172図 PL.95	15	木製品 不詳	一部	長幅 -	厚 0.65	重 0.65		銅製金具付き製品。金具部分を切り欠いて他の板を組み接ぐ。	針葉樹
第172図 PL.95	16	木製品 不詳	一部	長幅 -	厚 0.65	重 0.65		銅製金具付き製品。金具部分を切り欠いて他の板を組み接ぐ。	針葉樹
第173図 PL.96	17	銅製品 柄鏡	一部破損	長幅 29.6 20.2	高 2.5	重 543.94		直径20.5cm程の銅製柄鏡。鏡背面には松にツル・亀の模様を配し左よりに「藤原吉良」の文字が記されている。柄部分には幅3mm程のつる植物が螺旋状にまかれている。鏡面は白金色に輝きスズメッキが施されているとみられる。鏡背面の中央寄りに和紙と見られる植物繊維が付着錆化残存する。鏡は中央付近で斜めに割れ変形する。	4区11号建物西側に属する
第173図 PL.96	18	木製品 鏡箱	底板片か	長幅 -	厚 0.4	重 0.4		両面に赤い半透明の薄い塗彩。漆か。周縁に側板痕と考えられる塗彩が途切れる範囲がある。7号屋敷跡13号建物4に似るが、接合しない。柄鏡下の出土であり鏡箱と考えられる。	ヒノキ属?

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	高			
第173図 PL.96	19	鉄製品 鍋	破片	長 幅	9.2 10.0	高 重	0.8 130.62	鑄鉄製鍋の釣り手部分破片。中央上部に1左右に1か所ずつの計3所に丸い孔を持つ。孔は外側直径6mm内側直径9mmと内側が広い。	
第173図 PL.96	20	鉄製品 不詳	破片	長 幅	10.5 11.8	高 重	2.2 207.05	鑄造鉄製品破片。厚さ3～4mmで緩やかに湾曲する。端部は破損後錆化し全体形状は不明。表面の錆面に碗の破片と見られる赤色漆膜破片が付着残存。褐色の被膜を伴う木材痕が錆化残存する。	
第173図 PL.96	21	鉄製品 不詳		長 幅	35.7 7.9	高 重	5.0 388.62	幅2.2cm厚さ0.8cmの厚板状の鉄製品。途中に0.6cm角の孔を持つ。端部付近で直角に曲がり6cm程で破損する。表面に沿って斜めに板状の木質痕が付着するが鉄製品とは直接かかわらないと画が得られる。	
第173図 PL.96	22	鉄製品 箍	破片	長 幅	25.7 34.1	高 重	3.9 675.37	幅2.5cm厚さ0.4cmの帯状鉄製品で内側に湾曲する。内側には鉄製品と直行する木質痕が縦に並ぶように残存することから樽または桶の箍と考えられる。	
第173図 PL.96	23	鉄製品 鎌	一部破損	長 幅	42.0 15.3	高 重	6.0 1048.01	鉄製の鎌で柄装着部で折れ曲がる。柄装着部に沿って柄の材と思われる、広葉樹材の木質が錆化残存する。	
第174図 PL.97	24	鉄製品 茶釜	一部欠損	長 幅	14.0 (口)	高 重	19.0 1569.3	直径23cmの鑄鉄製茶釜。釣り手取り付け部の一つは破損修復のためか灰白色の金属で後付けされ、鉄製のつる破片が残存する。反対側の釣り手部分は鑄造で基部から破損錆化している。本体は錆で脆弱化しているが、本体側外面は黒色で平滑な表面が残存する。	
第174図 PL.97	25	鉄製品 鍋	破片	長 幅	26.6 14.5	高 重	0.5 523.98	鑄鉄製鍋の破片。外面は黒色で一部煤と見られる付着物もある。底部は抜けたように破損する。	
第174図 PL.97	26	鉄製品 鍋	破片	長 幅	20.2 19.4	高 重	6.6 511.47	鑄鉄製鍋の底部分の破片。外面は黒色で一部煤と見られる付着物も見られる。底部二か所に脚が残存する。	
第175図 PL.98	27	鉄製品 鍋	破片	長 幅	32.4 32.1	高 重	9.7 1555.41	鑄鉄製鍋の底部分の破片。外面は黒色で一部煤と見られる付着物もある。底部は三か所に脚を持つ。	
第175図 PL.98	28	銅製品 キセル・吸 い口	ほぼ完形	長 幅	9.9 1.0	高 重	1.0 8.41	キセルの雁首で茶褐色の羅字の木質が残存する。吸い口側と雁首側は別つくりで、中央の段の部分で接合する。表面は緑青に覆われるが一部に褐色および黒色の平滑面が見られる。	
第175図 PL.98	29	銅製品 キセル・雁 首	一部欠損	長 幅	7.5 1.3	高 重	1.4 9.34	キセルの雁首。吸い口側端部には、赤褐色に塗られた羅字の木質が残存する。表面は劣化により荒れてメッキ・装飾等は確認できない。火皿は破損し黒色のやに状残渣が残存する。	
第175図 PL.98	30	銅製品 キセル	破片	長 幅	2.6 1.0	高 重	1.1 2.10	円筒形のキセルの破片。両端が劣化破損するため吸い口か雁首かの判定はできない。内部には灰が残存する。	
第175図 PL.98	31	銅製品 キセル・雁 首	破片	長 幅	4.8 1.2	高 重	1.4 7.11	キセルの雁首。内部は空洞で羅字等は残存しない。火皿はつけ根で破損し残存しない。上部に裂けたような亀裂が入る。	
第175図 PL.98	32	鉄製品 鍋・つる	破片	長 幅	8.4 3.2	高 重	1.3 13.42	鍋のつる破片。断面長方形で下側に向かい幅を減じ端部ではしの字状に曲がる。上端は劣化破損する。	
第175図 PL.98	33	金属製品 一分判金形 貨幣模造金 属製品	ほぼ完形	縦 横	1.786 1.047	厚 重	0.166 2.26	一分判金の表面は上部に扇形内に桐文、下部に桐文はあるが、本製品は両方が桐文のみである。また、桐文間には左から右に「一分」の文字が鋳出されるが、本製品は右から左に「一分」と鋳出している。裏面には一分金「光次」字は花押なのに対し、本製品は「戒次」字に花押である。最初の文字は明らかに「戒」であり、二番目の文字は「にすい」ではなく「てへん」または「おうへん」となっている。文字に「戒」が用いられていることから、「えびす」銭的な製品の可能性もある。	
第175図 PL.98	34	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.319 2.327	厚 重	0.111 2.73	寛永通寶。表側はややや彫は浅いが外輪・文字・郭とも明瞭。裏側はやや平坦だが外輪・郭とも明瞭。	
第175図 PL.98	35	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.229 2.304	厚 重	0.115 2.93	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。平坦で外輪・郭とも不明瞭。	
第176図 PL.98	36	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.242 2.243	厚 重	0.147 3.11	寛永通寶。表側はややや彫は浅いが外輪・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で鉄さびに覆われる。	
第176図 PL.98	37	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 横	2.332 2.291	厚 重	0.117 1.78	寛永通寶。表・裏側とも彫は浅いが外輪・文字・郭とも明瞭だが、通の字は硬い錆に覆われ不明瞭。	
第176図 PL.98	38	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.364 2.347	厚 重	0.131 3.40	寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが裏側は一部鉄さびに覆われ不鮮明。	
第176図 PL.98	39	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.116 2.168	厚 重	0.110 2.35	寛永通寶。表・裏側とも彫深いが文字はやや明瞭。通の字および寛と寶の間に鋳けの孔が見られる。	
第176図 PL.98	40	銅製品 銭貨	ほぼ完形	長 幅	3.3 5.1	高 重	12.7 482.13	銅製の寛永通寶96枚が連なり出土する。銭は錆により癒着する。このうち分離して表裏が観察出来るの銭は8枚で四文銭(11波)。	96枚癒着
第176図 PL.98	41	銅製品 銭貨	ほぼ完形	長 幅	3.7 7.4	高 重	14.0 494.97	銅製の寛永通寶96枚が連なり出土する。銭は錆により癒着する。このうち癒着せず表裏が観察可能な銭は四文銭9枚で11波7枚と21波2枚である。側面に密着する形で平織の布が錆化付着する。	96枚癒着
IV区6号屋敷跡18号石垣									
第176図 PL.99	1	鉄製品 斧	ほぼ完形	長 幅	12.7 8.1	高 重	3.8 612.40	柄の木質(材はコナラ節)が残存する鉄製斧。片方の側面には放射状に並ぶ6本の深く細長い溝を持つ。反対面にも2本の溝が見られるが一部表面が劣化消失するため総本数は不明。頭部分のかどは刃先側にめくれ頭部はやや丸みを持つ。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第176図 PL.99	2	鉄製品 鑿	0 一部欠損	長 幅	14.2 1.9	高 重	1.4 82.41	0	先端幅1.8cm程の平鑿で先端部は劣化破損する。柄部分に木質痕跡は見られない。
第176図 PL.99	3	鉄製品 鍋・つる		長 幅	18.1 3.9	高 重	1.2 35.66		断面長方形の板状で端部から8cm程で90°捻じれながら曲がる。端部は細く絞りし字状に折り曲げる。反対側は劣化破損する。
第176図 PL.99	4	鉄製品 不詳	破片	長 幅	27.9 2.4	高 重	4.5 228.39		厚さ0.5cm幅2cmの厚板状鉄製品で中央付近に四角い孔を持つ。端部から27.5cmで直角に曲がり、そこから4cm程では破損変形する。10号溝22と同形状の鉄製品が変形破損したものの可能性もある。

IV区7号屋敷跡13号建物

第177図 PL.99	1	肥前磁器 染付碗	底部3/4	口 底	— 4.0	高 —	— —	/灰白/	外面染付。高台内不明銘。	
第177図 PL.99	2	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部1/4、底 部1/3	口 底	(10.0) 4.5	高 —	7.0	/灰/	外面山水文か。内目無文。高台端部無釉。二次被熱で釉は著しい二次被熱。光沢なく表面はざらつきが著しい。	著しい二次被熱。
第177図 PL.99	3	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部から体部 1/3	口 底	(12.3) —	高 —	—	/黄灰/	外面中位以下回転削り。内外面灰釉。	
第177図 PL.99	4	木製品 容器	蓋か底板片	径 —	—	厚 —	0.5		透き漆塗りか。底板周囲に側板痕残る。裏面は剥離部分多いが、漆一部残る。	ヒノキ属
第177図 PL.99	5	石製品 唐白		長 幅	54.0 56.5	厚 重	37.0 計測 不能	粗粒輝石安山岩	側面全体と底面は打割面で構成される。表面の縁は丁寧に整形されておりわずかに平ノミ状の工具痕が認められる。白内面は丁寧に整形されており底部付近には摩滅が認められる。	

IV区7号屋敷跡13号建物下面

第177図 PL.99	1	弥生土器 壺	胴部片	口 底	— —	高 —	—	円磨度の進んだ多量の珪質乳白色岩片礫・粗砂を含むやや粗雑な胎土。	櫛描羽状文を器面全体に施す。内外面共に被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	水神平式。
----------------	---	-----------	-----	--------	--------	--------	---	----------------------------------	-------------------------------------	-------

IV区7号屋敷跡水場

第178図 PL.100	1	石製品 白		径 高	76.0 51.0	厚 重	— 計測 不能	粗粒輝石安山岩	側面部と底面は打割面で構成される。底面には径約5cmの穿孔途中の孔が認められる。側面部の上方には棒状の工具痕が認められ比較的丁寧に整形される。表面の縁は丁寧に整形されており平ノミ状の工具痕がわずかに認められる。縁の一部には幅7cm程度の溝が作出される。白の内面全体には棒状の工具痕が認められ底部付近には径約5cmの孔が認められる。	
-----------------	---	----------	--	--------	--------------	--------	---------------	---------	---	--

IV区7号屋敷跡水場2号井戸

第179図 PL.100	1	肥前磁器 染付猪口	1/3	口 底	(7.0) (5.2)	高 —	6.1	/白/	外面梅樹文。高台端部のみ無釉。	
第179図 PL.100	2	瀬戸・美濃 陶器 腰鎗碗	口縁部一部欠	口 底	8.7 3.7	高 —	5.0	/灰白/	口縁部外面螺旋状の凹線4条。内面から口縁部外面鉄釉、口縁部外面以下から高台内鉄釉。高台端部無釉。	
第179図 PL.100	3	製作地不詳 磁器 碗	底部2/3	口 底	— 4.0	高 —	—	/灰白/	底部内面の1重圏線を除き型紙絵付け。	近現代。

IV区8号屋敷跡16号建物

第179図 PL.100	1	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	口縁部1/6、底 部1/3	口 底	(10.2) (3.6)	高 —	5.3	/白/	外面葵文。口縁部内面2重圏線。底部内面1重圏線内に不明文様。高台外面斜めに削る。	
第179図 PL.100	2	肥前陶器 染付碗	口縁部一部欠	口 底	9.7 4.0	高 —	5.5	/灰白/	外面唐草文。内面無文。高台内「大明」崩れ銘か。	
第179図 PL.100	3	肥前陶器 陶胎染付碗	底部3/4	口 底	— 4.7	高 —	—	/灰白/	体部外面染付。高台端部無釉。内面無文。貫入入る。	
第179図 PL.100	4	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口 底	8.4 3.7	高 —	5.7 6.0	/灰黄/	丸碗。口縁部外面横線。内面から口縁部外面鉄釉。外面口縁部下から高台内貫入の入る鉄釉。体部外面鉄絵具による円形文。高台端部無釉。	
第179図 PL.100	5	美濃陶器 鎧碗	口縁部1/8、底 部3/4	口 底	(8.0) 4.3	高 —	6.1	/灰白/	筒形の鎧碗。体部外面回転施文具による施文。内面から口縁部外面鉄釉。体部外面から高台内鉄化粧風の薄い鉄釉。高台端部無釉。	
第179図 PL.100	6	瀬戸・美濃 陶器 腰鎗碗	口縁部1/3、底 部完	口 底	(9.7) 4.0	高 —	6.1	/灰白/	口縁部外面下3条の螺旋状凹線。内面から口縁部外面貫入の入る鉄釉。凹線部から高台内鉄釉。高台端部無釉。	
第179図 PL.100	7	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口 底	10.1 4.7	高 —	6.7 7.0	/灰黄/	内面から体部外面下位付近鉄釉。釉厚にムラ多い。	
第179図 PL.100	8	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口 底	10.5 11.0 5.2	高 —	6.2	/灰白/	口縁部歪む。内面から体部外面下位鉄釉。貫入入る。	
第179図 PL.100	9	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部2/3、底 部完	口 底	12.7 6.7	高 —	8.8 9.0	/灰白/	大型の碗。体部上位内傾。内面から体部外面下位付近鉄釉。貫入入る。	
第179図 PL.101	10	瀬戸・美濃 陶器 輪花皿	口縁部一部欠	口 底	18.5 8.3	高 —	4.5 5.3	/淡黄/	口縁部2カ所を内側に凹ませる。高台基筒底状。内面から体部外面下位付近鉄釉。貫入入る。目痕3カ所。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第179図 PL.101	11	瀬戸・美濃 陶器 皿	口縁部1/3、底 部完	口底 (12.6) 6.0	高 3.4		/灰白/	底部内面周縁小さい段差。底部内面呉須を用いた型紙摺り による梅折枝文。内面から高台内灰釉。貫入入る。高台端 部付近無釉。	御深井製品。
第179図 PL.101	12	瀬戸・美濃 陶器 皿	2/3	口底 — 5.4	高 2.8 3.3		/灰白/	木瓜形の皿。内面から高台脇付近灰釉。貫入入る。	御深井製品。
第179図 PL.101	13	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	片口欠損	口底 16.3 16.7 8.6	高 10.0		/淡黄/	体部外面上位以下回転篋削り。口縁部外面1条の凹線。内 面から高台脇付近黄釉。底部内面目痕3カ所。片口部欠損。	
第180図 PL.101	14	瀬戸・美濃 陶器 德利	体部1/2、底部 完	口底 — 8.0	高 —		/淡黄/	体部外面中位1条の凹線。外面胎釉施釉後に高台脇以下拭 う。体部に白濁した灰釉流れる。尾呂德利。	
第180図 PL.101	15	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部1/4	口底 (26.0) —	高 —		/灰白/	内面10～12本一単位のすり目。口縁部肥厚。内外面錆釉。	
第180図 PL.101	16	木製品 桶	側板上部	長 幅 — 5.6 6.1	厚 0.9 1.4			厚みのある桶側板で柁目材。上部外面にはタガ痕残る。タ ガ痕上部両測縁に竹釘痕。	ヒノキ属
第180図 PL.101	17	木製品 桶	側板	長 幅 15.0 8.8 9.3	厚 1.0 1.2			高さ15.0cmの浅い桶もしくは盥の側板。底板部分は幅約1.5 cmが浅く窪む。また、外面中央は幅約1.8cmのタガ痕が浅 く窪む。側板の下部は上部に比して幅狭く薄い。	スギ
第180図 PL.101	18	銅製品 キセル・雁 首	ほぼ完形	長 幅 4.8 1.8	高 重 2.2 9.50			キセルの雁首。吸い口側は直径約1cmの円筒状で約0.5mm間 隔で円周を回る刻みが全体に施される。	
第180図 PL.101	19	銅製品 キセル・雁 首	ほぼ完形	長 幅 6.5 1.5	高 重 2.3 9.19			キセルの雁首。表面は銅錆および鉄さびに覆われ表面の メッキや装飾加工等は確認できない。	
第180図 PL.101	20	銅製品 キセル・雁 首	破片	長 幅 1.7 1.7	高 重 1.8 5.79			キセル雁首の火皿付近の破片。火皿は側方から力を受けた ようにつぶれやや変形する。火皿内部には泥錆とともに煙 草の残さと思われる炭化物が残存する。	
第180図 PL.101	21	銅製品 キセル・雁 首	破片	長 幅 3.6 1.2	高 重 0.5 2.94			キセル雁首の火皿付近の破片で、表面には植物痕が錆が付 着し本体は脆弱で詳細は不明。	
第180図 PL.101	22	銅製品 キセル・吸 い口	破片	長 幅 7.2 0.9	高 重 0.9 4.80			キセルの吸い口。雁首側内部には羅宇の木質が残存する。 吸い口側端部は劣化破損する。表面は硬く錆・泥が付着し 本体は脆弱なためメッキ・装飾等は確認できない。	
第180図 PL.101	23	銅製品 キセル・雁 首がん	破片	長 幅 4.1 1.1	高 重 1.1 4.04			キセルの雁首部分と見られる破片。吸い口側および火皿側 端部とも劣化破損する。本体は円筒形で雁首側でなだらかな カーブを描くようにくびれる。表面は劣化により荒れて いてメッキ・装飾加工等は確認できない。	
第180図 PL.101	24	鉄製品 釘	破片	長 幅 2.8 1.1	高 重 0.6 1.45			断面ほぼ正方形の角釘破片。しの字ように曲がり両端は 劣化破損する。	
第180図 PL.101	25	銅製品 不詳	破片	長 幅 5.6 5.6	高 重 1.1 8.48			外形5.5cmの環状の銅製品で上端はわずかに外側に広がる。 下側は劣化破損する。	
第180図 PL.101	26	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 横 — —	厚 重 0.177 2.57			寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も 彫深く外縁・郭とも明瞭。劣化が著しく破損する。	
第180図 PL.101	27	銅製品 銭貨	完形	縦 横 — —	厚 重 0.125 1.19			寛永通寶。表側は彫深く外縁・郭とも明瞭だが文字は錆化 によりやや不明瞭。裏側も彫は深い外縁・郭とも錆化に より明瞭。劣化が著しく破損する。	
第180図 PL.101	28	銅製品 柄鏡	一部欠損	長 幅 7.5 7.3	高 重 0.15 43.29			直径7.4cm程の銅製柄鏡で柄部分は1mm程を残し元から折れ ている。鏡背面中央には柄の模様を配し左には文字が記さ れ「薩摩の守家重」とも読み取れるが錆化により不鮮明ため 断定はできない。鏡面は外周部分は白銀色に輝きメッキが 施されているとみられる。	
第180図 PL.102	29	石製品 石臼(上白)	完形	直 径 高 32.8 11.3	厚 重 — 15000		粗粒輝石安山岩	上面くぼみ部と側面には棒状と平ノミ状の2種の工具痕が 認められる。側面には縦約3cm×横約4cmの矩形の挽き手 孔が認められる。底面には挽目ともくぼりの痕跡が明瞭に 残る。軸受孔及び供給孔の直径約4cm。	
第181図 PL.102	30	石製品 石臼(上白)	1/2	直 径 高 36.0 15.6	厚 重 — 12100		粗粒輝石安山岩	上面と側面は比較的滑らかである。側面には矩形の挽き手 孔の一部が残る。底面には挽目の痕跡が認められる。供給 孔は中央が狭くなっており両面穿孔と考えられる。	
第181図 PL.102	31	石製品 石臼(下白)	完形	直 径 高 32.5 11.4	厚 重 — 16900		粗粒輝石安山岩	上面に挽目の痕跡が明瞭に残る。側面には平ノミ状の工具 痕が多数認められる。底面には棒状の工具痕が多数認めら れる。軸孔の直径約4cm。	
第181図 PL.102	32	石製品 石臼(下白)	7/8	直 径 高 32.7 13.5	厚 重 — 21500.0		粗粒輝石安山岩	上面には挽目の痕跡がわずかに認められる。側面と底面 には棒状の工具痕が数多く認められる。肉眼観察によると軸 孔は中央付近が狭くなっているのが観察でき両面穿孔と考 えられる。軸孔の直径約3cm。	
IV区8号屋敷跡20号建物									
第182図 PL.102	1	肥前磁器 青磁染付筒 形碗	口縁部1/3、底 部1/2	口底 (7.6) 4.2	高 6.6		/灰白/	外面と高台内青磁釉。高台端部無釉。口縁部内面四方禪文。 底部内面周縁2重圏線内にコンニャク判による五弁花。	
IV区8号屋敷跡26号建物									
第182図 PL.102	1	瀬戸・美濃 陶器 仏飯器か	杯部? 1/3	口底 (7.2) —	高 —		/灰白/	杯部浅く仏飯器であろう。内外面灰釉。貫入入る。	

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第182図 PL.102	2	瀬戸・美濃 陶器 仏飯器	杯部1/2欠	口底 (7.2) 4.2	高 5.1		/淡黄/	内面から脚柱部灰釉。貫入入。脚柱部から脚内面無釉。	
第182図 PL.102	3	瀬戸・美濃 陶器 碗	体部以下完	口底 — 4.8	高 —		/灰/	残存部外面回転篋削り。内面から体部外面下位付近鉛釉。貫入入。	
第182図 PL.102	4	肥前陶器 青緑釉皿	口縁部から体部 1/2	口底 11.7 —	高 —		/淡黄/	内面から口縁端部外面青緑釉、口縁端部外面から体部外面下位透明釉。内面蛇の目軸剥ぎ。やや焼成不良。	
第182図 PL.102	5	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅 3.1 0.8	高重 0.4 1.99			断面ほぼ正方形の角釘。頭は角型で先端近くで急に細くなり尖る。頭側から1cm付近で捻じれながら曲がる。木質等の付着は見られない。	
IV区8号屋敷跡6号井戸									
第182図 PL.102	1	鉄製品 鎌	破片	長幅 8.5 10.8	高重 0.5 26.56			茎に目釘穴を持つ鉄鎌破片。研ぎ減りおよび劣化のためか刃と茎はほとんど幅が変わらず境は区別できない。目釘および柄の木質等は見られない。	
IV区8号屋敷跡1号石組									
第182図 PL.102	1	木製品 板	破片	長幅 —	厚 0.7			板柱目の板材。表面の目痩せ著しい。	マツ属複雑管束亜属
IV区8号屋敷跡22号石垣									
第182図 PL.103	1	製作地不詳 磁器 平碗	口縁部1/4、底 部完	口底 (11.8) 4.0	高 5.4		/白/	酸化コバルトと緑色絵具による銅板転写。機械轆轤成形。	近現代。
第182図 PL.103	2	製作地不詳 磁器 染付皿	口縁部一部、底 部1/2	口底 (15.0) (7.8)	高 4.3		/白/	型紙絵付け。蛇の目凹型高台。	近現代。
第182図 PL.103	3	製作地不詳 磁器 染付鉢	口縁部1/2、底 部完	口底 (15.6) (7.6)	高 5.5		/白/	内外面銅板転写による絵付け。蛇の目凹型高台。	近現代。
第182図 PL.103	4	石製品 砥石	2/3	長幅 (8.0) (2.8)	厚重 (1.7) 62.3		砥沢石	正面が主要な砥面である。右側面には縦方向の比較的長い線条痕が認められる。左側面、上部小口面、裏面には櫛歯タガネ痕が認められる。左側面の下方には滑らかな面が認められ恒常的な砥面ではなく便宜的な砥面として機能したと考えられる。下部欠損。	
IV区8号屋敷跡23号石垣									
第182図 PL.103	1	瀬戸・美濃 磁器か 染付端反碗	口縁部1/4、底 部1/3	口底 (10.4) (4.0)	高 5.7		/白/	外面斜格子文間にコウモリ？文。口縁部内面簡略化した文様帯。底部内面1重圈線内に不明文様。	19世紀前葉～中葉。
第182図 PL.103	2	製作地不詳 磁器 湯飲み	体部から底部 1/3	口底 — (3.4)	高 —		/白/	体部外面「○○食料品 大黒屋商店 長野原町川原畑」の文字。	現在。
IV区8号屋敷跡17号土坑									
第182図 PL.103	1	肥前磁器 染付皿	1/3	口底 (13.2) (9.0)	高 3.6		/白/	蛇の目凹型高台。口縁端部丸く肥厚。外面唐草文。口縁部から体部内面植物文。底部内面2重圈線内に松竹梅文か。	
IV区9号屋敷跡18号建物									
第183図 PL.103	1	搬入系土器 土人形	完形	幅厚 2.3 1.6	高 4.5		/灰白/	前後の型を合わせて作成。西行か。現状で彩色なし。	
第183図 PL.103	2	瀬戸・美濃 陶器 小碗	体部1/4欠	口底 6.3 3.0	高 4.2		/灰白/	外面中位以下回転篋削り。内面から高台脇灰釉。貫入入。	
第183図	3	肥前磁器 染付筒形碗	口縁部1/4	口底 (7.5) —	高 —		/灰白/	外面白抜ききの雪輪状文。口縁部内面四方禪文。	
第183図 PL.103	4	肥前磁器 染付碗	口縁部1/3、底 部1/2	口底 (8.8) (3.0)	高 5.1		/白/	外面2重網目文。内面1重網目文に底部内面コンニャク判による菊花状文。	
第183図 PL.103	5	肥前磁器 染付碗	口縁部1/2、底 部完	口底 9.6 4.0	高 5.4		/灰白/	外面雪輪梅樹文。内面無文。高台内「大明」崩れ銘か。	
第183図	6	瀬戸・美濃 磁器 染付碗	底部2/3	口底 — 4.0	高 —		/白/	外面丸文。底部内面1重圈線内に不明文様。呉須の色調は濃い。	
第183図 PL.103	7	肥前磁器 染付小丸碗	口縁部から体部 2/3	口底 8.6 —	高 —		/白/	外面桐文。口縁部内面四方禪文。底部内面周縁2重圈線。	
第183図	8	美濃陶器 鎧碗	口縁部1/3	口底 (8.0) —	高 —		/灰/	口縁部外面以下回転施文具による施文。内面から口縁部外面鉄釉。口縁部外面以下鉄化粧風の薄い鉄釉。	
第183図	9	美濃陶器 鎧碗	口縁部1/3	口底 (8.0) —	高 —		/灰/	口縁部外面以下回転施文具による施文。内面から口縁部外面鉄釉。口縁部外面以下鉄化粧風の薄い鉄釉。	
第183図	10	瀬戸・美濃 陶器 筒形掛分碗 か	底部3/4	口底 — 4.0	高 —		/灰白/	外面回転篋削り。内外面鉄化粧風の薄い鉄釉。高台端部無釉。	
第183図 PL.103	11	瀬戸・美濃 陶器 筒形掛分碗	口縁部1/3欠	口底 7.7 4.0	高 6.0		/灰/	外面口縁部下回転篋削り。口縁部内面から口縁部鉄釉。内面口縁部以下と外面口縁部下から高台内鉄化粧風の薄い鉄釉。高台端部無釉。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第183図	12	瀬戸・美濃 陶器 腰鎗碗	口縁部1/3	口底 —	(9.4) —	高 —	/灰白/	外面口縁部下4条の螺旋状凹線。内面から口縁部外面灰釉。外面凹線部以下錆色の鉄釉。灰釉に貫入する。	
第183図 PL.103	13	京・信楽系 陶器 鉄絵碗	口縁部1/4欠	口底 —	10.7 4.2	高 5.3	/灰/	口縁部外面の一方に鉄絵。内面から高台脇灰釉。細かい貫入する。底部内面に小さい目痕3カ所。無釉部器表は赤褐色に発色。	
第183図 PL.103	14	肥前磁器 皿	口縁部1/3欠	口底 —	13.5 7.4	高 3.1	/灰白/	口縁部から体部内面唐草文。底部内面コンニャク判による五弁花。蛇の目釉剥ぎ。外面と高台内無文。	
第183図	15	肥前磁器 皿	1/4	口底 —	(13.6) (7.4)	高 2.9	/灰白/	口縁部から体部内面唐草文。蛇の目釉剥ぎ。外面無文。	14と組物か。
第183図 PL.103	16	瀬戸・美濃 陶器 水注	口縁部1/2、体部1/2欠	口底 —	(3.6) 5.7	高 9.4	/淡黄/	取っ手欠損。蓋受け部内面から高台脇釉。内面鉄化粧風に釉薄くかかる。	
第183図 PL.104	17	瀬戸陶器 すり鉢	体部片	口底 —	—	高 —	/淡黄/	口縁部下位から体部上位片。内面側から見て上辺と右辺の割れ口を擦って平滑にする。	割れ口加工。
第183図 PL.104	18	肥前陶器か すり鉢	口縁部下位片	口底 —	—	高 —	/にぶい赤褐/	口縁部側のすり目は回転横撫により水平に撫で消す。内外面鉄泥。左右2辺の割れ口を擦って平滑に加工。	20と同一個体か。割れ口加工。
第183図	19	堺陶器 すり鉢	口縁部1/3	口底 —	(21.0) —	高 —	/明赤褐/	小型のすり鉢。口縁部内面の段差は緩く、凹線1条。口縁部外面以下回転篋削り。口縁部側のすり目は回転横撫により水平に撫で消す。口縁部内面すり目との境凹線条の段差。	
第183図 PL.104	20	肥前陶器か すり鉢	口縁部から体部片	口底 —	—	高 —	/にぶい赤褐/	17本+αのすり目。口縁部側のすり目は回転横撫により水平に撫で消す。口縁部外反。口縁部外面に明瞭な稜線廻る。体部外面中位以下回転篋削り。内外面鉄泥。	
第183図	21	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部から体部片	口底 —	—	高 —	/にぶい黄橙/	内面13本一単位のすり目。口縁部外方に折り返し肥厚。内外面錆釉厚く光沢を有する箇所あり。下部の割れ口擦って平滑に加工。	割れ口加工
第184図 PL.104	22	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部1/3欠	口底 —	28.8 12.2	高 11.6	/灰黄/	内面15本一単位のすり目。口縁部外面から体部外面回転篋削り。底部右回転糸切無調整。内外面錆釉。	
第184図 PL.104	23	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部1/4、底部1/3	口底 —	(26.1) (10.5)	高 10.1	/灰黄/	内面17本一単位のすり目。外面口縁部以下回転篋削り。底部右回転糸切無調整。内外面錆釉。体部内面下位以下器表摩擦。底部外面周縁器壁摩擦。	
第184図 PL.104	24	瀬戸陶器 すり鉢	底部欠	口底 —	31.0 —	高 —	/灰黄/	内面13本一単位のすり目。体部外面回転篋削り。内外面錆釉。体部内面下位すり目が消えるほど摩擦。口縁部内外面器表摩擦。	
第185図 PL.105	25	木製品 桶か盥	上部欠	長幅 —	—	厚 —		底板径55.3cm、側板の底板部分厚2.0cm、底板部復元径は約59cm。底板は3枚の板を竹釘で留める。側板内面下部の底板と接する部分は若干抉るように削る。底板周縁外面側を面取りする。側板上部は腐朽。側板の底板部外面にタガ痕残る。	②針葉樹③マツ属複雑官束亜属④スギ
第184図 PL.104	26	鉄製品 十能	破片	長幅 —	24.3 16.8	高重 4.6 699.28		鋳造の十能。柄装着部は断面逆台形の袋状で端部は劣化破損し柄の木質等は確認できない。先端幅は推定17cm程。	
第186図 PL.105	27	銅製品 キセル・雁首	ほぼ完形	長幅 —	4.0 1.6	高重 2.1 5.03		キセルの雁首。火皿の側面は潰れ多角形的となるが変形によるものと考えられる。火皿内には煙草の残渣と見られる黒色物が見られる。表面にはメッキ・装飾等の加工は見られない。	
第186図 PL.105	28	銅製品 キセル・吸い口	ほぼ完形	長幅 —	5.4 1.0	高重 0.9 3.17		キセルの吸い口部分で羅字等は残存しない。表面は劣化し荒れていてメッキや装飾等の加工は確認できない。	
第186図 PL.105	29	銅製品 キセル・吸い口	破片	長幅 —	4.9 1.0	高重 1.0 2.80		キセルの吸い口部分の破片で吸い口および中央付近は劣化破損する。内部にはヤニ状の黒色物が詰まっている。	
第186図 PL.105	30	銅製品 キセル・吸い口	ほぼ完形	長幅 —	6.3 1.3	高重 1.2 7.89		キセルの吸い口部分。全体に硬い錆に覆われるが一部表面に赤銅色の平滑面が残る。内部には羅字の表面暗褐色の木質が残存する。	
第186図 PL.105	31	銅製品 キセル・吸い口	一部破損	長幅 —	3.9 1.0	高重 0.9 4.59		キセルの吸い口。吸い口側端部はちぎれる様に破損し端部は閉塞する。雁首側端部は破損し張り合わせ部分1cm程が口を開ける。	
第186図 PL.105	32	鉄製品 釘	破片	長幅 —	4.0 2.0	高重 1.1 3.39		断面ほぼ正方形の角釘で両端とも劣化消失する。一端にはクリ材と見られる板目の木材が錆化残存する。	
第186図 PL.105	33	鉄製品 刀子	破片	長幅 —	6.0 1.5	高重 0.7 8.48		棟・刃側ともに関を持つ刀子で刃部分は4.5cm程で劣化破損する。刃から茎全体に針葉樹材が錆が残存し柄および柄材と見られる。	
第186図 PL.105	34	鉄製品 釘	破片	長幅 —	4.5 0.8	高重 0.8 3.36		断面ほぼ正方形の角釘破片。先端はやや曲がり頭側は劣化破損する。	
第186図 PL.105	35	鉄製品 不詳	破片	長幅 —	4.1 1.1	高重 0.9 3.72		断面ほぼ正方形の角形で先は細くなり断面も丸みを帯び端部は尖らない。反対側は劣化破損する。	
第186図 PL.106	36	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横 —	2.186 2.222	厚重 0.117 2.42		寛永通寶。表側は彫深く外縁・郭とも明瞭だが文字は錆化によりやや不明瞭。裏側も彫は深い外縁・郭とも錆化により明瞭。劣化が著しく破損する。	
第186図 PL.106	37	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 —	—	厚重 0.194 2.78		一部残存する文字から寛永通寶と見られるが、錆化が著しく詳細は不明。	
第186図 PL.106	38	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横 —	2.342 2.388	厚重 0.111 2.02		寛永通寶。彫は深い外縁・文字・郭とも一部不明瞭。	

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第186図 PL.106	39	銅製品 銭貨	一部破損	縦横	2.308 2.305	厚重	0.120 1.99		寛永通寶。劣化により破損する。表側は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。
第186図 PL.106	40	銅製品 銭貨	破片	縦横	- -	厚重	0.146 2.02		劣化破損した銭貨の破片で、一部残存する文字から寛永通寶と見られるが、錆化が著しく詳細は不明。
第186図 PL.106	41	石製品 砥石	完形	長幅	12.7 2.8	厚重	3.3 194.5	砥沢石	正面が主要な砥面でありわずかに内湾する。両側面、下部小口面、裏面には櫛歯タガネ痕が認められる。左側面には横方向の線条痕が多く認められ右側面には滑らかな面が部分的にあることから、両側面は恒常的な砥面ではなく便宜的な砥面として機能したと考えられる。
第186図 PL.106	42	石製品 石臼(上臼)	完形	径高	33.0 14.5	厚重	- 21680.0	粗粒輝石安山岩	上面くぼみ部には棒状の工具痕が明瞭に認められる。上面の縁と側面は比較的滑らかである。側面には縦約3cm×横約4cmの矩形の挽き手孔が認められる。底面は片減りするが挽目ともくぼりの痕跡が明瞭に残る。軸受孔及び供給孔の直径約3cm。
第186図 PL.106	43	石製品 砥石	ほぼ完形	長幅	6.8 5.9	厚重	3.8 103.2	粗粒輝石安山岩	粗粒で多孔質な石材である。表面はやや外湾する非常に滑らかな面とそのまわりに縁状に広がる非常に滑らかな面の二面に分別することが可能で共に砥面と判断した。裏面全体も比較的滑らかであり研磨整形している可能性がある。
第187図 PL.106	44	石製品 石製品	完形	長幅	20.2 16.3	高重	10.0 1099.8	軽石	粗粒で多孔質な石材である。表面の中央に大きなくぼみがあり内部に平ノミ状あるいは棒状の工具痕が数多く認められる。またくぼみ内部の底面周辺はわずかに赤色変化しており受熱の可能性はある。
第187図 PL.106	45	石製品 石製品	完形	長幅	13.4 11.2	厚重	6.0 966.8	粗粒輝石安山岩	粗粒で多孔質な石材である。全体的に矩形に丁寧に整形する。表面には矩形のくぼみがあり内部を中心に炭化物が付着する。灯火具等の可能性がある。

IV区9号屋敷跡19号建物

第187図 PL.106	1	鉄製品 不詳	破片	長幅	2.9 1.6	高重	0.6 2.32		厚さ1mm程の鉄板で二つ折りに折り曲げられているが端部は劣化破損し全体形状は不明。
-----------------	---	-----------	----	----	------------	----	-------------	--	---

IV区9号屋敷跡21号建物

第187図 PL.106	1	製作地不詳 磁器 染付小杯	口縁部から体部 1/4	口底	(6.6) -	高	-	/白/	外面酸化コバルトによる染付。内面無文。	近現代。
第187図	2	瀬戸・美濃 陶器 小碗	体部一部、底部 完	口底	- 3.3	高	-	/灰白/	内面から高台脇灰釉。貫入する。	
第187図	3	製作地不詳 磁器 染付碗	1/4	口底	(7.2) (3.9)	高	5.4	/白/	外面人物文。高台端部のみ無釉。器表の黒ずみは焼成後の汚れ。	天明泥流以降。
第187図 PL.106	4	瀬戸・美濃 陶器 円盤状製品 (小碗)	完形	径底	3.8 3.7	高	1.1	/灰白/	小碗底部片の周囲を打ち欠いて円盤状に整形。内面灰釉。貫入する。	二次加工。
第187図 PL.106	5	製作地不詳 磁器 染付皿	口縁部一部、底部 完	口底	(14.5) 6.6	高	3.7	/白/	口鏝。口縁から体部輪花に作る。内面型押しで小野道風を描き、呉須を入れる。体部内面不明文様。外面無文。蛇の目凹型高台。	近現代。
第187図	6	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	2/3	口底	10.9 7.8	高	6.4	/浅黄/	体部外面凹線巡らす。口縁部内面から体部黄釉口縁端部内外面叩打による小剥離多い。口縁部内面以下鉄化粧風に釉薄くかかる。底部内面直径3.4cmの重ね焼き痕。	口縁端部内外面叩打痕。
第187図	7	瀬戸・美濃 系陶器 すり鉢	体部下位から底部 1/4	口底	- (12.0)	高	-	/灰黄/	底部外面回転篋削り後回転篋削り。体部外面下位回転篋削り。内外面錆釉。内面使用により器表やや摩滅。底部外面周縁擦れにより器表摩滅。	
第187図 PL.106	8	鉄製品 鍬	破片	長幅	6.7 4.9	高重	2.2 65.47		鑄造の鉄製品破片。残存形状から踏鞴の破片と見られる。	
第187図 PL.106	9	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横	2.362 2.360	厚重	0.115 2.24		寛永通寶。表側は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏側は彫浅いが外縁・郭とも明瞭。一部表面は錆化により凹凸が見られる。	
第187図 PL.106	10	石製品 石臼(上臼)	ほぼ完形	直径高	32.4 13.9	厚重	- 19100	粗粒輝石安山岩	側面には棒状の工具痕が多数残り矩形の挽き手孔の痕跡が認められる。底面には挽目ともくぼりの痕跡が明瞭に認められる。軸孔及び供給孔の直径約3cm。	

IV区10号屋敷跡23号建物

第188図 PL.107	1	在地系土器 土人形	後ろ側	幅厚	- -	高	-	/にぶい黄橙/	小型の大黒様背面。前後の型接合部で剥離。胸部より上欠損。	
第188図 PL.107	2	製作地不詳 陶器 合子	身完形	口底	5.0 2.7	高	2.5	/淡黄/	内面と体部外面透明釉。細かい貫入する。蓋受け部と底部外面無釉。底部外面回転篋削り。	
第188図	3	肥前磁器 灰吹か	体部下位以下完	口底	- 5.0	高	-	/白/	外面笹文か。外面体部下端面取り。底部外面回転篋削り。外面面取り部以下無釉。内面残存部中位付近まで透明釉。	
第188図	4	肥前磁器 染付筒形碗	口縁部から体部 1/4	口底	(7.9) -	高	-	/白/	外面竹文。口縁部内面2重圏線。底部内面周縁1重圏線か。	
第188図 PL.107	5	肥前磁器 染付碗	口縁部1/4、底部 1/2	口底	(8.7) 3.4	高	5.7	/白/	外面文様不鮮明であるが、コンニャク判による山蓋松と団鶴文か。口縁部内面釉がかからない部分あり。	不良品。
第188図 PL.107	6	肥前磁器 染付碗	口縁部1/3欠	口底	10.0 4.5	高	5.2	/灰白/	外面手書きによる丸文内にコンニャク判による桐文を3カ所に配置。内面と高台内無文。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	幅			
第188図 PL.107	7	瀬戸・美濃 陶器 柿釉碗	口縁部1/4、底 部完	口底 (10.3) 4.7	高	6.4	/灰黄/	内面から高台外面付近柿釉。	
第188図	8	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部から体部 1/4	口底 (11.1) —	高	—	/灰白/	内外面灰釉。	
第188図 PL.107	9	肥前磁器 青磁火入	口縁部1/4、底 部2/3	口底 (9.2) 7.2	高	5.4	/灰白/	外面鑿状工具による縦線。内面から高台内面、底部外面中央青磁釉。蛇の目凹型高台。	
第188図 PL.107	10	肥前磁器 染付鉢か火 入	1/2	口底 8.7 (6.0)	高	4.3	/白/	外面篋文。蛇の目凹型高台。内面から高台内面、底部外面中央透明釉。	
第188図 PL.107	11	瀬戸・美濃 陶器 練鉢	1/4	口底 (24.2) (15.7)	高	13.4	/灰黄/	口縁部内湾し、外方に折り返す。内面から高台外面付近灰釉。内面目痕2カ所残存。	
第188図	12	瀬戸陶器 すり鉢	底部1/2	口底 — 12.2	高	—	/にぶい黄橙/	18本一単位のすり目。内外面錆釉。底部右回転糸切無調整。残存部内面使用により器表やや摩滅。底部外面周縁器表摩滅。	
第188図 PL.107	13	鉄製品 不詳		長幅 16.1 3.0	高重	1.6 33.84		幅1.4cm厚さ1mm程の細長い板状鉄製品。両端部は破損した複数の破片が出土しているが、全体形状・用途等は不明	
第188図 PL.107	14	銅製品 小柄	一部欠損	長幅 9.9 1.5	高重	0.4 22.04		小柄の柄部分で刀身は柄から2mm程で破損する。表側には鑿打ちによる装飾が施されるが、表面劣化が著しく不明瞭。	
第188図 PL.107	15	鉄製品 鍋・つる	破片	長幅 5.0 1.6	高重	0.7 6.21		断面長方形のやや湾曲する平面形を有し両端部は劣化破損することから鍋・つるの破片と考えられる。	
第188図 PL.107	16	鉄製品 不詳	破片	長幅 8.1 1.5	高重	1.3 20.69		断面四角の角棒状鉄製品と見られるが、表面は土砂をまき込んだ硬い鉄さびに覆われ本体は脆弱なため詳細は不明。	
第188図 PL.107	17	鉄製品 不詳	ほぼ完形	長幅 4.1 3.1	高重	1.1 10.94		断面やや丸みを持つ角形で？形の鉄製品。	
第188図 PL.107	18	鉄製品 不詳	破片	長幅 6.2 4.4	高重	0.9 17.20		断面長方形の板状でやや湾曲し端部はねじるようにループ状を呈する。反対側は劣化破損する。	
第188図 PL.107	19	鉄製品 不詳	一部欠損	長幅 8.0 3.4	高重	1.7 38.95		幅3cm長さ6cm厚さ2～4mm程の長方形の鉄製品に銅製銭貨が鉄錆により癒着する。銭貨は裏側は極めて平坦で外縁・郭とも認められない。表側は癒着により観察が困難だが永の字が観察される。	
第188図 PL.107	20	銅製品 キセル・雁 首	破片	長幅 2.6 0.7	高重	1.0 1.46		キセルの雁首の破片で火皿部分は劣化破損する。表面は錆化により荒れメッキ・装飾加工等は確認できない。	
第188図 PL.107	21	鉄製品 不詳	ほぼ完形	長幅 6.9 2.0	高重	1.1 12.23		幅1.3cm長さ6.7cm厚さ0.2cm程の板状の鉄製品で、一端は角形反対側は丸みを持つ。中ほどに直行する形で別の板状鉄製品が錆付く。	0
第188図 PL.107	22	鉄製品 不詳	破片	長幅 4.5 3.8	高重	0.9 7.62		残存形状三角形の板状鉄製品。一部残るオリジナルの端部は面取りしたように丸を持つが、劣化破損部が多く全体形状は不明。	
第188図 PL.107	23	銅製品 不詳	破片	長幅 2.0 2.1	高重	0.3 0.81		隅丸三角形の薄い板状銅製品で一片を舌状に延ばしループ状に折り曲げる。外周は劣化破損するが縁近くで湾曲し、本来は立体的な形状を持っていた可能性が有る。	
第188図 PL.107	24	鉄製品 不詳	破片	長幅 8.8 2.2	高重	1.6 25.46		断面四角の角棒状鉄製品と見られるが、表面は土砂をまき込んだ硬い鉄さびに覆われ本体は脆弱なため詳細は不明。	
第188図 PL.107	25	銅製品 不詳	一部欠損	長幅 11.4 1.0	高重	1.5 6.50		直径2mm程の丸棒状の金属製品2破片。両方とも端部は丸く、反対側は平たくつぶして曲げるがその先は破損する。	
第189図 PL.107	26	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横 2.111 2.248	厚重	0.094 1.39		寛永通寶。表側は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。一部表面は鉄錆が付着する。	
第189図 PL.107	27	鉄製品 銭貨	完形	縦横 2.312 2.306	厚重	0.68 1.62		寛永通寶(背小)。表側は外縁、文字、郭とも彫深いが錆化により一部明瞭。裏側は彫が浅いが、外縁、文字、郭とも明瞭。	
第189図 PL.107	28	銅製品 銭貨	一部破損	縦横 2.436 2.393	厚重	0.168 2.38		寛永通寶。表側は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏側はやや彫は浅いが外縁・郭は見られる。錆化により一部破損、文字は錆に覆われ一部不明瞭。	
第189図 PL.107	29	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.306 2.310	厚重	0.145 2.81		寛永通寶。表側は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第189図 PL.107	30	銅製品 銭貨	一部破損	縦横 2.484 2.423	厚重	0.111 2.27		寛永通寶(背文)。表側は彫深く外縁・文字とも明瞭、裏側も彫深く外縁・文字とも明瞭。中央部に直径10mmほどのあながあけられていて郭は残存しない。孔縁は裏側でめくれるように盛り上がり表側から穿孔したとみられる。	
第189図 PL.107	31	銅製品 銭貨	一部破損	縦横 2.431 2.436	厚重	0.122 2.72		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。寛と通の外側は錆欠け部分の劣化破損と見られる。	
第189図 PL.108	32	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.368 2.369	厚重	0.109 2.20		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが表面の錆化により文字の一部は不明瞭。	
第189図 PL.108	33	銅製品 銭貨	一部破損	縦横 2.185 2.159	厚重	0.099 1.59		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏側は平坦だが外縁・郭は認められる。	
第189図 PL.108	34	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横 2.393 2.338	厚重	0.210 2.38		錆化が著しい銭貨で本体は脆弱で厚く錆に覆われるため詳細は不明。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第189図 PL.108	35	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横	2.370 2.364	厚重 2.04	0.105	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏側は平坦だが外縁・郭は認められる。波打つように変形する。	
第189図 PL.108	36	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.333 2.247	厚重 2.77	0.120	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏側は平坦だが外縁・郭は認められる。	
第189図 PL.108	37	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.285 2.281	厚重 1.83	0.098	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏側は平坦だが外縁・郭は認められる。郭の部分に波打つような変形が見られる。	
第189図 PL.108	38	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.310 2.307	厚重 1.91	0.107	寛永通寶(背足)。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏側は平坦だが外縁・郭は認められる。郭の部分に波打つような変形が見られる。寶の字の下方および裏側下方に鋳溜りが見られる。	
第189図 PL.108	39	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.295 2.341	厚重 2.12	0.095	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第189図 PL.108	40	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.460 2.440	厚重 2.76	0.126	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第189図 PL.108	41	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.448 2.437	厚重 2.15	0.116	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。郭付近では波打つように変形する。	
第189図 PL.108	42	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.369 2.395	厚重 2.49	0.108	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第189図 PL.108	43	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.277 2.271	厚重 2.24	0.122	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第189図 PL.108	44	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横	- 2.518	厚重 2.25	0.120	寛永通寶(背文)。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。永の下方は破損錆化する。	
第189図 PL.108	45	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.429 2.408	厚重 2.87	0.120	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも非常に明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。裏側の郭から外縁にかけて斜め線状に鋳溜りが見られる。	
第189図 PL.108	46	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.051 2.143	厚重 2.15	0.113	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。通の字上の外縁に鋳欠けによる孔が見られる。	
第189図 PL.108	47	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.357 2.377	厚重 2.29	0.113	寛永通寶。表側は外縁・文字・郭とも明瞭だが、一部は錆化により不明瞭となる。裏面は平坦だが外縁・郭は認められる。	
第189図 PL.108	48	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.450 2.492	厚重 2.25	0.101	祥符元寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが文字はつぶれ気味。裏側も外縁・郭とも明瞭。	
第189図 PL.108	49	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.276 2.269	厚重 2.08	0.109	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第190図 PL.108	50	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.358 2.376	厚重 1.91	0.137	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが一部錆に覆われる。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第190図 PL.108	51	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.269 2.247	厚重 1.69	0.106	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭、裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第190図 PL.108	52	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.440 2.450	厚重 2.43	0.113	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも非常に明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第190図 PL.108	53	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.339 2.352	厚重 2.91	0.136	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも非常に明瞭。裏側は非常に平坦だが外縁・郭部分の盛り上がり認められる。	
第190図 PL.108	54	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.201 2.213	厚重 1.85	0.125	寛永通寶(背元)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第190図 PL.108	55	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横	2.186 2.175	厚重 1.39	0.092	寛永通寶。表側は彫深い表面の劣化により外縁・文字・郭の一部は不明瞭となる。裏側は彫深く外縁・郭とも明瞭。	
第190図 PL.109	56	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.363 2.363	厚重 2.08	0.124	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第190図 PL.109	57	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横	2.398 -	厚重 1.87	0.103	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが一部錆化により文字面が破損する。裏面も彫深く外縁・郭とも明瞭。通の字部分は欠損錆化する。	
第190図 PL.109	58	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.332 2.335	厚重 2.02	0.107	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第190図 PL.109	59	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.505 2.504	厚重 2.41	0.106	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが表面の錆化により文字の一部は不明瞭。	
第190図 PL.109	60	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.439 2.448	厚重 2.88	0.122	寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。寶の字上部から外縁につながる鋳溜りが見られる。	
第190図 PL.109	61	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横	2.391 2.382	厚重 1.57	0.104	劣化の著しい銭貨破片でその文字の一部が残存寛永通寶とみられる。	
第190図 PL.109	62	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横	2.266 -	厚重 1.62	0.111	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。通の字は劣化破損する。	
第190図 PL.109	63	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.500 2.489	厚重 2.59	0.118	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭だが郭の左下に接して斜め線状に鋳溜りが見られる。	
第190図 PL.109	64	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.367 -	厚重 1.93	0.121	寛永通寶。表側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。通の字の右側は劣化破損。	
第190図 PL.109	65	銅製品 銭貨	破片	縦横	- -	厚重 1.04	0.102	銅製銭貨破片で残存する文字から寛永通寶と見られる。彫は深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第190図 PL.109	66	銅製品 銭貨	破片	縦横	2.504 2.456	厚重 2.01	0.168	銅製銭貨破片で錆化が著しく表面から文字は確認できない。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第190図 PL.109	67	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.168 2.163	厚重 0.119 2.14		寛永通寶(背元)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。		
第190図 PL.109	68	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.278 2.286	厚重 0.109 2.25		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。		
第190図 PL.109	69	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.807 2.827	厚重 0.132 4.66		寛永通寶(11波)。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。		
第191図 PL.109	70	石製品 砥石	4/5	長幅 (10.7) 3.4	厚重 3.3 137.4	流紋岩	砥面は4面認められる。研ぎ減りより表面は緩やかな起伏が形成され裏面はやや内湾した形態である。両側面はほぼ平坦である。		
第191図 PL.109	71	石製品 石臼(下臼)	完形	直径 32.5 8.8	厚重 — 17500	粗粒輝石安山岩	上面に挽目の痕跡が残る。底面には棒状の工具痕が明瞭に認められる。軸孔の直径約4cm。		
第191図 PL.109	72	石製品 石製品	完形	長幅 35.4 31.6	厚重 14.7 2364.0	粗粒輝石安山岩	円礫を利用する。粗粒な石質である。表表面のほぼ中央に漏斗状のくぼみがある。くぼみの内部は凹凸が認められ滑らかでない。表面のくぼみの周辺には磨面が認められる。		
IV区10号屋敷跡30号建物									
第191図 PL.110	1	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.298 2.364	厚重 0.095 1.51		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。		
第191図 PL.110	2	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.408 2.449	厚重 0.142 2.58		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。		
IV区11号屋敷跡31号建物									
第191図	1	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部から体部 1/4	口底 (7.0) —	高 —	/灰白/	内面から高台脇灰釉。粗い貫入入る。下部は高台境で欠損。		
第191図	2	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部から体部 1/2	口底 6.0 —	高 —	/灰/	内面から高台脇灰釉。下部は高台境で欠損。		
第191図 PL.110	3	肥前磁器 円盤状製品 (碗)	完形	径底 4.5 3.3	高 1.5	/灰白/	染付碗の高台脇周囲を叩打により円盤状に整形。	二次加工。	
第191図 PL.110	4	瀬戸・美濃 陶器 鉄絵筒形碗	口縁部1/2欠	口底 7.8 4.4	高 6.3 6.7	/灰白/	筒形。口縁部から体部外面の一方に鉄絵。内面から高台脇灰釉。部分的に粗い貫入入る。		
第191図 PL.110	5	肥前磁器 染付小碗	口縁部1/5欠	口底 7.6 2.8	高 4.7	/白/	外面コンニャク判による紅葉文残存部に2カ所。全体では3方に配置か。高台外面と体部外面下位に1条の圏線。染付は薄く不鮮明。		
第191図 PL.110	6	肥前磁器 染付碗	口縁部1/2、底 部完	口底 (10.2) 4.0	高 5.7	/灰白/	外面コンニャク判による井桁内に桐文と桐文を交互に3個づつ配置。高台内渦福字銘。		
第191図 PL.110	7	瀬戸・美濃 陶器 尾呂碗か	口縁部1/2、底 部完	口底 (10.1) 4.8	高 6.4	/灰/	高台内兜巾状に盛り上がる。外面中位以下回転斲削り。内面から高台境付近鉛釉。口縁部外面に薄らと灰釉によると思われる白濁部認められる。		
第191図 PL.110	8	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部1/4、底 部完	口底 (10.7) 5.2	高 8.0	/灰/	外面中位以下回転斲削り。内面から高台脇付近灰釉。部分的に粗い貫入入る。		
第191図 PL.110	9	京・信楽系 陶器 鉄絵碗	完形	口底 10.9 4.0	高 5.5	/淡黄/	口縁部外面鉄絵具で茎と葉、白土で花を描く。文様は1カ所。内面から高台脇透明釉。細かい貫入入る。		
第191図	10	瀬戸・美濃 陶器 碗	底部完	口底 — 5.6	高 —	/灰白/	高台内兜巾状に盛り上がる。内面から高台脇付近灰釉。粗い貫入入る。		
第191図	11	肥前磁器 染付徳利	体部下位1/4、 底部1/2	口底 — 5.2	高 —	/灰白/	外面の一部に染付残る。内面と高台端部無釉。		
第191図 PL.110	12	瀬戸・美濃 陶器 不詳	体部以下完	口底 — 6.6	高 —	/淡黄/	貼付高台で中央に糸切痕残る。残存部の一方に切り込みがあり、内面はこの付近まで施釉。内面上部から高台脇鉛釉。切り込み下部から灰釉流れる。火もらいのような形状か。		
第192図 PL.110	13	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口底 12.6 6.4	高 2.7 ~ 3.0	/灰白/	底部内面周縁小さい段差。口縁端部外面直立気味に立ち上がる。底部内面鉄絵具を用いた型紙摺りによる菊花文。文様は薄く不鮮明。内外面灰釉。貫入入る。高台端部のみ無釉。貼付高台。	御深井製品。	
第192図 PL.110	14	瀬戸・美濃 陶器 皿	口縁部1/3、底 部完	口底 (12.1) 6.3	高 3.0	/灰白/	底部内面周縁低く明瞭な段差。底部内面呉須を用いた型紙摺りによる植物文。内外面灰釉。貫入入る。高台端部のみ無釉。貼付高台。	御深井製品。	
第192図 PL.110	15	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	口縁部1/8、底 部3/4	口底 (11.4) 7.8	高 6.0	/灰白/	外面轆轤目顕著。内面から体部外面鉛釉。脚3カ所貼付。底部内面目痕3カ所。		
第192図 PL.110	16	瀬戸・美濃 陶器 鬚水入	口縁部一部欠	長幅 (12.7) 4.1	高 4.1	/灰白/	両側面に鉄絵具を用いた型紙摺で七宝繫文。内面から体部外面下端灰釉。貫入入る。	御深井製品。	
第192図	17	瀬戸・美濃 陶器 か	口縁部片	口底 —	高 —	/灰/	内外黒褐色釉。肩部1カ所釉を流し、黒色を呈する。		

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	重量			
第192図 PL.110	18	瀬戸・美濃 陶器 お歯黒壺か (徳利)	完形	口底 7.3 7.6	高 11.5		/浅黄/	底部外面中央を削り、高台状に残す。内外面柿釉を施し、底部外面を拭う。内面の釉は薄く、錆釉状。徳利の肩部で人為的に打ち欠く。内面に鉄分は認められないが、お歯黒壺の可能性はある。	肩部人為的な打ち欠き。
第192図 PL.110	19	瀬戸陶器 すり鉢	1/4	口底 (34.2) (13.0)	高 14.9		/にぶい黄橙/	15本一単位のすり目。底部右回転糸切無調整。内外面錆釉。口縁部内面に素地補修1カ所。体部内面下位から底部内面器表やや摩滅。	
第192図 PL.110	20	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部1/2、底 部2/3	口底 33.0 11.9	高 13.8		/淡黄/	11本一単位のすり目を底部側から引き上げる。内外面錆釉、体部外面下位以下の釉を拭う。底部内面から体部内面下位器表摩滅。底部外面周縁擦れによる摩滅。	
第192図 PL.111	21	銅製品 キセル・吸 い口	一部欠損	長幅 4.5 1.0	高重 1.0 4.67			キセルの吸い口破片で吸い口側端部は劣化破損する。表面は劣化し荒れているためメッキや表面装飾等は確認できない。	
第192図 PL.111	22	銅製品 キセル・雁 首	破片	長幅 3.3 1.0	高重 0.6 1.36			キセルの雁首破片で、火皿側は劣化破損するし吸い口側破損つづれている。	
第192図 PL.111	23	銅製品 キセル・雁 首	破片	長幅 1.5 1.5	高重 1.2 2.56			キセル雁首の火皿部分破片。火皿内部には煙草の残渣と見られる黒色物が残存する。	
第192図 PL.111	24	銅製品 キセル・吸 い口	一部欠損	長幅 5.6 1.0	高重 1.0 2.43			キセルの吸い口部分で羅字は残存せず、雁首側端部から1.5cmで陥没変形が見られる。表面は劣化により荒れメッキ・装飾等は確認できない。	
第192図 PL.111	25	銅製品 キセル・雁 首	破片	長幅 5.0 1.0	高重 0.9 4.89			キセルの雁首破片。火皿は劣化破損する。吸い口側2.7cmは断面六角形で端部には羅字の木質が残存する。羅字の木質は表面茶褐色に塗られ端部は斜めに4面カットされている。	
第192図 PL.111	26	銅製品 キセル・雁 首	破片	長幅 1.8 1.8	高重 0.3 1.06			キセル・雁首の火皿部分破片。いわゆる雁首銭状につぶれさらに破損する。火皿内面には黒色物が残存する。	
第193図 PL.111	27	鉄製品 不詳	破片	長幅 6.3 4.1	高重 2.0 32.07			断面長方形でくの字状に曲がった鉄製品。放射割れと破損状況から鑄造鉄製品が破損したものと見られるが全体形状は不明。	
第193図 PL.111	28	鉄製品 不詳	一部欠損	長幅 9.8 11.6	高重 4.7 275.54			柄付の浅い鍋形の鑄造鉄製品破片。柄部分は断面台形の袋状張り出しの上部に四角い孔を設けて木製の柄を挿入し固定したと考えられる。底面の柄取り付け部近くに高さ0.7cmほどの円形の脚を持つがその先は劣化破損するため全体形状・用途は特定できない。	
第193図 PL.111	29	鉄製品 鍋・つる	破片	長幅 10.2 4.4	高重 1.4 15.14			断面長方形の板状で端部から7cm程で90°捻じれながら曲がる。端部は急に細くなりしの字状に折り曲げる。反対側は劣化破損する。	
第193図 PL.111	30	金属製品 鉄砲玉	破損	長幅 1.6 1.6	高重 0.8 8.90			鉄砲玉と見られる半球形の金属製品。球形の玉の半面がつぶれ平たく変形した形状。表面は灰黒色で一部に灰白色の腐食生成物が見られる。	
第193図 PL.111	31	鉄製品 不詳	一部欠損	長幅 9.7 16.1	高重 3.4 316.52			円盤状の鉄製品で縁部分では厚く2cm程立ち上がる。放射割れと破損状況から鑄造鉄製品と考えられるが、約半分は劣化破損しているため詳細は不明。	
第193図 PL.111	32	銅製品 不詳	破片	長幅 6.5 0.9	高重 0.6 2.64			筒状の金属製品でキセルの吸い口に似るが直径6mm程で残存長は破片合計で6.5cmと長い。	
第193図 PL.111	33	銅製品 不詳	ほぼ完形	長幅 1.5 1.4	高重 0.7 1.12			直径1.5cm厚さ1mm弱の中空半球形の金属製品。A・B二つを合わせると中空の球形体となるが、接合関係は確認できない。錆の状況から銅製と考えられるが、表面は劣化し荒れているため、メッキや表面の加工等は確認できない。	
第193図 PL.111	34	銅製品 不詳	ほぼ完形	長幅 1.5 1.4	高重 0.7 1.12			直径1.5cm厚さ1mm弱の中空半球形の金属製品。A・B二つを合わせると中空の球形体となるが、接合関係は確認できない。錆の状況から銅製と考えられるが、表面は劣化し荒れているため、メッキや表面の加工等は確認できない。	
第193図 PL.111	35	銅製品 不詳	一部欠損	長幅 2.0 0.7	高重 0.6 1.07			直径6mm程の筒状で端部は折り返し径は7mm程になる。反対側輪は劣化破損する。端部には一部金色の面が見られメッキが施されていた可能性が有る。	
第193図 PL.111	36	銅製品 キセル・吸 い口	破片	長幅 2.4 0.4	高重 0.4 0.68			キセルの吸い口側と見られる破片で雁首側は劣化破損する。表面は劣化により荒れメッキ・装飾等は確認できない。	
第193図 PL.111	37	銅製品 銭貨	破片	縦横 2.026 2.077	厚重 0.113 1.05			劣化の著しい銭貨破片でみられる文字の一部から寛永通寶とみられる。劣化により表面は荒れているが彫は比較的深く文字は明瞭。	
第193図 PL.111	38	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.444 2.422	厚重 0.137 3.21			寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第193図 PL.111	39	銅製品 銭貨	破片	縦横 2.305 -	厚重 0.108 1.30			寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。寛の字の右に鍍けけによる小孔がある。	
第193図 PL.111	40	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 - 2.271	厚重 0.119 2.15			寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。寛の字の上方は破損する。	
第193図 PL.111	41	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.439 2.442	厚重 0.127 2.39			寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。寛の字左下に鍍溜りが見られる。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第193図 PL.111	42	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.460 2.487	厚重 0.136 2.81		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。永の字下方の外縁は劣化破損する。		
第193図 PL.111	43	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.374 2.279	厚重 0.130 1.56		劣化の著しい銅製銭貨で、文字の残存状態から寛永通寶と推定される。		
第193図 PL.111	44	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.315 2.251	厚重 0.131 2.44		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・郭とも明瞭。劣化により一部表面は荒れている。		
第193図 PL.111	45	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.227 2.203	厚重 0.099 1.82		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭が認められる程度郭下方部分を覆うように鑄溜りがある。		
第194図 PL.111	46	銅製品 銭貨	破片	縦横 2.302 -	厚重 0.168 2.48		銭貨破片、残存する文字から寛永通寶と見られる。外縁・文字・郭とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。		
第194図 PL.111	47	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.540 2.500	厚重 0.156 2.46		寛永通寶。外縁周りは劣化破損するが、表側は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭。裏側も外縁・郭とも明瞭。		
第194図 PL.111	48	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.238 2.295	厚重 0.108 2.12		寛永通寶。外縁周りは劣化破損するが、表側は外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや平坦だが外縁・郭とも明瞭。		
第194図 PL.112	49	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横 2.142 2.130	厚重 0.950 1.69		寛永通寶。外縁周りは劣化破損するが、表側は外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや平坦で外縁・郭とも認められる程度。		
第194図 PL.112	50	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横 2.218 2.219	厚重 0.910 1.64		寛永通寶。表側は外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや平坦で外縁・郭とも認められる程度。寛の字の右に鑄欠けにより孔が見られる。		
第194図 PL.112	51	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.302 2.228	厚重 0.113 1.67		寛永通寶。外縁周りは劣化破損するが、表側は外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや平坦だが外縁・郭とも明瞭。		
第194図 PL.112	52	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.301 2.299	厚重 0.146 3.49		寛永通寶。表・裏側とも彫深く、外縁・文字・郭明瞭。		
第194図 PL.112	53	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.410 2.405	厚重 0.137 1.99		寛永通寶。外縁周りは一部劣化破損するが、表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も外縁・郭とも明瞭。		
第194図 PL.112	54	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.370 -	厚重 0.101 1.25		寛永通寶。表・裏側とも外縁・文字・郭明瞭。郭の内側はバリ状に残り孔は一部丸みを帯びる。寛の字の上方は破損する。		
第194図 PL.112	55	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横 2.490 2.582	厚重 0.126 2.53		劣化の著しい銭貨で硬い錆に覆われ本体脆弱。遺存する表面から寛永通寶と見られる。		
第194図 PL.112	56	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.367 2.395	厚重 0.113 2.49		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。		
第194図 PL.112	57	銅製品 銭貨	破片	縦横 2.373 2.402	厚重 0.136 1.48		寛永通寶破片。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も外縁・郭とも明瞭。		
IV区11号屋敷跡5号井戸									
第194図 PL.112	1	益子・笠間 陶器 すり鉢	口縁部片	口底 -	高 -	-	/浅黄橙/	内面すり目は細く、施した後に口縁部回転横撫。口縁部内面から外面錆色の鉄軸。口縁部内面以下鉄化粧。	近現代。
IV区24号建物									
第194図 PL.112	1	瀬戸・美濃 陶器 染付筒形碗	口縁部から体部 1/4	口底 (8.0) -	高 -	-	/灰白/	外面「田」字状文と小さい斜格子状文。高台脇1重圏線。口縁部内面2重圏線。	
第194図 PL.112	2	肥前磁器 染付碗	口縁部1/4欠	口底 9.8 4.0	高 5.0	-	/白/	外面二重網目文。内面と高台内無文。	
第194図 PL.112	3	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	3/4	口底 11.1 4.3	高 5.8	-	/白/	外面東屋山水文。口縁部内面幅広の1重圏線。底部内面周縁細い1重圏線。底部内面欠損。	
第194図 PL.112	4	瀬戸・美濃 系陶器 すり鉢	口縁部1/4	口底 (16.4) -	高 -	-	/にぶい黄橙、褐 灰/	9本一単位のすり目。内外面厚い錆軸で光沢を持つ部分多い。	
第194図 PL.112	5	在地系土器 か 基石状土製品	完形	径厚 2.0 0.6	重さ 1.8	-	/黒褐/	器表撫で。	
第194図 PL.112	6	在地系土器 か 基石状土製品	完形	径厚 1.9 0.6	重さ 2.1	-	/にぶい褐/	器表撫で。	
第195図 PL.112	7	鉄製品 不詳	ほぼ完形	長幅 3.3 3.8	高重 0.7 8.69	-		断面円形のリング状鉄製品。やや楕円形で太さはほぼ一定でつなぎ目等は確認できない。	
第195図 PL.112	8	鉄製品 不詳	ほぼ完形	長幅 5.2 1.2	高重 0.8 11.32	-		断面正方形に近い角棒状鉄製品で両端は角型で終わる。木質等の痕跡は見られない。	
第195図 PL.112	9	銅製品 キセル・雁 首	破片	長幅 1.7 1.6	高重 1.0 2.21	-		キセル雁首の火皿部分破片。火皿内部には煙草の残渣と見られる黒色物が残存する。	
第195図 PL.112	10	鉄製品 不詳	ほぼ完形	長幅 5.8 2.6	高重 1.8 29.51	-		断面長方形で両端を細くした鉄製品を中央で折り曲げループ状にし両端部を左右逆方向に広げるが先端は劣化破損する。木質等の痕跡は見られない。	
第195図 PL.112	11	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横 2.400 2.384	厚重 0.118 2.64	-		表側は彫は深い文字は不鮮明、その形状から元豊通寶と見られる。裏側は平坦で外縁・郭は不明瞭。劣化により表面には錆の凹凸ができています。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第195図 PL.112	12	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横	2.493 2.477	厚重	0.116 3.57		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。裏側に地金に達する条痕がありそれに沿ってくの字に折れ曲がる。
第195図 PL.112	13	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.216 2.257	厚重	0.127 2.35		寛永通寶。表・裏側とも彫は深いが錆化により表面は不鮮明。右側で縦に折れ曲がる。
第195図 PL.112	14	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横	2.375 2.360	厚重	0.120 2.64		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。波打つように変形折れ曲がる。
第195図 PL.112	15	銅製品 銭貨	完形	縦横	2.506 2.515	厚重	0.124 3.35		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。波打つように変形わずかに折れ曲がる。
IV区25号建物									
第195図 PL.113	1	肥前磁器 染付小皿	1/4	口底	(9.7) (5.6)	高	2.2	/白/	口縁部から底部内面周縁「寿」字文と不明文様。文様は素描。外面不明文様。内面から高台内面透明釉。高台内無釉。蛇の目凹型高台か。
第195図 PL.113	2	瀬戸陶器 すり鉢	体部片	口底	—	高	—	/淡黄/	内外面錆蝕。不正五角形を呈する破片の2辺を丁寧に擦り、他の2辺は凹凸が残る程度に擦る。残る1辺は無調整。二次加工。
IV区28号畑									
第195図 PL.113	1	肥前磁器 円盤状製品 (碗)	完形	径底	4.7 4.0	高	1.8	/白/	碗の高台脇片周縁を打ち欠いて円盤状に整形。二次加工品。高台内1重圏線内に不明銘。
IV区29号畑									
第195図 PL.113	1	備前系陶器 徳利	一部欠	口底	2.0 5.7	高	13.1	/青灰/	器表にぶい赤褐色。布袋、恵比寿、大黒の3福神を3方のくぼみに貼付。無釉で火罨が認められる。
IV区31号畑									
第195図 PL.113	1	鉄製品 鍔	破片	長幅	17.2 3.2	高重	1.6 85.25		鍔の柄装着部分破片。柄装着面には錆化した木質が残存する。
IV区32号畑									
第195図 PL.113	1	銅製品 銭貨	一部欠損	縦横	2.213 2.223	厚重	0.116 2.66		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭は認められる程度。
IV区10号溝									
第196図 PL.113	1	製作地不詳 磁器 円盤状製品 (碗)	完形	短長	2.7 2.9	厚	0.5	/白/	型紙絵付け碗片の周囲を細かく打ち欠いて円盤状に整形。碗内面に1条の圏線が認められる。碗体部下位片の二次加工品。二次加工。近現代。
第196図 PL.113	2	瀬戸・美濃 陶器 柳碗か	口縁部1/8、底部3/4	口底	(11.9) 4.2	高	5.4	/灰白/	全体に緩く内湾する平碗形。口縁部尖り気味。残存部無文。内面から高台脇灰釉。内外面底部付近に貫入する。
第196図 PL.113	3	在地系土器 火鉢	2/3	口底	30.8 24.0	高	19.5	/橙/	鉢形の本体に高い脚台を貼付。脚台2カ所に直径1.3cmの円孔。口縁部外面に2条、外面下位に1条の凹線。凹線間に菊花押印文の両側に唐草文を配す。この組合わせ文を2カ所に施す。
第196図 PL.113	4	木製品 長方形盆	3/4か	長幅	— 30.0	高	5.8		側板高さ5.1cm、底板厚さ0.7cm。底板は板目材。底板上に側板を載せて竹釘で固定。側縁側板底部側の竹釘穴は13から16cm間隔で認められる。側縁側板端部には直径1.2cmの柄穴、小口側には円形の柄を作り接ぎ、柄穴上部各1カ所の竹釘で固定する。
第196図 PL.113	5	木製品 長方形盆	2/3	長幅	— —	高	—		底板厚さ0.7cm。底板小口面の一方は残存するが、測線の残存は不明瞭。一方の側板には円形柄穴が1カ所。小片にも円形柄穴の一部が認められる。側板の目痩せが認められ、本来の厚さは不明。
第196図 PL.114	6	木製品 長方形盆	2/3	長幅	— 29.8	高	5.8		幅5.1cm、厚さ1.6cm、長さ42.8cm以上の長辺側板間に長さ26.3cmの小口側板を挟むようにする。長辺側には直径1.3cmの円形柄1カ所を設ける。柄と上端間の各1カ所を竹釘で固定する。底板の厚さは0.7cmで側板を上に乗せて竹釘で留める。
第196図 PL.114	7	木製品 長方形盆	1/2	長幅	— 28.6	高	5.9		底板は厚さ0.7cmの板目材。側板は側縁側に1辺1.4cmの柄穴、小口側に柄を作って接ぎ、柄穴上下各1カ所の竹釘で固定。小口面側板底面に竹釘穴が認められ、側板は底板上に載せて竹釘で固定したと推定される。
第196図 PL.114	8	木製品 栓	一部欠	長幅		厚			先端欠損か。中空。先端部は細くなるが、残存状態が不良で割り痕不明。「ハコノミ」か。
第196図 PL.114	9	木製品 栓	先端欠	長径	— 2.4	元部径	1.9		基部(持ち手)部と元部に段差を設け、元部から円錐形に削る。先端部欠損。
第197図 PL.114	10	木製品 栓	完形	長径	18.8 4.7				全体を円錐状に削り、先端部は角度をつけて尖らせる。元部周囲は面取り。中央部付近に使用痕と考えられる段差。
第197図 PL.114	11	木製品 栓	完形	長径	18.5 3.8				全体を円錐状に削り、先端部は角度をつけて尖らせる。元部周囲は劣化により面取り不明。使用痕不明瞭。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚			
第197図 PL.114	12	竹製品 鯨尺	不詳	長 幅	— 2.2	厚 0.35		現存長34.2cm、幅2.2cm、厚さ0.35cmの片目盛鯨尺。1寸は3.8cm。最小単位は「分」であるが、5分単位は中央までの目盛で寸は幅全体の目盛。5寸は目盛中央付近に点を刻み、この点を中心として8カ所の点を刻む。この点をつなぐように、雑に円を刻む。「寸」単位は正確であるが、「分」単位はバラツキが認められる。比較的径が小さい竹を用いており、裏面両端以外は内面が残存している。目盛の刻み方が雑。幅や厚さは現在の鯨尺の規格と同じ。	竹
第197図 PL.115	13	木製品 板	不詳	長 幅	60.6 —	厚 0.7		表面の色調は均一で、小口から2.2cmと2.5cm部分にけがきと推定される直線的な浅い傷が認められ、けがき上に釘抜き穴か釘穴と推測される長楕円形の穴が3カ所残る。裏面の両小口部分は黒く変色せず白っぽく残る。建物外壁の可能性もあるが、けがき線上に釘穴が位置することから、けがき線側を表面と推定した。	
第197図 PL.116	14	木製品 板	一部	長 幅	— —	厚 0.3		柁目材の薄板。遺存状態が不良で端部不明瞭。	コウヤマキ
第197図 PL.116	15	木製品 板	不詳	長 幅	— 29.3	厚 1.5		板目材の厚板。幅広であるが、長さは不明。	マツ属複雑管束亜属
第198図 PL.116	16	木製品 階段側板	一部	長 幅	— 17.5	厚 3.4		板目材の厚板。段板幅は21cm前後と推定される。側板側面に釘跡が認められず、けがき板は存在しなかった可能性がある。柄穴内には踏み板の柄が残る。	
第198図 PL.117	17	木製品 階段側板	梓板一部	長 幅	— 16.0?	厚 4.2		階段の側板。内側を幅3.0cm、深さ1.5cmの溝状に削り、その中に2.7×3.0cmの柄穴を2カ所開ける。溝の間隔は27.0cmで貫通する柄と貫通しない柄は交互であった可能性がある。	マツ属複雑管束亜属
第199図 PL.117	18	木製品 階段踏板	一部欠	長 幅	— —	厚 2.6		片方の柄は1個残存。柄を除いた端部幅は62cmである。残存部に滑り止めのような溝は認められない。	
第199図 PL.117	19	獣骨 鹿角	一部欠	長 幅	— —	厚 —		角座付近で切断する。切断痕以外に加工痕は認められない。	
第199図 PL.117	20	鉄製品 鍋・釜	破片	長 幅	27.0 19.4	高 重	9.5 726.41	鑄造の鍋または釜の底部付近の破片。底部側から中央付近にかけて鑄掛直しの金属が残存する。上面は破損するため鍋・釜かは不明。	
第199図 PL.117	21	金属製品 不詳	一部欠損	長 幅	14.5 0.7	高 重	0.6 9.13	断面ほぼ正方形の角棒状金属製品で端部は角形で反対側に向かい徐々に細くなり端部はちぎれる様に破損する。表面は灰白色で一部に白色の腐食生成物が見られる。	
第199図 PL.117	22	鉄製品 不詳	一部欠損	長 幅	37.3 4.3	高 重	13.4 766.91	断面長方形の厚板状鉄製品。厚さ0.5cm幅2cm長さ30cm程はまっすぐで途中に孔を有する。その先ではかぎ状に曲がる形状から他の部材を支持する金具と考えられるが、全体に硬い錆に覆われ本体は脆弱なため木質の残存等詳細は不明。	
第199図 PL.118	23	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.296 2.312	厚 重	0.082 1.92	寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭は認められる程度。	
第199図 PL.118	24	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.469 2.504	厚 重	0.109 2.80	寛永通寶(背文)。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側も彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第199図 PL.118	25	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.300 2.288	厚 重	0.067 1.94	寛永通寶。表側は彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。裏側彫は平坦だが外縁・郭とも明瞭。	
第199図 PL.118	26	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 横	2.395 2.416	厚 重	0.122 2.94	寧元寶。表側は外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭は不明瞭。裏側孔付近に鑄溜りが見られる。	

IV区11号溝

第200図 PL.118	1	製作地不詳 磁器 染付碗	口縁部1/3、底部3/4	口 底	(7.0) 3.1	高	5.2	/白/	残存部の一方に酸化コバルトによる吹き墨。	近現代。
第200図 PL.118	2	肥前磁器 染付小丸碗	口縁部1/2欠	口 底	8.2 3.2	高	5.2	/白/	外面縦線で区切った間に草花文3カ所。口縁部内面2重圏線。底部内面1重圏線内に簡略化した五弁花か。	
第200図 PL.118	3	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦 横	2.237 2.232	厚 重	0.101 1.78		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭は認められる程度。	

IV区12号溝

第200図 PL.118	1	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	1/3	口 底	(15.2) 7.8	高	10.9	/淡黄/	口縁部肥厚した「了」字状。内面から高台脇黄釉。底部内面目痕2カ所残存。	
第200図 PL.118	2	鉄製品 火打金	ほぼ完形	長 幅	8.0 1.9	高 重	0.9 15.16		高さの低い山形の火打金。両端とも丸みを帯びた角型で折り返し等は見られない。	

IV区石捨て場

第200図 PL.118	1	瀬戸・美濃 系陶器 輪花皿	1/2	口 底	18.0 8.2	高	3.4 4.2	/灰白/	残存部口縁2カ所内側に曲げる。全体で3カ所か。碁筈底状。内面から体部外面下位灰釉。貫入入る。二重貫入。底部内面目痕2カ所残存。二次被熱は外面が著しい。	著しい二次被熱。
第200図	2	肥前磁器 青磁香炉か 火入	底部1/3	口 底	— (6.6)	高	—	/灰白/	体部外面丸盤状工具による縦線か。体部外面と底部外面中央青磁釉。蛇の目凹型高台。	二次被熱。
第200図 PL.118	3	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	口縁部1/4、底部1/2	口 底	(10.0) 6.9	高	5.4	/灰/	口縁部肥厚し、端部正面くぼむ。体部外面2方に丸盤状工具による半菊文。内面中位付近から体部外面胎釉。脚2カ所残存。	
第200図	4	瀬戸・美濃 陶器 餐水入	小片	口 底	— —	高	3.0	/灰/	体部から口縁部直線的に立ち上がる。内面から体部外面胎釉。貫入入る。底部外面無釉。	

IV区炭窯

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第200図 PL.118	1	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部から体部 3/4	口底 6.8 7.4	高	—	/灰白/	口縁部平面形歪む。内面から高台脇灰釉。貫入する。	
第200図	2	肥前磁器 染付筒形碗	口縁部1/4	口底 (7.0)	高	—	/白/	外面染付。口縁部内面2重圏線。二次被熱で釉の一部発泡。	著しい二次被熱。
第200図	3	肥前磁器 染付筒形碗 か	底部完	口底 — 3.7	高	—	/白/	底部内面2重圏線内に五弁花。高台脇、高台境、高台外面の各所に1重圏線。	二次被熱。
第200図	4	肥前磁器 染付碗	口縁部1/3	口底 (10.0)	高	—	/灰白/	外面梅折枝文。破損後に著しい二次被熱。	著しい二次被熱。
第200図 PL.118	5	肥前陶器 陶胎染付碗	体部一部、底部 1/2	口底 — 4.6	高	—	/灰白/	器壁やや薄く、呉須の発色も良好。外面唐草文。貫入する。	
第200図 PL.118	6	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部1/4欠	口底 10.7 4.5	高	7.0	/灰/	口縁部外面1重圏線。体部外面簡略化した東屋山水文。主文様の反対側が二次被熱で釉ざらつく。貫入する。	
第200図	7	瀬戸・美濃 陶器 志野碗	底部完	口底 — 4.5	高	—	/灰白/	内面から高台脇に長石釉。貫入する。二次被熱。高台端部やや摩滅。	
第200図 PL.118	8	瀬戸・美濃 陶器 灯火皿か	口縁部1/4、底 部完	口底 (10.8) 4.2	高	2.3	/灰/	底部基筋底状。内面から口縁部外面鉛釉か。釉は二次被熱のため発泡。内面目痕2カ所確認できる。	著しい二次被熱。
第200図 PL.119	9	肥前磁器 染付皿	口縁部一部、底 部完底部ほぼ完	口底 (10.3) 5.2	高	2.5	/灰白/	口縁部から体部内面植物文。底部内面2重圏線内にコンニャク判による五弁花。外面唐草文。高台内1重圏線内に渦福字崩れ銘。	
第200図	10	肥前磁器 染付皿	1/8	口底 (14.0) (8.6)	高	3.4	/灰白/	口錆。外面唐草文。高台内1重もしくは2重圏線内に不明銘。口縁部から体部内面墨弾きによる施文。底部内面コンニャク判による五弁花。	
第201図	11	肥前磁器 染付皿	口縁部1/4、底 部完	口底 (19.6) 11.2	高	4.5	/白/	外面唐草文。高台内1重圏線内に渦福字文。内面草花を大きく描く。	
第201図 PL.119	12	肥前磁器 染付皿	1/4	口底 (13.8) (7.6)	高	3.7	/灰白/	外面唐草文。口縁部から体部内面半菊文。底部内面2重圏線内に不明文様。高台内1重圏線内に不明銘。	
第201図 PL.119	13	瀬戸・美濃 陶器 半胴甕	口縁部から体部 1/8	口底 (15.0)	高	—	/灰/	外面口縁部下2条の凹線。内外面鉄釉。著しい二次被熱で釉発泡する。	著しい二次被熱。
第201図	14	瀬戸陶器 すり鉢	底部1/3	口底 — (11.1)	高	—	/灰/	内外面錆。底部右回転糸切無調整。底部外面周縁擦れにより器表摩滅。	
第201図 PL.119	15	瀬戸陶器 すり鉢	1/4	口底 (31.2) (11.2)	高	12.7	/灰/	口縁部外方に折り返すように肥厚。口縁部内湾して立ち上がる。底部右回転糸切無調整。内外面錆。体部下位内面から底部内面使用により器表摩滅。底部外面周縁擦れにより器表摩滅。	
第201図 PL.119	16	在地系土器 火鉢か	口縁部から体部 3/4、底部完	口底 33.0 27.6	高	12.0	/にぶい橙/	口縁部上面平坦で一部に布痕。底部外面縮緬状の型作り痕。底部内面中央に長楕円形の押印があるが、押印後に撫でられていて判読不可能。底部外面に脚貼付。脚は1カ所残存。	押印判読不可能。
第201図 PL.119	17	壁か	破片	長幅 —	厚	1.8	/浅黄橙/	表裏ともに平坦で板状圧痕残る。被熱するが、製作時か二次的かは不明。土壁にしては軽い。スサを含む。	
第201図 PL.119	18	鉄製品 轡	ほぼ完形	長幅 12.4 9.9	高重	3.5 164.25		二連のみと輪形の鏡板を持つ轡。はみの接続部は摩耗により瘦せて2～3mmが残るのみとなっている。	
第202図 PL.119	19	銅製品 鉦鼓	一部破損	長幅 8.7 6.2	高重	2.6 154.03		直径8.5cm程の小型の鉦鼓。右の釣り手は下側に曲がり、左の釣り手部分は外圧により大きく内側につぶれ変形する。表面には炭の小片が多数付着する。	
第202図 PL.119	20	銅製品 キセル・雁首	完形	長幅 6.2 1.6	高重	2.3 6.51		キセルの雁首。吸い口側内部には羅宇の木質が残存する。火皿の外周と内部には煙草の残渣やヤニと見られる黒色物が残存する。	
第202図 PL.119	21	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.459 2.463	厚重	0.109 2.79		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭は明瞭。	

IV区北側石列

第202図 PL.119	1	鉄製品 蹄鉄	ほぼ完形	長幅 14.6 15.8	高重	1.7 333.24		幅約16cm長さ14cmを超える非常に大型の蹄鉄。左右に各5か所の角孔を持ち、内3か所には釘が残存する。	
第202図 PL.119	2	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.706 2.676	厚重	0.950 3.09		文久永寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表側表面には横方向に平行な条痕が見られる。	

遺構外

第203図	1	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部1/4、底 部完	口底 (7.2) 3.4	高	4.0	/灰白/	内面から高台脇灰釉。貫入する。	
第203図 PL.120	2	肥前磁器 染付小碗	完形	口底 8.3 3.0	高	3.9	/灰白/	外面植物文。	
第203図 PL.120	3	肥前磁器 染付小碗	完形	口底 8.5 3.2	高	4.3	/灰白/	外面やや簡略化した雪輪梅樹文。	
第203図 PL.120	4	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部1/8、底 部1/2	口底 (10.6) (5.9)	高	6.8	/灰/	外面不鮮明な唐草文。高台端部無釉。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	(13.3) (9.0)	高	6.4			
第203図 PL.120	5	肥前磁器 染付段重	口縁部一部、底 部1/2	口底	(13.3) (9.0)	高	6.4	/白/	体部外面簡略化した唐草文。口縁部内面から上面の釉掻き取る。内面無文。高台端部無釉。	
第203図 PL.120	6	在地系土器 皿	口縁部一部、底 部3/4	口底	(7.9) (3.8)	高	1.2	/にぶい黄橙/	胎土は緻密で器壁薄い。底部内面周縁凹線状にくぼむ。底部回転糸切無調整。	
第203図 PL.120	7	瀬戸・美濃 陶器 灯火受皿	1/3	口底	(9.6) (5.0)	高	1.7	/灰オリーブ/	受け部1カ所「U」字状に抉る。錆釉施後口縁部外面以下を拭う。	
第203図 PL.120	8	搬入系土器 か 焼塩壺か	底部片	口底	— (5.0)	高	—	/橙/	底部回転糸切無調整。内面器表剥離か。体部の立ち上がり方から皿ではないと考えられる。	
第203図 PL.120	9	肥前陶器 円盤状製品 (碗)	完形か	短長	3.9 4.2	厚	2.3	/灰/	陶胎染付碗の高台脇付近を打ち欠いて円盤状に整形。	二次加工。
第203図 PL.120	10	鉄製品 鉈	ほぼ完形	長幅	25.3 5.5	高重	0.6 413.84		細身の鉈で、棟は緩やかに弧を描く。棟側には閉はないが茎の端部に向かい直線的に薄くなる。目釘穴は0.5cm程で目釘および柄の木質は残存しない。	
第203図 PL.120	11	鉄製品 鉈	ほぼ完形	長幅	28.4 8.0	高重	3.8 344.94		先端に細長い突起を持つ細身の鉈で、棟は緩やかに弧を描く。柄は広葉樹製で一部が残存する。目釘は鉄製で柄内部に斜めに残存する。	
第203図 PL.120	12	銅製品 キセル・雁 首	ほぼ完形	長幅	3.9 1.3	高重	1.7 4.55		キセルの雁首。表面は緑青～黒色で平滑な面が残存する。接合部は火皿つけねと上部に見られる。火皿内面には残渣と見られる黒色物が付着する。	
第203図 PL.120	13	銅製品 キセル・雁 首	ほぼ完形	長幅	5.8 1.5	高重	1.4 3.49		キセルの雁首。羅字の木質が3cm程残存し火皿側は2cm内部に入りこむ。表面の一部に黒色の平滑面が見られるが、全体には緑色の錆に覆われる。	
第203図 PL.120	14	銅製品 キセル・吸 い口	一部欠損	長幅	4.3 0.8	高重	1.5 1.84		キセルの吸い口。雁首側端部には羅字が入ったままほぼ直角に曲がり破損する。吸い口側端部は劣化破損する。	
第203図 PL.120	15	銅製品 キセル・吸 い口	破片	長幅	3.2 0.8	高重	0.8 1.60		キセルの吸い口。雁首側端部は劣化破損し残存しない。段を有しこの部分で前後別々につくったものを接合する。	
第203図 PL.120	16	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅	7.5 1.3	高重	1.0 9.81		断面長方形の角釘。頭はやや広がるが角型で折り返し等は見られない。先端に向かい徐々に細くなる。木質等の痕跡は見られない。	
第203図 PL.120	17	鉄製品 釘	一部欠損	長幅	7.8 1.4	高重	0.6 4.75		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。断面長方形の角釘、頭は薄く円形に広げ丸く折り曲げる。先端は劣化破損する、木質等の付着は見られない。残存長7.8cm。	
第203図 PL.120	18	鉄製品 釘	一部欠損	長幅	7.8 1.5	高重	0.7 6.02		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。断面長方形の角釘、頭は薄く円形に広げ丸く折り曲げる。先端は劣化破損する、木質等の付着は見られない。現存長7.8cm。	
第203図 PL.120	19	鉄製品 釘	一部欠損	長幅	9.0 1.0	高重	0.7 5.76		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。頭は薄く広げるが破損する。頭付近は断面長方形で先端に向かい幅を減じ先端近くでは断面ほぼ正方形となり先端は細く尖る。木質等の付着は見られない。頭部を除いた現存長8.6cm。	
第203図 PL.120	20	鉄製品 釘	一部欠損	長幅	8.0 1.5	高重	0.9 7.76		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。断面ほぼ正方形の角釘、頭は薄く広げ丸く折り曲げる。先端に向かい細くなるが先端は劣化破損する。木質等の付着は見られない。現存長8cm。	
第203図 PL.120	21	鉄製品 釘	一部欠損	長幅	7.3 1.3	高重	1.2 6.59		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。断面ほぼ正方形の角釘、頭は薄く広げ丸く折り曲げる。先端に向かい細くなるが先端は劣化破損する。木質等の付着は見られない。現存長7.3cm。	
第203図 PL.120	22	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅	2.8 0.7	高重	0.3 0.53		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。断面ほぼ正方形の角釘、頭は薄く円形に広げ丸く折り曲げる。先端に向かい細くなり尖る。木質等の付着は見られない。長2.8cm。	
第203図 PL.120	23	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅	2.8 0.7	高重	0.4 0.69		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。断面ほぼ正方形の角釘、頭は薄く広げ折り曲げる。先端に向かい細くなり尖る。木質等の付着は見られない。長2.8cm。	
第203図 PL.120	24	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅	3.2 0.8	高重	0.6 0.83		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。断面ほぼ正方形の角釘、頭は薄く広げ折り曲げる。先端に向かい細くなり尖る。木質等の付着は見られない。長3.2cm。	
第203図 PL.120	25	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅	2.6 0.6	高重	0.3 0.46		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。断面ほぼ正方形の角釘、頭は薄く広げ折り曲げる。先端に向かい細くなり尖る。木質等の付着は見られない。長2.6cm。	
第203図 PL.120	26	鉄製品 釘	ほぼ完形	長幅	2.5 0.7	高重	0.3 0.42		釘箱と一緒に出土した釘の中の1本。断面ほぼ正方形の角釘、頭は薄く広げ折り曲げる。先端に向かい細くなり尖る。木質等の付着は見られない。長2.5cm。	
第204図 PL.120	27	鉄製品 焙烙	破片	長幅	16.0 (□)	高重	6.5 322.94		鉄製焙烙の破片。内外面は黒色で一部には銀白色の部分も見られる。破損するが推定外径は約30cm程となる。	
第204図 PL.120	28	木製品+金 属製品 釘箱	破片	長幅	9.4 8.1	高重	3.2 216.95		釘箱の一部と見られる錆化した木質と内部に収められた釘が錆付き出土する。板に密着する形で直径2.4cmの銅銭が見られるが裏側で銭種は確認できない。釘は小型の角釘で頭は薄く広げて折り曲げる長さは2cm程度と見られる。	

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	高	重			
第204図 PL.121	29	木製品+金 属製品 釘箱	破片	長 幅	11.0 9.9	高 重	3.8 427.96		釘箱の一部と見られる錆化した木質と内部に収められた釘が錆付き出土する。釘は角釘で頭は薄く広げて折り曲げる長さは、一番長いもので9cm程度。板材との間には錆化した葉状の植物痕が見られる。	
第205図 PL.121	30	釘箱	破片	長 幅	13.9 9.7	高 重	8.7 839.79		釘箱の一部と見られる錆化した木質と内部に収められた釘が錆付き出土する。釘はほとんどが遺構外20・21と同じ形状の角釘で、頭は薄く広げて折り曲げる。箱の板材は、5面に観察される。	
第205図 PL.121	31	木製品+金 属製品 釘箱	破片	長 幅	9.4 11.1	高 重	7.0 563.87		釘箱の一部と見られる錆化した木質と内部に収められた釘が錆付き出土する。釘は角釘で頭は薄く広げて折り曲げる。癒着するため全長は正確に測定できないが4～5cmの長さが観察される。箱の板材は、広葉樹板目材3面・針葉樹1面の計4面に観察される。	
第206図 PL.121	32	鉄製品 焙烙	破片	長 幅	15.6 9.4	高 重	1.9 323.86		鉄製焙烙の破片。吊り手取り付け部上部に中央に6mm左下に5mmの丸い孔を持つ。外面は黒色で一部銀白色の部分も見られる。肌面は錆化する。	
第206図 PL.121	33	鉄製品 鍋?	破片	長 幅	8.2 5.3	高 重	1.5 26.23		鍋の底部と見られる破片。底部外面には高さ1cm程の脚が1か所残存する。他に同一個体と見られる破片が多数出土するが接合は困難。	
第206図 PL.121	34	鉄製品 鍋	破片	長 幅	6.2 4.7	高 重	0.4 20.82		鑄鉄製鍋の釣り手部分破片。中央上部に1左右に1か所ずつの計3所に径5mmの孔を持つ。	
第206図 PL.121	35	鉄製品 鍋	破片	長 幅	5.3 3.7	高 重	0.6 19.84		鑄鉄製鍋の破片。吊り手取り付け部上部に中央に8mm左右に6mmの丸い孔を持つ。	
第206図 PL.122	36	銅製品 あて小判		長 幅	6.792 3.550	高 重	0.077 6.62		銅製のあて小判。表面は平滑に仕上げられ一部線刻も見られるが、全体に劣化が著しく詳細は不明。	
第206図 PL.122	37	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.257 2.263	厚 重	0.142 3.11		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。郭は四角だが角がバリ状に残るため孔の角は丸みを帯びる。	
第206図 PL.122	38	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.313 2.286	厚 重	0.116 2.43		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。永の字の左上に鑄溜りが見られる。	
第206図 PL.122	39	金属製品 銭貨		縦 横	2.553 2.493	厚 重	0.276 5.17		銅製の寛永通寶と寛永通寶と見られる鉄銭破片2枚が癒着する。銅製の寛永通寶は一部表面は鉄さびに覆われるが、彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。鉄銭は錆化が著しく詳細は不明。	2枚癒着。
第206図 PL.122	40	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.437 2.483	厚 重	0.285 3.11		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが文字はややつぶれ気味。裏側も彫深いが癒着した鉄銭の破片および錆が付着し不明瞭。	2枚癒着。
第206図 PL.122	41	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.314 2.319	厚 重	0.122 2.15		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は彫は浅いが外縁・郭は明瞭。	
第206図 PL.122	42	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.460 2.468	厚 重	0.121 3.42		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われ不明瞭。	
第206図 PL.122	43	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.235 2.214	厚 重	0.095 2.18		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われ不明瞭。	
第206図 PL.122	44	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.483 2.461	厚 重	0.173 4.09		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面全体には鉄さびに覆われ不明瞭。	
第206図 PL.122	45	銅製品 銭貨	一部欠損	縦 横	2.187 2.212	厚 重	0.132 2.40		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面全体には鉄さびに覆われ不明瞭。	
第206図 PL.122	46	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦 横	2.339 2.341	厚 重	0.112 2.20		寛永通寶。表側は彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	
第206図 PL.122	47	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦 横	2.376 2.383	厚 重	0.171 2.27		寛永通寶。表・裏側とも彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭だが一部鉄さびに覆われ文字等不鮮明。	
第206図 PL.122	48	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.304 2.302	厚 重	0.103 2.58		寛永通寶。表側は彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭だが寛の字部分は鉄さびに覆われ不鮮明。裏側は平坦で外縁・郭とも不明瞭。	
第206図 PL.122	49	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.357 2.333	厚 重	0.112 2.79		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第206図 PL.122	50	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.505 2.563	厚 重	0.131 3.77		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第206図 PL.122	51	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.356 2.461	厚 重	0.150 2.98		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭は不明瞭。	
第206図 PL.122	52	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.436 2.418	厚 重	0.123 3.09		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われ不明瞭。	
第207図 PL.122	53	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.843 2.853	厚 重	0.115 4.13		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われ不明瞭。	
第207図 PL.122	54	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.303 2.341	厚 重	0.106 3.00		寛永通寶。表側は彫深いが錆化により外縁・文字・郭とも一部不明瞭。裏側は平坦で外縁・郭は認められる程度。	
第207図 PL.122	55	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦 横	2.358 2.397	厚 重	0.104 2.99		寛永通寶。外側は彫は浅めだが外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭は認められる程度。	
第207図 PL.123	56	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.453 2.464	厚 重	0.094 2.48		寛永通寶。表・裏側とも彫は浅いが外縁・文字・郭とも明瞭。	
第207図 PL.123	57	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.468 2.487	厚 重	0.123 3.45		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われ不明瞭。	
第207図 PL.123	58	銅製品 銭貨	完形	縦 横	2.494 2.507	厚 重	0.122 4.00		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われ不明瞭。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦横	厚	重			
第207図 PL.123	59	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.319 2.358	厚 0.106	重 2.07		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は平坦で外縁・郭は認められる程度。永と寶の間に鑄溜りが見られる。	
第207図 PL.123	60	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.500 2.540	厚 0.124	重 3.55		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第207図 PL.123	61	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.276 2.273	厚 0.097	重 1.96		寛永通寶(背文)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。永の字の左右に鑄欠けがみられる。	
第207図 PL.123	62	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.222 2.207	厚 0.136	重 2.31		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は極めて平坦で外縁・郭とも不明瞭。裏側上方に文字の一部が見られる高まりがある。	
第207図 PL.123	63	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.344 2.271	厚 0.085	重 2.37		寛永通寶。表側は彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。裏側は極めて平坦で外縁・郭とも不明瞭。	
第207図 PL.123	64	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.467 2.463	厚 0.129	重 3.61		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが寛と通の字は一部鉄さびに覆われ不鮮明。	
第207図 PL.123	65	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.521 2.361	厚 0.133	重 3.59		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭だが裏側は一部鉄さびに覆われ不鮮明。	
第207図 PL.123	66	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横 2.179 2.137	厚 0.105	重 2.01		寛永通寶。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。文字の一部は鉄さびに覆われ不明瞭。	
第207図 PL.123	67	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.885 2.844	厚 0.127	重 5.14		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表・裏側とも縦に平行な条痕が残る。	
第207図 PL.123	68	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.919 2.863	厚 0.152	重 6.42		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第207図 PL.123	69	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.870 2.897	厚 0.137	重 5.07		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。一部表面は硬い鉄さびに覆われる。	
第207図 PL.123	70	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.858 2.854	厚 0.141	重 4.78		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第207図 PL.123	71	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.848 2.849	厚 0.122	重 4.11		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。	
第207図 PL.123	72	銅製品 銭貨	ほぼ完形	縦横 2.873 2.891	厚 0.256	重 8.43		銭貨2枚が硬く錆付。1枚は寛永通寶の4文銭だが裏側は癒着して不明。もう1枚は寛永通寶の1文銭と見られるが詳細は不明。	2枚癒着。
第207図 PL.123	73	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.867 2.916	厚 0.140	重 4.95		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われ不鮮明。	
第207図 PL.123	74	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.851 2.874	厚 0.138	重 4.86		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表・裏側とも平行な条痕が横方向に残る。	
第207図 PL.123	75	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.844 2.861	厚 0.126	重 4.89		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われ不明瞭。	
第207図 PL.123	76	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.828 2.846	厚 0.123	重 5.02		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われる。	
第208図 PL.124	77	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.885 2.849	厚 0.142	重 5.57		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。全体に鉄さびに覆われる。	
第208図 PL.124	78	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.840 2.831	厚 0.131	重 5.20		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面の一部は鉄さびに覆われる。	
第208図 PL.124	79	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.850 2.919	厚 0.131	重 4.90		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表側は全体に鉄さびに覆われる。	
第208図 PL.124	80	銅製品 銭貨	完形	縦横 2.467 2.463	厚 0.129	重 3.61		寛永通寶(11波)。表・裏側とも彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。背面の一部鉄さびに覆われる。	
第208図 PL.124	81	石製品 石臼(上臼)	ほぼ完形	直径 35.1 16.2	厚 —	重 29900.0	粗粒輝石安山岩	上面及び側面は比較的滑らかである。側面に一辺約4cmの矩形の挽き手孔が認められる。挽き手孔の反対側の側面には平面形が三角形のくぼみあり、上臼を持ち上げる際の持ち手部分と考えられる。底面には挽目とものくぼりの痕跡が明瞭に認められる。供給孔は肉眼観察で中央部が狭くなっているのが観察でき両面穿孔と考えられる。供給孔及び軸受孔の直径約4cm。	
第208図 PL.124	82	石製品 硯	4/5	長幅 (14.4) 6.2	厚 2.2	重 263.1	デイサイト凝灰岩	硯側、硯背、縁は平坦で滑らかである。丁寧に研磨整形される。丘部は両側縁がわずかにくぼみ中央部に帯状の高まりが形成される。	